

---

# それなら私があいどる

夏のラジオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それなら私がいどる

### 【Nコード】

N5276D

### 【作者名】

夏のラジオ

### 【あらすじ】

ひよんなことからアイドルとしてデビューすることとなった綾川チロリこと池田綾香。決めポーズを作ったり、サバイバルゲームをしたり、歌を歌ったりしてトップアイドルを目指します。作者ブログにてメインテーマを公開中。

## プロローグ

東京に春の訪れ。

そして井の頭公園の桜並木道をゆったりとしたペースで歩く、薄手の赤いコートを着込み、青いマフラーを巻いた少女、池田綾香にも、遅ればせながら人生の春が訪れようとしていた。

「桜、綺麗やね」

隣を歩く、黒いジャケット姿の井本真一に笑いかける。彼は綾香に目を向けず、桜を見つめたまま、答えた。

「ああ、でもなんか今日の桜は、そんなに綺麗に思えねえんだ」

「えー？ なんでよ」

不満げな顔になる綾香。真一はフツと口元に笑みを浮かべる。

「もつと魅力的な女がここにいるからじゃないかな」

「あまーい！」

綾香は心の中で叫ぶ。（実際にも叫んではいるが）

こんなにカッコよくて、背が高く、おまけに将来有望な男と付き合えるなんて、私は世界一の幸せものだ！。

そう、真一は早稲田大学に通っていると聞いていた。

三月下旬、都内の専門学校に通うため、九州は長崎より上京してきた池田綾香は、うら若き十八歳の乙女である。茶髪のセミロングヘアに緩くパーマをあてている。某ファッション雑誌オスメのヘアースタイルであった。肝心なルックスはというと、やや、突起の小さな平面顔で、おまけにバッチリ一重瞼ではあるが、これまた某ファッション雑誌で培った化粧術とマスカラのおかげで、なんとか美人と呼んでも遜色のないものに仕上がっていた。

そして一週間前、吉祥寺駅の近くで、そんな彼女をナンパしてきたのが、自称早大生の井本真一。綾香より二歳年上の二十歳であっ

た。肩まで伸びた金髪と甘いマスク。長身で、モデルのようなスタイルの良さを誇っている。

綾香はそんな真一（主に容姿）にメロメロとなり、初めて会ったその日に「付き合って欲しい」と言いだした彼に、ただただ頷くばかりであった。

二人はやがて、散った桜に彩られる井の頭池のほとりで、少し立ち話をするこゝとした。池を囲む、柵に手をかけ、真一が真剣な表情で綾香を見た。

「なあ、綾香。夏になったら一緒に暮らさないか？」

驚いて目と口を大きく開ける綾香。

「それ、本気で言ってるの」

「ああ、本気だ」

真一の顔がいつもより格段と男前に見える。「俺のマンションに来てほしい」

綾香は迷った。彼とは出会ってまだ一週間だし、長崎、佐世保の実家から、吉祥寺のアパートに越してきて一ヶ月も経っていない。いや、やっぱり無理だ。

「そんなん」

首を振る綾香。「無理に決まっとうやん。お父さんの仕送りで家借りてんのに、お父さんになんて説明すればいいんよ」

「そうか」

真一はしょんぼりと溜息を吐いた。「そうだよな。無茶苦茶なことってゴメン。ただ……、俺どうしても綾香と一緒に暮らしたくてさ。最近、夜、なかなか寝つけなくて……、どうしてだと思う？」

「んー……」

視線を宙に漂わせ、綾香は考え込む。しかし分からない。「どうして？」

「お前という抱き枕がないんだよ」

「あまー……」

叫びかけて止める。「いやいやいや！ そんなこと言われても、まだ同棲は早すぎるよ」

「そうだよな……」

再び、綾香は悩んだ。

どうしよう。真一と一緒に暮らしたいのは私も同じ。でも、吉祥寺のアパートが……。

ふと名案を思いつく。

「ねえ、真一！ 半同棲ってのはどう？」

心地よい春風が綾香の頬を撫でる。そう、彼女の春がこれから始まる。

……はずだった。

## 1 汗っかき田舎娘

東京に夏の訪れ。

照りつける太陽の下、人でごった返す渋谷センター街をトボトボと歩く、TEEシャツとジーパン姿の池田綾香の頭を、隣を歩く矢上詩織が撫でた。

「ほらほら、自分で決めたことなんだからそんなに落ち込まないの」「うん……」

こめかみあたりに流れ落ちる汗を、綾香は素早く手で拭う。「でも、私どうなっちゃうんやろ」

「大丈夫だよ」

詩織は、のほほんと無邪気な笑顔を浮かべた。「綾香ならきつと何やつても上手くいくと思うよ」

親友の優しい言葉を聞き流しながら、綾香は左手のカラフルな外装のファーストフード店に目を向けた。彼女は次第にそちらへ近づいていく。

「え、さつき一緒にパスタ食べたばっかじゃん」

詩織が慌てて綾香を引きとめた。「また食べるの?」

「ううん……」

綾香は犬のように舌を垂らしている。「とりあえず涼しいところに入りたくて」

「もう」

唇をとがらせる詩織。溜息を吐いて腕を組み、言った。「あんま、お金使いたくないんだけど」

二人は、先ほどまで同じ学校のクラスメイトという間柄でもあった。

二階の窓際の席が空いていたので二人でそこに陣取る。綾香はグ

ツとコーラを一気飲みし、「ぷはー」と息を吐いた。そして小さくゲップ。

「涼しいし、美味しいし、もう最高!」

「生き返った?」

テーブルに肘をつき、親友の下品な姿に苦笑する詩織。彼女は黒いノースリーブのシャツを着こなしていた。肌が透けてしまいそうなほど汗だくの綾香とは対照的に、彼女はほとんど汗をかいていない。

詩織の問いかけに答えず、じーっと彼女を見る綾香。

「な、何よ」

そんな綾香の視線に気づき、思わず頬を赤らめる詩織であった。

「いいなあ詩織は……」

うな垂れて溜息を吐く綾香。「可愛いし、髪もサラサラやし、オシヤレやし、しかも汗もかかんって……恵まれすぎやない?」

「そうかな? 綾香のほうが可愛いと思うけど。その話し方とか…

…長崎だっけ?」

詩織は生まれも育ちも東京である。

「ほら、また長崎を馬鹿にしたー」

「してないしてない」

呆れたような口調で詩織が否定する。こんな綾香の調子は、いつものことなのだ。

やがて、綾香は「うー」と唸りながら、ぐったりとテーブルの上に上半身をあずけた。

「あ、お行儀悪いよ」

「私みたいな田舎娘は」

詩織の言葉を無視する。「上京なんかせんでおとなしく長崎にいればよかったんよ。そんなら週六日もバイトせんでよかったやろうし、お母さんが家事やってくれたやろうし、あの馬鹿の世話もせんでいいやろうしや」

「あ、そうだ!」

そう言っつて、ドンとテーブルを叩いたつもりの詩織だったが、誤つて綾香の指先を叩いてしまう。

「いたーっ!」

「あ、ごめんごめん」

苦笑しながら謝る詩織。そして身悶える綾香を気にせず、続ける。

「彼氏がいるじゃん。あんなカッコいい彼氏がいるの、綾香ぐらいだよ」

「もう!」

急に立ち上がり、怒鳴る綾香。「こんなブルーな時にあの馬鹿の話はやめて!」

彼女の怒鳴り声に、詩織どころか、店内の他の客まで黙り込んでしまった。

池田綾香は午前中、学校に退学届けを提出したばかりであった。



## 2 命には代えられない

池田綾香にとって学校は、憧れの東京と故郷、長崎とを繋ぐ架け橋に過ぎなかった。彼女が通っていたのは情報工学の専門学校であったが、たとえそれが美容師の専門学校だったとしても、獣医学の専門学校だったとしても、大した違いではなかった。

そうゆう意味では今回の退学は必然といえるかもしれない。

ファーストフード店を出て、再び渋谷のセンター街を歩き出す綾香と詩織。しかし、ものの一分程度で綾香が立ち止まる。

「もうダメ。やっぱり暑すぎる」

汗を滴らせながら弱音を吐く綾香に、詩織はまた溜息を吐いた。

「今日は綾香を元気づける為に誘ったんだからさ。それなのに、ちよつと歩きたびに店に入ってたら、ゆつくり買い物もできないじゃん」

その言葉に、綾香はしょんぼりと肩を落としながらも、丁度目の前にあつたケーキ屋を指差し

「じ、じゃあ、最後にもう一軒だけ！ お願い」

と再び詩織に懇願した。

「ダメ。ほら、行くよ」

「あーん、詩織」

詩織は綾香をおいて、ずんずんと先へ向かってしまふ。綾香はよろよろの足どりで、彼女を必死に追いかける。そして、ようやく詩織に追いついた、その時だった。

「すみません。ちよつとお時間よろしいですか？」

突然、横から声をかけられたのだ。

低く、深みのある男の声。綾香と詩織は、ほぼ同時に声のした方を振り向いた。

「!?!」

そこに黒いスーツ姿の大男がいた。綾香はたじろいで、一步下がると、道行く青年にぶつかってしまった。青年に平謝りしながらも、男から目を離せない彼女。

彼女が狼狽するのも無理はない。男はスキンヘッドにサングラスという、いかつい風貌をしていたからだ。歳は分からない。二十代にも見えれば、四十代にも見える。

「な、なんでしょう」

詩織が尋ねる。彼女も少し声が震えていた。

「私、こうゆう者なんですが……」

男は胸のポケットから名刺を取り出した。詩織がおそろおそろそれを受け取り、そこに書かれている文を読み上げた。

「サニードイヤモンドプロダクション、南吾郎……? 芸能事務所の方ですか?」

「芸能事務所?」

眉をひそめる綾香。「そんな聞いたことないな」

「まだまだ新鋭の事務所ですね」

二度、頷きながら男はサングラスを整える。「『カビリオンズ』や『内藤ちえ美』が所属しております」

顔を見合わせる二人。そしてお互いに首を振った。もちろん、その所属タレントの名前も聞いたことがない。代表して詩織がまた尋ねた。

「その芸能事務所さんが私たちに何の用でしょう」

実はその疑問の答えに、綾香はある程度の予想を立てていた。おそらく詩織も同じであろうと、彼女は考える。

「ええ、率直に申し上げます」

男は再び、人差し指でサングラスを整えた。「芸能界に興味はありませんか?」

そして、口元にニヤリと不気味な笑みを浮かべるのだった。  
次の瞬間、綾香は詩織の手を引き、渋谷センター街の中を全力疾走していた。

百メートルほど走ったところで、二人はようやく立ち止まった。  
そして膝につき、はあはあ、と並んで息を整える。

「ど、どうしたの？ 綾香。急に走り出して……」

先に顔を上げた詩織が言った。続いて綾香も顔を上げる。

「あれはヤバイって！ あんな不気味な顔できるヤツにはホイホイついてつちやいかんって！ あいつが人を殺したことがないわけないやん！」

無茶苦茶なことを言う綾香。

「さっきまであんなにバテてたくせに」

シヨルダーバッグの中から黄色いハンカチを取り出しながら、詩織は言う。「まだ元気残ってたんだね」

そして額にハンカチをあてながら笑った。続いてそのハンカチを綾香に差し出す。

「いやいや」

綾香もハンカチで顔を拭う。「命には代えられんよ」  
ハンカチは詩織のもとへ帰った。

### 3 対照的なその男

それから二人は涼しいゲームセンター内で一銭も使わず、三時間を潰した。その間何をしてたかというところ、特に何もしていない。しかし、親友と過ごす他愛のない三時間は、薄暗く曇っていた綾香の心を少しずつ晴らしていった。

午後四時半、渋谷駅前、スクランブル交差点のそばである。センター街に比べ、道を歩く人の歩行速度がだいぶ速い。

「それじゃ、またね」

「うん、今日はありがとう」

詩織はこの付近の小さなイタリア料理レストランでアルバイトをしており、今日も五時から勤務の予定が入っているのだ。

「くよくよしちゃダメだよ」

詩織が綾香の肩をポンと叩いた。「自分で決めたことなんだから、とりあえず必死でバイト頑張りなさい」

「分かつとつよ」

唇を尖らせる綾香。「詩織も頑張つて。詩織はちゃんと卒業しよ」

「もちろん」

そう言つて詩織は笑い、手を振りながら、人ごみの中へと消えていった。

「さて、と」

綾香は一人呟き、渋谷駅に向かい、歩き始めた。とはいっても、まだ電車に乗るつもりはない。

忠犬八子公の銅像から少し離れた場所で、銅像付近をチラチラと

横目に見ながら、綾香は壁に寄りかかり、腕を組んでいた。

遅い、遅すぎる。

腕時計に目をやると、既に五時半を回ろうとしている。携帯も全く通じない。メールを送っても、ウンともスンとも言わない。綾香は無然とした表情で、額の汗を拭いた。夕方とはいえ、まだまだ日光は健在である。

六時までに来んかったら帰るけんね。

そう心に決めた時だ。十メートルほど先から、見知らぬ男が近づいてくるのに気がついた。

ん？ 私かな。いや、でも知らん人やし……。多分他の……。あれ？ あれ？

「君、ちよつといい？」

「は、はあ……」

男は茶髪のロングヘアで小奇麗な白いスーツを着用していた。先ほどのスキンヘッドの黒スーツ男とはまるで対照的である。対照的なのはそれだけではない。綾香にとっての男への第一印象もそうだった。

力、力、カッコいい……。

長いまつげに優しげな瞳、高い鼻に薄い唇。男は綾香の大好き物、美青年であった。

これって、ナンパ？ いやあ、ナンパなんていつ以来やろう。

彼女は胸をときめかせる。ちなみにナンパは上京してすぐ、井本真一にされて以来である。

「実は僕、こつゆうモンでね」

そう言っつて男は胸のポケットから名刺を取り出した。そこで綾香は思っつ。

あれ？　なんかこの光景さつき見たような……。

「アースロマン企画、佐々木直之……さん」

先ほど詩織がやってみせたように、名刺を受け取り、文字を読み上げる。「あ、あの……ひよっとしてスカウトの方ですか？」

「そのとおり」

男はニツコリと微笑んだ。その笑顔も黒スーツの男とは対照的で、爽やかなものだった。「ねえ、芸能界に興味ない？」

喜びより驚きが先だ。今までスカウトなんてされたこともなかった自分が、一日に二度もスカウトを受ける（最初のは自ら逃げ出したが）、それは綾香にとって予想だにしない出来事だったのだ。

「きよ、興味ないってこともないですけどー」

はにかみながら綾香は答える。実は芸能界より、目の前の男に興味があった。

「そうか」

男は満足そうに頷く。「それじゃ、近くに良い店知ってるから、そこで少し話さない？」

「え？　あっ……！」

綾香はハツと八千公の銅像を見た。その近くに待人の姿はない。腕時計の針はまもなく六時を差そうとしている。

別に浮気やないけんね。あんたが遅刻しとんのが悪いんやし。

彼女は心の中で、誰よりも自分に言い訳をしていた。

#### 4 君のデビューに乾杯

渋谷八千公前から、歩くこと五分たらず。そこは、なんてことはない普通の居酒屋であった。綾香と、スカウトマンの佐々木直之は、店の最も奥のスペースに向かい合わせて座る。隣のスペースとはすりガラスで区切られており、まるで二人で個室にいるように感じられた。

「俺のおごりだから、なんでも好きなもん頼んでいいよ」  
そう言って佐々木は白い歯を見せる。

綾香は「ありがとうございます」とメニューを広げながらも、そこに載っている様々な料理やドリンクに、意識を集中させることが出来なかった。

うーん、何度見てもカッコいい。  
メニューを見ているふりをしながら、佐々木の顔を見ているのだ。彼がスカウトマンだったら、どんな女でもすぐについていってしまうんじゃないか、とそんなことを考えながら。

お腹が空いてきたので、とりあえず主食をと、綾香はきのこ入りの雑炊を注文した。佐々木に「けっこう本格的に食うんだね」と笑われ、少し赤面する。ちなみに佐々木は何も注文しなかった。

十分が経過する。二人の話は弾んでいた。

「綾香ちゃん。君、すごくいいねー。見た目はギャルっぽいのに素朴な感じでさ。君なら多分人気出るだろうなー」

「そ、そうですかー？」

綾香は謙遜しながら、れんげで雑炊をすくい、それを口へ運ぶ。

「いや、マジでさ。もう芸名とか決めちゃおうかって勢い」

佐々木はそう言いながら、ポケットから黒い手帳を取り出し、ページをめくる。「うーんとねえ……、『晴野ひまわり』とか、『蜂蜜きなこ』とか色々リストあるけど……」  
どうやら手帳に芸名のリストが書いてあるらしい。綾香は苦笑する。

「芸名ですかー？ まだそんな段階じゃないでしょう」

「いやいや、こっちはいつでも準備オーケーよ」

綾香は自分の芸能界デビューが現実的となってきたことに、やや戸惑いを感じ始めていた。実は彼女、デビューする気などさらさらなかったのである。

芸能界なんて、さすがに私には身の程違いやる。でも、どうしよう。断るにもおごつてもらつとるし……、もうちょっと話聞いてみようかな。

「あ、あの……やっぱりテレビに出たりとかするんですね」

雑炊を食べ終え、一息吐いた綾香は、初めて自分から佐々木に質問してみた。

「うん」

そしてまた佐々木は笑顔を見せる。「人気が出ればテレビにも出れるだろうね。それまではビデオが主だけど、君ならきつとすぐに売れっ子になれるよ。君、バイトしてるって言ってたけど、時給はいくら？」

「えーっと、800円です」

プツと佐々木がふき出す。綾香は少なからずショックを受けた。わ、笑わんでもいいやん……。

「うちなら、少なくとも月収50万は堅いかな」

「う、50万!？」

思わず大声を出し、立ち上がる綾香。

そんなら……、売れっ子になればどんぐらい……。



「さあ。どうする？ やってみる？」

「はい！」

あっさりと返事をする綾香。「よろしくお願いします！」

それから彼女はペコリと頭を下げた。そして、心の中で渾身のガッツポーズを決めた。

やった！ これで……！ 辛い貧乏生活とおさらばできる！

「よし、決まり」

佐々木は胸ポケットに差していたボールペンを手に取り、再び手帳のページをめくる。「それじゃあ、君の連絡先だけ聞いとくね。携帯でいいから」

「はい！」

元気良く返事をし、綾香は彼に自分の携帯の番号を告げた。

「オッケー」

番号を書き込み、手帳をしまいながら佐々木は言う。「そんじゃ、綾香ちゃんのデビューを記念して乾杯しようか。もちろん俺のおごりね」

そして彼は大きな声で店員を呼んだ。

## 5 人殺し再び

酔いで頬を赤く染め、綾香は電車に揺られながら、一人考えていた。

お金につられて、ああは言ったけど……私なんかアイドルなんて務まるとかいな。

京王井の頭線急行にて、渋谷から吉祥寺へ帰るところである。時刻は既に九時を回ろうとしている。彼女は既に、渋谷駅八千公前で待ち合わせていた人物の存在を、すっかりと忘れていた。

それにしても、佐々木さんカッコよかったな！。

佐々木直之の顔を思い出す。白い歯がキラリと光る笑顔、自分を見つめる優しい眼差し。

あんなカッコいい人ってなかなかおらんよな！。しいて言えば真一とか……。

そこで固まる。彼女の顔が、みるみるうちに青ざめていく。

「ああー！」

綾香は満員の電車内で叫んだ。ようやく思い出したのだ。八千公前で待ち合わせていた人物、井本真一の存在を。他の乗客が怪訝そうに綾香を見る。彼女は恥ずかしくなり、俯いて顔を隠した。

しまった！ 真一にメールしとくの忘れてた。まだ八千公前にいるんかなあ。それとも結局来なかったんかなあ。

とはいえ、引き返す気にもなれず吉祥寺駅に到着する。南口から出て、すぐに真一に「もう帰ったよ」とメールをし、ネオン輝く大通りを松庵方面に向かって歩き出す。ちなみに綾香の自宅とは逆方向である。

まあ、あの馬鹿のことだから、どうせ約束も忘れて居眠りでもしてんでしょ。

そう、松庵には真一の自宅があり、今日はもともとそちらへ泊まる予定だった。

数メートル歩いた時だ。

「ちよつといい？」

突然、誰かに後ろからポンと肩を叩かれた。綾香はビクツと身体を震わせ、「わっ！」と叫んだ後、その場にドーンとしりもちをついた。慌てて相手の顔を見る。

「あ、あなたは……」

恐怖で顔が引きつる。その場から逃げ出したいにもかかわらず、腰が抜けて立ち上がることができない。

サングラスを着けたスキンヘッドの大男。声を掛けてきたのはなんと、昼間、渋谷で綾香たちをスカウトした黒スーツの男であった。

「おいおい」

男は苦笑しながら、手を差し伸べる。「そんなに驚くことはないだろう」

その手を払い、座ったまま後ずさりをする綾香。彼女は思った。殺される……！

「や、やめて、さっきは逃げ出したりして、ごめんなさい」  
上手く声にならない。

「お前、いい加減にしろよな」  
ズンズンと綾香に近づく男。同時に綾香は叫び声を上げようとしたが、すぐに男に口を塞がれてしまう。

「んーんー」

「いいから落ち着け。こんな状況で誰が襲つか」

男にそう言われ、周囲を見まわしてみる。すると通りを歩く多くの人の注目を浴びていることによろやく気がついた。彼女はゆっくと立ち上がる。

「す………すいません」

「本当に失礼な女だぜ」

やれやれといった風に、男はゴキツと首を鳴らした。「まあ、確かにこんなグラサンしてたら怖がるのも当然だわな。そんじゃ、これどうだ？」

そう言っただけで彼は片手でサングラスを外してみせた。そして、サングラスの下から現れたものを見て綾香は思わずふき出してしまった。

「今笑っただろ」

「いえ………プツ」

またふき出す。そして笑いをこらえようとして、肩を震わせる。

「あのなあ………」

「す………ププ、すいません、ウフフ」

男の目は細く、しかも垂れ下がっていた。彼は、全く笑っていないのに笑っているように見える、まさに七福神の一、えびすのような素顔を持っていたのだ。

## 6 極秘プロジェクト

「そんなことより」

男はコホンと一度咳払いをする。「さっき渋谷駅で君を見かけてね。悪いけど後を尾けさせてもらった」

「えっ？」

表情が固まる綾香。こらえていた笑いが、シュウと萎縮していく。「や、やっぱり怒ってたんですか？」

「そうゆうわけじゃない」

そう言って男は笑った。えびす顔になっても、笑顔はまだ不気味である。「次世代のアイドル界を担う、金の卵をあきらめきれなかっただけだ」

「き、金の卵？」

そう叫んでから、綾香はしばし考え込んだ。

金の卵って私のこと？　そ、そんな……。私ってそんなに魅力的やったと？　ひよっとしたらアイドルのオーラとか、そんなんが私から湧き出とるんかな……。

「勘違いするなよ」

ぼーっとする綾香に男は冷たく言い放つ。

「へっ？」

あっけに取られたような表情になる綾香。

「お前じゃなくて、もう一人の黒い髪の子だ」

彼女は、そのままの表情でカチンと固まった。

し、詩織のこと……？

「そ、そんなの」

照れ隠しで髪をかき上げ、男と視線を合わせずに彼女は言った。

「言われなくても分かっていますよ。し、詩織は私と違って可愛いし、

私から見てもアイドルの器だと思いますから」

「ああ、そのとおり」

私へのフォローは!？」

仏頂面で自分を睨み続ける綾香を無視して、男は続ける。

「実はつい先日、うちのプロダクションの今後を決定づける、重要なプロジェクトが立ち上がった。それはつまり、国民的アイドルを育て上げること」

「国民的アイドル？」

ポリポリと頭をかく綾香。もはや彼女に、男の話への興味はない。「そうだ」

男は両手を広げる。スキンヘッドに街灯の光がキラリと反射した。「そしてそのスカウト兼マネージャーとして俺が極秘で動いているわけだ。あの子……なんていう名前だ？」

「詩織」

綾香はぶっきらぼうに答えた。

「そう、詩織ちゃんはこのプロジェクトに相応しい逸材だ。君、今度あの子にうちへ連絡くれるよう言っておいてくれないか？」

「さあ、どうですかねー」

綾香はぷいと男に背を向け、歩き出した。「あの子、あんまり芸能界とか興味ないと思いますけど、一応言っておきますね」

「よろしく頼むぞ。なんなら君も事務所の雑用かなんかで使ってるから」

彼女の頭の中でプチッと何かが切れる音がした。

彼女は立ち止まり、再び男に身体を向け、叫ぶ。

「あんたんとこで使ってもらわなくても、私だってデビュー決まってるんです!」

「なに!？」

オーバーに細い目を見開き、驚く男。「君をデビューさせるなん

て、どんな物好きなプロダクションだ？」

こいつ、ケンカ売っとうやる？

そう思いながらも、必死に自らの怒りを静める綾香。やがて、腕を組み、誇らしげに言った。

「アースロマン企画です。あんたんとこと違って善良な事務所やけん！」

「アースロマン企画？」

眉間にしわを寄せて考え込む男。やがてああ、と頷いた。「なるほどな。あそこならまあ、君でもなんとかなるかもな。そんじゃ、詩織ちゃんによろしく。じゃあ」

それだけ言っただけは、逆に男がその場から立ち去った。

綾香はポカンと口を開けたまま、駅の方角へと歩く彼の後ろ姿を、ただ見つめるばかりであった。

## 7 引つかかる言葉

吉祥寺駅から少し離れた場所にある、松庵の閑静な住宅街に足を踏み入れる。暗い夜道を二分ほど歩き、ある古ぼけたアパートの前で綾香は立ち止まった。

電気……ついてんな。

二階の左端の部屋。ベランダ側の窓に、明々とした光りが見えた。綾香は、玄関のある方面に回りこみ、ダンダンと音を立てて階段を上った。そして、一番手前にある玄関の扉を勢いよく開ける。

1DKの小さな部屋である。綾香は、靴を脱ぎ、三メートルほどの廊下を抜け、奥の部屋へ続く引き戸を開けた。すぐにティーシャツとトランクス姿の井本真一の姿を見つける。彼はフローリングの床の上で、あおむけに眠りこけていた。

「真一」

靴下をはいた足で、彼の頭をゴツンと蹴る。すると、真一は「うーん」と唸り声を上げ、目をこすりながら上半身を起こした。金に染めた髪がボサボサに乱れている。

「……綾香？ 遅かったな」

「遅かったな、じゃなかるうが！ 今日渋谷でデートする約束やったやんか！」

「そうだったけ？」

そう言っただけは大きくあくびをした。「すっかり眠っちゃったわ。ゴメンゴメン。でも、お前にも比がないとは言え切れないぜ」

綾香は眉をひそめる。

「なんでよー！」

真一はニヤリと笑った。

「夢の中でお前が現れてさ。なかなか俺を目覚めさせてくれなかったんだ」

「あまー……くない！」



そう言つと同時に綾香は、真一の下半身の大事なところを思い切り踏み潰した。

「ぬほおおおおおっ!」

床を転げまわり、悶絶する真一を無視して、綾香は部屋の隅に置かれたデスクトップパソコンの電源を入れた。そして、パジャマに着替えた後、デスクの椅子に座り、パソコンが立ち上がるのを待つ。「そういえば、退学届けは出したのか?」

彼女の背後から、真一が問いかける。どうやら復活したい。

「うん」

彼に背中を向けたまま、綾香は答えた。「いつかはこうなる運命やったけど、やっぱり凹むね」

「まあ、とりあえず明日から、バイト頑張るしかないわな」

「それがさ、頑張らんでいいかもしれんとよ」

そこでようやく真一に顔を向ける綾香。不適な笑みを浮かべている。

「はっ?」

目を丸める真一。「それ、どうゆうことだよ」

「まあ、ちょっと待ってよ」

綾香は、ようやく立ち上がったパソコンの画面に目を移し、マウスを動かして、インターネットエクスプローラーを開いた。情報工学の専門学校に通っていただけのことにはあり、なかなか馴れた手つきである。

「なんだ?」

真一も綾香の横から画面を覗き込む。「事務の仕事でも決まったか?」

「ううん、確かめたいことがあるだけ。ちょっとあっち向いて」

「なんだよ」

アイドルデビューのことについては、まだ真一には秘密にしてお

こうと思った。綾香はずっと引っかかっていたのだ。あのスキンヘッスの黒スーツ男の言葉が。

『アースロマン企画？なるほどな、あそこならまあ、君でもなんとかなるかもな』

私でもなんとかなる？アースロマン企画っていったいどんな事務所なんやろ。

そう、真一に打ち明ける前に、そのことをはっきりとさせておきたかった。

綾香は検索サイトで、『アースロマン企画』と打ち込み、エンターを押した。キーボード操作もお手の物である。やがて、検索結果のトップに、アースロマン企画の公式サイトと思えるページが表示され、そこをクリックした。

どんなアイドルが所属してるんやろ。

綾香は期待と不安が入り混じった、複雑な心境で、ページの読み込みを待った。

## 8 これが現実

「ん？」

綾香はそこに現れた画像を凝視した。やがて、身体中から冷や汗が湧き出す。「こ、これって……」

「お？ これは……」

いつの間にか真一も、ディスプレイを覗き込んでいた。

「あ！ あっち向いてっつて言ったのに」

「アースロマン企画じゃねえか」

綾香の言葉を無視し、真一は続ける。「ここのAVけっこう良いよな」

ディスプレイに映し出されたのは、『18禁』の文字と、女性が肌をあらわにし、あんなことやこんなこと、とにかく文章で表現できないほど過激な行為をしている画像であった。

「え、えーぶい？」

驚いて真一の顔を見る綾香。彼は心なしか鼻の下を伸ばしているように見えた。

「ギャル系の専属女優がたくさんいてさあ、俺好みなんだよ。川嶋トマトちゃんとか、夢乃夢ちゃんとか、いつもお世話になって……うっ……」

そこで彼の言葉が途切れる。綾香がまた真一の股間を攻撃したのだ。「ぬほおおおおお！」

床を転げまわる真一。彼の姿を横目で見ながら綾香は考える。

え、AVって……。どうゆうこと？ 佐々木さんはそんなこと一言も……。

彼女はすぐに携帯電話を手に取った。

「ん？ あー、綾香ちゃんね。どうしたの？」

え？ うん、そつだよ、AVだよ。聞いてないって？ なんだ、知らなかったの？ けっこう有名なメーカーだからさ、わざわざ言わなくても分かるかなって。

え？ デビューを取り消したい？ そんな、もったいない。綾香ちゃんならけっこうマニア層にも受けると思っただけど……ちよ、ちよつとそんなに怒らないですよ。

まあ、別にやめるのは君の自由だけだよ。

え？ てっきりアイドルの事務所だと思っただって？ はっはっは、面白いこというね。アイドルにはアイドルの器つてもんがあるでしょ。一度鏡見てみなよ。君はどう見てもアイドルじゃなくってエーブ……」

ガチャ、ツーツー。

「どこに電話してたんだ？」

パソコンをいじりながら、真一は綾香に目を向けず、聞いた。綾香は黙って彼の背後に回り、ディスプレイを覗いてみた。彼はアースロマン企画公式サイトサンプル動画を見ている。「画像以上に過激である。」

綾香は怒る気にもなれず、彼にこんなことを聞いてみた。

「ねえ、真一。私がアイドルとしてデビューするってことになったら、ら、どう思う？」

「世界が引っくり返ってもそんなこと起こらないから安心しろよ」

綾香が拳を握ったのに気づき、真一はサツと両手でガードをする。

「じゃ、じゃあさ」

なんとか怒りを静め、次の質問。「私がその、AV女優としてデビューするってことになったら」

「おお！」

やたらと大きなアクションを取る真一。「それなら有りうるじやんか。お前ってけっこうマニア受けしそつだし、へびと絡んだり

とか、そうゆう企画ばっかやってれば人気出そうじゃね？」

次の瞬間、綾香の右ストレートがカードを突き抜け、真一の眉間に直撃した。本日三度目のKOである。床に倒れこんだ真一の胸倉を掴み、綾香は怒鳴る。

「あんだ、それでも私の彼氏なん！？ 誰のために学校やめたと思ってるの！？」

真一が早稲田大学に通っているというのは大嘘で、実はただのフリーターであった。(ちなみに彼がマンションと言っていた場所はこのアパートである)それでも愛あらばと、綾香は彼との半同棲生活を始めたが、一ヶ月ほど前、彼がバイトをやめてしまい、彼の生活費までもを自分が負担することになってしまったのだ。よって彼女は、バイトを週三日から六日に増やし、気づけば学校へもほとんど行かなくなってしまった。

「この状況をお父さんに知られてみ！ 私もあんだも殺されるからね」

涙ながらに叫ぶ綾香。真一の上に乗ったまま、再び拳を握る。「わ、分かった。分かったから暴力はよそう」

綾香の家族には、彼との半同棲生活のことも、退学のことも秘密にしてある。殺されるとまで行かなくとも、勘当されてしまうかもしれないし、それで仕送りを止められたら、生活は更に苦しくなる。そう、わずか半年で、綾香にとって憧れだった東京ライフは、ガタガタに崩壊してしまったのだ。

## 9 長電話を横目に

「綾香さん」

こちらに背中を向けて不貞寝する綾香の耳に、真一はそつと囁いた。

「……」

返事はない。寝ているのかもしれないが、彼女の性格的に起きていても無視している可能性がある。

はあ、またやつちまった。

溜息を吐き、デスクの上のデジタル時計を見る。時刻は午後十一時である。

実は今日の綾香との約束を、彼は忘れていたわけではなかった。

しかし、午後五時の約束の三時間前、午後二時に、少しだけ仮眠を取ろうと横になってしまったのだ。結果、時間になっても目覚めることは出来なかった。

上から綾香の顔を覗きこんでみる。目につつすら涙を溜めながら、すつすつと寝息を立てている。どうやら本当に眠ってしまったらしい。

先ほどはひどいことを言ってしまったが、それは一種の照れ隠しのようなものである。真一は彼女のことを本当に好きなのだ。凹凸の少ない平面顔も、少しヒステリックなところも。それに、内に秘められた優しさも……。

綾香、ごめんな。

心の中で呟き、彼女の頬にキスしようとする。しかし、次の瞬間唇に強烈な刺激が走った。

「詩織に電話しよう」

そう言っただけ綾香が急に身体を起こしたのだ。そのせいで彼女のへ

ツドバットが、唇にカウンターで直撃してしまった。

「ぬほおおおお！」

口元を押さえ、床に転がり、足をばたつかせる真一。

「ん？ なに一人で暴れてんの？」

「ろらえ、（おまえ）寝てたんじゃねえのかよ！」

「ああ」

彼女は枕もとに置いたバツクの中から携帯を取り出した。「一瞬寝ちゃったけど、ちよいと思いついてさ」

「思いついて？」

なんとか痛みも回復し始め、真一は立ち上がった。綾香はすでに携帯を耳にあて、通話待ちの体勢に入っていた。

「あ、詩織？」

繋がったらしい。そして何やら話を始める。彼女が、親友である矢上詩織と電話で話すときは、高い確率で長電話になる。真一はガラス製の小さなテーブルの上のリモコンを操作し、テレビのスイッチをオンにした。見たい番組があるわけではないが、ただじっと、彼女が電話を終えるまで待つのも退屈だし、居心地も悪い。

「うん……あー、やっぱりそうねー……いやいや私なんか無理に決まっとうやん」

テレビでは明るげなバラエティ番組が放送されていた。しかし真一の意識は綾香の電話に傾いている。

一体何の話をしてるんだ？

「ハゲ」「事務所」「金の卵」と、電話口に向けた彼女の口から、意味不明な単語が次々と飛び出してくる。

「あ、ところで田川のおばさんおるやん？ アイツ、なんて言ったと思う？」

主題を終え、次の話題に入ったらしい。真一は意識を電話から、テレビへと移した。

おっ？

今まで気がつかなかったが、番組のVTRクイズのパネラーとして、松尾和葉が出演しているではないか。

彼女は今年ブレイクしたばかりの清纯派アイドルである。黒く艶のある髪を、常にポニーテイルでまとめている。整った顔立ちと、天然ボケを持ち合わせ、おまけに巨乳である。

ふむ、今最も将来性の高いアイドルだな。この子のイメージDVDも入手しておかなくては。

真一の頭の中のアイドルランキングが変動した。松尾和葉が8位から4位に順位を上げたのだ。

そう、彼は生粋のアイドルマニアであり、アイドル関連のグッズを数多く所有している。綾香は、最初はそんな彼の趣味を軽蔑していたが、最近では認めてくれるようになった。(というより、あきらめてくれるようになった)

もちろん、彼にとってアイドルとは、あくまで嗜好の存在であり、綾香に対する気持ちとは全く別のものだ。しかし、彼女はそのことについてあまり理解してはいないらしい。

「おやおや」

突然、背後から高圧的な声が聞こえる。「またアイドルですかなほれきた。」



「まあな」

素っ気なく答える真一。「日露食品』とろみワントンカレースープ』のCMでもお馴染みの松尾和葉ちゃんだ」

それから綾香を見る。彼女は電話を終え、真一の肩口あたりから顔を覗かせていた。目を細め、値踏みするように、ブラウン管の中の松尾和葉を見ている。

「ふーん、可愛いねえ」

「ああ、今イチオシのアイドルだぜ。今度握手会にでも行ってみようかな」

真一の言葉を聞き、彼女ははあ、と大きさに溜息を吐いた。

「あんたさあ、アイドルなんか追いかけてる暇あったらさっさと仕事探しいよ」

「ああ」

それを言われると耳が痛い。「探してるんだけどさ。どこも中卒職歴なしの男なんて雇ってくれねえんだよ」

また彼女の溜息。そして息がもろに顔にかかり、真一はあることに気がついた。

「ん？」

綾香を睨みつける。「お前、酒臭くね？」

「え？」

彼女は真一から不自然に目をそらした。明らかに動揺している。

「あ、ああ、あんたが時間になつても来んけんさ、詩織と一緒にちよつと飲んだんよ。いやさー、詩織ってばどんだん私にビール勧めてきて、もー、困っちゃうよねえ」

饒舌になるのは彼女が嘘を吐いているときの特徴であった。

「男か？」

ピタッと綾香の言葉が止まる。

「お、男っていうか、まあ……スカウトっていうか」

「で、男なんだな」

攻撃的な口調で追い討ちをかける真一。綾香は渋々といった風にコクンと頷いた。

「はい……」

「チッ」

真一は舌打ちをし、ゴロンと横になった。「いくら俺が約束破ったからって、男と飲みに行くなんて、お前とんでもないビッチだな」

「ち、違うってー」

そう言って綾香は、両手で真一の身体を揺さぶる。「スカウトされたんよ。アイドルにならんか？ ってさ。『君なら月収50万は堅い』って言うんよ」

そういえば先ほど、『私がアイドルとしてデビューするってことになったら、どう思う？』などと、彼女が聞いてきたことを真一は思い出す。

「馬鹿言つなよ」

彼はあざ笑いながら、身体を起こした。「さっきからなに夢見てんだよ。どこにお前をスカウトする事務所があるってんだ？ どうせさっきのアースロマン企画とか、AV女優の勧誘だったってオチだろ」

「うぐっ……」

綾香は唇を噛み、俯いた。

凶星か？

しかし次の瞬間、彼女は物凄い勢いで首を横に振るのだった。

「ち、違うもん！ サニーなんちゃらプロダクションっていう、ちやんとした芸能事務所やもん！」

「サニーダイヤモンドプロダクション？」

真一ランキング17位の内藤ちえ美が所属している新鋭の芸能事務所であった。

「そ、そう、それぞれ！」

腕を組み、うんうんと頷く綾香。額に汗が滲んでいるようにも見える。ただ暑いからなのか、それとも……。

はつきり言っただけ真一は確信していた。彼女は嘘を吐いている。スカウトされたのが本当だったとしても、それはサニーダイヤモンドプロダクションではなく、アースロマン企画のようなAVのメーカーであろう。しかし、彼はあえて言った。

「ふーん、そいつは凄いやねえか」

勝ち誇ったような笑みを見せる真一。「それじゃあ、お前アイドルデビューするんだな。おめでとう。DVD出たら俺買っちゃおう」

そんな金はないが。

「あ、あんた全然信用してないね！」

「信用してる信用してる。そんじゃー、せいぜい頑張れよー」

綾香に背を向け、真一は再び横になる。こうやって彼女が本当のことを言うまで、待つつもりなのだ。しかし……。

「わ、分かった！ 今に見ときーよ！ あんた、土下座して謝ってもらっけん」

「はい」

彼女を見ずに返事をする真一。やがて背後で何やらダンスを開け閉めするような音、続いてドタバタと足音がしたかと思えば、最後にはキィ……ドン、と今度は扉を開閉する音が聞こえた。

え？

真一は驚いて顔を上げ、玄関の方を見る。そこにはすでに綾香の姿はなかった。

## 11 リニューアルオープン

「はあ、はあ、やっと着いたー」

綾香の自宅は吉祥寺本町の西側にあつた。吉祥寺駅を挟み、松庵の真一のアパートとは、ほぼ正反対の位置である。距離的には、真一のアパートから、一駅程度離れている為、彼女は三十分以上歩いて、ようやく自宅へと辿り着くことができた。

三階建ての小さなビルである。一階のエントランスホールにて、ずらりと並んだ郵便受けに向かい、彼女がパカッと携帯を開いたときには、彼女の着ている水色のワンピースは汗でびしょびしょになっていた。ちなみに、このワンピースは先ほど真一のアパートを飛び出した際、適当に選んで着たものである。真一のアパートには綾香の衣服も多数備えてあるのだ。

携帯の液晶に着信アリの文字。全部で三つの着信が入っており、その全ては真一からのものだった。

まさかいきなり私がアパートを飛び出すとは思わなかったかな。

綾香はふふつ、と苦笑し、着信を無視したまま、詩織の携帯へ電話をかけた。しばしのコール音の後、先ほど聞いたばかりの、親友の声が聞こえだす。

「なに、どうしたの？ ……え？ そんなこと言われても私はアイドルなんて興味ないし、さっきも言ったでしょ？ ……えー？」

携帯を耳にあてたまま綾香は階段を上がり、二階の廊下に出た。

そして横に三つ並んだ扉のうちの、一つの前に立ち、バッグを探るやがて、バックの中から取り出した鍵でロックを解除し、扉を開けた。真つ暗な部屋が彼女を出迎える。

真一のアパートより少し上等な1LDKであった。ただし家賃はほぼ二倍である。

「いったいどうしちゃったの綾香？ ……え？ そんなのやだあー、それなら直接スカウトの人に頼めばいいじゃん！ ダメ！ あんたの悪い癖だよ。私もいい加減めんどろみきれない、じゃあね！ ガチャ、ツーツー……」

詩織との通話が途絶えたとき、綾香は既にリビングのソファでゆったりとくつろいでいた。いや、正しくはゆったりとしているのは姿勢だけで、頭の中では相当焦っている。

や、やばい……。詩織なしじゃ、どうやってあいつに頼めばいいん？

彼女の目論みはこうだった。まず、なんとか詩織を説得し、サニードイヤモンドプロダクションへ連れていく。そこで詩織に、『私がアイドルになるなら、綾香と一緒にじゃなきゃ嫌だ』と駄々をこねさせる。晴れて、アイドル池田綾香の誕生というわけだ。真一のアパートを飛び出し、自宅へ戻ってきたのも、この密談を彼に聞かせないためである。

いくらなんでも都合良すぎたかな……。仕方ない、真一には本当のことを……。

チャラチャラチャーン

突然彼女の携帯の着メロが鳴り出した。綾香は驚き、ソファの上で三十センチほど飛び上がる。

し、真一？

そう思い、液晶を見るも、そこには覚えのない番号が表示されていた。

ま、まさかあの黒スーツ男じゃ……。早くも催促の電話か？

おそるおそる通話ボタンを押す。

「あー、もしもし」

聞き覚えのある男の声だ。「お疲れっすー。『キャンユー』の真鍋っす」

「え？」

拍子抜けする。「ま、真鍋さん？ お疲れさまですう……」

綾香のバイト先の先輩であった。『キャンユー』は大手雑貨安売りチェーン店で、彼女がバイトしている店は吉祥寺駅北口近くの『キャンユー吉祥寺駅前店』である。

「あー、いきなりごめんね。池田さん、今日休みだったからさ。実は再来月から、うちの店リニューアルオープンすることになったわけよ」

「リニューアルですかあ……？」

綾香は、古ぼけた店の内装を思い出した。

まあ、リニューアルするのもアリやろうねー。

「そんでもってさ、改装工事が今月末から始まるからさ、その報告ねー」

「あー、そうなんですなあ」

とぼけた声で相槌を打つ。

「うん、だから今月末から再来月までバイト休みだから。そんじゃ、お疲れっすー」

「お疲れさまですうー」

真鍋との電話を終えて、しばらくぼおっと部屋の中を見る綾香。やがて、そろそろ就寝しようか、と彼女は立ち上がり、洗面所に向かった。いや、向かいかけた。

あ、あれ……？

重大なことに気づき、固まる綾香。またまた汗を滴らせている。再来月まで休むってことは……来月の給料はどうなるん？

答えはもちろん『ゼロ』である。

## 12 アポなし訪問

大谷ビルって……。ここでいいとよね。

翌日の午後三時過ぎ。綾香は一人、昨日と同じように、渋谷の街を訪れていた。そして渋谷駅から代官山方面に十分ほど歩いたところで、目的のビルを発見した。

あたりをキョロキョロと見回してみる。大通り沿いではないため、人の姿はまばらである。次にビルを見上げる。五階建てのビジネスビル。周りのビルに比べると、やや低く感じる。ところどころコンクリートがひび割れており、外観ははつきりいつて……。

ボロっちなー。渋谷にもこんなところあるんやね。

そんな失礼なことを考えながら、綾香はそつとエントランスホールに足を踏み入れた。

う……。これは……！

彼女を出迎えたのは、エントランスホールと、その先にあるエレベーターホールとを遮る、大きな自動ドアであった。しかし、ドアに近づいても全く開く気配はない。どうやらロックされているらしい。

次に彼女は、ドアの右手の床から突き出た四角柱の物体を発見する。上面には、数字や記号の書かれた十二のボタンが、電話機のように横に四列並んでおり、その隣に縦に細長く開いた隙間のようなものが確認できた。おそらくそこにカードキーを差し込み、暗証番号を押してロックを解くシステムだろう。

ボロっちくても一応芸能事務所やけん、セキュリティは万全か……。どうしよう。

昨夜、バイト先の先輩である真鍋から、突然の休職を言い渡された後、真っ先に彼女の頭の中に思い浮かんだのは、あのスキンヘッドの黒スーツ男の顔であった。

生活の危機に直面してしまった彼女に、もはやプライドなどとい



うものは存在しない。アイドルじゃなくてもいいから、雑用としてでも、サニードイヤモンドプロダクションに雇ってもらえないか、と黒スーツ男に頭を下げてみよう、と考えたわけである。

ただ、問題があった。

なんと男の連絡先を、綾香は聞いていなかったのだ。となると、連絡先を知っているのは、昼間に名刺を受け取った詩織だけ、ということになる。しかし、既に午前零時を過ぎていたし、彼女にまた（三度目である）電話をするというのも気が引けた。

そこで綾香が考えた方法は、インターネットでサニードイヤモンドプロダクションの住所を調べあげ、翌日アポなしで訪問し、直接男に頼み込む、というものであった。

うーん、もう帰ろうかいな。

サニードイヤモンドプロダクションのある、大谷ビルのエントランスホールで、足止めを食らうこと、はや三十分。その間、誰一人として自動ドアを開けた人物はいない。（いれば綾香も、ちゃっかりと一緒に中へ入っていただろう）

時計の針は午後四時を差している。彼女にとって、午後六時からバイトまでにはなんとか話をまとめておきたいところなのだが。

「コラーツ！」

「うわっ！」

突然、背後から野太い怒鳴り声が聞こえ、綾香はビクツと身体を震わせた。そして、おそろおそろ声が出た方に顔を向ける。「や、やっぱりい……」

そこに立っていたのは、あの黒スーツ男であった。

「悪い悪い、驚かせるつもりはなかったんだ」

コラーツ！ って言ったやんか！ 「ところで、こんなとこにまで来てどうした？ 詩織ちゃんを説得してくれたか？」

彼は相変わらずの不気味な笑顔で、綾香に質問をまくらしたてる。

「あ、あの……」

もじもじと身体をくねらせる綾香。「詩織は芸能界には全く興味ないらしくて……」

「ふーん、そうか」

男の笑顔が消える。「そりゃ、わざわざ報告してくるうなこったな。名刺捨てちまったのか？」

冷たいトーンでそう言うと、彼はポケットの中から茶色い、革の財布を取り出した。

「あ、あの……」

例の話を切り出そうとする綾香。しかし、男は取り合ってはくれない。

「ほれ、電車代だ。釣りはとっとけ」

綾香は、男が差し出した千円札を「どうも……」と受け取った。

そして野口英世の顔を見ながら、思わず顔をにやつかせる。

やった。思わぬ収入！ バイト前になんか食べようかな……じやなくて！

「ち、違うんです！ 黒スーツさん！ ちょっと話があるんですけどー！」

慌てて叫ぶ綾香。そして同時に走り出す。なぜなら、男は既にカードキーを使い、自動ドアの向こう側へと行ってしまっていたからだ。

ドアはまだ閉まりきってはいない。僅かな隙間に、どうにか身体を入れてしまおう、と彼女が身を屈めた瞬間……！

ゴーン！

ホールに鈍い音が響き渡る。そう、悲劇は起こったのである。

### 13 契約成立？

「う、うーん」

自動ドアに頭から激突し、うめき声を発しながら、床に倒れこむ綾香。「お父さん、お母さん。綾香は精一杯生きました……」

思わず最期の言葉を口走る。だんだんと意識が遠くへ……。

「黒スーツさんじゃなくて、南だ」

すぐ近くで太い声。ブーメランのように意識が引き戻される。

綾香はうつろな目をしたまま、身体を起こした。

「わっ！」

自動ドアの向こうにいたはずの黒スーツ男が、すぐ近くで自分を見下ろしていることに気づいた。「黒スーツさん、じゃなくて南さん。向こうに行っちゃったはずじゃ……」

そう言いながら、たった今自分が激突した自動ドアを見てみる。

ドアは左右にしっかりと開いている。

「エレベーターホールからは、カードなしで普通に開くんだよ」

チツと舌打ちをする南。「お前がぶつかって、倒れこんでたからしかたなく戻ってきたんだ。……ったく、せわしない女だな」

「ご、ごめんなさい……」

パツパツ、と手で服についたチリをはらい、綾香は立ち上がった。「それで？」

腕を組む南。「『話がある』って言ってたよな。なんの話だ？」

「あっ」

再び身体をもじもじさせる綾香。「実はその……」

「なるほどね」

二人はエレベーターホールへと移動していた。話を聞き終えた南は、不適な笑みを浮かべ、二、三度頷く。「そういえばお前、AV

女優としてデビューするんじゃないか？

「うっ……！」

やはり彼はアースロマン企画のことを知っていたのだ。綾香はふん、と鼻を鳴らす。「ち、ちよつと契約面で不都合があったので、デビューは辞退しました」

「ふん、どうせ普通の芸能事務所と勘違いしてたつてオチだろ」  
「……」

まさにその通りで、何も言い返せない綾香。そんな彼女の反応に満足したのか、南はまた、うんうん、と二、三度頷いてみせた。しかし、次の瞬間には綾香の肩に、ポン、と優しく手を置くのであった。

「え？」

「まあ、これも何かの縁だ。来月から、うちで雑用として働いてもらおうじゃないか」

「ほ、本当に!？」

目を輝かせる綾香。

「ただし、だ」

そう言つて南は人差し指を立てる。「一週間だ。一週間やるから、なんとしてでも詩織ちゃんを説得しろ」

「ええ!？」

目の輝きが消えていく。「そんなの無理ですよ。詩織、何度言つても『芸能界なんか興味ない』の一点張りですよ」

「この話はなかったことにしようじゃないか」

「やります」

あつさりとした決意を固める綾香。

「オーケー」

南は身をひるがえし、エレベーターに向かった。そしてエレベーター横のパネルの四階のボタンを押す。「そんじゃ、頑張れよ」

「ああ、ちよつと待つてください」

扉が開き、エレベーターに乗り込もうとする南を、綾香は慌てて

引き止めた。訝しげに彼女を見る南。「もう少しだけ時間をくれませんか？　一週間じゃ短すぎです」

「ダメだ」

南はキツパリと言った。「極秘プロジェクトの締め切りに間に合わない」

扉が閉まり、エレベーターが上昇していく機械音。その機械音を聞きながら、綾香は一人思うのであった。

締め切りなんかあるんかい……。

どうでもいい話だが、この後綾香は男にもらった交通費の千円で、のんびりと午後のすいーつを楽しんだが、バイトには十五分遅刻してしまったという。

## 14 親友の農

吉祥寺ワンウェイコンピュータースクール。生徒数、百人程度の小さな私立専門学校である。それなりの機器は揃い、それなりの就職率を誇る、まあ、それなりの専門学校だ。

パソコンがズラリと並んだ教室。その最前列、最左翼の席に矢上詩織は座った。そこが彼女の指定席なのだ。そして、そわそわとあたりを見回す。教室内には、数人の生徒がいたが、田之上裕作の姿はない。

珍しいな。田之上くん、いつももつと早いのに。

腕時計を見る。まもなく午前十一時。あと少して授業が始まるのだが……。

心配したのも束の間、すぐに田之上裕作が慌てた様子で教室に入ってきた。そして詩織の隣の席に座り、彼女に「おはよう」と一礼する。

「おはよう」

詩織は笑顔を作り、挨拶を返した。「どうしたの？ 田之上くんが私より遅く来るなんて珍しいね」

「う、うん。ちょっとね」

なぜか彼女と目を合わせようとしない田之上。詩織は不思議に思いつながらも、彼に何も尋ねはしなかった。

それにしても……。

こつそりと彼の横顔を眺める。短く整えられた髪、やや面長な顔。少し気が小さいところはあるが……、詩織にとって彼は、いわゆる『気になる存在』だ。

今日も田之上くんと一緒に授業。幸せだなあ、私。

そんなことを思い、胸をわくわくさせながら、授業開始のチャイムを待つ詩織であった。

「アイドル……って」

昼休みになり、二人で近所の立ち食いそば屋へ向かう途中。田之上がおもむろに口を開いた。

「アイドル？」

眉間にしわを寄せ、彼の言葉を繰り返す詩織。「アイドルがどうしかしたの？」

「ア、アイドルってさあ」

なぜか彼の目は泳ぎっぱなしだ。ちなみに今日は学校の中でも、ずっとこんな調子であった。「アイドルってなんか……良いよね？」

「え？」

意味がよくわからない詩織。「アイドルが？ ま、まあ良いんじゃないの？」

適当な返事である。というより、他に返事のしようがなかった。

「お、俺アイドルがめっちゃくちゃ好きなんだ」

ハハハと乾いた笑い声を発する田之上。「ほら、あの最近売れる百人組のグループとか」

「OCM100（オーシーエムワンハンドレッド）？」

「そうそう、それぞれ」

御茶ノ水を拠点に活動する人気アイドルグループだ。「いやさー、やっぱアイドルっていいわー」

そしてまた乾いた笑い。しかし……。

田之上くん、目が笑ってない。これはなんというか……。

そう、相当怪しい。

やがて立ち食いそば屋の『立ち蕎麦本舗』に到着し、二人並んでのれんをくぐる。

店内は満員だったが、この利点は先に勘定さえ済ませれば、店の前で食べてもいいということだ。二人は注文したそばを手に、店

を出た。

「あふ、あふ……あちい」

そばを嚼る田之上の表情を、無言で観察し続ける詩織。

おかしい、田之上くん、今までアイドルの話なんてしたことなかったのに。

そこで詩織は直感する。

も、もじゃ……！

「お、美味しいよ」

額に汗を滲ませながら田之上が言った。「詩織ちゃんも早く、冷めないうちに……」

「田之上くん」

彼の言葉を遮る詩織。やや冷たい響きを持った声だった。「ひよっとして……、綾香になにか言われた？」

ピタッと箸の動きを止める田之上。目を丸くして詩織を凝視している。

それから五秒、十秒、睨めっこが続いたが、先に折れたのは田之上の方だった。

「あ、綾香ちゃんには内緒で……」

「やっぱり……！」

詩織は思いきり拳を握った。持っていた箸がボキボキとへし折れ、近くを通った若い男性数人から「おおー！」と歓声が沸き、拍手が巻き起こる。

綾香……！ 私の田之上くんに変なこと吹き込んで、一体どうゆうつもりなの！？



## 15 侵入者

昼食を終え、二人で学校へと帰る道のりでのこと。

「今朝のことなんだけどさ」

田之上は苦笑しながら、事情を説明し始めた。「玄関の裏に綾香ちゃんが潜んでて、『あんた今日からアイドルマニアってことにして、詩織にアピールしまくって』って頼まれたんだ。俺、断れなくてさ」

「なるほどね」

それで朝少し遅れたのか、と詩織は納得する。そして彼女は綾香に対し、怒りの炎を燃やした。

綾香め……！ 私が田之上くんのが好きだってこと利用して……！ 許せない！

「『もし私のことバレたらあなたのパソコンのデータ全部消す』って言われてさ。だから、マジでバレたこと、内緒にしてほしいんだ」  
「うん、分かった」

綾香なら本当にやりかねない。詩織はしぶしぶ頷いた。「内緒にしとく」

「それにしても」

不思議そうに首をかしげる田之上。「綾香ちゃん、なんでまた俺をアイドルマニアにしたてあげようとしたんだろっ」

「そ、それはまあ、心当たりがないわけじゃないんだけど……」

詩織は作り笑いを浮かべ「これはうちの問題なんだ。田之上くんには迷惑かけちゃったね」

と、そう取りつくろった。彼への、自分の気持ちを知られたくはなかったのだ。

教室に入り、二人は例の指定席まで戻ってきた。ところが……。

「ん？」

詩織はあることに気づき、眉間にしわを寄せる。

「ど、どうしたの？」

心配そうに詩織の顔を覗きこむ田之上。「なんかおかしいことでも」

「このパソコン……」

そう言ってマウスを動かし始める詩織。「マウスカーソルの位置がずれてる。私、いつも中心にカーソルを置いておくから」

「そんなの、気のせいじゃない？」

田之上は無邪気に笑った。しかし、そんな彼を無視し、詩織は、相変わらず厳しい表情でモニターを睨み続ける。そして……。  
ん？

デスクトップ上に並んだたくさんのアイコンの中に、見慣れないエクセルのファイルを見つけた。それをクリックする詩織。やがて、画面いっぱい大きな文字で書かれた文章が表示された。

「こ、これは……！」

拜啓 矢上詩織さんへ。

僕はアイドルグループ『イケメンファイブ』の倉田直樹です。

さつき偶然、君を駅で見かけて、思わず後を尾けてしまいました。今、こっそり生徒のフリをして、この文章を書き込んでいます。

もし君が芸能界にデビューするなら、一緒に仕事がしたいな。

『イケメンファイブ』の倉田直樹。詩織が今最もハマっている男性タレントである。

「マジで？ 凄いいじゃん！ 詩織ちゃん」

驚きの声をあげる田之上。

「んなわけないでしょ！ 綾香よ、綾香！」

そう言って詩織は、教室内をキョロキョロと見回した。しかし、当然ながら池田綾香の姿はどこにも見当たらない。彼女は溜息を吐きながらドン、と音を立てて椅子に座った。

「や、やっぱり綾香ちゃんの仕業かな」

不安げな表情を浮かべつつ、田之上も席に着く。

「うん。あの子エクセル（検定三級）受かって以来、あまりに嬉しくて、どんな内容のファイルでも、エクセルで作りたがるから」  
「なるほど……」

それにしても、と詩織は思う。

あの子、なんでこんなに私をアイドルにしたがるの？ やっぱり自分がアイドルとしてデビューしたいから？ 前に電話で言っていたみたいに、『デビューするなら綾香と一緒にやなきゃイヤ』って、私に言わせたいの？ でも……。

ドン、と思いきりデスクを叩く詩織。田之上が「わっ」と驚き、何ごとか、と彼女を見た。

私はアイドルなんて興味ない！ 田之上くんとうして一緒に、授業を受けられるだけで幸せなんだから。どんな手を使っても無駄よ！

綾香が詩織をアイドルにしたがる理由……。それが単に生活のためだということを、詩織は知る由もなかった。

## 16 悪どい手口

「いらつしゃいませえ」

『キャンユー』吉祥寺駅前店。商品であるトイレットペーパーの品出しを行いながら、すれ違う客に向かって、そう挨拶する店員、池田綾香の顔にいつもの覇気はない。

詩織、全然ノツてくれなかったな……。

『一週間やるから、なんとしても詩織ちゃんを説得しろ』

親友である矢上詩織をアイドルとしてデビューさせようと目論む、サニーダイヤモンドプロダクションのスカウト南吾郎にそう命じられてからというもの、綾香は詩織に対し、あの手この手でアイドルデビューの勧誘といえるかどうかを行ってきたが、それを無視され続け、一週間あった期限は、いよいよ残りあと一日となってしまうた。

もし、アレが失敗したら、詩織に直接会って土下座して頼むしか……。

手を止めて、そんなことを考えている時、客の一人が目の前の4R入りトイレットペーパーの山から、「ください」とその一つを手にとった。

「あ、ありがとうございます」

慌てて挨拶し、相手の顔を見るが。「う……」

顔から血の気が引いていく綾香。

「店員さん、『キャンユー』はいつも安くて便利だねえ」

そして客は微笑んだ。しかしその笑顔を見て、綾香が感じたのはただ恐怖のみだ。そう、その客は矢上詩織その人だったのである。

「し、詩織い……」

綾香は、何かを懇願するような眼差しを彼女に向けた。

「綾香、今日うちに届いてたものなんだけど」

なぜか優しい口調でそう言うと、詩織はトイレトペーパーを置き、ハンドバッグの中から白い封筒を取り出した。その封筒に綾香は見覚えがある。「これはなにかかな？」

またニツコリと笑顔。綾香はブルツ、と身を震わせた。

「そ、それは……。なんででしょう？」

彼女も笑ってみせるが、引きつった笑顔にしかならない。

「とぼけないで！」

態度を一変させ、怒鳴る詩織。笑顔も完全に消えている。「『工ステ無料招待の案内』なんて書いてあるからさ、わくわくして開けてみたら……」

その時の再現といったふうには、詩織は封筒を開け、中の書類を取りだし、続ける。「『会員データを作りますので、印を押して送り返してください』だって。これ、思いつき『サニーダイヤモンドプロダクション タレント契約書』って書いてあるじゃん！」

「……」  
その通りだった。綾香が南に契約書を預かり、それを利用して作りに上げた二セの案内である。ご丁寧に返送切手まで同封していた。

「やっぱり……バレちゃった？」

ハハ、と笑ってごまかそうとする綾香。

「当たり前でしょ！」

キーンと耳鳴り。こんなに怒る矢上詩織も珍しい。「最初は可愛いはずら程度のもんだったから黙ってたけど、こんな悪どい手口使うなんて……。電話しても出ないから、直接来てやったわよ！」

綾香、もう絶交だからね！」

「ええ！？」

『絶交』の言葉に過敏に反応する綾香。詩織にすがりつく。「そんなあー。それだけは勘弁して！ 私、詩織がおらんかったら生きていけんってー！」

しっかり者の詩織にはいつも助けられていた綾香であった。

「ダメ、絶対に許さないからね。綾香が悪いんだよ」

プイ、と顔を背ける詩織。そして綾香に封筒を差しだす「じゃ、

『エステ無料招待の案内』は返すからね。ほら！」

綾香はそれを黙って受け取り、しばらくぼー、っと封筒を見つめた。それからもう一度詩織の表情を窺おうと顔を上げるも、詩織はすでに彼女に背中を向け、その場から立ち去ろうとしていた。

うつ、詩織い……。

親友が自分のもとから去っていく。その事実にはショックを受け、綾香はガツクリと肩を落とした。すると、床に置かれたままのトイレトペーパーを発見する。

し、詩織。トイレトペーパーいらんの？

心の中で元親友にそう問いかける綾香。

余談ではあるが、五分後に詩織がこっそりトイレトペーパーを買いに戻ってきたことに、綾香はまるで気がつかなかった。

17 これが芸能界

「あんたのせいで親友を失くしました」

翌日の正午過ぎ、サニーダイヤモンドプロダクションが事務所を構える、大谷ビルから五分ほど歩いたところにある喫茶店。その一番奥の席に、池田綾香は南吾郎と向かい合わせで座っていた。

店内はカウンターを含め、十畳ほどの広さである。昼時だというのに、彼女たち以外に客はいなかった。

「そりゃあ、まあ」

スキンヘッドの頭をポリポリと掻きながら南が言う。「お前が悪い」

「……！」

キツ、と南を睨みつける綾香。

「おいおい」

南は両手を軽く上げ、困惑したように笑った。「俺は詩織ちゃんを説得しろ、とは言ったけど、騙せとは言ってないぜ」

「でも」

ドン、と綾香がテーブルに勢いよく手をついたせいで、上に乗ったコップが揺れ、中にはいつていたアイスコーヒーが少しこぼれてしまう。「それでもせんと、詩織、全然その気になってくれんっちゃもん！」

「つつたく」

ライターで煙草に火をつける南。そのまま気持ち良さそうに煙草を吸い、ふう、と紫煙を吐く。「そんな詐欺みたいなことしてりゃあ、説得できるもんもできねえだろうが。もう期限は今日までだ。どう考えても無理だな」

「う……」

綾香は口ごもり、それからうつむいた。「ご、ごめんなさい……」  
そう謝りながら彼女は『この男に謝るの、何回目だろう』とぼん

やり考えていた。

「前から思っていたんだが」

灰皿に煙草の灰を落しながら、南が言う。「お前のその喋り方  
つて。福岡か？」

「その隣の隣です」

目を落としたまま綾香は答える。

「ふーん、岡山か……」

なんで関門海峡渡っちゃうんよ！

「い、いや」

コホン、と一つ咳払いをする綾香。「長崎です」

「ふーん、なるほどね。長崎か……」

南はそれだけ言うと、また煙草を口に近づけるのであった。

なんなん？ 長崎で悪い？

思わせぶりの彼の態度に戸惑う綾香。その時、どこからともなく  
突然プルル、と無機質な電子音が鳴った。

「おっと、失礼」

南が上着のポケットから携帯電話を取り出す。電子音の正体は携  
帯の着信音であった。メロディも歌もない、オーソドックスな昔な  
がらの着信音だ。やがて彼は携帯を耳にあて、何者かと電話で話を  
始めた。「おー、どうしたのー？ ちえ美ちゃん」

やたらと軽い声。いつもの野太い声はどこへいったんだ、と綾香  
は思った。更に彼の言葉に耳を尖らせてみる。

「今、こつち？ あー、そう？ うーん、ちえ美ちゃんには参つち  
やうなー」

「おえ……」

不気味な口調に、思わずええいってしまう綾香。そんな彼女を気に



もとめず、南は会話を続ける。

「えー？ もー仕方ないなあ。ちょっとだけだよー。今『ビリーブ』にいるから」

「『ビリーブ』……」

確か、今二人がいる喫茶店の名前である。

「そんじゃ、待ってるよー。ほいー」

最後まで気色の悪い口調のまま、南は通話を終え、携帯電話をポケットにしまった。

「……」

じーっ、と彼を見つめる綾香。

「まあ、お前の言いたいことは分かるが」

南は照れを隠すかのように、サングラスのブリッジを中指で持ち上げた。「うちの看板タレントだからな。機嫌を損ねるわけにはいかねえ」

「はあ……」

綾香は思った。これが芸能界か……、と。

十分後、一人の女性が店内へと入ってきた。同時に南が立ち上がり、いつもより一オクターブほど高い声を上げる。

「おいこつちだよー。ちえ美ちゃーん」

「こつちだよーって……他に客おらんやん」

テーブルにひじをつきながら悪態を吐く綾香に南は一言。

「黙ってる」

十分前の話。「私はこのへんで」と立ち上がる綾香を、南が「ちよつと待て」と制した。

「な、なんでよ？」

綾香は目を丸くする。「詩織の説得失敗しちゃったし、どうせ私、雑用で使ってもらえんっちゃろうもん」

「ああ」

偉そうに腕を組み、キツパリと認める南。それを見て綾香は、店の出口に向かってスタスタと歩き始めた。

「私はこのへんで」

「ちよつと待て」

たった今の台詞を繰り返す二人。綾香は立ち止まり、訝しげに南を見る。「電話聞いてただろ？ 今からうちの看板タレントがここに来るんだ」

「それが？」

「相手は芸能人だ。一度会っておいて損はないだろ？」

そこまで言って彼は、煙草の火を灰皿で揉み消した。

綾香は考え込む。

彼の態度は明らかにおかしい。何かウラがあるというのは間違いないであろう。ただ、もしその看板タレントに自分が気に入られる

ようなことがあれば……。

一発逆転！ 雑用で使ってもらえるかもしれんやん！  
結局彼女は席へと戻ったのだった。

「はー、涼しい。お久しぶり、南さん」

ニコニコと笑いながら、『看板タレント』は綾香たちの陣取るテーブルまで歩いてきた。

「久しぶりだねー。ちえ美ちゃんってば、いつも可愛いなー」

南の話し方に、またえさきそうになる綾香。そして彼女は『ちえ美』と呼ばれた看板タレントの顔を見る。

まあ、否定はできんけど……。

くりくりとした目に、小さな鼻と口。黒く、艶のあるストレートのロングヘアー。南の言うとおり、ちえ美は確かに可愛い女性だと思えた。

それに、と今度は彼女の首から下に目を向ける。

彼女は黒い टीーシャツにジーパンというラフな格好であったが、綾香には、まるでそれがドラマか何かの衣装のように感じられた。

彼女は思った。これが芸能人オーラか、と。

「そんなことないですよー」

笑いながら受け流すちえ美。『可愛い』など、言われ飽きているのだろう。「あ、あれ？ その子は？」

ようやく綾香の存在に気づいたらしい。

「は、初めまして」

椅子に座ったまま綾香は頭を下げた。「池田綾香って言います。来月から無職です」

「はあ……」

戸惑ったように、少し首を傾げるちえ美。「それは大変ですね」

「あー、綾香。こちらクイズ番組『グルメクイズ食いだおれQ』のレポーターとしてもお馴染み、うちの看板タレントの内藤ちえ美ちゃんだ」

手の平を上に向け、ちえ美を紹介する南。声色が元に戻っている。「よろしくです」

両手をひぎに、丁寧に頭を下げるちえ美を見て、綾香はようやく椅子から立ち上がった。改めて頭を下げる。

「あ、はい。『食いだおれQ』いつも見えます」

いつも見ているのは本当だが、番組に出てくる料理に夢中で、レポーターの顔など、全く覚えていない彼女だった。

「あ、ちえみちゃん。こいつは来月うちからデビューする新人の池田綾香ってヤツねー」

また声色が変わり、今度はちえ美に綾香を紹介する南。

「あ、そうなんですか？」

目と口を丸くし、興味深げに綾香を見るちえ美。「これからよろしく願いますねー」

綾香はまた頭を下げ、そして言った。

「はい。これから一緒にサニードायモンドプロダクションを盛り上げていきましょう。よろしく願いますね、内藤先輩！ あ、まだ年齢を聞いていませんでしたね。私は今年十九で、……って、え、えーっ!？」

長いノリツッコミであった。

## 19 それなら私が

「ちょ、ちよっと」

無表情で突っ立ったままの南に、綾香が詰め寄る。「なんでそんな、えー！？ だって私は説得に、えー？ いや、っていうか雑用……えー！？ ……ゴホゴホ」  
勢いよく喋りすぎて、むせてしまう綾香だった。

「気は済んだか？」

南が言う。「プロジェクトの締め切りは今日だ。そうするしかないだろ？」

「で、でも」

なんとか息を整える綾香。「社運を賭けた極秘プロジェクトなんやろ？ 私なんかがデビューしたって上手くいくわけなかるうもん」  
「大丈夫」

南はそう言っただけ大きく頷いた。「俺が全責任を取る」

「うっ……」

な、なんとなくカッコいい。

サングラスの向こうのえびす顔を忘れ、彼の男気に少しときめいてしまう綾香だった。

「あ、あのー……」

二人に置いてけぼりにされていた、ちえ美が間に入る。「じゃあ、綾香さんが、噂の極秘プロジェクトの……？」

極秘プロジェクトが噂になっていいのだろうか、と綾香は思った。

「そう、そのとおりなんだよー」

ちえ美ボイスに切り替える南。「本当は正統派のアイドルを育てたかったんだけどねー。ちよっと変り種になっちゃったんだ」

「ち、ちよつと待って」

変り種アイドルの池田綾香。彼女はひと呼吸置き、二人が自分を注目するのを待ってから続けた。「私がアイドルの器じゃないってことは自分が一番分かっています！ そんな重要なプロジェクト……。無理に決まっとうやん！ 私、辞退するけん！」

「そう、それだ」

そう言つて南は綾香を指差す。指を差された綾香も、隣でそれを見ていたちえ美もポカンとした顔で南を凝視した。シーンとした空気が流れる。

「そ、それってなんよ？」

数秒後、ようやく口を開く綾香。

「その喋り方だ。お前を九州出身のとんこつアイドルとして売り出していく」

「と、とんこつ……。アイドル？」

なんて油っぽいネーミング。

「そう」

また、南は頷く頷いた。「これからの時代はアイドルにも個性が必要だ。こてこての博多弁を話すアイドルなんて珍しいだろう？ そんな個性を前面に押し出していけば、ブレイクするのも夢じゃない」

「私、博多じゃなくって長崎なんですけど」

気になっていたことを口にする綾香。

「どっちでもいい」

よくない！

その時、ちえ美がクスツと笑い、こつ言つた。

「と、とんこつアイドルって、なんか可愛い名前ですね」

「！？」

その微妙な言葉の響きを聞き逃さなかつた綾香。鋭い視線でちえ

美を睨みつける。

「こ、この女……！」

綾香の変化を、ちえ美の方もまた見逃さなかったようだ。

「え？ ど、どうかしました？」

おろおろとした表情に変わる彼女。

「……」

今、私のことあざ笑ったな……！

『そんな化粧でごまかしまくった平凡なルックスと、がさつで品のない性格で、花の芸能界を生きていけるわけないじゃん』

と、ちえ美の言葉が、綾香にはそう聞こえたのだ。いや、耳が遠いわけではない。

人一倍負けん気の強い彼女。こうなったらもう誰にも止められない。

「やってやる！」

南に視線を戻し、彼女は叫んだ。

その突然の剣幕に、彼は驚いてビクツ、と肩を震わせる。

「い、いきなりなんだ？」

「それなら私がアイドルやっちゃるけん！ あんた、ちゃんと私のこと売り出しよ！」

絶対に、ちえ美なんかより売れてみせるけん……！

## 20 一週間で彼女は

ピツと何かの電子音。続いてカタカタとキーボードを叩く音が聞こえる。

な、なんだ……？

深い眠りから覚めた井本真一は、片手で目をこすりながら、ゆっくりと身体を起こした。かすみがかかった視界の奥に、パソコンに向かう女性の後ろ姿がぼんやりと見える。

「あ、綾香か？」

返事はない。しかし、視界が鮮明になっていくにつれ、彼は確信する。その後ろ姿は紛れもなく、恋人池田綾香のものだ。「なんだってんだよ……。おっと」

立ち上がったところで眩暈に襲われる。そこで、ようやく綾香がこちらに目を向けるのだった。

「おはよ」

それだけ言って、再びパソコンのディスプレイに視線を戻す彼女。

「おはよつつつても、もう夜やけどね」

時刻は午後十一時。松庵の、真一の1DKのアパートである。

「お前なあ」

金色の自分の髪をグシャグシャにかき乱しながら、真一は綾香に近づいた。「ここ一週間なにやってたんだよ。メールも電話も無視しやがって」

二人が顔を合わせるのには、先週、真一がデートをすっぽかした日以来である。

「ちよつと、いろいろあつたんよ」

マウスを動かしながら、冷めた口調で綾香は言う。

「ん？ サニーダイヤモンドプロダクション公式サイト？」



真一は彼女の後ろからディスプレイを覗き込んでいた。「なんだよ、お前やつぱりアイドルに未練があるのか？」

「やつぱり私がスカウトされたって信じてなかったんやね」

相変わらず前を向いたまま、そんなことを言う彼女。真一ははあ、と深く溜息を吐いた。

「当たり前だろ」

そして彼は、また頭をかく。「お前がアイドルなんて夢のまたゆ……」

「この子知ってる？」

彼の言葉を遮って、綾香が尋ねる。「この子」とはパソコンのディスプレイに映っている少女を指しているらしい。

「ん？」

ディスプレイに顔を近づける真一。どうやらサニーダイヤモンドプロダクションのタレントリストらしい。無垢な笑顔を浮かべる、見慣れた少女の写真の右横に、『内藤ちえ美』という名前が書かれてあり、その下に生年月日など、詳細プロフィールが並んでいる。

「なんだ。内藤ちえ美ちゃんじゃねえか。サニーダイヤの看板タレントだよ。最近写真集出して、売り上げトップテンに入ったりして人気急上昇中だな。真一ランキングでは12位だ」

一週間前より若干ランクアップしていた。

「ふーん」

自分から聞いておいて、彼の話に興味がなさそうな綾香。「あなたのランキングで12位ってことは、そこそこ有名なアイドルつちやね」

「まあな。サニーダイヤの期待の星、といっても過言じゃあないだろう」

「ふーん」

そのまま綾香は黙りこみ、ぼんやりとした目つきで、ディスプレイを睨み続ける。そんな彼女の横顔を見ながら、真一は心底困惑していた。

いきなりなんだ？ 急に内藤ちえ美ちゃんのプロフィールなんて……。

「ねえ、サニードイヤプロダクションにもう一人期待の新星が現れた、って知つとる？」

「は？」

突然の彼女の言葉に、目を丸くする真一。「もう一人？ いや……？」

彼の困惑は更に深まり、だんだんと険しい顔になっていく。するとその時、綾香が勢いよくイスから立ち上がった。

「わ！ な、なんだ!？」

驚いて飛びのく真一。彼の正面に立ち、綾香はポーズを決める。

左手を腰。右手をチヨキにして額へ。

「来月から、サニードイヤモンドプロダクションよりデビューすることになりました！ 新人アイドルの綾川チロリです！ チロリンって呼んでね！」

「……」

彼女を凝視したまま固まる真一。そんな彼にウインクを決める綾香。

そして静寂、静寂、静寂……。

数秒後、ぱちぱち、という乾いた音で、ようやくその静寂は破られる。

真一はとりあえず拍手をしていた。そして彼は思う。

こ、この一週間で、綾香の身にいったい何が……。

## 21 ランキング圏外

「……。まあ、というわけよ」

ことの顛末を話し終え、冷蔵庫から2Lペットの烏龍茶を取り出す綾香。そして、それを豪快にラッパ飲みする。「プハーッ、たまらん」

「……。一応、話は飲み込めたけどよ」

真一は、先ほどまで綾香が座っていたパソコンのデスクの椅子に腰を下ろしていた。ただし、ディスプレイとは背中合わせである。

「その、ちんちろりんとかいう名前はなんなんだ？」

「チロリン！」

そう叫んでから、綾香もパソコンのもとへ戻る。「南が考えたんですよ。もともとは詩織をデビューさせるつもりやったけん。しおりチロリって語呂の近い芸名を用意しとったんやって」

それから彼女は小さく「どけ」と呟く。舌打ちをし、椅子から立ち上がる真一。

「……。で？ 給料とかは大丈夫なんだろうな」

真一のその言葉に、心外そうに目を丸くする綾香。

「そりゃあ、プロダクションの命運を賭けた極秘プロジェクトなんやけん、それなりに貰えるっちゃない？」

「どうかねえ」

腕を組み、真一は顔を傾けた。「サニーダイヤモンドプロダクションSDPはまだまだ弱小の事務所だぜ。ひよっとしたら、バイト以下の給料しか出ねえかも……」

「人のこと心配しとらんで」

真一の言葉を遮る綾香。「あんたも早よ、仕事見つけりいよ。いつまでダラダラしとるつもりなん」

「う……」

弱点をつかれる。「い、一応探してはいるんだぜ。今週二つ面接受ける予定だし」

「へー」

綾香が疑いのまなざしを真一に向ける。

彼女の予想どおり、今週二つの面接を受ける、というのは真っ赤な嘘であった。

「とにかく」

再びマウスを動かし始める綾香。「あんた、アイドルマニアっちゃけん、自分の彼女がアイドルになって嬉しかる？」

彼女はSDPのスケジュールページを開いていた。

「馬鹿言えよ」

ハハハ、と笑ってみせる真一。「俺からしたら、お前なんてまだまだアイドルの器じゃねえよ」

ムツ、と彼を睨みつける綾香。しかし、彼は続ける。

「真一ランキングじゃあ、永遠に圏外だろうし、お前の写真集やDVDが出てても、そんなもんに金使うぐらいなら、どっかに募金でもした方がマシだわ。『恵まれない子供たちのために』ってやつな」

そこで彼は両腕を使い、ガードを固めるが、予想外にも拳が風を切る音は聞こえてこなかった。

「別にあんたに応援してもらわんでも、私は自力でブレイクしちゃあけん」

そう言いながら彼女はディスプレイを指す。それを見て「ん？」とディスプレイに顔を近づける真一。

「なんだよ」

「八月一日、秋葉原ポケットルームにて、カビリオonzのトークショーって書いてあるでしょ？」

彼女の言うとおり。書いてある。

カビリオonzといえば、確か若手のお笑いコンビだったはずだ。

「これにサプライズゲストとして出演することになったけん。実質のデビューイベント」

「ふーん」

八月一日といえば、あと一週間程度である。「お笑い芸人のファンなんて、女の子ばっかだろ？ そんなのに出演してどうするんだ」「うっん」

首を振る綾香。「その日は昭和のアイドルについて夜まで語りつくそう、って内容やけん、客はアイドルオタクのおっさんばっかやろっね」

「なるほど」

「ってことはまずは……。」

「まずはアキバの中年アイドルオタクを取りこんだる」

## 22 初めてのアキバ

家電量販店のカラフルなビルが幾つも立ち並び、世界有数の電気街として知られる町、秋葉原。近年ではアニメ、ゲーム、そしてアイドル、と様々なサブカルチャー分野のオタクたちが集う、オタクの聖地としてもお馴染みである。

「アニメフレンズで『スペースオクトパス』の原画を入手してきましたよ」

「マジですか？ 俺も今から行こうかな」

少女のイラストがプリントされた紙袋を手に持つ二人の青年が、何やら話をしている。そしてその様子をじろじろと観察する、ノースリーブのグリーンのシャツを着た少女。そう、池田綾香だ。

続いて彼女は逆の方向を見る。

「今日あのイベント何時からだっけ」

「三時だよ」

「うそ？ 玉置さんのサイン会とかぶってんじゃない」

こちらは女性だ。そのうちの一人はフリルのついたカチューシャを頭につけ、同じくフリルのついたエプロンドレスを身にまとい、いた。いわゆるメイドファッションというものである。

「おい。何をぼう、と突っ立ってんだ」

南吾郎が腰に手をあて、呆れたような口調で綾香に言う。彼は相変わらずの黒スーツ姿である。「しっかりついて来ないと迷子になるぞ」

そして彼は身をひるがえし歩き始めた。

口をとがらせながらも、渋々と彼の後を追う綾香。

JR秋葉原駅前。二人は、たった今電車から降り立っただけである。

「アキバってやっぱ凄いね。右を見ても左を見てもオタクばかり」  
南に追いついたところでそう言いながら、実際に右を見て、左を見る綾香。好奇心溢れる目つきである。

なにしろ、彼女にとって今回が初のアキバ来訪であった。

「あんまりじろじろ物珍しそうに見るなよ」

前を向いたまま南は言う。「お得意さまだ。失礼な態度は控えとけ」

「お得意さま？」

首をかしげる綾香。

「今やアイドルの人気でさえも、ここアキバから火がつくっていうパターンが増えてきたからな。お前がアキバ系たちに受け入れられれば、ブレイクできる可能性もうんと跳ね上がるだろう」

「ふーん」

そして綾香はまた周囲を見回した。「今日のお客さんって、オッサンばかりなんよね？」

南は「うーむ」と唸る。

「今日は昭和のアイドルを語って企画だからな。若干ご年配の方が多いかもしれんが……。まあ、オタクなんてどれもそう大して変わらんだろう」

その言葉を聞き、あんたのほう失礼やん、と綾香は思うのであった。

八月一日は猛暑日となった。おまけに午後二時前。太陽が、最もはりきって、町に熱をまき散らす時間帯である。十分ほど歩いたところで、綾香は「み、南さん。ちょっとタンマ」と前に行く南を呼び止めた。

「はあ、はあ……」

肩で息をする綾香。「もう暑くて暑くて……」

「ったく……。仕方ねえな」

呆れたように溜息を吐く南。「あんまり汗かくなよ。向こうにシヤワーはないぞ」

そう言う彼も、水に濡らしたタオルで、スキンヘッドの頭を伝う汗をせっせと拭っている。

「そんなこといっても……、っと」

軽い衝撃。どうやら通行人にぶつかってしまったようだ。「う、ごめんなさい……。あ！」

綾香が頭を下げたその相手は、外国人の若い男であった。彼も少女が描かれた紙袋を、両手に持っている。

「ソーリー」

「オ、オウ、ファインテンキュー！ スチューデンツ」

うるたえながら適当な英語で応対する綾香。そんな彼女を無視して、そそくさと歩き去ってしまう男。

やがて、彼の姿が見えなくなるのを待ってから、綾香は言った。

「さつきからやけに外国人見るなあ」

「世界規模でいえば、渋谷より有名な町かもしれんしな。そんなことより……」

そこまで言って、しげしげと綾香の姿を見つめる南。「今日は顔見せ程度の出演だから、私服で充分だと思っていたが……。衣装を用意しなければならんようだな」

「……」

綾香が着ていたシャツは、汗でびしょ濡れになってしまっていた。



## 23 別行動

再び、アキバの街を歩き始めた二人。大通りから細い小道へと入っていく。

「せっかくアキバに来たっちゃけん、色々と探索してみたいな」

隣を歩く南に綾香が笑いかける。大通りに比べて日陰が増えたためか、彼女は少し元気を取り戻していた。「メイド喫茶とか、フィギュアショップとか、けっこう楽しそうやない？」

「イベントが終わってからのんびり一人で回れ」

突き放す南。「リハーサルやら、メイクやら、やることはいくらでもあるぞ。三時間なんてあっという間だ」

イベントは五時からスタートの予定である。ちなみに綾香は六時からの登場だ。

「ケチ」

ぷい、と綾香は顔を背けた。「一人でメイド喫茶なんか行っでどろするんよ」

その台詞を言うと同時に、彼女は恋人である井本真一の顔を思い浮かべた。彼ならメイド喫茶にも興味を持つだろうな、という連想からである。

そういえば、アイツ。今日、どうするっちゃろ。

昨日、彼に「明日はいいよ私のデビューイベントやけど、あんたも観に来る？」と電話で確認したときは「そんなもん誰が行くか」と高笑いしていたが……。

「本当に来んつもりとかいな……」

思わず口に出してしまう。

「ん？ 誰が来るって？」

南のその声でハッと我に帰る綾香。ぎこちない笑顔で彼女は答える。

「い、いや……。友達がひよっとしたら、今日来れるかもしれない

らしいんで」

「？」

そんな彼女の慌てた様子を見て、南は不思議そうに眉をひそめた。実は恋人、井本真一の存在を、彼にはまだ伝えていなかったのだ。これからアイドルとしてデビューするわけなのだから『私の恋人はフアンの皆さまです』でなければならぬであろう。彼に真一の存在を知られたら、デビューの話もなかったことにされてしまうのではないか、と綾香は心配していたのだ。

やがて南が「ここだ」と一つの商業ビルを指差す。そのビルは六階建てで、奥行きがどれくらいあるのかは不明だが、正面から見た幅はかなり狭い。外観に、そこにテナントを持つのであるう、数々の店の看板が見えた。

「なんか……怪しいビルやね。大谷ビルと同じくらい」

「黙っとけ。この地下に『秋葉原ポケットルーム』がある。カビリオンズはもう来てるらしいから、挨拶を済ませとけ」

「ええー!？」

南の意外な言葉に驚く綾香。「あ、あんたは一緒に来んと?」

「後で行く」

彼は既にその場を離れようとしていた。「今のうちにお前の衣装を買ってくるから。お前一人で先に入っとけ」

「ええー!？」

「じゃあな」

困惑する綾香を気にもとめず、彼は片手を軽く上げ、あつという間に雑踏の中に消えていった。

ポツン、と一人とり残される綾香。

さ、先に一人で入っとけ、って……。

南が去っていった方角から、ビルの入り口へと視線を移す。入り口の奥にある小さなエレベーターホールに、人の姿は全くなく、三

時間後に、ここでトークショーが行われるなどは到底思えない。  
しかし……。

「ん？ これは」

入り口付近に貼られたB4サイズのポスターの存在に気づく。そこには、なぜか上半身裸の男性二人が、こちらを睨みつけている写真が掲載されていた。その写真の横の、コピーを読んでもみる。

『カビリオンス トークショー 昭和のアイドルを語り明かします 八月一日午後五時より開演』

昭和のアイドルねえ……。

彼女は今更ながら不安になった。井本真一に『まずはアキバの中年アイドルオタクを取り込んだる』と豪語したはいいものの、昭和のアイドルをこよなく愛するご年配の方々に、はたして自分が受け入れてもらえるのかどうか。

あ……。

その時、ポスターの右下隅あたりに、もう一つ文章を発見する。

『サプライズゲストとして、今世紀最注目 of 新人アイドルが登場予定！ 衝撃の瞬間を見逃すな！』

「今世紀最注目 of 新人アイドル……？」

ぼんやりと文面を読み上げながら、彼女の顔から血の気が引いていった。

ハ、ハードルが無駄に高い……。

## 24 階段の先には

外からは見えなかったが、エレベーターホールの脇に、地下へと伸びる急な階段があった。そして、綾香の頭よりやや上の位置、階段入り口の少し手前の壁に『秋葉原ポケットルーム』という文字の並んだ看板が掛けられてある。その看板を見上げながら、彼女は大きく深呼吸をした。

ここから降りればいいっちなね。

薄暗く、狭い通路だった。足元をしっかりと確認しながら、一步慎重に階段を下っていく。

やがて階段が平地に変わり、目の前に扉が現れた。扉には、またまた『秋葉原ポケットルーム』の文字。そして開場前だけあって『関係者以外立ち入り禁止』の文字。

わ、私は関係者やもんね。よし……！

意を決し、扉を開ける。同時に、パツと視界が開け、身体中に涼しげな風を感じた。どうやら、しっかりと空調が利いているようである。

「ここが……」

キョロキョロとその空間を見回しながら、綾香は思わず一人呟いていた。「ここが、秋葉原ポケットルーム？」

二十畳足らずのフロアの向こうに、無人のステージが見える。オレンジ色の心地よい照明が、スピーカーやマイクスタンドといった機材たちの影を、ぼんやりと浮かび上がらせていた。

「ちよつとちよつと」

突然肩を叩かれ、綾香はハツとして振り向いた。そこに、茶色の髪を腰ほどまでに伸ばした、三、四十代ぐらいの中年男性の姿があった。訝しげな顔で綾香を見る、彼の後ろにも『秋葉原ポケットル

ーム』のスタッフと思われる男性が数人いた。

「あ、えーっと、綾……。えーと」

自己紹介しようとするも自分の芸名をど忘れしてしまう綾香。綾川チロリ、である。

「あなた、綾川チロリちゃん？」

相手に先に言われてしまった。

「あ、ハイ！ それです」

「それって何よ」

腕を組み、呆れたような表情を浮かべる男。綾香はその男の顔をまじまじと見つめた。

「……」

「ん？ あたしの顔に何かついてる？」

こ、この人化粧してる……。

いわゆるオネエ系の方らしかった。

『彼』はこのイベントハウスのマスターで、三沢と名乗った。彼に連れられ、ステージ脇の細い通路を歩く綾香。すぐに『楽屋』と書かれたドアに到着する。

「それにしても」

ドアの前で立ち止まり、値踏みするような目で綾香の全身を見ながら、三沢は言う。「随分と汗っかきな今世紀最高のアイドルねえ……」

少しムツとする綾香。

「そんなん」

彼女はツンと顔を背けた。「勝手にあんなポスター作ったヤツが悪いんです。私、自分でそんなこと一度も思ったことないですから」

「怒らないで。冗談よ、冗談」

ホホホと笑い、それから三沢は目の前のドアを指し示した。「それじゃあ、とりあえずリハーサルまでここで待っててね。カビリオ

ンズも中にいるから」

それだけ言い残し、彼はフロアの方へ、またホホホと笑いながら戻っていった。

カビリオンズ……。あのポスターに映っていた二人組か。

ドアに書かれた『楽屋』という文字を見つめながら、綾香は若干の緊張を覚えていた。

お笑い芸人っていつても、一応事務所の先輩なんよね。キチンと挨拶せんと……。

「こんにちはー。いや、違うか。初めましてー、新人アイドルの綾谷……川チロリです……。いや、お疲れさまです、かな普通」

小声で挨拶の練習をする彼女。

あー、もう！ どうにでもなれ！

覚悟を決め、ドアノブをつかみ、思いっきり引く。ボタンと音を立てドアが開き、そこに先ほどポスターで見た二つの顔が並んでいるのを確認すると、彼女は深く息を吸い込み、挨拶を始めた。

「こんにちわー、じゃなくしてお疲れさまでしたー！ 今日からお世話になります。池田……。綾川チロリです！ えーっと……。どうもでしたー！」

ボタン。

そしてまた彼女はドアを閉めたのであった。

## 25 楽屋にて

『秋葉原ポケットルーム』内の三畳程度しかない小さな楽屋で、二人の男性が笑い声を上げる。そして彼らの前で正座をするのは新人アイドル綾川チロリこと、池田綾香。

「す、すみません……」

深々と頭を下げる彼女。「緊張で何がなんだか分からなくなっちゃいました」

「緊張なんかしなくていいって」

その言葉と同時に、彼女は頭を上げる。声の主は、カビリオンズの一人、野田誠であった。ぼっちゃん刈りと、人の良さそうなタレ目特徴的である。「なあ？」

彼が隣の男性に同意を求める。同じくカビリオンズの、松岡キャッツだ。

「ああ。俺ら、もう三十過ぎてるけど、まだまだこの世界じゃ若手だしな」

髪の毛をツンツンに立てており、淡いブルーのサングラスをかけている。野田が、地味な白いティーシャツを着ているのとは対照的に、こちらは夏だというのに、派手に黒光りする革ジャンを着用していた。

「それにしても」

綾香から目を離し、壁に取りつけられた姿見を覗き込む野田。「今世紀最注目アイドルっていうから、どんなのがくるかと思ったけど……。まさかこんな庶民的な子だったとはな」

「失礼だろうがよ」

そう言いながら、野田の頭をはたく松岡。その光景を見ながら、綾香は冷静に分析した。

野田さんがボケで、松岡さんがツッコミか……。

三人で他愛のない会話をすること二十分。突然、楽屋のドアをトントン、とノックする音が聞こえる。

「どうぞ」

野田がそう言うと、ゆつくりとドアが開き、サングラスをかけたスキンヘッドの大男が、のそつと顔を覗かせた。南吾郎である。

「お疲れっす」

彼が挨拶をし、カビリオンズの二人がそれに答える。それから南は部屋の隅で体育座りをする綾香に目を向けた。「よお、おとなしくしてたか？」

「しとつたよ」

口を尖らせる綾香。「衣装、買ってきたの？」

「ああ」

片手に持った紙袋を掲げながら、南は頷く。「リハーサルの後でゆつくり着替える。メイクも、後で俺がやってやる」

「え!？」

綾香は驚いて声を上げた。それから眉をひそめ、彼に尋ねる。「メ、メイクって……。あんたが？」

「安心しなつて」

野田が間に入る。南から彼へ視線を移す綾香。「うち(SDP)はまだまだ弱小事務所だからね。メイクさんもスタイリストさんもない、今日みたいな小さなイベントが多いんだよ。そんな時のために、南さんがある程度はメイクや衣装の知識を身につけてるんだ。彼の腕は確かだよ」

その言葉に、彼の隣で腕を組む松岡もうんうん、と頷いた。「……………」

無言で南に視線を戻す。彼はなぜか口元にニヤリと笑みを浮かべた。

あ、あんた。いったい何者……?」

だから、SDPのスカウト兼マネージャーである。



それからすぐに、カビリオンスが打ち合わせのためにステージへ向かったため、綾香と南の二人が楽屋に取り残されることとなった。「ねえ、今何時よ」

先輩が去り、緊張が解けたのか、綾香は足を伸ばし、うんとリラックスした体勢に変わっている。

「ぼちぼち三時だな」

姿見の横にある、小さな棚に置かれたデジタル時計を見て、答える南。こちらは壁に寄りかかり、あぐらをかいている。「会場まで一時間半、開演まで二時間、お前の出番まで三時間だ」

「だあー！」

けだるそうにそう叫びながら、綾香はぐったりと横になった。「こんな息苦しい地下室で、どうやって三時間も過ごすんよ」

「リハーサルだってあるし、着替えやメイクだってある。それに……」

そこで言葉を切る南。綾香は身体を起こし、彼の顔を見た。

「それに……。なんよ？」

「最後にお客さんに向かってお前が一人で挨拶をする予定となっている。その内容をしっかり考えておくことだ。お客さんのハートをガッチリ掴むことができるようなな」

天井を見上げ、「うーん」と唸る綾香。

アイドルオタクのおっさんたちのハートをガッチリ、ねえ。

## 26 イベント開演

「いやー、アイドル歌手の王道といえはやっぱり工藤直子でしょう」「そうきましたかー」

観客から「おおー」と、どよめきの声上がる。中には拍手をする者もあり、イベントは大盛況といったところか。ただ、そのイベントを冷めた目で見つめる一人の青年が……。

はあ、来るんじゃないよ。

フロア最前列に陣取った橘川夢多は、溜息を吐くとステージから目を離し、真つ暗なホール内を見渡した。その行動に特に意味はないはずだったが、ひよっとしたら好きなお笑いコンビの醜態をこれ以上観たくはなかったのかもしれない。

そう、彼はカビリオンズの大ファンであつた。まだ学生ではあるものの、バイトで金を貯め、せつせと彼らのイベントに足を運んでいる。今日も、ここ『秋葉原ポケットルーム』で彼らのトークショーが催されると知り、意気込んでチケットを購入したのだが……。まさか、本当に昭和のアイドルを語るだけとはなあ。

再びステージ上のカビリオンズに目を向ける橘川。

「ところで、学生時代に一度、椎名ゆい子さんのイベントに参加したことがあるんですけど」

「おお、あのユイユイのイベントに？」

サワ、とどよめく場内。しかし、橘川の口からこぼれるのはやはり、深い溜息ばかりだ。

つまらない。ボケもない。ツッコミもない。

周りの客は皆、橘川より十も二十も歳が離れた中年男性ばかりである。彼らの目当てはカビリオンズの笑いではなく、昭和のアイドルという題材なのだ。

被っている黒い野球帽のつばを下げる橘川。やはり観たくはないのだらう。

ずっと立ちっぱなしで足も痛くなってきたし、もう帰ろうかな……。  
そう考えて、彼が出口へ向かいかけたその時。彼の足に何かを踏みつける感触が。

「いて！」

踏みつけたのは隣の客の足であった。即座に頭を下げる橘川。

「す、すみません。ぼーっとしてまして」

「いや、まあ大丈夫」

そう言って苦笑する、相手の顔を窺ってみる。橘川と同じく、野球帽を被った男で、丸く大きなサングラスをかけている。若そうにも見えるが、鼻の下にたくわえた立派なヒゲを見る限り、やはり彼も橘川よりだいぶ年上なのかもしれない。

「それじゃあ、僕は失礼します」

そそくさと、その場を離れようとする橘川を……。

「え？ ちょっと」

ヒゲ男が止める。「なに？ もう帰っちゃうわけ？」

「え？」

足を止め、眉をひそめる橘川。「そうですけど？」

「いや、なんでだよ」

なぜか慌てた様子で男は言う。「これから面白いエピソードとかたくさん聞けるかもしれないじゃん。それにほら、新人のアイドルの子が出てくるとかなんとか。もう少し観ていきなっ！」

橘川は疑問に思った。この男はなぜ、こんなにも必死になって自分を引きとめようとするのだろうか。

「いや、アイドルとか興味ないんで」

「そう言わずに！ な？ もう少しだけ」

両手を合わせ頭を下げるヒゲ男。

「……………」

橘川は戸惑いながらも「そこまで言うなら」と、仕方なくその場に残ることとした。そして、嬉しそうに「そここなくっちゃ」と笑う、男の顔をまじまじと見つめながら、彼は思う。

イベントスタッフかなんかならうな。

「お？ そろそろお時間ですか？」

イベント開始から一時間ほど経過したところ、ステージ上の野田が突然松岡にそう尋ねた。いや、尋ねたというよりも、確認したというニュアンスに近い。

「おお！ そんなじゃあそろそろ行きますかー？」

松岡が観客に向かってそう言った途端、会場が一気に湧き始めた。拍手も起こり始めたので、橘川も拍手をするフリだけはしておく。

これから何が起こるのか、彼だつて一応分かつてはいるのだが、どうも熱が上がらない。いやむしろ、冷めていくばかりだった。

新人アイドルなんて……。どうせ何も面白いこと言えないんだろ。野田が舞台袖まで歩き、おそらくそこに控えている新人アイドルに向かって話しかけた。

「準備はオーケー？ そろそろ……」

そこでなぜかプツとふき出す彼。「おい！ なんだよそれ」「？」

その様子を見て不思議に思い、顔をキョトンとさせる橘川。

なんだ？ どうしたんだ？

「えー、それじゃあ気を取り直して紹介いたしましょう！」

そう言うってから、野田は再びステージの中心に戻り、舞台袖を注目するよう、観客を手で促した。「今世紀最注目新人アイドル、綾川チロリちゃんです！」

その瞬間、会場内に一際大きな拍手の嵐。それに続いて、爆笑の嵐が巻き起こるのであった。

爆笑の渦の中、ステージの中心に立った新人アイドル、綾川チロリは、緊張の面持ちのまま、マイクを持つ左手を腰に、右手をチョキにして額にあて、ポーズを作った。

そして彼女は叫ぶ。

「新人アイドルの、……川、……ロリです！」  
が、よく聞き取れない。

「チロリちゃん」

そんな彼女に野田が一言。「マイク使わないと聞こえないから再び笑いが起こる。野田のその言葉にハツとした顔を見せたチロリは、すぐさま左手のマイクを口元に持っていき、改めて挨拶をした。

「す、すみません。新人アイドルの綾川チロリです」

「おいおい、グダグダだなあ」

松岡が苦笑する。そんな彼にまた「すみません」と謝るチロリ。しかし、彼女のその姿は、どう見てもふざけているようにしか見えなかった。

なぜなら、彼女はピンクの豚の着ぐるみを着ていたからである。

「いやー、出てきた瞬間お客さんも笑ってましたけど、その着ぐるみはなんなの？」

野田が豚の顔ではなく、チロリの顔に向かって尋ねた。チロリの顔は豚の口の部分であり、彼女の額の上あたりに、まるでエンブレムのように豚の鼻が付いていた。

「あ、えーと」

自分の頭をポンポンと叩くチロリ。「私、博多出身ですけど、ほんこつラーメンをイメージしてみたとすばい」

やたらコテコテナ博多弁である。

「なるほどねー」

苦笑しながら野田は言う。納得したわけではなさそうだ。「でも、パツと見、豚に食われかけてる人みたいに見えるねー」

その発言でまたホール内が湧く。綾川チロリも「そうですね」と笑顔を見せていた。

橘川は目をこらし、綾川チロリの顔を観察した。

まあまあ可愛いのかな。

化粧つ気の少ない、素朴な雰囲気……。それは、ずばり彼好みのルックスであった。

ふと隣のヒゲ男に視線を移す。先ほどから彼は、なぜかずっと静かにステージを見つめたままで、拍手すらもしていないようである。俺が帰るのを引き止めたくせに、自分はちっとも楽しそうじゃないじゃないか。

橘川が心の中でそう呟いたとき、ようやく彼の視線に気がついたか、ヒゲ男が「ん？」と彼に顔を向けた。

「どうしたよ」

「あなた、さつき俺が帰るのを引き止めたくせに、自分はちっとも楽しそうじゃないじゃないですか」

心の中と同じ全く内容の台詞を吐く橘川。

「あ？ あ、ああ」

なぜかうるたえた様子のヒゲ男。「いやー、ちよっとばおっとしちゃって。あまりに可愛くて……」

「可愛くて？ 可愛いって……」

橘川は目を丸めた。そしてステージ上のチロリをチラッと見てから、再びヒゲ男に視線を戻す。「まあ、僕も可愛いとは思いますが、そんな見惚れることはないでしょう？」

「いや、なんていうかギャップがさ……」

「ギャップ？」

「ああ、それはまあなんだ。こつちの話だ」

どうにも歯切れの言葉である。橘川の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

「いったいななんだ？　なんか分かんないけど、もうこの人に関わるのはよそう。」

そして彼は男からステージへと視線を戻すのであった。

ステージ上では綾川チロリを加えた三人で、またもや昭和アイドルのトークを繰り広げていた。

「チロリちゃんはあるまり昭和のアイドルとか分からないでしょ？」

松岡がチロリに尋ねる。

「そげなこつなかですばい（そんなことありませんよ）」

首を振るチロリ。「大沢みゆきさんとか三井あかねさんとかは、私もすごく尊敬しとりますたい」

「おー、と観客から感嘆の声。」

「へー、けっこうマニアックなアイドルの名前がでてきたねー。親御さんの影響かな」

今度は野田だ。チロリはカビリオンスの二人に挟まれた状態なので、先ほどからキョロキョロと忙しく、左右に顔を動かしている。

「いえ、今さつき勉強しておきましたばい」

「おいおい！　それ言っちゃダメじゃん」

どっ、とまた場内が湧く。それと同時に、橘川も少しだけ口元を緩めた。

綾川チロリか……。けっこう面白い子だな。

少しずつ……。

少しずつだが新人アイドル、綾川チロリに橘川の心は奪われ始めていた。

## 28 最後の最後で

「いやー、チロリちゃんみたいな後輩ができて大変だなあ」

「ええー。そんなことないでしょう」

カビリオンスが上手くトークを誘導してくれるおかげで、落ち着きを取り戻す綾香。しかし、いざ視線をフロアに移すと……。

自分に注目する無数の男たちの存在に改めて気づき、再び落ち着きをなくしてしまう。ステージに上がってからずっとその繰り返しだ。

リハーサルの際は全然緊張せんかったのに、やっぱり本番は一味違うな。

そんな当たり前のことを考えながら、綾香は着ぐるみに包まれた身体をもぞもぞと動かした。

「どうしたの？」

野田が笑顔で綾香に尋ねる。「背中かゆいの？ それ、暑そうだもんね」

凶星である。

「は、はい。ちょっと……」

綾香も笑顔で返した。しかし心の中では……。

ちよっとなんてもんじゃない！ まるでサウナに入っとうみたいやん！

全身から汗が噴き出すのを自覚しながら、彼女はホール内のどこかでこのイベントを観ているのである。南の顔を思い浮かべた。

くそ、南のヤツ……。よりによってこんな衣装買ってきやがってまあ、これのおかげで『あれ』を編み出せたのは確かっちゃけど……。

「綾川チロリってのは芸名だよな。由来とかってあるの？」



野田の『イジリ』は続く。

「あ、はい」

頷く綾香。「そ、そうですね。綾川つてのは本名をもじったもので、チロリつてのは」

綾香がそこまで答えた時、彼女の耳元で松岡が「博多弁忘れてるよ」と囁いた。

「あ！ チ、チロリつてのはですたいねー……。もともとデビューする予定やった友達の名前を……」

自分でそう言いながら綾香は思う。

博多弁つてこんなんやつたっけ？

博多出身のとんこつアイドルというキャラ作りのために、南から『なるべく博多弁で喋れ』と忠告を受けたのだが、博多弁を意識すればするほど、おかしな言語を口にしてしまう。実際は博多弁も長崎弁もさほど違いはないはずなのに。

「へー」

彼女の芸名の由来を聞き終えた野田は興味深そうに頷いた。「じやあ元々は友達が今世紀最注目アイドルだったわけだねー」

そこでまた観客が湧く。もはや綾香を今世紀最注目の新人アイドルとして見ている客は皆無であろう。

「それじゃあ、そろそろチロリちゃんはこちらでおいとまして頂くわけですけど」

野田のその言葉に綾香は一層緊張感を高めた。「最後に何かお客さんに言っておきたいことでもあれば、どうぞ」

つ、ついにこの時がきた……！

「は、はいですたい」

大きく深呼吸をし、彼女は一步前に出る。「さ、最後に一発ギャグをやります」

どうすれば、昭和アイドルオタクの中年たちのハートを掴むこと

ができるのか。綾香が出した結論は一発ギャグであった。秀逸な一発ギャグが多数生まれ、昭和の時代。その時代を生きた彼らは、何よりも一発ギャグを望んでいる、と綾香は踏んだのだ。

「おおー！ それじゃあ、お願いします」  
パチパチパチパチ。

野田が拍手をし、観客の注目を促した。そして観客からも拍手。よし！ 行けばいい！

綾香は背筋をピンと伸ばし、頭を深々と下げながら言った。  
「ありがとんございました！」

シーンと静まりかえる場内。やがて、ところどころでざわめきが起き始める。

「えーと、今のは……。一発ギャグ？」

野田に尋ねられ、綾香は頭を上げた。

「は、はい。ありがとんの『とん』を豚とかけたんですけど……。着ぐるみ着てるし」

自分の頭、すなわち豚の顔を指差す綾香。

ざわざわ。

「ああ……」

困惑したような表情を浮かべる野田。「ち、ちょっと分かりにくかったかもねえ」

ざわざわ。

滝のように全身を流れ落ちる汗が、冷や汗へと姿を変えた。綾香はじっと野田の顔を見つめ、彼に無言で訴えかける。

もう、早く帰らせて……。  
ざわざわ。

「五点だな」

指をパーにし、5の数字を作りながら、南吾郎は言った。場所は『秋葉原ポケットルーム』の楽屋内。ステージではまだカビリオンのトークショーが続いている。

「五点って……」

キョトンとした顔の池田綾香。「十点満点中の？」

「いや、百点満点中だ。綾川チロリのデビューイベントは百点満点中の五点だ」

キツパリと断言する南。そんな彼の態度に綾香は少しムツとしながらも、何も言い返すことはしなかった。

彼女自身、今回のデビューイベントに満足できてはいないのだ。

「はあー、なんか自信なくしちゃった」

横になって伸びをする綾香。彼女はピンクの豚の着ぐるみから、ラフな格好へと着替えていた。上は『カビリオンス』と英語で書かれた白いティーシャツ、下は彼女が家から履いてきたローライズ気味のジーパンである。

「まず、博多弁だ」

彼女を気にもとめず、楽屋の隅であぐらをかきながら説教を続ける南。「もともと同じような方言で喋ってるくせに、なんで舞台上になるとあんなにぎこちなくなるんだ？」

「あー、あー。聞こえないーい。聞こえない」

両手で耳をふさぐ綾香。

「次に目線」

そう言いながら南は彼女のわき腹あたりを足で軽くつついた。綾香が「うっ」と声を漏らす。「もっと客を見て喋れ。照明ばかり見

てどうするんだ。そんなんじゃ、射止められるハートも射止められないだろう」

「そんなこと言われても、恥ずかしいっちゃもん」

「恥ずかしいってお前、あんなだけ恥ずかしい格好（豚）しておいて今更それはないだろう」

「あんたがさせたつちやろうもん！」

身体を起こし、怒鳴る綾香。そして部屋の隅に無造作に置かれた豚の抜け殻を指差す。「もっとマシな衣装なかった？ どこにデビューイベントであんな着て出てくるアイドルがおるとよ！」

「お前みたいな華のないアイドルは、インパクトで勝負するのが一番なんだよ」

そこで口元に笑みを浮かべる南。「まあ、俺のメイクのおかげで、お前の華のなさもちよっとはマシになったただろっけどな」

綾香は口をとがらせながら、壁の姿見に目を向けた。

まあ、それは否定せんけどね……。

南が彼女に施したメイクに関しては、彼女もそれなりに気に入っていた。いつも自身で行うものとは違い、マスカラ控え目のナチュラルメイクである。それなのにしっかりと一重まぶたの目を際立たせ、低い鼻を高く見せている。これだけ見事なメイクを、南はもの十分程度で仕上げてしまったのだ。

「メイクの腕が確かつてのは本当なんやね」

南に視線を移す彼女。「今度プライベートでもやってよ」

「無論、断る」

間髪いれずに南。と、その時、楽屋の扉がトントンとノックされた。

「お取り込み中ごめんなさい」

扉の向こうから顔を出したのはホールのマスター三沢であった。

「アンケートが幾つか届いたから、先に渡しておくわよ」

「アンケート？」

南が眉をひそめながら言う。「だってイベントはまだ続いてるんでしょう？」

アンケートといっても本日のイベントに関する簡単な感想のようなもので、客にホールを出る際、書いてもらうことになっていた。「それがねえ」

苦笑する三沢。「チロリちゃんの出番が終わった途端、何人が帰っちゃったの。一応、今世紀最注目新人アイドルが目当てだったお客さんもいたみたいね」

「み、見せてください」

立ち上がり、三沢からアンケート用紙を受け取る綾香。そして彼女はふうと大きく深呼吸をした。

私のこと、なんて書かれとるんやろう……。

アンケート用紙は全部で四枚。彼女は、一番上に置かれたアンケートからおそろのおそろ黙読してみた。

<年齢と性別> 三十代男性 <満足度> 微妙  
今世紀最注目というわりには普通でした。

「うっ……」

さっそくの低評価に、思わずくらくと立ちくらみしてしまう綾香。「やっぱり、お気に召さなかったようだな」

「わっ！」

いつの間にか、彼女の頭上から南もアンケートを覗き込んでいた。「ビックリさせんでよー！」

「いいから、次行け。次」

「言われんでも分かつとっよー！」

彼女はまた深呼吸をし、震える手つきで一番上のアンケートをめくり上げた。そして二枚目のアンケートに目を通し始めた瞬間……。

こ、これは……。

彼女の表情は一気に明るくなるのであった。

「に、『二十代男性、満足度、大満足』！」

興奮のあまり、思わず読み上げてしまう綾香。「『チロリちゃんに一目惚れしてしまいました。今度から応援しますので頑張ってください』」

「凄いいじゃない！」

三沢が身体をくねらせながら声を上げる。「ファン第一号ね」

「ふふん」

鼻で笑い、綾香は南にしたり顔を向けた。「私の魅力に気づいてくれた人もおるみたいよ」

しかし、南の表情は変わらない。

「今日のターゲットは中年オタクだろう？ 二十代に気に入られたからって図に乗るな。早く次に行け、次」

「ふん」

顔を背け、またアンケートをめくる。「えーつと次は……。『三

十代男性、満足度、大満足』……！」

「なに！」

南は綾香からアンケートを取り上げた。

「ちよつと！ 返しいよ！」

「ふむふむ。『最高でした』と」

綾香を無視し、アンケートを読み上げる彼。「『チロリちゃんは今世紀最注目の名に恥じない素晴らしいアイドルだと思います。今まで僕が見てきたどんなアイドルよりも可愛かったです。トップアイドルを目指して頑張ってください』……。お前……」

アンケートから目を離し、綾香に顔を向ける。「これ、自分で書いたろ？」

「私、そんな時間なかったらうもん！」

今度は綾香が、彼からアンケート用紙を引ったくった。

「うーむ」

難しい顔で唸る南。「二枚目なんかは特にベタ褒めしすぎな感もあるが、お前のダメダメな姿が一部の層に受け入れられた、ってこともあるか……」

「いわゆるドジっ子ってやつね」

三沢が綾香に向かって補足する。「ここ、アキバだから。チロリちゃん、需要あるわよ」

ドジっ子かあ……。

秋葉原という街が、もの凄く好きになってしまった綾香であった。

「そんじゃ、お前はもう帰っていいぞ」

南が楽屋を出ながら綾香に言った。「次は……。そうだなあ、二日後の三日の日に事務所まで来い。今後の仕事について話がある。

午後三時だ、遅れるなよ」

「あんたはまだ帰らんと?」

キョトンとした顔で綾香が尋ねる。

「カビリオンズとも次の仕事の打ち合わせがあるからな。イベントが終わるまで待ってる」

「え?」

意外な彼の言葉に驚く綾香。「なんで? カビリオンズのマネージャーもあんたなん?」

「今月まではな」

頷く南。「来月からはお前の活動も本格的になるから、お前専属になる予定だ」

そう言い残し、彼はフロアの方へと歩いて行ってしまった。そして、それに三沢が続く。

「じゃあね綾香ちゃん」

脇をしめ、可愛い仕草で手を振る三沢。「良いアイドルになるのよ」



「あ、ありがとうございます」

頭を下げ、彼を見送ってから、綾香はふうと一息吐いた。それから控え室のドアを閉め、ゴロンと仰向けになる。

っ、疲れたあ……。

こうして綾香の初仕事は無事成功？に終わったのである。

「ふんふんふんふん」

控え室で一人、鼻歌を歌いながら帰り支度をする綾香。「ふんふん……。あ！」

そんな彼女の視界に、ふと棚の上に置かれた先ほどのアンケート用紙が飛び込んできた。

そういえば……。全部で四つアンケートあったとよね。最後の一枚見とらんやん。

そう考え、アンケートを手に取る彼女。最後の一枚に目を通してみる。

えーと、なにになに……？

<年齢と性別> 四十代男性 <満足度> 全然  
消える。目ざわり。

「……」

数秒間、呆然とその用紙を見つめた後、彼女は棚のデジタル時計へと視線を移した。時刻は七時前である。

……。こんな街さつさと出よう。

秋葉原という街が、もの凄く嫌いになってしまった綾香であった。

### 31 ヒゲの下には

「お待たせいたしました、ご主人さま」

髪をツインテールにし、エプロンドレスを身にまとった若い女性店員が、テーブルの上にストローのささった二つのアイスコーヒーを並べた。橘川はさっそくその一つを手に取り、ストローに口をつける。

「ごゆっくりどうぞ」

店員は盆を両手にニツコリと微笑み、頭を下げると、優雅な動作で身をひるがえし、店の奥へと帰っていった。

「なんだよ。メイド喫茶つつつても、店員がメイドの格好してて、『ご主人さま』って言うだけなんだな」

向かいに座るヒゲ男が、つまらなそうに言う。彼はだらしくなく背中を椅子の背もたれに寄りかからせていた。

「中にはもっとディープな店もありますよ」

一方、背中を丸め、テーブルにひじを置いている橘川。こちらはこちらでだらしが無い。「この店は店員さんが皆ツインテールなのがウリみたいです」

「全然メイドと関係ねえな」

店内を見回しながら、ヒゲ男は苦笑した。

彼らは『秋葉原ポケットルーム』から徒歩五分の場所にある、メイド喫茶『ツインテール』にいた。

綾川チロリの出番が終わってすぐに、二人は揃って『秋葉原ポケットルーム』を出た。そしてそのまま帰ろうとするヒゲ男を、橘川が引きとめた。

途中でホールを退場しようとしかけた自分を引きとめ、綾川チロリというアイドルにめぐり合わせてくれたことに対し、橘川はどう

しても彼に礼をしたかったのである。

そして、礼をしたいと同時に、話も聞きたかった。

ホールでの彼の様子が、まるで彼がチロリを始めから知っていたかのように、橘川には見えた。ひよっとしたらチロリについて色々な話が聞けるかもしれない、と彼は考えたのだ。

そう、彼は完全に綾川チロリに心を奪われてしまったのである。

チロリの何に魅力を感じるのか、彼自身にもよく分からない。今までお笑い芸人ばかりを追いかけていた彼にとって、初めて生で見たアイドルという存在が、新鮮に見えたのかもしれない。

「奢りますのでどこかの店に入りましょう」という彼の誘いに、最初は渋っていたヒゲ男だったが「じゃあ、メイド喫茶なら考えてやってもいいぜ」と結局、乗ってくれたのだった。

それにしても……。

橘川はストローをくわえながら、気づかれないように男の顔を垣間見た。

この人……。ヒゲは立派だけど、肌は明らかに若いよな。おまけに金髪だし。

暗いホールの中ではよく見えなかったが、彼は金色に染めた髪を後ろで結び、その上に帽子を被っていたのだ。

「あ、あの……」

思いきって尋ねてみる。「歳はお幾つなんですか？」

「歳？」

眉をひそめ、そう聞き返すも、すぐに「ああ」と頷くヒゲ男。「えーっと。さ、三十五とか……。その辺だ」

「三十五？」

今度は橘川が眉をひそめる。そして男から目を離し、一人考え込む。

三十五って……。本当か？ 俺と同じ年ぐらいにも見えるぞ。で

も、確かにそれぐらいの歳で若く見える人はいるし。カビリオンスだつてそうだよな……。

そう納得しかけた時、ヒゲ男がふうと溜息をつき、チツと舌打をした。

「分かったよ」

「え？」

キョトンとした顔になる橘川。そんな彼を気にせず、男は帽子を取り、サングラスを外し、そしてヒゲまでもをビリビリと剥がし始めた。「え？ え？」

つ、付けヒゲ……？

何かなんだか分からない。橘川は、ただただその光景をうるたえながら見つめるばかりである。

やがて男は、着けていた小道具たちをテーブルの隅に置き、「ほらよ」と不貞腐れたような口調で言った。

口をあぐりと開ける橘川。

たった今までヒゲ男だった人物は、奇麗なマスクを持った、若い青年に変身してしまったのである。

「変装……」

数秒の沈黙の後、橘川はハッと気がつき、口を開いた。「変装してたんですか!？」

「まあな」

再び帽子のみを被る元ヒゲ男。「ちよつと事情があつてよ。まあ、そんなことよりお前、なんて名前だ？」

「え？ 橘川ですけど」

「そうか」

そう言つて彼は右手を差し出す。「俺は井本つて言うんだ。同じ

綾川チロリファン同士仲良くしようぜ、橘川」

そしてニヤリと笑う。

「は、はあ……」

頭を混乱させながらも、橘川も右手を出し、彼と握手を交わした。やっぱり、この人とは関わらない方が良かったのだろうか……。

### 32 逃亡者

「実はさ」

ストローでアイスコーヒーをかき混ぜながら井本は言う。「俺、綾川チロリとちよつとした知り合いなんだよ。でも、知り合いが観に来てるって分かったら、あいつ、意識しちゃうかもしんねえじゃん」

「なるほど」

橘川はもうアイスコーヒーを飲み干しており、彼のコップの中には解けかけの氷しか残っていなかった。「それで変装してたわけですか……。でも、変装なんてしてる人、初めて見ましたよ」

「そうか？」

とぼけた顔をする井本。「今日街の中でちよこちよこ見かけたぞ？」

いや、コスプレと変装はちよつと違うと思うけど……。

「まあ、ビックリはしましたけど……。あなたが俺を引き止めてくれたおかげで、チロリちゃんと出会うことができたんですから、感謝はしてますよ」

橘川はとりあえず彼に礼を言うておくことにした。

「まあな」

満足気な顔で井本は頷く。「周りオツサンばっかだったし、お前みたいな若い客に帰られたら、あいつもますますやりにくくなっちゃうだろうからな。まさか、そんなにあいつを気に入ってくれるとは思わなかったけど」

「いやー、チロリちゃん最高ですよ」

悩ましげに、ゆっくりと首を振る橘川。「あの舞台にあの格好で出てくる度胸も素晴らしいし、あのエセ博多弁はどうかと思うけど

トークもいけてるし、そして何より！ あの自然体なルックスですよ」

「自然体？」

不可解そうに眉をひそめる井本。

「はい。俺、化粧でごまかしてるような女が大嫌いなんですよ。マスカラとかつけまくってね。それに比べてチロリちゃんは全く化粧気がなくて……。あれ、ほとんどノーメイクでしょ？」

「ああ、それは……」

そこで井本はなぜか言葉を詰まらせる。「まあ、そうなのかもな」「かー、羨ましいなあ井本さんは！ あんな子と知り合いだなんて橘川はまた首を振った。「でも安心してください。紹介してくれなんて言いませんよ。俺はあくまで一ファンとして彼女を見守っていききたいだけですから」

そして真剣な眼差しを井本に向ける。

井本はひきつった笑みを浮かべ「サンキュー」と答えた。

「そういえば」

あることを思い出した橘川。「イベントの途中で、チロリちゃんについてギャップがどうのこうのとか言っていましたよね。普段のチロリちゃんはどんな感じなんですか？」

「え……！？ そ、そうだな」

アイスコーヒーをかきまぜながら「うーん」と唸る井本。橘川は胸をわくわくさせ、彼の返事を待った。「まあ、普段も可愛いんだけどさ……。今日は普段以上に可愛く見えたというか……。ギャツプっていつでもその程度なんだけど」

やたらと歯切れの悪い口調である。しかし、橘川は気にしない。

「なるほどねー」

うんうんと頷く彼。「やっぱチロリちゃん、ステージ映えるタイプなんだろーな！。あー、プライベートのチロリちゃんが気にな

る！ でも、俺は我慢しますよー。アイドルにもプライベートなのは必要ですからねえ」

やたらと楽しそうな橘川であった。

「そんじゃ、そろそろ出ましようか」

立ち上がりながら、橘川は言う。井本も「そうだな」と彼にならった。

「ま、とりあえずこれからもチロリをよろしく頼むぜ」

橘川の肩をポンと叩く井本。「次のイベントの日とかは聞いてねえけど」

「はい」

ポケットから財布を取り出す橘川。そして出入り口付近のキャットシャーに向かう。井本も彼のすぐ後ろに行く。「もしまたイベントがあつたら一緒に観に行きましようよ」

「え？」

調子の外れた声を上げる井本。「まあ別にいいけど……。都合がつけばの話だぜ？」

「それから」

全く井本の言葉が聞こえない橘川。前を向き、一人で喋り続ける。「しばらくしたら非公式のチロリちゃんファンクラブとか作りたいですよー」

財布から札を抜き出し、キャットシャー台の向こうに立つ、ツインテールのメイドに渡す。井本の様子をまるで窺おうとはしない。「あ、井本さんはチロリちゃんと知り合いなんだから、ある意味公式なのかなー」

お釣りを受け取り、それを財布の中に入れる。そして……。

「ありがとうございますー！。いってらっしゃいませ、ご主人さま」  
メイドにそう頭を下げられたところで、彼はようやく後ろを振り向いた。



「あと写真集とかが出たら……。あれ？」

異変に気づく。そしてキョロキョロと周囲を見回す。「え？ 井本さん？」

いつの間にか、井本はこつ然と姿を消していたのだ。

綾香が帰ってきたのは自宅ではなく、松庵の真一のアパートであった。彼の部屋の扉を開けようとすると、鍵がかかっており開かない。呼び鈴を鳴らしても応答はない。

なんよ。イベント来んかったくせに、どこほつつき歩いとぅと？ 心の中でそうぼやきつつ、綾香はジープンのお尻ポケットの中からジャラジャラ、と鍵の束を取り出し、その一つを鍵穴に差し込んだ。それはこの部屋の合鍵であった。

部屋の中は真っ暗で、人の気配はない。やはり真一は外出しているようだ。綾香は一直線にダイニングへ向かい、冷蔵庫から2Lペットの烏龍茶を取り出すと、それをラツパ飲みした。

「ぶはあっ」

そして、ダイニングと隣合った洋室まで歩くと、その中心にあるガラス製のテーブルに茶を置き、フロアリングの床にドスンと腰を下ろした。灯りをつけようとはしない。

私、アイドルなんてやっていけるっちやろうか。

はあ、と溜息を吐く。

彼女はデビューイベントの酷評アンケートのせいで、完全に自信を失くしてしまっていた。好評の意見もあつたが、一つの酷評はそれらを帳消しにしてしまう。

悩みやすいのは彼女の悪い癖である。こんな時は真一と口喧嘩（時には力技も）でもして、気を紛らわすのが一番なのだが……。

アイツもおらんし、帰ろつかない。

そう考え、彼女が立ち上がるうとした時、ガチャとドアノブの回る音が響いた。

「あん？ 綾香か？」

玄関先から真一の声が聞こえる。綾香はあえて返事をしなかった。ドアを閉め、部屋に上がる真一。そして綾香のもとへ歩いてくる。

「なんだよ、電気もつけないで。イベントとやらは終わったのか？」  
「どこ行つとつたん？」

床に座ったまま、トゲのある声色でそう言いながら、真一を睨みつける綾香。早くも臨戦態勢である。

「ど、どこって……」

被っていた帽子を取り、頭をポリポリとかく真一。「友達とメシ食つてただけだよ」

「私のデビュイーベントの日？」

彼から目を離し、綾香はうつむいた。そして壁に寄りかかり、膝を抱える。

「馬鹿だな」

パチツと壁のスイッチを押しながら真一は笑う。「そんなもんに俺様の貴重な金と時間を使うわけねえだろうが。ハツハツハ……ん？」

部屋が明るくなったことで、ようやく綾香の様子がおかしいことに気がついたらしい。

「そうやもんね。あんたはそうゆう人間やもんね」  
「なんだよ」

シオルダーバッグを床に置き、真一も座り込んだ。「やけに落ち込んでるじゃねえか。イベントは失敗に終わったか？」

綾香は顔を上げ、また彼を睨みつけた。しかし、すぐに視線を床に移す。

「なんだか、彼と口喧嘩をする元気もなくなってしまった。」

「上手くいくわけなかったんよ」

思わず愚痴をこぼしてしまう。「結局アイドルなんて顔が良くてナンボやん。それなのにトークとかも全然できんし、一発ギャグもすべるし。なんで南さん、私なんかデビューさせようと思ったっちゃろ」

うな垂れたまま、上目づかいでまた真一を見る。「あんたもそう思うやろ。あんた、アイドルとか見慣れとうけん、私なんか三流アイドルもいいとこって感じ？ ねえってば。ん……？」

なぜか綾香を見つめたまま、一言も発しようとしなない真一。「真一……？」

一秒、二秒、三秒と二人は互いに見つめあつた。やがて綾香はハツと気がつく。「あつ！これ？」

そう言つて自分の顔を指差す。

「あ、いや……」

我に帰つたように、彼女から目を背ける真一。「なんか雰囲気違うな、って」

「南さんって、プロ級の人にやつてもらつたけん」

照れ笑いを浮かべながら綾香は言った。「私はけっこう気にいっとるんやけど、変かな」

それは南に施されたナチュラルメイクであつた。

「いや、別に変じゃねえと思う」

また綾香に視線を戻す真一。

「そ、そう……？」

そして再び二人は見つめあう。やがて、真一が顔を近づけてきたことに気がつき、綾香はそつと、まぶたを閉じた。

唇に真一の唇の感触。真一の息づかいが荒くなり、それに伴い綾香も……。

「ち、ちよつと待って！」

真一の指先が自分の胸元に触れた瞬間、綾香はそう言つて、彼を突き放した。「先にシャワー浴びんと。今日もいっぱい汗かいたけん」

「ああ」

苦笑する真一。「今日も暑かったからな。お前なら汗ダラダラだったろ」

「ふん、まあね」

綾香も笑う。笑いながら彼女は思った。

とりあえず、できるところまでやってみようかな。

### 34 すっぴん少女

えーっと、四階っと。

ドア横のボタンをポチッと押す。すぐにドアが開き、綾香はエレベーターに乗りこんだ。

南に言われたとおり、デビューイベントから二日後の午後三時に大谷ビルを訪れた綾香。

彼女の様子はいつもと違っていた。ピンクのキャミソール（相変わらず汗だくだ）の上から羽織った、シースルーの白いブラウス。大胆に足を露出させた薄手のホットパンツ。そして、肩に下げたハンドバッグ……。いや、服装の話ではない。彼女はノーメイクであった。

午前中に起床してから、家でダラダラと過ごしていた彼女だったが、昼食を食べた後に『少しだけ昼寝しよう』と横になってしまったのが運の尽き、目が覚めたときには、もう二時半を回っており、メイクもせずに家を飛び出してきたというわけである。

ドアが開き、カッソカッソと足音をたて（ハイヒールではなく、厚底のサンダルである）、エレベーターを出る綾香。そして、目の前に現れた二つの扉のうち、一つのドアノブを掴み、それをガチャと回す。

二十畳程度の広さだ。いくつものデスクが並べられ、どのデスクにも書類やファイルなどが雑然と置かれている。一見、一般企業のオフィスと何ら変わりはない。しかし、間違いなくここはSDP、芸能事務所である。

実は、先月タレント契約をした際に綾香は一度ここを訪れていた。キョロキョロと周囲を見回しながら、カッソカッソと歩き出す彼女。事務所内にはネクタイを締めた男が数人おり、それぞれパソコ

ンのディスプレイに向かつていたり、電話をしていたり、している。続いて部屋の奥に目をやる。そこにスキンヘッドとサングラス、それに黒スーツという、相変わらずの目立つ出で立ちで、黙々とパソコンのキーボードを打つ南の姿があった。

彼のもとへ向かおうとしたその時、突然誰かに話しかけられる。

「誰に用事？」

髪をスポーツ刈りにした若い男である。彼は両手を頭の後ろで組み、椅子の背もたれに、背中を寄りかからせて座っていた。

「あ、あの南さんに……」

そう言っつ綾香は、奥のデスクに座る南を指差す。

「ああ」

納得したように頷く男。手を解き、姿勢を正しながら、綾香の顔をまじまじと見つめる。「じゃあ、君がえーっと……。チロリちゃん？」

複雑そうに苦笑する彼。

「あんまり見ないでください……」

顔を背け、綾香は言った。

「ん？」

綾香がすぐそばまで近づいたところで、ようやく彼女に目を向ける南。そして口元に淡い笑みを浮かべる。「はて、どちらさんだったかな」

「分かつとるくせに！」

すっぴん顔をムツとさせる綾香。「あんたが三時なんて中途半端な時間指定するけん、こんなことになつたっちゃんね」

「ふん、この業界じゃもつと中途半端な時間を指定されることだつてあるぞ」

そう言っつて、南は座ったまま背伸びをした。「まあ、今日のところはいい。ちゃんといつでも起きられるように生活態度を改めとけ」

「……。はい」

「よし」

バンと両手で自分の膝を叩き、南は立ち上がった。「ここじゃないんだから『ビリーブ』行くぞ」

しかし、すぐに「いや……」と眉間にしわを寄せ、考え込む彼。

「ちよつと待てよ。その前に」

「その前に？ なん？」

眉をひそめる綾香。

「社長にもお前を紹介しとくかな」

そう言つて南は壁に顔を向けた。エレベーターから降りて、すぐに現れる二つの扉のうちの、こちらじゃないもう一つの扉が、社長の部屋へ続くものだど、以前綾香は彼に聞かされたことがある。すなわち、彼が顔を向けたのは社長の部屋の方である。

「ええ？ でも……」

社長に紹介されることに綾香はあまり乗り気ではない。その理由は……。 「せめてちゃんと化粧してから会いたいな」

「ん？ まあ、それもそうだな」

うんうんと頷く南。「いきなりこんなノツペリ平面顔を『こいつが我が事務所の命運を握る期待の星です』なんて紹介されたら、社長シヨックで寝込んでしまふかもしれんしな。やっぱり今度にす……。いてー！」

綾香の厚底キックが彼の足に炸裂したのだった。



### 35 打ち合わせ

喫茶店『ビリーブ』。綾香と南は、前回綾香がアイドルデビューを決めた日と同じように、店内の一番奥の席で向かい合い、座っていた。どうやらSDPの打ち合わせは、この店で行うというのが習慣のようである。

革製の鞆から、封筒を取り出し、その封筒から、更に書類を取り出す南。書類に目を通しながら「さて」と彼は言った。

「来月から忙しくなるぞ。ラジオにテレビに」

「ラジオにテレビに……」

彼の言葉を繰り返す綾香。そして自分がラジオにテレビに出演しているところを想像しようとするも、どうも上手くいかない。「うーん、一昨日のイベントよりも難しそうやね」

「あんなもん、比較にならない」

そう言って南はテーブルの上に書類を置き、今度は胸ポケットから煙草の箱を取り出した。「あれはSDP主催のイベントだからな。言わばホームのイベントだ」

煙草を一本くわえ、百円ライターで火をつける。「これからはスタッフも共演者もアウェイばかり。誰もお前を助けてくれんぞ」

「うっ……!!」

そういえば、先日のイベントでは随分とカビリオンズに助けられたものだ。

「俺も一応指示はするが、あくまで演者はお前だ。『どうすれば視聴者の心を捉えられるか』、『どうすればスタッフや共演者に気に入ってもらえるか』本番中もそれを常に考えとけ。アイドルはあくまで『魅せる』仕事だ。その日の仕事に自分が納得しても、相手が納得せんことには全く意味がない」

はあ、と深い溜息を吐く綾香。

やっぱりアイドルって難しいっちゃね。失敗せんだけじゃ、失敗

なんかな。

「あのさ」

ふと気がつき、綾香は言った。「来月から忙しいって言うけど、今月はもうなんも無いと？ まだ今月始まったばかりやん」

紫煙をふうと吐き出し、南は頷く。

「仕事はない。ただレッスンを受けてもらおう」  
「レッスン？」

それは綾香にとって全く予想していなかったことだ。「レッスンって……。なんの？」

「主にボイストレーニングだ。舞台やテレビ、それぞれの発声の仕方やその他諸々、あと歌の練習もしてもらおう」

「歌！？」

パツと明るい表情になる綾香。「ってことは、歌手デビューするってこと？」

「いずれはな」

南のその言葉を聞き、綾香は心の中で歓喜の声を上げた。

やった！ やったやった！ まさか歌手デビューできるなんて。

実は小さい頃から歌うことが大好きだった彼女。長崎在住時代、本気で歌手に憧れていた時期もあったのだ。

「歌やったら心配せんでよかばい。私、カラオケめっちゃ得意やもん」

自信満々で能書きをたれる彼女。「地元の友達からは『佐世保の歌姫』とか言われとったんよ」

「カラオケとはまた違うぞ」

ふん、と鼻で笑う南。「それに音感やリズム感がしっかりしているだけじゃダメだ。発音や表現力、そういった点も含め、レベルアップさせとけ」

「レッスン代は事務所持ちなんよね？」

気になっていたことを尋ねる綾香。

「ああ、心配ご無用だ」

それならまあ、レッスン受けて損はないか……。ん？ レッスン代？

その時、彼女は大事なことを思い出したのであった。

「あー！」

大声で叫び、立ち上がる綾香。そして右手を南の前に差し出す。

「給料は？ 一昨日のイベントのギャラ貰ってないよ！」

「給料？」

眉をひそめる南。「アホか。うちは日払いじゃないし、歩合制でもないぞ。給料は月末締めの日二十五日払いだ。ちゃんと出るから安心しろ」

お、遅い……。

「ちょっと待つてよ。月末締めの日二十五日ってことは」

視線を宙に漂わせ、綾香は考える。「初任給は来月の二十五日ってこと？」

ふう、とまた紫煙を吐き出しながら、南は頷いた。

「よくできました」

そしてパチパチといい加減な拍手をする。「お前でもそれぐらいのことは分かるんだな。立派なもんだ」

彼は明らかに喧嘩を売っているが、綾香は無視をした。なぜなら、それどころではないからだ。

「来月の二十五日……」

綾香の顔はみるみるうちに青ざめていく。

つまり、私のと、真一のを合わせて、今月の収入は……。

答えはもちろん……。いや、先月の『キャンユー』の給料が出るので、ゼロではないのだが、綾香はそのことをすっかり忘れていた。

真一は自宅で横になりながら、携帯電話を耳に当てていた。

「あ、はい。ありがとうございます。はい。明日からですね。よろしくお願いします」

通話を終え、カシャッと携帯を閉じ、テーブルの上に置く。そして真一は小さく「よし」と呟いた。

前日に受けたアルバイト面接の結果報告であった。結果は見事合格。明日より早速研修開始だという。

綾香にも報告しておくか。あいつ、まだ打ち合わせ中かな。

本日、午後三時から事務所で打ち合わせがある、と彼女は言っていた。ただいまの時刻は午後五時。打ち合わせの程度にもよるが、そろそろ終わっていてもおかしくはない。

よし、メールだけでもしとくか。

そう考え身体を起こし、また携帯を手にとった時だ。玄関先からガタツと音が響き、扉の開く気配がした。どうやら向こうからやってきてくれたらしい。

「やばいやばいやばいやばいー!」

真一のいる洋室に来るなり、なぜかノーメイクの綾香は、やかましくそう言うのだった。「真一! マジでやばいっちゃん」

「なんだよ? お前のその顔の方がよっぽどやべえよ」

真一はうんざりとして金髪の頭をワシワシとかいた。その瞬間綾香にゲシツと頭を蹴られる。

「冗談言つとる場合じゃないよ」

真一の隣に座り込み、冗談のような顔の綾香はわめいた。「私の給料来月まで出んっちゃけん、今月の食費がないばい!」

「食費……?」

眉をひそめる真一。

「そう」

綾香が頷く。「仕送りで、うちの家賃と光熱費とあなたの家賃と光熱費と……。そこまではなんとかなるけど、食費その他が残らんとよ」

「だ、だって……。『キャンユー』の給料がまだだろ？」

先月まで綾香が週六日でアルバイトしていた安売りチェーン店である。

「……」

キョトンとした顔で『あっ』と口を開き、固まる綾香。どうやら『キャンユー』のことを忘れていたらしい。

「そんなことよりさ」

例の話を報告。「俺、バイト受かったんだぜ。明日から研修だつて」

「え？」

心底驚いたように目を見開く綾香。「どんなバイト？」

「飲食業」

「ふーん……」

そう相槌を打ち、彼女はおもむろに立ち上がった。そしてダイニングまで歩き、冷蔵庫を開ける。「来月はけっこう収入も安定するかな」

「おう。もう貧困生活はこりこりだぜ」

真一も立ち上がり、綾香のそばへ寄った。

「でもあんた」

冷蔵庫から烏龍茶を取り出しながら、綾香は言う。「バイトじゃなくって、そろそろ就職とかせないかんっちゃないと？」

「就職？」

真一は目を丸め、彼女の横顔を見た。「まあ、そんな焦ることも

ないだろ」

「だって……」

そこで言葉を止め、綾香は烏龍茶をラツパ飲みした。「ぷはあ……。そろそろさ。うちの親に真一を紹介せんといかんかろうし」

佐世保に住む綾香の両親は、真一という恋人の存在も、綾香が専門学校をやめたという事実も知らない。仕送りは本来、一人娘である綾香の生活費と学費にあてるべきものである。

「紹介なあ……」

綾香から烏龍茶を受け取り、それを手に持ちながら、真一は考え込んだ。

さすがにフリーターじゃ、綾香の親に合わす顔がねえか。

そして綾香と同じように烏龍茶をラツパ飲みし、ぷはあと一息。

「まあ、社員昇格制度もあるらしいから。とりあえず今度の仕事頑張ってみるわ」

しらーつと横目で真一を見る綾香。

「本当に頑張つてよ」

「……。ああ、お前もな」

そう言つて頷いてみせながらも、真一は複雑な心境であった。

やがて夜が更け、さつさと一人で洋室のフローリングの床に眠りこけてしまった綾香の寝顔を見ながら、真一は考えごとをしていた。こいつはちゃんと将来のこととか考えてんのに、俺はいつたい何やってたんだらうな。

綾香の頬をそおつと撫でる。眉間にしわを寄せ、「んん」と声を漏らす彼女。

アイドルか……。

先日変装をして参加した、彼女のデビューイベントを思い出す。マイクを使わずに挨拶をし、カビリオンスを困らせてしまう綾川チロリ。大勢の客の前で一発ギャグをし、見事に外してしまう綾川

チロリ。それでも、真一の目にはそんな彼女の姿が何より輝いて見えた。

綾香の身体に優しくタオルケットを被せながら、真一は思う。こいつにとって、俺は邪魔になるだけの存在かもしれないな。

### 37 レッスンな日々

「はい。それじゃあ、チロリちゃん。次はこの音ね」

岸田が鍵盤を叩くと同時に、ピアノからポンと可愛らしい音が飛び出す。綾香はふう、とお腹まで息を吸い込むと、ピアノの音と全く同じ音階で、長く声を響かせた。

「ああー」

「はい、ストップ」

岸田のその指示に従い。発声を止める綾香。「だんだん良くなってきたね。この調子ならすぐにレコーディングだってできそう」

「本当ですか？」

綾香は照れ笑いを浮かべ、頬をポリポリとかいた。

八月中旬の午後四時前、渋谷某所のダンススタジオ『プリズム』内の二室のうちの一室。マネージャー南の紹介で、綾香は先週よりここに通い、トレーニングに励んでいた。トレーニングは週に二回で、今日は三回目のトレーニングである。

彼女のポイトレを受け持つのは、女性インストラクターの岸田美並。大きな赤縁の眼鏡をかけていることから、綾香は密かに『アラレちゃん』とあだ名をつけている。とはいっても、肌のツヤや指先のしわを見る限り、おそらく三、四十代である。ちなみに、髪型は、長く黒い髪を後頭部で束ねたポニーテイルだ。

彼女の経歴についてはまるで知らない綾香であったが、彼女が時折聞かせてくれるミュージカル女優のような歌声や、素人でも分かる卓越したピアノの腕前からして『この人は只者じゃない』と勝手に予想していた。



「それじゃあ、今日はここまでね」

岸田はそう言うと、ピアノの鍵盤のふたをそつと閉め、椅子から立ち上がった。「寝る前に腹筋三十回。忘れずにね」

「はい」

資料を右腕にかかえ、左手を小さく振りながら部屋を退室する岸田。綾香は頭を下げて彼女を見送ると、大きく背伸びをし、ふうと息を吐いた。それから室内を見渡してみる。

ただっ広い三十畳ほどのフロアである。たつた今岸田が弾いていたピアノ以外に、特に目につくものはない。本来はダンススタジオだということもあり、四方の壁のうち、一面は鏡張りとなっている。

あつ……。

ふと思ひ立ち、綾香は鏡の前まで歩いた。そして鏡を通し、自分の全身を眺めてみる。

胸元に大きくアルファベットの文字が書かれた黒いティーシャツと、白のジャージパンツ。動きやすいが、なんとも飾りっ気のないスタイルである。

続いて、鏡までの距離を縮め、片手で髪の毛をつまみ上げる。

前日に、イメチェンを図ろうと美容室で髪を黒く染め直し、ストリートパーマをあてたばかりで、以前より頭が寂しく感じられる。

ただ、服装や髪型もそうなのだが、それ以上に気になるのはやはり……。

更に、鏡までの距離を縮める綾香。

うん。まあまあイケとうやん。

本日彼女はノーメイクとまではいかないまでも、それぞれの化粧品の使用量を極限まで抑えた、薄化粧であった。その理由は前述のイメチェンだ。ただ、本当なら以前デビューイベントの日に南が施してくれたようなナチュラルメイクに挑戦したかったが、どうも上手いかず、結局ただの薄化粧に落ち着いたのだ。

綾香は再び鏡との距離を広げ、左手を腰にあて、右手をピースにして額へあてるといふ、チロリポーズをとってみた。その行動に深

い意味はない。

「お疲れさまでーす！」

突然スタジオ内に響いたその挨拶に驚き、綾香はポーズを決めたまま、ビクンと身体を震わせた。そして、すぐにポーズを解き、後ろを振り返る。

「お、お疲れさまですう」

カラフルな服を着た二人の少女が、部屋の隅でストレッチを行っているところであった。

い、いつからおったん……？

少女たちにおそるおそる近づく。すると、少女のうちの一人が身を屈めながら顔を上げ、綾香に言った。

「チロリさん。チロリさんはもうストレッチ終わっただんですか？」

「あ、ううん」

首を振る綾香。「ポイトレ終わったばかりで、ダントレ始まるまでちょっと休憩しとったんよ」

そう、今からボイストレーニングに続き、今度はダンストレーニングが始まるのだ。個人レッスン契約のポイトレとは違い、ダントレでは綾香も他の生徒に混じってレッスンを受けることになっていた。

「はあ……」

少女たちに聞こえないように綾香は溜息を吐いた。彼女はポイトレに比べ、あまりダントレを気に入ってはいないのだ。

なぜなら、彼女以外の生徒は皆、夏休み中の中学生ばかりだからである。

渋谷と二人の女子中学生に並び、ストレッチを開始する綾香。その時、今しがた綾香に話しかけた方の少女が、薄らと笑みを浮かべながら一言。

「さっきのポーズって、チロリさんのオリジナルダンスなんですか

「？」  
「……」  
帰りたい。

### 38 新たなる畏？

吉祥寺駅から徒歩五分程度、大通り沿いの小さな中華料理店の軒先にて。たくさんの車が雨水を切って走る音を聞きながら、お気に入りであるベージュのブラウスを着た矢上詩織は、腕時計をちらつと見てにんまり微笑んだ。

もうすぐ六時！ 楽しみだな。

五時過ぎから天気はあいにくの雨となってしまったが、見上げる空とは裏腹に彼女の心は晴れ晴れとしていた。

専門学校が夏休みに入り、最近はアルバイトに明け暮れる日々を過ごす彼女。本日は約一週間ぶりのオフで、学校のクラスメイトであり彼女が密かに想いを寄せる相手でもある田之上裕作に誘われ、彼と一緒に夕食をとる約束をしているのだ。

それにしても……。田之上くん、遅いな。いつもなら約束の五分ぐらい前には必ず来るのに。

とその時、傘を差してこちらに猛ダッシュしてくる人物の存在に気がついた。その人物をじっと見つめる詩織。足音がバシヤバシヤと近づいてくるにつれ、詩織の顔は輝きを増していく。

「ゴメン！ 遅くなった」

傘を閉じてから軒先に入った途端、田之上裕作は腰を折り、はあはあと息を整えた。肩から下げた大きなショルダーバッグが地面につきそうになる。

「うっん」

笑顔で首を振り、それから詩織はまた腕時計を見た。「ジャスト六時だよ。私が早く来すぎちゃっただけ」

はりきりすぎて五時半に来てしまった彼女。「とりあえず中に入ろう。私もお腹へこへこ」

奥行きが深く、細長い店内。夕食時だというのに客はまばらである。入り口から最も近い四人がけのテーブルに向かい合わせて陣取った二人は、それぞれ注文を終え、他愛のない話をしながら料理が運ばれてくるのを待っていた。

「ここって、中華料理屋っていうより、普通の定食屋さんみたいだよね」

店内を見回しながら詩織は言う。柱に龍が巻きついており、テーブルがぐるぐる回るといのが、彼女にとっての中華料理屋のイメージであるが、この店はそのどちらも該当しない。ちなみに、この店は以前学校の昼休みに、一度だけ二人で訪れたことがあった。

彼女のその言葉を聞いた田之上は、苦笑いしながら短髪の頭をかいた。

「本当はもつと高級なところに誘いたかったけど、俺には似合わないし、ここ美味しいし」

「うん、美味しいよね」

同調してみせながら、詩織はやや困惑していた。

高級なところ？ 何を今更……。

田之上に誘われ、飲食店を訪れることは過去にも何度があったが、高級な店を訪れたことなど一度もないのだ。

しばらくして、二人の前に料理が運ばれてくる。

「んん、うん。やっぱここ、美味しいね」

自身の注文した五目炒飯を一口食べてから、詩織は目の前の田之上に笑いかけた。しかし、田之上は彼女の言葉が聞こえていないかのように、全く反応を示さず、黙々と彼ご注文のタンメンをすすっている。「ここ、美味しいね。田之上くん」

再挑戦。すると田之上はようやく「え？」と顔を上げ、言った。

「あ、うん。美味しいねー、本当に」

そしてぎこちない笑顔を作る。彼の様子を見て、  
またも困惑する詩織。

おかしい。今日の田之上くんは何かがおかしい。

その時、詩織はあることに気がついた。

ま、前にも学校でこんなことがあったような気がする。あの時も田之上くんが遅れてきて……。あの時は確か……。あ、綾香だ！

詩織の顔が鬼の形相に変わっていく。彼女はもはや見境をなくしていた。

綾香め。今度は何だつていうの！？ またしても田之上くんを利用するなんて、もう絶対に……！

「詩織ちゃん」

「え？」

田之上に突然名前を呼ばれ、詩織は我に帰った。「あ、あはは。

ちよつと気に入らないヤツのこと思い出しちゃって、エへへ」

そして田之上の顔を見る。「へ……？」

ドキッと心音が高鳴った。田之上はいつにもなく真剣な表情で、じつと詩織を見すえていたのだ。

「食べながらいいから聞いてほしいんだ」

彼はいつの間にかタンメンを食べ終え、箸を置いていた。

「う、うん」

眉間にしわをよせながら、詩織は頷く。

「実はその……」

うつむき、唇を噛む田之上。一生懸命言葉を絞り出そうとしている様子だ。「俺、ずっと前から詩織ちゃんのが好きだったんだ」

ポカンと口を開け、詩織は固まった。「あの、さっき買ってきたんだけど……」

そうやって田之上は自身の隣に置いたバッグの中を探った。やがて彼が取り出したのは、シンプルなデザインのシルバーネックレスであった。「詩織ちゃんにどんなヤツが似合うか、迷ってる間に待

ち合わせ時間が近づいちゃってさ。結局普通のヤツに落ち着いちゃ  
って」

照れ隠しなのか、左の耳たぶを指でつまみ、うつむく田之上。

詩織はというと、そんな彼をぼろろと見つめたまま、相変わらず  
固まったままなのであった。

### 39 偵察少女

午後六時半。電車で吉祥寺駅に降り立った池田綾香は、渋谷のコンビニで購入した透明のビニール傘を広げ、雨にもかかわらず多くの人で溢れる駅北側の大通りを、足をふらつかせながら歩いていた。肩に大きなスポーツバックを下げたおり、その中には先ほどのレツスンで着用していた汗まみれのシャツとジャージが入っている。現在は派手な色彩のワンピースという格好である。

つ、疲れた……。

ボイトレ、ダントレで激しくエネルギーを消費し、体力が限界に近づいていたため、本当ならすぐにも帰宅し、眠ってしまいたい綾香であったが、今日はどうしても訪ねておきたい場所があった。今日行つとかんやったら、いつになるか分からんけんね。

「ん？」

そのまま、しばらく歩いた頃、綾香は通り沿いの小さな中華料理店に目を奪われた。ふらふらと軒先に足を踏み入れる彼女。店の中から、うっすらとだが食欲をそそられる良い香りが漂ってくる。

お、美味しそう……。

体力と共に空腹の方も限界に近づいていたのだ。耐え切れず、店の引き戸に手をかけ、戸を開けようとする綾香。しかし、すぐにハツと思い直し、彼女はその手を離れた。

危ない危ない。ここは我慢せな。

心の中で自分にそう言い聞かせ、軒先から離れる。そして綾香は、悲しげな瞳で店をじっと眺めた後、なんとか再び目的地に向け歩き始めた。



先ほどの中華料理屋から更に五分ほど歩いた場所である。同じ大通り沿いの、これまた小さな、ラーメン屋『ぶるうす』の軒先に綾香は立っていた。入り口のそばにある傘立てに傘を差し込み、なんとなく深呼吸をしてから、やがてガラスと勢い良く引き戸を開ける。その瞬間「らっしゅっせー」と男性の威勢の良い声と店内を流れるブルースのBGMが綾香の耳に飛び込んだ。

狭い店内にはカウンター席の他に、四人がけのテーブル席が一つあるのみ。食事時ということもあり、ほとんどの席はすでに埋まってしまっていたが、カウンター席の一番端が空いていたので、綾香はそこに「よいしょ」と腰を下ろした。いや、椅子が高いので腰を下ろしたという言い方は適切ではないのかもしれない。

他の客は男性ばかりで、多くの客は物珍しそうな目で綾香を見た。実際、女性の一人客というのはこの店では珍しいのだろう。

そんな客たちの視線に、やや頬を赤めながら、綾香はこっそりとカウンターの中を覗いた。すぐに、厨房の奥で皿洗いをする井本真一の横顔を発見する。

お、真面目にやっとなるやん。

頭にタオルを巻き、肩口まで袖をめくったシャツを着て、ただひたすらに皿を洗う真一の表情は、綾香が今までに見たことがないほど、真剣なものであった。

そう、今月から始めた真一の新しいアルバイトとは、ここ『ぶるうす』での調理場スタッフであった。綾香は以前より、一度この店に足を運び、真一が真面目に働いているかどうかをチェックしようと目論んでいたのだが、真一の勤務日になかなか時間が合わないのと、めんどくさいのとで、先送りになってしまっていた。

とはいえ、レッスンに疲れ果て、雨にまで降られた本日も充分にめんどくさいのはあるが、黒い髪と、薄い化粧でイメチェンした自分の姿をまだ真一に見せていなかったことに気がついたため、こ

れは良い機会だ、と決行に移したのである。

「お客さん」

カウンターの前に立つ若い青年が綾香に笑いかけた。「ご注文はお決まりですか？」

「あ、えーっと」

綾香は慌てて真一から目を離し、壁にかかったメニューの書かれた板を見つめた。「ち、チャーシューメン大盛りで……」

それが、唯一彼女の腹を満たしてくれそうなメニューだったのだ。

「はいよー！ チャーシューメン大盛り一丁！」

他の店員たちに大声でメニューを伝える青年。その瞬間、店の奥の一部の客たちがかすかに涌いたことに、綾香は気がついた。

あんま大きな声で言わんでよ！ 恥ずかしがるもん！

また赤面する綾香。赤面しながら、もしかして今の騒ぎで、真一が自分の存在に気がついたのではないかと思い、真一に目を向けてみる。

しかし、真一は全くこちらに目をくれず、相変わらず真剣な表情で、洗い場に向かい続けていた。

そ、そっか。今一番忙しい時間やるうけん、それどころやないっちやろうね。イメチェンした私を見せるのは、仕事終わってからでいいか。

真一の勤務は、朝十時から夜七時までだと聞いている。もう、あと五分ほどで仕事から解放されるのだ。

チャーシューメン大盛りを待つ間、綾香はじっと真一の横顔を見つめ続けた。

朝十時からということとは、休憩も含めているだろうとはいえ、九時間もの間、真一は働いていることになる。見る限りでは元気そうだが、実際はかなり疲れているのであろう。

頑張れ、真一。

綾香は心の中でそうエールを贈った。ただ、希望通り真面目に働いていた真一の姿に、何故か少しだけ寂しい気持ちも覚えてしまったのだ。

## 40 歌姫降臨

美しいピアノの旋律を聞きながら、同時に頭の中でカウントをとり始める。そして、大きく息を吸い込んだあと、丁寧に丁寧に綾香は歌い始めた。

曲に合わせて綾香の歌声は、感傷的に、情熱的に、様々な形へとその姿を変える。

いつしか、綾香は大きなコンサートホールの上のステージの上に立っていた。華々しいスポットライトを浴びながら喉を震わせ、彼女は歌い続ける。

やがて、ピアノの音が静かに消える。綾香は大勢の観客たちの拍手に応えようとして両手を高くかかげてみせた。

「綾香ちゃん、綾香ちゃん」

「え？」

ボイトレインストラクター岸田に名前を呼ばれ、ようやく我に帰る綾香。サツと両手を下ろし、キョロキョロと周りを見回してみるのが、そこはもちろんコンサート会場などではなく、いつものただっ広い、ダンススタジオ『プリズム』の一室である。

か、完全にのめり込んでしまった。

只今、ボイトレの授業の真っ最中である。岸田のピアノ伴奏に合わせ、レッスンの課題曲である往年の名バラードを歌い上げたところなのだ。歌の世界に気持ちが入りすぎて、まるでコンサートホールのステージ上で歌っているかのように錯覚してしまったわけである。

あまりの恥ずかしさで、思わず顔から火が出てしまいそうになる綾香だったが、岸田はそんな彼女にパチパチ、と錯覚ではない本当の拍手を送った。

「凄いじゃん！ 感動したー」

興奮した様子で岸田は言う。「もの凄く引き込まれちゃったよ。チロリちゃん、歌の才能あるね」

「え？」

思わぬ賛美の言葉に、綾香の目は点となった。そして、すぐに照れ笑いを浮かべ、頬をポリポリとかく。「そ、そうですかねー」

「うんうん。たった一ヶ月でこんなに上達するなんて、さすがは『佐世保の歌姫』と呼ばれただけのことはあるね」

「うっ」

顔面蒼白になってしまふ綾香。「そ、それは忘れてください……」

『佐世保の歌姫』と呼ばれてたんですよ』と豪語してみせたはいが、全くピアノの伴奏についていけず、散々な歌姫ぶりを披露してしまった、というレッスン初日の苦い経験があった。

八月もいよいよ最後の週に入り、レッスンも残すところ、今日を含めあと二回となってしまった。

もともと綾香は、音感もリズム感も持ち合わせていたため、歌についてはもうどこに出しても恥ずかしくはないという程度にまで上達していた。以前より、しっかりと主旋律を捉えることができるようになったし、発音も綺麗になった。そして、岸田さえも感動させてしまうほどの表現力をも身につけた。

そう、綾香は徐々に『佐世保の歌姫』としての秘められた才能を開花させていったのである。

ところが……。

「はい！ ワンツー、ワンツー」

「はあ、はあ」

皆の前に立ち、踊る、ジャージ姿の茶髪男性インストラクターの

声に合わせ、息絶え絶えになりながら、必死で手足を動かそうとする綾香。しかし、自分の思い通りに身体が動いてくれず、いつしか周りの中学生たちと全く違う振り付けとなってしまう。

「ストップ！」

インストラクターのその言葉で、生徒たちは一斉に動きを止めた。インストラクターは、ピンと背筋を伸ばす少年少女たちの顔を見渡してから、つかつかと左端最後尾の綾香のもとまで歩み寄ってきた。「チロリちゃん」

「は、はい？」

一人だけ肩で息をしている綾香。

「振りはもちろんと覚えてるみたいだけど、君だけちょっと動きが硬いというか……。」

インストラクターは腕を組み、やや言いにくそうに言った。「体力が足りてないみたいだね。今日から一日十キロジョギングしなさい」

「え、えー！？ 十キロですか？」

思わず大声を上げてしまう綾香。彼女の声が室内に響き渡る。

「そう」

厳しい表情でインストラクターはコクリと頷いた。「夏休みの授業は残りあと一回しかないんだから、最後までいいは皆でキチンと決めないと。次の授業までにキッチリ体力をつけておくこと」

綾香はショックを受けた。レッスンだけでも、もの凄く疲れてしまふというのに、その上ジョギングとは。

「頑張つて、チロリさん」

隣に立つ女子中学生がガッツポーズを作り、笑顔で綾香にエールを送った。綾香は複雑な気持ちで彼女に顔を向け、作り笑いを浮かべてみせた。

「うん。が、頑張つてみる」

そう宣言しながらも、心の中ではやはり……。

早く九月になってくれんかなあ。

『佐世保の歌姫』にはなれても、どうやら『佐世保の舞姫』にはなれそうにない綾香であった。

## 4 1 死体といっしょ

午後七時過ぎ。アルバイトを終え、重い足を引きずりながら真一が自宅へ帰りついた時、玄関の扉の鍵がかかっていることに彼は気がついた。

また来てやがんのか、あいつ。

ギイイ、と不快音を立てながら扉を開け、真一は部屋の中に入った。そして、玄関先で靴を脱ぎ、明かりのついた洋室へ。そこに、案の定うつぶせで死んだように眠る綾香の姿があった。

「はあ……」

思わず溜息を吐いてしまう真一。

よくこんなんでアイドルになんかなれたよな。

綾香は白のタンクトップとパンティのみしか身に着けてはいなかった。それらの衣服から伸びた手足のところどころに、湿布が貼られている。そういえば今日はレッスンの日だったはずだ。おそらくレッスンに疲れ果て、眠ってしまったのだろう。

汚れた靴下を履いた足で、真一は綾香の頭をツンツンと突いてみた。「んん」とうめき声を上げ、眉間にしわをよせる綾香。良かった。どうやら死んではいないらしい。

綾香をひとまず放っておき、真一はテーブルの上のリモコンを操作して、テレビの電源を入れた。続いて、チャンネルをピツ、ピツ、と切り替えていく。やがて、とある番組が放映されている局に、チャンネルを落ち着かせてから、リモコンを元の場所に戻した。

確か、今日松尾和葉ちゃんが出演するんだったよな。

それは常識問題を主にしたクイズ番組であった。テレビの画面を食い入るように見つめる真一。すぐにパネラーとして解答席に着く、清純派アイドル松尾和葉の姿をカメラがアップで捉えた。



和葉ちゃん、今日もいけてるぜ。

松尾和葉は花柄のキャミソールを着用していた。少しだけ日焼けした肌がまぶしく輝いている。クイズの成績はいまいちのようだったが、そんなものでは計り知れないアイドルとしての魅力を、今日も存分にばらまいていた。ちなみに、現在松尾和葉は、真一ランキングで見事第一位の座に着いている。

思わず、そばに横たわった死体に目をやる真一。こちらは肌に貼られた湿布がまぶしく輝いていた。

どう考えてもこいつと和葉ちゃんじゃ、勝ち目ないよな。

今度は綾香の頬を指でツンツンしながら、真一はそんなことを考えていた。

「昔付き合ってたやつてた彼がチョー不細工で、まあそいつはただの財布代わりだったんで別にいいんですけどー」

突然聞こえてきた舌足らずな声。真一はうんざりとしながら、横目でテレビの画面を見た。

ちっ、こいつも一緒かよ。

テレビに映っていたのは松尾和葉と同じく、今年ブレイクを果たした新人アイドル、菊田つばきであった。和葉の斜め前の席で、同じパネラーとして番組に出演しているようだ。茶髪の派手な巻き髪と、猫のような大きなつり目が特徴的である。ただ、真一ランキングでは第四十八位と、あまり振るってはいない。

なぜなら、真一はこのアイドルの性格がとにかく気に入らなかったのだ。何かというと他のタレントの悪口を言ったり、司会者に邪険な態度を取ったり。『小悪魔アイドル』として一部の層に受け入れられているということが、真一にはとてもじゃないが理解できなかった。

また、ファンの間では、彼女の『小悪魔キャラ』は演技で、本当は心優しい純粋な性格なんだ、とする説もあるが、それも到底信じ

られるものではない。

真一はまた綾香に目を向けた。

こんな性悪女に比べたら、お前の方がまだマシかもしれないねえな。

今度は綾香の目をピン、ピンと指で弾きながら、真一はそんなことを考えていた。

「痛い！」

突然、自身の目を手で押さえながら、綾香が身体を起こした。それに驚き、座ったままのけぞってしまふ真一。「さつきから人の顔でなん遊びようと！」

「わ、悪い悪い」

今にも拳を繰り出してきそうな様子の綾香を手で制しながら、真一は謝った。「完全に寝てるもんかと思ってるさ」

「めんどくさいから起きんかったと！」

「プイと顔を背ける綾香。「ジョギングして身体中痛いし」

「ジョギング？　なんでまた」

「ダントレでさ。先生に体力つけてこいって言われたんよ。さつき、その辺ぐるぐる走ってきたっちゃん」

そう言ってから綾香はひざを曲げ、手の平を床につけて立ち上がろうとしたようだ。すぐに「いたた」と顔をしかめ、そのままの体勢で固まってしまった。「ちよつと、烏龍茶取ってきて」

「へいへい」

洪々と綾香の変わりに立ち上がり、真一はダイニングの冷蔵庫のもとへ向かった。そして、冷蔵庫のドアを開けようとした時、背後で綾香が「あつ」と声を上げた。なにごとか、とそちらを振り向く真一。

「この子」

テレビを指差しながら綾香は言う。「九月の初仕事で共演するっちゃん。こないだマネージャーが言っと思ったんよ」

「え？」

か、和葉ちゃんか？

すかさずテレビの画面を確認する真一。そこに映っていたのは松尾和葉ではなく、『小悪魔アイドル』菊田つばきであった。

## 42 普通な人

「まあ、とりあえずごくろうさん」

煙草の煙をふうと吐き出してから、綾川チロリのマネージャー南吾郎はちつともねぎらってなさそうな口調で、綾香にねぎらいの言葉をかけた。

「疲れたー。やっと解放されたー」

テーブルの上に上半身をぐったりとあずける綾香。「ボイトレはいいけど、ダントレはもう絶対せんけんねー」

「いや、歌手デビューが決まったらまたやってもらおう。曲にはダンスも取り入れるつもりだし、体力作りにも良いみたいだからな」

「ええー!?!」

そう叫び、綾香はガバツと身体を起こすが、すぐに「いてて」と顔をしかめ、腰を押さえた。

「お前、そんな体で仕事大丈夫か?」

煙草を灰皿にもみ消しながら、眉間にしわを寄せ、南は言った。

「もうあと三日だぞ?」

「あんたがダントレなんかさせるけんやろうもん!」

八月も残すところあと三日。渋谷のダンススタジオ『プリズム』での最後のレッスンを終えた綾香は、そのままSDP事務所近くの喫茶店『ビリーブ』に呼び出され、南と本格デビュー前最後の打ち合わせを行っていた。

ちなみに最後のダンストレーニングは、一応毎日ジョギングを続けたため(ただし、ノルマ十キロを二日目からは五キロ、七日目からは二キロに減らしたが)なんとか課題のダンスを踊りきることができた。とはいえ、ジョギングを始める前に比べたらまだマシだが、綾香の身体には今日もかなりの疲労が植えつけられてしまったのだ。

「あと三日で筋肉痛治るとかいな」

不安げな表情をしながら、綾香はぐるぐると肩を回した。「湿布つけてテレビに出るわけにもいかんし」

「最悪そうなくても、それはそれで新しいかもしれん」

本気とも冗談ともとれない顔で南が言う。「とんこつ湿布アイドルか」

「なに適当なこと言っとるんよ！」

綾香は慌ててツッコミを入れた。「そんなことしたら、あの娘に馬鹿にされるやん！」

「あの娘？」

眉をひそめる南。

「菊田つばき！ 次の仕事で共演するっちゃん？ うちの……」

彼氏って言っちゃいかんとよね。「と、友達が言っとなんよ。

めっちゃめっちゃ性格悪いって」

「ああ」

また煙草を一本取り出しながら南は頷く。「あのアイドルにはほとんど馬鹿にされた方がいい。視聴者はお前みたいなのでも同情的になってくれるからな。おまけにあいつと共演すると、お前みたいなでも凄く性格が良く見えてくる」

「私みたいなので悪かったね」

そう口をとがらせる綾香であったが、心の中では少し納得していた。

なるほど。ってことは、菊田つばきは汚れ役を引き受けてくれるわけやね。けっこう良いヤツやん、なんちゃって。

「そうそう」

南がふと何かを思いついたように言った。「そういえば、社長が  
いい加減お前に会いたいわってよ。どうする？ 事務所寄ってくか？」

「えっ？」

反射的に綾香は顔を下げ、自分の身体を見た。本日は着替えるのが面倒だったので、ダンスを行った時の、汗がたっぷり染み込んだ黒TEEシャツと白ジャージという格好のままである。「き、今日も遠慮しとこうかな」

「まあ、そうだな」

うんうんと南は頷いた。「こんな汗臭いやつを事務所の命運を賭けたアイドルですなんて紹介されたら……。いて！」

「ところでさ」

テーブルの下で南の足を踏みつけながら綾香は言った。「社長ってどんな人なん？ 私見たことないっちゃけど」

「どんな人？」

うーん、と唸る南。「別に普通だな。いたって普通の人だ。さっさと足どける」

「ふーん」

足をどけながら、興味がなさそうな顔で綾香は相槌を打った。実際、さほど興味はなかったのだ。

と、その時、喫茶店入り口の扉が開き、スーツを着た三、四十代の男性客が一人、店内に入ってきた。

綾香はなんとなく彼を目で追ってみた。男は白髪のマスターと二、三言会話をした後、入り口近くの席にドンと腰を下ろし、こちらに顔を向けると、ハツとしたように目を見開き、片手を上げた。

「え？」と綾香は南に視線を移した。すると、南が「お疲れです」と座ったまま、男に頭を下げた。

「知ってる人？」

キョトンとした顔で、南にそう尋ねる綾香。

「あれ、社長」

「え！？」

驚いて男に視線を戻す。

あ、あの人が社長？

社長はコーヒーを運んできたマスターと再び何かを話してから、

コーヒーを一口啜り、満足そうに息を吐いた。

その姿はなんとというか……。普通だった。

やがて、彼は綾香の自己紹介を普通に受け、綾香を普通に激励したのであった。

### 43 ご近所ロケーション

九月一日。綾川チロリ本格デビューの第一歩となるテレビ収録は、ロケーション屋外撮影である。集合場所は偶然にも渋谷駅。SDP事務所から目と鼻の先だ。というわけで本日は、SDPにてマネージャー南にメイクを施してもらってから、歩いて撮影現場に直行することとなっていた。

「本当にこんなんでいいとかいな？」

事務所の角にある大きな姿見を睨みながら、綾香は誰にともなく言った。「このジーンパンにノースリーブは合わないかも」

彼女が選んだ本日の服装は、やや厚手の白いノースリーブに、バギージーンズ。衣装は用意されないもので、テレビにもこの格好で出演することとなるのだ。ちなみに、メイクは既に終わっている。

「九月といえども気温はまだ真夏なみだぞ？」

南は綾香のすぐそばで、ローラーのついた椅子に足を組んで座っていた。「お前の場合は脇汗を隠すためにも、年中ノースリーブでいた方がよい。お前には袖をつける資格がない。袖とは一生無縁だ」ケンカを売ってくる南を無視し、綾香は近くにいた他の若い女性社員に尋ねた。

「どう思います？ こんな感じで大丈夫ですかね」

「良いんじゃないですか？」

社員は二度大きく頷いた。「カジュアルな感じで素敵ですよ。あとはハットとか被ればいいかも」

「ハット！ それ、いいですね」

綾香も頷き、今度は南に身体を向き変えた。そして、右手を差し出す。「ハット、ないと？」

「ない」



南は平然とそう答えると、げんなりとした顔を見せる綾香をよそに立ち上がり、壁の時計を見た。「そろそろ行くぞ。お前の方が新人なんだから、菊田より先に現場に来ておかねばならん」

綾香も時計を見る。集合時間は午前十時。現在は九時を少し過ぎたところである。

菊田つばきがそんなに早く来るわけないやん。まあでも、そろそろ出たほうがいいか……。

「分かった。でも、その前に……」

綾香は目をつむって大きく息を吸い、そして吐いた。「ふう。よし」

「一丁前に緊張してるのか？」

「まあ」

頬をポリポリとかきながら、綾香は苦笑した。「テレビ局の人とか、菊田つばきに会うのがちょっとね」

撮影の前に簡単な打ち合わせが行われる予定だ。その時がスタッフや、菊田つばきとの初顔合わせなのである。

「頑張ってくださいね」

先ほどファッションのアドバイスをくれた女性社員の言葉に続き、事務所内にいた他の社員も口々に綾香にエールを送った。

「ありがとうございます」

感激して頭を下げる綾香。「頑張ってください」

「社員総出で送り出されるとは、お前も良い身分になったもんだな」いつの間にかシヨルダーバッグを肩にかけ、黒いソフトハットを被った南が、扉に向かいながら言った。「皆を失望させないように、まあ頑張れ」

「ハットあるやんか！」

南の頭を指差し、そう叫びながら、綾香は彼の後を追った。

「感謝しろよ」

大谷ビルを出て五分ほど歩いたところで、南が後ろを歩く綾香に一言。「お前みたいな新人がいきなりこんな人気番組に出演できるのも、俺が必死に売り込んでやったおかげだからな」

「そんなこといっても『トーキョーリラックス』なんて観たことないもん」

綾香が出演するのは、関東ローカルの人気深夜番組『トーキョーリラックス』のワンコーナー、『衝動買いでリラックス』である。番組のレギュラーである菊田つばきが、毎回違うゲストと共に、街に出て衝動買いをするという、いたってシンプルな内容だ。綾香はゲストという扱いになる。

「そりやお前が知らないだけだろう。若者たちに今絶大なブームを巻き起こしている番組だぞ」

「へー」

「……。まあ、少し仕事を選び間違えた感はあるな」

しげしげと綾香を見つめる南。「次からはなるべく屋内の仕事を選ぶことにしよう」

「……」

早くも綾香の服は、彼女から噴き出す汗を吸収し、変色し始めていた。

やがて、人で溢れる渋谷駅八千公前広場に到着する。南と共に、

綾香はキョロキョロと辺りを見回した。すでに撮影クルーが準備を始めていると聞いていたが。

「あ！あれやないと?」

八千公像の近くに三脚に固定された大きなテレビカメラを発見する。その周りで何やら作業をする数人のスタッフらしき男女の姿も。「うむ」

綾香の指す方向を見て、南は頷いた。「プロデューサーがいるな、間違いない。よし、行くぞ」

人ごみをかき分け、南がずんずんとそちらへ歩いていく。

「あ、ちよつと待ってよ……。あ！ すみません」

慌てて彼に続くこうとする綾香であったが、通行人にぶつかり、遅れをとってしまふ。「ちよつとー、南さーん。いてっ！ すみませーん」

何度も人とぶつかりながらも、彼女はなんとか南に追いつき、彼の肩を叩いた。そして彼が振り返った瞬間、綾香は彼の顔を見て驚き「わっ」と声を上げた。

「プロデューサーに、グラサンつけたまま挨拶するわけにはいかなかったら？」

南はグラサンを外し、えびす顔に変身していたのだった。

## 44 クルーに合流

「お疲れさまでーす」

その南の声を聞いて、綾香はギョツとした。声色が普段より一オクターブほど高い、『ちえ美ボイス』に切り変わっていたからだ。

南の挨拶に反応し、スタッフたちが「お疲れさまでーす」と次々に声を上げた。そして、他の皆が何こともなかったかのように作業に戻る中、手に書類を持った一人の男だけが、二人に近づいてきた。「お疲れっす」

にこやかに笑いながら男は言う。「随分早いっすね」

色黒の痩せた男である。歳は三十ほどで、肩まで伸びた髪を茶色に染めていた。おそらく彼がプロデューサーであろう。

「いやあ、早く来てこいつを現場の空気に慣れさせたかったんですよ」

南も満面の笑みを見せる。そして、綾香の後ろに回り込み、彼女の両肩を手でガツシリと掴んだ。「うちの綾川チロリです。三輪さん、今日はよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします」

綾香もペコリと頭を下げ、挨拶をした。

「君がチロリちゃんか」

三輪は綾香の全身を舐めるように見た後、やや複雑そうな顔を見せた。「なんていうか……。ちえ美ちゃんとはちよつとタイプが違っうね」

その言葉の裏に皮肉めいたものを感じ取り、ムツと眉間にしわを寄せる綾香。しかし、その瞬間。

「……！」

いててっ！

肩に激痛が走る。どうやら、南が指に力を入れてるらしい。綾香はすかさず笑みを作った。「そ、そうですねー。ちえ美さんみたい

に素敵なアイドルになれるように頑張りますっ」

心にもないことを言いながら、肩の痛みが収まっていくのを確認する。南のお許しが出たようだ。

「じゃあ、もうちょいしたらリハやるから」

手に持った書類を綾香に差し出す三輪。「台本サラッと読んで」

「は、はい」

台本を受け取りながら、引き続き笑顔で綾香は頷いた。

「打ち合わせするっじゃないと？」

三輪が離れていった後、綾香は南に小声で尋ねた。

「時間が押してるのか、打ち合わせなんて必要ないって判断されたのか。まあ、こんぐらいの予定変更はこの業界ではザラだ。気にすんな」

「じゃあ、気にせんで台本読む」

台本をめくりながら綾香は言った。台本は、四枚のプリントの端をホッチキスでとめただけの物のようだ。

「それは構わんが」

辺りを見回す南。「やはり、まだ来てないらしいな」

おそらく菊田つばきのことであろう。綾香も同じように周辺を見回してみる。しかし、別のものに気を取られ、すぐに菊田つばき探しを中止した。

うわ、けっこう注目されとうやん。

通行人の多くは、テレビカメラなど気にもとめず、素通りしていくのだが、立ち止まって、興味深げにこちらを見物している者も少なくはない。

私のこと見とる人もおる。ひょっとして、私のこと知っとうとかいな。いや、それはないか……。でも、菊田つばきが来たらパニックになるっじゃないと？

菊田つばきは、知名度ほぼゼロの綾川チロリとは違い、売れっ子の部類である。

「ねえ、南さん」

ちよつと聞いてみるか。「つばきが来たら……。ん？」

隣に立っていたはずの南がこつ然と姿を消している。ふと別の方向を見てみると、すぐに、カメラの近くで三輪と何やら話し込む南の姿を発見した。「……………」

台本読むか。

しばらくして、やたらと口元をにやつかせなら南が綾香のもとへ帰ってきた。

「なんをそんな気持ち悪い顔しよう？」

綾香は冷めた顔で南に尋ねた。彼女は、八子公像後方の緩やかなカーブを描くベンチに腰かけていた。

「ちよつと面白い話を聞いたもんでな」

南はハットを取り、また被り直しながら言った。「そんなことよ、そこ汚れてないか？ 一応その服は衣装なんだから、どこにでも座るなよ」

「ふん」

不満げな顔で、綾香が立ち上がるうとした時、周囲がややざわついた。「ん？ どうしたとかいな」

その原因はすぐに判明する。数メートル先でスタッフたちに囲まれる、サングラスを付けたド派手な巻き髪女の存在に気がついたからである。ほとんどの見物客たちの目は彼女に向けられている。

綾香はハツとした顔で南を見た。南がまたニヤリと笑いながら言う。

「ようやくおいでらしいな」

女に視線を戻す綾香。「ほれ、お前の方が新人なんだ。挨拶してこい」

あいつが、菊田つばき……！

綾香はくんと自分の脇の臭いをチェックした後、南に背中を向け「お尻汚れてない？」と尋ねた。そして、南からゴーサインを受け取ると、「よし」と菊田つばきのもとへ歩き始めた。

## 45 小悪魔を踏み台に

「あ、あの」

綾香が菊田つばきにその声をかけた瞬間、つばき、それにスタツフたちもキョトンとした顔で皆、綾香に注目をした。綾香は一度全員の顔を見渡してから、つばきのサングラスの向こうにある瞳を真っ直ぐに見つめた。「新人の綾川チロリです。き、今日はよろしくお願いします」

そして深々と頭を下げる。

そのまま一秒、二秒、三秒と時間が経過するも、一向につばきからの返事はない。

あ、あれ？

五秒ほど待ったところで、綾香はようやく頭を上げた。それから、菊田つばきの様子を窺ってみるが……。

ええっ!？

綾香は衝撃を受けた。天と地が逆さまになり、鳥は海を泳いで魚は空を飛んだ。つばきは、なんと何ごともなかったかのように、綾香を無視し携帯電話をいじっていたのだ。

あ、ありえない……。

綾香がシヨツクを受けたのは、そんな菊田つばきの態度そのものに対してではない。人の挨拶を平気で無視してしまう人間が同じ地球上に存在していた、ということに対してだ。

「チ、チロリちゃん」

近くにいた、スタツフと思われる若い男性が苦笑しながら綾香に近づいた。「ごめんね。今、つばきは忙しくて」

「い、忙しいって……」

携帯いじっとるだけやん!



綾香はつばきを睨みつけた。つばきは、そんな綾香の視線など気にもとめない様子で携帯をいじり続けている。

よく見ると、つばきの身体のうちらこちらに煌びやかなアクセサリーが光っていることに綾香は気がついた。指先にはリング、耳にはイヤリング、首からはペンダント。

今流行りのセレブってヤツか。金を持ちすぎて、性格が腐ってしまつとつちやない？

心の中でそう呟いた後、綾香は「ん？」と周囲の空気の異変を感じ取った。

振り返ってみると、見物客たちが皆、苦笑したり、目を泳がせたり、とにかく複雑そうな顔で押し黙っているではないか。

引いてる……。無理もないな。

と、その時綾香の脳裏に、あるアイデアが浮かんだ。

綾香は見物客たちに向かって、ピツと姿勢を正した。そして「新人アイドルの綾川チロリです。よろしくお願いします」とまた深々と頭を下げたのだ。

一瞬の静寂を破ったのは一人の男性のこんな言葉であった。

「いいぞ！ がんばれよ」

綾香はすぐに頭を上げ、見物客たちを見回した。そんな彼女に次々と激励の言葉が浴びせられる。

「負けるなよ！ お前も絶対売れるぞ」

「けっこう良い子だね。パツとしない顔だけど」

「礼儀正しいアイドルだな。ファンになっちゃったぜ」

綾香は、何度も「ありがとうございます」と見物客たち（「パツとしない」発言の女を除き）に頭を下げた。そして、頭を下げるから、横目でこっそりつばきを見やった。つばきはこちらの様子などお構いなしに、未だ携帯の画面に視線を下ろしたままである。

ふん、あんたを踏み台にして私もブレイクしたるけんね。

「それにしても、この子と違って菊田つばきって本当に性格悪いよな」

ある男性のその言葉に反応し、綾香は再び見物客たちに視線を戻した。男性の発言が引き金となり、同じようにつばきを非難する声も続々と上がり始める。その光景を見て綾香は、菊田つばきの態度にやや疑問を覚えるのであった。

なんで、こんなに人がたくさんおる前で挨拶を無視したりするっちゃろ。人前では良い子を演じときゃいいのに。

そんなことを考えながら、しばらくぼんやりと見物客たちを眺めていたが、こちらを見てニヤニヤと笑う南の姿を目の端でとらえ、その瞬間思考は停止した。

「どっつ?」

南のもとへ戻り、綾香は彼に小声で言った。「凄かる? 見事にあいつを利用してやったばい」

「ああ」

南は満足そうに頷いた。「お前の腹黒さも負けてないな」

「ふん」

プイと顔を背ける綾香。「なんとも言えばいいやん」

そう綾香が憎まれ口を叩いた時、プロデューサー三輪が手でイヤホンを作り、そのイヤホンを通して大声で言った。

「それじゃあそろそろ撮影開始しまーす。出演者の方、お願いしまーす」

綾香はそれを聞き、「ええっ!?!」と声を上げた。そして、再び南に顔を向ける。

「リハーサルあるつちやない?!?」

「リハ?」

ハットを脱ぎながら南は言う。「さっきも言ったが、この業界じゃ予定変更はザラだ。ここではコーナーの冒頭とシメの部分だけ撮

影するらしいから、本番前にちよつと合わせるぐらいで充分だつて判断されたんだろ。まあ、それもリハつちャリハだが」

そして、彼はハットを綾香の頭に乗せた。その瞬間「ん」と目をつむる綾香。「ちゃんと台本読んだか？」

まぶたを開き、ハットを被り直しながら綾香は答えた。

「もちろんよ」

## 46 テレビの現場

八チ公像をバツクに、綾香はつばきと並んで立った。五メートルほどの空間を置き、正面にテレビカメラとその他機材。その周りにスタッフたち。そして更にその奥には見物客たち。見物客は、八チ公像後ろのカメラに映るポイントにまでいる（スタッフたちの息がかかっており、即興のエキストラともいえる）。ところどころざわついてはいるものの、それが気にならなくなってしまっほどの緊張感が現場を支配していた。そんな雰囲気にもまれ、綾香も次第に緊張し始める。

これがテレビ収録の現場か。落ち着け！ 落ち着け、私。

音声スタッフにピンマイクを取りつけてもらいながら、綾香は深呼吸をし、緊張を静めようとした。しかしながら、なかなか上手くはいかない。

「おい！ 柴田」

カメラのすぐ隣に立つ三輪が突然声を上げた。綾香のそばにいた若い、眼鏡をかけた女性スタッフが「はい」と返事をする。「チロリちゃんの顔の汗を拭いてやれ」

え？

言われて初めて綾香は気がついた。幾度も汗が顔面を流れては、あごの辺りから地面に滴り落ちていてではないか。

柴田と呼ばれた女性スタッフが、メイクを落とさないように器用な手つきで綾香の汗を拭き取っていく。綾香には、ハットを持ち上げ、その作業を円滑に進める手伝いをするくらいしか、できることはなかった。それを見守るスタッフたちはほぼ無言である。

やばい。いきなり私が足を引つ張つとる。

チラリとつばきの表情を窺う。すると、先ほどまでサングラスに隠されていた彼女のつり目がちな目が、冷たく綾香をとらえた。すぐに視線をそらす綾香。

な、なんよ！ 文句があるんなら私の汗に言ってよ。

やがて、柴田が離れると同時に、綾香の斜め前にしゃがみ込む、野球帽を被った別の男性スタッフが言った。

「それじゃあ、確認です」

同時に立ち上がる彼。全員が彼に注目する。「こっちのスタートコールに合わせて、つばきがタイトルコール。そんでコーナーの説明の後で、チロリちゃんの紹介ね」

つばきを指差してから、次に綾香を指差す。「チロリちゃんもしつかり相槌打ってね」

「は、はい」

綾香がそう返事をした時、隣のつばきが「あのお」と口を開いた。綾香は今日初めてつばきの声を聞いた。

「確かコールの後に八チ公をアップで撮ってから私にズームするんですたよねえ」

舌足らずな口調である。改めて彼女に嫌悪感を覚える綾香。「それじゃあズームの後にタイトルコールしたほうが良いんですかあ？」  
「いや」

男性スタッフではなく三輪が答える。「今日は八チ公アップの時にタイトルコールを重ねるから。つばきはそのつもりで」

彼らの会話の意味が綾香にはよく分からなかった。

そのつもりってどのつもり？ 結局何に合わせればいいと？ いや、私はタイトルコールせんっちゃけん、私には関係ないとよね。それにしても、とつばきの顔を見る。

やっぱり落ち着いとるな。さすが先輩ってとこか。

男性スタッフのスタートコールに合わせて、つばきが「衝動買いでリラックサー」とタイトルコールを行う。続いて、つばきと綾香、

それにスタッフたちが一斉に拍手をした。

「どうも、菊田つばきでえす。毎回ゲストをお招きし、街で衝動買いをするというこのコーナー。本日のゲストはデビューしたての新人アイドル、綾川チロリちゃんてえす」

ほぼ無表情で、つばきが綾香をそう紹介した。

「どうもですー」

カメラに向かって精一杯笑顔を作り、綾香は声を張り上げた。「よろしくお願いしまーす」

「はい、どうもお。元気良いですねえ」

それに引きかえ、全く元気のない口調のつばき。「チロリちゃんは普段衝動買いとかはするのお？」

「そうですねえ」

台本に書かれていた台詞を思い出しながら綾香は答えた。「貧乏性なんで、普段は衝動買いとかせませんねー」

「ああー、貧相な顔してますもんねえ」

どっ、と沸く現場。しかし、綾香だけは固っていた。

そ、そんなん台本になかったらうもん！

「や、やめてくださいよー」

気を取り直し、綾香は笑った。「貧相な顔と貧乏性は関係ないですよっ？」

「さあ、今日は見てのとおり、渋谷を舞台にお送りしていくわけですから」

綾香を無視するつばき。

「なんで無視するんですか！」

綾香がツッコミを入れるが、それすらもつばきは無視してしまうのであった。

「どんな衝動買いになるのか、いやー、本当に楽しみですなえ」

「はい、オッケー！」

男性スタッフが声を上げる。「すぐに締め撮影行きますので、台本確認しといてください」

綾香初のテレビ撮影は意外にもすんなり一発オーケーであったが、綾香の顔はやや沈んでいた。

一応、オーケーは出たけど、なんかつばきばかり目立ってたな。心の中でそう呟き、はあーと深い溜息を吐く綾香。と、その時。

「ちよつと……」

耳元で誰かが囁いてきた。ハッとそちらに顔を向け、そこに立つ人物の顔を見た瞬間、綾香は一気に顔を強張らせた。

つ、つばき!?

その人物は紛れもなく菊田つばきであった。

## 47 小悪魔のアドバイス

「な、なんででしょうか？」

おそろおそろ綾香がそう尋ねると、つばきはまた綾香の耳元に顔を近づけ、更に小さな声で言った。

「綾川さん、博多弁喋るんですよ」

「えっ？」とつばきの顔を見る綾香。「だったら私にツッコむ時は標準語じゃなくて、博多弁でツッコんだほうが面白いと思いますよ。タメ口でいいから」

先ほどの舌足らずな口調とは全く違った丁寧な口調である。「ね？」

そしてつばきは笑った。『小悪魔アイドル』とは思えない天使のような笑顔であった。綾香はわけが分からず、キョトンとした顔で、ただ「はあ……」と返事をするのが精一杯であった。

な、なんなん？ いまさら私に好かれようと思ったってそうはいかんばい。

でも、と彼女は思う。

博多弁でツッコミか……。確かにそつちのほうが面白いかも（綾香が喋っているのは博多弁ではなく、長崎弁である。念のため）。

「はい、じゃあ締めの確認いきまーす」

男性スタッフの声が現場に響いた。

「いやあ、今日は色んなもの買っちゃいましたけどお、また来れたらいいですねえ」

全然また来たくはなさそうにつばきが言う。綾香は「そうですね」と相槌を打った。「チロリちゃんは、もうこの番組に来れないかもしれませんけどね」

「なん言いようだよー！」



言われたとおり、博多弁でツッコむ綾香。演技ながらつばきを睨みつける。「また呼んでくれたってよかるもん！」

見物客たちから笑い声が洩れる。それを聞いて綾香は思った。

ほ、本当にウけた！

「それじゃあテレビの前の皆さまあん」

綾香を無視し、カメラに向かって手を振るつばき。「また来週お会いしましょうねえ」

「また来るけんねー！」

綾香もカメラに向かって手を振った。

女性スタッフ柴田にまた汗を拭いてもらいながら、綾香は三メートルほど先でマネージャーらしき男性と何やら話をする菊田つばきの横顔を眺めていた。

あいつのおかげで良い感じの締めになった。お礼言っと思ったほうが良いっちゃうか。

「チロリちゃん」

突然、柴田に話しかけられる。

「え？ あ、はい」

「さっきのやりとり、面白かったね」

そう言いながら彼女は、カメラ近くの、円形のベンチの一角に腰を下ろし、難しい顔で台本を睨む三輪を一瞥した。つられて綾香もそちらを見る。「三輪さんも言ってたよ。本編で面白いのが撮れたら」

今のところ冒頭と締めの挨拶を撮り終えたのみで、コーナー本編の撮影はこれからなのだ。「チロリちゃんをゴールデンの番組にも使ってみるかなって」

「ゴ、ゴールデンですか!？」

「うんー！」

こ、これは……。

またつばきに目を向ける。つばきは片方の目を見開き、手鏡を覗き込んでいるところであった。マスカラのチェックでもしているの  
であろうか。

「やっぱり、お礼言っておこう。」

そう決心した綾香は、柴田が離れると同時に、つばきのもとまで歩いた。そして「つばきさん」と名前を呼ぶ。

怪訝な顔でつばきがこちらに顔を向けたのを確認し、綾香は更に言った。

「あ、あの。さっきはありがとうございました。おかげで、なんていうか……。良い仕事ができました」

軽く頭を下げる綾香。そんな綾香を見て、つばきは一瞬、戸惑ったように眉をひそめた後、何も言わずにプイと綾香から顔を背けた。ポカンとした表情になる綾香。

……。

もうこいつとは関わりたくない。

八チ公口付近の壁に寄りかかり、手帳の中を覗む南に綾香は近づいた。

「ん？」

やや間を置いてから、綾香に気がつく南。「終わったか？ けっこう早かったじゃねえか」

「ちゃんと見とった？」

綾香は腕を組み、誇らしげな表情を浮かべた。「NGゼロばい。三輪さんからも太鼓判もらっちゃった。本編でも面白かったらゴールデンの番組に出させてくれるって」

「ふーん」

興味がなさそうに相槌を打つ南。「そいつは頑張らないとな」「なんよ？」

南の態度を見て、綾香は唇を尖らせた。「もっと喜ばばいいのに。」

「ゴールデンばい？」

何も答えない南。綾香は眉をひそめ、南のしている手帳を覗き込もうと首を伸ばしかけたが、突然「チロリさん」と誰かに話しかけられ、それを中止した。

「え？」と振り向く綾香。そこに立っていたのは見知らぬ少女二人組であった。二人とも、何故かもじもじとした様子だ。

「ずっと観てました！」

少女のうちの一人が言う。「撮影頑張ってください」

「あ、本当ですか？」

綾香は顔を輝かせた。「ありがとうございます」

そして、すぐさま頭を下げる。ハットがずれそうになり、右手でハットを押さえつけた。

「あと……」

おそろおそろといったふうには、少女は手帳とペンを差し出した。

「サインお願いしてもいいですか？」

「サ、サインですか？」

綾香は頭から右手を下ろし、照れ笑いを浮かべながら、手帳とペンを受け取った。続いて、頬をポリポリとかく。「えーっと……こんな感じでいいのかな」

普通に日本語で『綾川チロリ』とサインをする綾香。

「あ、私もお願いします」

今度はもう一人の少女に手帳とペンを手渡される。手帳にペンを立てながら、綾香は南に顔を近づけ、こう囁いた。

「ブレイク間近って感じやない？」

それに対し、南は表情を変えず、手帳に目を落としたまま言った。「明日までにちゃんとしたサイン作っとけ」

「……」

宿題を出されてしまう綾香であった。

## 48 小悪魔の素顔

その後、渋谷センター街、渋谷109などを回り、二時間ほど比較的スムーズに撮影は終了した。そして、最後の撮影場所となった道玄坂のバイキングレストランにて、そのままささやかな打ち上げが行われることとなった。

スパゲティ、カレーライス、寿司、アイスクリームが乱雑に盛りられた皿を円形のテーブルの上に置き、椅子に腰かけながら、綾香はキョロキョロと辺りを見回した。広い店内には『トーキョーリラックス』関係者以外の一般客もかなりいたが、こちらを気にかけている様子の者はごくわずかであった。その理由として『主役』が不在だということが挙げられるだろう。

ほんと、どこ行っただっちやる。

そう、撮影が終了した頃から菊田つばきの姿が見えなくなってしまうのだ。

「チロリちゃん、それ凄いね」

綾香の目の前に置かれた皿を見て、女性スタッフ（アルバイトのADだということが判明している）柴田が苦笑した。ちなみに彼女の皿にはエビチリとスパゲティだけが盛られている。

「あ、柴田さん。つばきさんって、もう帰っちゃったんですか？」

「え？ つばきちゃん？」

綾香の左隣の席に座り、柴田も辺りを見回す。「いないね。もう撮影終わったから、ひよっとしたらロケバスで着替えてるのかもしれない」

「え？ ロケバスなんてあったんですか？」

「うん」

頷く柴田。「すぐ近くに色んな局のロケバスが停まってるポイントがあって、うちもそこに停めてるんだよ。つばきちゃん、いつも撮影が終わったらすぐに着替えちゃうんだ。やっぱり疲れるんだっ

て

「へー」

そう相槌を打ち、綾香はアイスクリームが付着したエビフライにかぶりついた。そして、口を動かしながら考える。

やっぱり疲れる？ どうゆう意味？

「柴田さん、もうお腹ぺこぺこですよー」

数分後、白いTEEシャツを着た、ショートカットのボーイッシュな少女がそう言いながら、皿を手に、綾香たちのもとへ近づいてきた。

「あれ、いつの間に戻ってきたの？」

柴田が顔を上げ、少女に対して言う。そして少女が持った皿を見て、また苦笑した。「わ、チロリちゃんと良い勝負だ」

皿にはカレーライス、チキン南蛮、シューマイ、アイスクリームが盛られていた

綾香は訝しげな表情で少女の顔をじっと見つめた。柴田の様子から、スタッフだと予想できるのだが……。

「こんな子おったっけ？ ひょっとして今までロケバスに待機してたとか？」

「ん？」

その時、綾香は気がついた。少女の大きなつり目がちの目に見覚えがあることを。「あ、ああっ!？」

少女を指差す綾香。少女はキョトンとした顔で不思議そうに首を傾けた。

「き、菊田つばき……!？」

「どうしたんですか？」

ボーイッシュつばきはそう言いながら、綾香の右隣の席に腰を下

るした。「雰囲気変わり過ぎてビックリしちゃいました?」

そしてふふ、と無邪気な顔で笑う。

「や、やっぱりつばきさんなんですか?」

「当たり前じゃん」

答えたのはつばきの反対隣に座った柴田であった。そちらに顔を向ける綾香。「つばきちゃんじゃなかったら誰よ」

いやいやいやいや。

「か、髪の毛はどこいったんですか?」

「あれ? ウィッグですよ」

今度はつばきが答える。平然とした口調である。「私、一応小悪魔キャラじゃないですか? だから、より小悪魔っぽくみせるために巻き髪ってことにしてるんです。アクセサリーとかもそうですね」  
言い終わってから、はむ、とカレーライスを口にするつばき。

綾香の頭の中は混乱中である。

つまり、つばきの小悪魔キャラは演技で、本当は礼儀正しいボーイッシュな少女だということは理解できたが、なぜ小悪魔キャラを演じるのか、そして、戸惑う自分の前で、なぜつばきと柴田がこんなに平然としているのかが理解できなかった。

「な、なぜ小悪魔キャラなんかを……」

「芸能界で生き抜く術です」

間髪いれずにつばきは答えた。「もともと普通のアイドルだったんですけど、マネージャーに言われて、特徴をつけるために小悪魔キャラに変身してみたら、仕事がバンバン増え始めたんです」

「な、なるほど」

芸能界は厳しいな、と綾香は思った。「それじゃあ、挨拶を無視したのも」

「あつ」

口を大きく開け、つばきは声を上げた。そして申し訳なさそうに顔をしかめながら、フォークを持った綾香の手を握りしめる。「本当にすみませんでした。周りに一般の人がたくさんいたので、キャ

ラを壊さないために無視しちゃいました」

「キ、キヤラを壊さないために……」

つばきの言葉をそのまま繰り返す綾香。

「ロケの時は撮影の合間も気が抜けないからね」

柴田がそう言って微笑んだ。「でも、綾香ちゃんも知ってるとはいえ、さすがに無視されたらビックリしちゃうよね」

「し、知ってる？」

綾香の目は点となった。

「ちゃんと説明あったでしょ？」

綾香の様子を見て、柴田もポカンとした表情に変わる。「マネー

ジャーさんに説明しておいたって、三輪さんが言ってたよ」

キツと綾香は隣のテーブルで食事をとる南を睨みつけた。すると、同時に南がサツと視線をそらしたことに綾香は気がついた。

あ、あのハゲ……！

## 49 私のみままで

渋谷駅から次の仕事へ向かうと言うつばきと、一緒に渋谷駅まで向かうこととなった。綾香はそのまま吉祥寺へと帰宅である。

「うわー、やつぱり」

すれ違う人々の表情を窺いながら、綾香は言った。「誰も気がつきませんね。つばきさんだつて」

「そうでしょ？」

微笑むつばき。「そういう意味でも、変装は大正解つてことです。プライベートでまで小悪魔キャラ演じてたら疲れちゃうし」

一方、撮影した時のままの格好で誰にも気づかれない綾香だが、彼女の場合は誰にも気づかれないというより、誰にも知られていないといったほうが相応しい。それなのに、綾香はなんとなくハツトのつばを下げて、顔を隠してみた。少し、悔しかったからだ。

「それにしても」

苦笑しながらつばきが言う。「まさか私のこと聞かされてなかったとは思いませんでした。本当に失礼なことしちゃいましたね」「いいんです」

唇をとがらせ首を振る綾香。「悪いのは全部あいつですから」

そして、顔だけ後ろを振り返る。綾香たちの五メートルほど後方に、つばきのマネージャーと談笑しながら歩く、南の姿があった。

先ほど、『なんで教えてくれんやつたよ！』と南に問いただしたところ、『面白そうだから内緒にしておいた』と、彼は平然と言つてのけた。それ以来、彼と口を利いていない綾香である。

「でも」  
同じく後方に目を向けながらつばきは言った。「優しそうなマネージャーさんですね。私のマネージャーなんてすごく冷たいんですよ」

南は未だにえびす南のみままである（おまけに綾香以外の者に対し



ては『ちえ美ボイス』で話す)。

「いやいやいやいや」

綾香はもの凄い勢いで首を振り、前を向き直してから言った。「あれは猫被ってるだけです！ 本当はもの凄く性格悪くて、もの凄く人相が悪くて」

「でも」

優しげに微笑むつばき。「ひよっとしたら、そっちが猫を被った姿なのかもしれませんよ。私と同じように小悪魔キャラを演じてるのかも」

また後ろを振り向く綾香。そして、南の不気味な笑顔を見て、それはないそれはない、と自分に言い聞かせるのであった。

目の前の赤信号で、大勢の人に混じり足を止める。渋谷駅前スクランブル交差点。ここを渡れば、すぐに八千公前広場である。

「あの、いくら仕事のためって言っても、小悪魔キャラを演じるのって辛くないですか？」

綾香は何気なくつばきにそう尋ねてみた。「悪いイメージとか付いちやうし」

「いえ、『菊田つばき』の時は私じゃないって割り切ってますから」  
菊田つばきは芸名だそうだが、本名はまだ知らない。「それに、小悪魔キャラを支持してくれて、ファンになってくれる人もけっこういるんですよ。そうゆう人を裏切らないためにも、絶対にキャラを壊しちゃダメなんです」

「ほえー」

つばきの、そんなファンを想う心に綾香は感心した。彼女はまた自分のことで精一杯なのである。「私も、もうちょっと頑張らんといけませんね」

「ううん」

首を振るつばき。「チロリさんはそのままでもいいと思いますよ。」

まあ、ファンを想い気持ちは大事ですけど、私みたいにキャラを演じる必要はないと思います」

「そ、そうですね？」

「はい」

つばきの目は真剣そのものだった。「チロリさんはアイドルとしてすごく魅力的です。そう感じる人は、私以外にもたくさんいるんじゃないでしょうか」

信号が青に変わる。みるみるうちに人で埋めつくされていく交差点。綾香たちも、人にぶつからないように注意しながら、横断歩道を歩き出した。

「あ、届きました届きました」

八チ公前広場にて、携帯の画面を見ながら綾香は言った。これも何かの縁、ということでもメルアドを交換したのだ。「自分を見失いそうになったらメールで相談します」

カチャと携帯を閉じ、それをジーンズのポケットに仕舞いながらおどける綾香。

「別に自分を見失いそうになった時以外でも大丈夫ですけど……」

苦笑するつばき。「それじゃあ、ここでお別れですね。チロリさんは吉祥寺でしたっけ？」

「はい、普通に帰ります」

「宿題忘れるなよ」

南が口を挟む。二人のマナージャーたちも、今はすぐそばにいた。綾香は南を無視し、つばきと、つばきのマナージャーにペコリと頭を下げた。

「今日はありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそ」

つばきとマナージャーも頭を下げる。それから二人は、八チ公口に向けて歩を進め始めた。「頑張ってね、チロリさん」

小さく手を振りながらつばきが言う。綾香も「つばきさんも」と手を振って応えた。そして、応えながら彼女は思った。

つばきさんだって、小悪魔キャラなんか演じなくても充分魅力的やと思うけどな……。

やがて、二人が遠くに離れてから、南が不意に口を開いた。

「お前の場合は、小悪魔キャラを演じようとしても誰も本気にしないだろうな。演技が下手すぎて」

ムツとして南の顔を見る綾香。南は早くもサングラスを装着していた。

「いいもん」

綾香はプイと顔を背けた。「私は私のみまでいくもん」

## 50 再会はラジオ

「ごちそうさま」

そう言つて橘川夢多は箸を置き、両手を合わせた。それから、立ち上がつて自分の部屋へと向かう。

「あら、部屋にこもっちゃうの？」

不思議そうに目を丸くしたのは彼の母親である。やや太り気味の体型で、長く茶色の髪にチリチリパーマをあてている。彼女はキッチンの洗い場に向かい、食器洗いをしていた。「これから『爆笑魚雷天国』が始まるよ」

橘川の好きなテレビ番組である。彼が毎週欠かさずそれを観ていることを母も知っていた。

「ああ」

部屋のドアノブを掴みながら、橘川は少しだけ目を泳がせた。「今日はどうしても聴きたいラジオがあつてさ」

「ラジオ？ こっちで聞けばいいのに」

こっちというのは、ここダイニングと隣り合う、リビングのことである。リビングにはテレビやパソコン、それにラジオも聞ける大きなコンポまで置いてあつた。

「い、いやあ」

更に戸惑つた表情を浮かべる橘川。「ちよつと資格の勉強とかもしておきたくてさ。自分の部屋でゆつくり聴くわ」

「ふーん……。バイト忘れないようにね」

母の疑いの眼差しを背に受けつつ、橘川は素早く部屋の扉を開け、中に入り扉を閉めた。そして、部屋の明かりをつけふうと一息吐く。さすがに恥ずかしいよな。お目当てがアイドルだなんて。

二十一歳の橘川は、つい最近生まれて初めてアイドルのファンになつてしまったのであつた。

場所は橘川とその両親の住む千代田区内の某アパートである。時は九月二日の午後八時。橘川はこの時を一週間も前から楽しみにしていた。

録音用のカセットをセットしてから、ラジオの電源を入れ、滅多に聞くことのない、とある関東ローカルのFM放送局に周波数を合わせる。やがて、CDラジカセのスピーカーから流れてきたのは、テンションの高い女性DJによる一人語りであった。

「皆は最近何か新しく始めたものってある？ タエコの場合はやっぱりヨガなんですけど、近頃ヨガって女性の間でブームになってるから……」

ベッドで仰向けになり、橘川はしばらくその話に耳を傾けていた。「先週の犬のしつけ方の話に対する様々なご意見頂いておりまして、まずは東京都品川区のメロン大好きパンちゃんから。あはは！ それ言うならメロンパン大好きじゃないの？」

橘川はだんだんと苛立ってきた。同時に不安にもなる。一言もあの子の名前が出てこないじゃないか。あの子がこのラジオに出演するというのは本当なのであるだろうか。「さーて、今日をご存知のとおり、可愛いゲストが来てくれましたよー」

身体を起こす橘川。ベッドの枕元に置いてあるラジカセの録音ボタンに手を伸ばす。「とその前に、まず曲を聴いていただきましょう。ケビン&ロビンで『ムーン』」  
パタッと、橘川はまた身体を寝かせた。

ケビン&ロビンの『ムーン』（最近イギリスで流行っているらしいデュエットソングだ）を聞きながら、橘川は物思いにふけっていた。

一ヶ月前、カビリオンスのイベントにゲスト出演した綾川チロリのファンになって以来、彼女の所属するSDPの公式サイトを毎日

のように開き、彼女のメディア出演情報をチェックしてきたが、まるで更新される気配がなかった。しかし、一週間前、ついに新しい情報が掲載されたのだ。それによると、本日の『タエコのピュアハートステーション』（橘川が今聴いているラジオ番組）に彼女がゲスト出演するそうではないか。

ようやくチロリちゃんに会えるんだな……。

先月イベントで見た、豚の着ぐるみ姿の綾川チロリを思い浮かべ、無意識のうちの顔をにやつかせてしまう橘川。たとえ声だけだとはいえ、初めて好きになったアイドルとの一ヶ月ぶりの再会は、彼にとって、その喜びでむせび泣きしてしまうほどの、待ちに待った瞬間なのであった。

「さーて、皆、待たせちゃってゴメンね。いよいよ紹介しちゃうよー」

橘川はまたガバツと身体を起こした。それから、慌ててカセットの録音ボタンを押す。「ん？ ふんふん。あー、それじゃあ自己紹介してくれるらしいから、皆、ちゃんと聞いててね」

言われなくても、耳の穴をかつぽじって聞いてやる。

やがて……。

「新人アイドルの綾川チロリです！」

ついに、お目当ての声が聞こえてきた。そしてガタガタ、と雑音が鳴った後。「チ、チロリンって呼んでね！」

一瞬の静寂。

「ハ、ハハ……」

やがて、困惑したようにDJタエコが乾いた笑い声を漏らした。そんな、ラジオから流れる微妙な空気を読み取り、橘川は感激で胸を奮わせた。

これだ！ この外し方だ！ ラジオの向こうにいるのは間違いなく、あのチロリちゃんだ。

「今日はよろしく願います……」

「へ、凹まないで……。うん、よろしくねー、チロリンちゃん。それにしても、そのポーズ可愛いねー。ラジオの前の皆にお見せできないのが残念だなー」

左手を腰に、右手をチヨキにして額に持っていくあのポーズだな、と橘川は理解した。

「でも観に来てくれた人たちは真似してくれてますよー」

「本当だー。皆、チロリンちゃんになれたかなー」

「あ、あのおじさん、上手！ アハハ」

チロリのその笑い声を聞き、橘川は悔しげに顔を歪めた。このラジオが公開生放送だということは知っていたが、この後九時よりバイトを控えているため、観に行くことはできなかったのだ。

クソ！ バイト休んでもいくべきだったか。

何はともあれ、綾川チロリ初のラジオ出演、いよいよオンエアである。

## 51 可愛い我が子

「チロリちゃんは、先月デビューしたばかりの新人アイドルで、愛らしいルックスとコミカルなキャラクターが早くも話題沸騰中です」

続いてDJタエコが改めてチロリを紹介する。「なんか、聞く話によると博多弁で喋るんだって？」

「はい、博多出身です。とんこつアイドルを目指しています」「とんこつアイドルって」

DJタエコはブツと吹きだした。「なんか良いダシが取れそうなネーミングだね」

「はい。私が入った後のお風呂とかめっちゃダシが効いてると思います」

DJタエコはまた笑った。そして、ベッドで仰向けになりながらそれを聴く橘川も、やはり笑っていた。

やっぱりチロリちゃんは良いなあ。生で観たかったなあ。ああ、チロリちゃん。

枕をチロリに見立てて抱きしめる。キスをする。頬ずりをする。母親には絶対に見せられない姿である。

「じゃあせつかくだから、チロリちゃんに博多弁喋ってもらいましょうのコーナー！」

タエコの呼びかけと同時に、パチパチと拍手の音も聞こえてくる。「お題です。この文章を喋ってね！『タエコのピュアハートステーション絶賛放送中です。これを聴けばあなたのハートに何かが生まれるはず』。まあ宣伝なんですけどねー」

苦笑するタエコ。「それじゃあチロリちゃん、マイクに向かってレッツゴー。エコーかけるから」



「は、はい。それじゃあいきます」

その台詞の後半部分には、すでにエコーがかかっていた。やがてはあと息を吸う音が聞こえる。「タエコのピュアハートステーション絶賛放送中ばい！これを聴けばあなたのハートに何かが生まれるはず！」

はず、はず……。と、エコーにより、その言葉が反響する間だけ、若干静かになるが、すぐにタエコが声を上げた。

「お、おお……。す、凄いねー」

ややコメントに困っている様子のタエコ。もうエコーはかかっていない。「でも、最初のほうに『ばい』が入っただけのような気がするけど……」

「お題が悪いんよ！」

チロリが不貞腐れたように言った。「博多弁を宣伝に使おうとするけん、こんなことになるっちゃん」

「あはは、怒られちゃったけど今度はいっぱい博多弁入ってるー」

「あ、素が出ちゃいました。今のにエコーかけてくれれば良かったとこ」

タエコの笑い声とまた拍手。

チロリちゃん、イベントの時よりもだいぶアイドルの仕事に慣れたみたいだな。すごく落ち着いてるし、変な博多弁も喋らないし。トークの面白さにも磨きがかかっている。

橘川はまるで我が子を見守る親のような温かい目をしながら、じつとラジオに耳を傾けていた。

チラツと机の上に置いた時計を見やる橘川。まもなく八時半、あと十分ほどで家を出なければバイトに遅れてしまう。「タエコのピュアハートステーション」の放送自体は八時から九時までとなっているが、綾川チロリの出番はそろそろ終わりかもしれない。

どうせならチロリちゃんの出番が終わるまでは聴いて行きたいよ

な……。

と、そう思った矢先だ。

「それじゃあ、チロリちゃん。今後の活動予定などあれば」  
出し抜けに『締め』の空気に変わるラジオ。

「あ、はい」

橘川は身体を起こし、少しだけ身構えた。公式サイトにもまだ掲載されていない最新情報が聞けるかもしれない（そもそも、公式サイトにはまだ先月のイベントとこのラジオの情報しか載っていないのだ）。「まず、明後日銀河放送さんの『オリエンタルナイト』にゲスト出演します」

「チロリちゃん、チロリちゃん」

タエコが小声で言った。「銀河放送さん、一応ライバルラジオ局だから宣伝ダメよ」

優しいな口調でチロリをたしなめる。

「あ、そうでした。テヘ」

また親の目になる橘川。うんうん、失敗は誰にでもあるさ、と頷きながら、その出演情報を頭にインプットした。「あと来週なんですけど、タマテレビの『トーキョーリラックス』のワンコーナーに出演します。是非観てくださいねー」

な、なに！？ あの人気番組にチロリちゃんが。

「わー、仕事山積みだねー。イベントとかはないの？」

「えーっと、イベントはまだ聞いてませんね……。多分あると思うんですけど」

歯切れの悪い喋り方でそう話すチロリであったが、急に、何かに気がついたように「あっ」と声を上げた。「一つだけ聞いてました。まだ先、来月末のことなんですけど……。言っただけ聞いてました。誰かにそう確認するチロリ。マネージャーあたりであろうか。」

あの、関東秀英大学の学園祭、秀英祭に呼ばれてまして。これも是非観に来てほしいです」

「おー、秀英祭かー。伝統ある学園祭だねー。ラジオの前の皆ー。

チロリちゃんに会いたい人は来月秀英祭に足を運びなさいよー」

「待つとるけんねー」

リスナーに向かい、チロリがそう呼びかけた時。

「ちよっとー」

不満げな調子でタエコが言った。「今の博多弁のところでエコー  
かけなきゃー」

今度はあははとチロリの笑い声。「まあ、とにかく今日は本当に  
楽しかったです」

そして無理やり別れの挨拶へと持っていくタエコ。「今日のゲス  
トはデビューしたての新人アイドル綾川チロリちゃんでしたー」

「ありがとうございます」

チロリの声がラジオから消えた後、タエコの紹介と同時に再生さ  
れた古い洋楽ポップスを、意識の隅でぼんやりと聴きながら、橘川  
はベッドの上であぐらをかいたまま固まっていた。目が泳ぎ、こめ  
かみ辺りに汗が流れている。

チ、チロリちゃんが……。

口元が緩み始める。目が大きく開き始める。

チロリちゃんがうちの大学に来る……！？

そこで、ふと時計を見る橘川。時刻は八時四十五分を回っていた。  
橘川はにやつき顔から一転、青ざめた顔となり、慌ててラジオの電  
源を消して立ち上がったのであった。

## 52 どんな仕事も

淡い照明の薄暗い店内。聞こえてくるのは他の客たちのざわめき、そして肉の焼けるジューという音ばかりである。白いソフトハットを被った池田綾香は、鉄板の上に並べられた幾つもの肉片の中から、その一つを箸でつまみ、口へと運んだ。

「あ、熱っ！」

そう小さく叫び、口から肉を離すも、ふうふうと肉に息を吹きかけ、再び口の中に入れる。「ん、ん……。ああ、美味しい」

幸せそうに目を細め、綾香はまた肉へと箸を伸ばした。その様子を向かいに座る彼女のマネージャー南吾郎が、呆れたような顔つきで眺めていた。

「こんな安っぽい肉でよくそこまで感動できるな」

南も肉を口にする。「ふむふむ……。やはり、高級店の肉に比べたら、食感も風味もだいぶ劣る」

「……」

じーつと南に軽蔑の眼差しを向ける綾香。「文句ばっか言わんで、黙って食いーよ」

「そりゃ、俺の勝手だろう」

また肉に箸を伸ばしながら南は言った。「俺の金で食ってんだから」

綾川チロリ初のラジオ出演終了後、二人はその公開生放送が行われた赤坂の某施設のすぐ近くにある、大手焼肉チェーン店で食事を取っていた。南の言うとおり、勘定は彼持ちということになっている。

「でも、あんたがご飯奢ってくれるなんて珍しいやん」

烏龍茶の入ったグラスを持ち上げながら、綾香は意地悪な笑みを

浮かべた。「『ベリーブ』のコーヒーでさえ、自腹で払わせるくせに」

「まあな」

南もビールジョッキを手に取る。「今日は朝からハードスケジュールだったから、たまには良いだろう」

ラジオの前に、綾香は雑誌の取材やグラビア撮影、アイドル情報番組のコメント録りなど幾つもの仕事をこなしていた。

美味そうに烏龍茶を一口飲み、プハアと息を吐いてから綾香は言った。

「さっきのラジオどうやった？ 予定どおり、ドジっ子もアピールできたばい」

競合局の番宣をしてしまったのは、実は台本どおりなのである。

「お客さんも笑ったし、けっこうファンも増えたっちゃない？」

「そりゃ、ファンは増えただろうな。実質、お前の声が初めて電波に乗ったわけだから」

ラジオで綾香も言っていたとおり、前日収録した『トーキョーリラックス』のオンエアはまだ先なのだ。「ただ、これからが勝負だぞ。お前の『声』を聞いてファンになったヤツが、今度はお前の『姿』を見て、幻滅するかもしれない」

たいしたルックスでもないんだしな、と付け加え、南はぐいっとビールを口に流し込んだ。

「ふん」

不機嫌そうに、南から顔を背ける綾香。「顔で判断するファンなんかこっちから願ひ下げよ」

と、言いつつも……。

あんまり食べ過ぎたら、顔むくんじゃうかな。

そう考え、箸を置く綾香であった。

「さて」

カチと百円ライターの火を付け、それを口にくわえた煙草に引火させる南。指で煙草をつまみ、ふうと紫煙を吐き出してから、彼は続けた。「明日のグラビア撮影なんだが」

その言葉を綾香が遮る。

「分かってる」

綾香は真剣な表情で頷いた。「マイナー誌のどうでもいい撮影とは思ったらんよ。どんな仕事でも気合い入れて頑張るけん」

「うむ、まあそうなんだが……」

なぜか歯切れの悪い口調の南。「とにかくパニックにならないことだ。落ち着いていればどんなアクシデントにも対応できる。俺が言えることはそれだけだな」

「え？ そんなに難しい仕事なん？」

綾香は意外そうに目を丸めた。「ただのマイナー誌のどうでもいい撮影やるうもん」

「思ってるじゃねえか」

と、その時、南の携帯の着信音が鳴った。相変わらずメロディはない。南が無表情で携帯を取り出す。「三輪さんだ」

「え？ 三輪さん？」

『トーキョーリラックス』のプロデューサーである。綾香の興味深げな視線を無視し、南は通話ボタンを押してから携帯を耳にあてた。

「どうもー、お疲れさまですー！」

ちえ美ボイスである。「はい、はい。あ、どうもこちらこそ迷惑ばかりかけて……。はい？ え！ 本当ですか？」

綾香はその様子を目を輝かせながら見守っていた。

ひよっとして、ひよっとして……。

「ふう。疲れた」

やがて、通話を終えた南が、携帯を閉じてから、声を戻し言った。「お前を別の番組でも使うことに決めただよ。残念ながらゴールデンじゃないけどな」

しょんぼりと、やや顔を曇らせる綾香。「でも、全国ネットだぞ？それに、『トーキョーリラックス』に比べて出番も多くなりそうだ」

南は煙草をくわえ、それを美味そうに吸った。

「そ、そっか」

気を取り直し、綾香は自分を納得させるように二度頷いた。「どっちにしても大きな仕事やね。よし、気合い入れるばい！」

「ああ、明日の撮影もな」

ふうと紫煙を吐き出し、南がボソツと言う。綾香はまたしても目を丸め、それから、眉をひそめて考え込んだ。

なんなん？　なんでそんなにマイナー誌のどうでもいい撮影にこだわるん？

やっぱり思っていた綾香であった。

## 53 相手は一億円

ピンクのキャミソールと、デニム素材のホットパンツ姿の綾香は、慌しく作業をする数人のスタッフたちを横目に、一人パイプイスにのんびりと座っていた。500MLペットのコーラをぐびぐびと飲み、やがて「プハア！」と息を吐いた後、意味もなくペットボトルを宙にかかげる（『もう一杯！』というジェスチャーであり、なんとなくやらなければ気が済まなかったのだ）。そして、誰にも聞かれないように小さくゲップをした。

九月三日の午後四時、某撮影スタジオ内。本日の仕事は骨董品専門誌『林海』のグラビア撮影である。『林海』という雑誌の存在を、綾香は今まで全く知らなかったが、聞くところまだ創刊前らしく、知らないのは当然であった（創刊前でなくとも、骨董品専門誌などおそらく知らなかっただろう、と綾香は考えている）。ちなみに、今回のグラビアは創刊号に載るそうだ。なぜ、骨董品専門誌などに自分のグラビアが掲載されるのか、と最初は綾香も不思議に思ったが、細かいことは気にせずに仕事に臨むこととした。

現在は撮影前の空き時間というヤツである。綾香は再びペットボトルを口に近づけたが、何者かに「チロリちゃん」と声をかけられ、それを中止した。

「そろそろ撮影始めるから」

ふさふさとヒゲを生やした中年の男性。彼は今日の撮影を担当するカメラマンであり、名は広田というそうだ。「さつきも話したとおり、本当に気をつけなきゃダメだよ」

真剣な表情でそう話す広田。

「あ、はい」

綾香も真剣な顔を作り、頷いた。「細心の注意を払います」

そして、スタジオ内のある一角に目を向ける。壁と床が、天井近くから伸びた真っ白な布で覆われており、照明が当てられ、三脚に



固定されたカメラが向けられている。そこは、これから綾香が立つ、被写体の背景となる場所であった。その真っ白な床に、ポツンと置かれた物がある。高さ三十センチほど、幅二十センチほどの丸い『つぼ』である。濃い茶色をしたつぼの表面に、照明の光りが鈍く反射していた。

ただのシヨボいつぼにしか見えないけどな……。

綾香は緊張をほぐすために、大きく深呼吸をした。撮影そのものに対する緊張ではなく、本日の『仕事相手』、つぼに対しての緊張である。

落ち着いていこう。落ち着いて……。

今回のグラビアのテーマは『古きと今』。古き物と新しき者のツィショット写真を撮ろうという企画である。新しき者はもちろん新人アイドル綾川チロリ。そして、古き物がつぼである。つぼは約一千年の歴史を持つという骨董品であり、約一億円の値が付いているそうだ。

今度は、スタジオの隅で壁に寄りかかり、腕を組んでこちらを見する、えびすモードの南に顔を向ける綾香。南と目が合い、心の中で彼に呼びかける。

南さん。あんたがこの仕事にやたら入れ込むのも無理はないね。

一億円もするつぼをもし壊したりでもしたら、私もSDPも終わってしまうかもしれんけんね。

それから間もなくして、撮影は始まった。先ほどの服装に白いソフトハットを加え、裸足になった綾香が、つぼの隣で様々なポーズを取る

「よし。チロリちゃん、今度はつぼの後ろに回ってみようか」

つぼを蹴ってしまったわないように慎重な足取りで、広田の指示どおり壘の後ろへと回る綾香。そして、カメラのシャッター音が二度鳴る。「オッケー、そこであぐらをかいてみようか」

あ、あぐら……。

慎重に慎重に床へ座り込み、綾香はゆっくりと両足を組み合わせていった。やがて、なんとかあぐらを組む体勢になる。カメラから見れば、綾香の開かれた股間をつぼが隠しているような状況であるうか。「それじゃあ、つぼを包み込むように両手をそっと回してみて」

つ、包み込むように……。

一瞬躊躇しながらも、言われたとおりにする綾香。と、その時……。

「あつ」

指先が壺をかすめ、綾香は驚き、ビクツと身体を奮わせた。幸い、つぼに異常はない。

その様子を見て、広田がハッハッハ、と声に出して笑った。

「ちよつと触ったぐらいで割れたりしないから、そんなに緊張しなくていいよ」

撮影を見守る周りのスタッフたちも笑う。

それは分かつとうけど……。

綾香もぎこちない笑みを見せながら、高鳴りをやめない心臓の音を必死で押さえ込もうとしていた。

それでも撮影はなんとか順調に進み、次第に綾香も心を落ち着かせてきた頃である。一人の若い男性スタッフが広田に近づき何かを耳打ちした。

「ふん、ふん……」

小さく頷きながら相槌を打つ広田。「よし分かった」

そして綾香に顔を向ける。「ゴメン、チロリちゃん。ちよつと問題が起こってさ。しばらく待機してもらえる？」

「あ、分かりました」

つぼの隣でうつぶせに寝転がった綾香（その時、広田に指示され

ていたポーズである）は、そう答えると同時に身体を起こし、ゆつくりと立ち上がった。それから、ハットを被り直そうと両手を頭に伸ばしかけた時である。

広田がスタジオを出て行き、スタッフたちや南までもがぞろぞろとそれに続いたのだ。綾香はなぜか、あっという間に一人スタジオ内に取り残されてしまった。

な、なんなん？

困惑し、不安げな視線でキョロキョロと室内を見回す綾香。相変わらず照明の光は綾香とつばに浴びせられたままである。

いったい、何が起こったっていうと？

しかしながら、言われたとおり待機しておくしかない。綾香は両腕を上げ、とりあえず背伸びをすることにした。そして腕を下ろし、そのまま「ふあーあ」とあくびをする。

コン。

突然、近くで物音が聞こえ、綾香は大きく口を開けたまま、反射的にそちらに目を向けた。そこは彼女の隣、つばが置いてあった場所である。

ん？

目を細めて、その場所を凝視する。あくびの直後で涙目となっており、視界が滲んでよく見えないのだ。ただ、つばの形が変化しているような気だけはする。背が縮み、幅が広がっているような……。目元を指でこすり、涙を拭う綾香。改めてつばに目を向ける。

「え………？」

綾香はようやく気がついた。「え？ え？ えーっ!？」

つばが真っ二つに割れてしまっていたのだ。

## 54 号泣少女

綾香はつぼを見つめたまましばらくの間、固まっていた。頭の中では幾多もの思考が暴れ回り、それぞれがぶつかり合って何一つ形にならない。

わ、私のせいなん？

なんとか形にしたのはそんな言葉であった。綾香はふうと深呼吸をし、それからキョロキョロとあたりを見回した。誰かに目撃されていないかという不安からであったが、いずれは結局……。

ガタツ。

スタジオの扉が開いた。綾香はハッとそちらに目を向けた。同時に姿を現したのは広田で、彼は苦笑を浮かべながら、カメラの後ろに戻ってきた。

「いやー、待たせちゃってゴメンね」

「あ、いや、その」

綾香はひきつった笑顔で彼を迎えた。無意識の内につぼの前に立つ。広田の視界に割れたつぼが入らないようにである。やがて、他のスタッフたちも続々とスタジオに戻ってくる。さすがに隠しきれない。綾香は観念し、肩を落としてつぼの前から身体を退けた。

「ん？」

広田が眉をひそめた。「んん？ あ……。ああーっ！」

ついにその時は訪れたのだ。「っ、つぼが！ つぼが割れてるぞ！」

「ええ！？」

スタッフの一人である若い男性が声を上げ、一直線につぼに駆け寄った。下に敷かれた純白の布を土足で踏み荒らす。しかし、全く気にしていない様子だ。それどころではないのである。「ち、ちよっとどうゆうこと？」

困惑したような口調で、綾香にそう尋ねる。

「わ、分かりません！」

首を振る綾香。手も振る。今にも泣き出してしまいそうな表情である。「いつの間にか割れてて、でも私、何もしてないんです！」

「こ、これはどうゆうことだ！」

その時、一際大きな怒鳴り声スタジオ内に響いた。綾香も若い男性スタッフも、全員がその声の主に注目をする。声の主は陶芸家などがよく着ている作務衣さむえを着た、背の小さな白髪の老人男性であった。先ほどの撮影中にはいなかった人物である。彼は扉の近くで目を見開き、わなわなと全身を震わせていた。

「せ、先生！」

若い男性スタッフが怯えたような顔で老人に向かって言った。鬼のような形相をした老人がつばに近づいてくる。彼は割れたつばをしばらく凝視した後、若い男性スタッフを睨みつけ、言った。

「ワシの大事なコレクションを……！ お前か！ お前がやったのか！」

「ち、違います」

ぶるぶると顔を振るスタッフ。

綾香は信じられない、といった目つきでその光景を見つめていた。ええっ！？ つばの持ち主なん！？

「じゃあ、お前か！？ お前だろう！」

今度はカメラの後ろの広田が標的となる。

「違います！」

彼も首を振り、キツパリと否定した。

「じゃあ、誰が……」

そして、老人は綾香に顔を向けた。反射的に顔をうつむかせる綾香。額に滲んだ汗の量は半端ではない。やがて、コツコツと自分に近づいてくる足音が聞こえ始める。

来る、と綾香は顔を強張らせた。

「お前か？」

先ほどの取り乱したような口調から、やや落ち着きのある口調に変わっていた。しかしながら、それはより一層重く、厳しく響いた。綾香は静かに顔を上げ、老人に目を向けた。老人の顔はやはり険しかった。

「わ、分かりません……」

老人と目を合わすことはできなかった。「気がついたら音がして見たらなんでか知らないけど割れてて」

「まさかあくびをしたんじゃないだろうな」

「え？」

あ、あくび……？

「このつぼは近くにいる人物があくびをすると割れてしまうという呪われたつぼなんじゃ」

老人はそう言うってから呆れたような表情を見せ、首をゆっくりと振った。「わざわざ伝える必要はないと思ってな。なぜなら、仕事中にあくびをする不届き者などいないじゃろう？」

足元に汗がポタポタと落ちる。綾香は顔を強張らせたまま、黙って老人の話聞いていた。「もう一度聞く。まさかあくびをしたんじゃないだろうな」

ぐつと綾香に顔を近づける老人。

あくびをしたら割れるなんて、そんなまさか……。でも実際に私があくびをした時に……。

足元にまた汗が、いや今度は別のものだった。

「……。ました……。あくび、しました」

綾香は泣いていた。両手で顔を押しえつけ、泣きじゃくっていた。「あくびをしたら割れるなんて……。そんなこと、想像もしてなくて……」

何も答えない老人。彼の顔はもはや涙で全く見えないし、見ようとも思わない。綾香はそれから数秒間すすり泣きを続けた。一つの覚悟を胸に秘めながら。

もう、私のアイドル人生は終わりなんやね。いや、私の人生自体も……。一億円のつぼの責任なんて、どうやってとればいいん？

パツと目の前が明るくなったような気がした。そして、バタバタと騒がしい音に続き、場違いな軽い声が聞こえる。

「はい、チロリちゃん。どうもです」

え？

手の甲で涙を拭き取り、目を開ける。目の前に青い派手なスーツを着た中年男性、その後ろにテレビカメラを構えた人物、大きなマイクを持った人物、スタジオのものとは別の照明を持った人物……。いずれも今まで姿のなかった人物である。「チロリちゃん？ これ読める」

スーツ姿の男が言った。……。と、綾香はその人物に見覚えがあるということに気がついた。バラエティ番組でよく見かけるお笑いタレントではないか。彼は野立て看板のようなフリップボードを持っており、そのフリップにはこんな文字が書かれていた。

『我らがドッキリ探検隊』

ド、ドッキリ……？

綾香は周囲を見回した。先ほどまで厳しい顔をしていた老人も、スタッフも、広田も、皆笑顔を浮かべている。

その瞬間、綾香の緊張は解けた。へなへなとひざから崩れ落ち、そのままおばあちゃん座りになった。そして、「わーん！」と声を上げた。

「わーん、わーん！」

周りの視線など気にせず、顔を上げ、大声で泣きわめいた。「ひどいよー、ひどいよー！」

鼻水が垂れているのを自覚していたが、それでも綾香は泣き続けた。彼女は知らなかったのだ。目の前で彼女に向けられたテレビカメラの映像が、後に全国ネットで、しかもゴールデンタイムに流さ

ねるといつ事実を。



## 55 今夜はリラックス

四畳半の洋室に矢上詩織はいた。落ち着きなくそわそわしながら、正座で座っていた。上は黒のポロシャツを着ており、下は白のロングスカートを履いている。首もとにはシルバーネックレスが光っていた。

九月も半ばとなり、少しだけ気温が涼しくなった。下半身が肌寒く感じる。しかし、それは気温と薄手のスカートのせいだけではなかった。

狭い四畳半の部屋は、家具のせいで更に狭まっていた。テレビに本棚、タンス、そして小さなテーブルに乗った大きなデスクトップパソコンが壁際に置かれている。部屋の中心には、これまた小さな折り畳み式のテーブル。

続いて詩織は腕時計を見た。時刻は午後十一時を過ぎている。

まだかな、田之上くん。

心の中でそう呟いた時だ。玄関のほうからガチャとドアの開く音が聞こえた。そして、玄関から洋室までの短い廊下を歩く足音がこちらに近づいてくる。

「遅くなってごめん」

洋室に入るなり、田之上裕作は詩織に向かって苦笑を浮かべ、そう謝った。上は白いポロシャツ、下は薄い色のジーンズという姿である。左手に買い物袋を下げ、右肩にショルダーバッグを下げていた。

「うっん」

詩織は微笑を返す。意識的に作り上げた上品な笑顔である。「もつとかかるかなって思った。三十分も経ってないじゃん」

「まあ、買う物は決まってるしね」

シヨルダーバッグを放り投げ、詩織のそばに腰を下ろす田之上。同時にテーブルの上に買い物袋を置く。その買い物袋の中にチラシと例の四角い箱が見え、詩織は思わず頬を赤らめた。

「これ、何買ったの？」

あえて四角い箱には触れず、詩織は袋から少しだけ丸まった雑誌を取り出した。「んー？ 『TVマニア』？」

「新聞とる金なんてないからさ。ちよくちよく買ってるんだ。二週間分のテレビ欄が載ってて百円だよ。お得じゃない？」

「へー」

相槌を打ちながら詩織は思った。

テレビ点けないで正解だったな。

田之上を待つ間、幾度となくテレビの電源を入れかけた詩織であったが、結局踏みとどまった。勝手に電気代を上昇させるのは悪いと考えたのである。

そう、この部屋は田之上の自宅であった。

先月詩織が田之上と交際を始めてから、三度目のデートであった。吉祥寺駅近くのレストランで食事をした後、井の頭公園を散歩した。本来ならばそこでお開きのはずであったが、詩織の気分は果てしなく高ぶっていた。詩織が『田之上くんの部屋に行ってみたいな』と話すと、田之上はややためらいながらも、頷いてくれたのであった。荻窪にある田之上のアパートに到着した時だ。田之上が『あつ』と声を上げ、詩織は『どうしたの？』と聞いた。田之上は『アレがない』と答えた。そして、照れ笑いを浮かべながら、アレとは何かを教えてくれた。それはいわゆる避妊具であった。詩織も照れたが、もちろん彼女もそのつもりであった。

というわけで、詩織は先に部屋に入っておき、近所のコンビニでアレを買ってくるという田之上の帰りを待つことになったのである。それが午後十時四十五分頃のことであった。

玄関の脇にある狭いキッチンから、田之上がコーラのペットボトルと二つのコップをお盆に乗せ、持ってきた。

「詩織ちゃん、泊まっていくんでしょ？ 連絡とか大丈夫？」

「うん、メールしといた」

詩織は実家住まいである。両親は娘の一人立ちに比較的理解があった。「だから、のんびりしよう」

「そうだね。しばらくゆっくりしてからでも遅くな……」

そこで話を止める田之上。バツが悪そうに詩織から顔を背ける。

詩織はまた下半身が肌寒くなるのを感じると同時に、頬を赤らめた。無意識のうちに両手を股間にあてる。そして、フローリングの床に無造作に置かれた四角いアレをチラッと見やる。

もうすぐ田之上くと……。

二人にとって、今夜が初めての夜だということは言うまでもない。

「なんかやってないかな」

リモコンを操作し、田之上がテレビの電源を入れた。気まずい間を嫌ったのかもしれない。「もうすぐ十一時半か。この時間って何やってたっけ」

チャンネルを何度か切り替えた後、田之上はリモコンを置いた。

テレビにはソファで話をする三人の芸能人が映し出されていた。「

あ、『トーキョーリラックス』だ」

関東ローカルの情報バラエティ番組である。詩織も何度か観たことがあった。「カップルに人気があるんだってね」

詩織に笑いかける田之上。

「そ、そうなんだ」

二人はしばらくぼうつと番組を眺めていた。何もせず、何も話さず。やがて、番組の司会者がカメラ視線で「次は『衝動買いでリラ

ックス』のコーナーです」と言った時だ。

「詩織ちゃん……」

田之上が不意に詩織の名を呼んだ。「そろそろ……。いいかな」ドキッとすると詩織。彼女は顔を赤らめ、身体をもじもじとさせながらも、ゆっくりと深く頷いた。

田之上の腕が伸びる。腕は詩織の二の腕をつかんだ。詩織は全てを彼に委ねようと、瞼を閉じようとした。その時テレビの画面では渋谷駅の八チ公像をバッグに二人の少女が……。

二人の少女が……？

瞼を閉じるのを中止する。むしろ、見開く。

「ち、ちよつと……！」

「え？」

キョトンとした顔をする田之上。彼の腕を振りほどき、詩織はテレビに顔を近づけた。そして、二人の少女のうちの一人を注目する。テロップには『綾川チロリ』とあるが……。

あ、綾香じゃないのか……？

眉をひそめる詩織。白いハットの下にある綾川チロリの顔は、元親友の池田綾香とは微妙に雰囲気違って見える。しかし、それは化粧の仕方の違いや、髪の色の違いのせいだと説明できる程度だ。やはり、テレビの中の少女は綾香に違いなかった。

## 56 ネットでリラックス

「し、詩織ちゃん！　そ、その子」

振り返る詩織。田之上も目を見開いてテレビを凝視していた。彼も綾香とは顔見知りである。彼も気がついたのであろう。「綾香ちゃんにそっくりじゃない!？」

「うん、ていうか」と詩織はテレビに視線を戻した。

「どう見たって綾香でしょ。少し雰囲気変わってるけど」

「そ、そうだよね」

場面は八千公像の前から、渋谷のセンター街へと変わっていた。二人の少女がこちらに向かって歩きながら話している。彼女たちの周りには大勢の人がいて、テレビ撮影に何の関心も示さず行き過ぎる者、カメラに向かって手を振る者、携帯カメラで少女たちを撮影する者と、内訳は様々である。

《センター街ってえ、なんでこんなに人ばっかなんだろうねえ》

綾川チロリではないもう一人の少女が言う。最近よくテレビで観かける菊田つばきというアイドルだ。『小悪魔アイドル』として人気を集めているらしいが、彼女の舌足らずな口調や派手な巻き髪は、詩織に不快以外の何物も感じさせることはなかった。

《私もよく来るんですけど……》

チロリがそこまで言ったところで、つばきが《あー、そうですかあ、別に興味ないですねー》と本当に興味がなさそうに一蹴する。

《なんでよ！　私にも喋らしいよ！》

そのチロリのツツコミを聞き、詩織は改めて確信する。

長崎弁だ。やっぱり……。

「どつゆうこと?」

眉をひそめながら、田之上が言った。「綾香ちゃん、アイドルになっちゃったの?」

「そうみたいだね」

詩織は頷く。そして思う。  
綾香、本当にアイドルになりたかったんだ……。

「電話してみたら？」

田之上が苦笑いを浮かべ、詩織にそう尋ねた。「ひよつとしたら、綾香ちゃんも今テレビ観てるんじゃない？」

笑顔の理由は、おそらく詩織の返答に予測がついているからであろう。詩織はテレビの中の元親友の顔を感慨深げに眺めた。

舞台は渋谷109内のアパレルショップに変わっていた。《似合います?》と、売り物のティーシャツを胸の前で広げる、綾香の子供のような笑顔がとても懐かしい。綾香とは二ヶ月ほど前の例の出来事以来、一方的に絶交中であるが。

もう、許しちゃおうかな。

そう詩織が考えた時、テレビの中の舞台がまた変わった。同じ109内の同じようなアパレルショップである。そこは、以前綾香と二人で訪れたことのあるショップであった。

そういえばその時、こんなことがあった。詩織は試着した服をそのまま購入しショップを出たのだが、それから一時間ほど経過した後、後に元の服が見当たらないというに気がついた。試着室に置き忘れたのではと考え、二人でショップに戻った時、今度は購入した服の下にしっかりと元の服を着ていたということに気がついたのだ。基本はしっかり者の詩織でも、時にはそのような天然ボケを披露する。あれはドジ踏んじやったなー。

思わず笑みをこぼしてしまう詩織。

《あー、ここにはちよつと苦い思い出があるんですよねー》  
テレビの中の綾香が言う。

あちゃー、やっぱり覚えてたかな。

《なにい? 興味ないけど話させてあげるっ》  
つばきのその言葉に、綾香は《そりゃどうもー》と嫌味ったらし

く返し、苦い思い出を話し始めた。

《前に来た時なんですけどー》

呆れたように溜息を吐く綾香。《私つてば試着した服をそのまま買って、もともと着てた服を試着室に置き忘れちゃったんですよねー。そんで店に戻ったら、実は買った服の下に着てたという。もうドジ踏んじやいましたー》

え……？

詩織は目を丸めて固まった。

な、なんで私のエピソードを自分のエピソードに……？

《ふうん、馬鹿だねえ》

やはり興味がなさそうなつばき。《チロリちゃんみたいなドジな子と一緒に皆疲れちゃうだろうねー》

《そうかもしれないねー》

苦笑し、頬をポリポリとかく綾香。《こんなドジな私ですけどよろしく願いますー》

ははーん、と詩織は心の中で呟いた。

ドジキャラをアピールするために、勝手に自分のエピソードにしたんだな。ドジキャラはいらないけど、人付き合いに有効な笑い話だったのに……。もう私は使えないじゃないか！

「詩織ちゃん？」

田之上にまた名前を呼ばれ、詩織は我に帰った。「ね？ もう許してあげなよ」

やはり苦笑いを浮かべている。

詩織は田之上が予測したとおりの返答をすることにした。

「やだ」

テレビを視聴した後、二人はインターネットで綾川チロリについて調べていた。

「やっぱりサニーダイヤモンドプロダクションだ！」

パソコンのディスプレイを指差しながら、詩織は田之上に向かつて言った。「綾香、ここから私をデビューさせようとしてたんだよ」

『綾川チロリ』で検索して一番最初に出てきたページが、SDP公式サイト内の彼女のプロフィールだったのである。

「あれ？ 福岡県博多区出身になってる」

田之上がにこやかに笑う綾香の写真の横にある、プロフィールの一角を指差す。「確か長崎だったはずだよ。なんでだろう」

「博多弁を売りにしたかったんじゃない？ 長崎弁じゃ馴染みがないから」

「なるほど」

二度頷く田之上。「あ、ところで詩織ちゃん、そろそろ……」

「今度は『トーキョーリラックス』のサイトに行ってみようかな」

田之上の言葉を遮り、詩織は言った。「綾香について何か書いてあるかもしれない」

「そ、そうだね……」

同時に発せられた田之上の小さな溜息に、詩織が気づくことはなかった。彼女は元親友の情報収集に夢中なのである。

部屋の片隅に転がる四角いアレのことも忘れて。



松庵の真一のアパートである。

「ギャツハツハツハ！ ギャーハツハツハ！」

テレビを指差しながら馬鹿笑いをする真一に、綾香は冷たい眼差しを向けていた。二人とも全く同じグレイのスウェット上下を着てフローリングの床に座り込んでいる。「馬鹿だよこいつ！ 誰だつて気づくだろ、骨董品専門誌ってなんだよ！」

テレビには、一億円価値があるつぼ（実はただの安物のつぼ）と一緒にグラビア撮影を行う、白いソフトハットを被った綾香の姿が映し出されていた。カメラマンの要求通り様々なポーズを取る綾香。『つぼの隣でシエーのポーズ』という意味不明な要求をされても、何の疑いもなく応える。「ギャハハ！ 腹が痛え！」

床を転げまわる真一。綾香はテーブルの上の、グラスに入った烏龍茶をぐびっと飲んだ。

「あんだ、ちよつと笑いすぎやないと」

「ヒイヒイ……！ 悪ひ悪ひ！」

真一は息をするのも苦労している様子である。「でも、笑えるんだから、仕方ねえだろ！ ヒイ」

「こんなん、どこが面白いとよ」

テーブルにグラスを置きながら、綾香もテレビに目を向けた。

撮影スタジオにポツンと取り残された綾香。彼女が退屈そうにあぐらをした途端、コンと音を立て、つぼが真つ二つに。そして、それを綾香のいるスタジオとは別の部屋でモニターリングするのは、青いスーツを着たお笑い芸人のトーマス和田である。彼も真一と同じように爆笑しながらモニターに見入っていた。

「おい、見るよあの顔」

涙目の真一がまたテレビを指差し、綾香に向かって言う。「めちやめちや焦ってるぜ。もう馬鹿丸出しだよな」

キツと睨みつける綾香の視線を無視して、再びテレビを見つめる真一。

やがて、スタジオに戻ってきたスタッフたちに割れたつぼを発見され、おろおろとろたえる綾香の姿。つぼの持ち主（実はただのおじいさん）も登場し、その場の緊張は一気にピークとなる（番組的には緊張ではなく、盛り上がりがピークとなる）。持ち主が《このつぼは近くにいる人物があくびをすると割れてしまうという呪われたつぼなんじゃ》と綾香に話したところで、『チロリがあくびをしたため、急きょ取り入れた新設定』と、テロップが入る。

「そっか」

テーブルにひじを付き、つまらなそうな表情で綾香は呟いた。「私があくびしたところを狙ってつぼを割ったつちやないかね」

「当たり前えだろ！　いくらなんでもお前があくびするところまで計算してねえよ！」

相変わらず楽しそうな真一。「お、チロリ泣き出したぞ！　ちよーウケる」

問題のシーンである。泣きじゃくる綾香の姿を見て、トーマス和田が《それじゃあ、突入しましょう》と綾香たちのいるスタジオに突入。トーマスとテレビクルー、そしてフリップボードのドッキリという文字に気がついた綾香は、糸が切れた操り人形のようにひざから崩れ落ち、そのまま号泣を始めた。

《わーん、わーん！　ひどいよー、ひどいよー！》

涙と鼻水を垂れ流す綾香の顔がドアップで映し出される。

「ギャーハッハッハ……！　ハハ、苦しい」

腹を押さえながら真一は爆笑し、床にうずくまる。「おいおい、これ放送していいのかよ！　鼻水出しすぎ……！」

わなわなと肩を震わせ始める綾香。「ひい！　もう苦しいって！　勘弁してええ！」

「じゃあ、楽したるけん」

綾香はそう言うと、すつと立ち上がり、うずくまる真一の尻から、股間を目がけて思いっきり蹴り上げた。

「ぬほおおおお！」

九月下旬の某日、夜十時。綾川チロリ、ゴールデンタイム進出の瞬間であった。

不貞寝したフリの綾香の肩を真一が揺さぶる。

「綾香さーん。ごめんなさーい」

聞こえない聞こえない。「綾香さーんってば」

耳元にふつと息を吹きかけられ、ビクツと身体を反応させてしまふも、綾香は頑なに狸寝入りをやめようとしなかった。もはや意地である。「ふう、仕方ない。面白いビデオでも見るかな」

真一のその言葉のすぐ後に、パツとテレビの画面が切り替わる霧囲気。それから、ジーとビデオデッキからビデオの回る音が聞こえる。続いて、その音が止むと同時に。

《わーん、わーん！ ひどいよー、ひどいよー！》

綾香はバツと飛び起きた。

「なんビデオ録つとつとよ！」

「やっぱり起きてやがったか」

リモコンでビデオを止めながら、真一は悪戯そうな笑顔を浮かべる。「お前の記念すべき初ゴールデンの映像なんだから、もちろん永久保存版だろ？」

明らかに別の意味での永久保存版である。「デッキの録画ランプ点いてるの気がつかなかったのか？」

気がつかなかった……。

「もう」

座ったまま、ゲシツと真一の背中を蹴る綾香。「絶対消してよね。私、そんなもん二度と見たくないけん」

「それにしてもお前、これでいよいよ顔が知られたんじゃないか？  
明日からはグラサンなしで街、歩けねえな」

綾香はげんなりとした。確かにしばらくはサングラスなしで出歩けない。『あ、テレビで鼻水垂らしてた女の子だ』などと指を差されては敵わない。

「はあ、ゴールデンはまだ早かったな」

溜息を吐く綾香。と、その時だ。

「ところでこれ、全国放送なんだよな」

何気ない調子で真一が言ったのだ。「要するに佐世保のお前の親御さんたちも観てるってわけか。いつの間にアイドルになったって報告したんだ？ 親父さん、めちゃくちゃ厳しいんだろ？ なんか言ってたか？」

え……？

真一の言葉が脳天に突き刺さる。さあつと綾香の顔から血の気が引いていく。「ん？ どうした？ 綾香さーん？」

目の前で真一の手がチラチラと動く。しかし、綾香は我に帰ることができない。「ま、まさか……」

そのまさかであった。

## 58 名店ぶるうす

細長い湯切りに入った麺を素早く下ろし、止め、素早く下ろし、止め、湯を切る。続いて、そのラーメンをあらかじめ秘伝のスープを入れておいたどんぶりに移し変え、メンマ、ゆで卵、のりを飾り付ける。これで、ラーメン屋『ぶるうす』のスタンダードとなる。『醤油ラーメン（七百五十円）』のでき上がりである。

「ラーメン一丁お待ち！」

威勢良くそう叫び、井本真一はカウンター内から身を乗り出して、ラーメンをカウンターの上に置いた。カウンターの向こうで、ぼおとした表情のサラリーマン風中年男性がそのラーメンを自分のもとへ引き寄せる。そして箸を使い、ずるずるとラーメンを啜る。男が満足そうな顔に変わったのを横目で確認してから、真一は壁に寄りかかり、腕を組んだ。そんな彼の顔も心なしか満足げである。

ラーメン屋『ぶるうす』で真一がバイトを始めてから二ヶ月近くが経過した。今では真一も、一人でラーメンを調理することができるようになっていた（ただし秘伝のスープの味付けだけは店長と若頭のみの仕事である）。

恋人池田綾香のひどい泣き顔が全国に晒された日の翌日。昼ピークを過ぎた『ぶるうす』店内には、カウンター席の中年男性一人だけしか客がいなかった。

「井本くん」

入り口から最も遠いカウンター席に座り、新聞を読んでいた店長が真一の名を呼んだ。眼鏡をかけ、人の良さそうな顔をした初老の男である。短く刈り込んだ髪の毛に白髪が上手い具合にブレンドされており、見方によってはとても綺麗に見える。「ぼちぼち休憩取っていいよ。そろそろ萩本が来る頃だろうから」

「あ、はい」

そう答えながら軽く会釈する真一。続いて、入り口の真上にある時計に目を向ける。『若頭』の萩本和人の出勤時間である午後三時まで、あと十五分ほどである。と、その時、入り口の引き戸がガラツと開いた。そして、若い男女が店内に足を踏み入れる。

「わ、ブルースが流れてる」

黒い髪を後ろで束ねた女が店内を見回しながら言う。真つ黒なワンピースの上から白いブラウスを羽織っている。目が大きく、愛らしいルックスを持った女である。「だから『ぶるっす』っていうんだねー」

ん？

真一は少し引っかかった。女の顔に見覚えがあるような気がしたのだ。

「友達に教えてもらったんだ」

スポーツ刈りが少し伸びたような髪形の男。紺の टीーシャツと黒いジャージという姿である。こちらに見覚えはない。「このラーメン、けっこういけるんだってさ」

真一は店長に目を向けた。店長がこちらを見すえているのを確認し、真一は二度頷く。店長も頷く。『この二人にラーメンを出し終えてから休憩に入る』という合図である。

「へい、らっしやーいー」

入り口近くのカウンター席に並んで座った二人に真一は声をかけた。「何にしやしょう」

ラーメン屋でバイトをしていると、普段は使わない江戸っ子弁が身についてしまうものである。

「ラーメンで」

男がメニューも見ずに答えた。いわゆる『玄人』かもしれないと真一は思った。

「じゃあ、私も同じので」

女はそう言っつて、真一に向かってニコリと笑った。その笑顔が非

常に魅力的だったため、思わず胸をキュンとさせてしまう真一。  
こりゃあかなりの逸材だな。もしアイドルとしてデビューしたら、  
間違いなくDVD買っちゃうぜ。

そんなことを考えながら真一は「かしこまりやしたー！」と返事  
をした。

「ん？」

突然眉をひそめる女。じつと真一の顔を睨みつける。

「どうしたの？」

男は真一の顔を一瞥してから、女に目を向けて言った。女は真一  
を睨みつけたまま「ちよつと……」とだけ答える。

「あ、やっぱりっすか？」

真一はそう言って愛想笑いを浮かべた。「俺もなんとなく会った  
ことあるような気がしたんすけど」

「はい。ありますよねえ」

女は相変わらず真一を睨みつけたままである。「うーん、どなた  
でしたっけ？」

「ええっ!？」

真一と女の顔を何度も見比べる男。「二人とも覚えてないの？」  
呆れたような声で男は言った。

「おう、待たせたな、真一」

洗い場のほうから声が聞こえた。そちらに顔を向ける真一。そこ  
に若頭の萩本和人が立っていた。この店には洗い場の奥に勝手口も  
存在するのである。

「あ、お疲れっす」

頭を押さえて会釈する真一。

リーゼント頭を潰すようにタオルを巻きながら、萩本がカウンタ

「内、厨房へと歩いてくる。二十代後半ほどの男性で、背がとても高く百九十センチ近くある。」

「後は俺がやるから、お前は休憩入れ」

そう言ってから萩本はカウンター席に座る男女に顔を向け、にんまりと微笑んだ。「ラーメン二丁でしたっけね」

聞こえていたらしい。

お言葉に甘えて後は若頭に任せよう、と真一は店の奥へと下がった。頭に巻いたタオルを外し、それを洗い場の近くに置く。そして再び厨房へと戻り、そのままカウンターを出て、カウンター席に座る。店の奥、店長が座る場所のすぐ近くである。この店では、休憩中、一杯だけ無料でラーメンを注文することができるのだ。余分な金のない真一。その制度を利用しない手などない。

「あっ！」

女が声を上げた。口を大きく開けて（嬉しそうな顔で）真一を真っ直ぐに指差している。どうやら真一のトレードマークである金髪を見て、真一のことを思い出したらしい。

あっ……。

相手に思い出されたことが引き金となつてか、真一もようやく彼女のことを思い出した。

「えーっと……。詩織ちゃん？」

恋人池田綾香の元親友、矢上詩織である。



六月頃であつただらうか。真一は一度だけ、綾香の部屋を訪れた際に偶然遊びに来ていた詩織と顔を合わせたことがあつた。そういえばその時も、『この子がアイドルになったら絶対にDVDを買おう』などと考えていたが、まさか綾香のほうがアイドルになつてしまふとは、夢にも思わなかつたであらう。

真一は詩織の隣に移動していた。店内に流れるブルースの、心地よいリズムに身体を委ねながら、冷水の入ったコップを口につける。「昨日、二人で観てたんですよ」

ラーメンを箸で持ち上げながら、詩織の連れの男が言った。彼の名は田之上といつて、詩織のボーイフレンドらしい。そして、詩織と同じく、綾香の通っていた専門学校の元同級生らしい。「綾香ちゃんには悪いですけど、二人で大笑いしてました」

話題は昨夜の『我がドッキリ探検隊』、すなわち綾香のつぼドッキリである。

「笑つちやつたけど」

真一と田之上に挟まれる詩織。先ほどからずっと真一のほうばかりに顔を向けている。「ちよつと可哀想でしたね。綾香はああ見えてけつこう打たれ弱いから」

「はは」と笑う真一。

「別に可哀想じゃねえよ。あんなもん誰だつて気づくだろ」

髪をかき上げながら真一は言った。「それに仕事の中なのにあくびなんかしやがつて、罰が当たつたんだよ」

「ほい、真一」

カウンターの中から萩本がラーメンを差し出した。「その二人の分はお前がおごつてやれよ」

「ええ!？」

両手でラーメンを受け取りつつ、眉間にしわを寄せる真一。「勘弁してくださいよ。こいつらのほうが金持ってますって」

「持っていないです」

「一文なしです」

立て続けにカップル。

じゃあ、家でおとなしくカップ麺でも食ってるよ!

「そっいえばさ」

ラーメンを口に含みながら真一は言った。「詩織ちゃん、綾香と絶交中なんだって? 何があったか詳しくは知らねえけど、どうせ綾香が悪いんだろ?」

「もちろんです」

深くコクンと頷く詩織。やはり彼女は、ずっと真一側に顔を向けている。

「でも、今ではそんなに怒ってないんですよ」

一人のけ者にされ、つまらなそうな田之上。必死に二人の会話に入ってこようとす。「意地になってるだけなんです。本当は仲直りしたいくせに」

「違うよ!」

詩織がようやく田之上に顔を向ける。「仲直りなんかしたくない。それに、どうせあの子も芸能界で新しい友達作ってるだろうから、別に私と仲直りしたいなんて考えてないでしょ」

「そんな感じでも……。ないけどな」

断続的にラーメンを啜りつつも、器用に声を言葉にしていく真一。「新しく友達ができたふうでもないし……。綾香はどっちかかっていうと未だに詩織ちゃんと仲直りしたがると思う」

「え?」

詩織は目を丸めて真一を見た。「なんか私のこと話してました?」

「『トーキョーリラックス』って番組にあいつ出たの知ってる？」

真一のその言葉に詩織がただ頷き、田之上が「それを観て綾香ちゃんアイドルになったって知ったんですよ」と補足した。「その番組でさ、あいつ109のなんとかって店で、服忘れたと思ったら忘れてなかったみたいな話してたじゃん」

二人は頷く。真一はそこでようやく顔を上げ、箸を置いた。麵を啜りつくしてしまったのである。「あれって本当は詩織ちゃんの話らしいね」

「そ、そうなんですよね」

苦笑しながら詩織はまた頷いた。「え？ そうなの？」と田之上。

「なんで綾香、自分の話にしちゃったのかなーって思ってたよ」

「公共の電波で詩織ちゃんの失敗の話をすると、余計に詩織ちゃんに嫌われるかもしれないからって、自分の失敗ってことにしたんだってさ」

それを聞き、詩織は気まずそうに黙り込んでしまった。その詩織の沈黙に伝染したように真一も田之上も黙り込む。

「ほら」

数秒後、田之上が優しく詩織に笑いかけた。「綾香ちゃんも仲直りしたがつてるみたいだし、そろそろ許してあげなよ」

詩織は何も反応せず、黙り込んだままだである。

真一ははあと溜息を吐き、そして思った。綾香からはしつこく芸能界に勧誘した、とだけ聞いていたが……。

あいつ、いったい何をやらかしたんだ？

「綾香、今日も仕事ですか？」

複雑そうに眉を曲げ、詩織は真一にそう尋ねた。

「いや、今日は仕事はない。ただ、飛行機で佐世保に帰ってる」

「え？」

同時に驚きの表情を浮かべる詩織と田之上。「ひょっとして凱旋

ってやつですか？」

田之上が本気とも冗談とも取れないような顔で言う。

「いや」

ポリポリと頭をかきながら、真一は首を振った。「昨日の夜、あいつが親に電話かけて。そしたら、すぐ帰って来いって言われたんだってさ」

「えっ!？」

両手で口元を覆う詩織。「それって、やっぱアイドルのことですか？ それとも学校やめたこと？」

「多分両方だな。仕事があるから、明日までには東京に戻ってこなきゃいけないわけだけど」

真一は両手でどんぶりを抱え、スープを一口飲んだ。そして、ふうと軽く息を吐く。「説得して戻ってくるか、勘当されて戻ってくるか、さあどっちだろうな」

ガラス戸の向こうに、松の木や縁石で仕切られた花壇など、風情のある景観を持つ立派な庭がある。畳の上に正座で座る池田綾香は、その庭の動かないしおとしをうんざりとした顔で見つめていた。午前中に真一のアパートを出た時のままの、ティーシャツとジーンズという格好である。

「聞いたとうとや！ 綾香」

綾香の向かいメートルほど先に、同じように正座で座った彼女の父親がこめかみに筋を浮かべながら怒鳴った。黒い髪を整髪料で七三分けにガチガチに固めている。仕事から帰ったばかりなので、カッターシャツにネクタイ、スラックスという姿である。先ほどかみらずと、酔っ払っているかのように赤い顔をして、綾香に説教をし続けている。

「聞いたとるよ」

ふてぶてしくそう答えながら、頭をポリポリとかく綾香。「要するに仕送りを止めるか、東京から帰ってくるかやる？」

「なんや、その態度は！」

畳をドンと叩く父。綾香は驚き、正座のままピョンと跳ねた。それを部屋の隅で見ていた綾香の母が、父をなだめる。

「お父さん。そんなに大きな声出さんでもいいやん」

父の二倍ほどはありそうなふくよかな体型である。茶色に染めた長い髪を後ろで一つに束ねている。服の上からピンクのエプロンを装着している。

午後六時前、綾香の実家の客間である。

「ん？ なん作っとうとや」

鼻をくんくんとさせながら、父が母に尋ねた。綾香もそれになら

い、くんくんしてみる。台所のほうから漂ってくる良い香りに彼女も気がついた。同時にその正体にも。

「カレーだ!」

綾香は嬉しそうな顔で言った。「お母さんのカレー美味しいっちゃんね」

ふふと母が笑う。

「久々に綾香が帰って来たっちゃけん、今日は綾香の大好物作っちゃろうと思っさ」

「お前、どっちの味方なん?」

父がギロリと母を睨みつける。それから、綾香を指差し言った。

「こいつは俺の仕送りで学校に行かせてもらっかつたくせに、勝手に学校辞めて、しかもタレントなんていう下品な仕事を始めよつたんばい?」

「別に下品やないもん」

プイと顔を背ける綾香。

「下品やろうが!」

まだドンと畳を叩く父。綾香と母が同時にビクッと肩を震わせた。「昨日のアレはなんや、全国に恥をさらしやがって! 役所の仲間にも馬鹿にされたっちゃけんな!」

父は役所勤めの公務員なのだ。ちなみに、昨日のアレとはもちろん例のつぼドッキリのことである。

「もう、その話は何度も聞いたつてば」

綾香ははあと溜息を吐いた。「アイドルは等身大の自分を見せる仕事やけん、時には全国に恥をさらすことだつてあるんよ」

「それに」

母が綾香の言葉を引き継ぐ。「お父さん、今更何を言いようつよ。子供の頃から綾香はどこに連れてつても、何かドジをしていつつも私たち、恥かいつつたろうもん」

「まあ、確かに」

神妙な顔で頷く父。その様子を見て綾香はずっこけた。

佐世保市内、小高い丘の上の高級住宅街に綾香の実家はあった。二階建ての古風な一軒家で、現在は両親と寝たきりの祖母のみが暮らしている。もともと家は祖父の持ち物であったが、十年前に祖父が病気で他界したのを機に、一人息子である父が譲り受けることとなったわけである。

「お前が勉強をしろって言うけん、俺は上京を許可してやったつちやけんな」

場所をダイニングに移し、父の説教は続いていた。彼はまだ仕事着のままである。「それでも、いずれは地元で就職して、結婚してこの家を継いでほしかったとよ」

「お母さん、福神漬けある？」

テーブルの向かいに座る父には目もくれず、綾香は隣に座る母に向け、言った。

「はい」

テーブルの隅にあった福神漬けのピンを綾香の手元に移す母。

「サンキュー」

「それがなんや？」

眉をひそめ、悲しそうに首を振る父。「順次（父の弟、綾香の伯父である）から電話があつて『今すぐテレビを観ろ』とな。そしてら、テレビにどっかで観たことのあるアホ面が映つとるやんか」

「美味しい」

スプーンをくわえ、アホ面をほころばせる綾香。「やっぱお母さんのカレーが一番やね。私が作ったらコゲ臭くなるんよ」

「あんだ、不器用やけんね」

呆れたように母が笑う。「ルー入れた後、しっかりかき混ぜないかんよ」

「今度はそのアホ面の持ち主から電話がかかってきて」

苛立たしそうに、チン、チンと皿の底にスプーンをぶつける父。

「『アイドルとして頑張ることにしました』だと！ で、『学校はどうした？』と聞いたら、『辞めました』って……」

「前、話した詩織っておったやん？」

「ご飯とカレーを混ぜ合わせながら綾香は言う。「その子と今ケンカしとってさ。どうやって仲直りしたらいいっちゃる」

「どうせあんたが悪いつちやろうもん」

もぐもぐと口を動かしながら母。「誠心誠意を込めて謝りな」

「でも、電話も出てくれんし……」

ドン！

大きな衝撃音が響くと同時に、テーブルの上の食器たちが揺れた。父がテーブルを叩きつけたのである。ピンと背筋を伸ばし、うつむく綾香と母。

「で？ どうするん？」

綾香を睨みつけ、父が言う。「このまま家に帰ってくるんやったら許してもいい。もし帰ってこんって言うんなら、仕送りは止め。そして、もちろん勘当やけんな」

「お父さん……」

母が父をなだめにかかるうとするが、「黙っとけ！」と父が一蹴。うーん……。

綾香は宙に視線を泳がせながら悩んだ。

真一がバイトを始めたため、仕送りを止められてもなんとかやっていけるかもしれない。ただ、勘当というのはさすがに辛い。

「ごめん、もう少しだけ考えさせて」

それだけ答えてから、綾香はまたカレーをすくった。



夕食を済ませた後、綾香は二階へと上がり、十代を共に過ごした自室に入った。彼女が家を出た頃とほとんど変わっていない部屋を、懐かしげに見回した後、窓を開け、窓から外に出た。瓦屋根の上を慎重に歩き、玄関側までぐるりと回る。そして、両親の寝室の窓の脇に背をもたれて座り、ふうと一息吐いた。

さて、どうするか。

目の前の夜景をぼんやりと眺めながら、綾香は心の中で呟いた。すっかりと暗くなった空の下、眼下に街の灯り、その先には工場の灯りが見える。工場の向こうは佐世保湾。灯りを反射した水面が、キラキラとかすかに揺れている。綾香はこの場所がとても気に入っていた。両親の寝室には立ち入り禁止ということになっているため、昔からよく、こうして屋根伝いに歩き、この景色を眺めに來ていたのである。（屋根に上がるのも禁止なので、バレたら怒られるが）お父さんを説得するにしても、どうすればいいっちゃる。

綾香はジーンズのポケットから携帯電話を取り出した。携帯を開き、メモリの中から、ある人物の名前を探し出し、着信ボタンを押す。

「あ、南さん？」

電話をかけた相手は、マネージャー南吾郎であった。

《あん？ 佐世保？》

けだるそうな声で南は言う。本日は彼も確かオフである。綾香は南のプライベートについてほとんど何も知らないの、彼が今どこで何をやっているのかは全く想像がつかない。《お前、明日の夕方にラジオあんの分かっただろうな》

「わ、わかっとうよ」

深夜ラジオの収録である。「それまでには帰らないかんっちゃけん。ねえ、何かお父さんを説得する方法考えてよ」

《知るか。勘当される》

あんたが私をアイドルにしたっちゃろうもん！《……。あ、違う違う、うちのタレントなんだよ。俺が今担当してる馬鹿ガキでさ》  
ん？

綾香は眉をひそめた。後半は明らかに自分に向けられた言葉ではないが。

「なん？ 誰か一緒におると？」

《あ？ お前には関係な……。いやいや、今切るから》

ははーん、女か、と綾香は悟る。《とにかく、明日までには戻って来い。親を説得すんのは勘当されてからでも遅くないだろう》

遅いよ！

「ふーん、そんなこと言っついていいっちゃね」

含みを持たせた声で綾香は言う。それから彼女はあと息を吸い込んだ。「吾郎おっ！ そこにいるのは誰？ 私というものがあるながら。ひよつとしたら浮気いつ！？」

大声でまくしたてる綾香。

《馬鹿！ やめろ！ いやいや、違うつてば。こつゆつやつなんだつて》

焦ってる焦ってる。

綾香は必死で笑いをこらえた。

「絶対許さないわよおっ！ 死んでやるっつ！」

《馬鹿なことしてないで、さつさと親父を説得する方法考えろぞ》  
よし、落ちた。

秋の心地よい夜風が頬を撫でる。しかし、それに浸ってはもられない。綾香の顔は真剣である。

「とにかく、頭が硬いんよね。お父さん公務員で、死んだお祖父ち

やんも公務員。多分、公務員以外の仕事は全部ヤクザやと思つとるよ」

《そうゆう頭の硬い人間には、下手な小細工は裏目となりそうだな……。ああ、もうちよつとで終わるって》

時折入る女への弁明の言葉がひどく耳障りである。《あ、いいこと考えた！ 社長に連絡してみよう。あの人今、博多に出張してるとんだった》

「ってことは……。社長がうちに来てお父さんを説得してくれるの？」

《それしかないだろう。あの人なら公務員受けしそつだ》

あんたならすぐ警察呼ばれるな、と綾香は思った。《住所は契約書のとおりでいいんだな？》

「うん」と返事をし、綾香は点々と星が輝く空を見上げた。

社長……。あんたに懸けるばい！

そして、二三度顔を合わせたことのあるSDP社長の顔を空に思い描こうとする。しかし、特徴がなさ過ぎて顔を思い出せない。

「屋根に上がるなど何度も言っているだろう」

「え？」と綾香は振り返った。なんと、寝室の窓から鬼のような形相をした父親がひょっこりと顔を出しているではないか。「うわっ！」

綾香は驚いてバランスを崩し、前のめりに倒れ込んだ。そして横になり、そのまま屋根の上をゴロゴロと転がっていく。「ギャー！」

「あ、綾香ー！」

父の叫びもむなしく、綾香は一階の玄関近くにドスンと落ちてしまった。尻を押さえ、「うっ……」と唸り声を上げながら、彼女は一緒に落ちた携帯からの、南の声を聞いていた。

《どうした？ 返事をしろ》

南さん、私もうダメかも……。《馬鹿！ アホ！ マヌケ！ 大丈夫か！？》

……。

綾香はむくつと起き上がった。そして、地面の携帯を拾い上げ、ピツとボタンを押し、通話を切る。それから玄関の扉を開け、家へ上がるうとしたところで、両親におとなしく捕まり、今度は二人から説教を受けた。

ちなみに、綾香は屋根から落ち慣れていたため、無意識のうちに受身を取っており、怪我は軽い打撲で済んだという。

ビシツとスーツを着こなし、手に紙袋を下げた社長が池田家を訪れたのはそれから約二時間後のことであった。彼は玄関先で普通に挨拶をし、池田家に迎え入れられると、それから普通に客間に通された。正座をしながら、博多で買ったという高級菓子折りを普通に差し出し、普通に博多に出張に来ているという旨を説明した。そして、綾香がいかにもアイドルとしての素質を持っているか、また、SDPにとって綾香がいかにも必要な存在かなどを、涙ながらに力説してみたが、あまりに普通だったので詳細は省くことにする。

説得から約一時間後、ついに父が折れ、綾香の芸能活動を認めただだし、仕送りは打ち止めとなってしまうた。

家の門の前で、綾香が礼を言っ社長を送り出した際、社長は普通に綾香に向かって親指を立ててみせた。

## 62 トップアイドル

「単刀直入に言うけどさ」

茶色の長い髪を掻き分けながら、彼は言った。もう十月に入ったため、冬用の学生服に身を包んでいる。「羽山、俺と付き合っていないか？」

そして、真っ直ぐに眼鏡の奥の羽山美穂の瞳を見つめた。美穂も彼の瞳を見つめ返し、やがてふうと小さく溜息を吐いた。

またか……。

美穂は答えずに、別のことを尋ね返した。

「あなた、サッカー部の大山茂人くんだっけ？」

それを聞き、大山は意外そうに目を丸め、ヒューと口笛を鳴らした。

「光荣だな」

照れ笑いを浮かべ、大山は言った。「まさか下の名前まで覚えてもらってるなんて」

「クラスメイトの名前ぐらいはちゃんと覚えるようにしてるんだ」  
笑顔を返す美穂。「私、休みも多いし、放課後に一緒に遊んだりできないけど、できるだけ皆と思い出を共有していたいから」

「そうか」

ばつが悪そうに、大山はうつむいた。「そ、それはそうと、どうかな？俺と付き……」

「大山くん」

大山の言葉を遮る美穂。しばらく間が空いた後、大山が「え？」と目を丸めるのを待ってから、彼女は続けた。「もちろん、私のこと知ってるんだよね」

「知ってる？あ、ああ、もちろん」

動揺した様子で何度も頷く大山。美穂はまた屈託のない笑みを浮かべ、言った。

「私はアイドルなんだ。だから、男の子と付き合っわけにはいかないの」

千代田区内、某高等学校放課後の校舎裏。二人は共にこの学校の生徒であった。

大山が去った後、美穂は正門に向けて歩き始めた。校舎裏から昇降口前に出ると、下校中の生徒たちの数が一気に増える。美穂は肩まで伸ばしたセミロングの髪と、セーラー服胸元の白いスカーフを揺らしながら、生徒たちの間をいそいそと縫って歩き続けた。

美穂が校内を歩くと、生徒の誰もが彼女を注目する。それは彼女の持つ美貌や、大きな胸だけが原因ではない。

美穂がアイドルとしてデビューしたのは今から約二年前、中学三年の冬のことであった。休日に表参道原宿の街を当時の友達と歩いていた際、今の所属芸能事務所のスカウトマンにスカウトされたのがキツカケである。

デビューしてから一年ほどは、なかなか陽の目を浴びることはできなかつた。しかし、今年に入ってから爆発的に売れ出し、先々月は写真集売り上げ一位、先月はDVD売り上げ第一位と、今ではトップアイドルの地位にまで登りつめていた。

「ごめん、待った？」

門柱に背をもたれてたたずむ河内那美の姿を発見し、美穂は彼女に声をかけた。

美穂を見て「あっ」と口を開けた後、那美は門柱から離れ、笑顔で二度首を振った。目が小さく、鼻も小さい。お世辞にも美人とは呼べないが、どこか愛敬のある顔立ちの少女である。髪型はショートボブカット、すなわちおかつぱ頭。

「うっん、全然待ってない」

それから、少し乱れたセーラー服の上着をサツと手で整える那美。「じゃ、行くう。それにしても美穂、もてすぎるってのも辛いね」

その言葉を聞き、美穂は「はは」と苦笑した。大山に告白されている間、唯一無二の親友である那美をここ、正門に待たせていたのである。

二人は某駅前の書店内にいた。多くの立ち読み客が並ぶ雑誌コーナーを素通りし、店の奥にある参考書コーナーに向かう。美穂の苦手な化学の参考書を探しにきたのだ。那美はその付き添いという形である。

「那美は今日バイトだっけ？」

棚に並ぶ参考書の背表紙たちを眺めながら、美穂は那美に尋ねた。

「うん、バイト」

「ああー」と残念そうに頬を緩める美穂。

「せっかく私仕事ないのになー」

そう言うてから、なんとなく辺りを見渡す。近くには、自分たちとは違う制服を着た高校生らしきカップルと、ネクタイをしめたサラリーマン風の若い男性、それから野球帽を被った細身のこれまた若い男性の四人のみである。いずれも、美穂たちを気にもとめず、目当ての本探しに夢中となっている様子だ。

学校以外で美穂に視線が集中することはほとんどない。アイドルとしてメディアに露出する際は、眼鏡などかけていないし、髪を後ろでまとめていることが多い。そして、なんといつても……。

「美穂って本当にテレビで観る時と全然違うよね」

突然、感心したように那美が言った。「なんていうか落ち着いててさ。たまにはテレビみたいなオトボケキャラも見てみたいな」

「あれは仕事の顔。プライベートでは別」

唇をとがらせる美穂。「いくら那美でも、それだけは見せられないよ。あれはファンの人たちだけのものなの」

「ふーん」

那美もふて腐れたように唇をとがらせる。「仕事熱心ですねえ」

美穂のアイドルとしての最大の武器は自らが創り上げた『天然オトボケキャラ』であった。デビュー当時は素の自分とほとんど変わらないキャラのまま、芸能活動を行っていたが、ちょうど一年ほど前から、この『天然オトボケキャラ』をテレビなどで演じ始め、それを機に彼女の人気上昇し始めたのだ。

「私そろそろ行かなきゃ。バイト遅れちゃう」

那美が腕時計を一瞥してから言った。「ごめんね。全然参考書選び付き合ってやれなかったね」

「ううん、気にしないで」

美穂は那美に優しく笑いかけた。「後は一人で探すよ。今度は休みがかぶればいいね」

手を振り、走り去っていく那美を見送った後、美穂はまた棚に目をやり、本の背表紙を順に確認していった。下から上へだんだんと視線が上がっていく。

げ……。

棚のかなり上のほうに、いくつも並んだ化学の参考書を発見する。身長百五十五センチの美穂にはやや厳しい高さである。美穂はキョロキョロと店内の床を眺め、高さ三十センチほどの踏み台を視界にとらえた。次に踏み台を棚の下まで持つてきて、鞆を床に置き、セーラー服のスカートを両手でつかみながら、踏み台の上に乗った。と、その時だ。

「あつ………！」

踏み台の上でバランスを崩してしまう。同時に美穂は、脇から飛び込んでくる一人の男の影を見た。



### 63 恩人は変な人

「はあ、なんだって言うんだろ。目立ちたくないのに……。」

店の天井を見つめながら、美穂は小さく溜息を吐いた。彼女は仰向けになっており、背中に先ほど飛び込んできた男を敷いている。たった今、彼と共に踏み台から勢いよく倒れ込んだばかりである。

「だ、大丈夫？」

頭の上から男がそう尋ねてきた。どうやら彼は、美穂が踏み台の上でバランスを崩したのを見て、咄嗟に彼女を支えようと、飛び込んできたらしい。彼が飛び込んでこなければ、美穂は普通に床に着地できたのであるが、人の恩を踏みにじるような真似はしたくない。美穂は素直に礼を述べることにした。

「ありがとうございます。私は大丈夫です」

それからあごを引き、視線を自分の胸元に下げる。「それはそうと、手、放してほしいんですけど……。」

「え？ あっ！」

男の手が、美穂の豊満なバストを驚づかみしていたのである。すぐに手を退ける男。「ご、ごめん」

美穂は男の上からくると身体を反転させた。「ぐえ」と苦しそうな声を上げる男を無視し、床にひざをついて、そのまま立ち上がる。そして、床に落ちていた眼鏡と野球帽を拾い上げる。

「あなたこそ、お怪我はありませんか？」

眼鏡をかけ直してから、美穂はひざまずく男に野球帽を差し出した。男も「ありがとうございます」と野球帽を受け取り、それを被り直しながら立ち上がった。

パンパンと服についた砂ぼこりをはらう男の全身をまじまじと眺める美穂。先ほどからずっと近くにいた客である。身長は百七十五センチほど。細身の身体にグリーンのティーシャツ、薄汚れたジーパン。次に野球帽の下の、顔をピクアップしてみる。白い肌に不

潔な無精ヒゲ、細い目に薄い唇……。浪人さんかな、と美穂は勝手に予想した。

美穂ははつと気がつき、辺りを見回した。二人が床に倒れ込んでいた時は多少の注目を浴びていたかもしれないが、今はどの客も無関心といった感じだ。もともと店の中では目立たない場所である。心配して駆け寄ってくる店員の姿もない。

よかった。バレてないみたい。

ホッと胸を撫で下ろす美穂。

「あ、あの、本当にゴメンね」

浪人さん（仮）が申し訳なさそうに眉を曲げ、突然謝ってきた。

美穂は何のことだか分からず「え？」と目を丸めた。「いや、だからその……。胸触っちゃって」

「ああ」

触ったというより、つかんでいたが。「気にしなくていいですよ。あなたのおかげで助かりました」

そう言って美穂は微笑んだ。彼女も気にしていなかった。バストはあくまで商売道具、ファンのためにあるものだと考えている。彼に触られることは許容の範囲内である。美穂は彼が自分のファンであると確信していたのだ。

「あ、あの、ひよっとしてさ」

口元を少し緩め、浪人さんが言った。きた、と美穂は思った。「君ってテレビによく出てる子だね。えーっと……。ごめん、名前が出てこない」

はいはい、おとなしく白状すればいいのに。

呆れたように息を漏らす美穂。彼が自分のファンでもない限り、たかが踏み台の上でバランスを崩したただで飛び込んでこないで  
あるっ。

「そうですか」

美穂は少しからかってやることにした。「羽山って言います。羽山美穂」

「羽山？」

一瞬眉をひそめる浪人さん。美穂は笑いをこらえるが、浪人さんは意外にも、すぐに口を大きく開け「ああ」と声を上げた。「そ、そうだ！ 羽山美穂ちゃんだ。ごめんごめん、言われたらすぐ思い出したよ。今大忙しだよね」

「あ、ええ、はい」

あ、あれ？

狐につままれたような表情になる美穂。

ファンじゃない？ っていうか私の名前知らないの？ いや、それとも私がからかわれてるの？

「あ、ごめん」

謝ってばかりの浪人さん。片手で口もとを押さえる。「あんまり大きな声で名前呼んじゃ騒ぎになっちゃうね。本当にごめん」

「別にいいですよ」

美穂は少し面白くなかった。「好きなだけ呼んでください」

羽山美穂などというアイドルはどこにもいないのである。

改めて礼を述べ、美穂が浪人さんと別れてから五分ほどが経過した。美穂は再び例の踏み台の前にいた。先ほどは失敗したので、今度こそは化学の参考書を手に取りたいのであるが、なかなか踏み台に足をかけることができない。その理由は……。

まだ見てる……。

十メートル先で本を探すフリをしながら、浪人さんがチラチラとこちらの様子を窺っているのである。まるで、子供を心配する親のような目つきで。

もう大丈夫だって。っていうかさっきはあなたのせいで倒れたんだから。

苛立たしそうに髪をかき上げる美穂。踏み台の上へ上がって、もし、またバランスを崩してもしたら、再び浪人さんが突っ込んでくるかもしれない。そうだったら、今度こそ周りの客に自分の存在がバレてしまってもおかしくはない。

しかたないな。

美穂は深く溜息を吐いてから、浪人さんのもとへ歩み寄っていった。

「すみません」

そう声をかけると、浪人さんは意外そうに細い目を少し開けた。

「厚かましいかもしれませんが、私だとまた倒れてしまいそうなので、本を取っていただけませんか？」

「え？ ああ」

二、三度頷き、浪人さんは笑顔を見せた。「全然かまわないよ。どれ？」

美穂は浪人さんを踏み台の前に案内した。それから、棚の上方を指差して言う。

「高校の化学の参考書ならどれでもいいんですけど、難しくなさそうなのがいいです。あ、あの『高校生のための基礎化学』ってのお願いします」

「いや」

軽く首を振る浪人さん。「あの教授の本は説明が回りくどいんだよね」

彼も指を差す。「僕のオススメとしてはあの『高校化学ワンツースリー』かな。問題集もついてて、その解説がすごく分かりやすいよ」

「そ、そうなんですか」

さすが浪人さんだ、と美穂は思った。「じ、じゃあ、とりあえずそれを」

「オーケー」

そう言って、浪人さんが踏み台に足をかけると同時に、美穂は「

あつ」と彼を制した。「ん？」

いぶかしげに眉をひそめる浪人さん。

「あなたぐらいの背だったら、踏み台いらないうような……」

美穂のその言葉を聞き、浪人さんははっとした顔を浮かべ、踏み台から足を下ろした。

「それもそうだね」

そして、彼は笑った。美穂もおかしくなり、「ふふ」と笑う。

なんか、変な人だな……。

まずいな。

美穂は目の前に置かれたクリームコーラに一口手をつけたところで、テーブルにひじをつき手の平を頬に当て、心の中でそう呟いた。それはクリームコーラの味の話ではない。

駅構内二階のファーストフード店、窓際の二人がけの席である。店内は多くの客でにぎわっており、すでに空いている席は一つもない。と思いきや、隣の席が空く。しかし、すぐに中年女性二人組がそこを陣取る。客の回転はかなり早い。そういえば、美穂が今座っている椅子も、座った直後はまだ前の客の温もりが残っていた。『この光景』を一瞬でも目撃するのは、たかだが数人といったレベルではなさそうだ。

美穂はテーブルの向こうでメロンクリームソーダをストローでかき混ぜる浪人さんの様子を垣間見た。彼はそわそわと落ち着かない様子で、店内や窓の外をしきりに眺めている。

「食べないんですか？」

美穂は浪人さんにそう問いかけた。彼の手元のクリームソーダを指差す。「かき混ぜてばかりだと、アイス溶けちゃいますよ」

「あ、ああ。今食べようとしてたところ」

ソーダから先がスプーンになったストローを引き抜き、浪人さんは笑った。テーブルにソーダがこぼれる。美穂は頬杖をついたまま、もう片方の手でテーブルの隅のナプキン立てに立てられた紙ナプキンを一枚手に取り、無言でソーダを拭き取った。「あ、ありがとう」礼を述べながら、半分以上がメロンソーダに溶けたアイスをすくい取る浪人さん。

『この光景』、つまり、自分と若い男性が二人きりでファーストフード店のテーブルに向かい合っているという姿を、多くの人物に目撃されるということまでは、もちろん美穂だって覚悟はしていた。

そして、眼鏡をかけ、髪を下ろしていれば、きっと誰も自分の正体に気がつかないはず、という目算もあった。

ただ、誤算もあった。

チラリとカウンター近くの四人がけテーブルを見やる。そこに、美穂と同じ制服を着た女子高生が四人いた。そう、美穂と同じ学校の生徒である。美穂は彼女たちのことを知らないが、向こうは美穂のことを知っている。眼鏡をかけ、髪を下ろした美穂のことを知っている。ひよっとしたら、同じ学校の生徒でも美穂のことを知らない生徒だっているかもしれない。しかし、彼女たちの場合は違う。なぜなら、美穂と浪人さんが店に入った瞬間からずっと、明らかにこちらの様子を窺っているからだ。すでに気づかれているのである。四人のうちの一人が携帯を開き、何やらメールを打っている。他の三人が好奇心たつぷりな表情でそれを見守っている。同じ高校に通うトップアイドルのスキヤンダルを、誰かにリークしているのだろうか。

ネットには流しませんように。

美穂は心の中でそう祈った。

「大丈夫？」

心配そうに眉をひそめて、浪人さんが言った。「あの子たち、羽山さんのこと気づいてるみたいだけど」

彼の目線は例の四人に向いている。彼も気がついていたらしい。

「心配しなくていいですよ」

はむ、とアイスを口に入れる美穂。口の中でアイスを溶かし、飲み込んでから続ける。「こんなことは前にもありました。その時は仕事関係の人だ、って説明しました。って、実際そうだったんですけどね。今回も騒ぎになったら同じように説明すればいいんです。事務所も助けてくれます」

でも、怒られるだろうな、と美穂は思った。

事務所の意向で、異性交遊は禁じられていた。いや、事務所以上に美穂自身がそれを堅く禁じていたはずであった。アイドルにとつてスキヤンダルは命取りであるということを、彼女も充分承知しているのだ。それなのに、『どこかでお話しませんか』と浪人さんを誘ったのは、他ならぬ彼女なのである。

そういつた意味でもまずい。美穂は自分に嘘を吐かない。認めざるを得ない。目の前にいる、先ほど出会ったばかりの貧相な男に惹かれ始めているということ。なぜだかは分からない。書店で自分を助けようとしてくれたからかもしれないし、たまたま心の奥底で恋をしたいな、と思っていた瞬間に出会ったのが、浪人さんだったのかもしれない。両方がかもしれない。

まずいな。

美穂はもう一度呟いた。恋が仕事に与える影響は計り知れない。スキヤンダルの危険を犯してまで、浪人さんと話をしたいと思ってしまった自分の心が、何よりもまずかった。

これ以上はダメだ。これ以上は。

自分にそう言い聞かせる美穂であった。

「ねえ」

顔を近づける浪人さん。美穂も姿勢を正し、顔を近づける。浪人さんは小声で言った。「隣にいる人たちも気づいてるっばいよ」

「そうですか」

美穂は隣のテーブルの客を確認せずに言った。気づかれることだつてももちろんある。先ほど浪人さんにも気づかれたではないか。彼女はストローで一度コーラを吸い上げ、息を吐いてから言った。「そんなことより話をしましょうよ。私たちは密会してるわけじゃありません。堂々と会ってるんです。私があなたと二人でいるところを他の人に見られたくないのであれば、こんなに人がたくさんいる店には来ません」



近かったからこの店に來ただけであり、本当は誰にも見られたくない。美穂は自分にはなく、浪人さんに嘘を吐いた。「あなたには本屋でお世話になりましたから、そのお礼なんです。アイドルと二人っきりで喋れるチャンスなんてなかなかありませんよ？」  
また嘘を吐く。もしスキャンダルになったらそう説明しようかな、などと思う。

「そ、そうだね」

帽子を脱ぎ、額の汗を拭う浪人さん。帽子を被り直す。「それじやあ、話をしようかな。でも、俺、女の子と二人きりで話したことなんて生まれてから一、二度ぐらいしかないんだよね。しかも女子高生で、しかもアイドルなんて」

「それでそわそわしてたんですか」

「チューとまたコーラを飲む美穂。」

「あ、分かった？」

照れくさそうに笑う浪人さん。「女の子と話すのって苦手です。俺、話す内容がマニアックすぎて、女の子引いちゃうんだよね。陰でアイツつまらないって言われてるっばいし」

「女の子は興味のない男の話は皆つまらないものです」

言ってから気がつく美穂。失言である。

「だよー」

へらへらとした顔のまま肩を落とす浪人さん。「誰も俺になんか興味持たないし」

まあいいか、と美穂は思った。少なくとも、自分は興味があるのだから。

「ところで聞きたいんですけど」

美穂がそう言うと、浪人さんはコクリと一度頷き、続きを促した。「名前はなんておっしゃるんですか？　なんて呼べばいいんですか？」

「あっ」

ハツとした顔になる浪人さん。「俺は橘川って言います。橘川む

た。夢が多いつて書いてむた」

「夢多……。」

「面白い名前ですね。でも素敵な名前。で、橘川さんって呼べばいいですか？」

「うーん」

腕を組む浪人さん。「むーちゃんとも呼んでいいよ」

「む、むーちゃん？」

むーちゃんというその言葉の響きがなんとなくおかしかったので美穂は笑った。

「もしくはサブちゃんでもいいや」

「サブちゃんって全然関係ないじゃないですか」

ツッコミを入れながらまた笑う。美穂は思った。

この人のどこがつまらないんだろう。

## 65 初恋

浪人さんだなんて失礼しました、むーちゃん。ペコリ。

美穂は心の中でそう謝罪した。橘川に『秀英大学に通っている』と、聞かされたところである。Bランクの私立大学だが、今の美穂が入学するにはおそらく裏口以外にありえない。

「家庭教師のバイトにも登録してるから。中学や高校で使う参考書なんかの知識も備えておくことにしてるんだ」

照れ笑いを浮かべながら橘川は言った。なるほど、と美穂は書店でのことを思い出した。橘川オススメの『高校化学ワンツースリー』は鞆の中である。

「そうですか」

テーブルにひじを付き、つまらなそうな表情でストローをくわえ、ズツとコップの中身を啜る美穂。コップにはもう氷しか入っていない。「それじゃあ、アイドルとかには興味ないんでしょね。勉強に忙しくて」

「うーん。興味ないってことはないけど」

橘川もストローをくわえる。彼もクリームソーダを飲み干した。

「限定的ではあるね」

「限定的？」

美穂は眉をひそめた。「どういうことですか？」

「いや、一人だけ好きなアイドルがいてさ」

好きなアイドル……。美穂は考える。それが自分でないということだけは分かる。「あ、もちろん、羽山美穂ちゃんも、前からすごく可愛いなって思ってたけど」

だから、そんなアイドルはいないってば！

いつの間にか、同じ高校の四人の女子生徒たちは姿を消していた。

もう隣のテーブルを陣取る中年女性二人組以外に、美穂の存在に気づいている人物はいないようである。

「で？好きなアイドルって誰なんですか？」

相変わらずつまらなそうな表情のまま、美穂は尋ねた。

「綾川チロリちゃん」

「綾川……。チロリ？」

し、知らない。もちろん、共演したこともない。そんなアイドルいたっけ？

最近デビューしたのかな、と美穂は予想した。「その子、私より魅力的なんですか？」

うーん、と唸りながら美穂を見つめる橘川。美穂は照れて、少し顔を背けてしまった。

「多分、美穂ちゃんのほうが可愛いと思う。でも……」

宙に視線を泳がせ、言葉を探る橘川。「なんていうか、絶対的な存在なんだよね。多分、初めて好きになったアイドルだからだと思っただけ」

そっか、と美穂は納得した。

初恋は忘れられないっていうもんな。「でも、これからは美穂ちゃんだつて応援するよ。テレビ欄に羽山美穂つてあつたら、絶対に観るから」

だから……。

「もうすぐ六時だ」

携帯電話で時刻を確認する橘川。美穂はテーブルの上で組んだ両腕の上にあごを乗せて、その様子を見つめていた。二つの空のコップはテーブルの隅に追いやられている。

「何か用事でもあるんですか？『大事』な用事でも」

ややキツイ口調で美穂は尋ねる。橘川はハハ、と苦笑した。

「大事ってほどじゃないんだけど、夕方の子供向けバラエティ番組

に、チロリちゃんが出演するんだ」

「え!？」

思わず大きな声を上げてしまう美穂。周りの何人かの客に注目されてしまい、慌ててうつむき、顔を隠す。「……。そ、そんなの、ビデオでも録ればいいじゃないですか?」

「ビデオセツトしてないんだ」

そう言うてから、すぐに「いや」と手を振る橘川。「今日はもうあきらめるよ。こうして、美穂ちゃんと話をするのも楽しいし」

あきらめる? 失礼な……。

美穂はムツとした。そして、澄ました表情を作り、首を振った。

「別にいいですよ」

唇をとがらせる美穂。「私もそろそろ帰らないといけませんから今日は本当にありがとうございました」

「いや、こちらこそ」

立ち上がる橘川。しかし、美穂は立ち上がらない。「あ、あれ? 出ないの?」

「お先にどうぞ。私はもう少し座ってます」

少しだけ間を置いて、橘川は「そ、そう」と頷いた。

「それじゃ、お先に失礼するね。今日は本当にありがとう」

美穂は何も言わずペコリと一度頭を下げて、橘川を見送った。橘川から目をそらし、彼が遠ざかっていく気配を感じながら、美穂は「あつ」と小さく声を漏らした。

れ、連絡先聞いてない……。

すぐに橘川に視線を戻すが、彼はもう店を出るところであった。はあ、と深く溜息を吐く美穂。

初恋は忘れられない、か……。

忘れられるかな、と美穂は思った。

「もしもし」

耳元で誰かが囁いてきた。そちらに顔を向ける美穂。そこに立っていたのは、隣のテーブルの二人の中年女性のうちの一人であった。やや肥満気味の化粧の濃い女性。茶色のロングヘアにパーマを当てている。手にメモ帳らしきものとボールペンを持っている。彼女は人懐っこい笑顔を浮かべた。「うちの息子が大ファンなんです。サインを頂けませんか？」

とても小さな声。他の客に美穂の存在がバレてしまわないよう配慮しているであろう。美穂は好感を持った。その配慮にもそうだが、橘川といる時には声をかけてこなかったことに対してもだ。彼女もにこやかに笑ってみせる。

「本当ですか？ 照れちゃいますー」

明るく、軽い声のトーン。『天然ドジキャラ』モードである。美穂はメモ帳とボールペンを受け取った。「私なんかのサインでいいなら、いくらでもしちやいますよー。息子さんのお名前教えてください」

「あ、タカシって言います。高いに志しです」

「高志くんへ……。」と

美穂は慣れた手つきでメモ帳にペンを走らせた。『高志くんへ』の下に、漢字をアルファベットの筆記体に似せた自らのサインを書く。

そうだ、私にはファンがいるんだ。ファンのためだけに頑張ればいいんだ。

美穂はメモ帳を中年女性に返した。

「ありがとうございます。大切にします」

そう頭を下げてから、サインを眺め苦笑する中年女性。「パッと見ただけじゃ、誰のサインだか分かりませんね」

サインはただの落書きのようにも見える。

「そうですねー」

美穂も苦笑する。「でも、一応私のサインですよー。ちゃんと『松尾和葉』って書いてあります」

それがアイドルとしての美穂の芸名であった。

## 66 午後的一時

池田綾香とその恋人、井本真一は、吉祥寺本町の綾香のアパートのリビングにてテーブルを挟み、二人してインスタントのカップそばを啜っていた。

ずるずるとそばを啜り続ける二人。会話はない。テレビも点いていない。そばを啜る音だけが部屋の中を飾り立てる。二人の周りにはいくつものダンボールが無造作に置かれており、ただでなくとも狭いリビングが更に狭まっていた。

「ふと思った」

箸を止め、ようやく口を開いたのは真一である。「こうやって越してきたのはいいけど、事務所に俺のことがバレる可能性もあるんじゃないかねえのか？」

「事務所だけやないよ」

綾香は答えた。彼女は箸を止めず、そばを啜りながら続ける。「家族にバレてもヤバイし、何よりも写真週刊誌にスクープされたら一発でアウトやね」

「どうすんだよ」

眉をひそめ、真一がまた尋ねる。

「どうしようもないよ」

箸を置き、両手でカップを持つ綾香。スープを一口飲み、「ごちそうさまでした」と食後の挨拶を済ませる。「どっちにしても、もう二部屋分の家賃払い続けるのは厳しいっちゃけん、一緒に暮らすしかなかるうもん」

「そりゃそうだけど」

頭をポリポリとかく真一。再び箸を握る。「実際、スクープされたらどうするんだ？ お前そこそこ有名人になっちまったんだから、どこで週刊誌が狙ってるか分かんねえぞ？」

虚空を見上げ、気の抜けたような顔で考え込む綾香。



「アイドルはちょっとぐらいスキャンダラスなほうがウケるっちゃない？」

ニカッと笑う綾香。「スキャンダラスねえ」と真一は嫌味ったらしく返した。

十月上旬のとてもよく晴れた日曜日。本日は記念すべき日となった。松庵の真一のアパートを引き払い、吉祥寺本町の綾香のアパートにて、いよいよ二人は同棲生活をスタートさせたのである。そのキツカケはもちろん綾香の仕送りが止められたことだ。

「なんか、ガラクタばかりやね」

一つのダンボールの中を探りながら綾香が言った。動きやすい上下ジャージという姿である。「これもアイドルのDVD。またアイドルのDVD。これは……。エッチなDVD」

少し赤面する綾香。

「バカ。ガラクタじゃなくて宝の山と言え」

あぐらをかき、しーしーとつまようじで歯の掃除をする真一。こちらも動きやすいティーシャツ、ジーンズ。「そのダンボールには男のロマンが詰まっている。そっちも……。あ、こっちもか」

そう言いながら真一はいくつかのダンボールを指差した。

「えー、そんなにあると？」

呆れたようにうな垂れる綾香。「あんなに苦勞して運び入れたのに、まさかそんなガラクタばかり入ったとは。あんだ、私の部屋をガラクタまみれにする気？」

ただいま午後二時過ぎ。先ほど、真一の荷物の運び入れを終えたところである。一万円そこそこの格安プランでの引っ越しのため（ドライバーのみしか来てくれないのだ）、二人も運ぶのをかなり手伝った。ちなみに、真一のアパートにあった家具や家電は先日のうちにはほとんど売り払ってしまっている。

「ん？ 怪しいビデオ発見」

一つのビデオを手にする綾香。「なにになに？ 『裏ビデオ』？  
ま、まさか……」

見つけたか……。

真一はニヤツと微笑んで見せた。

「別に見たいなら見てもいいぜ。すげえ映像が入ってる」

「ほ、本当？」

ビデオデッキの前に移動する綾香。テレビの電源を入れ、デッキにビデオを差し込む。「ち、ちよつとだけね……」

「ああ、分かる分かる。女でもドキドキしまつもんだよな。モザイク一切ナシだぜ」

やがてテレビに『すげえ映像』が映し出された。

《わーん！ わーん！ ひどいよー！ ひどいよー！》

「これかい！」

すかさずビデオを消す綾香。「なんで『裏ビデオ』なんよ！ なんてわざわざこの場面で止めてあるとよ」

笑い転げる真一に対し、まくしたてる綾香。

「お前、今度休みいつよ」

二人はソファに並んで座っていた。綾香の頬を撫でながら真一が尋ねる。「たまには二人でどっか遊びにでもいこうぜ」

本日は真一は休みであるが、綾香は夕方より仕事である。タレントには学生もたくさんいるためか、暗くなつてからの仕事も多い。

「次は……」

真一の胸に頭をあずけている綾香。うーん、と眉間にしわを寄せる。「金曜日かな。その次は来週の月曜日」

「ダメだ。俺は仕事だ」

「なかなか合わんね」

綾香は苦笑した。「あんたが休み替えてもらえばよかるうもん」  
「無理だつて。若頭、予定変更されるの無茶苦茶嫌うんだ」

「私だって無理だもん」

少し間を空けてから、綾香は続ける。「今月は学園祭の仕事もあるし、一番頑張らないかん時期よ。ブレイクできるかできんかの瀬戸際やね」

「分かってるよ」

ブレイクしたら、今よりもっと二人の時間が減るってこともな。

わしゃわしゃと頭をかく真一。「綾香」

「ん？」と綾香が自分の顔に視線を移したことを確認してから、真一は少し唇を突き出し、あごをしゃくりあげた。綾香は頷き、顔を近づけながら目を閉じる。そして、そのまま二人はキスをした。

真一は確信していた。今はまだ、知る人ぞ知るといったレベルの知名度ではあるが、いつかきつと綾香はブレイクする。長年のアイドルマニアとしての勘がそう言っている。

その時、俺はまだお前のそばにいらることができるかな。

「真一」

薄らと目を開け、綾香は言った。「汗くさい……」

「こっちの台詞だ」

甘くて、ほろ苦くて、ほんのり汗くさい午後の一時であった。

## 67 月刊アイドルプレス

今年の夏にサニーダイヤモンドプロダクションからスカウトされデビューして以来、テレビにラジオにとひっぱりだこの新人アイドル・綾川チロリちゃん。今回はそんな彼女の最新水着グラビアと特選インタビューをお届けしよう。尋常ではないスピードでブレイクしつつあるチロリちゃんの魅力にとことん迫る！（撮影 十勝弘樹 インタビュアー 財前ひとみ）

『もっともっとたくさん仕事したいから、暇な気がしちゃうんだと思います』

デビューして二ヶ月近くが経過したわけだけど、デビュー前と変わったことって何かある？

チロリ「そうですね……。強いて言うなら、デビュー前より暇になりました」

え？ 暇になったの？

チロリ「デビュー前は専門学校にも通ってましたし、週六日もアルバイトしてたんですよ。地獄でしたねー。その頃に比べたらだいぶ暇になりました」

そうなんだー。でも、タレントとしての仕事もけっこう忙しくなってきたんじゃない？

チロリ「確かに休みは少ないんですけど、あんまり忙しいって感じはしないですよ。多分今の仕事が好きだから、もっともっとたくさん仕事がしたいから、暇な気がしちゃうんだと思います」

タレントの仕事がまさに天職なわけだ。アルバイトは何をしてたの？

チロリ「某安売りチェーン店で、品出しとかレジとかしてました。大変でしたよー。お客さんめっちゃめっちゃ多いのに、店員は二人だけしかいない時とかもしょっちゅうありました。勤務時間が終わる頃にはこんな顔になっちゃって（魂が抜けたような顔をする）」

（笑）。そりゃあ大変だったろうね。じゃあ、今の仕事が終わった時はどんな顔になるの？

チロリ「こんな感じ？（さっきより、やや幸福感のある魂の抜けたような顔をする。読者にお見せできないのが残念だ）」

（笑）。とにかく充実してるわけだ。ところで話は変わるけど、十月もたくさん仕事を控えてるみたいだね。中でも楽しみなのが、月末の学園祭のお仕事だとか。

チロリ「秀英大学の秀英祭です。事務所の先輩の内藤ちえ美ちゃんと滝田亜佐美ちゃんと三人で遊びに行かせていただきます。ステージでのトークだけじゃなくて、生徒さんと一緒に学園祭を回ったりもするんですよ」

お隣の昭和院大学の学園祭も同日に行われて、毎年どっちが盛り上がるかって話題になるよね。この学園祭対決はすごく伝統的なもので、両大学の学園祭実行委員はすでに火花を散らしあっているだろうけど、チロリちゃんも意識してる？

チロリ「そ、そうなんですか？ それは初耳でした（苦笑）」

おいおい（笑）。そんなんじゃダメだよ。実行委員の人は昭和院大学の学園祭に勝てると思込んでチロリちゃんを呼んだんだらうからさ」

チロリ「き、緊張してきました。頑張ります！」

『歌手になるのは子供の頃からの夢でした』

詳細はまだ決まっていらないけれど、来春には歌手デビュー

の予定もあるんだとか。

チロリ「そうなんですよー！ ついにきたーって感じですね」

おお！ なんかテンションが上がったね（笑）

チロリ「歌手になるのは子供の頃からの夢でした。中学時代は卓球部で、高校時代はバトミントン部でしたけど、それは歌唱部がなかったからしかたなく入部しただけなんです」

そっかー。歌には自信あるの？

チロリ「先月はボイストレーニングに明け暮れていました。最初はピアノの伴奏だけで音をとるのがすごく難しかったですけど、今ではアイドルの中でも五本の指に入る歌唱力の持ち主です」

自分で言うなよ（笑）。

チロリ「本当ですよー（笑）！ ボイトレの講師の人にも褒めてもらいましたもん。ダンスのほうはまだまだですけど……。でも、いいんです。ダンスなんかいりません！ 私はマイク片手にバラードを歌い上げる本格派な歌手になるんです」

チロリちゃんは踊りながら、アップテンポな曲を歌ったほうが似合ってると思うんだけどな。

チロリ「そんなことしたら、歌が息切れの音にしかならないと思います」

（笑）。

『仕事が辛くなった時、女の子は恋にすがってしまうものなのですよ』

いつも明るいチロリちゃんだけど、時には落ち込むことだってあるよね。

チロリ「ありますねー。まだ仕事でも失敗してばかりなんで、いつも落ち込んでばかりいます。昨日もテレビで浮いたことばっか言

っちゃって。私の発言全部カットで、私、出演してなかったことになりそうです」

(笑)。そうゆう時はどうやって元気を取り戻すの？

チロリ「うーん。音楽を聴いたり、インターネットしたり、漫画読んだり、食べたり、寝たり」

恋をしたり？

チロリ「そ、そうですねー。今は仕事でいっぱいなので恋どころじゃないかもしれませんー。でも、分かりません。仕事が辛くなった時、女の子は恋にすがってしまうものですよ」

格言きたねー。今回のインタビューの見出しに使うよ(笑)。

チロリ「ぜ、絶対やめてください！ 恥ずかしいから」

冗談冗談(やっぱり使っちゃいました。ゴメンねチロリちゃん)。でも実際そうかもしれないね。アイドルっていても女の子だから、恋が仕事に与える良い影響っていうのも少なからずあるよね。

チロリ「そいつは間違いないですね」

そいつはって(笑)。あれー？ ひょっとしてチロリちゃん、今恋してるの？

チロリ「してませんしてません！ 今は仕事でいっぱいなんですよー！ でも、そうですねー。してないってのは嘘かも。私のことに応援してくれるファンの人に恋しちゃってますからねー」

ますますの活躍が期待される綾川チロリちゃん。今後も彼女から目が離せない。

チロリちゃんファンに朗報だ！ なんと今回はチロリちゃんの直筆サイン入り等身大ポスターを十名様にプレゼントしちゃうぞ。ご希望の方は以下の宛先まで。東京都港区南青山××、成岡出版社内、月刊アイドルプレス編集部『十一月号読者プレゼント』係まで  
×切は十一月二十日(当日消印有効)。当選者の発表は新春一月号

にて。たくさんのご応募お待ちしております。



## 68 例えばの話

十月中旬。松尾和葉こと羽山美穂は、港区お台場に位置するテレビ局、エックステレビの楽屋内に一人でいた。部屋を中心に置かれた木製のテーブルに向かい、雑誌を読んでいる。時刻は昼の二時過ぎ。これからバラエティ番組の収録が行われるのだ。学校を早退してきたばかりで、まだセーラー服を着ている。眼鏡はかけていない。もともと視力は悪くない。

トントんとノックの音が聞こえ、美穂は慌てて読んでいた雑誌をテーブルの隅に置き、「はい」と返事をした。扉から顔を覗かせたのは派手な巻き髪と猫目が特徴的な小悪魔アイドル菊田つばきであった。

「おひさ」

そう言つて、つばきは楽屋内に足を踏み入れた。部屋は畳張りなので、入り口先のたたきで靴を脱いでいる。「今日はよろしくね、和葉ちゃん」

「よろしくお願ひします」

頭を下げる美穂。本日二人は共演する予定なのである（レギュラーの美穂に対し、つばきはゲスト出演だ）。二人は共に今年ブレイクを果たしたアイドルとあってか、比較的共演が多く仲も良い。デビューは美穂のほうが先だが、歳はつばきのほうが三つ上だ。

おそらく衣装であろう白のワンピースを着たつばきが、テーブルの向かい側に腰を下ろすのを待つてから美穂は言った。「最近急に寒くなりましたね。風邪を引かれてはいいですか？」

「大丈夫、ありがとう」

ニコリと笑うつばき。外見はすでに小悪魔アイドルモードだが、カメラの回っていない今は心優しきお姉さん、すなわち素のつばきである。巻き髪がウィッグだということも、もちろん美穂は知っている。「ん？」

テーブルの隅の雑誌に注目するつばき。そして、それを手に取る。背表紙を向けているにも関わらず、彼女にはそれが何の雑誌だかすぐに分かったらしい。アイドルの勘であろうか。「新しい『月刊アイドルプレス』じゃん。和葉ちゃんも出てるの?」

「いえ、ちよつと暇つぶしに買ってみました」

髪の毛をいじる美穂。「少し早めに着いちゃいそうだったんで」月刊アイドルプレス。大手出版社、成岡出版より刊行されているアイドル専門誌で、現在アイドル専門誌の中ではダントツの発行部数を誇っている。発売日は毎月十五日である。

「ふーん」

パラパラと雑誌をめくるつばき。「なんか和葉ちゃんがこうゆうの読むのって意外だね。あんまり他のアイドルの子とかに興味なさそうだもん」

「そんなことはありませんよ」

美穂はふるふると首を振った。「いつ共演するかも分からないし、なるべく事前に共演相手を知っておいたほうがいいと思います」半分本当であり、半分嘘である。今回に限っては興味があるというだけのこと。

「あ、チロリちゃんだ」

雑誌の中のあるページを開き、つばきが言った。聞き耳を立てる美穂。「最近よくテレビ出てるなー。元気してるかなー」

「し、知り合いませんか?」

思わず尋ねてしまう。つばきは一瞬だけ目を丸くしてから答えた。「うん。一度だけ共演したんだ。面白くて明るくて良い子なんだよー」

「その子、こないだテレビで見ましたよ」

少しツンとした表情で美穂は言った。「確かに面白くて明るくて良い子みたいですね。カメラの外でもそんな感じなんですか?」

「カメラの前じゃ少し緊張してるっばいかな」

共演した時のことを思い出すかのように、宙へと視線を這わせるつばき。「カメラが回ってないところのほう面白いよ。どうしたの？ チロリちゃんと共演するの？」

「いえ、そうゆうわけじゃないですけど」

美穂はつばきから顔を背けた。「インタビュー読んで気になったんです。なんか素のままにインタビューに答えてる感じ。プライベートと仕事の顔を使い分けできてないんじゃないでしょうか。それから、前にドッキリで大泣きして、鼻水とか出しちゃったらしいじゃないですか。アイドルとしてどうなんでしょう」

「変なの」

あははとつばきは笑った。「素のキャラクターを全面に押し出すタイプのアイドルって他にもいるじゃん。イメージング（人気アイドルユニット）の三田沙織ちゃんとか。和葉ちゃん、沙織ちゃんの仕事の姿勢に対して『尊敬してる』って前に言ってたよ」

「沙織さんは沙織さんでプロ意識を感じるからです」

狼狽し、頬を赤らめてしまう美穂。「この子の場合ただ暇だからなんとなくアイドルやってる感じです。インタビューでも歌手になりたいって言ってます。歌手とアイドルは別物ですよ」

「随分嫌われてるんだね。良い子なのになー」

またパラパラと雑誌をめくるつばき。「今度共演とかしたら話しかけてみなよ。すぐ仲良くなれると思うよ」

「少しだけ黙った後、美穂は答えた。」

「遠慮します」

トントンとまたノックの音。美穂とつばきは同時に扉へと顔を向けた。美穂が「はい」と返事をし、扉が少しだけ開かれた。美穂のマネージャー、仲田である。二十代後半、眼鏡をかけたおとなしい女性だ。

「和葉ちゃん。もうすぐり八始まるから一応衣装に着替えといてね」  
中には入らず、入り口先でそう告げる仲田。美穂が「分かりました」と答えると、仲田はそのまま扉の向こうに消えてしまった。

美穂は立ち上がり、部屋の隅の衣装立てまで歩いた。衣装立てから、用意されていた衣装を全て剥ぎ取り、足元に丁寧に置く。

「つばきさんは忘れられない人がいる時、どうやって忘れれます?」  
「え?」

意外そうに美穂に目を向けるつばき。やがて、意地悪な笑顔を浮かべる。「何それ? 男の話?」

「例えばの話です」

赤面する美穂。セーラー服の上着を脱ぎ、肌着姿となる。肌着も脱ぎ、肩紐のないブラジャー一枚の姿に。胸には小さなペンダントが光っている。足元の衣装の中から、白のキャミソールを手取る。  
「そうだねえ」

あごに指を当て、考え込むつばき。「あんまり忘れようとは考えないかな。相手に彼女がいたって別れないとは限らないし、気長に待つよ。まあ、別れた頃にはいつの間にか忘れてそうだけど」

「忘れようとは考えない……」

つばきの台詞を繰り返す美穂。丈の短いキャミソール。チラチラとお腹が見え隠れする。続いて赤の長袖サマーセーターを拾い上げ、頭から被る。「でも、忘れなきゃダメでしょ? アイドルなんですから」

首周りが大きく開いたサマーセーター。身体を動かすたびに生地が伸縮し、露出度が変わる。

「仕事に支障をきたすとか考えてるんでしょ?」

つばきは呆れたように苦笑した。「大丈夫だって。女の子なら恋ぐらいしなくちゃ! なんとなく今の和葉ちゃん、前会った時より生き生きしてるように見えるよ」

「だから、例えばの話ですってば」

トゲのある口調でそう言うてから、美穂はセーラー服のスカート

を下ろした。

「今の技術ってすごいなー」

タンクトップとブラウスのトップス。下はお馴染みのローライズジーンズ。池田綾香は車の助手席に座り、雑誌のグラビアを眺めていた。今月号の『月刊アイドルプレス』に載っている自らのグラビアである。様々なタイプのビキニを着た綾香が、様々な表情を見せている。今月の始め辺りに行った仕事である。「この日、ちょっと目の下に隈があったのに、綺麗サツパリなくなつとる」

おそらくデジタル加工を施されたのだと思われる。「ほら、このチロリなんてめちゃくちゃ可愛くない？」

運転席でハンドルを握る、マネージャー南吾郎に向かってグラビアを見せつける綾香。南は相変わらずグラスアンと黒スーツでキメている。

「うるさい。その面はもう見飽きた」

グラビアに一瞥もくれず、南はそう吐き捨てた。ムツとする綾香を気にせず、更に続ける。「今日はテレビだから修正は効かんぞ。ちゃんと寝たか？」

「大丈夫！ ほら隈もなかる？」

自身の目元を指差す綾香。やはり前を向いたまま南が答える。

「その面はもう見飽きた」

午後五時過ぎ。南のマイカーである黄色の軽自動車に乗り、二人は仕事先の港区お台場エックステレビに向かっていた。

「お台場はロマンがあるよねー」

窓の外に目を向けながら綾香は言った。車は芝浦ふ頭より首都高に入り、いわゆるレインボーブリッジを走っていた。西の空が夕陽でほのかに赤く染まっており、東京湾に反射している。少しだけ開

いた窓の隙間から、心地よい風が車内に送り込まれてくる。「帰りは夜景が楽しめるっちゃねー」

お台場には何度か訪れたことのある綾香であったが、レインボーブリッジを走るのは初めてであった。「なんか気持ち良くなってきた。このまま夢の世界に飛んでいきたいな」

ウトウトと本当に眠りかける綾香であったが。

「寝るなよ」

その南の声で現実に引き戻される。「お前との付き合いはまだ二ヶ月そこそこだが、それでも分かったことがいくつもある。とにかくお前の寝起きの顔はひどい。ピークに戻そうとしても半日はかかる」

半日もかからんもん！

「おい、起きろ」

肩を揺さぶられ、綾香はまぶたを開けた。身体を起こし目をこすり、そしてキョロキョロと辺りを見回す。辺りは暗く、多数の車。どこかの屋内駐車場のようである。「着いたぞ。結局寝やがって」助手席のドアが開かれ、南はその向こうに立っていた。肩を揺さぶっていたのはもちろん彼であろう。

あ、エックステレビの駐車場か。

綾香は慌てて車から降りた。代わりに南が助手席にひざをつき、後部座席に置かれた荷物を引き寄せる。その中の綾香のハンドバッグを綾香に手渡す。「ども」と言って、それを受け取る綾香。

「なんか楽しみな。エックステレビの中ってどんなだろう」  
ワクワクとした様子で綾香は言った。好きな番組が多いエックステレビでの初仕事に、少なからず彼女の気分は高ぶっていた。

「中は広いし、人も多い」

ボタンと助手席のドアを閉めながら南が言う。「いつも言っているように、タレントだけでなく、社員や他の事務所の関係者にもち

やんと挨拶しろよ」

「はい」

気の抜けた返事をする綾香。そして「ふあーあ」と大あくびをする。

「それから」

南は綾香の顔を指差した。「本番までにその寝ぼけ顔を直しとけよ。ずっと顔をマッサージしとけ」

「こんばんわあ。あ、こんばんわあ」

顔をもみもみしながら、すれ違う人々に片っ端から挨拶をする綾香。彼女と南は、エックステレビ局内の、楽屋がずらりと並ぶ楽屋郡の廊下を歩いていた。「こんばんわあ」

「どうもー。今日はよろしくお願いしまーす」

南も同様に、ちえ美ボイスで挨拶をする。相手も挨拶を返す。

「人多いよ」

小声で南に話しかける綾香。「早く楽屋に入らんとキリがないばい？」

「分かってる」

楽屋の扉を一つ一つ確認しながら南も小声で答える。「見つからねえんだよ。この階でよかったはずなんだが……」

その時また人とすれ違い、南が頭を下げる。「あ、おつかれさまでーす」

「おつかれさ……」

綾香も挨拶しようとするが。「あ、つばきさん!」

「あ、チロリさん!」

『トーキョーリラックス』で共演した小悪魔アイドルこと菊田つばきであった。巻き髪ウィッグとアクセサリーを身につけ、白のワンピースを着ている。立ち止まる三人。「さつきチロリさんのこと話してたんですよ。ってそれはこっちの話ですけど……。今から仕



事ですか？」

マツサージしていた手を下ろし、綾香は答えた。

「は、はい。深夜番組の『テレビでラジオ』のゲストに呼ばれました」

三十分のトーク番組である。若手実力派司会者である岩田幸三と、視聴者のハガキ、メールを紹介しつつ、一対一でトークを行う。収録自体は一時間程度で終わる予定だが、その前に打ち合わせと簡単なりハーサルも行われる。「ところでつばきさん……。今日はキャラを演じなくてもいいんですか？」

「ん？」

一瞬目を丸めた後、「ああ」と呟き、頷くつばき。「カメラが回っていない時は素で大丈夫ですよ。ほとんど皆知ってるし。前は口ケだったから」

もちろん、つばきの小悪魔キャラのことである。

「そ、そっか」

綾香は苦笑いを浮かべた。「つばきさんも今から仕事ですか？」

「スタジオで収録中です。ちょっと収録が伸びそうだから、今は休憩中ですね。楽屋に用があつて戻ってきたんです」

そばの楽屋を指差すつばき。そこに『菊田つばき様』と書かれたプレートが貼られていた。「そんじゃ、すぐにスタジオ戻るから、また会いましょう」

「あ、はい。またメールしますねー」

楽屋の中に消えていくつばき。つばきを見送ってから、綾香は南に顔を向けた。「私もさっさと楽屋に行きたい」

無言で歩き出す南。綾香はふうと溜息を吐き、南の後を追った。

挨拶を繰り返しながらしばらく歩き続け、二人はエレベーターホールまで戻ってきてしまった。

「ないな」

南が偉そうに腕を組みながら言った。「もう一周するか」

その言葉を聞き、綾香がガツクリとうな垂れた瞬間、「どこに目

つけてるの？」と女性の声がホールに響いた。綾香と南は、同時に声のする方を振り向いた。そこに一人の少女が立っていた。

## 70 マジシャンアイドル

こ、この子は。えーっと、どっかで見たことあるような……。

訝しげに少女を観察する綾香。少女は悪戯っぽく笑みを浮かべていた。歳は綾香と同年代であろう。天使の羽衣のようにさらさらと柔らかそうなストレートロングヘア。マネキンのように整った顔立ち。厚手のノースリーブシャツとピッチリしたジーンズ。

「プリンセス雅さんですか？」

南がちえ美ボイスでそう尋ねた。名前を聞いてようやく綾香も思いつく。そうだ、こいつがプリンセス雅だ、と。「こっちはうちの綾川チロリです。以後よろしくお願いいたしまーす」

「知ってるよ」

そう言いながら雅は綾香に近づいてきた。身長百六十センチに満たない綾香に対し、雅はゆうに百七十センチを超えている。「初めました。最近よくテレビに出てるみたいだね。月末が楽しみだなー。ね？ チ、ロ、リ、ちゃん」

顔を上げたまま綾香を見下ろす雅。綾香もキツと彼女を睨み返した。

雅は綾香がゲストとして呼ばれている秀英大学秀英祭のライバル、昭和院大学学園祭のゲストであった。綾香がそのことを知ったのはつい先日である。以来、心のどこかで雅を意識し続けてきた。

まさかこんなところで出くわすとは……。それにしても、気がつかんかったな。

雅はここ数ヶ月で一気にブレイクした経歴不詳、年齢不詳のマジシャン兼アイドルである。メディアに露出する際は、決まってシルクハットを被り、タキシードを着ている。その印象が強かったため、綾香は一目で彼女がプリンセス雅だと気づくことができなかったのだ。

「おい、ガンつけてないでさっさと挨拶しろ」

綾香に対し南が言った。同じく、雅が昭和院大学学園祭のゲストだということを知っているはずだが、彼は好戦ムードではない。

「始めてまして。み、や、び、さん」

ツンとした表情を浮かべる綾香。「そちらこそよくテレビで見かけますね。もう、目が腐るほどに」

雅の笑みが消える。睨み合う二人。二つの視線がバチバチと火花を散らし交錯する。

「雅さん」

二人の間に割って入る南。「さっき『どこに目つけてるの?』って言いましたよね。チロリの楽屋の場所をご存知なんですか?」

南を一瞥し、雅はフツツと鼻で笑った。

「うん」

そして、歩き始める。「ついてきなよ」

エレベーターホールから歩いて数メートルの地点である。ここも、先ほど綾香と南が通った場所であるが。

「ここに私の楽屋があるよね」

一つの扉を指差す雅。確かに『プリンセス雅様』とある。「そして、その向かいにも」

向かいの扉に視線を移す綾香。そこにも『プリンセス雅様』。綾香は混乱した。

な、なんこれ。雅の楽屋が二つ。

「私、二つも楽屋いらないから、チロリちゃんに一つあげるね」

雅が言った。「こつち側のでいい?」

反射的に始めのほうの扉に視線を戻す綾香。するとそこには……。

『綾川チロリ様』。

「え、え!?!」

綾香は驚いて雅に顔を向けた。雅はまた不敵に笑い、「感謝しなよ」とその場から歩き去っていった。

あんたが始めっから隠しとったっちゃろもん！

「うーん、どうやったっちゃろ。誰か助手がおって、私たちの見とらん隙に……。いや、でもなー……。っていうか、楽屋が向かい合わせなのは偶然？ 策略？ っていうか、最後雅は楽屋に戻らずにどこ行ったん？」

綾香が眉をひそめてぼそぼそと呟く。彼女は楽屋の鏡に向かい、顔をもみもみしていた。

「マジシヤンのすることを本気で悩むな」

中心のテーブルに台本を広げ、それに目を落とす南。「お前なんかカラクリが知られてるようじゃ、生活していけねえだろ」

「まあ、そうっっちゃろうけどさ」

手元に置かれた烏龍茶の500MLペットを手に取る綾香。ぐびぐびと飲み、プハアと息を吐く。「不思議よねー。学園祭であんなんやられたら絶対盛り上がるうね」

「学園祭でマジックをしないマジシヤンなどいない。間違いなくやるだろう。間違いなく盛り上がるだろう」

そう言ってから、南は煙草をくわえ、煙草に火をつけた。「始まる前から昭和院大学のほうが圧倒的に優勢だな。ちえ美や亜佐美と三人束になっても勝てそうにない」

秀英祭で共にゲスト出演するお馴染みの内藤ちえ美はもちろん、滝田亜佐美も綾香と同じくSDPのタレント（先輩）である。SDPが必死に秀英祭側に所属タレントを売り込んだのだ。今回の秀英祭の成功はSDPにとって大きいし、逆に失敗も大きい。

「なんよー」

唇をとがらせる綾香。「子供だましのマジックなんか、私のスマイルの前では無力やもんね」

「いや」

ふつと南は紫煙を吐いた。「俺でも、お前のスマイルなんぞを観

に行くぐらいなら、雅のマジックを観に行くな」

どっちの味方よ！

「でも、雅のヤツ。やたら敵対心剥き出しにしとったね」

また顔をもみもみする綾香。いまいち寝ぼけ顔が元に戻らない。

「私なんてちえ美と亜佐美さんのついでみたいなものに」

「ブッキング当時はそうだったが、今じゃ違う。三人の知名度はほぼ横並びだ。勢いだけで見ればお前が一步も二歩も抜けてる」

「なるほど」

よし、受けてたつたるけんね。プリンセス雅。

約二週間後の秀英祭に向けて、メラメラと闘志を燃やす綾香であった。

番組スタッフとの楽屋での打ち合わせの後、綾香は本日共演する岩田幸三の楽屋へと挨拶に行った。それから衣装に着替え、メイクを済ませてから、楽屋でリハーサルの開始時刻を待つ。

綾香は楽屋の畳の上につぶせで寝そべっていた。衣装であるストライプブルーのワンピース姿だ。南はどこかに出ている。部屋には彼女一人しかない。

松尾和葉か……。

実は先ほど、番組スタッフに「つばきさんは何の番組に出演しているんですか？」と質問してみたのだ。すると、ゴールデン番組の『はって回ってポン』だという答えが返ってきた。同番組には人気アイドル松尾和葉がレギュラー出演していたはずだ。綾香の恋人、井本真一が彼女の大ファンなのである。少し複雑な気分ではあるが……。

もし和葉とバツタリ出くわすようなことがあれば、サインぐらいもらつといてやるのかな。明るそうな子やけん、大丈夫やる。

そんなことを考えつつ、綾香は身体を起こした。そして、何気なく鏡を見る。

あ……。

なんと、額に畳の跡がついてしまっているではないか。リハーサルまであと十分ほど。またもや高速でもみもみを開始する綾香であった。

## 71 サインを求めて

「ヘーイ！ 今日もはりきっていこうか！ 新感覚トークバラエティ『テレビでラジオ』の時間だぜベイベ！」

ヘッドイヤフォンをつけた岩田幸三が目のかメラに顔を近づける。丸く小さなサングラスをかけ、派手なアロハシャツを着ている。あごひげは自前だが、アフロヘアはカツラである。「今日はキュートでチャーミングでちょっぴりフルなゲストを呼んであげようぜ！ 綾川ああ……」

五秒ほど溜めてから。「チーロリちゃんだー」

「よろしく頼むぜイエーイ！」

カメラに向かって親指を立てる綾香。二人はひょうたん型のテーブルに向かい、隣り合って座っている。カメラは固定されており、番組中は常に横並びの二人を正面からとらえる。

「ヘーイ！」

岩田の（綾香も）このノリはあくまでキャラ作りである。これはオープニングのみあり、本編はいたって普通のトーク番組に変貌する。「どうしたんだいベイベ。可愛いお顔がかくれんぼしちゃってるぜい」

もはや綾川チロリのトレードマークとなった白のソフトハットを、眉が隠れるほどにまで深く被っている綾香。

「イエーイ。最近の流行を知らないのかいベイベ！ こうやって目元まで深く被るのがクールだってもんさファイヤー！」

ノリの方向性を若干誤解している綾香。「おっと、今日は約束の品を持ってきたぜベイベ！」

テーブルの下からポスターを取り出し、それを広げる。「あたいが明日遊びに行く学園祭のポスターさ！ こいつを壁に貼っといてくんろ！」

秀英祭のポスターであった。全面に動物の抽象的なイラストが描



かれており、右下の隅にゲスト三人の顔写真が載っていた。番組は秀英祭初日（綾香の出演日）の前日にオンエアされる予定だ。

「宣伝はお断りだぜベイベ」

チツチツチつと指を振る岩田。「オープニングクイズに答えもしないでそいつを壁に貼りたがるなんてナンセンス！ さあ、クイズスタートだ！ そいつの辞書に寝不足という言葉は存在しないんだ。毎日しつかり寝て毎日快調！ さあ、そいつはどんなスポーツをやっている？」

収録は円滑に進み、予定どおり一時間で終了した。綾香はスタジオを出て、廊下を少し歩いた先にあるホールのソファで携帯をいじっていた。収録前、真一に「松尾和葉のサインほしい？」とメールしており、その返事が届いていた。

『何がなんでも手に入れる。綾香愛してる』

どんよりとした顔でまた複雑な気分浸っていた時、ホールに岩田がやってきた。アフロとサングラスは外しているが、アロハシャツはそのままである。アフロの下は頭皮が見えるほどの短髪。サングラスの下はギョロツとした大きな瞳。歳は綾香より一回りほど離れていたはずだ。

「あ、お疲れさまでした」

ペコリと頭を下げる綾香。岩田は「お疲れ」と綾香の隣に腰かけ、ジーンズのポケットから煙草の箱を取り出した。

「お前、笑わせんなよな」

煙草を一本くわえながら、岩田は苦笑する。「でこに畳の跡つけて収録に臨むアイドルなんて聞いたことねえよ」

「す、すいません」

しょんぼりと肩を落とす綾香。まだ帽子を深く被ったままである。「まあ、収録自体は良かったよ。ノリも良くて。」

ふつと紫煙を吐く岩田。「けっこうノリ悪いヤツ多いからさ。お

前みたいなのが相手だと仕事しやすいね。他の番組でも一緒に仕事しようぜ」

「ありがとうございます！」

パツと明るい顔に変わる綾香。「岩田さんはまだお仕事なんですか？」

岩田は頷く。

「これからまた打ち合わせだよ。お前は上がりだろ？」

「はい」

綾香も頷く。「今、松尾和葉ちゃんが収録やってるらしくて……。友達がファンなんでサインをもらおうかな、と」

「ああ、前に他局と一緒に仕事した。あの子もなかなかノリが良かったな」

またうんうんと頷きながら、岩田は煙草を吸い、煙を吐いた。「普段はおとなしくて礼儀正しい子なのに、カメラが回るとパツとキヤラが切り替わっちまうんだよな。それはそれでやりやすいし、胸もでかいし」

最後のは聞き流すとして。

「そうなんですか」

意外そうに目を丸める綾香。「私の中では明るいつてイメージしかなかったんですけど……。サインとかしてくれませんかね」

そして、廊下の先を見つめる。その方向にエックステレビ局内で最も広いスタジオがあり、そこで『はって回ってポン』の収録が行われているという話を聞かされていた。

「さあな」

岩田は興味がなさそうにそう言った。

午後八時過ぎ。廊下が少しだけにぎやかになる。例のスタジオのほうからいくつもの足音が聞こえてくる。

き、きた……。

岩田は去り、ホールには数人の見知らぬ男性と綾香のみ。綾香はソファに座ったまま顔をうつむかせ、横目で目の前の廊下を通り過ぎていく人々の顔を確認した。中には俳優やお笑い芸人の姿も。しかし、松尾和葉や菊田つばきの姿は見えない。

綾香は立ち上がり壁に張りついて、そつと廊下の先を覗き込んだ。やはり、和葉やつばきがこちらに歩いてくる様子はない。

「あんまり怪しい行動を取るなよ」

「わっ！」

背後から突然話しかけられ、綾香は驚き、ビクツと跳ねた。高鳴る心音を抑えつつ、振り返ると、そこには予想どおり南の姿があった。「なんよ！ 驚かさんでよ！」

「お前が勝手に驚いただけだろう。それより」

ゆっくりと身をひるがえしながら南は言う。「今日の仕事は終わりだ。額の跡の件についての説教は車の中まで取っておくとして、さっさと出るぞ」

それから、エレベーターホール方面に向かって歩き始める。

「ああ、ちよつと待ってよ」

南を呼び止める綾香。「ん？」と眉をひそめる南。綾香は身体をもじもじさせながら言った。「松尾和葉のサインがほしいっちゃんね。友達が大药房でさ。今収録が終わったみたいやけん」

「ふん、くだらん」

再び歩き出す南。「まあいい。十分だけ待ってやる。十分以内に楽屋に戻って来い。戻って来れなければ、家まで一人で帰れよ」

じ、十分……。厳しいな。

「あ……」

唐突にひらめいた。

そ、そつだ。松尾和葉の楽屋の前で待つとけばいいっちゃん！  
なんで気がつかんやつたつちやる。それなら、もし和葉に会えんでも私の楽屋にすぐ帰れるし。

そつ考え、南の後を追おうと歩を進め始めた時だった。

「お疲れさまです」

「え？」

振り向いてから、しばらく綾香はぼうつと目の前に立つ少女を見つめていた。髪型はシンプルなポニーテイル。誰もが美人と認めるであろう完璧なルックスに加え、サマーセーターに包まれた豊満なバスト。デニム生地ホットパンツから伸びたすらつとした足。少女の全てが輝いて見えた。

ま、松尾和葉……。

ごまんというアイドルたちの中で、今やトップに立つ存在の松尾和葉。初めて生で見る彼女の姿に、綾香は不本意ながらも目を奪われてしまったのだ。

## 72 ライバル

見つめ合う綾香と和葉の脇を、数人の男女が通り過ぎる。その中の一人が和葉に「お疲れ」と挨拶をし、和葉も「お疲れさまです」と挨拶を返した。

綾香は少々戸惑っていた。なぜ、目の前にいる松尾和葉はこの場から立ち去ろうとしないのだろうか。サインのことは話していないし、そもそも綾香はまだ一言も発していない。

私になんか用でもあるのかいな。

「初めまして」

和葉は丁寧にお辞儀をした。「松尾和葉です。よろしくお願います」

頭を上げてから、自己紹介をする。やたらと冷めた表情、そして口調だ。テレビの中にこやかな彼女とは別人のように見える。

「は、初めまして」

綾香も頭を下げ、ようやく第一声を口にする。「えーっと、綾川チロリっていいいます。よろし……」

「チロリさん」

綾香の言葉を遮る和葉。綾香は「はい？」と首を傾げた。「生意気かもしれないですけど、人に挨拶をする時は帽子を取ったほうがいいと思います」

「あ、ああ」

すぐに帽子を脱ぐ綾香。指先で畳の跡が消えたかどうかを確認する。まだ少し残っている。「よろしくお願いします」

和葉は無表情でゆっくりと綾香に近づいてきた。和葉のオーラに圧され、一歩下がってしまう綾香。その視線は思わず和葉の大きな胸に。

オ、オッパイでかいな……。

「触ってみます？」

突然、無表情のまま和葉が言った。綾香は「え？」と目を丸めた。「い、いいんですか？」

「冗談です」

軽く一蹴され、気まずそうに頬を赤らめる綾香。実は少し触ってみたかった。「さつき、つばきさんからチロリさんが局に来るって聞きました。つばきさんはチロリさんのことがすごく好きみたいで、私とも仲良くなってほしいみたいです。チロリさんも忙しいでしょうから、今日はもういいかなと思ってたんですけど、たまたまチロリさんを見かけたので、声をかけさせていただきました」

「は、はあ」

和葉が立ち去ろうとしない理由は分かった。しかし、そんなことよりも別のことが気になり始めていた。

「こ、この子……。いったいなんなん？」

和葉のやや黒目がちな瞳の奥に、敵意に似たような光が宿っているということ、綾香は感じ取っていたのだ。

「わ、私も和葉さんと仲良くなりたいたいなーなんて思っていました」

愛想笑いを浮かべる綾香。「マネージャーを待たせているので十分ぐらいしかお話はできませんけど」

「構いません」

そう言いながら、和葉は後ろを振り向いた。「私も待たせています。あそこにいる彼女が私のマネージャーです」

和葉の後方に目をこらす綾香。二十メートルほど先に、眼鏡をかけ、ラフな格好をした女性の姿が見える。彼女はこちらに顔を向けておらず、番組スタッフであろうか、同じくラフな格好の男性と話をしている。

「そうですか」

綾香は視線を和葉に戻した「じゃあ……」

「あと」

また遮られる。少しムツとする綾香。「チロリさんは十九歳だそうですね。私よりも二つ年上です。ですから、チロリさんはタメ口でいいですよ」

「は、はあ……」

「あ、ごめんなさい」

ペコリと頭を下げる和葉。「続きをどうぞ」

「あ、えーっと」

先ほど口にしようとしていた言葉を探る。「お、お互いマネージヤーを待たせているのなら、急いだほうがいいですね。なんなら今日は電話番号だけを交換して、後日電話で話すというのは……」

少しだけ悩んだが、綾香は引き続き敬語で話すことにした。どうも、この少女に気を許すわけにはいかないような気がする。

「そうですね」

コクンと頷き、和葉は言った。「プライベート用の携帯は親しい人だけと決めてあるので、ビジネス用の携帯でよければ」

またまたムツとしてしまう綾香。

こいつ、絶対私にケンカ売っとる……！

帰りの車内。綾香はぐったりとシートにもたれながら、プリンセス雅、そして松尾和葉のことを考えていた。「レインボーブリッジだぞ。夜景はいいのか？」という南の声も頭に入っていない。はあと溜息を吐く。

なんか、他のアイドルと初めて会う時、いつつもケンカ売られるような気がする。

例えば、『事情あり』とはいえ、菊田つばきもそうであった。

「ねえ南さん」

「ん？」という南の相槌を待ってから、綾香は続けた。「最近のアイドルって、他のアイドルをライバル視してる子が多いと？ 今日、私、ケンカ売られまくったばい」

「お前のアホ面を見てると思わずケンカを売りたくなるって気持ちも分かる」

綾香にはもう怒る気力もなかった。完全に疲れ果てている。コホン、と一度咳払いをしてから南は続ける。「まあ、でもプリンセス雅も松尾和葉も人気アイドルだからな。そんなヤツらにライバル視されるってのも気分は悪くないだろ」

「うーん、それにしても不思議よね」

ぼんやりと窓の外を眺めながら綾香は呟いた。「雅は学園祭の件で本当にライバルやけんまだ納得できるけど（それでも変なヤツには変わりないけど）、和葉は全く関連性もないのに、なんでライバル視しとるっちゃる。あいつみたいないな人気アイドルからすれば、私なんてその他大勢の一人って感じやる？」

「和葉の男をお前が寝取ったとか、どうせそんなとこだろ」

綾香はハンドルを握る南の手を軽くつねった。「いて」と声を上げる南。

真一が和葉にメロメロなんやけん、どっちかっていったら男を寝取られとるのは私やん。

「あ……」

綾香はハツと気がついた。

「あ？ どうした？」

うんざしたような声で南が尋ねる。「楽屋になんか忘れ物したとかじゃねえだろうな。知らんぞ。捨ててもらっぞ」

「和葉にサインもらうの忘れた」

一瞬、車内がシーンとなってしまふのであった。

その夜、綾香は無事真一にサイン色紙を手渡すことができた。真一は飛び跳ねて喜び、何度も何度も綾香に愛を叫んだが、綾香は色々な意味で複雑な心境だった。色紙に書かれたサインは、綾香が適当に書いた『それ』っぽい落書きだったのである。



### 73 待ち人現れず

吉祥寺駅構内のファーストフード店『バスケット』。店内は多くの客で溢れかえっている。矢上詩織は入り口近くの二人がけテーブルにて一人コーヒートを啜っていた。セミロングの髪をほんのり茶色に染め、パーマを当てている。そして、整髪料でピンピンと乱れさせている。服装は質素な黒のワンピースと、白のブラウスという組み合わせ。首には恋人、田之上裕作にもらったシルバーネックレスが光る。

先ほど学校を終えたばかりの午後三時過ぎである。本日は夕方からのバイトはない。詩織はこの店である人物と待ち合わせをしていた。

遅い……。

左手の指先でテーブルをトントンと叩く詩織。ぶすつとした表情を浮かべている。それもそのはず、待ち合わせ時間は午後三時。相手が遅刻をしているのだ。

自分から言い出したくせに遅刻だなんて……。やっぱり仲直りするのやめようかな。

待ち合わせ相手は元親友、池田綾香であった。

一昨日の夜のこと。絶交以来、詩織は初めて綾香からの電話に出た。二週間ほど前、ラーメン屋『ぶるうす』で綾香の恋人である井本真一と話をした時から、詩織の心に『そろそろ許してあげようかな』という気持ちが芽生えていたのである。

《え？ 詩織？》

自分から電話をかけてきたくせに驚いた様子の綾香。《あの……。綾香ですけども》

『言われなくても分かってるよ。アイドルのお仕事、随分忙しいみ

ただね』

《ま、まあまあねー。ハハハ……》

しばし沈黙する二人。

『で？ 何か用？』

《えーっと……》

綾香は気まずそうに口を開いた。しかし、すぐにテンションが加速する。《あ、あの時はゴメン！ 会ってちゃんと謝るけん、今度一緒にご飯食べに行こうよ》

『ふーん、ご飯ねえ』

わざと意地悪な口調で詩織は言った。『ちゃんと反省してる？』

田之上くんにも謝る？』

《謝ります！ 謝るけん！》

『分かった』

もともと歩み寄るつもりではあった。『明後日とかどう？ バイ

ト休みなんだ。もしくは次の日曜日』

《あ、明後日でよかよ。仕事昼過ぎに終わる予定やけん。駅で待ち合わせよう》

二人の間で単に『駅』と呼んだ場合、それは吉祥寺駅を指す。

『オーケー。じゃあ（バスケット）に午後三時ね。遅刻したら怒るよー』

コーヒーだけでは悪いので、ハンバーガーとポテトも購入した。

もう三十分以上同じ席を陣取っている。時刻は三時半だ。

時間潰しのため、ポテトをちびちびと食べながら、詩織は店内に入ってくる客の顔を一人一人観察し続けた。しかし、一向に綾香は現れない。携帯を見ても着信はない。こちらから連絡を取ろうとしても繋がらない。メールをしても返ってこない。

これだから嫌なんだ。アイツは。

かなり悪い表情になる詩織。綾香に対しての怒りがこみ上げて

くる。と、その時。

「綾川チロリっっているじゃん」

ん？ と詩織は声のしたほうに顔を向けた。隣のテーブルに陣取る若いカップルである。聞き耳を立てる詩織。

「は？ 聞いたことないし」

女が言う。金髪の髪に濃い化粧。派手な洋服。「なにそれ。芸能人？」

「アイドルだよ。さっき『港町ホットストア』に出ててさ」

男が言う。同じく金髪。ピアス。派手な洋服。『港町ホットストア』は関東ローカルのお昼の情報バラエティである。「新谷清志と一緒になんかスポーツジム体験とかやっててさ」

若手イケメン俳優である。「もうマジでウゼえの。ちょっとランニングマシンで走っただけで顔中汗だらけになっててさ。俺なんか三時間は余裕だっつの」

詩織はなんとなく気分が悪くなった。ハンバーガーにかぶりつく。「マジでー？ ウザ過ぎー」

女。お前の喋り方のほうがウザいよと詩織は思う。「っていうかなんでキヨポン（新谷清志の愛称）と一緒にそんなヤツが出てくるわけ？ ありえなくない？ キヨポン可哀想ー」

もぐもぐと口を動かし、ハンバーガーを飲み込んだ後、詩織はふつと溜息を吐いた。

うーん、アイドルも大変だな……。

詩織の携帯の着うたが鳴った。発信者は綾香である。すぐさま電話に出て、開口一番に詩織は言った。

「今何時だと思ってるの！？」

こちらを注目する例のカップルの視線を感じたが、気にせず続ける。「三時半過ぎてるよ！ 遅刻したら怒るって言っただでしょ！

この馬鹿！」

《……。「う、ごめん」

泣き声に近い綾香の声。《仕事が一時過ぎぐらいにまで伸びちゃって。連絡しようと思っとなったっちゃけど》

「ちゃけど、何？」

「一時過ぎならまだ間に合うだろ、と思いつつ、詩織は尋ねた。」

《スタジオ前の廊下でリリアンさんとバッタリ会っちゃって……》  
「ふーん」

女性R & B歌手である。綾香は彼女の大ファンなのだ。「……。  
つまり、大好きなリリアンを目の前にして私との約束が飛んじゃったと……」

《だ、だってリリアンさん、私のこと知っとなんよ！ しかもファンだって言ってくれて》

綾香の声が気持ち明るくなる。《そんでき。私もいつか歌を歌いたいって言ったらリリアンさん、下積み時代の話とかしてくれてさ。もう私、感動で胸が震えっぱなしやったばい》

何も返さず、ポテトを口にする詩織。《と、とにかく。話したらこんな時間になっとなってさ。携帯もマナーモードでしかもバッグに入れっぱなしやったけん、全然着信に気がつかんやったんよ。これからすぐ行くけん！ なんとか四時まで……。四時十五分までにはそつちに……》

そこで詩織は通話を切った。そして、ポテトとハンバーガーの残りを一気に口の中に入れ、そのまま店を出たのであった。

## 74 案内人は引き受けた

近所のコンビニで食料を調達し、橘川夢多は秀英大学のキャンパスへと戻ってきた。グリーンの野球帽を被り、ベージュの長袖 टीシャツを着て、黒のジーンズをはいている。

雨が降りそうだな。

星のない夜空を見上げ、橘川は思った。それから、自身の専攻する文学部のある第一学舎に向けて、キャンパスを歩く。

秀英祭まで残り一週間を切った。もう午後十一時を回っていると、いつものキャンパス内にはその準備に追われる学生たちがまだ多数残っている。もちろん、橘川もその一人なのであるが。

チロリちゃん……。楽しみだな。

もし、綾川チロリが秀英祭にやってくるという事実がなければ、おそらく、夜遅くまでこうして秀英祭の準備を手伝うということもなかったであろう。ひよっとしたら、当日は大学にさえ来なかったかもしれない。橘川は何もサークルなどに属していないのだ。

第一学舎に入り、二階へと上がる。学舎内のほとんどの教室の明かりはついており、学生たちのにぎやかな声が聞こえてくる。橘川はある教室のドアの前に立ち、そのドアをガラツと開けた。

「おかえりなさい」

部屋のほぼ中心の席に座り、ペンで紙に何やら書き込んでいた大田早苗が顔を上げて言った。ショートボブカットの前髪をピンで止めており、眼鏡をかけている。グレイのトレーナーとジーンズを着用している。格好は地味だが、かなりの美人である。周りにいた他の学生たちも一斉に橘川に目を向ける。

「ただいま」

そう言っただけ橘川は彼らのもとまで歩き、机の上に袋に入った食料

を置く。「あんまり弁当残ってなかった。カップ麺も買ったから……。お湯ならどつかにあるでしょ？」

「ありがとうございます」

藤岡茂が頭を下げる。眼鏡をかけ、頭は丸坊主だ。「下の講義室にいる奴らがポット持ってきてましたんで、借りられると思います」  
橘川は近くの椅子に座り、一息吐いて部屋を眺めた。小さな演習室である。部屋の中には橘川以外に全部で五人の生徒がおり、皆、橘川より年下である。入学して以来、自分より年下の生徒と接することなどあまりなかったので、彼は精神的に窮屈な思いをしていた。しかし。

辛抱だ。チロリちゃんと話をするための。

五人は秀英祭の実行委員であった。

同じ文学部の比較的親しい男子生徒を介し、橘川は今日早苗たちと知り合ったばかりである。その男子生徒も実行委員で、先日橘川は彼にこう持ちかけてみたのだ。「秀英祭ツアー」の文学部の案内人を自分にやらせてほしい、と。

秀英祭ツアーとは、その名のとおり一人のガイドが秀大生以外の客を対象に、彼らを引き連れ秀英祭を案内して回るといふイベントである。ガイドは早苗が担当する予定だが、学部、または施設などポイントごとにもう一人別の案内人が付き、そこで行われているイベントなどの内容を詳しく説明する。つまり、その案内人の文学部担当を橘川は志願したわけである。

秀英祭ツアーの企画を受け持っていたのが、早苗以下五人の後輩たちであった。

「すみませんね」

カルビ弁当を箸でつまみながら、早苗が言った。「案内人をやっ

てもらえるっていうのに、しかもこんな雑用みたいなことまでやってもらっちゃって」

人懐っこい笑顔を見せ、それからご飯を口の中に入れた。雑用というのは食料調達のパシリのことである。

「いや、全然かまわないよ」

橘川は小さく首を振った。彼はジャムパンをすでに食べ終えている。「案内人みたいな光栄な役をやらせてもらえることになったんだし。それに、俺もできるだけ実行委員の人たちの力になりたいんだ。秀英祭の成功のためにさ」

心にもないことを言う。

秀英祭初日から最終日まで、ずっと秀英祭ツアーは行われるため、案内人になると秀英祭期間中の自由を奪われてしまう。よって、案内人はジャンケンで負けた実行委員が渋々と引き受けるものなのだと見なされていた。だからこそ、実行委員ではない橘川がその役を引き受けたいと申し出た時、五人のリーダーである早苗はすんなりとその申し出を承諾してくれた。

確かに、秀英祭の期間中、ずっとそんな役目を背負っていなければならぬということを見ると、橘川としても正直うんざりしてしまうが、それが帳消しになるほどの利点がこの案内人にはあった。

「でも、橘川さんって見た目によらず行動派なんですね」

カップラーメンを手に持った藤岡が、意地悪そうな笑顔を浮かべた。「いくらアイドルと話ができるからって、初日だけなんですよ。しかもほんの数分ぐらいだろうし」

「べ、別にアイドルと話するのが目当てじゃないよ」

橘川は慌てて大嘘を吐いた。「色んな人たちに秀英祭の歴史や楽しさをじかに説明してあげたいだけなんだ。まあ、アイドルの人たちにももちろん説明してあげたいけどね」

アイドルの人たちってというかチロリちゃんにね、と心の中で呟い

た。

そう、綾川チロリを含む三人のアイドルのトークショーが行われる秀英祭初日、そのトークショーの前に彼女たちも秀英祭ツアーに参加する予定なのだ。つまり、彼女たちがそのツアーで文学部を訪れた際、藤岡の言うとおり数分ではあるが、彼女たち、いや、綾川チロリと直接話をする事ができる。それが、橘川が案内人を買って出た最大の、そして唯一の理由であった。

ちなみに今橘川がこうして一緒に残って早苗たちの手伝いをしてるのは、彼女たちがあまりに忙しそうに見えたからである。かなりの数を用意しなければならぬという案内人はまだほとんど集まっていないようだし、ツアー客に渡す冊子もまだできあがっていないらしい。気の優しい（というより弱い？）橘川としては彼女たちを見過ごして帰宅することはできなかつた。彼女たちが文学部の教室を拠点としている（リーダー早苗が文学部であるというだけの理由だ）ことも大きかつた。

「橘川さん」

不意に早苗が上目づかいをしながら言った。「もし良ければ、明日も……。っていつか当日まで一緒に残ってくれませんか？」

「え？」

少々戸惑ってしまう橘川だったが、それも致しかたないことかと観念する。「そ、そうだね。バイトがある日は無理だけど、それ以外なら別にいいかな」

「ありがとうございます！」

早苗はまた人懐っこい笑顔を見せた。橘川は「ハハハ……」と乾いた笑い声を発しながら、少しだけ肩を落とした。

チロリちゃんの出るテレビ番組とか観たかつたんだけど……。断れないもんなあ。

やはり、気の弱い橘川であった。



## 75 ガイドは引き受けた

翌日。昨日と同じ服装の橘川は、秀英祭ツアーの実行委員本部、文学部演習室の窓際の席で、頬づえをつき、窓の外をぼうつと見つめていた。

橘川の予想どおり、秀英大学のキャンパスは雨に見舞われた。それほど激しい雨ではない。小降り程度だ。朝から降り続けて、午後九時を回った現在もまだ降っている。

「橘川さん。ポーっとしてないで、早く書き上げちゃいましょう」隣の席に座る藤岡が言った。橘川は「あ、ああ」と返事をしてから一度背伸びをし、机の上に目を落とした。彼は藤岡と共に秀英祭ツアーの参加客に渡す冊子のイラストを描いているところであった。雨だからといって、秀英祭の準備を滞らせるわけにはいかない。昨日と同様に、学園内にはまだ多くの生徒が残っていた。中には学舎に寝泊りしている生徒もいるのだという。

教室内には藤岡の他に、肥満気味の男子生徒皆岡と、おとなしく滅多に喋らない女子生徒貴美の二人がいた。彼らは二人で『台本』を練っているらしかった。ツアー客を先導するガイド、つまり早苗のための台本である。ポイントごとの案内人の台詞は、案内人がそれぞれ自分で用意することになっていた。そちらについては橘川もなんとか済ませてある（結局、面白味のない退屈な説明文に落ち着いた）。

リーダー早苗の姿は先ほどから見かけなくなっていた。もう一人のメンバーである一年のギャル系女子生徒みなみを連れて、案内人探しに躍起となっているのであろうか。

「藤岡」

皆岡が言った。藤岡と同時に橘川も振り向く。皆岡は部屋の後方

の壁に貼ってある秀英祭ポスターの前にいた。「ん？」と言って立ち上がる藤岡。皆岡のもとへ向かう。「この三人の中で誰が一番タ  
イプだ？」

その言葉を聞き、少しだけ動揺してしまう橘川。イラスト描きに  
専念するフリをしながら、耳の穴を二倍ほどの大きさにまで広げる。  
この三人とは綾川チロリを含めた秀英祭のゲストたちに他ならない。  
「なんだよ。くだらないこと言っていないでさっさと台本仕上げるよ」  
うんざりとした声で藤岡はそう言うものの……。 「そうだな。三  
人とも微妙だけど、付き合ってもいいのはやっぱ内藤ちえ美  
かな」

鏡を見る！ バカ！

心の中で毒づく橘川。

「やっぱちえ美か！。でも胸小さくね？ 俺としては巨乳の滝田亜  
佐美かな！。あ、橘川さん？」

突然名前を呼ばれ、ビクツと肩を震わせてしまう橘川。皆岡に顔  
を向け「え？ なに？」と返事をする。「橘川さんはどうですか？

三人の中で誰が好みですか？」

橘川もポスターの前に移動する。

「うーん、そうだな……」

そんなことを言いつつも答えは決まりきっているわけだが。

「こいつだけは無理ですよ」

綾川チロリの写真を指差し、藤岡が言う。「前のドッキリ見まし  
た？ めっちゃ不細工な泣き顔テレビで晒してたんですよ」

お前は黙ってる！

「そ、そうなんだ」

もちろん知っている。「俺はこの子嫌いじゃないけどなー。性格  
も明るそうだし……。でも一番はやっぱちえ美かなー」

素直になれない橘川であった。

イラスト描きを再開してから数分後、早苗が一人で教室に戻ってきた。早苗の顔を見て橘川はギョツとした。早苗は悲しんでいるような喜んでいるような怒っているような、とにかく一筋縄ではない複雑な表情を浮かべていたのだ。おまけに、髪が雨に濡れ風に吹かれ、激しくかき乱れている。

「橘川さん」

他の生徒には目もくれず、早苗は一直線に橘川のもとへと歩み寄ってきた。近くで見ると、彼女が上に羽織った茶色のコートはじつとりと湿っており、彼女がかけた眼鏡のレンズにも水滴が見える。ペンを置く橘川。「案内人見つかりませんでした。すみません」

「そ、そうなんだ……」

橘川も伝染して複雑な表情を浮かべる。「今のところ何人ぐらい集まってるの？」

「はい……」

肩を落として早苗は答える。「一人です」

「ひ、一人って……」

橘川は自分を指差した。「俺だけってこと？」

コクリと頷く早苗。

「私が馬鹿でした。愚かでした。アマノジャクでした」

早苗の声は今にも泣き声に変わってしまいそうだった。「案内人なんて集まるはずなかったんです。皆、サークルとかの出し物で忙しいのに……。橘川さんが名乗り出てくれたおかげで、この調子で三十人ぐらいは簡単に集まると思っていました」

三十人はさすがに無理だろうな、と橘川は思った。「もう案内人というアイデアは止めにします。場所ごとのイベントなどの説明も案内人ではなく全てガイドが行いたいと思います」

「そっか」

早苗がこれほどまでに恐縮しきっている理由が分かった。自嘲気味に笑う橘川。

結局、チロリちゃんと話をすることはできなかったか……。

それも致しかたないことなのかもしれない。文学部だけに案内人が付くのも不自然だろうし、効率も悪そうだ。きつといつか、握手会などのイベントで綾川チロリと話をすることは叶うはず。そう信じ、今回はあきらめようと橘川は思った。

「本当にすみません。橘川さんに頼ってばかりで」

「いや……。ん？」

ん？ 頼って？

橘川は訝しげに早苗の表情を窺った。すると、彼女の目つきが上目づかいに変わっているということに彼は気がついた。少しだけ身を強張らせる。「な、なに？ まだなんかあるの？」

「すみませんすみません」

うつむいてしまう早苗。「私は馬鹿でドジでノロマでトーヘンボクで……」

「そんなに自分を責めないで」

橘川は優しく早苗に微笑みかけた。「俺にできることなら力になるよ」

「ありがとうございます」

早苗はペコツと頭を下げた。そして、また上目づかい。「実は……。藤岡くん、皆岡くんと一緒にガイドに回ってほしいんです」

え……？

「えーっ！」

最初に声を上げたのは藤岡であった。「なんで俺たちなんだよ。」

お前は何するんだ？」

「ミス秀英コンテストって知ってる？」

早苗は藤岡に向かって言った。彼に対しては強気である。「予選、一回戦、二回戦、決勝と秀英祭期間の四日間全てに渡って行われる全国的にも名の知れたミスコンね」

「もちろん知ってるけど……」

そこでハツとした表情に変わる藤岡。「ま、まさかお前……」

「ミスコン実行委員の人に誘われて、断れなかったの」

眼鏡を外し、雨に濡れた髪をかき上げ、早苗は美貌溢れる顔に屈託のない笑みを浮かべた。「エントリーナンバー十七番、大田早苗皆、応援よろしく！」

「……………」

教室内にシーンとした空気が流れた。ただ、皆が呆気にとられる中、橘川だけは静かに心を奮わせていた。

お、俺がガイドってことは……。俺がチロリちゃんを案内して回るってことか？

そうゆうことである。

## 76 眠れぬ夜

帰宅し、「ただいま」と両親に挨拶をした後、羽山美穂はすぐに自室へと引きこもった。仕事先で夕食を済ませてくるということについては、今朝母にキチンと口頭で伝えていた。

鞆を本棚にたてかけ、眼鏡をケースにしまつて学習機の引き出しに入れてから、美穂はセーラー服姿のままベッドに飛び込み、うつぶせのまま背伸びをした。壁にかけられたペンギンのキャラクターの時計を見て時刻を確認する。午後十時前である。

ふう、疲れたなー……。

大きく息を吐く美穂。それからすぐに立ち上がり、セーラー服とブラジャーを脱ぎさった。朝、ベッドに置きっぱなしにしておいたベージュ色のパジャマに着替える。

本日も学校を終えてからすぐにテレビ収録の仕事へと向かった。明日は土曜日で、学校はない。しかし、午後の生放送出演のため、朝から新幹線で大阪へと向かわなければならぬ。そろそろ就寝してもいい時刻なのだ。

お風呂は朝入るとして……。あ、メイク！ はメイクさんに落としてもらったんだっけ。

美穂はとにかく早く眠りたかった。眠くて眠くてしかたがなかったのだ。

今何時だ？

常夜灯のみが灯った薄暗い部屋の中で、美穂は必死で目をこらした。時計の針は午後十一時半を指していた。美穂は絶望感から、うつぶせになり枕を抱え込んだ。

ダメだ！ 眠れない。

こここのところ、こんな日が頻繁にある。原因は美穂自身もよく分

かっていた。そう、橘川夢多である。ベッドの中で彼のことを思い出したら最後、気分が高ぶってしまい、いくら眠たくても、意識が鮮明なまま一時間、二時間と平気で経過してしまう。おかげで、寝不足から学校の授業中に居眠りをして教師に怒鳴られたり、仕事の休憩中にうとうととしてしまい、共演者やスタッフに笑われたり、呆れられたりしている。今日に限ってはマネージャーの仲田に、目の下の隈がひどいと本気で叱られた。

美穂だって、橘川のことを考えたくて考えているわけではないのだ。ベッドに入った瞬間、いつも『今日こそは絶対に考えないぞ』と強く決心しているが、その決心こそが橘川のことを連想させる悪い材料となってしまうていた。

美穂は身体を起こし、ベッドから立ち上がった。それから、灯りを点けてセーラー服のスカートのポケットからプライベート用の携帯を取り出した。親友の那美に『電話していい？』とメールを送り、すぐに『いいよ』と返信があったので、電話をすることにした。眠れない夜は那美と話するのが一番だということを美穂は知っていたのだ。

《また眠れないの？》

明るい声で那美は言った。眠たげな様子はない。《橘川さんのことを考えてるんでしょ？》

「うん」

那美だけには橘川のことを相談していた。「今日もたっぷり考えちゃった。秀英祭に行けば橘川さんと会えるのかな、とか」

《でも、仕事なんでしょ？ 学校だってあるし》

美穂は力なく「うん」と返事をした。秀英祭期間の十月二十八日から三十一日は、毎日仕事があり、日曜日である二十八日（つまり明後日だ）以外は学校もある。《あきらめるしかないよ。それに、行けたとしても広い大学のキャンパス内で橘川さんを発見するのも

難しいし、下手すれば美穂が来てるってバレて大騒ぎになっちゃうよ」

「うん、分かってる」

更に力なく返事をする美穂。「あきらめるよ。ごめん」

《あきらめるしかないっていうのは橘川さんのことを、って意味じゃないからね》

那美のその言葉を聞き、美穂は「へ？」と間抜けな声を発した。

《秀英祭行きのことだよ。橘川さんとはまた再会するチャンスが巡ってくるかもしれないじゃん。いざとなったらテレビの人捜しの企画かなんかで捜してもらえばいい》

「馬鹿なこと言わないでよ」

ふふつと美穂は笑った。「私は一応アイドルなんだよ。テレビで好きな人を捜索してもらおうわけにはいかないよ」

《どうにでもなるってことの例えだよ》

那美も笑った。

それから二人はしばらく黙っていた。美穂の睡魔がだんだんと復活していく。

「ねえ」

美穂は口を開いた。「やっぱり、忘れないほうがいいのかな」

《うん》

キッパリと那美は言う。《それだけは確かだね。ここで忘れたら美穂は一生後悔し続けると思う。っていうか忘れられないでしょ？》

「……………」

美穂は何も答えなかった。

《私ね》

美穂の返事を待たず、那美は続ける。《最近の美穂、すごく好きなんだ。いや、前の美穂だって好きだったんだけど、なんていうか冷たい感じがして……。あ、性格の話じゃないよ。雰囲気というか》

「……………」

じつと黙って那美の言葉を聞く美穂。



《なんていうか、人形みたいな雰囲気があった》

更に続ける那美。《でも、今の美穂は……。橘川さんに恋をしてる美穂はすごく温かい感じがする。だから嬉しいんだ。美穂が恋をしてくれて。そんな恋を美穂が自分からドブに捨てちゃうって真似だけはしてほしくないな。勝手なこと言うみたいだけど。でも、大丈夫だよ。忘れないよね》

「うん」

美穂は声を絞り出し、返事をした。いつの間にか自分の頬を涙が伝っていることに彼女は気がついた。「忘れない。忘れたくない」初恋は忘れられない。

那美との通話を終え、美穂は再びベッドの中に潜り込んでいた。涙も手伝い、今度はすぐに眠れるだろうと思っていたが、気がつけば深夜一時を回っていた。直接橘川に思いを巡らせたわけではない。先日、エックステレビ局内で初対面をした綾川チロリのことを考えていた。

少し調子はずれで、少し礼儀知らずだったけど、良い人だったな……。

その事実が更に美穂を落ち込ませた。橘川がファンになってもおかしくはないと納得してしまったからである。

はあと美穂は溜息を吐いた。先ほどから何度も溜息を吐いている。チロリと橘川が秀英祭で同じ時を過ごしている間、自分は学校。自分は仕事。別に橘川がチロリと直接会って話をするわけでもないだろうに、どうしようもなく不安になってしまう。恋というものは、こういった不安とも戦わなければならないのか、と美穂は思う。

美穂はベッドの中でひざを抱え、また深く溜息を吐いた。

「しかたないか。忘れないって約束したんだ」

開き直るようにそう口にしてしまうと、美穂は不思議なほどすんなりと眠りにつくことができた。

## 77 やるしかない

十月二十八日、秀英祭初日。

『第三十五回 秀英祭』と書かれた手作りのアーチ状の門を抜けると、すぐさま露店の売り子たちの威勢の良い声が聞こえてくる。本日は日曜日ということもあって、キャンパス内はすでに人でごった返しており、スムーズに前へと進めない。橘川夢多は身体を横にして、器用に人の間を縫って歩いた。時折、肩にかけたショルダーバッグが人に当たり、「すみません」と謝った。

午前十時過ぎ。橘川はたった今登校してきたところである。『秀英祭ツアー』は正午よりスタートだ。最初のツアー客をガイドした後、午後三時よりいよいよ綾川チロリを含む三人のアイドルたちをガイドする。初日はその二回のみで、明日からは午前中より計四回ガイドを行う。ただし、大田早苗がミスコンで落選すれば、翌日からは彼女がガイドを変わってくれるという。

橘川は紺のスーツに身を包んでいた。首にはネクタイも巻かれている。無精ひげは綺麗サツパリと消え失せ、珍しく髪の毛もセツトしていた。その格好は表面的には秀英祭ツアーガイドとしての衣装、あるいは小道具のようなものであったが、彼にとっては別の意味合いもあった。

チロリちゃんと話ができるんだ。キチンとした格好しとかないな。

というわけである。

「兄ちゃん、兄ちゃん」

秀英大の敷地のほぼ中心に位置する大講堂の近くで、一人の青年に声をかけられた。髪を茶色に染め、秀英祭公式のはつぴを着ている。「夕方のトークショーのチケットあるけど、買わない？」

トークショーは大講堂にて行われるのだ。橘川はもちろん首を振った。

「もう持つてるんだ」

スーツの胸ポケットから二つ折りにしたチケットを取り出し、青年に見せつけた。

「おはようございます。キまっていますね」

秀英祭ツアー本部、文学部演習室のドア（本日より『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた紙が貼られている）をガラツとスライドさせ、ほんの少し間が空いた後、部屋の中にいた大田早苗がそう言つて微笑んだ。橘川は少しドキツとしてしまった。いつも地味な服装をしている早苗が、明るいレモン色のワンピースを着用し、眼鏡もかけていなかったからである。普段から美人なのに、今日はまた一段と輝いて見える。ようするに橘川は彼女にときめいてしまったのだ。

「お、おはよう」

橘川も笑顔を見せた。「このスーツ着たの入学以来かもしれない。タンスにホコリ被つて眠つてたよ」

「もったいないですよ。似合うのにな」

そう言つて早苗はまた笑つた。橘川は思わず彼女から目をそらした。ダメだダメだ、俺にはチロリちゃんがいる、などと考えながら。「あれ？」

話もそらすことにする。「他の皆は？ 藤岡くんや皆岡くんは」

部屋には橘川、早苗の他に、席に座りなぜか読書に励んでいる控え目女子大生の貴美のみがいた。

「みなみちゃんと一緒にトークショーの実行委員たちと打ち合わせをしています」

早苗は言つた。

「う、打ち合わせか……」

なんとなく緊張してきてしまい、ふうと息を吐く橘川。

「アイドルさんたちを秀英祭ツアーで連れ回した後、今度はすぐト

「クショーですからね。しっかり段取りを練っておかないとぐだぐだになっちゃいます。まあ、それぐらいは事前にちゃんとやってるんで、今は最終確認程度のもんですけど」  
「なるほど……」

橘川はばつが悪そうに指で頬をかいた。「なんていうか、俺だけのうのとこんな時間に来ちゃって悪かったな……」

「いいんです」

ツンとした表情になる早苗。「昨夜あの三人、ここで飲み明かしたんですよ。朝私が出来た時は二日酔いでベロンベロンになってました。その罰なんです」

「なるほど」

昨夜は前夜祭が行われた。橘川はバイトとチロリ出演の深夜番組があつたため、早々に帰宅していたのだ。

「最初のツアーを終えた後、アイドルさんが到着してからは、アイドルさんや、テレビクルーの人とも打ち合わせを行います。そちらには橘川さんも参加してくださいね」

「テ、テレビクルー!?!」

「はい」

何を驚いているんだ、というふうには早苗は目を丸めた。「毎年恒例ですよ？ 夕方の番組で、うちと昭和院の学園祭対決の特集をするんです。今年は共にメインイベントを初日に持つてきますからね。もちろん、橘川さんもテレビに映ること間違いなしです」

「う、嘘だろ……」

へなへなと腰を折る橘川。アイドルたちをガイドするということだけでも充分緊張するというのに、おまけにテレビカメラまで入るとは。「お、俺なんかで大丈夫かな……」

「橘川さんがそんなじゃダメですよ」

仏頂面で首を振る早苗。「向こう（昭和院）はプリンセス雅のマジックショーですからね。こう言っちゃなんですけど、うちの、アイドルさんたちのただのトークショーじゃ、歯が立たないと思いま

す。ですから、秀英祭ツアーを通してアイドルさんたちを学生や一般客さんたちと触れ合わせるといふアットホームな企画こそが秀英祭の勝利の鍵を握っているわけです。橘川さんたちにかかっているのですよー」

「うっ……」

橘川は胃が痛くなった。余計に緊張させるなよ、と思う。

胃を押さえて橘川が椅子に座ろうとした時、早苗が唐突に言った。「それじゃあ、私はそろそろミスコンに向かいます」

「え？ もっ？」

椅子の背もたれに手をかけた状態で静止し、早苗に顔を向ける橘川。「俺はどうすりゃいいの？」

「藤岡くんたちが来るまで待機してください。それから正門へ行って最初のツアー客を募ります」

正門の方角を指差す早苗。アーチ状の門が作られていたあの場所である。「あ、今のうちにご飯も食べちゃっていいですから」

昼食は登校中にコンビニで調達しておいた。

「分かった」

橘川は言った。「それじゃあ、ミスコン頑張ってね」

「はい」

早苗はまたニコリと笑った。「今日はガイドよろしくお願いします。私がミスコンで予選落ちしなかったら、明日もよろしくお願いします」

「う、うん」

そう返事をしながら、橘川は早苗の姿をもう一度まじまじと見つめてみた。簡単には落選しないだろうな、と思った。

早苗が退室した後、橘川はショルダーバッグの中から、昼食の幕の内弁当を取り出した。割り箸を割ると同時に、「よし！」と自分に気合を入れる。読書が続ける貴美がチラッと橘川の顔を一瞥した。

とにかくやるしかない！ ガイドしてガイドして、ガイドしまくってやるぞー！

78 ご機嫌ななめ

「カレーが二百円だよ！ しかも美味しいし。今日は良いことずくめだね」

隣に座る田之上裕作が嬉々とした様子で言った。しかし、その姿はどこか芝居がかっている。彼の言うとおり、なかなか美味いカレーをもぐもぐと食べながら、矢上詩織はふて腐れた顔で「別に」と返事をした。服装は、お気に入りの黒いワンピースと白いブラウスという組み合わせである。

「こんなところに来るぐらいだったら、二人で渋谷にでも遊びに行ったほうがマシだったな」

田之上のほうを見ずに詩織は言った。

「今は辛抱しなつて」

笑みを浮かべながらも、微妙に眉を曲げる田之上。彼は身体にピッチリとフィットした長袖シャツの上に厚手の茶色のジャケットを羽織っている。下はブルージーンズ。「目的は綾香ちゃんのトークショーなんでしょ？」

ふんと鼻を鳴らし、更に顔をブスツとさせる詩織。もうその名前には聞きたくなかった。

時刻は正午過ぎ。二人は秀英大学キャンパス内の一角、安らぎの森広場にいた。ここでは秀英祭の期間中、学生たちによる露天食堂が開かれていた。いくつもの長テーブルが並べられ、そのテーブル一つ一つを大勢の人が囲んでいる。あたりは森というほどではないが、それなりに緑が見える。地面は芝生だ。柔らかい風が常に吹き抜けており、木の枝や、人々の髪の毛を絶え間なく揺らしている。「だいたいさ」

福神漬けを口の中でボリボリと噛み砕きながら、詩織は言った。

「自分のトークショーのチケットを送りつけてくるっていうのが厚かましいよね。許してもらいたいなら、遊園地のフリーパスでも送ってこいっちゅうの」

「まあまあ」

詩織の肩に手を置き、彼女をなだめる田之上。「自分のトークショーのチケットを送ってきたのは友好の印だよ。詩織ちゃんに自分のショーを観てもらいたいってこと」

先日約束をすっぱかされて以来、詩織は元親友、池田綾香を徹底無視していた。電話もメールも、田之上を使った伝言さえも無視していたら、今度は郵便で本日の秀英大学秀英祭でのトークショーのチケットを送りつけてきた。最初はこれさえも無視してしまおうと思っていた詩織であったが、田之上に小一時間説得されたこと、秀英祭自体にはそれなりに興味があつたということもあり、とりあえず観に行くだけ観に行つてやることにした。ところが……。

「それにしても早く着すぎちゃったね」

詩織ははあと溜息を吐いた。「トークショー開演まであと六時間もあるよ。それまで何する？」

「うーん……」

キョロキョロと辺りを見回す田之上。その辺にいい暇つぶしの材料が眠つているとでも言うのか。「さて、何しようか」

二人は午前十時に秀英大学に到着した。今日は二人のデートも兼ねている。二人とも、大学の学園祭に赴くのは初めての経験で、きつとあまりの楽しさに、あつという間に時間が流れてしまっただろうと予想していたのだ。ところが、始めは新鮮な学園祭の雰囲気に分が高ぶったものの、二時間が経過した今となっては、詩織は、そして口には出さないがおそらく田之上も、その学園祭の雰囲気飽き飽きとし始めていた。

詩織は正門近くで購入した秀英祭のパンフレットをぱらぱらとめ



くった。キャンパスマップやイベントの内容、秀英祭の歴史、他に近隣店舗の広告なども載っている。

「一時からミスコンの予選だった」

該当記事に目を落としたまま、詩織は言った。「田之上くん、ミスコンとか興味ある？」

「ミ、ミスコン？」

田之上が引きつった笑みを浮かべる。「まあ、面白そうっちゃ面白そうだけど」

「私は観てみたいな」

パタンとパンフレットを閉じる詩織。「ああゆづのって、自分が一番可愛いと思ってる自意識過剰高慢ちきな女ばかりが出場するんでしょ？ いったいどんな顔して出てくるのか楽しみだね」

「そんな……」

相変わらず苦笑しっぱなしの田之上。詩織の機嫌の悪さが起因となっている。彼女の機嫌が悪いのは、例の待ち合わせすっぱかしの日からずっとである。「友達に推薦されたりした子もいるんじゃない？」

「ああ、よくいるよねー」

詩織はニコリと笑った。ただ、その笑顔は決して屈託のないものではない。「タレントのオーディションとかでも、自分から応募したくせに親が兄弟が友達が、って……。正直に言えばいいのにな」

「アハハ……」

田之上は乾いた笑え声を発した後、ぼそっと「まいったな」と呟いた。

二人は安らぎの森広場を抜け出し、ミスコンが行われる特設ステージに向け、歩いていった。他に目ぼしきイベントが見つからなかったある。詩織がキャンパスマップと実際の景色とを照らし合わせ、特設ステージまでの道のりを開拓していく。その途中、一際と大き

な建物が目についた。

「あ！」

その建物を指差し、田之上が声を上げる。「あれが大講堂だ。ここでトークショーが行われるんだね」

「ふーん」

つまらなそうに目を細めて大講堂の全容を眺める詩織。建物正面、入り口の上方に木製の看板がある。明朝体で『秀英大学公会堂』と彫られている。それが正式名称らしい。入り口の横には午後六時からのトークショーを知らせる看板も立てられている。「やっぱり大きいね。中はホールになつてて、三千人近く収容できるらしいよ」パンフレットで得た知識である。

「三千人かー」

感心したように田之上が言う。「綾香ちゃん、緊張してるんじゃないかな。上手くトークできるかな」

「大丈夫でしょ」

プイと顔を背ける詩織。「全国ネットで恥ずかしい泣き顔を晒せるような子なんだから」

とその時、詩織は同じく大講堂のほうに目を向けている十数人ほどの団体の存在に気がついた。その団体の内訳は少々変わっていた。二人と同一年ぐらいの若者が大多数を占めているが、幼い女の子を連れた中年の女性や、老人夫婦なども混ざっている。

「ねえねえ」

田之上に小声で声をかけられる。彼の顔を見やる。すると、彼も同じ方向を注目していた。「あの人たち、なんなんだろうね」

「さあ」

眉をひそめ、首を傾げる詩織。「なんかのボランティアかな。おじいさん、おばあさんがいるし……。それにほら、案内してる人がいる」

スーツを着て腕章をつけた男性が団体の前に立ち、台本らしき物を見ながら大講堂について説明しているようであった。よく見ると、

他にも二名、腕章をつけた人物がいる。そのうちの一人がのぼりを手に持っているが、のぼりに何と書かれているのかは確認できない。詩織は無意識のうちにその集団に近づいていった。

橘川夢多はツアー客たちの前に立ち、自身の後方にそびえる大講堂の紹介をしていた。

「とういうわけで、夕方六時からアイドルたちのトークショーが行われるわけですが、チケットはまだ売れ残っているようです。あちらをご覧ください」

はつぴを着た学生を指差す。ツアー客たちがそちらに目を向けるのを待ってから橘川は続ける。「あの秀英祭公式のはつぴを着た人と言えば、まだチケットを購入できません。それから、これは私事ではありますが」

そこで一度橘川はコホンと咳払いをした。「ご存知のとおり、トークショーの前には、アイドルのお三方に秀英祭を案内して回るという企画があります。そして、そのガイドも僕らが務めます」

ツアー客たちが少しだけ沸いた。満足して橘川は頷く。「その時は原則として僕らがガイドをするのはアイドルのお三方だけなんです。皆さんがツアーと一緒に回るのは自由です。混雑が予想されますが、アイドルを近くで見るチャンスです」

「橘川さん」

のぼりを持った藤岡茂が話しかけてきた。彼は二日酔いで青い顔をしている。「時間、微妙に押ししてるみたいです。急いで次のポイントに行きましょう」

「そう？ 分かった」

そう返事をし、橘川はツアー客たちに向かってその旨を伝えようとしたが、一人の女性により、それを中止させられた。

「あの、質問なんですけど」

今まで案内してきたツアー客ではない。秀大生でもなさそうで、

別の一般客のようだ。橘川と同年代で、なかなかの美人である。服装は地味だがルックスにはかなりの華やかさがあつた。「そのアイドルたちのツアーと、ミスコンの予選って時間かぶっちゃいますかね」

「えーっと、そうですね……」

橘川は藤岡に目配せをした。藤岡は一瞬だけ眉をひそめた後、一歩前に出て口を開いた。

「はい。ミスコンは予選ということで、百名近い出場者全員のアピールタイムが設けられていますし、その後の選考なども考えればおそらく夕方頃まで続くかと……」

そこまで喋つておいて、藤岡は急に「おえっ」とえずき、橘川にバトンタッチをした。

「アイドルお三方の秀英祭ツアーは午後三時からの予定です。正門からスタートし、午後五時近くまで続きます。余談ですが、そのツアー中にミスコンのステージにも訪れます」

藤岡の説明を引き継ぐ橘川。

「そうですね」

うんうんと頷く女性。いつの間にか彼女の隣に同じく同年代の男性の姿があつた。彼女はその男性に顔を向けた。「どうする？ 混みそうだからミスコンにしようか」

「でもせっかくだからツアーのほうも見てみたいな」

笑顔が爽やかな男性。二人はカップルのようだ。なんとなく嫉妬してしまふ橘川。「近くまでいけたら綾香ちゃん、俺たちの存在に気がつくかもよ」

「別に気がつかなくてもいいよ」

女性が唇をとがらせて言った。

綾香ちゃん？ 気がつく？

橘川には二人の会話の意味がよく分からなかった。

「じゃあ、こうしよう」

男性が言った。「とりあえずはミスコンを観て、ツアーがミスコ

ンまで回ってきたら、そこからツアーのほうに付いていこう」

女性が返事をしかけた時、「橘川さん」と更に青みを増した顔色の藤岡に肩を叩かれる。橘川の耳元で囁く藤岡。

「もう行きましょう。この人たちの予定なんて知ったこっちゃないです」

「あ、ああ。うん、そうだね」

橘川は改めてツアー客たちに向け、言った。

「そ、それでは時間が押しているので先を急ぎましょう。次はフリーマーケットの開かれている室内競技場へ向かいます」

当初は、後にアイドルたちも参加するという宣伝材料もあり、三十名ほどの参加者がいた第一次秀英祭ツアーだが、今となっては十名以下に減ってしまった。橘川はこのことに対してやや責任を感じていた。二日酔いの藤岡、皆岡は使い物にならないので、彼が主にツアー客を先導する役目を担っているが、自分でも分かる。つまらないのだ。ただ秀英祭を回り、説明をするだけである。ひょうきんな藤岡や皆岡が前に立てばこっちはならなかっただろうな、と思う。参加は無料なので、客はいつでも好きな時に、何のためらいもなくツアーから抜けることができるのだ。

「橘川さん」

室内競技場へと移動中、今度は皆岡に話しかけられる。「本当にすみません。俺たちが昨日無茶苦茶に飲みまくってしまったせいで、彼もツアーが盛り上がらないのは橘川のガイドのせいだと理解しているらしい。ますます落ち込んでしまう橘川。」

「いや、俺こそごめん」

橘川は弱々しく首を振った。「つまらない話しかできなくてさ。ガイドなんて引き受けるんじゃないかなかったな」

「橘川さんは悪くないですよ」

藤岡が口を挟む。「もともと俺と皆岡が場を盛り上げる役目だっ

たのに……。とにかく、この後のアイドルたちのガイドまでにはなんとか回復してみせます」

そつだ。もうすぐなんだな……。もうすぐチロリちゃんと話ができるんだ。

橘川はしみじみとそう思った。ただ、同時に不安にもなる。

こんなつまらないツアーじゃ、チロリちゃんも退屈しちゃうだろうな。

「あ、いたいた！」

突然、後方から一年生のギャル系実行委員みなみが赤茶色に染めた長い髪をなびかせ、駆け寄ってきた。秀英祭公式のはっぴを着て下には厚手のショートパンツを履いている。彼女も藤岡、皆岡と共に演習室に泊まったが、未成年ということで酒は飲んでいないらしく、元気である。「探しましたよ先輩！ 大変なんです！」

「あんまり騒ぐなよ」

頭を押さえて、藤岡がうつとうしそくに言った。

「先輩たち！ 気づきませんか？」

三人のガイドに向け、みなみは言う。「キャンパスを歩くお客さんの数がめっちゃめっちゃ減ってます」

橘川は周囲を見渡した。言われてみれば減っているようにも見えるが……。

「どうしたの？ まさか、昭和院のほうに流れてるとか」

みなみにそう尋ねる橘川。お隣の昭和院大学とは一キロ程度しか離れていない。まさに目と鼻の先なのだ。みなみは神妙な面持ちで頷いた。

「夕方からマジックショーを行う予定のみだったプリンセス雅が、学園祭の至るところに出没して、そこいらの一般客相手にマジックを披露しまくっているそうです」

「ええ！？」

ほぼ同時に声を上げる三人のガイドたち。代表して藤岡が続ける。  
「なんだそりゃ！俺たちが目指したアイドルとファンとの触れ合いを先に向こうにやられたってわけか」

「そのとおりです！」

人差し指を立てるみなみ。ピンチだというのにやたらと楽しそうに見える。「昭和院の学生がうちに来て、お客さんたちにその話を流して回ったみたいです。卑劣なり！昭和院大学！」

やはり、楽しくてしょうがないといったふうに拳を握るみなみを眺めながら、三人は生気が抜けたようにその場に立ち尽くしていた。自分たちが連れていたツアー客が一人残らずいなくなってしまうというということにも気がつかずに。



正門の外に二人の男が横並びに立っていた。そのうちの一人、ニット帽をかぶり、あごひげを蓄えた男が言う。

「うわ、すげえ混んでるぞ」

正門付近だけを見ても、学園祭で賑わうキャンパス全体の雰囲気  
が伝わってくる。男は隣にたたずむもう一人の男に尋ねた。「こん  
なんじゃまともに見れねえんじゃねえか？」

ジージャン、ジーパンとデニムの上下を着た金髪の男が答える。

「だから早めに来たんだ。三時の開場と同時に会場へなだれ込み、  
一番前の席を確保する」

「クッククク」

ニット帽の男は気味の悪い笑い声を発した。「悪い男だぜ」

「ああ」

金髪の男が偉そうに腕を組み、頷く。「なんとも言いな」

すまん、綾香、許せ。今日はバイトで行けないなんて嘔吐いちま  
って。

午後二時前。井本真一と的場晴夫は不敵な笑みを浮かべたまま、  
同時に正門を抜けた。

先日、アイドルであり恋人の池田綾香に、『秀英祭のトークショ  
ー観に来ない？』と尋ねられた時、真一は慌てて『その日バイトが  
あんだよ』と取りつくろった。しかし実際は、バイト先のラーメン  
屋『ぶるうす』若頭こと萩本和人に頼み込み、昼ピークが若干収ま  
る午後一時に早引けさせてもらうことになっていたのだ。

そして今真一は、高校時代からの悪友、的場晴夫を誘い、綾香に  
内緒で大学へと足を運んできた。なぜ綾香に内緒で来たか。答えは  
明白である。

さて、楽しませてもらうぜ。雅ちゃん。

真一が足を運んだのは、綾香の出演する秀英大学ではなく、そのライバル。プリンセス雅の出演する昭和院大学であった。

プリンセス雅。最近ブレイクしたばかりのマジシャンアイドルであり、真一ランキングももの凄い勢いで駆け上っている。今となつては一位の松尾和葉（ ）、二位の沢渡まどか（ ）に続く第三位である。本来なら彼女のマジックショーのチケット代の相場は一万円前後だ。しかし本日昭和院大学で行われるマジックショーのチケットは破格の二千円。真一は、ランキング十六位の内藤ちえ美（ ）、十七位の滝田亜佐美（ ）、そして自身の恋人、綾川チロリのトークショー（千五百円）より、プリンセス雅のマジックショーをとった。

いざ昭和院大学のキャンパスに足を踏み入れてみると、学園祭の異常なまでの熱気に改めて気づかされる。人々は盛り上がっているというよりも、パニック状態に陥っているようにも見える。

「なんだなんだ？」

的場が眉をひそめながら、キョロキョロと辺りを見回す。「なんか事件でも起こったのか？」

「さあな」

真一も周囲に目を向けながら答える。「まあ、俺の目的はプリンセス雅ちゃんだけだ。会場に急ごうぜ」

会場の屋外特設ステージまでの道筋は、すでにインターネットで調べ上げている。正門からはかなり離れた昭和院競技場というグラウンドである。

「プリンセス雅もいいけどよ」

含みを持たせた顔で的場は言った。「『ミュージックホール』っ

て場所でフリースタイルの大会もやるらしいぜ。そつちも捨てがた  
いよな」

ラップのフリースタイルのことである。的場はヒップホップ狂で、  
休日前の夜はいつもクラブへと通いつめているということを真一も  
知っていた。バギーパンツの腰履き、ニット帽といった今日の服装  
(というよりいつも着ている)もヒップホップスタイルを意識して  
いる。

「フリースタイルねえ」

真一は苦笑してみせた。残念ながら彼はヒップホップには興味が  
ない。「お前がそつちを観に行くのは勝手だけどさ、せつかくチケ  
ット買ったんだし、マジックショーを観てから行けばいいじゃねえ  
か」

「まあ、それもそうだな」

チケットはプレイガイドですでに購入済みである。的場は納得が  
いったような、いかないような複雑な表情を浮かべ、うんうんと小  
さく頷いた。

「ん？」

後方から黄色い声が聞こえ、真一は振り返った。すると、女子大  
生らしき三人組が一直線にある方向へ駆けていくのが見えた。その  
方向に目を向けてみる。「お好み焼き」と書かれた露店の周りに大  
勢の人だかりができている。「なんだ？　ありゃ」

三人組だけではない。次々に露店のほうへと人が引き寄せられて  
いく。見る見るうちに人だかりが大きくなっていく。「そんなに美  
味いのか？　あのお好み焼き……」

その時、真一の腹の虫が鳴った。そういえばまだ昼食を食べてい  
ない。

「おい」

的場も同じ方向を見ながら口を開く。「なんか腹減っちゃまったよ。

あれ食ってかないか？」

うーん、と唸りながら真一は腕時計を見やる。もう、午後二時を過ぎている。

「大丈夫かな。あれ、かなり並ばないと食べなさそうだぜ？」

人だかりは半径十メートルほどにまで広がっていた。その周りには真一たちと同じように人だかりを見つめる人物も多々いる。「いや、なんか並んでるって感じでもなさそうだな。まあとにかく、あのお好み焼きを食うのはムリだろ。そのへんにいっぱい店あるからどっかで買おうぜ」

真一は近くの『サイクリングサークル、オリジナルクッキー』と書かれた露店を指差した。

「まあ、それもそうだな」

的場が答える。「でも、クッキーは勘弁してくれ」

結局二人は別の露店のお好み焼きを購入し、建物の壁に背をもちながらそれを食すことにした。例の人だかりはこの位置からでは見えない。

「なあ、どう思う？」

高速でお好み焼きをたிரらげた後、的場が口を開いた。「このお好み焼きもけっこう美味かったけど、あの人ができてた店のはもつともつと美味しいのかな」

「どうだろうな」

真一はまだお好み焼きを食べている。二つ折りにしたお好み焼きを二枚紙に挟み、それを手で持って食べるスタイルだ。「お好み焼きなんてたいして味変わらねえだろ。多分、あの店の店主が曲芸でも始めたんだよ」

「無理のある解釈だな」

クツクツと笑い、的場は周りの目もはばからず、お好み焼きを挟んでいた紙をその辺にポイと投げ捨てた。行儀悪いヤツだな、と

真一は少し呆れる。と、その時だ。

おお！ と例の人だからのほうから感嘆の声が聞こえた。それに続き拍手喝采。真一はわけが分からず目を丸めた。

なんだ？ 本当に曲芸やってんのか？

「おい」

的場も同じ思いのようだ。彼がその方向を指差す。「やっぱりちよつと行ってみようぜ」

「あ、ああ」

二人は早足で人だかりに向け歩き始めた。

## 81 主のもとへ

真一の目に飛び込んできた光景は、彼にとって全く想定外のものではなかった。百人は超えると思われる人々の群の中心にいたのは、曲芸を披露する露店の店主ではなく、シルクハットを被って、タキシードを着た髪の長い少女であった。

真一は一瞬、その少女がプリンセス雅のコスプレをしているのかと思った。しかし、そうではないことにすぐ気がつく。

「お、おい……」

困惑した様子での的場。眉間にしわを寄せ、口をあんぐりと開けている。「あれ、本物かな」

「ああ」

的場を一瞥してから、真一は頷いた。真っ直ぐに十メートルほど先の少女を見つめる。「間違いない。プリンセス雅だ」

プリンセス雅は口元に緩く笑みを浮かべ、露店の前に立ち、自分を囲む人々の顔を順に見渡していた。

「皆、今日は集まってくれて本当にありがとう」

シルクハットをつばを指でつまみながら、雅は悠長に言った。「夕方からのショーではもつとアンビリバーボーなマジックを披露するよ。皆、観に来てくれるね？」

人々が沸き上がる。それに乗じて、真一の的場も一応手と声を上げておいた。実際、観に行く。「あ、また何人か新しいお客さんが加わったみたい。じゃあ、もう一度自己紹介しておくよ。私はプリンセス雅、以後お見知り置きを」

雅はシルクハットを手に持ち、紳士的なお辞儀をした。パチパチと拍手が起こる。「知ってる人もいると思うんだけど、今日は夕方からのマジックショーとは別に、昼頃からキャンパスのあらゆる場所へと出向き、マジックをさせて頂いてるんだ。まあ、ちょっとした私の気まぐれだね。ビックリさせてごめん」

シルクハットを被り直し、雅は上品に笑った。真一は思わず胸をドキッとさせてしまう。

「やっぱ最高だぜ！ 雅ちゃん！」

彼は雅の上品な仕草や表情、つかみどころのない中性的なキャラクターが特に気に入っていた。マジックを抜きにしても魅力溢れるアイドルなのだ。

「で、今回はこの場所へ赴いたわけだけど、そろそろおいとましようと思う」

雅のその言葉に観客たちが「えー」とブーイングをする。雅は手袋をはめた手の平を見せ、「まあまあ」と皆をなだめた。「だけど、その前に一つ言っておきたいことがあるんだ。私は昭和院大学を愛している。もちろん、お隣の秀英大学よりもね」

また歓声が沸き、真一と的場も参加する。二人はもう完全に人だかりの一部である。「だからこそ、この大学を汚す輩は許せない。皆、ゴミはちゃんとゴミ箱に捨てるようにね」

「お前のこと言われてるぞ」

真一は意地悪くそう言つて的場をからかった。「うるせえ」と笑顔で返す場。

「でもね」

雅は続ける。「今さっき風に運ばれて私のもとに届いたんだ。本当に残念だと思う」

そして、タキシードのズボンのポケットから、二十センチ四方ほどの白い紙を取り出す。その途端、真一と的場はギョツとした。遠くへよくは見えないが、それは先ほどの場がポイ捨てをした、お好み焼きの包み紙に酷似していた。

「何か食べ物の包み紙みたいだね」

二枚紙の中を開き、中を覗きこむ雅。「ソースと青ノリがついてる。どうやらお好み焼きみたいだ。でも、この店のじゃないね」

後ろの露店を見やる。「この店は見てのとおり、容器に入れたお好み焼きを箸で食べるスタイルだ。確か向こうにもお好み焼きの露店があつたっけね」

ある場所を指差す雅。確かにその近くに真一たちがお好み焼きを購入した露店はある。次第に汗ばんでいく真一の身体。的場も青ざめた顔へと変わっていく。

雅は包み紙の端を指先でつまみ、それをひらひらとなびかせながら言った。「私が代わりに捨ててあげてもいいんだけど、せっかくだからポイ捨てした本人に捨てさせようよ。どうやら、ここにいるみたいだし」

「おい……」

的場の肩をひじで突く真一。的場は現実から目を背けるかのよう  
に、視線を落とすじつと黙っている。

雅はポケットからマジックペンを取り出し、紙に何かを書き込んだ。それから、紙を小さく折り畳み、右拳の中に入れた。右手を軽く上げ、「ワン、ツー、スリー」とカウントをとる。そして、右手を開く。

「確かに返しといたからね」

誰もが予想したとおり、そこに包み紙はなくなっていた。「ちやんと自分でゴミ箱に捨てるんだよ」

観客たちがまた歓声を上げ、拍手をする。

「おい、的場」

小声で的場に話しかける真一。「どうなんだ？ ポケットとか…」

「真一いいっ！」

恐怖に顔をひきつらせ、的場が叫んだ。「ヤベエよおおっ！ ケツポケットになんか入ってるよおおっ！」

「馬鹿！ 声がでかいつて！」



もう遅かった。観客たちは皆、的場に注目してしまっている。的場はばつの悪そうな顔で、お尻のポケットからそれを取り出して見せた。そう、たった今まで雅が手に持っていたはずの、小さく折り畳まれた包み紙だ。観客たちの視線に促されるまま、ゆっくりと紙を開いていく的場。紙に書かれた『見つけたよ』という文字を見て、真一は鳥肌を立てた。的場も顔を強張らせる。

「見せてください」

「おい、見せてくれ」

観客たちのリクエストにお応えして、的場は皆によく見えるように紙を開いて、頭の上に掲げた。まるで雅のアシスタントのようだ。再び沸き上がる観客たち。的場への非難よりも、雅への賞賛が先のようにある。しかし。

「あれ？」

一人の男性が声を上げる。その声を発端とし、辺りがざわつき始める。皆が周囲を見回す。「プリンセス雅さんが……。消えた」

真一と的場も雅を探す。確かに、先ほどまで露店の前に立っていたプリンセス雅の姿がどこにもなくなっている。ところが……。

「なんちゃって」

露店の陰から雅がひよっこり顔を出した。その場にいた全員がずっこける。「残念ながら消えるマジックは用意してないんだ。とにかくそのニット帽の人、今度からポイ捨てしちゃダメだよ」

的場を指差し、雅は言った。そこでようやく観客たちが的場に非難の目を向け始める。的場はチツと舌打ちし、「分かったよ。すみませんでした」とふて腐れたように謝った。

「オーケー」

身をひるがえし、雅は真一たちのいる場所とは逆の方向に向けて歩き始めた。観客たちが道を開ける。「それじゃ、瞬間移動じゃなくて普通に帰るけど、追いかけてちゃダメだよ」

最後にしっかりと笑いもとっていく雅の後ろ姿を眺めながら、真一は思った。

こんな子が相手じゃ、綾香（秀英祭）に勝ち目なんてねえだろうな。

その時、真一ランキングが変動した。一位、松尾和葉（・）、二位、プリンセス雅（）、三位、沢渡まどか（）。

## 82 行き当たりバッタリ

池田綾香は控え室と銘打たれた秀英大学大講堂内客室のソファに座り、本日共演する同所属事務所のセクシーアイドル滝田亜佐美と口論をしていた。

「どう責任とつてくれんの!?!」

亜佐美が怒鳴る。「始まる前から勝負ついちゃってるじゃない! あんたのせいよ!」

黒く長い後ろ髪を二ヶ所束ね、前髪も二ヶ所ピンで留めている。ロリ系と呼ばれるだけあり、実年齢の二十歳より若干幼く見える顔立ち。大きくつり目がちな目が特徴的である。バストトップまでの赤いドレス風ワンピースを着ており、肩、背中、そして胸元を大きく露出している。それは本日の衣装であった。

「なんで私のせいなんよ!」

綾香も反論する。「それを言うなら、あんたやろ! あんたなんか胸のでかさだけしか取り得のないただのおっぱいアイドルやろうもん!」

同じく衣装のキャミソールとデニムのホットパンツ(ただし、自前である)。髪をまた薄らと茶に染めている。本番ではトレードマークのハットを被る予定だ。

「な……!」

わなわなと震えだす亜佐美。自慢の巨乳もぶるぶる揺れる。「じ、自分はおっぱいすらない超平凡アイドルのくせに!」

「なにをー!」

「ちよつとちよつと!」

今にも飛びかかりそうな様子の綾香を、内藤ちえ美が制した。彼女も短めにカットされた髪を淡く茶色に染め、少し派手目なメイクをしている。衣装はシャツの上に着たデニムのジャケットとロングスカート。「誰のせいでもないでしょ。まだこっちは何もやってな

いんだし、これからどうなるかなんて分からないじゃん。今のころは雅さんにリードされてるっただけで」

「ま、まあそうやけど……」

「んー……」

しゅんとする綾香と亜佐美。

ちえ美のマネージャーが運転するワゴン車に乗り、三人が一緒に秀英大学入りしたのは午後二時過ぎのこと。車内ですでに衣装に着替えていた三人は、すぐにこの部屋へ通され、秀英祭の実行委員やテレビクルーたちの軽い紹介を受けた。しかし予定されていた打ち合わせは行われず、実行委員らは慌しく部屋を去っていつてしまい、いつしか三人だけがこの部屋に取り残されてしまったのだ。一旦戻ってきたちえ美のマネージャーを問いただして見たところ、プリンセス雅のゲリラマジックショーのおかげで、ライバルの昭和院大学へ多くの客が流れているというニュースを知った。

「みんな何やっとなるっちやろうね」

コンパクトミラーを覗き込み、マスカラを整える綾香。事務所にマネージャー南吾郎にメイクを施してもらったのだが、彼も先ほどから姿が見えない。ちなみにちえ美と亜佐美のメイクも彼によるものである。「なんか私たちに聞かれたくない話でもあるっちやろうか」

「あんたの悪口でも言っつてんじゃない？」

亜佐美が毒づき、綾香は彼女を睨みつけた。今朝初めて言葉を交わした際、ひよんなことで口論となつてしまい、それ以来二人は驚くほどソリが合わない。しかし、今日が初対面だということを考えれば、早速ケンカばかりしているのは、逆に相性が良いからだともいえる。

「たいがいにしなさいね」

二人の仲裁役に回るのは常にちえ美。南とちえ美のマネージャー

は、二人のケンカに朝から全く無関心であった。亜佐美のマナー ज्याーは本日は帯回していない。「なんか対策を練ってるのかもしれないよ。プリンセス雅さんに対抗できるような、もっとお客さんウケの良さそうな企画を考えてるとか」

「しりとり野球拳以上に？」

亜佐美が尋ねた。しりとり野球拳とはトークショー中に予定されている企画で、その名のとおり、しりとりと野球拳を組み合わせたもの。お題しりとりで間違えた者が一枚ずつ服を脱ぎ、三人の誰かがビキニ姿になるまで続けられる。よって三人は衣装の下にビキニを着込んでいる。

「もちろん」

ちえ美は頷く。「さっき試しに車の中でしりとりやった時、全然勝負つかなかったでしょ？ 盛り上がるわけないじゃん。それに、亜佐美ちゃんならともかく私とチロリちゃんは……。ねえ？」

ちえ美と綾香は顔を見合わせた。それから自身の身体に目を落とし、同時に溜息を吐いた。

「失礼します」

そう言って部屋に入ってきたのは、眼鏡をかけた実行委員の男子学生であった。スーツを着て、頭を丸めている。確かトークショー前の秀英祭ツアアのガイドを担当する人物だったはずだ。先ほどの顔見せの際は、具合が悪かったのかやたらと青い顔をしていたが、今はだいぶ顔色が良くなっている。「少しだけ予定変更します」

「やっぱり！」

綾香が言った。「しりとり野球拳をやめるんでしょ？ ホール内やからって寒いかもしれんし、やめましようやめましよう」

「スタイルに自信がないだけのくせして」

亜佐美がまた毒を吐く。二人のやりとりを無視し、丸坊主の学生は言っ。

「いいえ、トークショーは変更なしです」

それ聞き、少しガツカリとした顔を見せる綾香とちえ美。男子学生は続ける。「その前の秀英祭ツアーを少し変更します。本来はアイドル三人が、アイドルさんたち三人をまとめてご案内する予定でしたが、皆さんそれぞれ一人ずつ個別にご案内することになりました」

「別々に？」

「いいえ」

男子学生は首を振った。「皆さんにそれぞれ一人のガイドが付き、同時にご案内します。そのほうがお客さんが分散されて混雑も少なくなるかなとの考えです」

「なるほど……」

綾香は納得したように頷いた。しかし、すぐに眉間にしわを寄せた。「でも、そんなことで雅のゲリラマジックショーに勝てるかいない」

「心配ご無用！」

丸坊主の男子学生の後ろから突如現れた、派手なメイクのギャル系女子学生が言った。彼女も実行委員だったはずである。両手で青い透明の銃を持っている。どうやら水鉄砲のようであるが。「たった今、とあるサークルからマツハでレンタルしてきました。皆さんにはこの水鉄砲で撃ち合ってもらいます。制限時間内に一番濡れちゃった人が罰ゲームです。題して『秀英祭ツアー兼アイドル対抗サバイバルゲーム』！行き当たりバッタリな企画ですけど、盛り上がること間違いなしですね！」

彼女の力説を前に、三人のアイドルは白けた顔で固まっていた。

「コホン」

咳払いをする男子学生。「マネージャーさんからはお許しを頂いておりますのでご了承ください。外はそれなりに寒いでしょうから、皆さん撃たれないように頑張ってください」

綾香は南の顔を思い浮かべ、あいつなら許可するだろうなと思っ

た。「尚、罰ゲームはゲーム開始までに必ず考えておきますので、  
安心ください」

どこまでも行き当たりバッタリであった。

数分後。控え室に二人のマナージャーや実行委員の面々が次々と戻ってきた。ほとんどの者が期待と不安が入り混じったような表情をしている。『秀英祭ツアー兼サバイバルゲーム』に対してのものだろうか。

「改めて紹介しますね」

先ほどのギャル系女子学生が言った。彼女は大庭みなみという名前だそう。サバイバルゲームの言いだしっぺでもあるという彼女だけは、やたらと楽しそうに見える。彼女の隣に三人の男たちが並んでいた。その中の一人は例の丸坊主の男子生徒である。「まずは綾川チロリさんとタッグを組む藤岡さんです」

ガイドではなくタッグらしい。丸坊主の男子生徒が前に出る。綾香は小さく「よろしくお願いします」と会釈をした。続いて内藤ちえ美とタッグを組む橘川という痩せた男子生徒が紹介され、最後に亜佐美とタッグを組む、今度は肥満気味な皆岡という男子生徒が紹介された。三人とも小奇麗なスーツを見にまとい、腕に腕章を付けている。「アイドルさんたちはパートナーを自由に使っていたらダメですか」

みなみが続ける。「相手の攻撃の盾にするもよし、当初の予定どおり、秀英祭を案内してもらってもよし」

サバイバルゲームなのにそれどころやなかるもん、と綾香は心の中でツッコミを入れた。

「しつもん」

亜佐美が拳手をしながら言った。「一番濡れた人が罰ゲームですけれど、どうやってそれを判断するんですか？ なんとなくですか？」

「なんとなくです」

みなみのその言葉にずっとこけるアイドルたち。「というのは冗談



で、数人の審査員が撃たれた回数をカウントすることになってます。つまり、服がどれだけびしょ濡れになると、勝敗はあくまで濡れた回数で決まります。ですから皆さん、服が濡れて動きにくくなったらビキニ姿になっていただいてもかまいません。ただし、風邪を引いても知りませんよー」

「こんなゲームやらされる時点で、風邪引くの確定やんか！」

我慢できず、綾香はついに声に出してツッコんでしまった。みなみは少し困惑した表情を浮かべ、自身の後方に立つ二人のSDPMネージャーに顔を向けた。

「だそうですけど、やっぱり風邪引いてしまいますよね」

「大丈夫です」

南が答えた。ちえ美ボイスである。「うちのタレントは丈夫にできてますので、ちよつとやそつとじゃ風邪なんて引きません。特にあの帽子を被ったやかましいヤツ（チロリ）は不死身です。水鉄砲なんて生ぬるい、ホースで放水してやってください」

ギヤーギヤーとブリーングをする綾香には全く目もくれず、みなみは「ホースは反則です」と冷静に言った。

「お客さんにゲームが優位に運ぶよう協力してもらうのはオーケーですが、パートナー以外の秀英祭ツアー実行委員に協力してもらうのは反則です」

みなみのルール説明は続く。「まあ、私を含めて三人しかいないので大丈夫でしょう。そもそも協力しませんし……。あと、移動範囲はキャンパス内ならどこでもオーケー。ただし、建物の中には入っちゃダメです。反則です。反則にはいずれもペナルティとして二十ポイントのダメージを加算します。それから、反則ではありませんが、お客さんを間違って撃ってしまったないようにご注意ください。ゲーム開始前に学内放送にて、お客さんにも注意をうながしておきます。まあ、ほとんどのお客さんは濡れても文句は言わないですよ

う。水モノの絶叫アトラクションのようなものですよ」

勝手なことを言う。

「秀英祭の展示物とかが濡れちゃったりしたらどうしましょう」

不安な面持ちでちえ美が言った。「学生さんたちが一所懸命作られた物もあるんじゃないですか？」

みなみは目をつむり、ゆっくと首を振った。

「秀英祭成功を願う気持ちは皆一緒です」

それから一步前に出て両腕を広げる。「秀英祭の成功は皆さんにかかっているのです。皆さんの手によって展示物がオジャンになってしまうのなら、それは秀大生全員にとっての本望でもあります」

場の空気が凍りついたのを察してか、彼女は一度「コホン」と咳払いをした。「ま、まあさつきも言いましたとおり、サバイバルゲームのことは放送できちんと通知するわけで、展示物が大事ならそれぞれでちゃんと守れよってことで」

予定が変わったということもあり、少しの間だけ、実行委員とテレビクルーの打ち合わせの時間が設けられた。再び控え室に置き去りにされる三人。時刻はまもなく三時。同時刻に予定されていたイベント開始時刻は、十分から二十分程度遅れる見とおしである。

亜佐美はトイレに立っており、綾香とちえ美二人が並んでソファに座っていた。

「そういえばさ、チロリちゃん」

ふとちえ美が言った。「私のパートナーになった人って、チロリちゃんの知り合いじゃないよね？」

「え？」

綾香は一瞬だけ目を丸め、すぐに首を振った。「ううん、知らんよ。なんで？」

「いやさ、あの人、橘川って言ったっけ？ ずーっとチロリちゃんばっか見てたから。ひよっとしたら知り合いかなんかかって」

「私の隠れファンなんやないと？」

ふざけた調子で綾香は言った。「照れとらんで私のパートナーになればよかったとに」

「隠れファンか。そうかもしんないね」

フフフとちえ美は口もとに手を当て微笑んだ。

しばらくして学内放送が流れ始める。トイレから戻ってきた亜佐美を含む三人は、「おっ」と互いに顔を見合わせた。

《お知らせです》

みなみの声である。《本日三時より予定されていたアイドルお三方の秀英祭ツアーは、『秀英祭ツアー兼サバイバルゲーム』と、形を変えることになりました》

そして、先ほど聞いたルール説明が始まる。お客さんたちはこの放送を聞いてどんな反応をするのかな、などと考えながら、綾香はじっとみなみの声に耳を傾けていた。《濡れたくない人は濡れないように注意してください。濡らしたくないものがある人は必死でそれを守ってください》

「投げやりやね」

綾香は苦笑した。

《尚、たった今罰ゲームが決定いたしました》

ほんの少し顔を強張らせるアイドルたち。《罰ゲームはずばり！ビキニ姿で一発ギャグです。トークショーの時に披露していただきます》

「うわ、絶対無理だ」

頭を抱えるちえ美。「私、普段からあんまりグラビア撮影とかないから、ビキニってだけでも恥ずかしいのに……。チロリちゃん、お願いだから負けて」

「私だって無理やもん！」

綾香の脳裏にデビューイベントの時のトラウマが蘇ってきた。お

まけにビキニ姿では。あの時以上に、派手に外してしまうのが目に見えている。

「私もやだな」

眉をひそめて亜佐美が言う。「ビキニは全然オーケーだけど、一発ギヤグツてのはねえ。チロリちゃんじゃないんだから」

「むっ！」

例の如く睨みあい始める綾香と亜佐美。しかしすぐにちえ美が割って入る。

「そのケンカの続きは後でね」

はあと深く溜息を吐くちえ美。「こうなったらしかたないよ。正々堂々ゲームで勝負しよう」

《お隣の大学へ足を運び『秀大で面白いイベントが始まったよー』などと叫んで回ろうとお考えの方。こちらは別にそれを阻んだりはしません》

『さくら』を呼びかけるみなみ。《それでは皆さま、楽しいイベントにしましょうね。三時二十分のスタートまで今しばらくお待ちください》

## 84 ファン心理

秀英大学キャンパス最北に位置する第四学舎の前。橘川は何度も深呼吸を繰り返しながら、そわそわと視線を左右に動かしていた。視線の先には、周りを取り囲む大勢の観客の姿があったり、テレビリポーターにインタビューを受ける内藤ちえ美の横顔があったりした。

「ちえ美ー！ がんばれー！」

数人の若い男性から野太い声援が飛んだ。ちえ美がそちらに顔を向け、淡く微笑み、小さく手を振る。それからチラリと橘川を一瞥する。橘川はなんとなく目を逸らしまった。

とんでもないことになっちゃったな。

ただの秀英祭ツアーがサバイバルゲームに姿を変え、秀英祭全体のテンションは明らかに上がっている。自分たち（というよりちえ美）に注目する、周囲の客たちの数を数えてみようとして、それは到底無理な話である。百人やそこらではない。数え切れない。

テレビカメラはキャンパス内に二台入っており、一つはここ、もう一つはおそらくチロリのところにある。テレビ局側はトークショーよりも、むしろこのサバイバルゲームに注目していると聞く。もちろん、今となってはほとんどの者が同じ考えであろう。

《まもなく開始いたします。三チームとも準備はよろしいでしょうか》

学内放送が響く。みなみはゲーム中ずっと放送室に居座るようだ。放送を聞き、ちえ美が軽い足取りで橘川のもとへ駆け寄ってきた。両手で水色の水鉄砲を抱えている。それなりに飛距離も出る全長三十センチほどのポンプ式のもので、他のアイドルも全く同じものを所持している。

「絶対勝ちましようね」

ちえ美がなぜか客に銃を向けながら言った。「私、罰ゲーム本気

で嫌なんです」

「は、はい」

軽く頭を下げる橘川。「俺にできることがあれば。でも、盾になつたり、ガイドしたりしかできませんけど……」

その時、また観客たちから野太い声が飛んだ。

「橘川ー！ お前、ちえ美ちゃんを死ぬ気で守れよー！」

声の主に目を向けてみるも、知らない男性である。他にも女子高生らしき集団から「橘川さん、頑張つて！」とエールを受けたり、肉体労働者風の中年男性から「ちえ美に手え出すんじゃねえぞ」と忠告を受けたりしたが、いずれも橘川とは無関係の人物であった。学内放送にてみなみに、橘川ら三人のパートナーのことも紹介されてしまったのだ。

《それでは3、2、1……》

カウントが始まると同時に観客たちが静まり返り……。《スタートオッ！》

その合図と共にまた一気に湧き上がった。

先ほど、それぞれがどのアイドルのパートナーになるかについて、三人のガイドたちの間で話し合いが行われた。二人の後輩が「まずは橘川さんが自由に選んでいいですよ」と言ってくれたため、橘川は悩んだ末に、チロリではなくちえ美を希望した。それにはもちろん理由がある。サバイバルゲームが企画される前に、一度だけチロリと顔を合わせているのだが、その時、橘川は頭が真っ白になるほど彼女に対して緊張感を覚えてしまったのである。もし、彼女のパートナーになれば、ガチガチに固まってしまい何ら戦力にはなれないだろうと考えたわけだ。

ただし、今となつてはもう一つ理由ができた。

「ちょっと作戦タイムです」

パンフレットの地図を広げて、ちえ美が言った。二人はまだ第四学舎の前から離れてはいない。「まずはどっちに行きます？ 安らぎの森広場？ 正門前？」

南西の安らぎの森広場は亜佐美、南東の正門前はチロリのスタート地点である。それぞれのチームのスタート地点だけは全チームに知らされている。

「そ、そうっすね」

橘川も地図に目を落とす。「チロリちゃんが一番動きやすそうな格好してるから、一騎打ちになると危ないかもしれないっすね。まずは亜佐美ちゃんを狙ってみますか？」

「でも……」

ちえ美は空を見上げた。橘川もそれにつられる。「意外と暖かくなりましたね。これなら亜佐美ちゃん、さっそくビキニ姿に変身するかも」

確かに十月下旬にしてはよく陽が照っている。観客たちの熱気も気温の上昇に一役買っているのかもしれない。

「うーん、それもあるか」

亜佐美のビキニ姿を想像して、ほんの少し興奮してしまう橘川。気を紛らわすように、両手で自分の頬をパンパンと叩く。「そうだ。他の二人の行動も大事ですよ。このゲームは優勝者を競うんじゃないって、最下位以外を競うわけですから、二チームが組んで一チームを狙ったほうが当然有利です」

「なるほど！」

嬉しそうに声を上げるちえ美。「さすが、頭良いですね！」

「いや……」

橘川は照れて頭をかいた。

「それならうちらが有利ですよ」

ちえ美は自信満々な表情を浮かべた。「亜佐美ちゃんとチロリちゃん、朝からケンカばかりしてるんです。きっと二人が潰しあっ

てくれます」

「そ、そうなんですか？」

橘川は目を丸める。「それなら俺らがどっちに加勢するかが勝負の行方を左右しそうですね」

「どっちに加勢します？」

上目づかいでちえ美は尋ねた。橘川は一瞬、宙に視線を泳がせるも、迷うことなく答えた。

「亜佐美ちゃんに加勢しましょう」

第四学舎のほぼ真南にある大講堂を目指して歩く道すがら、橘川はふと思いつき、「ちょっと」とノリの良さそうな少年三人組に声をかけた。高校生、いや中学生だろうか。とにかくあどけなさが残る顔立ちである。

「頼みがあるんだ」

「はい。なんすか？」

突然話しかけられ、少々戸惑っている様子の少年たちだったが、その目にはしっかりと好奇心が宿っている。

「チロリちゃんのチームにさ」

少年たちと顔を寄せ合い、小声で話す橘川。「『ちえ美ちゃんチームが亜佐美ちゃんチームを狙ってましたよ』って伝えてきてほしいんだ」

それから南側を指差す。「今、チロリちゃんたち、向こうのほうにいるみたいだからさ」

ちえ美ファンの客のタレコミである。

「分かりました」と頷いた後、少年たちは駆け足で南側に向けて走り出した。

「凄いですねー」

ちえ美が感心したように言う。「頭脳戦って感じ。チロリちゃんを安心させておいて、後ろからバンってことですね」



「そうゆうことです」

橘川はコクリと頷いた。「やるからには徹底的にやります」

「それにしても」

やや言いにくそうにちえ美は言った。「橘川さんってチロリちゃんのこと嫌いなんですか？ さつきもずっとチロリちゃんを見つめてたし……」

「あ、いや、その……」

橘川は腰に手を当て、しばし悩んだ。やがて決心し、口を開く。

「いえ、逆です。好きなんです。ファンなんです」  
初めて素直になれた。

「じゃあ、なんで……」

そこまで口にした時、ちえ美はハツとした表情を浮かべ、口もとを手で覆った。「ま、まさか……」

橘川は頷く。

「当然のファン心理ですよ」

チロリちゃん、ゴメン。でも、君に勝たせるわけにはいかない。しかたないんだ。

橘川はチロリのビキニ姿での一発ギャグを死ぬほど見たかった。

## 85 支援者たちを背中

「ありがとう！ 恩に着るよー」

去っていく少年たちを見送ってから、綾香は藤岡のもとへ歩み寄った。「聞いた？ ちえ美ちゃんたち、亜佐美狙いなんやって。うちらも亜佐美狙いなんやけん、挟み撃ちできるばい」

「どうかな……」

あごに指を当て、考え込む藤岡。「ちえ美チームが亜佐美チーム狙いっていう情報が、亜佐美チームにも届いてる可能性はありますね。少し様子を見たほうがいいかもしれません」

「た、確かに……」

亜佐美チームのスタート時点である安らぎの森広場へ向けて歩き始め、もう十分近くが経過しているというのに、一向に亜佐美たちとはち合わせないというのも不気味である。「じゃあ、亜佐美はちえ美狙いなんかな」

「チロリさんでもそれぐらいの分析はできるんですね」

腕を組み、藤岡は頷いた。イラツとする綾香。「一度正門に戻って、今度は外回りして第四学舎を目指しましょう。他の二チームが潰し合ってくれるかもしれないから。一番他のチームとはち合わせそうにないルートです」

「ええー」

ペタンと地べたに座り込む綾香。「ここまで歩いて来たっちゃん、このまま行こうよー」

「……。ったく」

チツと舌打ちする藤岡。綾香はムツとした表情を見せた。彼女は先ほどから、やたらと鼻につく態度を取る藤岡のことがあまり好きではなかった。「あの、はっきり言いますけどね」

綾香の前で仁王立ちし、藤岡は綾香を見下ろした。「俺はチロリさんに絶対勝ってもらいたいから言ってるんです。なんで勝っても

らいたいかというと、チロリさんの罰ゲームに全く興味がないからですよ。つまり、チロリさんのビキニ姿に興味がないということです」

「なんだとー！」

すかさず立ち上がる綾香。「そうやけん、私のパートナーになつたっちゃね!?」

「それは違います」

藤岡は心外そうな顔を見せた。「本当はちえ美のパートナーになりたかったんですけどね。先輩に譲ったんですよ。まあ、もしちえ美のパートナーになったとしても、チロリさんを狙うことはなかったでしょう。しつこいようですが、チロリさんのビキニ姿に興味ないんで」

「むー」と綾香は彼を睨みつけた。それから彼を指差し、叫ぶ。

「もうあんたなんかと組みたくない! どっか行け！」

「別にかまいませんよ。俺もあんたみたいなわがままな人は嫌です」綾香に背を向けながら藤岡は言う。「パートナーと別れちゃダメっていうルールもなかったはずですから。後は一人で頑張ってくださいねー」

そして彼は本当に北の方角へと去っていつてしまった。ポカんと立ち尽くす綾香のもとに、彼女よりやや若そうな少女が駆け寄ってくる。

「チロリさん」

「ん?」

少女は綾香に耳打ちをした。「ふん、ふん……。な、なるほど!

それいいね」

そう言ってから、綾香は被っていたハットを脱ぎ、少女の頭に被せた。

綾香は藤岡が言っていたように正門へと戻り、そこから北上した。

時折、自分の後を追ってくる客たちやテレビクルーに向かって人差し指を立て、「シー」と静寂を要求する。水鉄砲を常に発射できる状態で手に持ち、そそくさと前へ進んでいく。

作戦はこうだ。藤岡と偽綾香（先ほどの少女である）を他のチームと対峙させ、そのチームが気をとられているうちに、背後から狙う。この作戦は偽綾香の口から藤岡の耳にも入っているはずである。彼はきつと協力してくれるだろうと綾香は踏んでいた。先ほどはケンカ別れしてしまったが、結局、彼としても綾香が勝ってくれた方が都合が良いのだ。『チロリさんのビキニ姿に興味がない』と何度も言っていたではないか。

やがて綾香は、やや開けた場所に出た。西側に死角がなくなり、遠くにトークショーの行われる大講堂、更にその向こうまでも広々と見渡せた。そして、大講堂の近くにかなりの人だかりができているということにも気がついた。地面にひざを付け、身体を伏せる。

誰かおる……。

「皆さん」

ポリウムを抑え、そう言いながら、綾香は後ろを振り向いた。やはり、大勢の客たちが自分に尾いてきている。「くれぐれも静かにお願いしますね」

客たちが次々と頷くのを確認してから、綾香はもう一度大講堂のほうを注目した。

人だかりのせいで、どのチームがいるのかは分からない。「誰か、様子を見てきてくれませんか？」

しばらくして、綾香が送り込んだ刺客である秀英大助教授の中年男性が大講堂のほうから戻ってきた。

「いたよ」

彼が頷きながら言った。「藤岡くんたちとちえ美ちゃんたちが、距離を置いて睨み合っている。綾香ちゃんが偽者だつてことにも気

づいてなさそうだね。あの子（偽綾香）、上手いこと陰に隠れながらハットだけを見せて、存在をしつかりアピールしてる。ちえ美ちゃんのほうは紛れもなく本物だ。パートナーの後ろにピッタリとくっついたよ」

「ありがとうございます」

綾香は礼を言うと、また後ろの支援者たち（と呼ぶことにした）に顔を向け、その中の一人の男性を指差した。「そのジャケット借りちゃダメですか？」

暑くなつたため脱いだのであろうか、男性は黒いジャケットを腕にかけていた。

「別にいいですよ」

綾香にジャケットを手渡す男性。「ただし、濡らさないでくださいね」

「それは保障できませんな」

ジャケットに腕をとおしながら、綾香はおどけてみせた。

更に別の男性から黒い野球帽を借り、秀大生らしき女性から赤いジャージのズボンを借りた。その女性がジャージを脱ぐ時、少しだけ男たちの目の色が変わったが、下にはちゃんとハーフパンツをはいていた。

「皆さん」

変装を済ませた綾香が、改まった様子で言った。「ちえ美ちゃんみたいな清纯派アイドルがビキニで一発ギャグするところ、見てみたいですよね？」

支援者たちがまた次々と頷いていく。綾香も満足したように頷いた。「ならば皆さんはしばらくここで待機してください。ここからは一人じゃないと目立ってしまうのです。今から私がちえ美をやっつけてきます」

「チロリさん」

ジャージを貸してくれた女性が言う。「これも使ってください」肩にかけていたスポーツバッグを差し出す。綾香は少し戸惑った

が、すぐに「あ、なるほど」と口にし、バッグを受け取った。

「ありがとう」

礼を言いながら、水鉄砲をスポーツバッグの中に入れる。いつでも取り出せるようにジッパーは閉めないでおく。「それじゃ、行ってくるばい」

支援者たちに見送られながら、綾香は大講堂を目指し歩き出した。

## 86 本気モード

「橘川さん、どうでしょう」

背中がちえ美の不安そうな声。橘川は二十メートルほど先のチロリチームを見すえたまま、二、三度頷いてみせた。

「大丈夫。向こうだって同条件ですよ。それより……」

キョロキョロと周囲の群衆を見回す。「亜佐美ちゃんチームがどこから狙ってるかもしれません。チロリちゃんチームは俺に任せて、ちえ美さんは後ろを見張っててください」

「はい」

二人は背中合わせとなる。観客たちは二人の半径五メートル以内に近づこうとはしない。おそらく、対決しやすよう気を使っているのだろうが、橘川にとってはどちらかということ、盾になってくれたほうが嬉しかった。

両チームを結ぶ直線上もポツカリと空けてくれている。橘川は緊張の面持ちでチロリチームを凝視し続けた。

ズボンのポケットに手をつつ込み、なぜか余裕の表情を浮かべている藤岡。そして彼の後方で伏せている綾川チロリ。トレードマークの白いハットが非常に目立っている。

くそ、なんで上手いかなかったんだろうな。

先ほど、少年たちに偽の情報を伝達させた作戦である。チロリチームはてつきり亜佐美チームを狙うと思ったのだが、まさかこちらへ攻めてくるとは。亜佐美チームの動向も気がかりである。チロリチームと未だに接触していないのなら、亜佐美チームも自分たちを攻撃してくる可能性が高い。

ちえ美ちゃん、二人から嫌われてるのかな。

思わずそんなことを考えてしまう橘川であった。

ん？

橘川は眉をひそめた。藤岡の後ろのチロリの様子に、やや疑問を抱いたのだ。ちえ美は先ほどからずっと水鉄砲をかまえているが、チロリは隠れたままでこちらを攻撃してくる様子は全くないし、水鉄砲も見えない。

ひよつとして水鉄砲を持ってないのか？ 誰かに渡して代わりに攻撃してもらうとか……。いや、アイドル自らが撃たないとポイントにはならないはず。

「ちえ美さん」

背後のちえ美に呼びかける橘川。「なんでしょう」とちえ美。「観客の中に顔を隠している女の子がいないか、注意して見てください。チロリちゃんが変装して紛れ込んでいる可能性もあります」「えー！」

ちえ美が目を見開くのを確認し、橘川は頷いた。それからまたチロリチームに視線を戻す。「じゃあ、あのチロリちゃんは……」

背中から困惑の声。

「偽者の可能性があります。考えてみれば、チロリちゃんはキャミソールを着ていたはずなのに、あそこにいる白いハットの女の子は長袖のシャツを着ている。お客さんが誰かに借りた可能性もありますけど、顔も見せようとしなし、やつぱり怪しいです」

「偽者……。そんなのアリなんで……」

ちえ美がそこまで口にした時だった。「キャー！」

その短い叫び声と同時に、橘川の頬に水しぶきが跳ねた。橘川はハッと振り向き、ちえ美の様子を窺った。ちえ美は目元を押さえ、うずくまっていた。

「や、やられたっばいですー」

「やつぱり……」

橘川は周囲の群衆の中にそれらしき人物がいないか探し始めた。すぐに、他の観客たちから注目を浴びる水鉄砲をかまえた少女をとらえる。野球帽、黒いジャケット、赤いジャージ、スポーツバッグ、



先ほど見たチロリの服装とはまるで違っていているが、橘川は確信する。それは間違いないとチロリであると。「くそ！」

橘川はちえ美の前に仁王立ちし、壁になった。口元をやつかせ、銃をかまえながら近づいてくる少女。

「さあ、そこをどきたまえ」

芝居がかった口調で少女は言った。その聞き慣れた声は、やはり綾川チロリのものであった。「その高そうなスーツを水びたしにされたくなければね」

「くっ」

若干怖気づく橘川。確かにこのスーツを水びたしにされるのは痛い。「ど、どきません！ 撃ちたいなら撃ってください！」

そんな男らしいことを口にしながら橘川は感慨に耽っていた。

や、やったー！ ついにチロリちゃんと口が利けたぞー！

「すきアリー！」

素早い動作で、チロリがちえ美の側面に回り込む。橘川が一瞬遅れて「しまった」と反応した頃には、チロリの発射した水弾がちえ美のわき腹あたりを直撃していた。

「あーん、いやーん」

情けない声を上げるちえ美。彼女はまだ、しゃがんだまま目元を押さえている。

「よっしゃー！ 作戦成功！」

ガッツポーズをし、チロリは一目散に藤岡のもとへ走っていった。やがて藤岡と合流し、そのまま二人で大講堂前の広場から離れていく。

く、くそ……。俺が集中を切らしてしまったばかりに、防げたはずの二発目まで……。

「ちえ美さんチーム。二ポイント奪われました」

観客の中の一人の女性が言った。その場にいるちえ美以外の全員

が彼女を注目する。やや幸が薄そうな顔立ち。セミロングヘアとヘアバンド。なんとその女性は、秀英祭ツアー実行委員の一人、控え目少女の貴美であった。バインダーに挟んだ紙にペンで何かを書き込んでいる。

「き、貴美ちゃん？」

「私も審査員の一人です」

ニコツと微笑む貴美。「それはそうと、これでちえ美さんが二歩後退してしまいました。このまま五時になればちえ美さんの罰ゲームが決定してしまいます」

「そ、そうか……」

橘川は神妙な面持ちを浮かべた。もう攻めるしかないということだ。

「許せない！」

突然ちえ美がそう叫び、橘川を始め、辺りの数人が驚いてビクツとする。なにごとかとちえ美に目を向ける橘川。いつの間にか立ち上がっていたちえ美は、わなわなと肩を震わせながら、じっとつむんでいた。「メイクしてるって知ってるくせに、わざわざ顔を狙うなんて……」

そして顔を上げる。確かにメイクが落ち、目元がやや黒ずんでいる。橘川は「まあまあ」と彼女をなだめた。

「顔を狙うってのは反撃を阻止する有効手段です。こっちも仕返ししましょう」

「もちろんです！」

そう言うと同時に、ちえ美は水鉄砲を地面に置き、濡れたデニムのジャケットを唐突に脱ぎ捨てた。観客たちがどよめき始める。ジャケットの下に着ていた赤いティーシャツさえも脱ぎ、上半身は白いビキニのトップス一枚という姿になった頃には、観客のどよめきも歓声に変わっていた。

「ち、ちえ美さん。何を……」

おろおろとした様子で橘川が尋ねる。彼にとって同年代の女性の

ビキニ姿をこんなに間近で見たのは生まれて初めての経験であった。

「濡れた服は邪魔になります。もういりません！」

水鉄砲を拾い上げるちえ美。怒りからなのか、恥ずかしさからなのかは不明であるが、少し頬を紅潮させている。「さあ、早くチロリのヤツを追いましょう」

「は、はあ……」

橘川は気の抜けた返事をした。

## 87 撃ち合い勃発

「男性のお客さまに朗報です。綾川チロリさんの攻撃を受けた内藤ちえ美さんが、衣服を脱ぎ去り、上半身ビキニ一枚になりましたよー。ひよつとしてポロリもあるかも。昭和院大学にこの話を広めたいのなら広めていただいてもかまいませんよー。さあ、残り一時間サバイバルゲームはいつたいどんな決着を迎えるのか。このまま罰ゲームは内藤ちえ美さんに決まってしまうのかー。目を離せません！」

安らぎの森広場にて、手をひざに付き、息を整えながら、綾香はその学内放送を聞いていた。変装状態のままであり、水鉄砲はスポーツバッグに仕舞っている。藤岡も同じ体勢でせえせえと荒い呼吸をしていた。先ほどまで偽綾香が被っていた白いハットを手に持っている。広場では露天食堂が開かれており、数人の客がテーブルに向かって黙々と食事をしている。周りをやはりサバイバルゲームのウォッチャーたちに囲まれている。

「あっちゃー」

綾香が顔を上げ、渋い表情を浮かべながら言った。「ちえ美ちゃんに火をつけちゃったみたいやね。今頃私たちを追ってきとるとかないな」

「そうかもしれないね」

藤岡も身体を起こす。「とりあえず、ちえ美が一步後退する状況となりましたが、どうしましょう。このままどっかに隠れときますか？」

「隠れるってどうするん？」

眉間にしわを寄せ、綾香は尋ねた。「こんだけ人に見られとっつちやけん、隠れてもすぐバレるもんな」

「簡単なことです」

ふんと鼻で笑う藤岡。「皆さんに協力してもらえばいいんです」

「あ……」

支援者たちの協力を得たおかげで、例の偽綾香作戦を成功させることができたということ。綾香は思い出した（おまけに発案者も支援者の偽綾香である）。「なるほど、ここにいる人たちにかくまってもらうんやね。あんたなかなか頭良いね。頼りになるー」

「さっきは俺なんかと組みたくないって言ってませんでしたっけ？　そう言いながら藤岡は右手の人差し指を使い、ハットをくるくると回した。「う……」とばつの悪そうな顔をする綾香。

「あ、あれはちょっと頭に血が上っただけ」

「あはは」と愛想笑いを浮かべ、綾香は言った。「いつどこで狙われとるか分からんっていう緊張感のたまものやね」

綾香に流し目を送り、皮肉的にふうと息を吐く藤岡であったが。

「まあ、俺もちよつと言いすぎました」

左手の人差し指で眼鏡のフレームを持ち上げる。「ちえ美さんとタッグが組めず、おまけに全く興味のなかったチロリさんみたいなのと組むことになって、少しイライラしていたんでしよう。反省します」

「全然反省してない！」

「まあ、とにかく皆さんに協力を仰いでみましょうよ。あ、その前に……」

藤岡はあたりをひととおり見回した後、再び綾香に顔を向けた。

首を傾げる綾香。「ここは亜佐美チームのスタート地点でしたよね。亜佐美チームの動向について知っている人もいるでしょう。ちよつと聞いてみましょうか」

「なるほど」

綾香はコクンと頷いた。「じゃあ、私が聞いてみる」

そう言って彼女は、近くのテーブルでカレーを食べる、なぜか上半身裸の色の黒い若い男性に話しかけた。「あー、滝田亜佐美ち

やんがどつちに行つたか知りませんか？」

「滝田亜佐美？」

うつとうしそつに眉を曲げる青年。しかしながら、北西の方角を指差し、答える。「ああ、あつちに行つたよ。内藤ちえ美を狙うんだとさ」

「ありがとうございます」

お辞儀をし、綾香は藤岡のもとへ戻つた。「あつちつてよ。やっぱり背後からちえ美を狙う作戦やったみたい」

「うーん」

難しい顔つきで腕を組む藤岡。「その割には動きが静かですよ。さつきちえ美チームと相對した時も全く姿を見せなかつたわけだし。念のために他の人にも聞いてみましょうか」

今度は藤岡が露天食堂の売り子らしき女子学生に話を聞いてみるも、やはり答えは同じであつた。

「私がちえ美を攻撃したことを知つて、どつかに隠れとく作戦に切り替えたつちやない？」

綾香が言う。藤岡はやや納得がいかさうな表情のまま「それもありませんか」と二度頷いてみせた。と、その時、周りの見物客の一人が「チロリさん！」と大声を上げた。

「ちえ美さんたちがこつちに来てるらしいです」

「ええ！」

綾香は藤岡と顔を見合わせた。「ど、どうするん？」

「ここでかくまってもらうのはあきらめましょう」

藤岡は言った。「亜佐美たちが向かつた室内競技場のほうに行つて、そこからミスコン会場を目指して……。ん？」

突然話すのを止め、綾香の後方を凝視する彼。「チロリさん、伏せて！」

「え？」

綾香は伏せずに、後ろを振り返つた。その瞬間、顔面にピシヤツと水撃を食らい、反射的に顔を背ける。「わあっ！ も、もう来た

!？」

「違います!」

サツと綾香の前に出る藤岡。同時に、彼の肩付近に水が弾けた。身を盾にして追撃から守ってくれたらしい。綾香は彼の脇からそおつと顔を覗かせた。

「あつ!」

水鉄砲をこちらに向け、かまえていたのは、ちえ美ではなく、大きなダボダボのシャツと、綾香と同じ赤いジャージを履いた滝田亜佐美であった。

今まで静かだった食事中の客たちが一斉に沸き上がった。「亜佐美! やつちまえ!」と物騒な言葉が飛んだと思ったら、それを発したのは先ほど綾香が亜佐美の動向を尋ねた上半身裸の男性であった。

「ようやく、あんたのアホ面に会えたわ」

銃口を真つ直ぐチロリに向けたまま、亜佐美が唇を曲げる。「気づかなかった? 私、ずっとそのテーブルでカレー食べてたんだけど」

近くのテーブルを指差す。

「ふん、卑怯者」

綾香も肩にかけたスポーツバッグの中から水鉄砲を取り出した。

「さてはあんた、お客さんを味方につけてずっとここにかくまってもらつとつたつちやる」

「俺たちだって同じことをしようとしてたわけですから」

藤岡が言う。綾香は「あんたは黙つとき」と藤岡の股間目がけて水鉄砲を発射した。「あふつ」と身をよじらせる藤岡。それを機とばかりに、亜佐美がまた攻撃をしかけ、今度は綾香の太ももに命中した。

「あーん、ちえ美と並んじやつたやんか」

「あんたが余計なことをするからです！」

また亜佐美の攻撃。今度は藤岡がしっかりとガードする。「ほら、チロリさんも早く攻撃してくださいよ」

「おっと、そうやった」

しかし、綾香が慌てて銃口を向けたその先に、亜佐美の姿はなくなってしまうている。「あ、あれ？」

「あっちあっち！」

藤岡がそう言って指差した方向へ綾香が顔を向けようとした時、  
またも顔面に一撃を食らってしまう。これで三度目の被弾。ついに  
罰ゲームレースのトップに踊り出ってしまった綾香。

「く、くそー！」

綾香は俊敏な動きで藤岡の背後から飛び出し、再度亜佐美に狙いを定めようとした。しかし、亜佐美も止まってはくれない。「ちよろちよろと動き回るなー！」

綾香は半分ヤケになり、むやみやたらに連射した。ことごとくかわされるも、一発だけ亜佐美の胸元に命中した。

「冷た……！ やったわね」

攻守交代。今度は綾香が亜佐美の攻撃から逃げ回る番である。持ち前の逃げ足の速さで、放水を間一髪でかわし続ける。しばらくして、亜佐美が「ああ！」と叫び、頭を抱えた。「み、水がなくなっ  
た！」

よっしゃ！ チャンス。

綾香がまた亜佐美に攻撃をしかけようとした時であった。

「ギヤ！」

お尻に水が当たる感触。彼女は「な、なんで!？」とすぐさま背後に顔を向けた。そこに……。

そこに、上半身だけビキニ一枚のちえ美の姿があった。彼女は鬼のような形相で綾香を睨みつけていた。手にはしっかりと水鉄砲を  
装備している。

わ、忘れてた……。



## 88 罰ゲームほぼ確定

息を乱しながら橘川が安らぎの森広場に到着したのは、ちえ美に遅れること約五分であった。本気モードのちえ美に体力がついていかず、置き去りにされてしまったのだ。

「はあはあ、ちえ美ちゃん、大丈夫かな……。」

広場の一端で練り広げられている修羅場を察知するや否や、人の波をくぐり抜け、騒ぎの中心へとまたひた走る。そこで彼は予想外の光景を目撃する。

「な、なんだこりゃ？」

彼は目を丸めた。

なんと三人のアイドルたちが水鉄砲を片手にじつとたたずみ、互いを睨み合っていたのだ。まるでヘビ、カエル、ナメクジの三つ巴である。スカートをはいていたはずのちえ美は全身ビキニになっており、チロリも上半身が白いビキニ、下半身は元のホットパンツという姿に変身している。亜佐美は大きなティーシャツとジャージ。

「橘川さん、遅かったですね」

近くにいた貴美がノートに目を落しながら言った。いつの間に来たのだろう、と橘川は思う。「今まで嵐のような戦いが練り広げられていました。それぞれのダメージポイントはちえ美さんが五、チロリさんが七、亜佐美さんが三です」

「やった！」

思わずガッツポーズをする橘川。「ちえ美ちゃん、逆転したんだね！ん？ところで今はどうゆう状況？」

「三人とも水が切れたみたいです」

やや困惑したような表情で髪の毛をいじる貴美。「睨み合っているように見えますが、実際のところ休憩中みたいです。すぐそこに水道があるから、そこで補給すればいいわけですが、補給したら休憩が終わってしまいますから」

「な、なるほど、暗黙の了解での一時休戦状態か」

そこで橘川は気がつく。藤岡と皆岡が水の入ったペットボトルを握りしめ、観客に紛れて立っているということ。

お、俺もなんか水を入れる容器を……。

キョロキョロと周りを見回す。そんなものはそう簡単に落ちてはいない。彼は考える。

さて、どうするか。

「気持ち悪くなってきたし、私もそろそろサービスしちゃうかな」

亜佐美が水鉄砲を置き、ゆっくりとティーシャツを脱ぎ始める。

赤いビキニトップスに包まれたポリウレーム感溢れる胸があらわになると同時に、周りから歓声が上がる。中には拍手する者もいる。元々着ていたドレスは見当たらない。どこかに置いてきたのであろうか。亜佐美は観客の一人、上半身裸の若い男性に脱いだティーシャツを手渡した。「お兄さん、ありがとう。ちょっと濡れちゃいましたけど、許してね」

「かまわねえ、一生宝物にするぜ」

彼の物だつたらしい。彼はティーシャツを折り畳み、大事そうに腕にかかえた。それから、匂いをかいで気味の悪い笑みを浮かべる。

「大変、変態ですね」

貴美がシャレなのかなんなのかよく分からないことを言ったが、

橘川は聞き流すことにした。

それから亜佐美はジャージも脱ぎ、同じく観客の一人の女子学生に返却した。サッパリとビキニ姿になったところで、身体をねじりセクシーポーズを披露する。そのサービスに男性陣は狂喜乱舞である。

「皆さーん」

不意にチロリが手でメガホンを作り、言った。「滝田亜佐美名物、豊胸おっぱいの登場です。とくとご堪能ください」 笑いと拍

手が巻き起こる。亜佐美が慌てて手を振った。

「ち、違います違います。天然です！ くっ……。チロリー！」

チロリに詰め寄る。「あんた、なんてこと言うのよ！ 一応私はあんたの事務所の先輩なんだからね！ 変な噂がついちゃったらどう責任取るの！」

「ベーだ！」

あっかんべーをするチロリ。彼女も水鉄砲を地面に投げ捨てる。

「噂がつくほど売れてないから心配せんでいいよ！」

「こなくそー！」

そのまま亜佐美とチロリが小競り合いを始める。橘川はぼつつとその様子を眺めながら、本当に仲悪いんだなーと感心していた。

「橘川さん、ぼつつとしてないで」

密かに歩み寄ってきていた、ちえ美に小声で話しかけられる。「今のうちに補給しちやいましょう。水、持ってきたんですよ」

う……。

「ご、ごめん。そこまで考えてなくて」

「えー！」

囁きの上での小さな叫び。「なにモタモタしてるんですか！ っことは私たちが一番不利なことですよ！ 他の二人は水用意してますもん」

「だ、大丈夫。こんなのどう？」

橘川はちえ美にごによごによと耳打ちをした。ちえ美はやや不安げな表情ながらも。

「とりあえずはそうするしかないでしょうね。じゃあ、お願いします」

ちえ美は橘川に水鉄砲を手渡した。

「二人とも動かないで！」

その瞬間、ちえ美に視線が集まる。亜佐美とチロリも取っ組み合ったまま、キョトンとした顔でちえ美を見つめる。ちえ美は銃口を二人に向け、水鉄砲をかまえていた。「たった今、橘川さんに水を補給してもらいました。今のところ最下位はチロリちゃんだから、私はもう戦いには参加しないで逃げ続ける。私が見えなくなるまで動いちゃダメ。動いたら容赦なく撃つよ！」

二人は固まったままである。呆気に取られているのか、ちえ美の指示どおりなのかは判断しかねる。

「はい、すみませーん。開けてください」

橘川が観客を移動させ、逃げ道を確保する。勝ち誇った顔をしているが、心中では緊張のピークにあった。ちえ美の水鉄砲にはもちろん水など入っていない。題して『ハツタリ逃亡大作戦』。

よし、このまま逃げ切れれば、罰ゲームはチロリちゃんに……。

そう思った矢先である。

「キヤー！」

ちえ美の叫び声が聞こえ、橘川は「え？」と後ろを振り返った。

同時に彼は目を疑う。なんとちえ美がチロリ、亜佐美から水鉄砲のめった撃ちにあっているではないか。ピシヤ、ピシヤと何発もの水弾が命中し、ちえ美は身体を丸めてうずくまっている。「き、橘川さん。助けてくださーい！」

「勝ち逃げしようなんてそうはいきません」

皆岡が意地悪な笑みを浮かべて言う。「橘川さんの動きはちゃんと俺が観察してましたよ。橘川さんは補給なんてしてない。するフリだけだ」

くそっ！ それに引き換えこの俺は……！

橘川は自分の不注意さを悔いた。皆岡と藤岡がいつの間にか水の補給を済ませていたことに全く気がつかなかったのだ。もうできることは一つしかない。ちえ美の盾になることだ。ちえ美の前に立ち、二人の攻撃を浴び続ける橘川。しかしながら、全てを防ぎ切ること

はできない。

「ちえ美ちゃん。うずくまってちゃダメだ。ここは俺に任せて逃げるんだ！」

「じゃあ、お言葉に甘えて！」

ちえ美は動かさず、代わりに逃げていったのはチロリであった。チロリと藤岡の後ろ姿をポカーンと眺める橘川の隣を、亜佐美が平然と抜けていく。

「これでラスト」

至近距離からちえ美の頭に、またピシヤと水を発射する亜佐美。

「あーん」と泣き声に似た断末魔を発するちえ美。「二十五かな？」

「ちえ美さんのダメージポイント二十六です」

貴美が事務的な口調で答えた。亜佐美が「惜しい」と悔しそうな顔を見せる。

「本当はチロリが罰ゲームってのが最高なんだけど、今回は安全策でいかせてもらっわ。じゃあちえ美ちゃん、罰ゲーム頑張ってね」

ポンポンとちえ美の頭を叩き、亜佐美も皆岡と共に、チロリとは別の方角に向け、去っていった。その場がシーンと静まり返る。橘川は顔を伏せたままのちえ美に近づき、優しく言った。

「俺も一緒に発ギャグ考えるから……」

サバイバルゲーム終了まで残り三十分を切っていた。

《大変なことになってまいりました。一度は逆転したはずの内藤ちえ美さんが、最下位を独走中！ おまけに他の二人は逃亡中。イーイー！ さあ、いよいよ残り二十分。ちえ美さんの逆転はありえるのかー！》

そんな学内放送に耳を貸そうともせず、詩織は黙々と露店で購入したポップコーンをほお張り、目の前で繰り広げられるショーを観覧し続けていた。

「わー、サバイバルゲーム大詰めみたいだよ」

隣に座る田之上が焦りを含んだ声色で言う。「もうミスコンはいいじゃん。早く観に行こうよ」

「だから、一人で行けばいいでしょ」

ツンと顔を背ける詩織。「私はサバイバルゲームなんかよりミスコンが観たいの」

そしてまたポップコーンを一つまみしてから、元親友の顔を思い浮かべる。

誰が綾香なんか……。

二人はキャンパスの北東にある広場内ミスコン特設ステージの観客席の最前列に並んで座っていた。元親友、綾香を含むアイドルたちのサバイバルゲームが始まってからというもの、ここはいまいち活気をなくしてしまっている。観客席（パイプ椅子を三百脚ほど並べて作られた簡易なもの）のほとんどは空席で、おまけに百名近いという参加者たちも観客席に座っているため、純粹な見物客は詩織たちを含めたごく少数だということは想像に難くない。まあ要するに、サバイバルゲームに客を取られてしまったわけである。

《さあ続いてエントリーナンバー七十一番、経済学部の澤井明日香

ちゃんでーす」

司会者の男子学生。彼からも当初のような覇気が感じられなくなった。まあ、それは客が減ったからという理由だけではなく、長時間に渡りひたすら参加者を紹介し続けるという単調激務の疲れもあるのである。

「はー、この子は微妙だねー」

詩織は鼻で笑った。「それなりに可愛いけど、ミスコンに出れるレベルじゃないでしょう。なんていうの？ 華がないっていうか」

「詩織ちゃん、失礼だよ」

どんだん性格が悪くなつていく恋人をたしなめる田之上。「さつきから毒吐いてばかりじゃないか。たまには褒めてあげなよ」

「田之上くんこそ失礼だねえ」

前を向いたまま、詩織は表情を変えずに言う。「何人かはちゃんと褒めてるでしょ。十一番と十七番と三十一番と四十番と……」

「よく覚えてるね」

田之上は苦笑した。「実は綾香ちゃんを観に行きたい、っていう本心のわりには」

「……！」

詩織が何か反論しようとした時、突然広場の隅が騒がしくなった。二人が同時にそちらへ目を向けると、そこに一組の男女を先頭とした集団があった。

《あー、すみませーん》

司会者が慌てた様子で言った。《アイドルさん、客席でのバトルはなるべく避けてくださいねー。ステージが上がってくるのは論外です》

「オーケーでーす！ ちよつとかくまってもらうだけなんで、他のチームが来たらずくに離れまーす！」

先頭に立つスーツを着た男性が大声で答える。彼がパートナーだ

とすると、横にいる少女はアイドルのうちの一入だということか……。

「あ、綾香……！」

先に気がついたのは詩織であった。綾香は大きな黒いコートを羽織っており、裾からは素足が伸びていた。頭には白いハット、手には水鉄砲。ぐつたりと背を丸め、うつむいている。どうやらかなりの激戦を終えたところのようである。

「やった。向こうから来てくれた」

嬉しそうに田之上が言う。「話しかけても大丈夫かな」

詩織はやはりふて腐れた表情で「さあね」とだけ答えた。

綾香は水鉄砲をパートナーに手渡し、こちらに向かってトボトボと歩いてきた。彼女が連れていた集団が後方の客席にぞくぞくと腰を下ろす中、彼女だけが最前列にまで達し、詩織たちが陣取る場所から右へわずか五脚目のパイプ椅子に座った。パートナーは水鉄砲を手に、どこかへ行ってしまったようである。

元親友の様子をまじまじと観察する詩織。かなり憔悴しきった表情だ。おそらく、ここでひっそりと残り時間を潰そうという考えであろう。周りのミスコン参加者や元からいた観客たちも、それを察してか誰も騒ごうとはしない。綾香はトレードマークのハットを脱ぎ、隠すように懐の中へ入れた。

「やっぱり最低だね」

綾香からステージ上へと視線を移し、詩織は言った。「こんだけ近くににいるのに気がつかないなんて、自分が呼んだくせしてさ」

「そんな」

また苦笑いを浮かべる田之上。「疲れててそれどころじゃないんだよ。ゲーム終わったら話しかけてみよう。きっと詩織ちゃんに来てるって知ったら喜ぶよ」

「喜ぶ……？　どうかねえ」

嫌味つたらしくそう答えた後、詩織はもう一度だけ綾香を見やり、ふんと鼻を鳴らした。むしゃむしゃとポップコーンを噛み砕く。



その時、綾香の後ろの席に座る女性が、綾香に話しかけた。エントリーナンバー七十四番まで進んだミスコン（何番まであるのかは知らないが）に目と耳を傾けながらも、意識は綾香と女性のやり取りに釘付けとなってしまう詩織。観客たちのほとんどがそうなのかもしれない。

「あの子、参加者だったよね」

目も耳も意識も綾香に傾けている田之上が口を開いた。無論、綾香と話している女性のことであろう。「何番だったっけな」

「十七番」

横目で女性を眺めながら詩織は答えた。「名前は忘れちゃったけど、確か文学部二年の人だったはず。あの人は何こう感じ良かったね。私は優勝候補だと予想してるんだ」

アピールタイムで、こま回しというシュールなことをやっていた女性だ（しかも失敗していた）。屈託のない笑顔がとても愛らしかったのを覚えている。レモン色のワンピースの上から白いチョッキを羽織っており、控え目なショートボブカットと合わせ、それがとてもよく似合っていた。

「あれ、綾香ちゃんになんか手渡したよ」

わざわざ報告する田之上。彼に言われなくとも、詩織だって気がついていていた。手渡したのは眼鏡で、綾香はすぐさまその眼鏡を装備してみせた。なるほど、なかなか印象が違って見える。それは変装としてはもってこいのアイテムだったようである。

「ん？」

その時、綾香の様子が一変した。目と口を大きく開け、不気味な笑顔を浮かべ始めたではないか。そして視線は真っ直ぐにこちらへと向いていた。

「ほら言ったでしょ」

勝ち誇ったように田之上が言う。「詩織ちゃんを見つけた途端、

あんなに嬉しそうな顔して」

チツ……。

詩織は心の中で舌打ちをした。あえて綾香から視線をそらしてみ  
る。視線を戻すと、綾香は同じ表情のまま一つ近い席に移動してい  
た。またそらす。再び戻すと、更にもう一つ近い席へ。

来るんならさっさと来い！

## 90 背後に敵が

「いやー、ご両人。秀英祭を満喫しとるかねー」

結局、詩織の隣の席までやってきた綾香が、かけ慣れていない眼鏡のフレームをクイと持ち上げながら言った。それから、詩織の肩をポンポンと叩く。「君たちの仲睦まじさを見てみると、仲人役を務めた私も嬉しくなってくるよー」

「なんであんたが仲人役なのよ？」

綾香を見ずに詩織は言った。「え？」と心外そうな表情を浮かべる綾香。その様子を見て今度は詩織が目を丸める。そこに田之上が割って入ってきた。

「い、いや」

苦笑する田之上。「詩織ちゃんに告白する前さ、実は綾香ちゃんにも相談に乗ってもらってたんだよ」

「え？ そうなの？」

詩織は純粹に驚いた。それは全くの初耳である。左右に首を回し、田之上と綾香の顔を交互に見やる。

「そうなんよ」

誇らしげに大きく頷く綾香。「私がおらんかったら君たちが付き合うなんてことはなかったやろうね」

「何を偉そうに……」

冷めた目で綾香を見つめる詩織。綾香はニマツと笑顔を見せた。

「ところで綾香」

会場を見渡しながら詩織は言った。「ゲームのほうはもう大丈夫なの？ 随分とリラックスしちゃってるけど」

「今何分？」と綾香が尋ね、田之上が腕時計を見て「五十分」と答えた。

「あつはっは、あと十分やん」

高笑いする綾香。「もうさすがにちえ美の逆転は不可能ばい。もしここに辿り着いたとしても私を発見することはできんから」

と、その矢先のことであつた。

《ちえ美さんに朗報です》

みなみの学内放送である。《チロリさんはミスコン会場に潜伏中、亜佐美さんは大講堂前の広場から北へ移動中です》

「い、言うなー！ 馬鹿みなみ！」

上空に向かって綾香が叫ぶ。

《しかたないのでーす。このまま何のヤマもないまま終了つてのはつまらなすぎるからでーす》

「聞こえとるんかい！」

「ま、大丈夫でしょ」

詩織はそう言つてポップコーンを口に含んだ。もぐもぐとあごを動かし、飲み込んでから続ける。「いくらなんでもあと十分じゃ逆転はありえないよ。のんびりミスコンでも観てなさい」

ステージ上を見上げる詩織。綾香と田之上もそれにならう。ステージ上ではもう全ての参加者のアピールタイムを終え（結局エントリーナンバー何番まであつたのかはよく分からない）予選通過を果たした参加者の名前を司会者がひたすら読み上げていた。名前を読み上げられた参加者がステージ上で横一列に並んでいる。その中には先ほど綾香に眼鏡を手渡していた女性の姿もあつた。

「あ、あの子」

そのことに田之上も気がついたらしい。「やっぱり予選通過したんだね」

「早苗ちゃんつて言うんよ」

顔をほころばせ綾香が言う。「彼女、死ぬほどサバイバルゲームを観に行きたかつたらしいっちゃけど、ミスコンがあるけん行けんかつたんやつて。やけん、私がここに来た時嬉しくてしかたがなかつたらしくてさ、何か力になりたいつてこの変装道具を貸してくれ

たんよ」

両手で眼鏡のテンプルをつまむ。詩織は「ふーん」とつまらなさそうに言った。

「綾香ちゃん」

田之上が小声で綾香に話しかけた。綾香と同時に詩織も田之上の顔を見る。「ちえ美ちゃんが来た」

「え？」

後ろを振り向き、『あつ！』という表情を見せる綾香。詩織も背後を見る。確かに後方で客席を縫って歩くちえ美の姿が確認できる。風も冷たくなってきたというのに、学内放送で言っていたとおりピキニのみを身に着けており、手にはしっかりと水鉄砲を装備している。彼女の更に後方で、大勢の観客が息を潜めるようにして立っているのも見える。ただ、彼らもちえ美も、綾香がどこに座っているのかまでは見当がついていない様子である。

「見つかるからあんまり見ないほうがいいよ」

そう言ってからステージに目を向ける田之上。「さつきから司会者の様子が変だなーって思ったんだ。意味もなく頷いたり……。それで、なんとなく後ろを見てみたらちえ美ちゃんを見つけた。多分、ちえ美ちゃんがシートでやって」

口元で人差し指を立てる。「司会者を黙らせてたんだよ」

「くそー」

司会者を睨みつける綾香。「あいつ、ちえ美派やったんか」

「とりあえず、綾香ちゃんはこのまま知らんぷりしてたほうがいいと思うな」

田之上が言う。「会場にいた人たちが、裏切って綾香ちゃんの居場所を教えさえしなければ、さすがにもう逃げ切れるよ」

そしてまた腕時計を見やる彼。「あと五分だし」

「すでに司会者に裏切られとるやん」

唇をとがらせる綾香。

「あんたなら裏切られる可能性もあるかもねー」

そう言いながら、詩織はなんとなく例のミスコン参加者、早苗に注目していた。少なくとも変装道具を貸してくれた彼女なら裏切ることはないだろうなと思う。しかしその時、早苗の手が小さく動いた。人差し指でこちらを指差したのだ。

あれ、今のつて……。ちえ美に綾香の場所を教えたわけじゃないよね？

ちえ美の様子を確認しようとする詩織。しかし、後方にちえ美の姿はない。

「みーつけた」

その声は突然、綾香のいる方向から聞こえた。「え？」とそちらを見る詩織。すると、綾香のすぐ横でちえ美が水鉄砲をかまえて立っているのが目に入った。次の瞬間、詩織の目元を水が触った。

「ぶはっ！」

顔を押さえて立ち上がったのは綾香である。どうやら攻撃を食らったらしい。そのまま猛スピードでその場から逃げ出す。彼女の後ろを「待てー！」とちえ美がビキニに包まれたお尻を揺らしながら追いかけていく。詩織と田之上は呆気に取られたように、二人の後ろ姿をぼうつと見つめていた。

「見つかったね」

田之上が言う。詩織は「うん」と答え、またポップコーンを口に入れた。

《えー、アイドルのお二方。ここでのバトルはけっこうですが、ステージには上がらないようお願いします》

司会者がそう注意を促したところで、それまで少しづつざわつき始めていた観客たちが一気に沸きかえった。サバイバルゲーム、最後のバトルの幕開けである。

## 9 1 謎の大逆転

パイプ椅子の間を小動物のようにピョンピョンと跳ねながら逃げ回るチロリに向けて、ちえ美が幾度となく水鉄砲を発射するが、なかなか当たってはくれない。今のところ三発ほど命中したであろうか。ダメージポイントの差はまだまだ大きい。

「コラー！ 止まれ、クソチロリー！」

清纯アイドルだと聞いていたが、とてもそうには見えない言葉を吐くちえ美。また引き金を引くも。

「やだよー！ こっちおいでー！」

あっさりとチロリにかわされてしまい、客席に座るミスコン参加者と見られる女性に誤爆。ちえ美が彼女に平謝りする間、チロリは余裕からか足を止める。意味不明なポーズを決める（おそらく挑発だ）。やがて、追いかけてこが再開する。

橘川は「くそ」と唇を噛んだ。彼はミスコン会場の客席の後方に、ちえ美の支援者たちに混じり、立ち尽くしていた。手には水の入ったペットボトル。しかし、水鉄砲の燃料よりも先に時間が尽きてしまう。

「残り二分ですね」

またどこからか現れた貴美が無表情で言った。「チロリさんが転びでもしてくれない限り逆転は不可能ですよ。でも足をかけたりするのはもちろん反則だと思います。人道的に……」

「分かってるよ！」

いつになく声を荒げてしまう橘川。そして、何か自分にできることはないかと考えるも、何も思いつかない。

もう無理なのか。チロリちゃんの罰ゲームはあきらめるしかないのか。

「決まりですね」

背後から優越感溢れる声。振り向いてみると、そこに藤岡が立つ

ていた。手に水鉄砲を持っている。「一応水を入れてきましたけど、もうこれを手渡す必要はないでしょう」

その時、客席からガタンと音がした。三人の秀英祭ツアー実行委員が同時に音がした場所を見る。二、三脚のパイプ椅子が倒れているのを認め、橋川は少し期待してしまう。

こ、転んだのか？

しかし、次の瞬間に期待は絶望へ。チロリは相変わらずピンピンと走り回っており、ちえ美は例のパイプ椅子が倒れた場所でひざまずいている。どうやら、転んだのは彼女らしい。

「藤岡さん」

あろうことがチロリがこちらにやってきたではないか。遠目でも薄らと確認できてはいたが、変装用なのか眼鏡をかけている。「水鉄砲貸してよ。私も攻撃したい」

「はあ？ そんなことしなくても、もう決まりだろうが」

うんざりとした口調で藤岡は言う。いつの間にか二人はタメ口で話す間柄になったようである。橋川はモヤモヤと湧き上がる嫉妬にかられた。

「そのとおりです」

貴美がそう言っただけ、他の三人が彼女に注目する。「あと十秒ですね。今のところ、チロリさんのダメージポイントが十一、ちえ美さんは二十六……。あ、そんなことを報告してる間に……」

キーンコーンカーン、とチャイムが鳴る。

《これにてサバイバルゲーム終了おお！》

はあと溜息を吐き、うなだれる橋川。チロリが「えー、もう終わりー！？」と上空に向けて尋ねる。《はい、終わりです》

聞こえてはいないはずなのだが。《只今ダメージポイントの集計中です。結果発表まで皆様、今しばらくお待ちください》

「集計するまでもないだろ」



ふんと鼻を鳴らしてから、藤岡はチロリに向けて右手を差し出した。「とりあえずはやったな。なかなか楽しかったぜ」

「私も」

チロリも右手を出し、二人はガツチリと握手を交わした。その光景を見て、橘川の心は更に落ち込んでいく。彼は助けを求めるようにちえ美に視線を移した。すると、先ほどまでちえ美がひざまずいていた場所に彼女の姿がない。

「橘川さん」

名を呼ばれ、そちらに顔を向ける橘川。ちえ美もすぐそばにまで移動してきていた。彼女の様子を前に橘川は意外に思った。彼女が予想外に晴れやかな表情を浮かべていたからである。「負けちゃいましたけど、橘川さんとパートナーになれて良かったです。罰ゲームは……。なんとか頑張ります」

ニコリと微笑むちえ美。

「ちえ美さん……」

橘川は思った。内藤ちえ美……。彼女もまた魅力的なアイドルなんだな。

そして今日、彼女と力を合わせて戦ったことを一生忘れないでおこうと心に誓うのであった。

「おー」

そう言っただけ目を丸めたのは皆岡であった。隣にはちえ美と同じくまだビキニ姿の亜佐美が。亜佐美チームもこの場に来ていたらしい。「大田のやつ、予選突破したんだな」

皆岡の目はミスコンのステージの上に向いていた。彼の視線を追う橘川。なるほど、三十名ほどの着飾った女子生徒が横並びに立っており、その中に早苗の姿も見える。彼女はこちらに向けて手を振っていた。おそらく、今壇上にいる生徒は予選を突破した者たちなのである。

あちゃー……。明日も秀英祭ツアーのガイド確定か。

早苗が予選落ちしたらガイドを代わってもらえるという条件であった。それでも橘川は嫌な顔をせず、手を振り返した。早苗の予選突破は覚悟していたのだ。いや、グランプリだってありえなくはないと思っっている。

「あ、早苗ちゃんと知り合いなん？」

チロリが言った。「いやー、この眼鏡、変装用に早苗ちゃんに借りたっちゃけど、私にピッタリなんよー。なんか返したくないなー、なんちゃって。ちゃんと返すよ」

そういえばあれだけ動き回っていたのに眼鏡はほとんどずれていなかった。

「ふーん」

同じく眼鏡をかける藤岡が、自身の物のフレームを持ち上げながら言った。「早苗に借りたのかー。サバイバルゲームのこと話した時、あいつめちやくちや目輝かせてたからな。些細なことでも協力したかったんだろ……。ん…………？」

そこで真剣な顔つきになり、何やら考え込む。「き、協力…………？」  
「あっ！」

ハツとした顔で皆岡が叫ぶ。藤岡と顔を見合わせ頷く。

彼らの顔を交互に見る橘川。はつきりいつて意味がわからない。何か問題でもあるのであろうか？

「どうしたん？ 二人とも、様子がおかしいばい？」

チロリ、そして他の二人のアイドルもキョロキョロと顔を動かす。彼女たちも橘川と同類のようだ。

早苗ちゃんがチロリちゃんに協力……。それがいったい……。  
「あっ！」

ようやく橘川のもとにもそれは舞い降りてきた。それから反射的に貴美を見る。アイドルたちを含む他の者も、皆、貴美を注目していた。

「うん……。うん、じゃあそうゆうことで」

貴美は携帯電話にて誰かと通話中であつた。電話を終え、パタンと携帯を閉じる。彼女の一挙手一投足から目が離せない。「みなみちゃんに集計結果を伝えました。いや、私としてもこんな結果になるとは予想が付きませんでしたね」  
そう言つてニコリと笑う彼女。

キーンコーンカーン。

《ただいま集計が終わりましたー！ 最後の最後で大逆転ですよー。これだからサバイバルゲームつてのは面白いですよー》

チロリがその放送を聞き、「ん？」と眉をひそめる。橘川は彼女の顔を見つめていた。《亜佐美さん三ポイント、ちえ美さん二十六ポイント、そしてチロリさん三十一ポイント。よつて罰ゲームは綾川チロリさんに決定です！》

「な、な、な……」

両方の手の平で頬を挟み込むチロリ。「なぜーええっ!？」

ムンクの『叫び』になつてしまう彼女であつた。

## 92 スモールマジック

昭和院大学昭和院競技場、『プリンセス雅マジックショー』特設ステージ。椅子はなく、客は皆立ち見である。真一と彼の悪友的場は、その立ち見席のステージからかなり離れた後方部分に陣取っていた。

「おいおい」

呆れた口調での場が言う。「こんなところからじゃ、マジックなんて全く見えねえんじゃねえの？ どうやったか分からない、っていうより何をやったか分からないって感じだぜ」

「んなこと言ってもよ」

わしわしと頭をかく真一。「開演時間直前に会場入りしといて良い場所を取るうなんて、さすがにムシが良すぎるだろ」

ステージから近い、絶好の場所に立つ客たちの後ろ姿を眺める。当初の予定では自分たちがあそこにいるはずであった。

では、なぜこんなことになってしまったか。理由は単純明快である。プリンセス雅が開演直前、つまりたった今まで、キャンパス内でのゲリラライブを続けていたのだ。真一は早めに会場入りして良い場所を確保することより、ゲリラライブを見物することを優先させた。しかし……。

はあ、やっぱり早く会場入りすべきだったな。

真一は大きく溜息を吐き、肩を落とした。結局ゲリラライブもまともに観ることができなかつたのである。雅の出没情報を仕入れ、急いでその現場へ向かい、辿り着いた時には、すでに雅のショーはお開き、とその繰り返しであった。

「もう、あっちに行かねえか」

的場が口元をいやらしくにやつかせる。『あっち』とは秀英大学のことであろう。「チケット代は惜しいけどよ、どっちにしてもまともにマジックなんて観れねえんだし」

秀英大学で綾香たちアイドルによる水鉄砲を使ったサバイバルゲームが行われ、アイドルたちが次々とビキニ姿になつていてという情報を得た時から、的場はずっとそちらへ足を運びたがっている。真一も気にならないといえば嘘になるが、それでもやはり雅のシヨ一のほうが重要だ。それに……。

「今更行つても遅いだろ」

真一はポケットから携帯を取り出し、時刻を確認した。空はまだなんとか明るいのもの、午後五時を回つたところである。トクシヨ一は六時スタートのはずなので、そろそろサバイバルゲームも終了する頃だろう。

「サバイバルゲーム行つてきたぜ」

真一たちの背後でタイムリーな話題が出る。そちらに顔を向けず、真一と的場は聞き耳を立てた。「滝田亜佐美がチヨ一すげえの、動くたびに胸がゆっさゆっさ揺れてさ。パンツもめっちゃ食い込んでたし、写メ撮つたけど見るか？」

「おお、すげえ。それってまだやってんのか？」

別の男が尋ねる。

「五時までって言つてたな。最後までは観てねえけど、あのままいけば内藤ちえ美が罰ゲームだな。ビキニ姿で一発ギャグ、観たかつたな」

俺も観たかつたなと思ひながら真一は。

「ほらよ」

的場の腕をひじで突く。「もう終わったんだとさ。おとなしくマジック観んぞ」

チツ、と的場が舌打ちをした時、ステージがパツと明るくなった。

下からの照明でライトアップされた、だだっ広いステージ。目につくものは特にない。後ろ側はただの板張りのようで、『プリンセス雅マジックシヨ一』という文字だけが見える。屋根はない。ステ

ージの脇には舞台袖といった感じの死角があり、その近くに数人の関係者らしき人物が集まっている。

《大変お待たせしました》

マイク片手に、舞台袖から姿を現したのはプリンセス雅ではなく、タキシードに蝶ネクタイという出で立ちの若い男性であった。おそらく昭和院大生で、彼が司会進行役なのである。《ただいまより、昭和院大学学園祭今年最大のイベント、『プリンセス雅マジックショー』を開催させていただきます！》

地鳴りのような拍手と声援。真一はたじろぎ、思わず耳をふさいだ。《いやー、今日は屋外でのステージということで、雨が降ったらどうしようかって感じてはしたけど、無事晴れてくれて良かったですねー。昨晚、窓辺に居る坊主を下げておいた甲斐がありました。で、これがその居る坊主なんですけど……》

懐から居る坊主を取り出す。遠目でよくは見えないが、その居る坊主には違和感があった。頭の上に黒い物体が乗っているのだ。プリンセス雅にあやかり、小さいシルクハットでもかぶせてんのかな、と真一は予想した。とその時。《え？》

話を止め、司会者はすつとぼけた顔を見せた。《そんな話はどうでもいいからさつさと主役を呼べですって？ 失礼しちゃうなー。

彼女ならちゃんと皆さんの目の前にいるじゃないですか》

どよめく観客たち。しかし本心では皆、自分と同じ思いなのである。さつと真一は思った。

さつそく始まったな……。

司会者は居る坊主にマイクを当てた。やがてそのマイクをとおして（かどうかは不明であるが）居る坊主が喋り始めた。

《皆、長らくお待たせして悪かったね》

無論、雅の声である。《頭にかぶったシルクハットを見てもらえば分かると思うけど、実は私がプリンセス雅なのだよ》

やはり、シルクハットであつた。《私はシャイだから、いきなりステージ上がるのは緊張するんだ。だからまずはてるてる坊主くんの身体を借りて皆の前に登場させてもらったよ》

ふわつとてるてる坊主が司会者の手から離れ、浮き上がった。司会者の頭の上でくるくると回つた後、上空で静止する。

「真一よお」

名を呼ばれ、真一はステージからの場へと視線を移した。「俺、なんだか頭痛くなつてきちまつたよ」

「馬鹿」

真一は苦笑した。それからまたステージに視線を戻す。「あんなもん糸かなんか使つて操つてんだろ」

そう言いながらも、実は納得などしていない。屋根はないのだ。

《でも、ずっとこのままつてのはちよつと寂しいかな》

てるてる雅は言う。《皆は実物の私を観に来てくれてるんだもんね。じゃあ、ちよつと待つて、今本体を呼び寄せるから》

その瞬間、こと切れたようにてるてる坊主がステージの床にポトリと落ちた。司会者がそれを拾い上げる。真一は固唾を呑んでステージの上を注目し続けていた。

《ただのてるてる坊主に戻つたみたいです。ほら、シルクハットがなくなつてゐる》

司会者にそう言われて真一もようやく気がつく。確かに、てるてる坊主の頭の上にあつた黒い物体が消えている。

「全然見えねえよ」

駄々をこねるように的場が言った。「あんな細かいことされても前のほうのやつじゃないと分かんねえよなあ」

「確かにな」

真一は頷く。「もともとプリンセス雅のマジックつて、トランプとか使つたり、けつこう細かいやつが多いから、しかたねえよ」

そう言つた矢先である。背景の板がぐらぐらとぐらついたりと思つと、女性客の短い悲鳴を合図になんとステージ側へゆっくりと倒

れてきたではないか。《うわー》と叫び声を上げる司会者。派手な音もなく彼が板の下敷きになると同時に、ステージからもくもくと煙が立ち上がった。

ざわざわと控え目に騒ぐ周りの観客たちと同じように、不安そうなた目つきでステージを見つめる真一と的場。しかし、すぐに真一は口の端を曲げる。ステージを隠すように立ち込める煙がやたらと人工的なものだったからである。

やがて煙の向こうに人影が見える。煙が薄れ、その人物の姿が鮮明になるにつれて、観客たちがまた歓声を上げ始める。タキシードに身を包んだ髪の長い少女。頭にはシルクハット。姿を現したのはもちろん、プリンセス雅であった。

《たまにはこんな大がかりなこともやるんだ》

マイクを手に彼女は言った。小さな笑いが巻き起こる。まるで自分たちの会話を聞かれていたかのようだなと真一も苦笑した。《さて、これからが本番なわけだけど、まずは……》

先ほどまでは背景だった床の一部分を指差す。司会者が下敷きになったあたりであるが。《彼を救出しなくっちゃね》

笑いが大きなものへと姿を変え、パチパチと拍手がこだました。

真一と的場も無意識のうちに手を叩いていた。



### 93 笑顔の裏に

秀英大学大講堂の控え室。あと四十分ほどでいよいよトークショーが始まる。

「ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

そう言っただけで頭を下げるのは、見事ミスコンで予選突破を果たした秀英祭ツアー実行委員長の早苗である。彼女の目の前にはふて腐れたように唇をとがらせ、腕を組むチロリの姿があった。上に秀英祭公式のティーシャツを着ており、下は元のままのホットパンツである。先ほどまでかけていた眼鏡は早苗の顔に移動している。

「ま、まさか秀英祭ツアー実行委員に協力してもらったら反則だなんてルールがあったとは……」

力なくうなだれる早苗。ソファに座る亜佐美が「気にしないでいいですよ」と早苗を慰める。チロリと同じように秀英祭公式ティーシャツを被っている。下はビキニのみだ。

「早苗さんは知らなかったんだからしかたがないよ。チロリがむやみやたらに協力を仰ぐのが悪い」

キツと亜佐美を睨みつけるチロリ。

「でも、眼鏡貸してくれるって言い出したのは早苗ちゃんばい！」

「チロリさんが来てテンションが上がってしまったって」

早苗はテヘへと鼻をかいた。「何かお役に立てればなーと思ったんです」

「でも」

ビシッと早苗を指差すチロリ。「ミスコン会場に私が潜伏した時、あんた、私の居場所をちえ美ちゃんにこっそり教えたらしいやん！ 友達が教えてくれたんよ」

「せつかくだからバトルも観たかったんで……」

やはり、悪びれる様子もなく早苗がそう言っただけのけると、その場の空気はシーンと静まり返ってしまふのだった。

「でも、どうなんでしょ」

疑問を投げかけたのはちえ美である。やはり公式ティーマンビキニパンティという姿。「ある意味チロリちゃんは被害者ですよ。今回のケースはペナルティに該当しないんじゃない……」

男らしい態度である。そうなれば罰ゲームは自分に降りかかってしまうのだ。ちえ美は、答えを壁際に立つみなみに求めた。うーんと眉間にしわを寄せるみなみ。

「該当すると思いますね」

そう断定したのはみなみはみなみでも、チロリのマネージャーだというスキンヘッドのグラサン黒スーツ男、南であった。顔に似合わずやけに高い声で話す。橘川は正直、彼のそんな喋り方が苦手であった。「今回の罰ゲームはサバイバルゲームと合わせてテレビでも放送する予定です。となると視聴者が最も納得する答えを出さなくてはならない。みなみさんはルール説明の時、『パートナー以外の秀英祭実行委員の協力してもらおうのは反則』とはつきり言っていますので、たとえチロリの意思ではないにせよ、早苗さんに協力してもらったのは事実ですから、反則は反則だと思います」

テレビか……。

思えばゲームの途中から全くカメラの存在など気にしてはいなかった。自分はどのように映されているのだろうと橘川は想像する。

後日のテレビ放送が半分楽しみであり、半分不安である。

「分かったよ！ やればいいっちゃる」

ヤケを起こしたようにチロリは手に持っていたハットを床に叩きつけた。「結局陰謀やったんよ。最初から私が罰ゲームになるって決まっとったっちゃん！ 早苗ちゃんも実は知っててわざと私に協力したっちゃない!?」

「そ、それは違います」

慌てて首を振る早苗。「あ、でも誰の罰ゲームが見たいかって言

われたら、やっぱり一番はチロリさんかも……」

言葉をなくしてしまうチロリ。また辺りの空気がおかしくなる。ひよっとしたら早苗はいわゆるKYなのかもしれないと橘川はようやく気がついた。

「橘川さん」

近くに立っていた藤岡に声をかけられる。濡れたスーツをそのまま身にまとっている橘川に対し、彼はスーツを脱ぎ捨て、これまた秀英祭公式ティーシャツとスウェットのハーフパンツに着替えていた。「プリンセス雅のマジックショーが始まったみたいですよ」

携帯の液晶に目を落としながら彼は言う。「セットを破壊するなど大がかりなマジックで大盛り上がりだそうですね。このままじゃヤバイですね」

「そう……」

その大がかりなマジックショーを想像してみる。なるほど、盛り上がらないわけがない。「まあ、俺たちの役目はサバイバルゲームまでなんだから、あとはトークショーの実行委員に任せるしかないよ。やることはやったんじゃない？」

「でも、黙って指くわえて見てるだけっていうのも……」

腕を組み、しばし唸った後、藤岡は「あっ！」と顔を輝かせた。

「アイドルたちのビキニにこっそり切れ目を入れておくってのはどうでしょう。しりとり野球拳の最中にポロリハプニングで観客たちもヒートアップですよ」

「そんなことしたらあの人に殺されるかもしれないよ」

そう言いながら橘川は南に視線を向けた。すると……。 「ん？」  
部屋の隅で南が何やら女性と話し込んでいるではないか。そして、すぐにその女性が控え目女子生徒の貴美だということに気がつく。

「あれ？ あいつ、何話してるんでしょうね」

藤岡も気がついたらしい。橘川は「さあ」とだけ答えた。

やがて、南との会話が終わったのを見計らい、二人で貴美に話しかけてみた。

「橘川さん、藤岡くん、お疲れさまでした」

ニコリと笑う貴美。彼女は笑うと本当に魅力的だなと橘川は思う。「トークショーでは最前列の席が用意されていますので、存分に楽しみましょうね」

「ああ、ところで」

代表して気になっていたことを尋ねる藤岡。「今、あのマネージヤーの人となんか話してたよな。なんの話してたんだ？」

「ああ」

無表情で頷いてから、貴美は言った。「スカウトを受けてたんだ。アイドルとしてデビューしてみないかって」

「えっ!？」

同時に声を上げる橘川と藤岡。橘川は意外に思った。確かに貴美も美人と言えなくはないが、アイドルとしては華に欠けるような気がしたからだ。どちらかといえばそう、早苗のほうがアイドルに向いているのではないか。

「な、なんでお前なんか!？」

失礼なことをストレートに口にする藤岡。しかし、貴美は特になんとも思っていないらしく、平然と「さあ」と答えた。

「私も同じ質問を南さんに見ただけで、『君は内に大いなる魅力を秘めている』だって。一度は断ったんだけど、もう少し考えてくれて言うから」

「じ、じゃあ、受けたの？」

今度は橘川が尋ねる。貴美はふるふると首を振った。

「保留です。でも、私はそんな華やかな舞台に立つより、ひっそりと読書でもしながら生きていくほうが自分でも合っていると思いますので、おそろく断ると思います」

そしてまた笑う彼女。少なくともこの笑顔の裏には大いなる魅力を感じてしまう橘川であった。

## 94 再会は突然に

詩織と田之上は大講堂の正面玄関を抜けたすぐ脇にある喫煙スペースにいた。トークショー開始まで残り三十分を切っており、すでに多くの者がホールの中へと消えてしまった。早めに入場しておかないと、良い席を確保することができないからであろう。しかし、詩織たちは一向に喫煙スペースのベンチから腰を上げない。それにはもちろん、理由がある。

「いやー、言ってみるもんだね」

田之上が缶コーラを手に微笑む。「まさか最前列のゲスト席を用意してもらえらるとは」

「まあね」

ベンチのひじかけに頬づえをつきながら詩織が答える。「せつかく来てやったんだから、それぐらいはやってもらわないと」

綾香の友達ということでの特別処置である。よって二人はいつ入場しても最前列に陣取ることができるわけだ。

「さてと」

缶コーラを飲み終え、ベンチ脇の空き缶入れに缶を捨てる田之上。「そろそろホールに入ろうか。詩織ちゃんはなんか飲んでおかないの?」

ホールは飲食禁止なのである。

「ううん。別にいい」

そう言いながらも詩織は立ち上がるうとしない。田之上は戸惑った。

「どうしたの? それなら早く行くつよ」

「うーん」

眉をひそめる詩織。「なんかこのままトークショーを観ちゃうと、まるで綾香を許したかのように感じるんじゃないかと思うんだよね。だから今、どうしようか悩んでるところ」

「まだ許してなかったんだ」

田之上は苦笑した。「いい加減にしながら。まさかここにきて帰るなんて言わないでよ。楽しみにしてたんだから」

「うん……」と詩織。

「じゃあ、許すか許さないかは別としてトークショーは観ることにする。田之上くんにも悪いしね」

そして立ち上がる。しかし、それに続こうとする田之上を「待つて」と手で制する。「その前にやっぱ私もなんか飲む」

田之上はまた苦笑した。

自動販売機にて田之上と同じく缶コーラを購入し、詩織はベンチに戻った。コーラを一口飲み、ふうと息を吐きながら、ぼうつと辺りを見回す。

六畳ほどのそれほど広くはない喫煙スペース。自動販売機が二台あるが、共に煙草のものではない。ベンチは他に一つだけあり、若い男性が腰かけて煙草をふかしている。彼はホールに行かなくていいのだろうかなどと考えていた時、別の男がこの場に足を踏み入れてきた。

「あつ」

その男の姿を見た途端、詩織は驚いて口をポツカリと開いた。男は前に綾香と渋谷を歩いている時話しかけてきた、スカウトマンだったのである。見間違えるはずはない。スキンヘッドにサングラス、黒スーツと、その時と全く同じカタギではないナリをしている。

もう自分のことなど覚えてはいないだろうと詩織は考えたが、予想に反し男は、口元に笑みを浮かべてこちらへと近づいてきた。

「まさかこんなところでお会いできるとは……」

胸ポケットから煙草の箱を取り出し、彼は太い声を響かせた。「チロリの友達というのはひょっとして詩織さんのことですか？」

え……？

そこでようやく詩織は思い出す。

そうだ。そういえばこの男は綾香の所属事務所、SDPのスカウトマンだったんだ。

「し、知り合い」

男の異様な外見に圧されたか、田之上は顔を強張らせていた。

「綾香の事務所の人だよ」

詩織がそう紹介すると、男がまた胸ポケットに手を入れた。しかし「ん？」と眉を曲げ、すぐにポケットから手を出す。

「名刺は忘れてしまいましたか」

改まった調子で男は言う。「SDPの南吾郎という者です。今はチロリのマネージャーをしています」

そして「失礼」と言いながら、詩織の隣にドンと腰を下ろした。

ベンチを詰める詩織と田之上。「いやー、詩織さんと顔を合わせる今でも未練を感じてしまいますね」

「未練ですか？」

詩織は目を丸めた。その言葉の意味がよく分からない。

「はい」

煙草に火をつけながら南は頷いた。「もともと俺はチロリではなく、詩織さんをデビューさせたかったですよ」

え……？

二人の注目を浴びる中、南は美味そうに煙草を吸った。

「と、いうことは……」

南の話を聞き終え、詩織は複雑な表情で口を開いた。「綾香が私をデビューさせたがってたのは、事務所に雑用として雇ってもらいたいから……。つまり、生活のためだったんですか」

「ええ」

煙草（二本目である）を口にくわえ、ふつと紫煙を吐き出す南。

「少々やりかたが汚かったので、詩織さんを怒らせてしまったよう



ですが、まあ、アイツなりに必死だったんです。許してやってください」

思わず南から田之上に視線を移す詩織。彼は何かを期待するように目を輝かせて詩織を見つめていた。

「で、でも……」

唇をとがらせる詩織。「いくら生活のためだからって、私を騙そうとしたのは確かだし、やっぱり許せない。っていつか今私が怒ってるのはドタキャンのことだし……」

「アイツは少々不器用なところがありますからね」

ベンチ前の灰皿で煙草をもみ消し、南は言った。「少なくとも悪気があつたわけではないのです」

詩織は黙り込んだ。コーラをグイッと飲み干し、ゲップを我慢しながら缶を捨てる。

『悪気があつたわけではない』

それは彼女としても充分承知していることである。

「まあ、許すか許さないかはトークショーの後に決めるとして」

ベンチから腰を浮かせながら田之上が言う。「もうぼちぼち時間になるよ。早く行かなきゃ」

「う、うん……」

詩織も腰を上げたところで、南に「詩織さん」と引きとめられる。田之上と共に詩織は振り向いた。

「もしデビュ―したくなったらいつでも声をかけてください」

ニヤツと不気味な笑みを浮かべる南。「事務所としても最大限にプッシュしますよ。チロリのようにね」

「遠慮しときます」

詩織も微笑み、そう断ってから、「それでは失礼します」とまた南に背を向け喫煙スペースを後にした。

ホール内はすでに照明が消されていたため、詩織と田之上は若干焦りながら、最前列の自分たちのために用意されたゲスト席を探した。すぐに二つ並んで空いている席を発見し、詩織はその隣に座る人物に「綾川チロリの友達の矢上ですけど、ここ座っていいですか？」と質問した。

「聞いてます」

屈託のない笑みを浮かべたのは、やや派手めな化粧をした少女である。どこかで聞いた声だと思ったのは気のせいであろうか。「どうぞ、お座りください」

暗くて詳細は分からないが、髪も明るいい色に染めている。秀英祭のはつぴを着ているので彼女も実行委員なのであろう。

詩織と田之上は席に腰かけ、ふうと次々に息を吐いた。

「すごいねー」

ホール内のあちらこちらを落ち着きなく見回しながら田之上が言う。詩織はその言葉の意味について考えてみた。二通りの候補があるからである。

まず一つ。このホール自体がすごい。三千人近くを収容できるといふ広さもさることながら、照明機材や音響機材の豊富さも一大学の講堂とは思えない。二人が座っている席も映画館のそれと何ら変わりがない。

そして二つ。二人の位置がすごい。最前列ということ、舞台から非常に近く、しかも真正面であり、後々姿を現すであろう綾香たちの細かい表情まで観察することができそうだ。

「フフ、なんか」

詩織は苦笑して言った。「綾香の友達ってだけでここまで良い待遇受けるのも悪いね」

「友達？」

すかさず田之上が意地悪な笑みを浮かべる。「やっぱり許すことにしたんだね」

詩織は彼を無視し、じつと舞台を見つめ開演を待った。

キーンコーンカーン、と学内放送と同じ気の抜けたチャイムが鳴り響く。

《今日は秀英祭に足をお運びいただき、そしてチケットをお買い上げいただき、誠にありがとうございます》

男性の声である。《ただいまより、アイドルお三方をお招きしてのトークショーを開催いたします!》

ホール内に拍手の音が満ちる。二人も事務的な拍手をする。《と、その前に……。先ほどのサバイバルゲームで最下位だったアイドルさんの罰ゲームをとり行います》

「トークショーの最中じゃなくて、トークショーの前にやるんだね」田之上が小声で言った。「そうみたい」と返事をする詩織。

《ご紹介しましょう! サバイバルゲームで見事最下位に輝いた綾川チロリさんです!》

舞台上に照明が浴びせられる。やがて、拍手と歓声に迎えられ、舞台袖から白いビキニ姿の綾香が一人で普通に歩いて出てきた。頭にはお馴染みの白いハットも被っている。緊張しているのか、はたまた疲れているのか、その顔は限りなく無表情に近い。もともと色白な肌が照明のおかげで更に白く映えて見えた。彼女は詩織たちに目を向けようとはしなかった。ひょっとしたら二人の座る位置を把握していないのかもしれない。

《こんばんは》

マイク片手に話し出す綾香。《サバイバルゲームの不可解なルールに破れた綾川チロリです。チロリンって呼んでね》

左手を腰、マイクを持つ右手をチヨキにして額へ。観客たちから失笑が漏れ、『コホン』と咳払いをする。罰ゲームをする前から空

気をおかしくしてどうするんだ、と詩織は思った。《えーっと、ビキニ姿での一発ギャグということ……》

ポリポリと頬をかきながら綾香は続ける。《悩んだ末、親友にささげる一発ギャグをしたいと思います》

客たちからどよめきの声上がる。詩織と田之上は顔を見合わせた。

「だつてさ」

そう言つて微笑む田之上。詩織は頷くだけ頷いておいた。

《えーっと、実は前に親友にひどいことをしてしまいました、それをちゃんと謝つていなかったので、今回はこの場を借りて一発ギャグでキチンと謝ろうと思つたわけであります》

一発ギャグで謝るといふのはキチンとしているのか？ と詩織は疑問に思ったが、とりあえず聞いてやることにした。《ではいきま  
す》

左手で拳を作り、それをあご付近に当てる綾香。

《ひげ剃り！》

続いて左手を腰に当て、上半身を後ろに反らす。《仰け反り！》

そして今度は左手をひざの上辺りに付け、上半身を逆に前へ倒す。要するにお辞儀である。《アイムソーリー！》

……。

しばしの間、ホール内が神秘的な無音に支配される。《あ、あの

……。『そり』と『ソーリー』がかかつてまして……》

その綾香の弁明と時を同じくして、観客たちのざわつきが始まる。詩織と田之上は生気が抜けたように、無言で事の成り行きを見つめていた。

ざわざわ……。《いや、ですから、『そり』と『ソーリー』……》

ざわざわ……。《ソ、ソーリー……》

「詩織ちゃん」

突如、田之上が口を開いた。彼の横顔へ視線を移す。「そろそろ許してあげなよ」

私のせいじゃないもん！

《えーっと、とにかく私の気持ち、受け取ってくれましたでしょうか、詩織》

「えっ？」

突然名前を呼ばれ、詩織は驚いて綾香の顔を見る。すると、綾香もこちらを一直線に見つめているではないか。

《本当にゴメン。本当に反省してるんよ》

観客にはなく、詩織個人に語りかけるような調子である。《もし許してくれるんなら、黄色いハンカチを頭の上に》

左手を頭の上にかかげる。《こっやって広げてほしいな》

また観客のどよめき。詩織たちの周りに座る数人は、綾香の視線から『詩織』がどの人物を指すのか理解している様子である。

き、黄色いハンカチ……。

決して何かのパロディではない。詩織が以前より愛用しているハンカチの色が黄色だということを綾香も知っているのだ。

急いでハンドバッグの中を探る詩織。田之上を始め、近くの観客は皆、彼女を注目している。もちろん、彼女の心は決まっていた。

もういいんだ。私だって、綾香がそばにいなくてすごく寂しかった。気づいてたのに、ずっと気づいてたのに……。

ようやくハンカチを発見する。詩織は急いでそのハンカチを広げ、両手で頭の上にかかげてみせた。

……。

ん？

しばらくして異常に気がつく。舞台上の綾香が何の反応も示さず固まったままなのだ。隣の田之上の様子をうかがってみるが、彼も同様である。詩織は自らが広げているハンカチを正面から覗き込ん

でみた。

「あ……」

黄色だと思っていたそのハンカチは実は白で、おまけにでかか  
と『NO!』という黒い文字がプリントされていた。それは詩織の  
セカンドハンカチーフだったのである。「いや、これは……」

すかさず綾香に顔を向けると、彼女はしょんぼりと肩を落とし舞  
台袖に消えていくところであった。

《さよなら詩織……》

慌てて立ち上がる詩織。舞台に歩み寄りながら彼女は叫んだ。

「違っつてば！ ちよつと待て、バカー！」

かくして、三ヶ月以上にも渡った親友同士の確執は幕を閉じたの  
である。

会場は静まり返っていた。雅の指示もあり、観客全員が背景のなくなったステージの奥、広くポツカリ開いた夜空に注目している。真一と的場も例外ではない。

《それじゃあ、準備はいい？》

雅がステージから降りて、観客に混じる。観客と同じ視点から彼女も空を眺めるつもりなのである。《それじゃあ、よい……。スタート！》

彼女の合図と共に、ヒュウと音を響かせながら、夜空のキャンパスに一つの線が下から上へと引かれていく。やがてその線が衝撃的で、それでいて心地よくも感じる爆発音と共に上空で八方に弾けた。そう打ち上げ花火である。

「すげえ！」

「うわ、当たってる！」

観客たちから次々と驚喜の声が上がる。パラパラと星が飛散した後、夜空にぼんやりと煙でできた文字が浮かび上がったのだ。文字が記すのはアルファベットの『A』。エースのAである。

ちよこまかと素早い動作で再びステージに上がる雅。煙の文字はまだ薄らと残っている。

《見えるかな？》

自身の後方を指し示す雅。《どう見ても『A』だね。つまり、君たちが想像した数字は『1』だ。どう？ 凶星でしょ？》

「う、うわー！」

近くで誰かが突然大声を上げたため、真一は驚きビクツと震えた。この野郎、とその人物を睨みつけた途端、はあと溜息を吐く。的場であった。「やべえよ！ 当たってるよー！ 俺、思いつき『1』想像しちまったもん！ あいつ、魔女だよ絶対」

「お前はマジシャンに優しい客だな」

真一は呆れた表情でポリポリと頭をかいた。「トリックがあるに決まってるんだろ。全員が『1』って想像できるような……」

「どんなトリックだよ」

今にも泣き出してしまいそうな顔での場が尋ねる。どんなトリックかと聞かれても、真一も明確には理解していない。

「とにかく……。トリックなんだよ！」

《皆も知っているとおおり、昭和院大学の学園祭は毎年、お隣の秀英大学の学園祭とどっちが盛り上がったかなんて競い合っているわけだけ》

ステージ上には雅と司会者の男性（もちろん無傷で救出された）。マイクを手に簡素なトークを繰り返している。すでに全マジックを終え、ショーの締めに入っているということは、二人の立ち振る舞いから見ても安易に想像できる。《少なくとも、今ここにいる君たちは、どっちが盛り上がったか、答えは決まっているだろうね》  
歓声上がる。それには真一と的場のものも混じっている。

《いやー、俺も実行委員として雅さんと呼んで本当に良かったと思います》

しみじみと話す司会者。明日も明後日も両学園祭は続くというのに、すっかり勝った気であるようだ。

「おい、お前この後どうするよ」  
的場が真一に尋ねる。

「どうって……」

真一は眉をひそめ、考え込んだ。「綾香たちのトークショーを観に行こうにもチケットねえし、帰るしかねえじゃん。あ、どっかで飯食ってくか？」

「バカ野郎」

真一の胸元をひじで小突く的場。「このまま帰ってどうするんだよ。せつかくだから『ミュージックホール』に行こうぜ」



「ええ？」

うんざりとした顔を見せる真一。「嫌だよ。ヒップホップなんて興味ねえもん」

すっかり忘れていた。的場はヒップホップのフリースタイルの大会が行われている『ミュージックホール』という場所に行きたがっていたのであった。

頭に被ったニット帽を脱ぎ、坊主頭をボリボリとかいてから、的場は再びニット帽を被り直した。

「つたく、分かったよ」

チツと舌を打つ。「俺一人で行ってくるから、お前は先に帰つてろよ」

「お前、飯はどうすんだ？」

「飯？」

視線を宙に泳がせる的場。「大学の中でまたなんか買えばいいだろ？」

真一はあごをしゃくらせ、ステージに立つ雅を示しながら言った。

「ゴミはちゃんと片付けろよ。また魔女に注意されるぜ」

ショーは午後七時を前に終演となった。的場と別れ、一人でキャンパス内を正門に向かって歩く真一。このまま大学を出て、どこかの飲食店で夕食をとる予定である。その後はやはり、帰宅するしかない。

周りを歩く人々の中にもショー帰りがたくさんいるようで、友達同士、親子同士でショーの感想を言い合っている姿が多く見られた。感想の大半は好意的なもので、ひねくれて酷評する人物も、表情は裏腹に満足そうに見えた。当然ながら真一も満足していた。

最初のステージの半壊や、ラストを飾った打ち上げ花火、他にも一般の客を使った人体消失マジック、瞬間移動マジックなど、全体的に派手でエンターテインメント性の強い演出が多かった。かなり金

がかかっているだろうなと真一は予想する。そして、ますます綾香たちに勝ち目はないだろうなと自虐的な笑みを浮かべた。

「あ、お兄さん。ちょっとすみません」

ん、と振り返る真一。そこには上下ジャージの地味な服装をした女性の姿が。後ろに大きなテレビカメラをかまえたカメラマン他、撮影クルーを引き連れている。真一は緊張の面持ちで「な、なんすか？」と返事をした。

「プリンセス雅のマジックショーを観て来られたんですよね？」

真一は頷いた。「それでは、マジックショーの感想をカメラに向かって一言どうぞ」

そういえば、昭和院大学、秀英大学の学園祭対決を、あるテレビ番組が特集するらしいと綾香が言っていた。その番組のクルーなのかもしれない。女性はおそらく服装から、リポーターなどではなくADか何かであろうと想像がつく。

まあ、断るのもなんだしな……。

「コホン」と咳払いをし、真一は精一杯男前な顔を作った。そしてひじを曲げ、親指を立てる。

「雅、愛してるぜ！」

……。

「ありがとうございます」と去っていくクルーの後ろ姿を見送った後、真一は再び正門へ向け歩き始めた。

## 97 面目丸つぶれ

《東京に来てビックリしたことって言えば、なんととっても車の多さですよー》

しりとり野球拳の敗者となった亜佐美がビキニ姿でしみじみと言う。《これじゃあ毎日毎日交通事故が起きるのもしかたないと思います。長野は平和だったなー》

彼女は長野出身だそうだ。

《そうだねー》

地元東京出身のちえ美も同調する。控え室にいた時と同じ、ビキニの上から秀英祭ティーシャツという格好である。亜佐美とチロリも同じ格好でトークショーの舞台上上がったため、しりとり野球拳はたった一回で勝負が着いた。《私も今年に入って免許取ったんだけど、車が多くて運転するのが怖いんだ。このままペーパードライブーになっちゃいそう》

《免許いいなー》

チロリが羨ましそうな声を上げた。《私も免許欲しいんよねー。

原チャリでもいいけん、運転してみたい!》

《わー。あんたなんか運転したらすぐ事故に巻き込まれちゃいそう》

苦笑する亜佐美。《トラックの衝突事故の間できっとペシャンコになっちゃうよ》

《グロイよ!》

チロリのツツコミ。しかし、あまり元気はない。

《綾川ペチャリになっちゃうよ》

ちえ美のその発言に、《誰よ!》とまたツツコミを入れるチロリであったがやはり勢いがなく、観客の盛り上がりは五分咲き程度の末、すぐ枯れた。

「眠いつすねー」

左隣でだらしなく椅子の背にもたれかかって座る藤岡が、あくび混じりの声で言った。「トークショーは失敗でしたね。アイドルさんたち、明らかにくたびれてますもん」

「まあ、でも話はけっこう面白いけどな」

アイドルたちをフォローする橘川だったが、実は彼も眠気を必死でこらえていた。「ね、みなみちゃん」

反対隣に座るみなみに同意を求めるも……。「うつ……」

完全に目を閉じて寝息を立ててしまっている。橘川は慌てて彼女の肩をポンポンと叩いた。「んん……」とうめきながらまぶたを上げる彼女。そして、目をこすりながら言った。

「おはおうございます……」

「ダメだよ」

顔をしかめてみなみをたしなめる橘川。「ここはアイドルさんたちからもよく見える席なんだから、居眠りなんかしてたらアイドルさんたちに失礼でしょ」

「だって眠いんですもん」

背後を振り向くみなみ。橘川もそれにならってみる。「ほら、お客様さんだって何人が眠ってますよー」

確かに、ところどころ目を閉じた人の姿が見える。前を向き直り、溜息を吐く橘川。みなみの一つ向こうに座る、先ほどチロリと仲直りを果たした詩織という女性でさえ大きなあくびをしている。ふと反対側を見ればついに藤岡も眠りに落ちてしまっている。

「プリンセス雅のマジックショーは大盛り上がりみたいだから、このままじゃやばいよ」

「サバイバルゲームが盛り上がったんですから大丈夫ですよ」

あくびをしながらみなみは言う。「うちの勝ちです」

その自信はどこからくるのだろうと橘川は思った。

「皆さーん、もう少しテンション上げてくださーい」

舞台の下からトークショー実行委員の男が泣きそうな声でアイドルたちに指示を出す。アイドルたちの元気がないのはサバイバルゲームが原因であることから、少々罪悪感を覚えてしまう橘川。サバイバルゲームの言いだしっぺであるみなみはというと、また幸せそうに寝息を立て始めてしまった。

それにしても……。

橘川は左側に視線を向けた。藤岡の向こうには皆岡、その向こうに早苗が座っている（二人はなんとかトークショーに意識を傾けているようである）。そして、更にその向こうに一つ空席が見える。そこは貴美の席なのだが、彼女は全く姿を見せようとはしない。

貴美ちゃん、いったい何やってんだ？

そう考えた矢先、ホール内にキーンコンカンとなぜかチャイムが鳴り響き、アイドルたちのトークを途絶えさせた。

《ん？》

キョトンとした顔でキョロキョロと左右の舞台袖を見るチロリ。

《今のチャイム、なんなん？》

他の二人も同様である。観客もざわざわとどよめく。みなみと藤岡もいつの間にか目を覚ましているようである。やがて、スピーカーからアイドルたちではない別の女性によるアナウンスが聞こえ始めた。

《ここで臨時特別企画です》

橘川はみなみと顔を見合わせた。互いに目を丸めている。《実は先ほど、うちの大学のとある生徒がアイドルお三方の所属するSDPにスカウトを受けました》

どよめきが大きくなる。みなみが「えー、ホント？」と驚いた表情をする。それから橘川に向かってこう意見を求めた。

「いったい、誰なんでしようね」

橘川は何も答えない。ただ、もちろん彼には心当たりがあった。

《本人は芸能界入りは希望しないということ、デビューは見送りとなってしまいましたが、我がトークショー実行委員必死の説得の結果、今回だけ最初で最後の舞台上がってくれらるということになりました。紹介しましょう！ 文学部二年の長岡貴美ちゃんです！》

「き、貴美さん!？」

口元を手で覆い、舞台を凝視しながらみなみは驚愕の声を上げた。それから橘川に顔を向ける。「橘川さん、貴美さんがスカウトされたんだって」

「あ、ああ」

二度頷く橘川。「実はさっき、そうゆう話は聞いててさ。ね、藤岡くん」

藤岡に同調を促すが……。  
ん？

藤岡は目を見開き、信じられないといったふうに舞台を見つめていた。そして小さな声でこう呟いた。

「あ、あれが貴美……?」

橘川は改めて舞台の上に視線を戻した。すると同時に彼も口をあぐりと開けてしまうのであった。

《なんだか、すみません》

いつの間にか舞台上に登場していた貴美がマイクを片手に頭を下げた。彼女は橘川の知っている貴美ではなかった。ところどころ毛先がピンピンとはねた茶髪のウィッグ。目元を強調させたやや派手目なメイク。そしてカラフルな柄のワンピースとシースルーの白いブラウス。彼女の雰囲気はいつもの控え目でおとなしいものから百八十度転換し、明るく華やかなものに変わっていた。

「すごい……」

感慨深げにみなみは言う。「貴美さん、妖精さんみたいですよー」

橘川はトークショー前の貴美との会話を思い出した。南が貴美をスカウトした理由についてだ。今ならその言葉の意味が痛いほどによく分かる。

『君は内に大いなる魅力を秘めている』

《SDPの人に綺麗にスタイリングしてもらいました》

ニコリと笑う貴美。その笑顔の輝きも十倍増である。《今日だけのためにここまでしてもらって大変恐縮です》

「バカヤロー！」

背後で男性客が叫んだ。「可愛いじゃねえか！ 考え直してデビューしろー！」

その声に促されるように次々とデビューを勧める声上がる。やがてそれは大きな『デビュー』コールへと発展し、『貴美』コールへと変わっていく。

「きーみ！ きーみ！」

割れんばかりの大歓声。客のボルテージは本日最高潮である。しかしながら、貴美は「いや」とか「その……」などと言いながら苦笑を浮かべるばかりだ。橘川も貴美コールに参加しながら、いつしか舞台の隅に追いやられてしまい、ポカンとした表情でその光景を見つめる三人のアイドルたち、主にチロリの顔を眺めていた。

「チロリちゃん……」

チロリちゃんには悪いけど、いちおう盛り上がったんだから、今回はまあよしとするかな。

## 98 祭りのあと

「それでは皆さん」

ビールの入ったジョッキをかがげ、早苗が改まった調子で言った。皆の顔を順番に見渡していく。「秀英祭、そして秀英祭ツアーの成功を祝しまして、乾杯ー！」

その合図と同時に六つのジョッキがチンとぶつかり合う音。他の五人全てとジョッキを合わせてから、今度はジョッキを口元に持っていていき、橘川はビールを思いっきり口の中へと流し込んだ。

「プハア！」

そう息を吐いた頃にはジョッキの中のビールは半分以下にまで減っていた。あまり酒を飲まない彼は、自分でも少々驚いてしまうのであった。

秀英祭四日目、最終日の夜である。もう夜の十一時を回っている。秀英祭ツアー実行委員の六人は、大学からほど近い場所の居酒屋にて打ち上げを行っていた。座敷タイプではなく一人に一つの椅子があてがわれている。全員が申し合わせたように秀英祭公式のティーシャツを着ており（橘川はみなみに言われるがままその格好をしたため、実際申し合わせたのかもしれない）、入り口から最も奥のテーブルをぐるりと囲んでいる。テーブルの上にはから揚げやサラダ、焼き鳥などの軽食も並んでいた。

「橘川さん、ナイスな飲みっぷりですねー！」

向かいに座る赤い顔をした藤岡が橘川をはやし立てる。彼はここに来る前、大学にいた時から缶チューハイを何杯か空けていたため、もうすっかりでき上がっている様子である。「昼間のガイドと同じぐらいキレがありますねー」

「いやそんな、キレだなんて……」



橘川は照れて頭をかいた。結局早苗がミスコンで最終審査まで勝ち上がったため、最終日も彼がガイドを務め上げたのだ。しかしながら、早苗は最終審査で惜しくも破れ、第五位という中途半端な結果に終わってしまった。

「いや、本当に橘川さんのおかげですよー」

悩ましげに首を振りながら右隣に座る早苗が言った。彼女もかすかに顔が赤い。「橘川さんがいなかったら本当にどうなっていたとか、初日のサバイバルゲームも、その後の秀英祭ツアーもぜーんぶ橘川さんのおかげです」

「ど、どうかな」

あまり褒められすぎて、なんとなく不安になってしまふ橘川。「確かに秀英祭ツアーはそれなりに繁盛したけど、果たして秀英祭の盛り上がりによっても貢献できたのだろうかって考えちゃうよ」「二日目以降の盛り上がりは昭和院大学より、うちのほうが上だったという噂です」

時の人、貴美。秀英祭期間中、何度も何度もサインや握手を求められたそうである。とはいえ、芸能界入りしないという意志は変わっていない様子だ。「きつとサバイバルゲームで有名になった橘川さんたちが良い宣伝材料になったんだと思いますよ。やっぱり橘川さんのおかげですね」

ニコリと笑う。『妖精スタイル』でなくともその笑顔はやはり一級品である。

「そうかー」

もう一度ジョッキに手をつける橘川。ビールを飲み干してまた息を吐く。「俺もちょっとは貢献できたんだなー」

そして彼は思った。

こんなに楽しい気分になれるなら来年も参加したいな。できればまたチロリちゃんたちをゲストに呼んで……。

「はああー」

みなみがつくね串を手に、溜息混じりに声を上げた。彼女のジョッキだけ、ビールではなくジンジャーエールが入っている。「アイドルさんたちと一緒に打ち上げやりたかったなー。この勝利と一緒に分かち合いたいよー」

「馬鹿言ってるんじゃないの！ アイドルさんたちがこんなところに来てくれるわけじゃないでしょうが」

みなみの頭をコツンと叩く早苗。みなみが頭を押さえてジタバタとたた打ち回る。クリーンヒットだったらしい。

「一応チロリにはメールしといたんだけどさ」

携帯を手に取りながら、藤岡が言った。携帯の液晶を開く。なぬ？ と橘川は彼を睨みつける。「今日は地方でロケやってるから無理だつてさ」

「藤岡くん、チロリさんのメルアド聞いたの？」

橘川が最も気になっていたことを、代わりに早苗が質問してくれた。

「おう」

カシャツと携帯を閉じながら頷く藤岡。「まあ、最初はワガママだし、胸もでかくないしでいけすかねえヤツだったけど、話してるうちに意気投合しちまったわ」

「キヤー」

両手を頬に当てるみなみ。頭の痛みからはもう復活したらしい。

「スキャンダルじゃないですか！ 秀英祭がキツカケとなって燃え上がる恋……。藤岡さんってばいけないんだー」

「別にそんなんじゃないよえよ！」

そう否定しながらも。「ま、向こうがどうしてもって言うなら付き合ってもいいけどな」

藤岡は鼻を鳴らした。

「くそー」

くやしそうに拳を握るのは橘川の右隣に座る皆岡である。「俺も

亜佐美ちゃんともつと仲良くなりたかったー。ねえ、橘川さん……！  
ん？ 橘川さん……？」

橘川は力いっぱいから揚げを頬張り、ひたすらこの場を耐えていた。

「なあ、テレビ放送っていつやるんだ？」

皆岡が貴美に尋ねた。貴美は何かを口に含んでいるらしく、あごを動かしながら、ほんの少し考え込んだ後に答えた。

「多分すぐだと思うよ。明日か明後日ぐらいの夕方。プリンセス雅のマジックショーがどのぐらい盛り上がったのか直に観てみたいね」「俺はトークショーの時の貴美をもう一度観たい」

皆岡のその言葉にプツと吹き出してしまふ貴美。テーブルの上から揚げの残骸が飛び、すぐさまポケットティッシュで掃除する。

「あれも放送されるのかな……」

頬を赤らめながら彼女は言った。珍しく動揺しているようだ。

「当たり前ですよー！」

みなみが大きく頷いた。「アイドルさんたちが空気を白けさせる中、貴美さんの登場で見事に会場を沸き上がらせたんですからねー。もう、貴美さん可愛かったなー。本当に妖精みたいでしたよー」

「そんなことないよ」

貴美は苦笑する。「あれは南さんの化粧の腕前のおかげだよ」

チロリのマネージャーである。なるほど、あれは彼の手腕によるものだったのかと橘川は感心した。

「もったいなかったよなー。デビューすればトップアイドルにだってなれたぜ」

そう言っただけ最後の中から揚げを口に入れる皆岡。「うんうん」と早苗が同調する。

「私なんて一瞬、松尾和葉が来たのかなって思っちゃったもん」

橘川でもその名前は薄らと聞いたことがある。確か、アイドルの

名前だ。

「全然似てねえじゃん」

笑いながら眉間にしわを寄せる藤岡。それから橘川に目を向ける。

「ね、橘川さん。貴美と松尾和葉じゃ、またタイプが違いますよね

」

松尾和葉の顔を想像しながら、橘川は「そ、そうだよー」と適当に返事をした。

## 99 自分を越えた時

「おはよう!」

教卓の目の前にある自分の席に着き、勉強道具を鞆から机の中へと移し変えていた時、背後からガタツという音と共にその挨拶が聞こえてきた。振り返り、椅子に座ろうとする河内那美の姿を確認すると、羽山美穂も「おはよう」と返した。

「昨日はゴメンね」

苦笑しながら彼女は謝る。「久しぶりに一緒にカラオケ行けるはずだったのに、急に仕事が入っちゃってさ」

「かまわんかまわん」

おどけた調子で那美は言った。「カラオケなんていつでも行けるしね。仕事のほうを優先させるべきだよ。って、当たり前だけど」

「あ、明日なんてどう? 明日はフリーなんだ」

「明日は私がバイト……」

那美が力なくそう答えると、美穂は髪の毛をいじりながら「うーん……」と唸った。

「ところでさ」

那美の瞳に悪戯っぽい光が宿る。「昨日のアレ観た? 夕方の番組。『東京列伝』だったけ? 秀英祭の特集やってたよ」

「えっ!?!」

美穂は目を丸め、指先を口元に当てた。「し、知らない。大学の学園祭なんてテレビで放映されるもんなの?」

那美は頷く。

「秀英大学とお隣の昭和院大学は毎年どっちが盛り上がったかで競い合っていて、んで、その学園祭対決を『東京列伝』が毎回特集してるんだって。私も偶然観ただけどね」

「ふーん」

美穂は橘川の顔を思い浮かべた。そしてすぐに自嘲的に笑う。その番組に彼の姿が映し出されるなどということは、よっぽどのことがない限り、ありえないであろう。「どうだった？ 綾川チロリちゃんとか出てた？」

「うん、出てた出てた！ あの子面白いねー！」

そこまで言ったところで慌てて口をつぐむ那美。「あ、美穂の恋のライバルをあんまり褒めすぎるのもよくないか」

「別にいいし」

美穂は吹き出した。

「他に二人のアイドルが出ててさ、内藤ちえ美って子と滝田亜佐美って子」

「知ってる？」と尋ね、美穂が頷くのを待ってから那美は続ける。「で、アイドルに秀大の人が一人ずつパートナーについて、秀大のキャンパス全部を使ってサバイバルゲームとかやってんだよ。もう、めっちゃくちゃ面白かった」

「へー」

うんうんと頷きながら、美穂は相槌を打った。「じゃあ、秀英大学のほう盛りが上がったんだ」

「どうだろうね」

視線を宙に漂わせる那美。「プリンセス雅のマジックショーも相当盛り上がったし、結果はどっこいどっこいじゃないの？」

美穂も考え込む。もし、綾川チロリの活躍で、橘川夢多の所属する秀英大学が勝利したとするならば、そのことを喜ぶべきかどうかどうなのか判断がつかない。

ま、いつか。

また一人苦笑したところで、キーンコーンカーンコーンと朝のホームルームを知らせるチャイムが鳴り響いた。

一時限目は体育である。女子は体育館にて跳び箱、器械体操を行う。

体操着に着替えた美穂と那美は、体育館の壁に寄りかかって体育座りで座り、自身が跳び箱を跳ぶ順番になるまで待機していた。

「でさ、結局どうするつもり？」

美穂に顔を近づける那美。「このままじゃ橘川さんに再会できないよ。直接秀英大学を訪ねて『橘川って人を呼んでください』って事務の人に言うしかないんじゃないの？」

「そんなの無理だよー」

ひざの上にあごを寄せ、美穂は他の女子が跳び箱を跳ぶ姿をじつと見つめていた。「橘川さんと初めて会った本屋さんにちよこちよこ通うしかないかな……。あの日、なんで橘川さん、あんなここにいたんだろ。聞いとけばよかった」

「それを言うなら連絡先」

那美のその言葉に、美穂は「そうそう」と顔を伏せた。

先に那美が見事六段の跳び箱に成功。続いて美穂が同じ六段に挑戦する。美穂が競技をする時はやはりそれなりの注目を浴びる。体育は隣のクラスとの合同で行われるため、特に普段美穂を見慣れない隣のクラスの生徒などは、彼女の跳躍から目を離せない様子である。

「美穂は五段が最高記録か」

ポロシャツにジャージという姿の中年女性体育教師が、手に持ったバインダーに視線を落としながら言った。フレンドリーに接してくるため、生徒、特に女子生徒からの人気が高い。「あんなの場合、胸が邪魔になるから厳しいよね。ほら、和智<sup>わち</sup>なんて胸ペツチャンコだから、八段まで跳べるんだよ」

「先生だってペチャンコじゃないですか！」

近くに立つシヨートカットの女子生徒（和智である）がブーイン

グをする。美穂は少し赤くなりながら「あはは」と笑った。

「それじゃ行くよ。美穂！ 位置について！」

教師のその合図と同時に、美穂は一転真剣な顔つきとなった。実際、高校二年で五段までしか跳び箱を跳べないというのは、少々寂しい成績である。今日こそは記録を更新してやると彼女は意気込んでいたのだ。

ピツと短い笛の音が鳴り、美穂は体育館の床を思いっきり蹴った。そして、跳び箱に向かって一直線に走る。

自分でも分かっていた。身体能力的には跳び箱六段なんて跳べて当然なのだ。それができないのは恐怖心。跳び箱に足を引っかけて頭から落ちてしまうのではないかという恐怖心。打ち負かすべくは自分自身。

跳び箱を跳んだその先にはきつと橘川夢多がいる。彼には二度と会えない可能性だつてある。そんな恋に立ち向かっていく、そんな恐怖に比べれば、跳び箱なんて全然怖くない。

よし！

踏み切り板を蹴る。空中で開脚しながら、両手を跳び箱上面に、できるだけ奥につける。あとは腕の力で、跳び箱を『超える』……！

「あっ！」

し、しまった。  
上空で身体のバランスが崩れ、重心が左側に傾いてしまった。それにより勢いが損なわれ、跳び箱にお尻がぶつかる。館内のどこかから聞こえた短い悲鳴と同時に、美穂は下に敷かれたマットへと前のめりに転落していった。

ダメだったか……。

マットの上で尻もちをついたまま、美穂ははあと溜息を吐いた。しかし、彼女のそんな姿とは裏腹に、体育教師の明るい声が飛ぶ。

「惜しい惜しい！ あと少しだよ」



パンパンと二度手を叩く彼女。「上達したじゃん、美穂。あんだ、いっつも跳ぶ前から逃げ腰でさ、なんか怖がつてばかりだったけど、今日は違った！ちゃんと跳ぼうとした。次は必ず成功するよ！」

「え……」

美穂は立ち上がり、目を丸めて体育教師を見つめた。「ほ、本当ですか」

「うん」

ウイंकをする体育教師。「後でもう一回チャレンジしてみ、絶対跳べるから」

しばしキョトンとした表情を浮かべていた美穂であったが、やがて大きく頷き、「はい！」と返事をした。

余談であるが、この日のうちに美穂は六段、七段と立て続けに記録を更新したのだという。

バイト終わりでグッタリとソファに横になり、井本真一はリモコンを使い、忙しくテレビのチャンネルを切り替えていた。

時刻は夜八時。ゴールデンタイムのこの時間、観たい番組が多すぎて、どれを観ようか決めかねているのだ。白のスウェットシャツとブルージーンズという姿である。

この番組には和葉ちゃんが出てるし、こっちはまどかちゃん、こっちは……。

観たいのは番組というよりアイドルであるといっても過言ではない。なんとかチャンネルをロリ系アイドル沢渡まどかが出演している『なんでも探偵団』に落ち着かせ、冷蔵庫から缶ビールでも持つてこようと身体を起こしかけた時、玄関からガチャとドアノブの回る音が聞こえた。

ん？ 帰ってきやがったか。

「ただいまー」

真一以上に疲れきった顔で、池田綾香がリビングに入ってくる。見慣れないダッフルコートに身を包んでおり、手に買い物袋を提げている。「今日は寒いねー。あんまり寒かったからコート買ったよ」

「夜のこと考えなくて薄着してくからだよ」

改めて身体を起こし、ソファに座りなおす真一。「まったく、衝動買いしやがって……。金銭感覚がマヒし始めてるんじゃないのか？」

「金銭感覚マヒするほど給料貰ってないかい？」

買い物袋を床に置き、綾香はダッフルコートを脱いだ。真一の予想どおり、中から薄手の黒いシャツと、チェック柄のミニスカートが顔を覗かせる。「どっちにしても、前からダッフルコート欲しかったけん丁度良かったんよ。それにしても……」

それから彼女は真一の隣に腰を下ろし、嫌味ったらしく笑みを浮

かべた。「あんたも偉くなつたねー。ちょっと前までは私のヒモや  
つたくせに、一丁前に生活費の心配なんかするようになったん？」  
「もちろんよ。馬鹿にするな」

ふんと鼻を鳴らし、真一は答えた。昨日購入したプリンセス雅の  
イメージDVDのことは絶対に内緒にしておこうと思った。

「ご飯食べた？」

買い物袋を引き寄せながら綾香は言う。「テレビ局の近くでさ、  
美味しそうなお好み焼き屋さんがあったけん、お持ち帰りしてきた  
んよ」

「お好み焼きか。いいじゃねえか」

実は『ぶるうす』で夕食は済ませていたが、お好み焼きは真一の  
好物である。一気に空腹になつた真一は、いそいそと袋からパッ  
クに入ったお好み焼きと割り箸を取り出した。「お好み焼きを食い  
ながら、まどかちゃんの番組をじっくり観賞する……。このために  
生きてるって感じだぜ」

「あつ！」

ハツとした顔になる綾香。真一は「ん？」と彼女の顔を覗き込ん  
だ。「そういえば昨日のアレ、ビデオ録つとつたよね」

「ああ……」

例の秀英大学と昭和院大学の学園祭対決を特集した番組である。  
時間的に二人ともリアルタイムで観ることができなかったため、ビ  
デオを予約録画しておいたのだった。「そういえばそんなもんあっ  
たな。まあ、ビデオだからいつでも観れるとして……」

「今観たい！」

「……」

真一は綾香を睨みつけた。「馬鹿言つてんじゃねえよ！ 今『な  
んでも探偵団』あつてんだろがよ、これ以外にも色々観たい番組  
があつたんだぞ！」

「そんなん、アイドルが観たいってだけやろうもん」

唇をとがらせる綾香。「学園祭特集だってアイドルいっぱい出てくるばい。プリンセス雅だってそうやし、しかも私とちえ美と亜佐美のビキニ姿だって見れるとばい」

「む……！」

「そ、それは確かに……。」

「ね？」

綾香が身体をすり寄せる。「私のビキニ姿見たかろうもん」

いや、お前には興味ない。

結局録画しておいた『東京列伝』を観ることにする。同番組内において学園祭対決の特集が行われるのだ。

特集は思いのほか淡々としていた。やたらと重たいナレーションに乗せてドキュメンタリータッチで二つの学園祭を紹介していく。それでも、白いハットを被る綾香の顔がテレビに映し出された時は、二人とも若干テンションが上がった。

《負ける気はしませんね》

サバイバルゲーム直前の意気込みインタビューらしい。《狙うは亜佐美ちゃんです。彼女が罰ゲームになったら、一緒に一発ギャグを考えてあげてもいいですよ》

「んなこと……。言いつつ……。」

お好み焼きにかぶりつきながら真一は言う。「お前が負けたんだよな」

「誤審でね！」

しばらくしてビキニ姿で走り回るアイドルたちが次々と映し出される。話に聞いていたとおり、滝田亜佐美のビキニのパンツが食い込んでいたため、真一の中でこのビデオは永久保存版の仲間入りをした。

「ん？」

真一は眉間にしわを寄せた。一瞬、アイドルのパートナー役だというスーツを着た男性の顔が見えたのだが、その人物をどこか見たことがあるような気がしたのだ。

「どうしたん？」

キョトンとした顔で真一に顔を向ける綾香。真一は無言で首を振った。

「どこで見たんだっけな……。まあ、別にどうでもいいか。」

特集は続く。予定どおり、綾香が彼女曰く『誤審』で敗れたところだ。

「ヒゲ剃り！ 仰け反り！ アイムソーリー！」

「……………」

秀英祭を終え、今度は昭和院大学学園祭の模様である。さっそく、昨日も観た（DVDで）プリンセス雅が登場する。ゲリラライブには触れられず、主にマジックショー本番の様子を伝えていた。

雅の派手なマジックの数々に、綾香が「おお、すげー………」と感慨深げに呟くかたわら、真一は少しだけ不安な面持ちでテレビの画面を見つめていた。思えば、マジックショーの帰りに、カメラに向かって感想を残してしまったではないか。もしそれが放送されれば、綾香に嘘を吐き、昭和院大学に行っていたのがバレしてしまう。

確かあのテレビクルー、俺以外のヤツにもいっばい声かけてたよな。まさかよりによって俺のコメントがピックアップされるなんてことはないだろう。

と、胸を撫で下ろしかけた瞬間。

《雅、愛してるぜ》

「……………」

しばしの沈黙の後、真一は「風呂でも入ってくっかなー」と立ち上がった。そして口笛を吹きながら浴室へと向かう。背中にどす黒い殺気を感じながら。

「ぬほおおおおお！」

秋空のもと。二人の愛の巢に、今日も真一の断末魔が響き渡るの  
であった。

100 秋空のもと（後書き）

これにて「それなら私があいどる」第一章が終了。

二週間の夏休みをはさんだ後、第二章がスタートします。

二週間も休載なんて退屈だーっ、て人は夏のラジオの他作品でも読み流してみてください。退屈しのぎぐらいにはなるかもしれませんが、夏ホラーという企画に参加中の「彼が私の部屋に侵入する」の他、ブログでも小説を掲載しています。

それでは皆さま、二週間後に第二章でお会いしましょう。

追記

家庭の事情により執筆が滞っております。

更新ペースは遅くなると思いますが、必ず連載再開させますので、どうか気長にお待ちください。

## 1 アイドルウォッチャー（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。

「それなら私がいどる」第二章のスタートです。



## 1 アイドルウォッチャー

わずかばかりの駐輪スペースに自転車を止め、チェーンロックをかける。寒風に身を震わせながら階段を駆け上り、部屋のドアノブを回そうとする。回らない。コートのポケットから合い鍵を出し、鍵穴に差し込む。

そうか。今日は生放送だったっけな。

真っ暗な部屋に上がり、リビングの電灯を点ける。次いでソファに座り、井本真一は大きなあくびをした。そのまま手袋を脱ぎ、テーブルの上に置いてあったリモコンでテレビの電源を入れた。映し出される『プリンセス雅脅威の脱出マジック』のテロップ。真一は心の中で『お?』と呟き、テレビの画面に釘付けとなった。

若い女性リポーターが青ざめた顔で何かを叫んでいる。

《た、大変です！ 爆発まで一分を切りましたが、未だプリンセス雅ちゃんはあるの中にいます！》

リポーターの指差した先に、箱に入り顔だけを出したプリンセス雅がポツンと置かれ(?)ている。その脇に電光掲示板によるカウントダウン。いわゆる脱出マジックのようだ。どこかの屋外スタジオであるうか。照明によって浮かび上がった雅の周辺以外は深い闇に包まれている。

シルクハットの下の雅の顔がアップで映し出された。珍しく狼狽したような表情。箱の中で慌しく身体が動く気配がする。縄で縛られてもしてるのかなと真一は予想し、もう一度あくびをした。

これ、放送できてるってことは無事脱出できたわけだな。

《さあ》

リポーターが言った。《生放送によるプリンセス雅の異次元脱出シヨ！。果たして彼女は無事生還することができるのでしょうか》

「……」

身体を前のめりにし、画面を凝視する真一。

数値は無情にも10を切った。9、8、電光掲示板は辺りの騒然とした空気など気にも留めず、自身の仕事をまっとうしようとするプリンセス雅が泣きそうな顔で首を振った。ほぼ同時にリポーターの《あーっと、ダメです。止めてください》と悲鳴にも似た懇願。しかし、スタッフの《無理無理！》という声がかすかに聞こえる。

お、おい！

明日のスポーツ紙一面が真一の脳裏に浮かび上がった。『人気アイドルプリンセス雅 マジック失敗で事故死』。

3、2、1、いよいよその時が来た。カメラが、観念したかのように目をつぶる雅の表情をとらえた後、ドーンという衝撃音と共に画面は炎に包まれた。「雅ー！」と真一の悲痛な叫び声が部屋の中にこだまする。

一瞬の出来事にテレビの中は異様なほど静まり返っていた。雅のいた場所には箱の残骸のみが残り、スタッフらがそれに燃え移った炎へ消火器の粉を浴びせる。リポーターの、仕事を忘れその様子をぼおつと見つめる姿が真一の胸に深く刻み込まれた。

と、次の瞬間。画面に映ったりリポーターの背中が不意に消えた。何かがカメラの目の前に現れたのだ。

《なーんちゃって》

それはすす一つないプリンセス雅の勝ち誇ったような笑顔のアツプだった。後ずさりし、彼女の全身があらわとなる。いつものタキシード。いつものスタイルのいい長身。優雅な動作で身体を一回転させる雅。《このとおり、私はピンピンしてるよ。ちょっと心配しちゃったテレビの前の君。君はまだまだ青いな》

真一はポカンとした表情のまま固まっていた。手にはきつく握りしめられたプリンセス雅のDVD。彼はふうと一息吐き、DVDを

ポンと床に置いた。

まあ、そんなこつたるうと思っただけだよ。

精一杯強がりながら、壁の時計を見る。まもなく午後八時になるうとしているところであった。

「しかたねえ、観てやるか」

真一はリモコンを操作し、チャンネルを変えた。

眼鏡とヒゲがトレードマークのお笑い芸人庭井すすむが映し出された。

《今日はなんと、あの松尾和葉ちゃんと東京デートを敢行しちゃいまーす》

ピタツと真一の指が止まる。そこが目的の局ではないものの、彼女の名を聞いて平気で見過ごすことなどできるはずがない。

《それにしても遅いなー。ここで待ち合わせだつてのに》  
急に芝居じみる庭井。腕を組み左右を見回す。辺りは明るく、生放送ではない。東京の、どうやらお台場エックステレビ近辺のようである。《あつ、いたいた。和葉ちゃん、こつちこつち》

《庭井さーん》

声のみが聞こえ、ほどなくしてから庭井のもとに和葉が走り寄ってくるが。《いたー!》

カメラに映りこんだ瞬間、転んでしまう彼女。

《何もないところで転ぶなよー》

ハツハツハと庭井は笑う。和葉も《エへへ》照れ笑いし、立ち上がりながら服を手でパツパと払った。まだ三月ながら、胸元の大きく開いたシャツを着ており自慢の巨乳を強調させている。彼女の動作に合わせて、その巨乳がポインポインと縦に揺れる。

《今日はどんなところに連れてってくれるんですかー?》

庭井の左腕に抱きつく和葉。庭井はウヒヒと気味の笑い声を漏らしながら、質問に返答しようとするが、その前に一言。

《和葉ちゃん、胸めっちゃ当たってるんだけど》

《あっ!》

すぐさま庭井から離れる和葉。頬を赤らめ、上目づかいで庭井を睨みつける。《もうー。庭井さんってば、エッチなんだからー》

唇を尖らせながら、両手で自身の胸元を隠す。

《お前から抱きついてきたんだろー?》

鼻の下を伸ばす庭井。と、同じように鼻の下を伸ばす男が吉祥寺にもいた。

和葉ちゃん……。

真一の手には、今度は松尾和葉のDVDがギュツと握られていた。

おっと、いけない。

慌ててDVDからリモコンに持ち替え、再びチャンネルを回す。

雅や和葉ちゃんもいいけど、一応こいつを優先させなきゃな。

《新作のプロモーションのために韓国に行ってきたんですけど》

明るく煌びやかなスタジオ。マイク片手に喋っているのは人気口ツク歌手のKEEJIEであった。レーザーで全身を包み、グラサンをかけ髪を立てている。彼の隣には司会者岩田幸三が座り、その後ろに他の出演者たちの姿も見える。真一はKEEJIEではなく、後ろの出演者たちに注目した。

あっ。

すぐに見慣れた顔を発見する。今日はトレードマークのハットを被っておらず、代わりに落ち着いた色の花飾りを髪につけている。真っ白なドレスに身を包み、両手は行儀良くひざの上に。たいして聞いてもないいくせに、KEEJIEの一言一言に丁寧な相槌を打つ。名だたるミュージシャンに囲まれ、さすがの彼女もひどく緊張しているらしいということが画面越しでも容易に伝わってくる。

《なるほどねー》

スーツ姿の岩田幸三が突然後ろを振り向いた。《チロリちゃんは  
どう思う?》

突然振られ、《ふあい?》と間抜けな反応をする綾川チロリ。付  
き合いの長い岩田が気を利かせてくれたのかもしれない。

《あ、そ、そうですねー。すごいなーと思います》

チロリがアハハとごまかし笑いを浮かべる。それを観て真一は、  
フンと鼻で息を漏らした。

やっぱり聞いてなかったか。

途端に不安になる彼。これから自身の恋人である綾川チロリこと  
池田綾香が、生放送でどんな醜態を見せてくれるのかを考えた末で  
あることに他ならない。

## 2 クレセントムーン

綾香は目だけをキョロキョロと動かした。右にはそれぞれ派手な衣装を着たポップでキュートな女性スリーピースバンドアフターサンデイの面々。左にはグラサンとハンチング帽でお馴染みの大御所シンガーソングライター鈴木司。そして今、ステージでライブを披露しているのがロック歌手のKEEJIE。いずれもヒットチャートを賑わすトップアーティストばかりである。

ここに私が座つとつていいとかいな。

思わずそんなことを考えてしまう。彼女は『いや』とその考えを意識的に取っ払った。

私だつて一応アーティストっちゃけん、誰にも責められんよね。

「チロリさん」

耳元でスタッフに声をかけられる。ADの若い男性だ。「CM明け出番ですから、前に移動してください」

心臓が口から飛び出しそうになる。なんとかそれを飲み込みつつ、綾香は「あ、はい」と精一杯の返事をした。アフターサンデイに「すみませんすみません」と頭を下げながら、彼女たちの前を横切る。前列に移動し司会の岩田幸三に挨拶してから、彼の隣の椅子に座る。「すっげえ緊張してるみたいだけど」

岩田が出し抜けに口を開いた。「リハーサルどおり無難にやっときゃいいんだから。変にウケを狙おうとせずにな」

「は、はい」

コホンと咳払いをする綾香。ステージに目を向け、KEEJIEのライブが終了するのを確認する。トークの後は自分も歌わなくてはならないのだ。そう考えると、より一層緊張感が胸を締めつける。

平常心平常心……。私は佐世保の歌姫なんやけんね。

自分にそう言い聞かせつつ、彼女はじっと自分の出番を待った。

スタッフの合図を皮切りに、岩田がカメラに向かって元気な声を上げた。

「さあ、続いては初登場！ 綾川チロリちゃんでーす」

「よろぴ……」

またゴホンと咳払いをする綾香。「よろしくお願いします……」

「えー、チロリちゃんは今回の曲がデビュー曲となるわけですけども、なんとプロデューズはあのリリアンだそうだけど、そのへんのいきさつを教えてよ」

「はい」

マイクを口元に当て、綾香は一所懸命に台本の言葉を頭に思い起こした。「私、リリアンさんの大ファンで、以前お会いした時にダメで頼んでみたらプロデューズしてもらったことになっちゃいました」

「そいつは凄いねー」

岩田は感心したように頷いた。「俺も今度ダメでリリアンさんに頼んでみようかなー。チロリちゃんよりかはヒットすると思うんだけどなー」

「なんでよー！」

台本どおり岩田に肩パンを入れる綾香。「私なんかヒットチャート初登場十六位ばい！」

「じ、十六位かー。そんなもん買う物好きなヤツもいるんだねー」

肩を押さえ、綾香を睨みつける岩田。そういえば手加減するのを忘れていた。「ま、まあそれはおいといて、初登場十六位のデビュー曲『クレセントムーン』はどんな曲？」

「失恋を歌った壮大なラブパレードですばい！」

「ラブパレードね」

すかさず岩田に指摘され、綾香は赤くなった。今のは台本ではなく天然である。「それじゃあ歌ってもらいましょう。チロリちゃん、ステージへ」

「は、はい」

勢いよくピョンと立ち上がり、綾香の肩ほどまでの黒い髪の毛がふわっと舞った。スタッフに誘導され、先ほどまでKEEJEEがライブを行っていた場所とは別のステージに向かう。片付けや準備などの関係で、生放送のこの番組では二つのステージを交互に使うのだ。

スタンドマイクの前に立ち、綾香は大きく一度、二度と深呼吸をした。目の前に立つ大勢の観覧客たちの顔がはつきりと見える。数台のテレビカメラの向こうには、このスタジオにいる客の何倍も人の目が光っている。

リハーサルではちゃんと歌えたっちゃけん、大丈夫大丈夫。

綾香はまた念仏のように自分に言い聞かせた。打ち合わせの時、スタッフからロパクでのライブも打診されたが、彼女はそれを丁重にお断りした。佐世保の歌姫としての（極めて自分勝手な）プライドがロパクなどを許せるはずがなかった。

スタジオが暗転し、幻想的なピアノの旋律が鳴り響く。リアンから提供されたデビュー曲『クレセントムーン』のイントロだ。オケはテープで、綾香の背後にバックバンドはいない。彼女一人のステージである。床は真っ白なスモークに埋め尽くされ、彼女のひざ下までを覆い隠す。照明がほんの少し青みを帯びたところで、彼女はついにその口を開いた。

「『夜空にきらめく星たちを、涙に抱かれーて見上げーてーたー』」

出だしに少しだけ不安定なところがあつたものの、元々歌唱力には自信がある。照明の移り変わりと共に楽曲がサビを迎えた頃には、その自信が良い薬となり、先ほどとはまるで別人のように伸び伸びとしたステージングを披露できるようになっていた。

リズムやストリングスが退き、再びピアノだけが楽曲を締めくく



る。そのピアノさえもが余韻を残して姿を消した後、少々の間を置いてから、綾香に対して拍手の雨あられが浴びせられた。気をよくした彼女は左手を腰に、右手をピースにして額に当てた。

「チロリンでしたー」

また拍手。彼女は満足げにその拍手を聞きながら、フフフと笑みを浮かべた。

やった、大成功やん。これで来週のヒットチャートトップ10内は間違いなしやね。

デビューからようやく半年が経過した二月下旬。綾香たってからの希望であった歌手デビューがついには実現した。ポップなアイドル歌謡曲で売り出そうとする事務所の方針に反対して、彼女の得意なR & B調のバラード路線でのデビューを懇願しそれが叶ったため、そうゆう意味でもこのデビュー曲『クレセントムーン』の売り上げは彼女にとって最重要事項であった。ヒットすれば、未だに彼女をアイドル歌謡曲路線に引き戻そうとする事務所を黙らせることができるのだ。

「良い曲だね」

トーク席に戻ってきた際に、鈴木司にそう褒められた。綾香は「ありがとうございます」と彼に頭を下げ、カメラに顔を向けた。ライブ前のトーク中とは比べ物にならないほどリラックスをした表情である。

「私たちの姿勢ってというのはデビュー当時から変わってないんです」

現在はアフターサンデイのトーク中だ。リーダーでありドラムのM I H Oが、熱弁を振るう。「とにかく背伸びをせずに自分らしく、自分の色を大事にしようって」

「なるほどねー」

岩田が感慨深げに頷き、それからカメラに向き直り「ここで一旦

ミニコーナーを挟みます」と視聴者に告知した。

### 3 エンジェルフォール

「もうー！　なんでよ！　なんでなんよ！」

池田綾香が頭を抱え込んでテーブルに突っ伏せる様子を、親友の矢上詩織は頬づえをついて眺めていた。やれやれといったふう溜息を吐きながら。

「みつともないよ。こんな場所で」

周囲に目を配る詩織。吉祥寺駅構内のファーストフード店『バスケット』は本日も大盛況である。平日の夕方なので、制服を着た高校生が特に目につく。「ちよつとCDが売れないぐらいによ。私の大好きなバンド『フォービアズサン』なんてヒットチャート五十位以内にも入ったことないんだよ」

「そんなマイナーバンドと一緒にせんで」

綾香のその言い草に少しムツとする詩織。緑の野球帽を被った綾香の頭を裏拳で小突く。「ぐぬっ」とうめき声を上げる綾香。

最近の綾香は自分の顔が世間に知られてきたことを自覚してか、プライベートではもっぱら帽子を被るようになった。仕事で着用することの多いソフトハットは避け、主に野球帽やニット帽を好んで被っている。帽子以外は基本的に自由な出で立ちだが、春先はまだ冷え込むのでそれなりの厚着は必須となる。今日はタートルネックの白いセーターにジーンズスカートという詩織に負けじと地味な服装だが、詩織は更に地味な黒のトレーナーとジーパンである。髪はオーソドックスなショートカット。

「だつてさー」

綾香は横を向き、テーブルに頬をつけた。「先週の『生音（正式名称、生で音楽SHOW）』は大成功やったとに、まさか今週のヒットチャートで五十二位まで落ちるとはさー。十六位から五十二位ばい？　なん、この落差。エンジェルフォールでもここまで落差ないばい」

「いや」

フライドポテトをひとつまみする詩織。もぐもぐと口を動かしながら続ける。「エンジェルフォールって水が拡散して滝つぼがないらしいからね。やっぱりもの凄い落差だと思っよ」

「誰がエンジェルフォールの話をしとるんよ！」

綾香が声を上げて、ドンと机を叩いた。

先週の『生音』は詩織もチェックしてはいた。幻想的なステージでやや自己陶酔的にデビュー曲『クレセントムーン』を歌う綾香の姿はそれなりに印象に残ったものの、なんとなく『らしくない』という感想を彼女は抱いた。それに、先日他の友達とカラオケに行った時の話である。

「聞きたい？」

「聞きたい聞きたい」

そう返事をしてから、ストローでチューとコーラを飲む綾香。詩織のポテトにまで手をつける。落ち込んではいるらしいが、食欲はいつもと同じだ。

「その子はさ、綾香のことも、私と綾香が友達だったことも知らない子なんだ。そんな子が『クレセントムーン』をカラオケで歌ったわけよ」

「ええ！？」

綾香は瞳を輝かせた。詩織に顔を近づけて問いただす。「チロリンファンなん？」

「私も聞いてみたんだけどさ。『別に綾川チロリのファンじゃないけど、この曲好きなんだよね』だって」

「ふーん」

つまらなそうに唇を尖らせる綾香。「まあリアンさんプロデュースの曲やけんね」

「でね」

詩織は人差し指を立てた。「その子はこう言うわけよ。『綾川チロリじゃなくてリリアンに歌ってほしかったな』って」

しばし沈黙。綾香が詩織のポテトを次々とパクつく動作にのみ、時の流れを実感する。詩織がそんな綾香の右手をピンと指で弾き、綾香はようやく動作を止めた。

「そんなこと言われてもな」

綾香は頬づえをついた。「リリアンさんはアジアのみならず欧米でも人気上昇中の、まさに『世界の歌姫』ばい？ 『佐世保の歌姫』じゃスケールが違うよ」

「あんたが『佐世保の歌姫』だってことは、佐世保の皆さん公認なの？」

詩織のその指摘には答えず。

「それでも私だって、リリアンさんの恥にならない程度の歌唱力を持つとるつもりよ」

今度はフォークでパンケーキをパクつく綾香。それは一応自分で注文したものだ。

「私は歌のことあんまり分かんないからさ。綾香とリリアンさんの歌唱力の違いもあんまり感じないよ」

「そう？」

綾香は目を丸めた。何かを期待するような瞳の色をしている。しかし、詩織の次の一言は彼女のそんな期待を儚く打ち砕いたに違いない。

「ただ、世間一般的な視点で言わせてもらおうとき。あんたが『クレセントムーン』を歌う姿の後ろ、もしくは上に、常にリリアンさんがいるんだよね」

『バスケット』を出て、二人は同じく吉祥寺駅構内の大手外資系CDショップ『センチューレコース』にいた。店内はやはり高校生が目立つが、『バスケット』ほど混雑している様子ではない。

まあ、CDショップがファーストフード店なみに混雑していたら、落ち着いて物色することもできないであろう。

邦楽コーナーで好きなバンドの新譜をチェックする詩織。音楽は携帯のダウンロードで済ませるタイプなので、元々購入する予定ではない。しかし、しばらく見て回るとどうしてもほしいCDがでてきてしまうものだ。マイナーロックバンド『ジャロップ』の新譜がそれだ。

うーん、どうしようかな……。

財布の中身をチェックする。実家暮らしとはいえ学生である。無駄な金など一銭もない。やはりあきらめることとし、CDを棚に戻した時、どこからか綾香が湧いて出てきた。

「詩織詩織ー！」

なんだか上機嫌である。「ほら、『クレセントムーン』。『店員さんのおすすめシール』貼ってあったんだよ」

「へー」

CDを手渡され、興味なさそうにジャケットを眺める詩織。やたら化粧の濃いカメラ目線の綾香の右上に、確かにそのようなシールが貼つてある。「こんなジャケットだったんだね」

思わず口にしたその一言で何故か空気が一変する。「え？」と綾香の顔を確認すると、彼女は眉間にしわを寄せ、じっと詩織を睨みつけていた。

「詩織……。前に電話で聞いた時、CD買ったって言うてくれたよねえ。なんでジャケット知らんとよ」

「あ、それはその……」

ようやく事の重大さに気がつく詩織。本当は彼氏である田之上裕作が購入し、それを録音してもらっただけなのである（しかもすでに消去した）。

「親友がCDデビューしたってのに、まさか買ってないなんてことはなかるうね！」

綾香は詩織の首根っこを両手でつかみ、ゆさゆさと揺さぶった。

「分かった分かった。買うから許して！」

こうして、欲しかった『ジャロップ』の新譜をあきらめ、親友の  
どうでもいいデビュー曲を買わされるハメになった詩織であった。

#### 4 とりまく人々

「三百五円のお返しです。ありがとうございますー」

橘川夢多はキチンとそう挨拶をしてから、深々と頭を下げた。本当はスマイルで接客しろと言われているが、上手く笑顔が作れないため、徹底した丁寧さでそれを補い、オーナーの信頼を勝ち得ることができた。

前のバイトを辞め、新しくコンビニの深夜バイトを始めてから、まもなく二ヶ月が経過しようとしている。現在は春休みに突入しているため特に問題はないものの、大学期間中は前のバイトに比べ勤務時間が長く、しかもバイトが明ければ、次はすぐに大学というサイクルなため、毎日が眠たくて仕方がなかった。しかしながら、大学は店から目と鼻の先で効率が良いし、知った顔が同僚にいるというのはかなり気が楽なものだった。

「なかなか様になってきましたね」

橘川と同じく『デイリーマート』のシマウマのような白黒の縦しま制服を着た大田早苗が、橘川に笑いかける。ショートボブカットは相変わらず。自慢の美貌を眼鏡で封じ込めていることも相変わらずだ。「オーナーも言っていましたよ。『俺が現役を退いたら、橘川にこの店を継いでもらいたい』って」

「いや、それじゃあ大学に行ってる意味が……」

「説得はオーナーに直接お願いします」

ニコツとまた微笑む早苗。「それじゃあ私はドリンクを補充してきますので、お客さんが多くなったら呼んでくださいねー」

そう言っただけで早苗はバックルームに姿を消した。ポツンと一人取り残された橘川は、カウンターに手をつき、ぼおつと壁の時計に目を向けた。只今午前一時を回ったところだ。学校の一般的な教室ほどの広さの店内には、立ち読み客の男性が一人のみ。有線放送のロックナンバーがやけに耳につく。



昨年の秀英大学文化祭、すなわち秀英祭で知り合った大田早苗ほか五人の後輩たち（秀英祭ツアー実行委員）とは未だに交流があった。特に学科が同じ早苗とは時折昼飯を一緒に食べるほどの仲で、同じく実行委員の肥満男子学生皆岡はじめなどに『イブは一緒に過ごすんですか？』とからかわれたこともある（イブは彼ら五人と一緒にミニパーティーを行ったため、結果的に一緒に過ごしてはいたが）。

早苗がこのコンビニでバイトを始めたのは昨年の十一月頃で、橘川が彼女に誘われてバイトを移籍したのが今年の一月である。橘川と同時に一年生のギャル系女子大生大庭みなみも誘われ入店したが、彼女は主に学校終わりの夕方から勤務している。

近所ということもあり、店にはよく秀大生が訪れる。特に秀英祭ツアー実行委員の面々は、用もないくせに度々と来店してくる。春休みになって若干頻度は下がったものの。

「おつかれっすー」

「こななふうに……」。

「おつかれ。どうしたの？」

橘川は、たつた今自動ドアから店に入ってきた藤岡茂に向かって言った。どこかのサッカーチームのユニフォームの上から厚手のジャケットを羽織り、ダボダボなジーンズをはいている。トレッドマークの坊主頭は野球帽の下だ。眼鏡は昨年未あたりからかけなくなった。コンタクトレンズに移行したのだろう。「もう一時過ぎてるよ」

「友達とボウリングに行った帰りなんですよ」

ボウリングの球を投げるジェスチャーをしながら藤岡は答えた。

「橘川さんサボってないかなーっと思っただけ様子見に来ました」

「別にサボってないよ。あ、いらっしやませー」

新しく入店した客に挨拶をする。それから再び藤岡に顔を向け。

「早苗ちゃん奥にいるから。話していけば？」

「あ、はい。と、その前に……」

そう言つて藤岡は雑誌コーナーまで歩き、一冊の雑誌を手に戻つてきた。「売り上げに貢献したいと思います」

「『フェロモンズ』か」

月刊男性ファッション誌である。先々月号は確か橘川も購入した。彼の愛する綾川チロリのショートグラビアが載っていたからだ。「今月号は……。あ、松尾和葉」

「へへ」

いやらしい笑顔を浮かべる藤岡。「やっぱ和葉の巨乳はたまりませんよね。もし直接会うことができれば、ガバツと乳揉んでみたいな。こいつ、馬鹿っぽいから許してくれそうだし」

「即、お縄だと思うけど……」

そう呟いてから、橘川は『フェロモンズ』の表紙を飾つた松尾和葉をまじまじと眺めた。ランニングシャツとオーバーオールを重ね着し、やはり胸の谷間をはっきりと強調させている。続いて視線を和葉の顔にスライドさせる。幼さの残る屈託のない笑顔が実に魅力的である。チラツと藤岡の様子を窺う。彼は財布の中をまさぐつてるところであつた。

やっぱ信じてもらえないだろうなあ……。

秀英祭後に改めてテレビで松尾和葉を目撃した時、橘川はすぐさま『あの子だ！』と心の中で叫んだ。髪型は違つし、化粧の雰囲気も違つ。何より性格は百八十度違つたが、前に書店で知り合った女子高生アイドル羽山美穂その人だと直感した。そもそも美穂と初めて会つた時に

彼女に対して『テレビで見たことがある』という感想を抱いたわけだが、それはまだ顔と名前が一致していない時に観た松尾和葉だったのだ。

橘川はどうも釈然としなかった。なぜ彼女は羽山美穂などという名を名乗ったのだろう。それじゃあ応援しようにもできないじゃないか。それとも応援して欲しくはなかったのか。

うーん……。

と、始めは不思議に思った橘川だったが、今ではその答えにこだわる必要はないと考え直している。相手は超人気アイドルだ。自分のことなどとつくに忘れているだろうし、もう彼女と再会することもないだろうから答えは永遠に明かされない。考えるだけ無駄。きつと彼女なりの事情があったに違いない。

「あつ……」

橘川が思わずそう呟くと同時に、藤岡が天井を見上げた。BGMが変わったのだ。幻想的なピアノのイントロ、これはもちろん……。「これ知ってました？」

藤岡が天井を指差した。「綾川チロリのデビュー曲なんすよ。あいつ久々にメール送ってきたかと思えば、『私のCD買え』ですからねー。俺は買ってませんけど、大田やみなみは買ったみたいですよ。橘川さんもどうですか？」

「か、考えとく……」

嫉妬の嵐を抑えながら、橘川はなんとかそれだけ口にした。もちろん、綾川チロリのデビュー曲は視聴用、保存用とすでに二枚購入している。未だ彼は、隠れチロリファンから抜け出せないでいるのだ。

橘川は今一度『フェロモンズ』の表紙に目を落とした。

松井和葉にはチロリちゃんより大勢のファンがいるしな。やっぱり俺はチロリちゃん一筋だ。

## 5 太陽と冥王星

帰りのホームルームを終え、オーソドックスな学生服に身を包んだ男子たち、セーラー服に身を包んだ女子たちが思い思いに帰り支度を始める。

「ふあーあ」

口を大きく開け、あくびをする羽山美穂。ふと親友の河内那美が真横から顔を覗きこんでいることに気がつき、そちらに顔を向ける。那美はニヤニヤと人をからかうような笑顔を浮かべていた。

「ダメだよー」

美穂の席の前方に回りこみながら那美は言う。「アイドルがそんな無防備な顔見せちゃ。うちのクラスにだって和葉ファンはたくさんいるのに」

「最近仕事が忙しくてさ」

頬づえをつき、ハアと溜息を吐く美穂。中指で眼鏡の位置を整える。「仕事が終わってから試験勉強すると、どうしても午前さまになっちゃってね……」

約一週間後に一年間の総決算となる学年末試験を控えている。この試験で美穂があんまりな成績に終わってしまうと、もう一度高校二年生をやるハメになってしまう可能性があった。

「もし留年しても、留年したアイドルなんて珍しいからそれはそれで面白いんじゃない？」

那美のその言葉を「馬鹿言わないでよ」と一蹴し、美穂はまた大きなあくびをした。

「美穂、今日は仕事休みだったよね？」

昇降口へ向かう道中、一階の職員玄関の前あたり。那美が突然美穂にそう尋ねた。那美の目を一瞥し、「うん」と頷く美穂。「私も

今日バイト休みなんだ。二人で一緒に勉強しない？」

「一緒にかー」

うーん、と美穂は眉間にしわを寄せ唸った。今までの経験から、那美と一緒に勉強をしたら会話が弾んでしまい結局なんの実にもならないという事態を不安視する。

「でも、せつかく誘ってくれたのに断るのも気が引けるしなー、って感じ？」

那美に心の中を読まれ、「うぐっ」と言葉を失くしてしまう美穂。どちらからともなく歩を止める。

「大丈夫だって」

那美はドンとグーで胸を叩いた。「美穂が留年しちゃったら寂しいし、そもそも私だって真面目に勉強しないとヤバイからね。私語は慎むからさ」

「そうだね」

美穂は微笑み、眼鏡のフレームを指で持ち上げた。「せつかく二人とも休みなんだし、別々に勉強することもないよね」

「そうそうー！」

那美が元気にそう言って歩き出し、美穂も彼女に続こうとした時、不意に背後から呼び止められた。

「羽山さん」

同時に振り返る美穂と那美。二人ともキョトンとした表情になっている。彼女たちを呼び止めたのは同じクラスの長岡という男子生徒だった。色が白くハーフのような顔立ちの美少年タイプで、教室ではよく一人で読書をしている姿が見受けられる。美穂はこの瞬間、彼と初めて口を利いたばかりか、彼が声を発したのを始めて目撃した。

「なに？ 長岡くん」

名前を知っている生徒はキチンと名前を呼ぶ。美穂が学級の一員であるために、常に心がけていることだ。

「ちょっと話があるんだ」

美穂を真つ直ぐに見つめ、長岡は言った。「時間をくれないか？」  
「わ、久しぶりだね」

那美が美穂の腕をひじて突いた。おそらく美穂が告白を受けると予想しているのであろう。初めてのことではない。もちろん、美穂も同じ想像をしている。美穂は困惑の表情を浮かべ、それからうつむいた。そつと那美を指差す。

「今から彼女と一緒に勉強するから」

そつ返事をして断ろうとするも「ちよつとだけでいいんだ」と長岡は聞き入れようとしない。再び唸り声を上げる美穂。

「気にしないでいいから」

那美が美穂にそう笑いかけた。「行っておいでよ。私、正門のところで待ってるからさ」

「いや、そうゆうわけには……」

力なく笑う美穂の背中を、那美が両手でドンと押した。

結局、長岡に連れられるがままやってきたのは、中庭の大きな池のほitoriである。ベンチが一つ置いてありカップルには人気があるものの、校舎に挟まれているため他の生徒から丸見えとなってしまう点が、美穂の心を更に沈ませた。キョロキョロと四方を確認する美穂。校舎の窓から生徒が顔を出しているという以前に、すぐ脇の渡り廊下を幾人もの生徒が通行していく。中には自分が松尾和葉と羽山美穂だということを認め、立ち止まって好奇心一杯の顔で見物する生徒もいる。おまけに上履きのままなので、足元も非常に気になる。いったいなんでこんな場所を選んだのだろう、と美穂は思った。

「長岡くん。悪いけど」

長岡が口を開く前から美穂が出し抜けに言った。「私のこと知ってるよね？ 私のお仕事とか」

「知ってるよ」

大きく頷く長岡。そしてその後が続いた言葉は美穂にとって全く予想外のものだった。「こちらこそ悪いけど、君のことはどうでもいいんだ」

「はい？」

美穂は目を丸めて固まった。「わ、私のことはどうでもいい？」

「そう」

腕を組み、長岡は当たり前のように頷く。

「じゃあ、なんでこんなところに呼び出したの？」

長岡を睨みつける美穂。彼女は少し苛立っていた。トップアイドルとしてのプライドをズタズタにされた気分である。「用がないなら帰るよ。那美待たせてるんだから」

「よく言うだろ？ 二人並んでた場合は本命じゃない子のほうに話しかけるって」

渡り廊下に向かいかけていた美穂の足がピタリと止まる。彼女は何かを探るように数秒間長岡の表情を観察した後、たまらず一言口に出した。

「那美？」

長岡は答えず、代わりに美穂に背を向けて大きく両手を広げた。

「彼女は僕にとって太陽なんだ」

やたらと大声で演説を始める。「あの女神のようにすべてを優しく包み込む笑顔。君というスターの引き立て役に甘んじながらも、決して愚痴をこぼすことはしない聖人のようなスケールの大きさ。僕以外の男子にとって、彼女は君、すなわち太陽の周りをぐるぐる回る惑星にしか見えないだろうが、僕にとっては逆。彼女が太陽で、君は火星だ」

「帰っていい？」

きびすを返す美穂を「ち、ちょっと待って」と慌てて引き止める長岡。

「ゴメン火星は言い過ぎた」

冷たい視線を送る美穂の顔を、長岡はビシッと指差した。「冥王

星だ！」

「それ、太陽系ですらないじゃん」

クイツと中指で眼鏡のフレームを上げる美穂。「長岡くんが那美にぞっこんだったってことと、意外と鬱陶しい人だったってことは分かったよ。それで、なんで那美じゃなくて私を呼び出したわけ？」

「聞いて驚くな」

フフフと長岡は不敵な笑みを浮かべる。「本当は『河内さん』と声をかけるつもりだったが、めちゃくちゃ緊張して直前で君に変更したんだ。それにしてもしつこく食い下がってしまったけど、あのまま君を帰したら誤解されてしまうだろう」

美穂は渡り廊下に向け、歩き出した。



## 6 実力派アイドル

サニーダイヤモンドプロダクションのオフィス内を悠然と歩く池田綾香。フードとジツパーの付いたグレーのトレーナーのポケットに両手を差し込み、デニムのホットパンツから長くはない足を伸ばす。彼女の履くハイヒールのカツカツという足音が、電話のコール音やパソコンのキーボードを打つ音に混じる。

「わー、チロリちゃんだー。久しぶりー」

一人の若い女性スタッフが声を上げる。綾香は歩を緩めずに「ども」と野球帽を被った頭を下げた。「チロリさん、おはようございます」「チロリちゃん、おつかれー」と、スタッフに声をかけられる度に、「ども」「どもども」と返事をし、ひたすら前に進む。

なんとというウエルカム状態。今やSDPを支えとるのはこの私なんやねー。

綾香はしみじみと思った。そして、胸の奥からこみ上げてくるものの気配を感じたが。

「おせーよ。B級アイドル」

マネージャー南吾郎のその一言でシユンと萎んでしまう。オフィス最奥の南のデスクの前で、ゲソツとした顔になり立ち止まる綾香。南はシュボとライターで煙草に火をつけ、ふうと紫煙を吐き出した。スキンヘッドにサングラス、黒スーツといういつもと同じスタイルである。「お前ん家、吉祥寺駅のごく近所だろうが。呼び出してから一時間もかかってんじゃねえ」

「なんよー」

綾香はプクツと頬を膨らませた。「オフの日に、しかもこんな朝っぱらから呼び出しといて、なんちゅう言い方するとよ。女の子がバツチリと支度するには時間がかかるとばい。特に私みたいなトップアイドルは」

「デビュー曲が三週でヒットチャート圏外になってしまっトップア

アイドルか」

椅子にもたれかかり皮肉めいた口調で南は言う。綾香の胸にグサツとナイフが突き刺さる。

「レ、レコード会社の売り出し方が悪いんよ」

綾香はプイツと顔を背けた。もっとうこう広告を電車とかに出してさ。いや、電車本体の柄を私にすればいいんよ。『チロリン号』」

南は大きく頷いた。

「そう、売り出し方だ」

思いのほか肯定されたので綾香は一瞬キョトンとしてしまったが、すぐにその真意を悟り、唇を尖らせる。

「ようするに今日は」

うつむき加減になり、上目づかいで南の表情を窺う綾香。「この先引き続きバラード路線でいくか、アイドル歌謡曲路線でいくかの話し合いつてこと？」

「いや、違う」

また煙をゆつくりと吐き出す南。「アイドル歌謡曲路線でいくか、次のシングルを出すのをやめるかの話し合いだ」

綾香はつつおとしのようにガクツとうな垂れるのであった。

オフィスから、SDP御用達の喫茶店『ビリーブ』に場所を移した。店内に相変わらず客の気はなく、この店大丈夫なんかなと少し心配になる綾香。毎度お馴染み、一番奥の四人がけテーブルに綾香と南は向かい合わせて座っていた。

「どっちにしろリアンが曲をプロデュースしてくれるのはデビュー曲のみの約束だったはずだ」

煙草に火をつける南。「他のライターに同じようなバラードを提供してもらったとして、『クレセントムーン』以上の売り上げを期待できるか？」

綾香は答えず、ずずつと音を立てブラックコーヒーを啜った。苦

味に顔をしかめる。

「それから噂ではあるが……」

南はトントンと灰皿に煙草の灰を落としながら言った。「来月出すリアンのニューアルバムに『クレセントムーン』のセルフカバーが収録されるらしい。これでお前の歌う『クレセントムーン』は世間の皆様の記憶から綺麗サッパリ消えてしまうわけだ」

「えー」

コーヒーにスティックシュガーを入れつつ、ふて腐れた表情になる綾香。「リアンさん。『この曲はあなただけのものよ』って言うてくれたのに」

「こんなに売れないとは思わなかったんだらう」

南はサラッとそう言い放ち、彼もコーヒーに口をつけた。椅子の上でずっこける綾香。

「分かったよ！」

綾香は勢いよく立ち上がった。テーブルが揺れ、コーヒーがさざ波を立てる。「アイドル歌謡曲でも、パンクでも演歌でもなんでもいいけん、早く次のシングル出させてよ」

「まあ座れ」

南がちよいちよいと人差し指で『座れ』の合図をする。おとなしく着席する綾香。「確かにお前はそれなりの歌唱力を持っていて、その歌唱力が最も生かされるのは『クレセントムーン』のようなラブレードだろう。そうゆう意味では、『クレセントムーン』もあながち無駄だったとはいえない」

「どうゆうこと？」

明らかに不機嫌そうな顔で綾香はそう尋ねた。コーヒーにまた口をつける。

「世間にお前の歌唱力を印象づけることができたってことだ」

南は愛用のビジネス鞆の中から数枚の書類を取り出した。「それを見てみる」

綾香は書類を一枚手に取り、言われるがままそれに目を落とした。

「なにこれ？ ランキング？」

首を傾げ、南に尋ねる。南は「ああ」と頷いた。

「全国の『センチユリーレコード』で毎週行っているアンケートだ。今週のアンケート内容は『歌唱力があると思う女性アーティスト』でその結果だな。お前の名前がちゃっかり二十七位にランクインされてる」

「ほ、本当だ！」

パツと綾香の顔が明るくなる。「すごいばい！ 人気デュオの力  
ノンよりも上！」

「それから二枚目」

ランキング表を放り捨て、すぐに二枚目の書類を手に取る綾香。

「こないだ出演した『生で音楽SHOW』の視聴者の反響だ。お前のステージに対しての感想は、『歌が上手い』が『曲が良い』を若干上回っている」

「ホントだホントだ！」

綾香は満足そうに何度も何度も頷いた。「こんだけ反響あるとに、  
なんで売れんっちゃろうね」

綾香の投げかけには答えず、南は新しい煙草にライターで火をつけた。

「とにかく。世間はお前の歌唱力がある程度認めている。これはすなわち、この先出す曲がアイドル歌謡だろうが、パンクだろうが演歌だろうが、お前は実力派アイドルとして扱われ続けるということだ」

「実力派アイドル……」

綾香はほんの少し頬を赤らめた。その言葉の響きが気に入り、心  
の中で何度も口にしてみる。

「先日お前が所属するレコード会社『万有レコード』の担当ディレクターと打ち合わせを行った」

煙草に口をつけ、またふうと吐き出す南。やがて、懐から一枚の紙切れを取り出す。「双方合意の上で新鋭の音楽プロデューサーを

お前につけることにした。週末、ここでそいつに会ってこい」

目をパチパチとさせ、綾香は紙切れを受け取った。紙切れには『ミュージックスタジオ ジュピター』の文字と、その住所と連絡先だと思われるものが記載されていた。

## 7 迷い子少女

週末の午後一時ほど。御茶ノ水駅に降り立った池田綾香は、案内板を参考に文京区側へと歩いた。すぐに、彼女も何度か足を運んだことのある所属レコード会社『万有レコード』の本社ビルが姿を現す。しかし、綾香はそこを素通りし、更に北へ向かった。道中、一人の中年女性に道を尋ねそのとおり歩いてみるも、なかなか目的の場所にはたどり着かない。駅から少し離れると、途端に道が入り組み出し、もはや自分がどこを歩いているのか分からないほどだ。

こんなん地元の人じゃないと見つけきらんやろ。迎えの一人でも寄せせつちゆうに。

ハアハアと息を切らしながら、心の中で毒つく綾香。家を出る時少し寒かったため、ダツフルコートを着込んでしまったが、今は暑くて仕方がない。見知らぬ地をもう一時間も彷徨っているという精神的、肉体的疲れも影響しているが、そもそも昼過ぎから陽が照り始め、気温がかなり上がってしまった。三月ももう中旬、少し遅い春の訪れということが。

あ、そうだ。

綾香は人気のない路地裏で立ち止まり、携帯電話を取り出した。南にもらった紙切れには住所の他に電話番号も書いてあったではないか。とりあえずは道を教わり、あわよくば迎えに来てもらおう。

コール音の聞こえる携帯電話を耳に当てながら、綾香は近くの石段に腰かけた。手を内輪にして顔を仰ぐ。野球帽を脱ぎ、汗を拭いてまた被る。

《はい、もしもし。『ミュージックスタジオ ジュピター』です》  
若そうな男性の声だ。

「あ、もしもし？」

綾香はよそゆきの声で言った。「えーっと、ちょっとお伺いしたいんですけど、そちらへ行くにはどう行けばいいんでしょう。御茶

ノ水駅から徒歩十分ですよね？」

《今どちらですか？》

その質問に眉をひそめる綾香。こっちが訊きたいよと心の中でぼやく。

「なんか裏の路地みたいなどころなんですけど、目の前にオータムピアノスクール、それから水田歯科クリニックってのも見えます」  
《近いですねー》

綾香は目を丸める。彼女にとって予想外の返答であった。《あなたの後ろに英語で書かれたうちの看板がありませんか？》

背後に目を向ける綾香。すると、彼女が座っている石段の先に古ぼけた扉があり、その脇に『ミュージックスタジオ ジュピター』と英語で書かれた看板が確かに存在する。

「あ、ありました……」

赤くなつて答える。男性は《それじゃあどうもー》と一方的に電話を切つてしまった。綾香はカシャツと携帯を閉じ、ぼうつと扉を見つめた。扉は不透明中は見えないし、そこが音楽スタジオであるという気配はまるでない。

「こんなん、分かるはずないやん」

綾香は言い訳のような独り言を呟いてから、立ち上がり扉に向かって歩き出した。

「ご予約はありますか？」

入店するやいなや、狭いカウンターの向こうから男性がいきなりそう尋ねてきた。おそらく電話に対応した若い男性である。黒のロングヘアーで、緩やかなカーブがかかっている。耳と唇にいくつかピアスを付けており、革のジャケットを羽織った身体のいたるところにもアクセサリーが光る。そんな風貌とは裏腹に、ルックスはいたって子供っぽい。

「えーっと」

マナージャー南吾郎に聞かされた名前を思い浮かべる綾香。「トーマス岸辺さんっていう人がここで私を待ってるって話なんですけど」

「ああ」

男性は二度頷いた。そしてカウンター脇の狭い通路を指差す。「聞いてます。一番奥のスタジオDにいらっしゃいますよ」

男性に会釈し、綾香は狭い通路を進んだ。彼女が何度か足を運んだことのある別の音楽スタジオとは少し違う雰囲気だ。暗い照明。ところ狭しと貼られたポロポロのポスター。なんというかアンダーグラウンドな場所で、どちらかというとデビューイベントを行った、ライブハウスに近いイメージである。

スタジオD。ここか……。

扉の半分ほどのスペースを使い馬鹿でかく『D』とだけ書かれた、部屋の前に立つ。ノックをし、数秒間待ってみるが応答はない。音楽スタジオといえば完全防音。外からのノック音も聞こえないのかもしれない。綾香は扉についた大きな取っ手を捻り上げ、重い扉をゆっくりと開けた。

ん……？

部屋は六畳ほどの広さであった。ドラムセットやマイクスタンド、アンプなどの音楽機材が目につくが、人の姿は見えない。綾香は中に入って扉を閉めた。通路とは違い、比較的明るい部屋だ。ひとつおり部屋を見回した後、彼女はまずダブルコードを脱いだ。コードの下はキャミソールとサマーセーターの重ね着に、厚手のショーツスカートといったスタイルである。

「どどど、どうもです」

突然どこからか声が聞こえ、綾香は「ひっ！」と驚いて飛び跳ねた。声のしたドラムセットの付近を凝視する。やがて、ドラムセットの後ろからひょこっと一人の男性が顔を出し、再び飛び上がる。



「わー！ 変態！」

「へへへ、変態じゃありません」

綾香に歩み寄る男性。綾香のほうは逆に一步後ずさりをする。「僕がここに、この度君をプロデュースすることになったトーマス岸辺です」

「あ、あなたが……？」

綾香は怪訝そうな瞳でトーマスの全身をじろじろとなめ回すように見た。ワイシャツの上にカーディガンを着用し、下はスラックスというビジネスマン風の出で立ち。身長は綾香とほぼ同じ。お腹がポッコリと前に出ており、髪の毛は焼け野原のように寂しい。「えーっと。失礼ですがお歳は……」

「二十八です」

申し訳なさそうにトーマスは言った。また驚きの表情を見せる綾香。髪の毛だけで見れば五十代にしか見えない。

「そ、それと」

若干顔を曇らせながら綾香は言った。「なんでドラムセットの後ろに隠れてたんでしょう」

「いや……」

どこからかハンカチを取り出し、額を拭くトーマス。あのハンカチにだけは触れたくない綾香は心から思った。「ととと、突然ドアが開いたからビックリしちゃったんです。ひよっとしたら幽霊でも訪ねて来たんじゃないかと思って、気がついたら隠れてました」身振り手振りを用いて大きさに説明するトーマス。目、鼻、口、不自然なほど小さな顔のパーツたちも、顔面を自由気ままに散歩する。

「ゆ、幽霊……？」

綾香はトーマスに冷たい眼差しを送った。そして不安になる。いや、実は彼と初めて対面した瞬間から、薄らとその感情は存在した。こめかみあたりを一筋の汗が流れる。それに気がついたらしいトーマスが「あつ」と綾香にハンカチを差し出した。

「どろどろどろどろ」

「あ、どうも……。っていきりませんいきりません！」

……。

この人が私の新しいプロデューサーなわけ？ 私、この先いったいどうなるん？

## 8 凄腕プロデューサー

「ささ、チロリさん」

トーマスが綾香の背後に回り込み、彼女の肩をガツシリと掴んだ。「えっ!？」と狼狽し、後ろを確認しようとする綾香であったが、有無も言えぬままトーマスに肩を押され、ドラムセットのほうへと誘導されてしまう。「長旅ご苦労さまでした。足が疲れたでしょう。どうぞお座りください」

ドラムセットの後ろまで来たところで綾香は理解する。そこにこの部屋唯一の椅子があったのだ。彼女は遠慮なく椅子に腰かけ、ふうと大きな息を吐いた。ダツフルコートをひざの上に置き、それから両手を前で組み、やたらとニコニコした顔で脇に立つトーマスを見やった。

「ここってスタジオなんですよね……」

近くにあったドラムセットの大きく太いシンバルをなんとなく指で弾く綾香。コーンと意外に重い音が鳴る。「なんか私の知ってる場所と違います。ガラスで仕切られてないし、マイクも小さいし」

「そそそ、それはレコーディングスタジオですね」

ハンカチでちょこまかと顔全体を吹き上げるトーマス。「ここはリハーサルスタジオ。主にバンドマンの子なんか練習に使うんですよ。レコーディング機材は一切ありませんし、ミキサーもいません。今日は自己紹介と軽いセッションだけ行う予定でしたから、安い練習スタジオで充分なんですよ」

台詞にスピードの緩急があり、聞き取るのに無駄な労を要する。少し時間をかけ理解できたところで、綾香は「はあ」と適当な相槌を打った。

「うちのマネージャーは新鋭のプロデューサーだって言ってたんですけど」

一応、機嫌を損ねてしまわないか上目づかいでトーマスの表情を

窺いながら話す綾香。しかし、彼の機嫌が悪くなる気配はまるでない。「トーマスさんって今までに誰かアーティストをプロデュースしたことはあるんでしょうか」

「ももも、もちろんあります」

ドンと右手で胸を叩くトーマス。「アキバ発のセブンティーンプラネットというアイドルユニットをご存知ですか？ 彼女たちは元々路上で細々とアイドル活動を行っていましたが、僕のプロデューサーにより、地下でワンマンライブを行えるほどにまで成長しました。やはり数秒間リスニングに難航した後、綾香は眉をひそめながら宙に視線を漂わせた。アキバ発のアイドルセブンティーンプラネット……。知らない。

「それってアマチュアの人なんじゃ……」

「アマチュアじゃなくてインディーズですね」

そこは譲らないトーマス。「ままま、まあ、プロのアイドルさんをプロデューサーするってのは確かに初体験ですけど、んでもってプロのアイドルさんを目の当たりにして少々緊張してはいますけど……。一所懸命頑張りますので安心してください」

ガッツポーズを決める彼を横目に、綾香は複雑な表情でまたコーンとシンバルを鳴らした。マネージャー南吾郎の顔を思い浮かべる。クソ……。あいつ、経費ケチったばいね。

「事務所はアイドル歌謡曲路線で行くって言ってますけど」

あきらめたようにはあと溜息を吐く綾香。「曲はトーマスさんが作ってくれるんですか？」

突然シャキとした顔になるトーマス。その様子を見て、綾香は「ん？」と目を丸めた。

「チチチ、チロリさんのプロデューサーになるって話を頂いてから、今までのチロリさんの活動をしっかりと勉強してきました。デビューイベントでは豚のぬいぐるみで登場してスベったり、壺を割って

号泣したり、サバイバルゲームで負けて罰ゲームしたり、先月は番組の企画でフットサルの試合をして、開始一分で足がツツて退場していましたね」

「蒸し返して欲しくない活動もありますけど」

むしろそればかりである。

「こうしてチロリさんの人となりを知り尽くした僕だからこそ、チロリさんにピッタリな曲が作れるんだと思います。先日の『クレセントムーン』、確かにあれも良かったですけど、あれ以上の感動を呼ぶことのできる曲を今回用意させて頂きました」

「『クレセントムーン』以上の感動……」

綾香はまんざらでもないような表情を浮かべる。自信満々なトーマスの様子を見る限り、その言葉がまったくの嘘には聞こえなくなってきたのだ。「そ、その曲ってどんな曲なんですか？」

「ででで、では、とりあえずタイトルを発表します」

トーマスはコホンと咳払いをした。もったいぶったような口ぶりである。「タイトルは……」

「タイトルは？」

ゴクンと生つばを呑む綾香。トーマスは目を閉じた後大きく息を吸ってから、ようやくそれを口にするのであった。

「『やっぱり博多が好きやけん』」

……。

六畳の小さなスタジオ内に冷たい空気が流れ込んだ。

「それじゃあ」

立ち上がり、ダツフルコートを羽織ろうとする綾香。「私はこのへんで失礼します」

「落ち着いてください落ち着いてください」

トーマスが慌てて綾香からダツフルコートを脱がせる。不安げに綾香の顔を覗き込み、彼は言った。「ななな、何か気に入らないこ

とでもありましたでしょうか」

「だって、タイトルを聞く限りやったらアイドル歌謡っていうか、昭和歌謡にしか聞こえんっちゃもん。っていうかコミックソング？」  
「ちちち、違います。断じて違います」

ぶるぶると顔を振るトーマス。綾香の顔につばが飛び、彼女は「わ！」とすぐさま手で顔を拭いた。「チロリさんといえは博多出身で、しかも東京で幾多の挫折を経験しておられます。そんなあなたが地元の博多を想うこの曲を歌えば、大衆の心をガツシリと鷲掴みできるっていうことです」

「今回が最大の挫折になりそうやもん！」

再びダツフルコートを羽織り、綾香はずかずかと扉のほうへ歩いた。「マネージャーには私のほうから言っておきますんで、この話はなかったことにしてください。さいならー」

取っ手を掴み、ひねり上げる。五センチほど扉が開いたところで、背後から聞こえる何とも不穏なサウンドに気がつき、「ん？」と綾香は後ろを振り返った。すると、部屋の中央で立ち尽くし、シクシクとすすり泣くトーマスの姿が視界に飛び込んできた。

「わー！ 泣かんでよ」

扉を閉め、トーマスのもとに駆け寄る綾香。「別に私じゃなくても良かるうもん。あんたが凄腕プロデューサーなら、すぐに新しいオファーが来るっちゃない？」

「チチチ、チロリさんのプロデューサーになることが決まってから、ほかあ毎日チロリさんのことばかり考えていました」

喋り方に加え涙声まで混じり、更に理解が困難であったが、綾香は必死で聞き取ろうとした。「そそそ、それなのにこんなにアツサリと解雇されてしまうなんてほかあ、ほかあ……」

「分かった！ 分かったから」

綾香は両耳をふさぎながら叫び声を上げた。「さっさと『博多が好きですけん』聞かせてよ！ 聞くだけ聞いちゃうけん」  
「違います」

グスつと鼻を噉り、トーマスは言う。「『やっぱり博多が好きや

けん』です……」

「どっちで暮らしてんや……」

## 9 やっぱり博多が好きやけん

トーマスは部屋の隅に置いてある機材のもとまで歩いた。ボタンを操作し、つまみをいじる。相変わらずメソメソとハンカチで目元を拭う姿が非常に滑稽である。

「もういい加減泣きやんでよ」

ドラムセットの椅子に座り直した綾香がうんざりとした口調で言った。トーマスが無言で頷くのを確認し、じつと曲が流れるのを待つ。やがて、部屋中のスピーカーから派手なデジタル音が鳴り響く。管楽器を用いたポップなイントロが、軽快なビートに乗り突き進む。け、けっこういいかも。

蓋を開けてみればアイドル歌謡と言うよりも、パワーポップといった雰囲気の楽曲である。無意識のうちにリズムに合わせて小さく頭を振る綾香。ほのかな期待に胸を膨らませながら、イントロが終わるのを待つ。そして、不気味に可愛い子ぶった男性の低い声がAメロを奏で出した瞬間、綾香は「ちよつと待って！」とトーマスに停止を要求した。トーマスがボタンを操作し、曲がストップする。「どどど、どうしました？」

涙目のトーマスが眉の端を垂らす。綾香は今にも吐いてしまいそうな顔をしながら答える。

「歌が気持ち悪すぎるんですけど……」

「ああ、僕が一オクターブ低く歌ってるんです」

自分を指差すトーマス。久しぶりに笑顔になる。「キーはチロリさんに合わせています。自分が歌っているとイメージして聞いてくださいね」

「わ、私が歌っていると……」

綾香は複雑な気持ちになりながらも、集中し、言われたとおりにしようと決意した。曲が再開する。しばらくはトーマスの不気味なボーカルに心が拒絶反応を起こしていたものの、なんとかイメージ



ングに成功し、次第に自分が歌っているような気になってきた。

トーマス岸辺が綾川チロリのために書き下ろした『やっぱり博多が好きやけん』。

歌詞は、東京への憧れに始まり、挫折を経て博多への愛に還る、といったタイトルどおりの内容。特筆すべきはキャッチーで覚えやすいメロディラインにある。事実、綾香は一度聞いただけでメロもサビもすっかりと心に刻み込むことができた。

曲が終わわり、綾香はまずこう口にした。

「聴きやすい曲ですね」

「はい！」

先ほどまでの涙が嘘だったかのように、感無量といった表情を見せるトーマス。「コンサートで映える曲を作りたかったんですよー。チロリさんが手で煽って、ファンが大合唱するんです」

その光景を思い浮かべる綾香。悪くはないなと思う。

歌唱力に絶大な自信を持ち、自身の愛するR&B系ラブバラードで頂点を極めるという夢はまだ捨てきれてはいない。しかし、今回の曲にはラブバラードにはない魅力も確かに存在し、それをどこかで欲している自分にも気がつく。デビューから半年しか経過していない自分に対して、ファンが望むものはいったい何なのであるうか。

綾香は立ち上がり、マイクスタンドの前まで歩いた。トーマスが小さな目を見開き、彼女の顔を凝視する。彼女は言った。

「一回歌ってみるけん、カラオケバージョン流して」

トーマスから手書きの歌詞カードを手渡され、じっくりと歌詞を確認しながらイントロを聞く。先ほどのイメージングを再び呼び起こし、自分のボーカルを何度もシミュレーションする。そして歌い出す。

「おおー！」

意識の隅で、トーマスが声を上げたことに気がつきつつも、綾香

は自分の世界に入り浸り、歌にのみ全神経を集中させた。目の前に観衆が広がり、歌に合わせて観衆が手拍子をする。綾香は手を上げて答え、それから合唱を促した。「やっぱり博多が好きやけん」がまるで国歌のようなポピュラーナンバーに変貌を遂げた。誰もがその曲を知り、誰もがその曲を愛す。観衆たちの合唱を先導するのは、高校時代のカラオケ三昧の日々と度重なるボイストレーニングに裏打ちされた実力派アイドル綾川チロリの伸びのあるボーカル。わずかに三分ばかりのステージが終わると、観衆はチロリに拍手と歓声を送り、チロリも笑顔でそれに応じてみせるのであった。

「すすす、凄いです！ さすがです！」

トーマスの興奮気味なその声で現実を引き戻される綾香。彼女は「そう？」と照れたように頬をかいた。「歌が上手だということは何存じ上げておりましたが、生で聴くと尚更凄いですねー。僕が歌ったバージョンとは月とすっぽんのようですね」

そんなものと比んでよと心の中で毒づきながらも、綾香は満足げに鼻を鳴らした。

「タイトルはあれやけど、こうゆうファンと一体感が持てる曲っていいね。でも……」

指をあごに当て考え込む。「なんか曲の最後あたりで皆が一つになれるようなフレーズが欲しいかなー。お客さんと一緒にチロリンポーズしたり」

「そそそ、そうですねー」

腕を組んでトーマスも眉間にしわを寄せる。「最後に博多コールでも入れときますか」

「それじゃあチロリファンっていうより博多ファンみたいやん」

冷静にツツコミを入れる。そもそも博多出身ではない彼女自身、それほど博多に愛着があるわけではない。「ま、この曲じゃ難しいかな。次の曲でお願いします」

綾香がそう言った瞬間、トーマスがこの世の絶頂ともいえる幸せそうな顔を見せた。わけが分からなくなり「え？ え？」とつろた

える綾香。トーマスはその表情のまま言った。

「つつつ、次も僕がプロデューサーして良いんですかー」

「あっ」

心の中でしまったと呟く綾香。まだ『やっぱり博多が好きやけん』がヒットするとは決まったわけではない。彼女は一度咳払いをし、言葉を選びながらゆっくりと発言した。「と、とりあえずこの曲がヒットせんと始まらんけんね。うちのマネージャー無情やけん、もしコケたらすぐに他のプロデューサーに代えようとするかもしれないやん」

「じじじ、じゃあ、こうゆうのはどうでしょう」

人差し指を立てるトーマス。「ヒットチャートで『クレセントムーン』の十六位を超えたら次も僕ってことで」

「私が決めるこっちゃないけど」

綾香はうーんと唸り声を上げた。それでまた『クレセントムーン』なみにヒットチャートを駆け下りてしまったては意味がない。「まあ、せいぜい十位以内に入るようやったら、文句なしで次もトーマスさんでいいっちゃない？」

「じじじ、十位以内ですか。セブンティーンプラネットのシングルが、アキバのCDショップで五位に輝いたことならありますけど…」

…」

「その実績は全然当てにならない！」

綾香はふうと息を吐き、またドラムセットの椅子へと帰った。シンバルたちの間に見えるトーマス岸辺の寂しい頭を眺めつつ、セカンドシングルの行く末を少々不安に思う。

博多への愛を歌った曲か……。こんなん本当に流行るとかいな。

その時彼女は何気なく鼻歌を歌っていた。それは『やっぱり博多が好きやけん』のサビのメロディーであった。

## 10 アイドルな彼女

四月に突入してから数日が過ぎ、井の頭公園の桜もすっかり満開となったある夜のこと。

二人前のインスタントラーメンを盆に乗せ、キッチンからリビングまでの短い距離を、汁をこぼさないように慎重に運ぶ。無事にリビングのテーブルに盆を置き終えた後、井本真一はふうと息を吐き、額の汗を拭った。地味なグレイのトレーナーに、愛用のジーンズを着用している。

「おい、綾香。飯だぞ」

ソファで眠りこける恋人池田綾香の頭をガシガシと蹴る。「ん」と呻き声を上げ、ゆっくりと身体を起こす綾香。分かりやすいほどの寝ぼけまなこで、薄らと茶に染めた髪の毛のところに寝癖がついている。胸元の開いたシャツにブラウスの重ね着。下はピチツとしたブルージーンズを履いている。おそらく外から帰った時のままであろう。その証拠に、ソファの足元に彼女愛用のポーチが転がっている。

「あら？ 久しぶり。帰つとつたー？」

目をこすりながら間の抜けた声で綾香は言った。それから、すぐにテーブルの上のラーメンに気がつき、ひよいとテーブル前に移動する。「わー。ぶるうす直伝のラーメンやね。どうしたと？ お店から麺とスープ盗んできた？」

「インスタントだよ。馬鹿」

真一もテーブルの前に座り、箸でラーメンをつまみ上げる。綾香は「なーんだ」とぼやきながらもラーメンの匂いを嗅ぎ、「うーん、良い香り」と幸せそうな顔を見せた。

「いやー、一流アイドルは辛いねー」

しみじみと言う彼女。「昨日は夜遅くまでバラエティ番組の収録でき。今日なんか雑誌の取材を三件受けたかと思ったら、午後から

はレコーディングばい。レコーディングが済んでも、今度の曲は振り付けもあるけん、そのレッスンも受けないかとよ。いったいいつになったら心休まる時が来るっちゃろ」

「じゃあ、やめりゃあいいじゃん」

「は？」

ズズツとラーメンを啜る真一の顔を綾香が覗き込んだ。「やめるって何を？」

「アイドル」

ラーメンを口に入れたまま真一は答えた。綾香は一瞬顔をキョトンとした顔を見せたが、すぐにはぐらかすように笑みを浮かべた。

「別にそう意味やないとして」

バンバンと真一の背中を叩く彼女。真一は「ブツ」とラーメンを逆噴射した。「まあ、確かに毎日忙しいけどね。『キャンユー』で週六働いとった時に比べたら全然マシやけん。なんていうか充実度も全然違うし、生活もけっこう楽になったばい」

「まあ、そりゃそうだわな」

綾香を見ずに、真一は言う。「でも本当に時間が合わなくなっちゃったよな。お前、一昨日も収録で朝帰りだったし、俺たちが顔合わせたの三日ぶりだぞ。さっきなんか普通に『久しぶり』とか言いやがって」

うーん、と綾香は言葉を失くしてしまったかのように唸った。二人の間に気まずい空気が流れ込む。真一は少々罪悪感を覚え、その空気をどこかへ吹き飛ばしてしまうことができる団扇を欲した。

彼はテレビのリコモンを手を持った。

「ん？」

テレビ番組に先に反応したのは綾香であった。毎週午後九時から放送されている『エンタメな人々』のようである。各界の著名人十数人が円を作って座り、様々な話題でトークをするという番組であ

る。

「ああ」

真一は納得した。テロップに『好きな女性アイドルは？』とある。どうやらそれがトークのテーマらしく、綾香はそれに反応したのであると思う。今回は番組に出演しているタレントの多くが男性お笑い芸人であり、話題も軽いものが中心なのかもしれない。

出演者の口から様々なアイドルの名前が挙がる。小悪魔アイドル菊田つばきが本当は心優しい子だと力説する者もいれば、巨乳アイドル滝田亜佐美の男らしいエピソードを披露する者もいる。

「あ、裏切り者も出てる」

綾香は言った。『裏切り者』とはカビリオنزのことであろう。

去年の終わり頃から今年の始めになって突如人気が上昇し、綾川チロリを凌ぐサニーダイヤモンドプロダクションの看板タレントとなつたにも関わらず、一ヶ月ほど前に他の大手プロダクションに電撃移籍してしまったため、綾香は彼らのことをそう呼んでいる。

《僕はやっぱり松尾和葉ちゃんですね》

カビリオنزのボケ担当、野田誠が言った。《ルックスや巨乳は言うまでもなく、あのほのぼのとした雰囲気がいいですよ。カメラ回ってないところでもあんな感じなんですよ。思わず守ってあげたくなると思うか》

「嘘だ！」

テレビの画面を指差す綾香。もうラーメンは汁のみとなっている。「こいつ実際会ったらめっちゃ性格悪そうやったもん。前話したやる？ 私にケンカ売ってきたっちゃけん……」

真一に顔を向ける綾香。真一は「ふん」と鼻で笑った。

「だから、どうせお前が何か失礼なことしたんだろ」

井を両手で持ち、スープに口をつける真一。井を置いてから続ける。「結局俺へのサインもしてくれただから、性格悪いわけねえじゃねえか。俺の和葉ちゃんの悪口言ったら、いくらお前でも許さねえぜ」

「私、別に何もしとらんもん」

ふて腐れた顔になり、ぶつぶつと何かを言いながら再びテレビに視線をあずける綾香。カビリオンスのツッコミ担当松岡キャッツが、密かに流行している熟女アイドルへのマニアックな愛を熱弁しているところだ。

「それにしても」

頬づえをつき、綾香の横顔を眺めながら真一は言った。「どこかの一流アイドルさんの名前は全く出ねえな」

「……！」

真一を睨みつける綾香。すぐにプイと顔を背け、「今に出るよ」と強がった。

結局綾川チロリの名前は出ずじまいで、『エンタメな人々』は終了した。癩癩を起こしたようにテレビの電源を切り、リビング隅のパソコンデスクに向かう綾香。

「おい、食器ぐらい自分で洗えよな」

つまようじで歯を掃除しながら真一は言う。しかし綾香は彼を無視し、パソコンを立ち上げてからデスクの椅子に寄りかかって座った。

「次に出すセカンドシングルは少なくとも前作以上の売り上げを記録したいけんね」

両手を頭の後ろで組み、パソコンの起動を待つ綾香。「そのためには固定ファンの増加が必須条件なんよ。ちょっとおいで」

「ちょいちょいと真一を手招く。」

「ん？」

立ち上がり、真一は綾香のもとまで歩いた。「なんだよ」

「さっきの番組みたいに、誰かがあるアイドルのことを好きって話すと、なんだか自分まで好きになったように錯覚することもあるっちゃんね」

綾香は真一にウインクをした。



## 11 ネットの中心で愛を叫ぶ

やがて起動したパソコンのデスクトップからインターネットを開く。マウスを操作し、ブックマークの中のあるページへと移動する。ディスプレイに姿を現したのは満面の笑顔でチロリンポーズを決める綾川チロリのイラストと、『綾川チロリ非公式ファンサイト チロリンルーム』の文字であった。

「お前のファンサイトなんかあったのか」

真一は目を丸めて綾香の顔を覗き込んだ。「しかも、なんでお前がブックマークに入れちゃってんだよ」

「私のファンサイトはネット上に幾つか転がってるけど、中でもここは管理人のチロリンに対する溺愛ぶりと、関係者を思わせるほどの情報の早さ的確さで、チロリンファンの間では聖地と呼ばれとるサイトなんばい。デビュー当時はほとんど人が来んやったけど、そこそこブレイクした今では一日一万アクセスの超人気サイトっちゃけん」

「ふーん」

鼻の穴をほじくる真一。質問の答えになってないよなあ、と思う。「で？ 自分のファンサイトで何するんだ？ 掲示板なんかで自分を褒め称えるわけか？」

「惜しいね」

そう言ってから、綾香はまたマウスを操作した。コンテンツの中の『だいありー』と書かれた場所にカーソルを合わせ、ダブルクリックする。サイト管理者のウェブ日記らしきページに切り替わり、今度は下にページをスクロールさせていく。

「ここの管理人マジでお前の熱狂的ファンみたいだな」

呆れたような顔で真一は言った。「見てみるよ。毎回飽きもせず綾川チロリのどこが可愛いやら、どこが尊敬できるやら書き並べてるぜ。こんなに洗脳されちゃったヤツもいるんだな。可哀想に……」。

ぐえっ！」

真一の脇腹に綾香のエルボーが突き刺さった。

「幸福つてことよ」

ページの一番下の入力バーにカーソルを合わせる綾香。真一は眉をひそめた。それは見た限り、管理ページを表示させるためのパスワードを入力するバーのようであるが……。綾香はカタカタとキーボードを打ち、いとも簡単に管理ページを開いてみせた。

「な、なんでお前が管理パスワードなんか知ってたんだよ」

訝しげに首を傾げる真一に向かって、綾香は「ふふふ」と不敵な笑みを浮かべた。

「私が管理人やけん」

『エンタメな人々』を観て。 name 管理人しん 投稿

日時 2009.4.10 22:18

皆さん『エンタメな人々』は観ましたか。お笑い芸人さんたちが好きな女性アイドルについて語っていましたね。残念ながらチロリンの名前は出ませんでしたけど、チロリンは僕らが応援しているから大丈夫です。負けるなチロリン。フレフレチロリン。

あ、そうそう。今度発売されるチロリンのセカンドシングルはどうやら故郷への愛を歌ったものだっていう噂ですよ。これはファンなら絶対ゲットですね！

「毎晩毎晩何を一所懸命キーボード鳴らしてんだ？ っと思ってたが……」

綾香の肩口からディスプレイを覗き込み、真一ははあと溜息を吐いた。「まさかこんな姑息なことをしてたとはな。空しくならないか？」

「ならない」

キツパリと答える綾香。「管理人は確かに私やけど、掲示板には実際にたくさんの方々が書き込みしてくれるっちゃけん。中にはどうしようもないヤツもいるけど、ほとんどの人は好意的ばい」

「まあ、ファンサイトだしな」

綾香のもとを離れ、ソファに腰を下ろす真一。あくびをしながら背伸びをする。「でも、いくらチロリのファンサイトで管理人がチロリへの愛を連呼したとしても、ファンの増加に繋がるとは思えねえけどな。だって、ファンサイトに来るのは元々お前のファンばかりなんだろう？」

「テレビかなんかで私のことを知って、ふと私の名前を検索してみたくもなるもん。そんな時にこうやってたくさんの方が集まるサイトがあれば、自分も乗り遅れないようにってファンになってしまっわけよ。『あれ、こんなにたくさんの人たちに好かれるってことは綾川チロリってすごいアイドルなのかも』」

「だから、別にわざわざお前が日記で愛を叫ばなくても、ファンにまかせてりゃいいじゃん。ファンなら掲示板でしっかり愛を叫んでくれるだろ」

もはや興味を失っている真一。だらしなくソファにもたれかかり、携帯のメールをチェックする。

「そうそう」

なぜか肯定する綾香。「ん？」と目だけを動かして、真一は彼女の様子を窺った。「私が日記を更新するのはもはや、このサイトが生きてるってことを証明するためって感じやね。やっぱ管理人がおらんくなったらサイトって廃れるもんなんよ。掲示板にもちよこちよこ顔を出して盛り上げてやらんと、あつという間に誰も来てくれなくなるよばい」

「ふーん」

適当に相槌を打つ真一。実は胸の奥底になんとなくだが嫌な予感を覚えていた。「そりゃあ大変だな。まあ、しっかりチロリンファ

んの聖地を管理しろよ」

「それがなかなかねえ……」

デスクに頬づえをつき、しみじみと綾香は言う。「前なら毎日のように日記も更新しとったし、掲示板にも書き込んだっただけだよ、最近は本当に忙しくて……。日記は前に更新した時から三日も空いちやっただし、掲示板もねえ……」

「そうか」

真一はむくつと起き上がった。「忙しいだろうけど頑張れよ」

そして、リビングと隣り合う寝室へ足を運ぼうとした時、一瞬のうちには身体目がけて綾香が飛び込んできた。「うわ！」と声を上げ、綾香共々またソファに倒れ込んでしまふ。綾香が真一にキスをし、頬をすり寄せてくる。

「し・ん・い・ちー」

気味の悪い猫なで声を発する綾香。「愛してるよー。愛してるから私の代わりに管理人やってー」

「ふざけんな！」

綾香の頭を指の関節でコツコツと殴る真一。「俺だって毎日仕事で疲れて帰ってきてんだぞ。なんだってそんな心にもないことを夜な夜なキーボードで書き綴らにやいけねえんだよ！」

「一日三十分もかからんばい」

綾香はムツと頬を膨らませた。

「お前への賛美の言葉を考えてたら半日はかかっちゃう……。ぬ、ぬほおおおっ！」

綾香の膝蹴りが股間を直撃し、真一は雄叫びを上げた。

「別に当たり障りのない言葉でもなんでもいいけんさー」

真一の上半身にまたがり、ガツチリマウントポジションの綾香。真一の胸倉を掴み、ゆっさゆっさと揺さぶる。「なんなら私じゃなくても松尾和葉のことを頭に思い浮かべて書いてもいいけん。ねえ、頼むよー。もしやってくれたら裸エプロンでもなんでもやったるけんさー」

松尾和葉……。裸エプロン……。

遠のく意識の中で真一が認識できたのはそれらの単語のみであった。やがて、それが自分に都合のいいように解釈されていく。

もしやってくれたら、和葉ちゃんの裸エプロン姿の写真をもらってくれるだと……？

「や、約束だぞ……」

そう返事をしたところで、真一の意識はついに途切れてしまった。

## 12 進級

放課後の教室。敢えてのんびりと帰り支度をしながら、羽山美穂はそわそわと周りを見回していた。三人組の女子グループの中の一人と目が合う。くるか、と身構えたものの、三人組は何こともなかったかのように教室を出てしまった。

今日は仕事入ってないのにな……。

美穂ははあと溜息を吐いた。

四月の中旬。高校三年に進学したことでクラスも一新され、親友の河内那美を始め、仲の良かった生徒たちは片っ端から別々のクラスに配属されてしまった。美穂は残念に思ったが、同時に新たな出会いに対する期待感も胸の奥底で密かに膨らませていた。

一週間ほど前の放課後のことである。

帰り支度をしている最中、女子の一人に『お近づきのしるしに今から皆でカラオケ行くんだけど、美穂ちゃんも一緒にどう？』と声をかけられたのだ。しかし、その日はグラビア撮影があったため、泣く泣くお断りしてしまった。

翌日は男子グループだった。『帰りに駅前の『バスケット』寄ってかない？』。ところがその日もバラエティ撮影のためにお断りするしかなかった。

そして、数日間お誘いのないまま、ようやく仕事のオフ日である今日を迎えたわけだが、やはり誰も誘ってはこない。ひよっとしたら『羽山美穂は付き合いが悪い』というイメージが早くも定着してしまったのかもしれない。なんだか悲しくなってしまう美穂。

「羽山さん」

背後から名前を呼ばれ、すかさず振り向く美穂。そこに、何やらもじもじとした様子のおとなしそうな女子生徒が立っていた。

「は、はい？」

さあ、いつでもこいと意気込むがしかし……。

「あの……」

女子生徒は言った。「握手してくれませんか？」

「は？」

美穂と握手を交わし、逃げるようにその場を去っていく女子生徒を寂しげに目で追いながら、美穂は鞆のポケットから携帯電話を取り出した。

那美はバイトかな……。

河内那美に『今日一緒に遊ばない？』とメールを打ってみる。一分ほど経ってから『ゴメン。今日はうちのクラスのメンバーでカラオケ行くことになっちゃった』と返事があった。ガクっとうな垂れる美穂。

教室の中に残っている生徒はもう半分以下になってしまった。そのうちの何人かはスポーツバッグを持っているため、この後は部活動を行うのであろう。美穂はあきらめて立ち上がり、鞆を手に教室を出ようとした。その時だった。

「羽山さん」

教室前方のドアの、すぐ近くの席に座る男子生徒が声をかけてきた。「はい？」と瞳を輝かせて返事をするも、その生徒の顔を確認した途端、その輝きは瞬く間に消えてしまった。河内那美を差し置いて、なぜかまた同じクラスになってしまった長岡であった。

「なに？」

人の名を呼んでおきながら、ひたすらに読書に勤しむ彼を見下ろし、美穂は言った。「長岡くん、この席じゃないでしょ？」

もちろんまだ席替えなどはしていない。本来その席は出席番号が最も若い生徒が座る場所である。苗字がな行から始まる彼が、そんなに若い出席番号を持っているとは思えない。

「ここで廊下を行きかう生徒たちを観察しながら読書するってのも悪くはないよ」

本に目を落としたまま、彼は答えた。「もう放課後だ。この席は誰の席でもないんだよ」

「そう」

そっけなく答えて、美穂はまた教室から出ようとした。しかし、長岡にがつしりと腕を掴まれ、それを阻まれてしまう。驚いて「キヤ！」と短い叫び声を上げる美穂。「な、なに!？」

「率直に言う」

ようやく視線をこちらに向ける長岡。彼の無駄に整った顔立ちを見て、美穂は少しだけドキツとしてしまった。「河内さんのメールアドレスを教えて欲しいんだ」

「ええー……」

美穂は露骨に嫌な顔を見せた。「それはできないよ。那美は親友だし、他の子だったらまだしも、長岡くんちよつと危ないもん」

「危ないことなんてあるもんか」

心外そうな顔をする長岡。「本当はクラスが別々になつて泣き出していましたいぐらいなのに、こうやって必死に感情をコントロールしている僕のどこが危ないって言うんだ。そろそろメールアドレスぐらいのご褒美をくれてもいいだろ」

美穂はふうと溜息を吐いた。髪の毛をいじってから、眼鏡のフレームを指でちよいと上げる。

「そこまで那美のことが好きなんだったら、本当はメールアドレスどころか、直接彼女に紹介してあげてもいいんだけどさ」

美穂のその言葉に、今度は長岡が目を輝かせる。「でも、私は長岡くんのことをよく知らないから。君がろくでもない男だったら、那美に私が責められちゃうでしょ。君がダメ男じゃないって保障はある？ むしろ、私の中でははつきり言っただけかなり印象悪いよ」

片手を口もとにあて、なにやら考え込む長岡。

「分かった」

彼は大きく頷いた。「今からちよつとうちに遊びに来なよ」



「は？」

美穂は思いつきり眉間にしわを寄せた。「え？ なに？ 私がつてこと？」

「どうせ暇なんだろう？」

パタンと本を閉じる長岡。「さつきから誰かに誘って欲しくてしかたないって感じだったじゃないか」

「だけど」

美穂は赤くなって言った。「それは新しいクラスメイトと親睦を深めたいからであって、引き続き同じクラスの君と遊んでも意味がないじゃん」

「俺と喋ったのも今日で二回目なんだから、とりあえず僕と親睦を深めればいいじゃないか」

「え……」

複雑な表情を浮かべ、美穂は悩んだ。「要するに長岡くんの家に行けば、私の中での長岡くん印象が良くなるってこと？ そうは思えないけどな」

「いや、断言しよう」

本を鞆の中に入れ、立ち上がる長岡。彼が廊下に出ようとしたので、美穂もそれにならう。「僕の家に来れば、君はきっと僕を河内さんに紹介したくなる。間違いない……。ん？」

数メートル廊下を歩いたところで長岡は立ち止まった。キョトンとした顔で後ろを振り返る彼。「どうしたの？ 早く行こう」

美穂は教室のドアの前で突っ立ったままであった。

「分かったから少し離れて歩いてね」

ゆっくりと彼女は歩き出す。「それと、家に着くまでは話しかけないで。噂になっちゃうかもしれないでしょ？」

キョロキョロと辺りを見る。放課から時間が経っているためか廊下を歩く生徒の数は少ない。

「ぶん」

長岡は鼻で笑い、また美緒に背中を向けた。「分かった。僕はもう一切背後を見ないから、ちゃんと僕の後ろをついてくるんだよ」「遠ざかる彼の後ろ姿を眺めながら、美穂の頭の中に二つの選択肢が浮かび上がっていた。

このまま彼についていくべきか、それともこっそり逃げ出してしまえばいいか。

### 13 変な学友変な部屋

長岡の家は、学校から十分ほど歩いた場所の高級住宅街の中にあつた。洋風の二階建て一軒家で、壁はライトブルーに塗りつくされ、屋根も同様にブルーを基調とした色をしていた。四方はこれまたブルーの塀に囲まれ、車のない二台分の駐車スペースの二メートルほど隣に立派な鉄製の門があつた。

なぜ美穂がそこを長岡の家だと判断できたかというところ、それは門の前で長岡が立ち止まつたからである。二人は学校からここにくるまでの間、一度たりとも口を利くことはなく、おまけにずっと十メートル近い距離を保ち続け歩いてきた。

「誰にも見られてないね」

辺りを見回しながら長岡は言う。「この辺は人通りも少ないし、つも静かだから、僕と一緒に家に入っても大丈夫だと思うけど」

「別にいいよ」

髪をサツとかき上げる美穂。「もし変な噂が流れたら、なんだかなだ理由をつけてしらばつくれるから」

「そう言いつつも、どんな理由をつければいいのか検討もつかない。それにしても、ちゃんと付いてきてくれてよかった」

長岡は門柱に取り付けられた呼び鈴のボタンを押しながら言った。「なんとなく後ろに人がいる気配はあつたけど、ひよっとしたら全然知らない人間に交代したらどうしようとか思ってたよ」

学校の廊下で宣言したとおり、彼は歩いている最中、一度も後ろを振り向かなかつたのだ。

「何度かこのまま帰っちゃおうかなって思ったけどね」

少し頬を赤らめながら美穂は言う。「同じクラスだし後々恨まれなくても困るから」

《はい》

呼び鈴のインターホンから女性の声が聞こえる。長岡が「聡です。

今帰りました」と告げると、女性はまた《はい》とだけ答え、回線はブツツと途切れた。

「母だよ。別に鍵がかかっているわけじゃないんだけどね」

長岡が内外でシンク口する簡易式な門錠を開け、門を開く。「帰った時は呼び鈴を鳴らすつてのがうちのルールなんだ」

美穂はもう一度家の外観を見上げ、「あつそ」と呟いてから、長岡に続き家の敷地に足を踏み入れた。

玄関で靴を脱ぎ、長岡に促されるまま家にかかる美穂。目の前にあった幅の狭い階段を上り、二階へと向かう。階段は木製で、歩くたびにトントンと軽い音が鳴った。

「お母さんに挨拶しないでいいのかな」

前を行く長岡の背中に向かって美穂は言った。階段の向こう、廊下の先のリビングらしき部屋に人の気配を感じたのだが。

「恥ずかしながら家に女の子を上げるのは初めてでね」

前を向いたまま長岡は答える。「いらぬ誤解を避けるため、連れがいるのは秘密にしたいんだ。だから羽山さん、申し訳ないけどずっと息を潜めててね」

そんなにコソコソしてたら余計にいらぬ誤解を招いてしまうのではないかと思いつつも、美穂は階段を上る足を気持ち程度忍ばせた。ちなみに、彼女にとっても男子の家に単体で上がり込むのは初めての経験であった。

「すごい……」

無事に長岡の部屋へ到着し、部屋の全容を眺めた美穂が思わず口にしてしまった最初の言葉がそれであった。なんと部屋の中心に勉強机が置かれ、壁は全面本棚で埋め尽くされていたのだ。全面本棚なので、窓があるのかどうかも分からない。美穂は勉強机のもとま

で歩き、またキヨロキヨロと四方を見回した。「なんていうか、書齋みたいだね」

「僕の部屋兼書齋だね」

鞆を床に置き、中から本を取り出す長岡。おそらく学校で読んでいたものであるう。「本に囲まれて育ったっていう人はたくさんいるけど、僕の場合本当の意味でも本に囲まれてるんだ」

近くの本棚に鞆から出した本を差込み、勉強机を指差す。「その椅子に座りなよ」

言われたとおり、勉強机の椅子を引き出し腰かける美穂。

「長岡くんはどうするの？」

「僕はこれでいい」

長岡が部屋の隅に転がっていた木製の台に向かって歩き、そこに座った。「踏み台だよ。小さい頃は高い場所にある本を取るために使ってたけど、今は大体届いちゃうから、来客時の僕の椅子として使ってる」

「ふーん」

美穂はまた落ち着きのない様子で部屋を眺めた。本棚には生真面目そうなタイトルの本が並び、漫画らしきものは一切見当たらない。自分がこの部屋で生活したら数日でギブアップしてしまうだろうなと彼女は思った。

ふと長岡に目を向けた。すると彼は踏み台に座ったまま読書を開始していた。「ちよつとちよつと」と呆れたように声をかける美穂。

「人を家に呼んどいて自分だけ本なんか読まないでよ」

「君も読みたいならどうぞ」

本に目を落としたまま長岡は言った。「ハードカバーが苦手なら文庫本もあるよ」

彼のその態度が面白くなく、唇を尖らせ髪の毛をいじる美穂。しばらくはおとなしくしていたが、やがて我慢の限界に。

「私もう帰る」

椅子から立ち上がる。「たしか長岡くんのうちに来れば、私が君

を那美に紹介したくなるって言うてたよね。確かに変わった部屋だけど、別に君を紹介したくなるほどじゃないし……。っていうか、紹介したら私まで変わり者扱いされそうじゃん」

「そんな……」

顔をキョトンとさせる長岡。「僕と仲良くなればこれだけの本が読み放題になるんだよ。河内さん、本は読まないの？」

今度は美穂がキョトンとなる。まさか本当にこの部屋を見せたいがためだけに自分を家に誘ったのか。実は心の隅で、他にも何かあるのだろうと彼女は予想していたのだ。

「無理無理無理」

ドアに向かって美穂は歩いた。ドアノブに手をかけながら眼鏡のフレームを中指でちょいと上げ、キツと長岡を睨みつける。長岡は未だに本を開いたまま、ぼうつと美穂を見つめていた。「確かに那美が本を読んでは見たことないけど、本を読みたいんなら図書館にでも行けばいいでしょ？ 悪いけど君の発想はどう考えてもおかしいと思う。那美には普通の人と付き合ってもらいたいから私からは紹介できないよ。どうしても那美と付き合いたいなら、自分から声をかけなさい！」

それが捨て台詞のつもりで、美穂はドアノブをひねり、ドアを思いつきり引いた。そして前を向き部屋から出ようとした瞬間、「ひっ！」とまるでしゃっくりのような叫び声を上げ、床に尻餅をついてしまった。目の前に突然人影が現れたのだ。

美穂のリアクションとは対照的に、その人物はまったく表情を変えることなく「大丈夫？」と美穂に手を差し伸べた。美穂は訝しげにその人物をじろじろと見た。

若い女性だった。化粧つ気のない薄幸そうな顔立ちに、セミロングヘアの黒い髪。茶色のカーディガンとひざ下までの赤いタイトスカート。

お母さん……。いや、お姉さんかな。

彼女に手をあずけながら、美穂はそんな想像をしていた。

## 14 交換条件

「本当のことを言うと、この部屋の本が読み放題になるってぐらいで君が河内さんを紹介したくなるとは思ってなかったんだ」

長岡が二人のもとへ歩み寄ってくる。「まずは君を家に誘って、君と打ち解けることができれば、次第に君も僕の良さを理解して…」

「…」  
「いやいやいや」

なんとか起き上がることできた美穂が長岡の言葉をさえぎって言う。「そんなことは後でいいから、先にこの人を紹介してよ」

そして目の前に立つ若い女性を指差した。女性は相変わらず表情を変えぬまま、二人のやりとりを見つめていた。

「姉の貴美だよ」

長岡はさらりと言った。それから今度は姉、貴美に向けて美穂を紹介する。「こちらは僕のクラスメイトの羽山美穂さんだ」

「弟がお世話になってます」

そう丁寧に頭を下げる貴美を見て、美穂も「あ、いえ……」とペコリと会釈をした。

「姉さん」

貴美を睨みつける長岡。「ひょっとして立ち聞きしてたわけじゃないだろうね。そんな趣味の悪いことをする姉を持った覚えはないよ」

「女の子の声でしたから」

ふふつと貴美は口元に笑みを浮かべた。美穂は思わずドキッとする。笑うと貴美の魅力が格段に増したような気がしたからだ。「聡が女の子を家に連れてくるなんて珍しいね」

美穂は部屋から外を覗き見た。二階には他に二つ部屋があり、そのうちの近いほう、この長岡の部屋の丁度隣にあたる部屋のドアが少し開いているということに気がついた。おそらくそこが貴美の部

屋で、二人が上がってくる前からずっと貴美はそこにいたのだ。

「あれ……?」

貴美のその言葉に反応し、美穂は視線を戻した。すると貴美は目を丸めて美穂の顔を見つめているではないか。「羽山さん、どこかでお会いしたことありましたっけ?」

「あ……」

意味もなく姿勢を正し、今度は芸名で自己紹介しようとするが。

「アイドルの松尾和葉だよ」

長岡に先を越される。美穂の冷たいまなざしにも気づかず、彼は続けた。「姉さんがアイドルなんか知ってるとは意外だったな。実は僕と同じ高校に通ってるんだ」

「そう」

さほど驚く様子も見せずに貴美は言った。それからまた美穂に顔を向ける。「私の友達にもあなたのファンがいるよ。仕事と勉強の両立、大変でしょうね」

「そ、それほどでもないですけど」

留年しかけたことは内緒である。

「じゃあ」

身をひるがえす貴美。「私は戻るから。二人とも、仲良くしななきゃダメだよ」

長岡の部屋。勉強机の椅子に座る美穂と踏み台に座る長岡。貴美の登場により、二人はなぜか元の鞘に納まってしまった。とはいっても、先ほどの反省からか、長岡はやや手持ち無沙汰のようではあるものの、本に手をつけようとはしなかった。

「私と長岡くんが付き合ってた、それで痴話ケンカしてたって思われてるよきつと」

机に頬づえをつきながら美穂は言った。もちろん貴美のことである。



「やはり誤解を招いてしまったか」

髪をかき上げる長岡。「まあいい。後で説明しておくさ」

「よろしく」と答えながら、美穂は指で眼鏡の位置を整えた。それから数秒間の沈黙を経た後、また彼女が口を開いた。

「貴美さん、綺麗な人だね」

先ほどの貴美の笑顔を思い出す。「身内にあんな人がいると、長岡くんもドキドキしちゃうでしょう」

「姉に発情することはないな」

学生服についたチリを指でつまみ、掃除しながら長岡は答える。

かなり手持ち無沙汰なようだ。「まあ、綺麗つてことは認めるよ。

一度どこかの芸能プロダクションにアイドルとしてスカウトされたこともあるそうだし」

「えー」

美穂は笑った。「アイドルって感じじゃないな。演技派の女優さんって感じ」

「僕の周りには超人気アイドルもいれば演技派の女優さんもいる。

でも、僕が好きになったのはどう考えてもそのどちらにも見えない普通の女の子だ」

突然真面目な口調でそう言うてから、長岡は立ち上がった。ハツと身構える美穂。「僕は本気なんだ。河内さんに僕を紹介してほしい」

「……」

うーん。

頬づえをついたまま美穂は心の中で唸り声を上げた。

こんな変な男を那美に紹介していいのかな。でも、長岡くんが本当にダメな男なら那美だって相手にしないだろうし。でも……。

頬づえをつく手を右から左に替え、今度は口に出して「んー」と唸り声を上げるのであった。

「お姉さん、大学生？」

五度ほどの唸り声の後、美穂はようやく話を変えろという術を思い立った。美穂の質問を聞いた長岡はブスツとした表情を浮かべつつも渋々とそれに答えてくれた。

「そうだよ」

ドスンと踏み台に腰を下ろし、腕を組んで足も組む。「サークル活動とかは何もしてないし彼氏もないみたいだから、これぐらいの時間帯に家にいることは多いな」

「そうなんだ」

西側の本棚、すなわち貴美の部屋の方角に目を向ける美穂。「部屋にこもって何してるんだろうね」

「本を読んでるんだと思うよ」

今度は両手を頭の上で組み、背伸びをする長岡。「姉も読者が好きだからね。姉さんの部屋にも、ここほどじゃあないけどたくさん本がある」

「ふーん」

その美穂の適当な相槌をもって、いよいよ話が途切れる。もともと本題から話をそらすための話題であり、美穂もそれほど興味があつたわけではないのだ。

美穂は焦った。しばらくすれば、また長岡が本題を投げかけてくる。早くその答えを出さなければいけないが、やはりそう簡単に決められそうもない。

「あ、あのさ」

長岡が発言する前に、すかさず美穂は言った。もう少し、もう少しだけ考える時間がほしかったのだ。「貴美さん、大学はどこ通ってるの？」

先ほどまでと同じ、なんでもないその場しのぎの質問のはずだった。しかし……。

「秀英大学」

長岡がぶっきらぼうな口調で答えた。

秀英大学……。秀英大学！？

美穂の脳裏を閃光が走り抜けた。暗闇を引き裂いたその光は徐々に広がりを見せ、やがて一つの景色を映し出した。あの日の駅前の書店、バランスを崩した美穂に駆け寄り寄る男の影、緑の野球帽の下の貧相な顔立ちをした青年。忘れないと心に誓ったあの青年。

「いい加減にしてくれ！」

しびれを切らしたのか、勢いよく立ち上がり叫ぶ長岡。「姉に興味なんてないんだろう？ 何度も言うが僕は本気なんだ。河内さんの親友である君が紹介してくれば、河内さんだって警戒せずに僕と……」

「紹介する」

美穂も立ち上がる。「え？」と眉をひそめる長岡に近づき、彼女は更に言った。「紹介するから、その代わりに……。私を貴美さんに紹介して」

もう一度、橘川さんに会わせて。

秀英大学の正門を出て五分ばかり歩いたところに、中年の夫婦が切り盛りする定食屋がある。五百円あればそれなりにポリウームのある食事でありつけるため、学生には特に人気のある店である。昼のピークを過ぎた午後三時。橘川夢多はこの店で少し遅めの昼食を取っていた。狭い店内（カウンター席が八つあるのみである）に他の客はサラリーマン風の男性二人組だけで、カウンターの中ではメニューを出し終えた店主が退屈そうにスポーツ新聞を読んでいた。

橘川鼻眞のメニューは豚キムチ定食で、同時にこの店一番の人気を誇るメニューでもあるという。もちろん今日も彼が注文したのは豚キムチ定食であった。

バリバリとキムチをほお張りながら「ふあーあ」とあくびをする。本日は夜勤明けで昼からの自身が慕う教授の講義に出席してきた。もう卒業に必要な単位はほとんど取得しており、残された大学生生活ですべきことを大雑把に言うと就職活動と卒業論文の作成のみなのだが、バイト先の店が学校の近くにあるため、バイトついでに学校へ顔を出さないと気が済まなくなってしまうのだ。ちなみに、講義の時間まで何をしていたかというインターネット喫茶で時間を潰していた。

ガラスと店の引き戸が開き、四人組の女性が入ってきた。途端に店内が華やぎ、店主が鼻の下を伸ばす。秀大生であろうか。見た限りでは明らかに同年代である。基本的に人見知りをするタイプの橘川は、彼女たちに関心を示そうとはしなかった。野球帽のツバで顔を隠すように、うつむいて黙々と食事を続ける。ただ、よく考えてみると彼は横一列のカウンター席のほぼ中心に居座っており、このままでは四人組が橘川を挟んで席につくことになる。橘川は豚キム

手定食を盆ごと持って、一番端の席に移動した。

「あ、ありがとうございます」

四人組の一人が礼を言う。橘川は帽子のツバをつまみ、「いえ」となぜか頭を下げた。と、その時であった。

「あっ！」

四人の中で最も離れた場所にいた女性が声を上げた。他の三人と同時に、橘川も思わず彼女に注目する。無礼にも橘川を真つ直ぐに指差すその女性は、元秀英祭ツアー実行委員仲間であり、今はバイト仲間にあたるギャル系女子大生大庭みなみであった。髪を黒く染め直し、前よりは少々落ち着いた雰囲気になったものの、化粧は相変わらず濃い。白い薄手のワンピースに花柄のチョッキを重ね着している。

「あ、お疲れ」

橘川は箸を持つ右手を上げ、そう挨拶をした。みなみはずかずかと橘川のもとまで歩いてきて、彼の隣の席を陣取る。

「橘川さん。私、二年生になれましたよ！」

いちいち報告しなければならぬほどまずい状況だったのかと心の中で呟きつつ、橘川は「あ、そう？ おめでとう」と一応祝福しておいた。他の女性の一人がみなみに「知り合い？」と確認する。

「うん、バイトの先輩」と答えるみなみ。

「同じ日に入っただから先輩じゃないでしょ」

橘川が苦笑しながらツツこむが、それを無視し、みなみは店主に橘川と同じ豚キムチ定食を注文した。

「それより橘川さん、聞きましたよー」

意地悪そうな笑みを浮かべるみなみ。何も思い当たることがなく、橘川は「え？」と目を丸めた。「早苗先輩を泣かせたそうじゃないですか。この色男！」

「は!?!」

橘川の目が更に大きくなる。ますます覚えがなかった。「早苗ちゃんを俺が？ そんなわけないじゃん。昨日も一緒に夜勤入ったし」その言葉を聞き、今度はみなみがキョトンとした表情になる。それから、うつむき加減になり眉をひそめ、やがて静かに口を開いた。「何言ってるんですか？ まさか忘れちゃったとかじゃないでしょうね」

みなみが台詞を発する度にわけが分からなくなってしまいう橘川。もう豚キムチ定食は二口ほどで食べ終わるというのに、箸は完全に止まっている。

「どうゆうこと？ 何かの間違いじゃないの？」

「あらー、橘川さん、けっこう冷たいですねー」

「え？ え？」とパニックになる橘川を一瞥し、みなみは続けた。「一週間ぐらい前に早苗先輩から一緒に映画を観に行こうって誘われましたよね。それなのに、お金がないからって断ったそうじゃないですか」

「あ、うん。そういうえばそんなことあったね」

橘川の頭の中にその時の情景がパツと浮かび上がる。夜勤終わりにコンビニのバックルームにて、二人で世間話をしていた時のことだ。「何かと物入りでさ。って、まさかそんなことで泣いたわけじゃないでしょ？」

「うわ、最悪」

みなみではない、彼女の隣に座る女性が呟く。今のは自分に対して言われたのか？ と橘川は悩んだ。

「そのことに決まってるじゃないですか」

店主から盆に乗った豚キムチ定食を手渡されるみなみ。見るからに不機嫌そうな表情をしている。「早苗先輩、その後すぐに藤岡先輩に電話したそうですよ。『あいつがあんなに泣いたの初めて見た』って、藤岡先輩言っていました」

「ええ！？」

他の客や店主の目も気にせず、橘川は大きな声を上げた。と、い

つてもサラリーマン二人組はいつの間にか姿を消していた。「だってその時は、なんとなく好きな映画の話になって、その流れで早苗ちゃんが冗談っぽく誘ってきただけなんだよ？ 断った時も笑ってたし、今日だって別におかしなところはなかったし……」

慌てて弁明する橘川。少しツバが飛んでしまったかもしれない。

「早苗先輩の気持ちも考えてください」

ツンとした口調で、橘川を見ずにみなみは言った。「冗談混じりに聞こえたかもしれませんが、きつと早苗先輩はすごく勇気を振り絞ったんだと思います。それなのになんですか。『お金がない』なんて、バイトの給料が出た後でもいいでしょう？」

「勇気を振り絞ったって……」

おどおどとそう口にする橘川に、みなみは冷たく流し目を送った。「気づいてないってことはないでしょ？」

また橘川から視線を逸らす。一度キムチを口に入れバリバリとそれを噛み砕き、飲み込んでから彼女は続けた。「早苗先輩は橘川さんのことが好きなんですよ。バイト先の人たちは全員気づいてるんだから」

更に、橘川へ視線を戻す。その瞬間、彼女の表情から毒が抜ける。「へ？ 橘川さん？」

橘川は口をぽっかりと開けて固まっていた。最後の一口となるご飯を、箸で器用につまみ上げたまま……。

さ、早苗ちゃんが俺のことを？」

定食屋を出てからも橘川の頭の中は様々な事象で埋めつくされ、街の風景も通りすがりの人の顔も何一つ認識することができなかった。

それは家に帰ってからでも続いた。夜勤明けで、すぐにでも眠ってしまいたいはずなのに目はギンギンに冴え、ベッドに寝転び小説を読めば内容が頭に入らず、テレビゲームをすればゲームオーバー

になったことさえ気がつかない始末。

おまけにだ。楽しみにしていたはずの、綾川チロリ出演バラエティ番組はあっさりで見逃してしまったという。



## 16 吉祥寺プツシュ

矢上詩織とその恋人田之上裕作は、吉祥寺駅前のアパレルショッ  
プ『フラワーズ』にいた。五月上旬の詩織の誕生日に備えたプレゼ  
ント選びという名目がついたデートである。

休日の昼間とだけあって、十坪ほどの広さの店内はたくさんお客  
で混み合っていた。せっかくのピアノの爽やかなBGMも、喧騒で  
あまりよくは聞こえない。

「これなんてどう？」

ひまわり柄のノースリーブシャツをハンガーごと手に取る田之上。  
厚手の白いトレーナーにブルージーンズというさっぱりとした出で  
立ちをしている。「これからの時期を考えれば長く着れるんじゃない  
い？」

「そうだねー」

一方ベージュ色のブラウスと黒のジーンズという相変わらず地味  
なスタイルの詩織。田之上の持つシャツをまじまじと見つめる。「  
私、黒とか白とかしか着ないから、こんなの着ても似合うかどうか  
分からないよ」

「絶対似合うよ」

田之上は大きく頷いた。「詩織ちゃんってあんまり肩も出さない  
タイプでしょ？ たまにはパツと弾けなきゃ」

「この人みたいに？」

近くの壁に目を向けながら、詩織は言った。田之上も同じ場所を  
見て「うん、この人みたいに」と詩織の言葉をなぞった。

そこに大きなポスターが貼ってあったのだ。ポスターの下方に、  
奥から迫ってくるようなフロントで『綾川チロリ セカンドシンゲ  
ル やっぱり博多が好きやけん 4月29日リリース』と書かれ、  
上にはその文字を足蹴にする綾川チロリこと池田綾香の写真。胸に  
さらしを巻き、上から青いはっぴを羽織っている。下半身はももひ

き、足には足袋とセツタだ。博多祇園山笠をモチーフとした衣装なのであるが、さすがにふんどしはNGらしい。

「この店、綾香ちゃんが行きつけの店なんだよね」

シャツを元の場所に戻す田之上。「お店の人に頼み込んで貼ってもらったのかな」

「どうだろう」

詩織はせかせかと作業する従業員の女性をチラッと見た。「あの子なら勝手に貼った可能性もあるかも……」

「発売日、今日だね」

詩織の横顔を見つめる田之上。「こないだ歌番組で歌ってたよ。

今回は綾香ちゃんらしいはっちゃけた曲だね。後で買いに行こうかなって思ってるんだけど、詩織ちゃんも買うんでしょ？」

「まあ、一応……。一枚だけね」

詩織は昨晚綾香から届いたメールを思い出した。「明日セカンドシングル発売日やけんねー。親友なら最低でも三枚は買ってくれよね。もし三枚買ってくれたら詩織だけのためにカラオケで生ライブ披露しちゃうばい」。

約一時間ほどの滞在の後、二人は『フラワーズ』を出た。詩織の誕生日プレゼント選びというのはあくまで名目なので、さほど重要なことではなかった。結局は田之上のセンスに任せ、詩織は当日まで楽しみに待つという方向で決着がついた。

次に二人が向かったのは吉祥寺駅内の『センチュリーレコード』である。親友綾香のセカンドシングル購入という、詩織にとって本日唯一のノルマを先に済ませておきたかった。

「わ、すごい」

店に入るなり田之上が感嘆の声を上げた。詩織も思わず目を丸めてしまう。なんと、店の入り口の真正面、最も目立つ位置に綾川チロリの特設コーナーが組み立てられていたのだ。山のように置かれたマキ

シングルのCDの中心に、先ほど『フラワーズ』で見たポスターと同じ格好をした綾香の実寸大パネルが飾られていた。

「えー」

店の特大プッシュぶりを見て、なぜか不安になってしまふ詩織。その理由は……。この店、綾香に弱みでも握られてるんじゃないの？

「そんな」

『やっぱり博多が好きやけん』のCDを一枚手に取りながら、田之上は苦笑した。「実際話題にもなってるみたいだよ。どっかの旅行会社のCMにも使われてたし」

博多行き以外は使えないじゃないかと詩織は思う。

「どれどれ」

詩織もCDを手にとり、ジャケットを眺めてみた。ジャケットはやはりポスターのソレである。帯には『博多出身人気アイドル故郷への愛を歌う』という煽り文句があり、旅行会社のCMソングと、深夜の聞いたこともないバラエティ番組のエンディングという二つのタイアップ情報が明記されていた。

続いて裏面に返してみる。裏ジャケットは、夕陽をバックに綾香らしき人物のシルエツトがたたずんでいるという構図の写真のみであった。「ふーん」と値踏みするように、ひととおりその写真を見つめてから、再び表側に返そうとした時、耳元で突然女性の騒がしい声がした。

「あー、これ、こないだ『歌スタ』で歌ってたヤツだ」

そちらに目を向ける詩織。どうやら少女二人組のうちの一人のようだ。二人とも大人びてはいるがどことなく幼い雰囲気をもし出しており、高校生か、もしくは中学生だと予想できた。

「この曲めっちゃウケルよねー」

もう一人のほうの少女がCDを手に取る。「振り付け知ってる？  
こうやってこうやんの」

両手を頭の側面につけピョンピョンと跳ねる。始めに発言した少

女が「知ってる知ってるー」と何度も頷く。数分後、多少は迷ったようではあるが、二人は他の何枚かのCDと一緒に『やっぱり博多が好きやけん』をキャッツシャーへと運んでしまった。

その様子をポカンとした顔で観察しながら、詩織は思った。

綾香が雇ったサクラ、じゃないよなあ……。

午後三時を過ぎ、二人は駅前の喫茶店『吉田ドーナツ』の二人がけテーブルにて向かい合い、午後のティータイムを楽しんでいた。落ち着いた店の雰囲気とは裏腹に、やはり店内は満員御礼であった。「本当にすごいよね」

コーヒーに一口口をつけてから、田之上は言った。「僕らが店内にいた三十分程度の間、五枚ぐらい売れてたよ。来週のヒットチャートが楽しみだな」

話題はもちろん綾川チロリである。

「なんだか複雑だなー。もし一位とか取っちゃったらどうする？」

もうあの子完璧にスターの仲間入りじゃん」

詩織もコーヒーを啜る。「もう一緒に買い物したりご飯食べたりすることもなくなるのかな」

「そんなことないって」

ハハツと鼻で笑う田之上。「去年に比べたら綾香ちゃんずっと有名になったけど、彼女自体は今もたいして変わってないじゃん」

詩織は、野球帽だけに留まらず最近ではサングラスまでかけ始めた綾香の姿を思い浮かべた。確かに外見はスターを気取ってはいるが、中身は詩織の知っている綾香のままだ。

「セカンドシングルは初回限定で振り付け講座付きのミニポスターが同封されてるんだってさ」

田之上は、ひざの上に置いた『センチユリーレコード』のポリ袋を一瞥した。その中に先ほど彼が購入した『やっぱり博多が好きやけん』が入っているはずだ。「デビュー曲の時には初回限定版なん

てなかったからね。相当力を入れて売り込んでるみたい」

「そ、そうだね」

詩織はまたコーヒーに口をつけた。心の中にもやもやとしたものを感じる。

田之上には黙っていたが、彼女は「やっぱり博多が好きやけん」  
を購入しないままセンチュリーレコードを出たのであった。金銭的な理由もそうだが、一番の理由は綾香のCDの売り上げに貢献し  
ていなかったからだ。綾香をスターにしたくはなかった。

## 17 待ち受けるもの

「いやー、皆さん。今日は遠慮しないでガンガン飲んでガンガン食べまくってくださいな」

白いサマーニット帽をかぶった池田綾香が晴れやかな笑顔で言った。「サニーダイヤモンドプロダクションの星、綾川チロリちゃんの新セカンドシングルが見事、週間ヒットチャート第七位という快挙を成し遂げたお祝いなのでから」

右手に持ったビールのジョッキをグツと口にあてる。ゴクゴクゴクとジョッキの半分ほどまでビールを飲み干してから「プハー！」と息を吐き、少し長めのシャツの袖で口もとを拭いた。

「いや！ チロリさん、いい飲みっぷりです」

パチパチパチと拍手をするのは、綾香の向かいに座ったトーマス岸辺である。今日もビシッとビジネススタイルでキめている。

「サンキュー！」

綾香はトーマスに向かって親指を立てた。それから、自身の隣に座る内藤ちえ美の顔を覗き込む。「ちえ美ちゃんもどんどん食べなさい。今日はぜーんぶ南さんのオゴリやけんねー」

「うん」

ニコツと微笑むちえ美。胸もとが大きく開いた涼しげな白いブラウスを着用している。「南さん、いつもありがとうございます」

向かいに座るチロリのマネージャー南吾郎に会釈をする。いつもと同じ、黒スーツにサングラスという出で立ちの南は「お礼なんていらないよー」とちえ美ボイスでへりくだってみせるも、今度は綾香に顔を向け「調子に乗んなよ」と毒づいた。

「もうバレとるっちゃけん、ちえ美ボイスやめればいいとに」

そう憎まれ口を叩いてから、パクツと上カルビを口に入れる綾香。「あんたが、もぐもぐ、もし十位以内に入ったら焼肉でもなんでもおごってやる」なんて、もぐもぐ、大口叩くけん悪いつちやろう

もん」

「そうです。そうです」

綾香に同調するトーマスであったが、南に睨まれすぐに縮こまってしまう。

五月上旬の午後九時。四人は渋谷駅近くの高級焼肉店にいた。南と二人で食事をもつまらないだろうとの綾香の思いから、関係者としてちえ美とトーマスをゲストに招いたのであった。

先月末に発売された綾川チロリのセカンドシングル『やつぱり博多が好きやけん』は、事務所やレコード会社による必死の売り込みの力もあり、綾香が言ったとおり、週間ヒットチャート第七位を記録した。これはサニーダイヤモンドプロダクションの所属タレントとしては最高記録である（それまではちえ美の十二位であった）。

これにより、バラエティタレントとしても、アーティストとしても、綾川チロリの名は更に大きく広まっていった。よって、今までは普通の客に混じって食事を楽しんでいた綾香であったが、今回は個室スペースを予約してのプライベートタイムである。和室風の空間となっており、通路とは障子で隔たれている。

「ちえ美ちゃんももちろん買ってくれたっちゃる？」

ちえ美の肩に手を回す綾香。アルコールも入ったため更に上機嫌である。「もし買ってなくてもまだ遅くはないばい。来週のヒットチャートではベスト3狙つとるっちゃけん」

「ちゃんと買ったよー」

ちえ美は苦笑しながら言った。「あの曲って耳に残るから、有線とかラジオで流され続ければこれからもどんどん売れていきそうだね」

「いやー、ホントやね。まったく良い曲作るよ。敏腕プロデューサーのトーマスさん」

「ととと、とんでもない」

ハンカチで荒れ果てた頭を拭うトーマス。「チロリさんの確かな歌唱力と表現力があってこそ、あの曲はヒットしたのです」

「笑わせるな」

ふんと南は鼻で笑った。「今回は事務所が大枚はたいてプッシュしたから売れただけだ。あんなだけプッシュしたのに七位止まりだなんて、逆に情けねえぐらいだ」

「なんよー」

マネージャーに水を差され、ふて腐れる綾香。「十位以内にも入らんとか言つとつたくせに」

「確かにお前としては七位は上出来といえる」

それから南はちえ美に顔を向ける。ちえ美は不思議そうに首を傾けた。「でも、もしちえ美ちゃんと同じぐらいプッシュしたら余裕でヒットチャート三位以内には入ってたよねー」

ちえ美ボイスに声変わりした南に対し、綾香は「もういいってば！」と投げやりにツッコんだ。

「ででで、でも、ちえ美さんが言ったとおり、これからも売れ続ける可能性はありますよ。それに……」

やや恐縮した様子でトーマスが話に入ってくる。しかし三人に注目され、赤面して黙り込んでしまう。南に「それに？」と先を促され、ようやく続きを話し始める。「つつつ、次の曲は今回以上に自信作です」

「次の曲、もうできた？」

顔に期待の色を輝かせてトーマスを問い詰める綾香。トーマスが汗を拭いながら「ま、まあ……」と返事をする。「わー！ 聞かせて聞かせて！ もちろん次の曲もトーマスさんプロデュースでいくとよね」

綾香は南に目配せをした。ビールに口をつけた後「まあな」と返事をする南。

「一応今回の実績があるからこの男をクビにする理由もねえだろ。ただ、これからも引き続き『博多が好きやけん』のPRは行ってい



く。『博多』の売り上げがある程度落ち着いてから次の制作に入  
って感じたな。それまでお前は世間から評価を地に下げてしまわな  
いよう気を配っとけ」

「評価を地に……？」

キョトンとした顔でまぶたをパチパチと動かす綾香。「それって  
どうゆうこと？」

「たとえばそいつだ」

南が指差したのは綾香の目の前に置いてあるビールのジョッキで  
あった。「さつきから普通にグビグビと酒を飲んでいるが、お前は  
まだ十九だろう。そんなところをゴシツプカメラマンにでも激写さ  
れたら、一発でお前のアイドル人生は終わるぞ」

「そ、そんな硬いこと言わんでよ」

綾香は苦笑した。「あと一ヶ月もすれば二十歳になるとはい？」  
彼女の誕生日は六月一日である。

「いや、トップアイドルを目指すなら徹底しとけ」

南のサングラスの奥の瞳が厳しく光る。「ちえ美ちゃんを見習う  
んだな。彼女はお前と同じ年だが、ちゃんとウーロン茶を飲んでい  
るだろう」

ちえ美のジョッキを確認する綾香。確かにビールではなくウーロ  
ン茶が入っている。綾香はちえ美の首を絞めにかかった。

「あんだ、また一人だけぶりっ子して！ いつの間に注文したと？」

「ち、違っよー」

苦渋の表情を浮かべながらちえ美が弁解をする。「私、もともと  
お酒飲めないんだもん。最初からずっとウーロン茶だよ」

「今までと同じだと思っなよ」

南は綾香の飲みかけのジョッキをひよいと手に取り、それを飲み  
干した。「あっ」と綾香がちえ美の首から手を離す。「プライベ  
ートでも常に周りの目を意識しろ。お前の命日は明日すぐにもやっ  
てくるかもしれんからな」

綾香が帰宅した時、玄関の鍵は開いていたものの井本真一はすでに寝室で眠りこけているらしかった。リビングの灯りを点け、壁かけ時計で時間を確認する。真一が就寝しているのも無理はない。もう深夜四時を回っているではないか。鍵は単に閉め忘れただけであろう。

綾香はキッチンの冷蔵庫からミネラルウォーターのペットを取り出し、それをコップに注いだ。コップの水を飲み干しながらリビングへ戻り、糸の切れた操り人形のようにお尻からソファへと崩れ落ちる。

あー、明日のラジオ休みたいなー。

正午よりラジオの生放送にゲスト出演する予定で、それが明日一発目の仕事である。南に『絶対遅刻するなよ』と何度も釘を刺されたが、はつきり言って遅刻しないという自信はない。

高級焼肉店を出た後、明日は休みだと言うちえ美を誘い、二人でカラオケを楽しんだ。始めは深夜零時になったらお開きしようなどと話していたが、意志が弱く延長に延長を重ねてしまった。

綾香は数分間人形のように身動き一つせず、ソファにぼうつと座っていた。不特定な場所に視線を定め、何を連想するわけでもなくただぼうつと。焼肉店での半ジョッキだけでも、アルコールも入っている。眠気も混じり、頭と身体を働かせる気力を無くしていた。そんな中、彼女が唯一形にすることのできた意志がある。

眠い……。さっさと寝よう。

最後の力を振り絞って立ち上がり、彼女はリビングの灯りを消して寝室へ向かった。

「ただいまー」

毛布にくるまって眠る真一の耳元で綾香は囁いた。真一が何も反応しないため、綾香はつまらなそうに唇を尖らせ、彼の隣の布団に

横たわった。寝室には真一の分と綾香の分と常に二枚の布団が敷きっぱなしになっているのだ。

仰向けになり、毛布を肩までかぶる。常夜灯の優しい光に照らされながら、綾香は静かにまぶたを閉じた。

綾香は嵐の中にいた。八方から押し寄せてくる津波のように威圧感を持った轟音。しかし、それが不思議と心地よく身体にしみこんでいく。

そうか。これは歓声だ。私は嵐のような大歓声の中にいるんだ。スポットライトが彼女をとらえた。一層高まる観客のボルテージに応え、綾香は両手を大きく振った。

どこかの屋内コンサート会場だ。とても大きなホールで、どのぐらの観客が入っているのかは計り知れない。人の波は無限の宇宙のようにどこまでもどこまでも伸びているような気がした。

《みんなー！》

ハンドマイクを通し、綾香、いや、綾川チロリはファンにそう呼びかけた。トレードマークの白いハットを頭にかぶり、ノースリーブの白いシャツとデニムのホットパンツを着用している。《アンコールありがとう。それじゃあ、お言葉に甘えてもう一曲だけ歌わせてもらうばい！》

更なる大歓声と時を同じくして再びステージが暗転する。ドラムのカウントに合わせ、爆発音が響く。アンドロメダのような無数の照明たちが同時に光を放ち、キャノン砲からアリーナへ向けて大量のカラフルな紙吹雪が飛び出した。

疾走感のあるポップなナンバーだ。『やっぱり博多が好きやけん』ではない。しかし、彼女はもちろんその曲を知っていたし、自身の代表曲として認識していた。

盛り上がりは最高潮のまま、あつという間に曲がクライマックスを迎える。さあ、ラストはお馴染みのフレーズ。綾香が左手を上げ、

人指を立てる。

《ワン、ツー、スリー……》

中指、薬指と順に指を起き上がらせ、彼女はタメを作った。そして……。

「イエーイ！」

彼女と共に、会場のファンが一斉に左手を腰に、右手をピースにして額に当てチロリンポーズをし、叫ぶ。全員が一体化した瞬間だ。綾香は泣いていた。ライブの成功に対する感動と、それをファンと一緒に分かち合える感動……。

あれ？

いや、違う。それを遙かに上回る別の感情が、彼女の涙を心の奥底からくみ上げていた。

彼女は胸にポツカリと開いた穴の存在を認めた。

そうだ。そうだった。

彼女はようやく思い出した。

もういないんだ。真一はもう……。

バツと綾香は上半身を起こした。息は上がり、身体中にびっしょりと寝汗をかいている。彼女はゆっくりと周りを見回した。薄暗い部屋、懐かしい匂いのする部屋。いつもの、吉祥寺の自宅ではないか。

真一……？

ふと顔を横に向ける。そこに毛布の中でうつぶせて、ぐっすりと寝息を立てる真一の姿があった。綾香はひと安心し、真一の枕もとに置いてある目覚まし時計を見た。時刻は午前五時。彼女が床にいてから一時間も経過していない。

はー、なんかりアリティのある夢だったな。

改めてそう思っては見たものの……。

あれ？ どんな夢だったっけ？

綾香はどうあがいても夢の内容を思い出すことができなかった。ただ、夢の中で自分が覚えた感情だけは目を覚ましてもずっと継続したままだった。目もとにうつすらと浮かんだ涙もその名残だ。

彼女は真一の毛布をまくり上げ、彼に身体を密着させた。彼の金髪の頭にぐるりと腕を回し、思いっきり抱きしめる。そしてそつと呟く。

「真一。どこにも行かんどういよ」

「んー……？」

呻き声を上げる真一。綾香の腕の中で頭をキョロキョロと左右に動かし、やがて身体を反転させる。綾香の顔を確認し、彼は眉をひそめた。「なんだよー。自分が遅く帰ったからってわざわざ起こすんじゃないよ。明日も仕事なんだぞ」

「お、起こそうとしたわけじゃないとよ」

サツと腕を解く綾香。「ちよつと怖い夢見ちゃって」

「起こそうとしてるじゃんかよ」

真一は手の平で自分の顔を何度かマッサージした。「なんで怖い夢見たからって俺にヘッドロックかましてくる必要があんだよ」

ヘッドロックじゃないもん！

「別にいいよ」

くるりと転がり、綾香は自分の布団に戻った。「一人で寝ればいっっちゃろ」

また毛布を被り、ふて腐れたように目を瞑る。しばらく暗闇の中で複雑な思いをめぐらせた後、真一のチツと舌を打つ音を聞いた。

「分かったよ」

けだるそうな声で真一は言った。まぶたを開き、彼に顔を向ける綾香。「ほら、来い」

毛布を手で浮かせ、そこに綾香を誘い込もうとする真一。綾香は待ってましたとばかりに、ひょいと軽快な動きでその中へ身体を滑り込ませた。

「どこにも行かんどういよ」

真一の腕枕に頭を乗せ、身体に腕を回しながら綾香はもう一度念を押すように言った。真一は「何言ってるんだよ」とやはりめんどくさげに答えてから、大きなあくびをした。

「美穂ー！」

満面の笑みを浮かべながら、河内那美が両腕を広げた。それに応え、羽山美穂も「那美ー！」と腕を広げる。セーラー服姿の少女二人はガツシリと抱きしめ合った。互いの背中をポンポンと叩き合い、ゆっくりと離れる。そして、どちらからともなく「プツ」とふき出したかと思えば、今度は二人で大きな声を上げ笑い合うのであった。二人の通う学校。放課後の正門の前だ。新しい級友との付き合いやタイミングのすれ違いなどで、ここ二週間ほど二人は直接顔を合わせていなかったのだ。冗談ではあれど、先ほどの抱擁は感動の再会を祝い合うという意味も込められていた。

「いやー、やっぱり美穂の顔を見ると安心するなー」

はあと溜息を吐きながら、那美はしみじみと言った。「まあ、いつもテレビで観てるけどね」

「私も」

うんうんと頷き、美穂も同調する。「やっぱり私たちってほら、親友なんだよ。唯一無二の」

二人はまた抱き合って笑い合った。周りを行く生徒たちの冷たい視線に気がつき、先に頬を赤らめながら抱擁を解いたのは美穂であった。

「ところでさ。えーっと……」

少々歯切れの悪い口ぶりで彼女は言う。「最近長岡くんどう？」

「ああ、うん……」

那美も顔をややうつぶせてしまう。「まあ、今のところはなんとか、知り合い以上友達未満って感じで……」

先日、長岡聡の家に美穂が遊びに行ったその翌日の休み時間に、美穂は那美に長岡を紹介した。始めはルックスの良さも手伝い、那

美も長岡を気に入っていたようだったが、日を重ねるにつれ、那美からのメールに長岡の名が出てくるのが少なくなっていた。一週間ほど前に長岡の家に遊びに行くというメールをもらった後は、一度たりとも登場していない。

「長岡くんは順調に愛を育んでるって言ってたけど」

美穂は深い溜息を吐いた。「やっぱり一人よがりな愛だったか」「私が悪いんだよ」

那美は慌てた様子で首を振った。「長岡くんあの部屋に入って本当は十秒ぐらいで吐きそうになっちゃったけど、それを隠してずっと楽しそうなフリばかりしてたし」

美穂が長岡の家に遊びに行ったということは那美も知っている。那美の言葉を聞き、美穂は複雑な思いに駆られた。つまり、悪いのは自分だということなのだ。先ほどの抱擁には実はもう一つの意味が込められていたのである。

学校を出て、駅に向かう二人。本日は美穂も仕事があり、那美もバイトがある。ただ、それまでに少し時間があるため、駅前の例の書店で暇を潰すことにしたのだ。

ここを二人で訪れた時（美穂一人でもだが）、二人はまず人もまばらな参考書コーナーへと向かう。そして、二人してコソコソと客の顔を確認していくのだ。もちろん、橘川夢多の姿を探している。那美の場合、橘川の顔を知らないので、若い青年を見つけてから美穂に確認させるという形をとる。

「今日は若い人いないね」

参考書コーナー周辺を見渡しながら那美は言う。美穂は特に落胆した様子もなく「うん」と返事をした。あの日以来何度ここで橘川を探したことが。もう落胆するのには飽きてしまった。

「まあ、でも良かったよね」

那美はニコリと微笑んだ。「新しく秀英大学とのコネクションが



できたんだから」

そう、それこそが正門前での抱擁のもう一つの意味であり、那美が長岡を突き放してしまわない理由でもある。秀英大学とのコネクションとは、那美に長岡を紹介するという代償をもって得た、長岡の姉、長岡貴美との付き合いのことである。

「なんていうか、本当にゴメン」

「え？」

恐縮したように謝る美穂を見て、那美は不思議そうに目を丸めた。

「なんで？ 別に謝らなくていいのに」

「だって」

うつむいたまま美穂は言った。「私と貴美さんのことを考えて、長岡と仲良くしてくれてるんでしょ？ あいつのことだから、もし那美に嫌われたら癩癩を起こして、私と貴美さんの間を引き裂こうとしそうじゃない？」

「あはは」

那美は無邪気に笑った。「いくらなんでもそこまで心が狭くはないでしょ。それに、長岡くん、確かにおかしなところはあるけど、けっこうカッコ良いし。私の意志で仲良くしてるんだよ」

それは本心からではなく友情からくる言葉だとして美穂には思えなかった。それなら、なぜメールから長岡の二文字が消えてしまうのか。

二人は少女コミックコーナーに移動していた。本当は女性誌コーナーで立ち読みをしたところであったが、そちらは人も多いし、今月は幾つかの女性誌の表紙を松尾和葉が飾っている。そんな中に飛び込んでいくのは命取りだと思えた。

「ところでさ」

好きな作品の新刊をチェックしていた時、ふと那美が話しかけてきたので、美穂はそちらに顔を向けた。那美はなんとなく悪戯っぽ

い表情を浮かべていた。「長岡くんのお姉さんとは仲良くなったの？ 橘川さんのこと、言った？」

「まさか」

美穂は笑った。「貴美さんもあの弟に似てか、優しいけどちょっとついていけないところがあってさ。なんていうか達観しちゃうって感じで？ メールでの話題も勉強とか小説とかばかりでさ。さすがに恋愛相談できる雰囲気じゃないよ」

「ふーん」

棚からコミックを抜き出す那美。表裏の表紙を眺めた後、すぐに棚に返す。「それじゃあ貴美さん不思議がつてるんじゃない？」

『なんでこの子は自分と仲良くなりたがるんだろっ』って

「高校卒業後は秀大に進学希望ってことにしてる」

美穂がそう言うと、那美は顔をキョトンとさせ、美穂を見つめた。

「裏口入学？」

「設定だつてば！」

秀英大学など高嶺の花だということは、美穂にも当然分かっている。

「冗談冗談」

エへへと笑う那美。「なるほどね。でも、それじゃあ貴美さんも勉強の話しかしてくれないよ。入学体験させてくださいって頼むの？」

「それも考えたけど……」

昼間は高校があり、夕方からは仕事。休日は昼間も仕事だし、そもそも大学だつて休みであろう。少し難しいかなと思う。

「じゃあ、ちゃんと打ち明けるしかないね」

那美は美穂の肩に手を置いた。「すみません。秀英大学に入学したいなんて嘘でした。実は秀英大学に好きな男の人がいるんです。その人は橘川夢多という名前で、貧相な顔をしています。その人を見つけて出して、私に紹介してください」

「どの口からそんなあつかましいお願いができるのよ」

美穂は苦笑しながら言った。「何か交換条件でもないが無理でしょ」

「あるじゃん」  
自らを指差しながら微笑む那美。「弟の恋のキューピットにならちよつとぐらいは面倒みてあげたくもなるんじゃない？」

一瞬、それだ、と同調しかけたが、すぐに美穂はダメだと思い直した。それじゃあ那美が自分のために無理をして長岡と付き合うことになってしまう。

「他にも……」

今度は美穂を指差す那美。「美穂は超人気アイドルなんだから。」

美穂にしかできない交換条件だつてあるんじゃないの？」

その言葉を聞いた瞬間美穂の脳裏に、貴美と初めて会った日の彼女の言葉が思い浮かんだ。

『私の友達にもあなたのファンがいるよ』

美穂は改めて「それだ！」と同調したのであった。

午前八時を少し過ぎた頃。長い長い夜間勤務を終え、橘川夢多はコンビニ『デイリーマート』のバックルームでそそくさと帰り支度をしていた。紅白のボーダー柄の長袖シャツとブルージーンズを着用している。

デスクに向かってパソコンを操作する白髪の初老男性はこの店のオーナーである。隣には、椅子に座ってオーナーと何やら話をする大田早苗の姿がある。二人とも『デイリーマート』のシマウマ制服を着ている。只今より勤務開始のオーナーとは違い、早苗は橘川と共に勤務を終えた直後であるが、過去にも何度かそうしていたように、通学時間がくるまでここで時間を潰していくのかもしれない。

橘川はというと、本日は学校に用はない。このまま電車に乗って家へ帰る予定だ。

「それでは失礼します」

橘川はオーナーに一言そう告げ、オーナーが返事をするのを待たずにそのままバックルームを出ようとした。ところがだ。

「待ってください」

予想外に早苗に呼び止められ、彼は足を止めて彼女に顔を向けた。「な、なに？」

動揺から思わず声が裏返ってしまいそうになる。そんな橘川の様子に気づいたか気づいていないのか、早苗はニコツと微笑み、いつもと変わらぬ調子で言った。

「橘川さん、今日も学校休みですよ。できれば、少しお話していきませんか？」

彼女がそんなことを言い出すのは、あの日以来初めてのことだった。そう、橘川の早苗を見る目が変わってしまった、早苗の顔を上手く見ることができなくなってしまったあの日。

「は、話？」

できるだけ平静を装うとするが、そうすればそうするほど声が上ずってしまう。いや、そもそも早苗はとっくにあの目を境にした自分の異変に間違いなく気がついているはずだと橘川は思う。彼は大根役者で、彼もそれを自覚しているのだ。「話って、ここで？」

「いえ、どこでもかまいません」

相変わらず笑顔のまま早苗は答えた。「どこかで朝ご飯を食べながらでも、駅まで歩きながらでも」

早苗の本日の授業は午後からだということ、彼女の言葉に甘え、学校とは逆方向になる駅まで送ってもらいながら話をする事となった。午前八時ともなれば街が本格的に活動を始める時間帯だ。二人は、通勤中のサラリーマンや通学中の学生たちに混じり、渋滞を作る車たちの排気ガスや、やたらと眩しく感じる朝の光を身体に浴びながら、駅に向かってゆっくりと並んで歩いていた。

「一度こうやってお話したかったんです」

早苗は自らの歩の先を確かめるように視線を落としながら言った。白い長袖ブラウスにブルージーンズという格好で、ジーンズのお尻部分にライオンの可愛らしいアププリケが貼ってある。「橘川さん、最近いつもすぐ帰っちゃうから」

早苗のその言葉に、橘川の心臓がけたたましく反応した。橘川は「そ、そうかな」と取りつくるように苦笑し、コホンと咳払いをした。緑の野球帽のつばを少しだけ下げる。

「はい」

そう頷いてから、早苗は橘川に顔を向けた。その瞬間、橘川の顔から見る見るうちに笑みが消えていった。眼鏡の奥の早苗のまなざしが、いつになく真剣そのものだったからである。「無理はないと思います。橘川さん、みなみから聞いたんですよね。私が橘川さんのことを好きだったこと」

「あ、いや……」

あまりにストレートな早苗の言葉に、橘川は上手く返事をする  
とができなかった。何ごともなかったように十メートルほど歩いた  
後、なんとか「まあ……」と口にするのが精一杯だった。ふうと溜  
息を吐く早苗。

「やっぱり」

彼女は唇を尖らせた。「あの馬鹿。本当に口が軽いんだから」

しばらくぶつぶつと独り言を続けてから、彼女は開き直ったよう  
にふうと息を吐いた。「まあ、いいや。どうせそのうちバレるだろ  
うって思っていました」

やはり何も答えられない橘川。正直に言つと、早苗が自分のこと  
を好きだという話が、単なるみなみの勘違いではないかと心のどこ  
かで思っていたのだ。しかし、それがたった今否定された。彼の頭  
の中は生まれたばかりの赤ん坊のように真っ白となってしまうてい  
た。

いつの間にか目的地の駅に到着してしまい、ロータリーのバス停  
前でどちらからともなく足を止める。話はまだ終わっていないとい  
うことだ。ただ、早苗は先ほどから全く言葉を発しなくなっていま  
った。ひよつとしたら自分の返事を待っているのかもしれないと橘  
川は思う。そして彼は考える。

自分は大田早苗についてどう思っているのだろうか。確かに、ここ  
最近彼女のことが頭から離れてはくれないが、それは彼女の気持  
ちを知ってしまったからだ。それを抜きにすればどうだろう。いや、  
抜きにする必要はあるのだろうか。

「気にしないでくださいね」

橘川が猛スピードで思考を巡らせていた時、不意に早苗が言った。  
「え？」と目を丸める橘川。「私が橘川さんのことが好きだってい  
うことは確かですけど、それで橘川さんが迷ったり悩んだりする必  
要はありません」

「ですから……」と一度うつむき、再び顔を上げる。「もう私を避けないでください。前の橘川さんに戻ってください。私にとつては、こうして橘川さんと一緒にバイトできるだけでも幸せですから」  
一歩後退してから「お願いします」と頭を下げ、早苗は今二人で歩いて来た道を走り去っていった。道路に飛び出しかけ、車にクラクションを鳴らされる彼女を見て橘川はハッと息を呑み、今度はその車に平謝りする彼女を見て、心を落ち着かせた。しかし、それは長くは続かなかつた。たった今の彼女の言葉を思い出し、また心が平穩を失っていく。

そ、そんなこと言われてもなあ……。  
ぼうつと立ちすくんだまま、橘川は意味もなく帽子を脱ぎ、それをかぶり直した。

橘川が自宅に帰りついた時、両親はダイニングのテーブルで朝食をとっているところであつた。彼らに「おはよう、おやすみ」とだけ挨拶をして、すぐに自分の部屋へと引きこもる。橘川は帽子を机の上にポンと置き、それから倒れ込むようにベッドに仰向けになつた。頭の中にはやはり太田早苗が居ついていた。

『こうして橘川さんと一緒にバイトだけでも幸せですから』  
もし彼が色恋沙汰に経験豊富で、今までに何度も女性から愛の告白を受けている男であれば、明日から平然と、今までどおり友達として早苗と接していけるのかもしれない。しかし実際の彼は、この世に生を受けてからの二十余年、女性と交際したこともなければ、もちろん告白されたこともない。

一つの覚悟を決めなければならぬと彼は思った。不器用な自分に残された道は、早苗に交際を申し込むか、もしくは早苗に別れを告げるか、そのどちらかなのだと。

目をつむり、深く息を吐いてから、彼はもう一度真剣に考えた。  
自分は大田早苗についてどう思っているのだろう。

## 21 ハートフルナイト

最近この話題ばかりやけど……。みんなはもちろん買ってくれたばいね。先月の二十九日に発売した私のセカンドシングル『やっぱり博多が好きやけん』。おかげさまで今週のヒットチャートでも十位以内をキープさせていただいとります。

つい先日、故郷博多で凱旋イベントを行ってきました。いやー、地元の両親も見に来てくれてさー。写真撮影禁止なのにお父さんつてばバンバン写真撮りまくって、警備員さんに連行されたとはい。めっちゃ恥ずかしかったー。つい最近まで私の芸能活動反対しとってたくせに、地元に戻ってきた途端、これやけんねー。

あ、高校時代の友達も来てくれたばい。当時仲良かった三人組でさー。三人組って私含めて三人組やけん、来てくれたのは二人ね。遠い……。じゃなくて、近いところからはるばると来てくれてさー。私も聞かされとらんかったけん、すごいビックリした。イベントの後は久々にカラオケを楽しんだんよ。高校当時は私、佐……、は、博多の歌姫って呼ばれとったっちゃけんねー。聞かせてやったばい。当時から全く変わってない私の美声をば。それなのにさー、友達の一人……、朋子って言うっちゃけど、その子がさー、『クレセントムーン』歌って私より高い点数出したとばい。あ、カラオケの採点のやつね。もう私、その店にクレームつけちゃろうかと思っただけど、帰りに店員さんにサインしてくださいって言われて、舞い上がってますっかり忘れちゃった。

それとそれと、もう一人の子、真奈美って言うっちゃけど、すごい美人でさー、高校時代は毎月のように男子から告白されとったっちゃけど、なんと！福岡のモデル事務所にスカウトされたんやつて。しかも、その日……、私のイベントがあった日にはい。やっぱねー、いつかはくると思っとなんよ。真奈美どうするんかなー。迷っとなんけど、真奈美なら人気モデル間違いなしやと思っくんよね。



まあ、その時は皆、真奈美をよろしくお願いします。福岡を中心に活動することになると思うけど。

えーっと、一旦コマーシャルですか。それではそれでは話題の曲を今週もかけちゃいましょう。綾川チロリでー……、『やっぱり博多が好きやけん』！

綾川チロリのー……、『ハートフルクリニック』のコーナー！

パチパチパチ。このコーナーでは毎週リスナーの皆さんからハガキでお寄せいただいたお悩みを私、綾川チロリがズバツと解決していきます。まあ、要するに悩み相談室やね。

それではまず一つめのおハガキ。愛知県名古屋市在住のラジオネーム、とんちゃんさん。『僕は泣けると言われている映画を観ても全く泣けません。そのため、家族や友達によく無感動人間と言われていると思います。どうすれば泣けるようになるのか教えてください』ということでねー。私なんかはすぐ泣いちゃうほうなんやけど、なんでやろうねー。多分、何の気なしの状態で映画を観るとるけんやないかいな。確かに泣く気が失せる展開つてのもけっこうあるんよね。偶然が重なりすぎてたり、なんか作り手側が明らかに泣かせようとしすぎてたりねー。そういう場合はねー。それが泣ける映画つてのを忘れればいいよ。それはコメディ映画つて自分に言い聞かせるとさあいつ笑わせられるのかってかまえながら観て、結局笑わされることはなく、エンディングでは逆に涙を流しとるとい……。うん、これで明日からとんちゃんさんも号泣大使やね。

さあ次のおハガキ。東京都は港区在住のラジオネーム、チロリアンさん。えーっと……、『つい先日、同じクラスの女の子に告白されてしまいました。でも、僕には心に決めた人がいます。それはやっぱり、チロリちゃん、あなたです』。わーお。『今まで僕はチロリちゃんだけを見つめて過ごしてきました。他のアイドルはもちろん、周りの女子にも目をくれず。その子は友達としては好きなのですが、

チロリちゃんを裏切るわけにはいかないの、ちゃんと断ろうと思っ  
ていますが、どう説明すればいいのか教えてください。』

うーん……。えー、チロリアンさん、高校生……。中学生かな？  
まず根本的に間違っているのは、その子と付き合うことになった  
からってそれは別に私に対する裏切りでもなんでもないとよ。私は  
皆の心のカンフル剤っていうか、ビタミン剤っていうか、そういつ  
たものになれるアイドルを目指しています。皆が落ち込んだ時なん  
かに、ふとテレビで私の姿を見て、または私の歌を聴いて、笑顔を  
取り戻してくれればそれでいいし、それが最高なんよ。友達として  
でも、その子のこと好きっちゃる？ 私がいるからって断っちゃう  
のは、なんか私がチロリアンくんを縛りつけてるみたいで嫌だな。  
だからチロリアンくん。私がどうこうじゃなくて、まずは自分の気  
持ちに素直になったほうがいい。あ、もちろんその子と付き合  
うことになっても、私のファンはやめちゃダメばい。私にはまだま  
だ君が必要なんよ。なんならその子もファンにしちゃえばいいやん。  
それは無理か……。隠れファンでもいいけん、よろしくねー。

《それじゃ、本日最後の曲。これは『やっぱり博多が好きやけん』  
のカップリング曲やね。では、綾川チロリでー……。『ロックンロ  
ール山笠』！》  
プツッ。

橘川はむくつと上半身を起こし、カセットテープを停止した。昨  
夜放送分の『綾川チロリのハートフルナイト』である。今年三月に  
放送を開始した、綾川チロリ初のレギュラーラジオ番組だ。毎週木  
曜日、午後十時からの三十分間放送されているが、バイトとかぶっ  
てしまう時は、こうしてカセットテープに予約録音し、翌日、一日  
遅れで聴いている。まあ、バイトがない日でも録音し、何度も何度  
も繰り返し聴いているわけだが。

そうか。そうだよな。

橘川はうんうんと頷いた。ラジオで綾川チロリに読まれた悩み相談のハガキ……、確かラジオネーム、チロリアンといったか。なんとも自分によく似た境遇ではないか。思えば、橘川にとっても初めて本気で好きになった女性は綾川チロリだといえる。大田早苗に交際を申し込む決心がつかない一番の原因は、確かに彼女の存在にあった。交際を申し込んでしまえば、彼女を忘れなければいけないとそう思い込んでいたのだ。

しかし、それは間違っている。

『私にはまだまだ君が必要なんよ』

今まで綾川チロリが自分にどれだけ力をくれたことか。どれだけ楽しい毎日くれたことか。大田早苗に出会えたのも、元はといえば彼女がいてくれたおかげではないか。

やめる必要なんてないんだ。チロリちゃんに恩返しするためにも、俺は一生彼女のファンを続ける。

橘川は部屋の壁かけ時計に目を向けた。時刻は午前十時前、早苗は起きているだろうか。

橘川はジーンズのポケットから携帯を取り出した。そして、メモリーから早苗の名前を探し、彼女に電話をかけた。

「あ、早苗ちゃん。ちよつと話があるんだけど……」

## 22 追っ手

テレビ収録の仕事が終わり、マネージャー南吾郎に彼のマイカーである黄色の軽自動車で家まで送ってもらっていた午後十一時過ぎのことだ。

「チツ」

いつもどおり吉祥寺駅南口付近の大通りで車を停めた南は、背後をチラッと一瞥しなぜか舌打ちをした。助手席の池田綾香はそんな彼の横顔を不思議そうに覗いた。「結局撒けなかったか」

「え？」

綾香は眉をひそめた。身体にピッチリフィットしたポップな柄の長袖シャツと、デニムのミニスカートというスタイル。頭にハンチング帽、足に革のブーツを着用している。「負けなかった？ 誰と勝負しとったとよ」

「撒けなかった」

めんどくさそうに言い直す南。「後ろに白い車が停まっただろ。

あの車、俺たちがラジオ局を出た時からずーっと後を尾けてんだよ」  
「え！？」

綾香の首筋にぞつと悪寒が走った。「ってことはつまり……」

「どっかの雑誌の記者か、ファンなのか知らねえが」

シユボつとジツポライターで煙草に火をつける南。ふうと煙を吐き出してから続ける。「家知られなくなけりゃ、こっからお前一人の力で撒くんだな」

ハンドバッグ片手に車を飛び出た綾香は、全力疾走で駅へと向かった。間もなく日も変わるうとして、駅周辺はまだまだ人通りが絶えない。それぞれのペースでのんびりと歩くシングル。立ち止まって笑い合うチーム。彼らを尻目に、綾香はひたすら走り続け

た。南口から駅構内に入り、北口から抜ける。ロータリーを歩き、いつもは通ることのない細い路地に折れたところで、綾香はようやく足を止め、ひざに手をつきながら「ぜえぜえ」と必死に息を整えるのであった。

こ、ここまで来れば大丈夫やる。

そつと後ろを振り返る。誰かが後を尾けてくる気配はない。綾香はホツとひと安心し、脇に挟んでいたバッグを肩にかけ直してから、今度は小走りで再び歩を進め始めた。

井本真一という同棲相手がいるということは、未だマネージャー南にも秘密にしている。そのため、南に車で送ってもらう時は常に吉祥寺駅付近で降りしてもらっており、それが功を奏することもあるのだと綾香は実感した。もし自宅まで送ってもらい、しかも南が後を尾ける車の存在に気がついてなければ、そのまま自宅の場所がバレてしまうではないか。

明日から怪しい怪しくないは関わらず、車から降りたら毎日全力疾走やね。

はあと溜息を吐き、綾香は帽子のつばを少しだけ下げた。

ようやく自宅アパート前に到着する。ベランダ側から自分の部屋を確認すると、薄らと灯りが点いていることが確認できる。その部屋は寝室なので、おそらくリビングの灯りが届いているのであろう。これはまずいなと綾香は思う。もし誰か、自分を綾川チロリだと知る誰かに部屋に入るところを目撃されてしまったら、一発で同居人の存在がバレてしまうではないか。

私が帰る時間になったら真一に電話して灯りを消すように言つて……。いや、そもそも自宅がバレて張り込まれたらどっちにしてもアウトやし……。

そこまで考えたところで、綾香ははあと溜息を吐いた。

人気アイドルは大変やねー。

心の中で皮肉めいた台詞を呟きながら、エントランスホールに入る。自分の部屋の郵便受けから郵便物を取り出し、もし家がバレてしまったらここも物色されるだろうななどと思う。郵便受けには鍵がないため、それはもう不可抗力に近い。

階段を上がり、二階の廊下に出る。横に三つ並んだ扉の一番手前、すなわち自宅の玄関扉のドアノブを気持ち焦り気味でサツと回そうとするが、鍵がかかっており回らない。

なんで鍵がかかっとうとよ。

綾香が唇を尖らせながら、合い鍵を取り出そうとハンドバッグのジッパーを開けた時であった。隣の部屋の玄関扉がドンと音を立てたのだ。ビクツと綾香の髪の毛が逆立つと同時に、隣の部屋からゴミ袋を持った老人男性が姿を現した。

「あ、池田さん。こんばんは」

ニコリと笑う男性。後頭部のみに残った髪も、あごに蓄えたヒゲも完全な白髪である。「毎日遅くまでお仕事大変ですなえ」

「い、いえ、それほどでも」と綾香は苦笑した。男性の名前は松岡とあって、綾香がアパートに入居する以前からの住民である。妻に先立たれ、独り暮らしをしているという話だ。彼は綾香がタレントになったということを知らないはずである。綾香は男性に顔を向けずに鍵を開け、「そ、それではおやすみなさい」と会釈をして、するりと部屋に滑り込んだ。

部屋に入り、しっかりと施錠をする。部屋に上がり、灯りの点いたりリビングまで歩くと、ソファに座ってテレビを観ていた上下スウエット姿の真一が「よお」と片手を上げて迎えてくれた。

「今日は死ぬほど疲れたよー」

ポンと帽子を投げ捨て、へなへなと床に座り込む綾香。「毎日同じこと言ってるじゃねえか」と悪態をつく真一をキツと睨みつける。「大変やったっちゃけん。局から車で尾けとるヤツがおってさー」。

全力疾走で撒いてきたっちゃんね」

「ほー、それは頑張ったなー。よしよし」

テレビに見入りながら綾香の頭を撫でる真一。まるで相手にしてない。

「なんで鍵かけとったとよ」

ブスツとした表情で綾香は尋ねた。真一はようやく綾香に顔を向けた。

「前にお前が言ってたじゃねえか。これからはゴシップされねえように気をつけるって。お前が鍵使わないで部屋に入ったら俺と一緒に暮らしてるとバレルだろ」

「なるほど」

意外にもきちんと考えての行動だったことに、綾香は思わず感心した。それなら電気も消せ、そもそも家がバレた時点で終わり、などいくつか言いたいことはあったがひとまず忘れることにする。彼に若干引け目を感じているというのもその理由かもしれない。

「『チロリンルーム』、何か変わったことあった？」

綾香がそう尋ねると、真一は「そうそう」と思い出したように何度か頷いてみせた。

「掲示板でお前が佐世保出身だって言い張るヤツが現れてよ。まあ、正しいんだけどな。それバレたらけっこう痛いだろ。そいつの書き込み削除するの、大変だったぜ」

「ゲツ」

顔をしかめる綾香。「前にも何度かおったっちゃん。ダメよー」。

削除とかせんで相手にせんどきやいいやんかー。逆に怪しまれるばい。下手くそー」

「うるせえ」

テレビに視線を戻す真一。「お前のファンサイト管理人なんてな、こっちは嫌々やってんだ。文句があるならさっさと約束の和葉ちゃんの裸エプロン写真を持ってこい」

「うっ……」

痛いところを突かれる。そんな約束をした覚えはないのであるが、真一がしっかりと管理作業をやってくれているため綾香も無碍にもできない。

「も、持ってくるよ！ もうちょい待ったとき」

専門学校時代の友達にアイコンラ写真の作成でも依頼しようかなあなどと考える彼女であった。



## 23 裸エプロン

羽山美穂が冷や汗をかきながら店内へ入った時、長岡貴美は窓際の二人がけテーブルに向かいショートケーキを食していた。なんとなく彼女の視界に入らないように背後からこっそりと近づく美穂。

「お、お待たせしましたー」

その第一声と同時に、ぎこちない笑みを浮かべながらピヨンと貴美の視界に飛び込む。セーラー服姿で、いつもどおり眼鏡をかけ髪を下ろしている。貴美は顔を下に向けたまま目だけを上に向け、美穂の顔を確認してから改めて今度は顔も上げるのであった。

「おつかれさま」

右手に持っていたフォークを皿の上に置き、彼女もニコリと笑う。ベージュ色のブラウスとパープル色のロングスカートを着用し、首には淡いレモン色のスカーフを巻いている。「私もついさっき来たところだよ」

「そ、そうですねー」

美穂の笑みがぎこちなさを増す。皿の上のショートケーキが、残りひとかけら程度しか残っていなかったからである。

学校から歩いてわずか二分ほどの場所にあるケーキ屋『ロマンス』。今日は学校終わりの午後四時に貴美とここで待ち合わせをしていたのだが、ホームルームが長びき、三十分も遅刻してしまったのであった。ホームルーム中は教師の目が光り、メールを打つこともできなかつたため、ひよっとしたらもう貴美は怒って帰ってしまったのではないかと心配していたが、杞憂に終わり助かった。

「久しぶりだね」

貴美が言う。二人が顔を合わせるのには、以前長岡聡の家に遊びに行ったあの日以来二度目である。「昨日のクイズ番組観たよ。あれぐらいの問題は簡単に解けないとダメだよ」

「あはは……」

貴美の向かい側の席につく美穂。「テレビでは少し頭の弱い子を演じているので、敢えて間違えてるんですよ」

しかし、本当に分からない問題だつて多い。

「そう」

貴美はショートケーキの最後の一口を口に入れ、ゆっくりとあごを動かした。

「すみませんでした」

今がチャンスとばかりに美穂は頭を下げた。「自分から誘うときながら遅刻して……。しかも、こんなに学校から近い場所なのに」

ちなみにこの店を待ち合わせ場所に指定したのは貴美である。

ふるふると首を振る貴美。ケーキを飲み込んでからようやく返事をする。

「こうゆうこともたまにはあるよ」

「すみません」

更に頭を下げる美穂。「男子生徒が授業をエスケープして、先生がホームルームで説教を始めちゃったんです。だからメールを打つこともできなくて……」

「とばっちりを受けちゃったんだね」

ふふと貴美は苦笑した。相変わらず上品で魅力的な笑顔である。

「私の友達にもいるよ。とってもやんちゃな男の子」

私の友達にも……。

美穂は思った。その人が例の自分のファンだという友達なのかなと。

彼女は意を決し、ひざの上に置いた鞆の中を探り始めた。早速だが本題に入ることにしたのだ。

「これは？」

美穂から一枚の写真を受け取った貴美は、数秒間じつくりとその写真を見つめた後、視線を美穂に移し尋ねた。その間表情は全く変

化しなかった。

「と、友達に撮ってもらいました」

顔を赤らめうつむいたまま美穂は答える。「後ろ姿は勘弁してください」

写真には、眼鏡を外し髪をアップにした松尾和葉としての美穂が写っていた。ただ、決してテレビでは見せることのない大胆な格好をしている。なんと、上半身に何も着ておらず、身につけているのはフリルのついた白いエプロンだけという裸エプロン姿であった。豊満なバストがエプロンの両サイドから半分はみ出してしまっており、バストトップはギリギリのところまで隠れている。ちなみに、写っていないが下半身も何も履いていない。彼女の言うとおり、親友の河内那美に先日デジカメで撮影してもらったもので、バックに写った小綺麗な部屋とエプロンは那美のものである。

「い、いや……」

困惑したように髪の毛を指先でいじる貴美。「なんていうかすごくセクシーな写真だと思うけど、私に見せられても困るというか……。なんなのこれ？」

「これしか思いつかなかったんです」

美穂は上目づかいで貴美を見た。「実は貴美さんにあつかましいお願いごとがありまして、その交換条件として貴美さんにその写真をもらっていたかどうか……」

「えー？」

貴美はまたまじまじと写真を見つめた。「別に私はこんな写真欲しくないよ」

「充分承知しております」

ひたすら恐縮する美穂。「でも、思いつかないんです。貴美さん、私のファンだつていう友達がいるんですよね。その人にあげてもいいし……、わ、分かりました！ なんならネットオークションでお金に換えてもいいです！」

数秒の間を置いて貴美はそっと写真を裏に向け、美穂の目の前に

差し出した。まぶたをパチパチと動かし、貴美の表情を窺う美穂。

「いらないよ」

貴美は相変わらず無表情のままであった。「確かに友達にこれをあげれば喜ぶだろうけど、美穂ちゃんだって大事な友達なんだから、これをあげるわけにはいかない。もちろん、インターネットオークションに出品するなんてもってのほかだね」

優しく微笑む彼女。美穂は思わずドキツとして彼女から目を背けた。「交換条件なんて出さない。どんなにあつかましくても、私にできることなら力になるから。言ってみなよ、お願いごと」

美穂の顔がパツと光り輝いた。そして心の中でガツポーズを決める。実は貴美がそう言ってくれるのをほのかに期待していたのだ。写真はあくまで自分の熱意を伝えたいがために用意したものに過ぎない。

サツと裸エプロン写真をスカートのポケットにしまう彼女であった。

「好きな人か」

そう呟いて、追加注文したった今運ばれてきた紅茶を口に運ぶ貴美。

「嘘について本当にすみません」

また平謝りする美穂。彼女も紅茶を注文したが、未だ口をつけてはいない。「長岡くんは貴美さんが秀英大学に通ってるって聞いた時、もう頼れるのは貴美さんしかいないって思ったんです」

「謝らなくていいよ」

貴美はそう美穂を諭した。無表情ではあるが怒っている様子はない。「実はホツとしてるんだ。もし美穂ちゃんが秀大に落ちちゃったら私のせいになるんじゃないかって。勉強を教えようにもなかなか時間が合わないし。この後も渋谷でお仕事なんですよ？」

秀英大学進学希望という建て前で貴美に近づいた美穂。「どっち

かつていつたらこつちのほうが気が楽だよ。ひよっとしたら美穂ちゃんが好きの人と知り合いかもしれないし。ねえ、その人の名前分かる？」

「はい」

美穂は頷いた。「橘川夢多さんです」

「橘川……」

橘川夢多という名前を聞いて貴美の表情がかすかに変化したのを美穂は読み取った。ひよっとして知り合いか、と彼女は淡い期待を抱いたが、貴美はしばらく考え込んだ後、残念そうに首を横に振った。「ごめん。やっぱり聞いたことない」

「そうですか」

美穂は落胆するも、それはほんの一瞬だけであった。「でも、貴美さんに本当のことを話せてよかった。なんだか、近いうちに橘川さんに会えそうな気がします」

立ち込めていた暗雲があっという間に消え去る、そんな爽快感を彼女は覚えていた。

## 24 悪霊退散

「誰か助けてー！ 殺されるー！」

白いソフトハットをかぶった池田綾香は周囲の面々に涙目で助けを求めた。しかし、彼らはニヤニヤと笑みを浮かべながら、じつとその成り行きを見つめるばかりである。「ちよつとー！ 岩田さん！」

すぐ脇に銀色のスーツ姿の岩田幸三が立っていた。頼みの彼も綾香の訴えに耳を貸そうとしない。それどころか、呆れたような表情で「いい加減静かにしろよ」と綾香に苦言を呈すのであった。

綾香は立ったまま四角いボックスの中に閉じ込められていた。閉じ込められているのは首より下のみで、はたからはボックスの上にならぬと綾香の首が乗っているように見える。手足に手錠をかけられており、身体の自由は利かない。そして、ボックスがどうなっているのかを見て取ることもできない。

綾香の目の前に光り輝く柱が立った。それは照明や綾香の顔すらも反射してしまうほど磨きぬかれた剣であった。剣を持つのは背の高い少女。人形のように整った顔立ちと、サラリと長く艶のあるロングヘア。黒いタキシードとシルクハットがトレードマークのそう、マジシャンアイドル、プリンセス雅である。

「ギャー！ なんでもするから許して！」

綾香のパニックに拍車がかかる。「雅ちゃん！ ゴメンって、謝るからー！」

「黙れ」

綾香に流し目を送り、冷たい視線でそう言い放つ雅。それでも黙らない綾香の身体に剣を突きつけ、やがて真つ直ぐに刺し込んだ。

「悪霊退散！」

「ぐえー！」

断末魔をあげる悪霊綾香。遠のく意識の中で聞いたのは、共演者

または閲覧者たちの、悪魔のような笑い声と拍手の音であった。

「チロリちゃん。君は本当にギャーギャーとうるさいね」

パイプ椅子に腰かけ、シルクハットを指でくるくると回しながら雅は言った。「私はプロのマジシャン。串刺しマジックを失敗するわけがないだろう」

「そんなこと言われても怖いっちゃん！」

雅の隣の椅子に座る綾香。ピンク色のキャミソールと白のホットパンツを着用している。「あんたもいつペン刺される側やってみよ」

「いつだってやってあげるさ」

雅は綾香を指差し「ただ……」と付け加えた。「刺す側が君だったらゴメンだね。君は不器用そうだから本気で失敗しかねない」

唇を尖らせ、綾香は「こいつ、本当に刺したい」と独り言のように呟いた。

本日はここ、渋谷の某撮影スタジオで、昼過ぎから特番の収録に臨んでいた。番組の内容は世界のビュクリ人間たちのVTRをスタジオで観賞し、時折コメントを挟むといったシンプルなものであったが、番組の後半にサプライズゲストとして登場したプリンセス雅が串刺しマジックを披露することになり、そのアシスタントとして無理やり綾香が串刺しボックスの中へ入れられてしまうハメになったのだ。プリンセス雅の登場も、マジックのアシスタントになることも、綾香はまるで聞かされていなかった。

午後六時ようやく収録が終わり、現在はフロア隅の休憩スペースで数人のスタッフや共演者たちと世間話をしているところである。「おい、チロリ」

テーブルに置かれた灰皿に煙草の灰をトントンと落としながら、司会であった岩田幸三が意地悪な笑みを浮かべた。「最後のありやないわ。お前本当に気失いかけてたたる」

「だって怖いんですもん」

甘えた声で岩田にすがりつく綾香。共演が多いということもあり、彼女は岩田を兄のように慕っていた。「こいつってば悪魔みたいな顔で私を睨みつけてきたんですよー」

綾香に指差された雅は「フン」と鼻を鳴らし立ち上がった。コーヒーマイカーの置かれた少し離れたテーブルに向け歩く。

「あんまりうるさかったから、一瞬本当に殺意が湧いてしまったんだ」

「だよなー」

岩田に同調されてしまい、綾香はあんぐりと口を開け彼の顔を見つめた。「俺も時々殺意湧いちまうんだよ」

短髪の頭を指でボリボリとかきながら、岩田はにこやかに笑った。「そんなー!」

岩田の銀色のスーツの袖をつかむ綾香。

「チロリちゃん」

コーヒーの入った紙コップを手に、元のパイプ椅子へ座りながら雅が言った。「ん？」と綾香がそちらに顔を向ける。「この後は仕事？」

「銀河放送でラジオの収録」

岩田から離れ、そっけなく答える綾香。後方に立つマネージャー南吾郎に「七時半までに行けばいいとよね」と確認しようとするも、彼は女性スタッフと話しこんであり、綾香など眼中にない。

「そう」

コーヒーに口をつける雅。「私はもう終わり。これから三階の楽屋へ松尾和葉ちゃんにでも会いに行こうかなと思ってるんだ」

「え!？」

綾香は目を丸めた。「松尾和葉、ここにおると? ていうかあんた知り合いなん?」

「一年ほど前に共演してからの付き合いなんだ。同じ年で気が合ってさ。この後隣のスタジオで収録を行うはずだよ」



「ふーん」

恋人井本真一と約束した（しつこいようだがした覚えはない）松尾和葉の裸エプロン写真のことが、綾香の脳裏を過ぎった。しかしながら、今日松尾和葉を訪ねたところで、そんなものを入手できるはずもない。彼女はふふと自虐的な笑みを浮かべた。

『裸エプロン姿の写真を撮らせてください』なんて言ったら変態扱いされるな……。

しかも相手はあの松尾和葉である。昨年、エックステレビ局内で彼女と顔を合わせた時のことを思い出し、今度ははあと溜息を吐く綾香。そして彼女は思う。

まあ、どうせご飯食べないかんけん、どっちにしてもそんな時間ないか。

ん？

と、綾香の頭の中にもう一つ引っかかることが。ハッとプリンセス雅の横顔を凝視する。

「あ、あんた、松尾和葉と同じ年ってことは……。高校生なん？」  
「うん」

コーヒートを啜りながら、いとも簡単に頷く雅。「年は公表してなかったんだけど、先日写真週刊誌でバラされちゃってね。潔く認めることにしたんだ。チロリちゃんも気をつけなよ」

「年下なら敬語使いーよ！」

綾香は眉をひそめた。「私はあと何日かで二十歳っちゃけんね」  
「芸歴は私のほうが上だったはずだよ」

雅は綾香を睨みつけた。「君こそ、先輩にはちゃんと敬語で話すべきだと思うな。チ・ロ・リ・ちゃん」

う……。

助けを求めるように岩田に視線を送る綾香。しかし、岩田は腕を組み「雅が正しい」と大きく頷くのであった。

「おい、チロリ」

背後から野太い声で名前を呼ばれる。綾香ははいはいと心の中で呟きながら後ろを振り返った。そこにはもちろん、サングラス越しの目でこちらを真っ直ぐに見すえるマネージャー南の姿があった。

「弁当届くのがちょっと遅れるそうだ。時間にはまだ余裕があるが、食ってたら遅くなる。今日はラジオが終わるまでメシ抜きだぞ」

「えー……」

突然のメシ抜き宣言により、綾香はガツクリとうな垂れた。数秒後、気を取り直し改めて松尾和葉について考える。

いつか裸エプロン写真を撮らせてもらうためにも、まずは仲良くならないかんけんね。

食事に時間を使えないことで、松尾和葉に会いに行く決意をする彼女であった。

## 25 目的の品

テレビ局とは違い、楽屋の数はそれほど多くない。よって個室が用意されるのは大御所タレントぐらいのもので、まだ芸歴も浅い松尾和葉には、数人のタレントと共同のやや大きめな楽屋があてがわれていることは想像に難くない。ただ、綾香の場合は衣装はほとんど自前であるし、メイクもフロア隅の休憩スペースや待合室あたりでさつと南に施してもらったことが多いため、あまり楽屋を使わない。もし和葉も自分と同じタイプであつたら、すでにスタジオへ移動してしまっている可能性もある。他の番組の収録現場に突入するのは勘弁してほしいとこなので、そうでないことを祈るばかりだ。

ここか……。

やけに照明の明るい三階の廊下。いくつか並んだドアのうち、唯一の引き戸タイプのドアの前に綾香は立っていた。ドアに『病は着から 女性出演者様』と書かれた貼り紙がしてあつたからである。『病は着から』とは松尾和葉がレギュラー出演するファッションをテーマにした深夜番組で、その収録は常にこのスタジオで行っているそうだ。綾香はその番組を知らず、いずれも雅からの情報であるよし。

綾香はドアをノックした。間髪入れずに中から「はい」と女性の声が聞こえる。松尾和葉の声ではなかつたような気がする。

「失礼します」

なるべく音を立てないようにそつと引き戸を開ける。すると、突然目の前に背の高い少女が現れ、綾香は「ひっ！」と驚き退いた。

「遅かつたね。チロリちゃん」

そう言つてニコリと笑う少女の顔を確認し、綾香は更に驚く。いつの間にか袖のないセーターとタイトスカートという私服姿に変貌を遂げたプリンセス雅だったのである。

「な、なんで!?! 私がフロアを出た時、あんたまだ休憩スペース

におったやん！ しかもちやつかり着替えてるし」

「いい加減学習すれば？」

背中を押し、綾香を部屋の中に招き入れる雅。「マジシヤンのやることにいちいち驚かない」

十六畳ほどの広い楽屋。左右両側が鏡台となっており、突き当たりは全面窓である。窓の外には薄暗い空と隣接するビルの灯りが見えた。

「こんばんわあ。こんばんわあ」

雅の後ろを歩きながら、楽屋にいる全ての人に順に挨拶をしていく綾香。総勢は十名ほどで、見覚えのない顔ばかりだ。貼り紙に『女性出演者様』とあったものの、マネージャーやスタッフであろうか男性も数人いる。綾香に挨拶を返す者もいれば、全くの無視という無礼な者もいる。「こんばんわあ……」

最後の一人は窓際に座りメイクをするセーラー服姿の女子高生であった。鏡台があるのにコンパクトを使っており、彼女のみ周囲に取り巻きが一人もない。髪を下ろしており雰囲気は微妙に違うも、その少しだけ浮いた存在の彼女こそが松尾和葉であると綾香は即座に認めた。

「こんばんは」

コンパクトに目を向けたまま返事をする和葉。メイクに夢中である。「和葉ちゃん、おつかれさま」と雅が声をかけると彼女はようやく顔を上げてくれた。「あー、お久しぶりです」

満面の笑みで雅を迎える。その様子を見て、綾香は面白くなさそうに頬を膨らませた。

なんなん、この扱いの違い。

またも昨年のエックステレビでの一抹を思い出す。彼女はまた嫌な思いをするのだらうなと思いつつ「おつかれさまです……」と和葉に声をかけた。ところが。

「わー、チロリさん、お久しぶりです！ 収録ですか？」  
「へ？」

綾香の目が点となる。「あ、いや、収録終わりです……」  
「嬉しいです。わざわざ会いに来てくれて」

コンパクトをポケットに直し、和葉は綾香の手を取った。「チロリさんの新曲聴きましたよー。あのダンス可愛いですよー」

手をうさぎの耳に見立ててピョンピョンと跳ねる。「チロリさんも」と誘われ、綾香は「あ、ああ」と苦笑いを浮かべながら一緒に跳ねた。そして彼女は思う。

なんか……、今日は機嫌が良い？

テレビとは別人に見えた前回の対面とは違い、テレビのままの松尾和葉を目の前にして、戸惑いの色を隠すことができない彼女であった。

「あれ？」

ふと気がつき、キョロキョロと辺りを見回す綾香。「み、雅がいなくなっちゃった。なんで！？ いつの間に!？」

「あの子、目を離れた隙にいつも途中で一人消えちゃうんですよ。平然とした顔で和葉は言う。「本当に人を驚かせるのが好きなんですよ。私も最初の頃はビックリしてましたけど、もう慣れちゃいました」

そんな和葉の様子を見て綾香は、学習しようかと心に誓った。

「これからたった二時間で三本も収録するんですよー」

唇を尖らせ、和葉は愚痴のように言う。「いくら深夜番組だからって節約しすぎですよー」

「そ、そうですねー」

和葉のテンションに困惑しつつも、綾香は必死に歩調を合わせた。「私が今やってるラジオなんか、最新の情報をお届けするためとか言って、三十分しかないのに毎週録音するんですよー。それなら生

放送でいいやんって話で」

「わー、それはそれで困りますね」

目を細めて笑う和葉。そんな彼女の表情に綾香は思わず見惚れてしまった。

「やっぱり凄く可愛い。格が違うな……」。

全体的には落ちついた顔立ちでありながら、黒目がちの大きな瞳が彼女をあどけない少女にとどめている。それなのにバストはポインというギャップ。性格は天然ドジキャラ。これは売れないわけがないと彼女は心から感心してしまうのであった。

「あ、やばい。そろそろ着替えなきゃ」

和葉は出し抜けにそう言つと、何のためらいもなくセーラー服の上着を脱ぎ去りランニング姿となった。綾香はギョツとし、「え？」と楽屋内を見渡した。なるほど、いつの間にか男性たちが姿を消している。

「ん？」

立て続けに和葉がスカートを下ろし、それを近くにポイと投げ捨てた時だ。スカートのポケットから一枚の紙のようなものがすりと出てきたではないか。「あれ、なんか落ちましたけど」

写真……？

綾香がそれを拾い上げると同時に、和葉が「あっ！」と声を上げる。

「ええっ！」

綾香は写真を見て驚愕の声を上げた。なんと、写真には誰かの部屋（和葉のであろうか）をバックに、裸エプロン姿でこちらを見つめる和葉が写っていたのである。なぜ自分の求めていたものがこんなところに、それよりもなぜ松尾和葉がこんな格好を、と様々な交錯を頭に巡らせていた次の瞬間、綾香の手からふと写真が消えた。

「見ました？」

写真をぶんどった左手を身体の後ろに隠しながら、和葉は綾香にそう尋ねた。頬を紅潮させ、口もとに薄らと笑みを浮かべている。

しかし、どう見ても目は笑っていない。

綾香は和葉から顔を背け、ぎこちない動作でふるふると首を振った。

## 26 男は顔じゃない

午後十一時半。羽山美穂はネグリジエにパンティのみという姿で自室のベッドに座り、親友の河内那美と電話で話していた。

《そう、ちゃんと食べたんだ》

「うん」と頷く美穂。《でも、残念だったね。貴美さんが橘川さんと知り合いだったら、一発で橘川さんにまで辿り着いたのに》

「しかたないよ。秀英大学は広いんだから」

《貴美さん、協力してくれるって？》

「うん」と美穂はまた頷いた。

「よくは聞けなかったけど、貴美さん、何かの資格を取るために勉強中なんだって。だから、さすがに橘川さんを探すために自分から動き回るような時間はないらしいけどさ。親しい人何人かに橘川さんのことを聞いてくれるとは言ってた」

《じゃあ、それだけが頼りだね》

ネガティブな響きはない。どちらかというところと激励するような調子で那美は言った。

「だけど充分だよ」

ふうと息を吐き、美穂は天井を見上げた。「ようやく糸口が見つかったっていうのかな。それは貴美さんと知り合った瞬間からそうだけど、今日貴美さんに話して、糸の先っちょがちょこつとだけ穴に入ったね」

《そこまできたらあとは引っ張るだけじゃん》

なかなか洒落たことを言う那美。電話の向こうでしたり顔をしているのかなと美穂は思う。

「うん」

更に頷いてから、ふふつと嬉しそうに笑う。「引っ張るだけ」

貴美が味方についてくれたことで、今日一日、美穂は本当に「ご機嫌だった。本日の唯一の仕事であったレギュラー番組『病は着から』



の収録では、いつも以上に元気な姿を見せることができ、番組スタ  
ッフたちから終始賛美の声を寄せられた。自宅に帰りついた後も、  
普段はあまり口を聞かない父の肩を揉んであげ、感動した父に泣か  
れてしまった。

もちろん今も絶好調だ。この先に待ち受ける未来が楽しみで楽し  
みでしかたがないのである。

《あ、あの写真は結局貴美さんにあげたの？》

「ああ」

那美の部屋で、彼女に撮ってもらった例の裸エプロン写真のこと  
である。「ううん」と美穂は苦笑しながら答えた。「友達にあげて  
も、ネットオークションに出してもいいって言っただけだね、い  
らないって返してくれた。ちょっとホツとしちゃったよ」

《なんだー。つまんない》

本当につまらなさそうに那美は言う。《じゃあ写真はもう捨てち  
やったの？ 世界で一枚の超お宝写真》

撮影に使ったデジカメ是那美のもの（正しくは彼女の兄のもの）  
であったが、美穂の希望でデータは消去してしまっている。

「うーん、まあその話なんだけど……」

美穂は思わず目を泳がせてしまった。少々迷ったが打ち明けるこ  
ととする。「あげちゃった」

《え！？》

電話の向こうで驚嘆の声を上げる那美。《あの写真を！？ だ、  
だ、誰に？》

「綾川チロリ」

《綾川……。ええ！？》

綾川チロリといえば、橘川夢多が彼女のファンだというだけで美  
穂が一方的に敵視していたアイドルだ。那美が驚くのも無理はない  
と美穂は思う。

しかし、実際はチロリに対しての敵対心も日を追うことにほとんど薄れてしまっていた。橘川と話をしたのは半年以上前のことで、ひよっとしたらもうファンをやめているかもしれないという思いもそうだが、一番の理由としてはチロリが自分に匹敵するほどの知名度を得てしまったからだ和美穂は自己分析している。つまり、チロリを橘川がファンになるほどのアイドルだとして認めているということだ。よって、本日チロリが楽屋を訪ねてきた時も、最後まで友好的に接することができた。

「楽屋でスカート脱いだ時にポケットからポロツと写真が落ちちゃつてさ」

美穂は苦笑する。「チロリに写真を見られちゃったんだよ」

《なんでスカートのポケットなんかに入れてんのよ。なんで綾川チロリの前で脱ぐのよ》

質問をまくしたてる那美。特に理由はないため、回答しない美穂。「しばらくは見なかったことにする方向で話を進めてただけど、急に写真が欲しいって言い出してさ」

《なんであげちゃうのよ》

それにはもちろん理由がある。美穂は「えーつと」と、話しくそくに説明を始めた。

「チロリのお兄ちゃんが私の大ファンなんだって。話によると無名時代から応援してくれてて、DVDとかも全部揃えてくれてて。そのお兄ちゃんの誕生日プレゼントにって言うから……」

《それであげちゃったんだ》

ふうと溜息を吐く那美。《美穂がファンを大事にするってことは本当によく分かってるけど、それにしても見ず知らずの男にあんな写真をよくプレゼントできるな！。ひよっとしたら全部チロリの嘘で、ネットとかに流そうって考えてるのかもしれないでしょ》

まるでマネージャーのようなことを言うなと美穂は思った。

「ちゃんと釘は刺しておいたよ」

慌てて弁明する。「『誰にも言うな』『誰にも見せるな』『ネット

トに流すな』、考えついたことは大体……」

《勇氣あるなー、本当に》

那美は聞く耳も持たず、呆れたように言った。少々彼女をうつつとうしく感じる美穂であったが思い直すこととする。那美は本当に自分の身を案じてくれているのだ。親友だからこそその苦言である。

それに、美穂だつて口頭で釘を刺したぐらいで、チロリが自分を裏切らないという確証を持てるはずはない。もう一つ、チロリを信じた最大の決め手があったのだ。

《あ、そろそろ切るね。『病は着から』が始まっちゃう》

午前零時を過ぎた頃、出し抜けに那美が言った。美穂は「えー」と不満そうな声を上げた。

「そんないいじゃん。もうちょっと話そうよー」

那美も普段は自分の出演番組のチェックを欠かさないが、今日は気分が高ぶっているのです、それよりもまだまだ那美と話をしていなかった。

《ダメダメー》

うふふと悪戯つぱく笑う那美。《私だつて美穂のファンなんだから。美穂の出演する番組はちゃんと観ときたいのー》

「私のファンなら、私の番組を見るより私と喋るほうが優先でしょうが」

《明日もまた喋るから大丈夫！ それじゃあ美穂、また明日ね。おやすみー》

舌打ちをし、美穂も渋々「おやすみー」と挨拶をした。

通話が途絶えた後、美穂は携帯を手に持ったままベッドに横になった。ぼつつと天井を見つめながら「また長岡くんの話はなしかと呟いた。

あんだだけ変わってれば、那美も振り向いてくれないだろうな。顔は良いのに、勿体ない。

美穂は開いたままの携帯の画面を視界まで持つてきた。片手で器用にボタンを操作し、画像フォルダーのサムネイルの中から最新の画像を呼び出す。

顔が良いといえば、この人も……。

その画像は、綾川チロリが金髪の若い男性とキスをしているというものであった。横顔ではあるが、金髪の男性はかなりの美少年に見える。

写真が欲しいと言われ美穂が渋っていた時、チロリが携帯を取り出しながら覚悟を決めたように言ったのだ。

『それなら、私も絶対流されたくない写真をあげるけん。和葉ちゃんも誰にも言っちゃいかんばい』

そう、この画像こそがチロリを信じた最大の決め手である。彼女は写真に写る金髪の男性と同棲しており、兄ではなく彼に裸エプロン写真をプレゼントするということまで美穂は聞かされていた。

「男は顔じゃないんだもんね」

画像を通して橘川夢多の顔を思い浮かべ、美穂はふんと鼻を鳴らした。

「はあん、全然とれんよー」

女子トイレの洗面所に向かい、鏡を睨みつけながら情けない声を上げる親友の池田綾香。ブルーのポップな長袖シャツと白いミニスカートという出で立ち。太ももまで覆いかぶさる赤と黒のストライプ柄のサイハイソックスを履いており、靴は白のスニーカーだ。長い茶色の髪を後頭部で一つに束ね、最近の必須アイテムである野球帽をかぶっている。そして、野球帽の下の顔には、昨夜彼女の恋人である井本真一につけられたというキスマークがところどころに点在していた。

「本当にひどいねそれ。顔中についてるじゃんか」

鏡越しに綾香の顔を見つめ、矢上詩織は苦笑した。白のブラウスと黒い前開きの上着の重ね着にブルージーンズという地味なスタイルは相変わらず。ショートカットの片側の髪を耳の上に乗せており、そこに見える天使をかたどった大きな目のイヤリングが最も女性らしさを強調している。

「おまけに『綾香ー、愛してる愛してるぞー』って、あんまり強く抱きしめるけん、なんか首まで痛いんよ」

唇を尖らせながら、綾香は自分の頭を手で押さえつけ首をゴキと鳴らした。

「ふーん」

目を丸める詩織。「あなたたちってなんだかんだ言っただけ仲が良いんだねー」

聞いた話によると、昨晚綾香が真一に何かプレゼントを渡したらしく、それが彼に火をつけたそうである。

「うっん」

鏡に目を向けたまま綾香は首を振った。「昨日ほど冷え切った夜はなかったね」

「？」

詩織は首を傾げた。

仕事が休みだという親友の綾香に誘われ、久々に彼女と共に渋谷109へ遊びに来ていた。詩織のほうは学校があったのだが、相手は売れっ子アイドル。なかなか暇が合わないので、しかたなく学校を休んで綾香に付き合うこととした。

それにしても彼女は思う。先日発売されたセカンドシングル『やっぱり博多が好きやけん』は未だにヒットチャートに残っているようだし、最近はバラエティ番組にも引っぱりだこで、毎日のようにテレビへ顔を出している。通常なら雲の上の存在になっただけもおかしくない綾香が、こうして思い出したように自分を遊びに誘ってくれたことについて、詩織にとって正直悪い気はしなかった。

階段横のトイレを出た二人は、どちらからともなくトイレ最寄りのショップに足を踏み入れた。店の中には現在従業員しかいないようである。平日でも多くの客で賑わっているイメージの109にこんな場所があったのかと感慨深げに店内を見回す詩織をよそに、極限まで深々と帽子のつばを下げた綾香は早速商品を物色し始めた。

「ここはねー」

棚に畳んで置かれた赤いシャツを手に取りながら、綾香は詩織に顔を向けた。「トップス専門でブランド物は少ないけど、割と可愛い服が安価で買える知る人ぞ知る店なんばい」

「ふーん」

ファッションにさほど興味を持ってない詩織。ナビゲートは常に綾香の役目である。綾香が手に取ったシャツを広げる。胸もとが大きく開いたシースルーのシャツであった。

「どれどれ」

姿見に向かって自分の上半身にシャツを重ねる綾香。うーんと首を捻った後、今度は詩織の身体の前にシャツを持ってくる。「ちよ

つとオバサン臭いかなー」

「私か？ それとも綾香が？」

詩織がトゲのある口調でそう尋ねるのを無視し、シャツを元の場所に直してからハンガーにかけられた少し厚手の服に持ち替える綾香。ゆつたりとした黒い前開きシャツである。

「これはないな……」

すぐさま戻す。その様子を冷たい視線で見つめる詩織が一言。

「ケンカ売ってるでしょ」

ただいま綾香に失格の烙印を押されたシャツは、詩織が現在着ている上着とよく似たタイプであった。

「そ、そうゆうつもりやないんよ」

ぶるぶると首を振る綾香。「ただ、詩織に似合うもつと可愛いヤツを選んであげたいんよ。詩織って美人なのにつつも福袋で叩き売りされるような地味な服ばつか着とるやん。多分、今109にいる人の中で詩織が一番地味っちゃないかな」

キョロキョロと辺りを見回す詩織。少なくとも視界に入る客の中に自分より地味な服を着ている者はいない。思わず頬を赤らめる。

「別にいいもん」

詩織はプイと顔を背けた。「田之上くんにもよく地味って言われるけどさ。私は好きでサツパリとした服を着てるんだからほつてよ」

「あ、これはどう？」

へソ出し必至の丈の短い白いシャツを広げる綾香。詩織は「着るか！」と声を荒げた。

このように綾香が毒舌を交えながら次々と詩織をコーディネートしては、詩織がそれらをことごとく却下するのが、二人でアパレルショップを訪れた際の彼女たちのスタイルである。不機嫌を装っている詩織だが、実は心の中ではそれなりに楽しんでおり、学校を休んでまで綾香と遊びに来てよかったと薄ら実感していた。

場所を移し、綾香お気に入りのお店として毎度109を訪れた際には必ず足を運ぶウェアショップへ。先ほどの店とは違って大賑わいで、店に入った瞬間からビル内を絶え間なく流れていたBGMが聞こえなくなってしまうた。

「詩織は就職どうするん？」

二人で店内を眺めている時、ふと綾香が尋ねた。詩織は吉祥寺ワゴンウェイコンピュータースクールを今年卒業する予定である。就職に代わる選択肢として、自ら希望してもう一年学校で勉強し直す『留年』ならぬ『延長』というシステムも存在し、そちらとやや迷ってはいるが、親を説得するのが面倒くさいので基本は就職を目指すこととなる。ただ、まだ就職活動らしきものは一切行っていない。「広告デザイナーとかウエブデザイナーとか、本当はそっち系の仕事がいいんだけどね」

詩織はふうと溜息を吐いた。「狭き門だから厳しいだろうな。最悪お父さんの会社で事務として働けそうだから心配はいらないと思う」

「ねえ、SDPに入ればいいじゃん」

口の端を曲げる綾香。「私と亜佐美がブレイクしたけん、人手不足なんやあって。あのガラの悪いオッサンに代わって私のマネージャーになってよー」

「あの人すごいやり手っぽいじゃん。私じゃ代わりになれないでしょ」

詩織は以前秀英大学秀英祭で顔を合わせた綾香のマネージャー南吾郎のいかつい顔を思い浮かべた。「確かに綾香と一緒に仕事するのは楽しいだろうな。ただ……」

「楽しいよー！」

詩織が興味を示したのを機に綾香の声色がうんと明るくなる。「マネージャーじゃなくて事務とかの仕事でもいいし、なんならタレントとしてでもいいっちゃない？」



それなんだよなーと詩織は思う。

秀英祭の日、南は『もしデビューしたくなったらいつでも声をかけてください』と詩織に言っていた。SDPに関わると、またそんな話を持ちかけられてしまうのではと詩織は心配していたのだ。今でも詩織の中にアイドルになるうという気などはさらさらない。

「うーん、考えとく」

そう言ってニコリと微笑んでみせる。一年後も恋人の田之上裕作と交際を、そして時々ではあるがこうやって綾香とも親交が続いていれば、少なくともそれで充分だと彼女は思った。

深夜零時を少し過ぎた『デイリーマート』店内。

「いらっしやませー」

入店してきたカップルに橘川夢多がそう挨拶すると、彼のいるレジカウンターからは見えない店の奥の雑誌コーナーから「いらっしやませー」と大田早苗がオウム返しをした。コンビニの夜間は様々な商品が納品されてくるが、この店の場合、その第一陣が雑誌であり、一人がレジを、一人が雑誌の品出しを、とそれぞれ仕事を分担するのが最も効率の良い作業方法であった。

一分足らずでチューハイを二つだけ持ってレジカウンターの前に立つカップル。橘川はピツピツと電子音を鳴らしてバーコードをスキャンし、合計金額を告げた。カップルのうち、茶髪ショートの背の小さな男性のほうが、のんびりとした動作で財布の中を探っている最中、新しい客が店内に入ってきたため、橘川は「いらっしやませー」とまた挨拶をした。そして、奥からは早苗のオウム返し。

六月に突入した。あまり就職活動に力を入れていなかった大学四年生がぼちぼち焦り始める時期である。橘川もその中の一人であるが、名門秀英大学のネームバリューは非常に大きいため、週五日の深夜バイトと並行しながらマイペースかつ楽観的に淡々と就職活動を行っていた。

「指切っちゃった」

返本の山を両手で抱えながら早苗がレジカウンターに戻ってきた。橘川が「どれどれ」と彼女のか細い指先を見つめようとすると、彼女は本をバツクカウンターにドスンと置き、改めて右手をそつと差し出した。確かに親指に一つ、赤い筋状の切り傷が確認できる。

「本当だ」

まるで自分のことかのように苦悶の表情を浮かべる橘川。「どこをどうやったら指なんか切っちゃうんだろうな」

「雑誌扱うの苦手なんだもん」

申し訳なさそうに笑う早苗。「ページをめくる時にさ。ついピッと紙の端っこに指を走らせちゃって」

想像して更に「うわ」と顔を歪める橘川であったがそれも束の間。「ん？ ページをめくる時って……。また仕事放っぽりだして雑誌読んできたの？」

「あつ」

早苗はしまったというふうに関を大きく開けた。それから「エへへ」と無邪気な笑顔を見せる。

「つたく」

眉をひそめる橘川。「なんか、やたらと時間かかっているなっと思っただよ」

「ごーめーんー」

甘えた声で橘川にすがりつく早苗。橘川はふて腐れたように彼女を無視しながら、心の中では彼女が可愛くてしかたがなかった。

橘川が早苗と交際を始めてからわずか三週間ほど。わずか三週間ではあるが、幾つか変化したこともある。まずは早苗の橘川に接する際の態度。交際直後から何かのスイッチが入ったようにパツと敬語が消え、一日単位で馴れ馴れしさが増していった。橘川はそんな彼女の様子を間近に見て他人ごとのように、上手だなと感じていた。始めは彼女の変化に戸惑うが、徐々にそれが自然となっていく、ついには戻れなくなる。こうやって男女は距離を縮めていくのかと彼は学んだ。

もう一つ。早苗の外見も随分と変わった。それまではおかつぱ頭に眼鏡、ノーメイク、いつも似たり寄ったり服というのが彼女の一般的なスタイルであったが、まるでこの時を待っていたかのように、眼鏡がコンタクトレンズに変わり、メイクを欠かさないようになり、服のバリエーションも増えた。髪型は変わっていないが、ピンで前髪をとめることが多くなった。かつてミスコンで四位に入賞した時の彼女を思い起こさせる。

恋をすると女は綺麗になるとは言うが、なぜ交際する前には変化しなかったのか。それについての答えはまだ出ない。やはり自分はまだまだ恋愛初心者なのだと橘川は一人納得するのであった。

午後一時過ぎ。冷凍食品の納品があり、それらの陳列場所がレジに近いため、今回は二人で品出しをする。

「最近、ツアーのメンバーと会ってる？　みなみ以外で」

ダンボール箱を開け、中からカップ型アイスクリームを取り出しながら、早苗は何気ない様子で尋ねた。秀英祭ツアー実行委員のことであろう。大庭みなみはこの店のバイト仲間なので、会っていて然りというわけである。

「うーん」

オープン式のアイスクリーム什器の中を整理する橘川。視線を泳がせ考え込む。「藤岡くんはちよくちよく店に来るよね。皆岡くんは彼女できたって話を聞いたけどそれ以来会ってないな。貴美ちゃんはまだもう四年になってから全然会ってないや」

「私は皆岡くんとは会ってないけど貴美とはよく会ってるよ」

橘川に顔を向けずに早苗は言った。なんとなく含みのある言い方だったため、橘川は不思議そうに早苗の顔を覗き込んだ。「実はね」

照れ笑いを浮かべる早苗。「橘川さんに片思いしてた時、貴美にもよく相談に乗ってもらってたの。あの子意外と相談に乗るの上手いんだよ」

「へー」

目を丸める橘川。「なんか恥ずかしいな。じゃあ貴美ちゃんって俺たちが付き合ってることも知ってるってこと？」

「もちろん」

そう頷いた直後、早苗は「あっ」と空になったダンボール箱を投げ捨て、レジカウンターに向かって走った。レジの前に客が立ったからである。

一人残された橘川は苦笑する。早苗と交際を始めたことはバイト仲間たちに秘密にしていたはずであったが、やはりどこからか漏れてしまったらしく（みなみ、もしくは早苗か）つい先日オーナーに『仕事中あんまりいちゃいちゃするなよ』と釘を刺されてしまった。確かに仲睦まじいのは良いが、それで仕事を疎かにしてしまうと二人の間に溝ができてしまう可能性もある。仕事中の私語はできるだけ控えなきゃなと心の中で呟く彼であった。

「そうそう、忘れてた」

レジから戻り早速私語を再開させようとする早苗を手で制し、ゆつくりと首を振る橘川。

「ダメだよ。そろそろ仕事に集中しよう」

「あ、そうだね」

残念そうに、そして照れたように早苗は笑った。「実は今日納品された『週間スキャンダル』で綾川チロリちゃんがスクープされて、ずっと話そうと思ってたんだけど……。橘川さんの言うとおりだね。仕事中の私語は控えなきゃね」

「うんうん」

……。

え？

早苗を二度見する橘川。しかし、早苗は橘川など見向きもせず、ときばきとアイスクリームの品出しに夢中となっている。自分から言い出した手前、今の話題を蒸し返すこともできない。

『週間スキャンダル』といえばゴシップ記事を中心とした日本を代表する写真週刊誌だ。過去にこの雑誌によって泣かされたタレント、著名人の数は計り知れない。

スクープって……。まさか熱愛報道か！？

早苗という恋人を得て橘川は既に割り切ってしまったている。自信が熱を上げる綾川チロリに恋人がいたとしても、多少のショックを

受けるかもしれないがファンを続けていく自信はある。ただ、その熱愛報道によってチロリが芸能活動を停止せざるを得ない状況に追い込まれて

しまうのではないかと彼は心配していた。そうなら簡単には立ち直れない。

「『綾川チロリ 実は佐世保出身だった』だって」

「え？」

つい顔を上げる橘川。早苗はニコリと笑い「安心した？」と尋ねた。橘川は何も答えない。橘川が綾川チロリのファンだということは未だ誰にも話したことはなかったが、いつも彼のそばにいる早苗はどうやら感づいていたらしい。

「佐世保……。長崎の佐世保か」

ホッと胸を撫で下ろす橘川。

なんだ、そんなことかよ。いや、でもそれはそれで……。

有線放送のロックナンバーに耳を傾けながら彼は思う。そういえば最近、あれだけ流れていた『やっぱり博多が好きやけん』を有線でさっぱり聞かなくなってしまったなど。

## 29 初めてのスキヤンダル

午後二時。吉祥寺駅前のロータリーに見慣れた黄色の軽自動車  
が停まる。深く野球帽を被り、黒いティーシャツとバギーズと  
いういつもに比べてやや地味な出で立ちの池田綾香は、さつと車に  
駆け寄り、「おはようございます」と挨拶をしながら助手席のドア  
を開いた。運転席に座るお馴染みスーツ姿の南が「おう」と野太い  
声でそれに応える。綾香が助手席に座った瞬間、南は彼女のひざの  
上に一冊の雑誌をポンと置いた。それは本日発売の『週間スキヤ  
ンダル』であった。

「初スキヤンダルおめでとさん」

南が嫌味つたらしく言う。綾香はフンと鼻を鳴らし雑誌を南のひ  
ざの上に返した。

「さつき私もそこで買ったもん」

ハンドバッグの中からチラッと同雑誌の角を見せる。

『週間スキヤンダル』に綾川チロリが実は佐世保出身だったとい  
う記事が載ったことを、綾香は昼間のワイドショーで初めて知った。  
特集を組まれるわけでもなく、一分ほどの尺で話のネタ的に紹介さ  
れただけであったが、彼女は部屋中を意味もなくうろつるとさまよ  
ってしまうほど焦り、心配になって南に電話したりもした。ただ、  
南は記事のことを知っていたものの、さほど気かけている様子では  
なかった。

「あんなもん、いつかはバレるに決まってるんだ」

ハンドルを操作し、アクセルを踏み込みながら南は言った。「記  
事にも書いてあるとおり、タレコミの犯人はお前の地元の同級生ら  
しいじゃねえか。今は『やっぱり博多が好きやけん』のヒットでお  
前の株も上昇している時期だからな。金になるかもしれない情報を  
みすみす胸のうちに閉まっておこうなんてヤツがこの世にいるか？」  
「うう、絶対夏美が犯人やん」

悔しそうに頬を膨らませる綾香。「私があの子の彼氏と二人でカラオケ行って、そのせいで別れることになったけん、今でも私を恨んどっつちゃん」

「アホか。お前と一番仲が良かった親友が犯人の可能性もあるぞ。人間はそうゆう生き物だ」

血も涙もない南の言葉に、ガツクリと肩を落としてしまふ綾香であった。

本日の仕事は都内の某レジャー施設でのロケーションである。高速には乗らず、時折渋滞に巻き込まれながら少しずつ目的地へ近づいていく。

「ねえ」

ずっと黙っていた綾香が約十分ぶりに口を開く。「普通の子は出身地をごまかしたことがバレたぐらいどうってことないやろうけど、私の場合は『やっぱり博多が好きやけん』がヒットしてしまつたけん、たくさんバッシング受けるっちゃんないかいな」

「お前を地元出身だと思つて親近感を覚えていた博多の人間や、一部のファンは怒るかもしれないな」

前を向いたまま頷く南。「だがどうってことはない」「なんでよ」

綾香はキツと南を睨みつけた。「テレビの仕事とか、干されたりする可能性もあるっちゃんないと?」

「それはない」

そうキツパリと断言する南を訝しげに見つめる綾香。南は続ける。「『やっぱり博多が好きやけん』でブレイクしたかと思いきや今度はこの騒動だ。これだけ話題性に富んだアイドルを

テレビが見放すわけではないだろう。今日のレジャー施設での仕事でも、共演者は今回の騒動のことを触れてもオーケーということになっている。せいぜいいじられてこい」



「あんたがオーケー出したっちやろつもん」

綾香はボソツと憎まれ口を叩いた。

「まあ、世間を欺いていたという悪いイメージはしばらく付きまとうだろうがな。そんなものはあつという間に人々の記憶から消え去ってしまうもんだ」

ぼうつと窓の外を眺めながら南の話の話を聞く綾香。ひよつとしたら綾川チロリそのものの記憶さえ消え去ってしまうのではないかと彼女は不安になっていた。

「もう『やっぱり博多が好きやけん』関連のイベントもほとんど残っていない」

車が赤信号で停車したのを機に、ジツポライターでシユボと煙草に火をつける南。「一区切りついたら今度はトーマスと新曲の打ち合わせにかかるぞ」

「新曲……」

綾香の瞳にほんの少し希望の光が宿る。しかし、それもあつという間に闇の中へと飲み込まれてしまった。「でも、『やっぱり博多が好きやけん』以上のヒットは無理やろつね」

はあと深い溜息を吐く。南はそんな綾香をチラツと一瞥し、チツと舌打ちをした。

「それなりにロングヒットはしたが、売り上げ枚数でいえば十五万にも満たない。もし百万枚も売り上げる大ヒットになっていれば、お前も晴れて一発屋の仲間入りだっただろうが、十五万なら他の曲で塗り替えることも十分に可能な数字だ。お前はついてるほうだぞ」

「そうか。そうよね」

すぐに元気を取り戻す綾香。「トーマスさんも自信があるって言うってたし、新曲でバーンと『やっぱり博多が好きやけん』を忘れさせればいいとよ！ よーし、今日からは博多の歌姫改め佐世保の歌姫で頑張るけんねー！」

番組側が予約していたロケ現場近くの屋内パーキングに駐車する。時刻は三時を少し回ったところだ。

綾香は車から降りてドアをボタンと閉めると、顔をもみもみとマツサージし、二、三度チロリンポーズの練習をした。それから「よし！」と威勢良く声を上げ気合いを入れる。南に顔を向け、早く来いと促そうとするが。

「ん？」

運転席に座ったまま南は車から出てこようとはしない。綾香はそちら側に回り込み、窓から中の様子を眺めてみた。どうやら誰かと電話をしているようである。

ん？ 仕事の電話かな。ひょっとしてキャンセルの？ それとも、まさか女やなかるうね。

様々な考えを巡らせていたその時、ドンという衝撃音と共に顔面に激痛が走る。顔を押さえ、のた打ち回る綾香に冷たい眼差しを向けながら、南は運転席のドアをボタンと閉めた。

「ドアの前でぼうつと突っ立ってんじゃねえよ」

綾香の顔を襲ったのは南が勢いよく開けたドアの窓だったらしい。むくつと立ち上がり、涙目で南を睨みつける綾香。

「あんだ……、他に言うことない？」

「しつかりと顔をマツサージしとけよ」

南は携帯をスーツのポケットにしまった。「それより、来月の博多祇園山笠の日、九州ローカルのテレビ番組にゲスト出演する予定だったんだが、向こうから断りの電話入れてきやがった」

「う…………」

綾香の心がどんよりと沈み込む。が、精一杯持ち直そうとする。

「む、無理はないよね。まあ、佐世保出身ってバレとるのにそんな番組に出たらブライニングの嵐やろっけん、かえって良かったっちなない？」

「まあな」

ふうと息を吐く南。「これで残る福岡での仕事は、来週の福岡ド

ームでの始球式だけか」

「ふ、福岡ドーム!？」

綾香は目を見開いた。「そんなん絶対無理だつてば! そっちもキャンセルしてよ!」

「無理だ。来週だからな」

南は平然とそう言つてのけると、後部座席のドアを開け、中から大小様々な荷物を取り出して両手に持った。「始球式の前は大観衆の前でミニライブだぞ。良かったな」

「ミニライブ……」

福岡ドームの大観衆のど真ん中で、数万人のブーイングを浴びながら『やっぱり博多が好きやけん』を歌う自分を想像し、綾香はクラクラと眩暈に襲われてしまうのであった。

### 30 仕事は仕事

都内の屋内プールサイド。赤い紐ビキニ姿の羽山美穂を二つのカメラが捉えていた。一つは静止画用のスチールカメラ。もう一つは動画用のビデオカメラである。夏に同時発売予定の新作写真集とDVDの撮影を同時に行っているのだ。DVDは写真集のメイキングであるが故、ビデオカメラは写真集のカメラマンやスタッフたちを意図的に見切れさせて撮影している。

「もうちよつとあご下げてー」

四つんばいでやや上半身を低くした、いわゆる女豹のポーズでカメラマンの支持に従う美穂。フラッシュをたかれるたびに、わずかながら表情を変えたり体勢を変えたりと自ら撮影が悠長に進むよう協力する。松尾和葉の性格上、表情は基本的に屈託のないスマイルであるが、時には恥じらいの色を見せたり、憂鬱の色を見せたりもしたほうがカメラマンやファンが喜ぶということを彼女はよく知っている。

「いいよー」

ヒゲ面のカメラマンがレンズを覗き込みながら、いやらしい笑みを浮かべる。「その顔いいねー」

ふとビデオカメラのほうが自分の後方に回ったということに美穂は気がついた。そちらも意識して自慢のヒップを更に突き出してみせる。それから顔だけを後ろに向け、ビデオカメラにニコツと笑顔でご挨拶をする。

「和葉ちゃん」

そう言っただけで顔の前からカメラをどける写真集のほうのカメラマン。「こっちの撮影中はそっちのカメラは無視しなきゃダメって言ったでしょー」

「あ」

ハツとした顔を見せる美穂。「エへへ」と笑い、舌を出す。「や

「つちやいました」

天然ドジキャラもアピールできたところで、水着チェンジのため撮影は一時中断となった。

用意された白いビキニを手に女子更衣室に入った美穂は、入り口の近くにあった木製の四角い椅子にどんと腰を下ろした。はあと溜息を吐き、ビキニを目の前に掲げてひらひらと揺らしてみせる。撮影中における松尾和葉の明るいキャラクターとは裏腹に、実際の、ただの女子高生としての彼女の現在の心情は。

「いったい、どうすればいいんだろう……」。

そう、ひどく思い悩んでいた。

ここ数日、長岡貴美との連絡が完全に途絶えてしまったのだ。

貴美からメールの返事が来ないということを知った時、美穂の脳裏に最も先に思い浮かんだフレーズは『やっぱりか』であった。なぜなら、以前より少しずつその兆候が見え隠れしていたからだ。ケ―キ屋で彼女と二度目に顔を合わせた頃、そう、橘川夢多のことを彼女に話し、協力を約束してもらったあの頃からだと思う。メールでその後何か進展はあったかと尋ねてみても、どうにも歯切れの悪い返事しか返ってこなかった。去年橘川と出会った日のことを長々とメールに書き綴った時は、そのメールに対してのコメントは一言のみで、すぐに別の話題にすり替えようとしていた。

貴美は橘川のことを知っている。美穂はすぐにそう直感した。先日のケ―キ屋で貴美が橘川の名前を聞いた時、微妙に彼女の様子が変化したような気がした。あれはやはり間違いではなかったのだ。しかし……。

貴美はなぜ自分が橘川を知っているということを隠そうとするのか。それについて明確な答えはまだ出せない。貴美の友達が橘川に片想いをしている。または貴美自身が橘川に片想いをしている。だから橘川を紹介することはできない。その辺が妥当なところである

うか。

もちろん、貴美は本当に橘川を知らないという可能性だってあることにはある。あの裸エプロン写真を不気味に思い、美穂を避けているというのはどうだ。または、ただ単に忙しいため、メールを打つのが億劫となったか。

少なくとももう一つ有力な可能性は本日学校で自ら消しておいた。

午前中の休み時間のことだ。いつものように机に向かって読書をする長岡聡に美穂は話しかけた。

『久しぶりじゃないか』

本を開いたまま顔を上げる長岡。口を真一文字に結び、美穂は彼を見下ろしていた。『どうしたんだ？ その顔はとてもじゃないけどアイドルの顔には見えないな』

『那美とは上手くいつてる？』

表情を変えずに美穂はそう尋ねた。

『河内さん？』

長岡は目をわずかに見開かせた。『上手くいつてるとは言いがたかもしれないね。でも一つ学んだことはあるんだ。彼女はあまり本が好きじゃないらしい。彼女と一緒にいる時はなるべく本の話を出さないようにしているよ』

『え？』

顔つきを若干緩める美穂。『一緒にいる時って……。二人で会ったりしてるわけ？ それって普通に上手くいつてるじゃん』

『いや、まだだ』

ゆっくりと首を振る長岡。『いずれは河内さんも本の魅力に気づいてほしいと思っている。近い将来には一冊の本を二人で同時にめくる……。そんな仲になりたいと僕は思ってるんだ』

『そ、そう……』

美穂は眼鏡のブリッジを指で押し上げた。『てっきり那美にフラ

れちゃったのかと思った』

『なぜ?』

長岡は眉をひそめた。視線を左右に泳がせ、気まずさからか髪の毛を指先でいじる美穂。

河内那美にふられた腹いせに、長岡が自分と貴美との仲を引き裂いたんじゃないかと思っていたとはさすがに言えない。

『ち、ちよつとね』

ごまかしたように美穂は笑った。『それじゃあ、引き続き頑張りなよ』

怪訝そうにこちらを見つめる長岡の視線を背に浴びながら、美穂は自分の席へと戻った。

「いったい、どうすれば……」

那美以外の誰かにも相談してみようかな。

例えば長岡はどうだ。いや、彼がまともに取り合ってくれるとは思えない。芸能関係者ではどうか。マネージャーの仲田は? いや、いくら親しいとはいえ事務所の人間に男の相談を持ちかけることはできない。アイドル仲間であり、特に仲の良い菊田つばきあたりが最も現実的か。

あっ!

髪の毛をいじりながら思わず考え込んでしまっていた。大勢のスタッフが自分の着替えを待っているのだ。美穂は慌てて着ていた紐ビキニを脱ぎ去り、白のビキニパンティに足を通した。そのまま更衣室を出ようとすると、トップレス状態だということに気がつき、青い顔で引き返す。

仕事は仕事。プライベートを持ち込まないようにしなきゃ。

ビキニトップスを装着しながら、自らを落ち着かせるようにふうと長い息を吐いた。

### 31 夏の気配

投稿者：サダヲ（2009/6/13/17/15）

綾川チロリ 三万人の観衆に懺悔！？

六月十三日、福岡ドームにて行われたプロ野球交流戦、福岡ポークス対横浜ロブスターズ第一回戦デーゲームの始球式に人気アイドルの綾川チロリ（二十歳）が登場した。今月の始めに写真週刊誌によつて出身地が実は福岡県博多ではなく長崎県佐世保であったことを暴露されてから初めての『凱旋』となる。

ドーム内にチロリの名前がアナウンスされると同時に観客たちはどよめき、やがてベンチ横の通路からポークスのユニフォームに身を包んだ彼女が姿を現した頃には、どよめきがブーイングへと変わった。しかし、それも一瞬のことだった。

「福岡の皆ー。佐世保出身の綾川チロリです。私、本当は佐世保出身やったけど、それでもやっぱり博多が好きやけん、歌わせてもらいます。『やっぱり博多が好きやけん』！」

チロリがそう宣言するとブーイングはたちまち歓声に変わり、直後に行われた『やっぱり博多が好きやけん』のミニライブではドームを埋めつくした三万人超の観客ほとんどが曲に合わせて手拍子をするなど大盛況であった。

肝心の始球式では、バッターボックスに立つロブスターズの外川聖二内野手にチロリンポーズ（左手を腰へ右手をチヨキにして額へ当てる）を決め、彼に同ポーズを要求するも拒否されたり、投球ではボールを足元の地面に叩きつけてしまい、転がってですらキャッチャーミットに届かないなど散々に終わったが、チロリは最後まで変わらぬ笑顔を観客たちにふりまいていた。（文／高田範子）



日刊ウェブスポからの転載です。いやー、さすがはチロリちゃん  
って感じですね。

res1:アーモンド大使:チロリちゃんならやってくれると思  
ってましたよ。福岡の人もなかなか話が分かるね。来月の山笠も楽  
しみだな。(6/13/17/19)

res2:大家:サイト飛んでみ。チロリのユニフォーム姿め  
っちゃ可愛いぞ。(6/13/17/33)

res3:チロリの妹:やったー(^^)！スクープされ  
ちゃった時はどうなるかと思っただけど心配なかったね。新曲早く出  
ないかなー。(6/13/17/46)

res4:権兵衛:山笠の地元テレビ番組の出演は向こうの申し  
出でキャンセルになっちゃったみたいですよ><。>アーモンド  
大使さん。この記事を見て考え直してくれたらいいのになー。(6  
/13/17/49)

res5:ぼんきゅぼん:有料放送で中継やってましたよ。最初  
ブイキングされた時はヒヤヒヤしましたけど、チロリちゃんの明る  
さが会場の空気を一変させたって感じですね。福岡ローカルの中継  
ではゲスト解説にも加わったそうですけど、おーちゃんさん、どう  
でしたかー?(6/13/18/01)

res6:アーモンド大使:マジっスか。貴重な情報ありがとう  
ございます。>権兵衛さん。本当に考え直して欲しいですよね。俺  
のところでも放送されるんで、チロリちゃんが出てたら絶対観るの  
にな。(6/13/18/14)

res7:匿名:不細工すぎ。テレビうつんな。(6/13/1  
8/51)

res8:データカロチン:ちよつと、全然懺悔してないじゃん  
(笑)(6/13/19/11)

res9:おーちゃん:また変なのが湧いてますね……。俺は会

場に直接観に行っただんで中継は見てませんが録画はしてます。明日観て感想を書こうと思います。>ぼんきゅぼんさん(6/13/19/16)

res10:権兵衛:ですよねー。でも、うちの地方じゃ観れ…。

えーっと、レス7とレス11とレス13を削除して、俺もなんかコメント書いところかな。

午前零時過ぎ。入浴を済ませたばかりの井本真一は、今や日課となった『チロリンルーム』の管理作業に追われているところであった。上は白ティーシャツ、下はグレーのスウェットという姿である。肩ひざを立てて椅子に座り、中指のみを使う慣れない手つきでカタカタとキーボードを打ち込んでいく。

写真週刊誌なんかには負けずに、これからもチロリンには頑張ってもらいたいですね、と。

レスを送信し終え、ふうと一息吐く。それから、ひざを下ろし背もたれに寄りかかると、真一は両手を頭の後ろで組み静かに目を閉じた。

何も考えずにぼうつとする。リビングと隣り合う寝室の窓から流れ込む夜風が風呂上りの金髪を優しく撫でる。外ではシトシトと今朝からの小雨が降り続けているが、前回の雨の日よりも気温はだいぶ暖かく、密かに夏の訪れを予感させる。

「夏か……」

夏と聞いて真一がまず頭に思い描いたものは、現在福岡に出張中の彼の恋人、綾川チロリこと池田綾香の常人離れた汗の量であった。綾香が本格的にデビューしたのは今年の九月で、世間に名が知れるようになった頃はかなり涼しくなっていたはずだ。『チロリンルーム』の掲示板に書き込んでいくファンたちの中で、綾香があれほどの汗っかきだということを知る人間はどのぐらいいるのだろうか

なと彼は想像し、苦笑いを浮かべた。

「……」

今日はあいつ福岡に泊まりだろうし、最後にエロサイトでも堪能しとくか。愛しの小村涼香ちゃん（AV女優）、待ってるよー。

ところが、鼻の下を伸ばして真一がマウスを操作しようとした瞬間、玄関からガタンと音がした。しゅんと何もかもを萎えさせてしまふ彼であった。

「帰ったばーい」

両手に紙袋を提げた綾香がドスドスと足音を立ててリビングへ入ってきた。福岡ポークスの野球帽を深くかぶり、ピンクのノースリーブのシャツと白いハーフパンツを着用している。「おっと、もう夜中やったね。しー」

真一に向かつて人差し指を立てる。真一はパソコンデスクの椅子から立ち上がり、ソファへと身を移しながら「お前だよ」とかったるそうに言った。

「明日は休みやけん、福岡に泊まってこようかなーって思ったけど、あんたが寂しがろうけん、戻ってきたっちゃん」

ダイニングのテーブルの上に紙袋を置きながら綾香は微笑む。「長浜ラーメンと明太子たっくん買ってきたけんねー」

リビングへ戻ってきた綾香の服を真一はまじまじと見つめた。

「夏の風物詩だな。お前のシャツ、汗でビショビショじゃねえか」

「ん？」とあごを下げる綾香。再び視線を真一に戻し左右に首を振る。

「違うよ」

プイと顔を背ける。「小雨やったけん、傘差さんで帰って来たっちやもん」

「ほっ」

綾香の側に近づき野球帽を脱がせると、真一は彼女の耳元にふっ

と息を吹きかけた。「わっ」と驚き、目をつむる綾香。「ならそんなシャツさつさと脱いじまいな。脱がねえなら俺が脱がせてやるぜ」  
びしょ濡れの綾香を見て、先ほど萎えてしまった真一の性欲が一気に再燃したのである。

「えー」

綾香は恥ずかしそうに頬を染め、チラッと真一を一瞥した。「シヤワー浴びるけん、ちょっと待ってよー」

「いいじゃねえかよー」

ニヤニヤと口もとを曲げながら、綾香のシャツに手をかける真一。

「涼香ー。愛してるぜー」

あ……。

彼の顔色が変わる。

「涼香？」

綾香の目の色も変わる。「今、涼香って言ったばいね」

彼女にギロリと睨みつけられた真一は青ざめた顔で「い、いや」と弁明しようとするも、その後の言葉が出てこずに、口をただパクパクと動かすのみに留まった。

数秒後、吉祥寺中に真一の「ぬほおおおお！」という叫び声が響き渡ったということについては言うまでもない。

### 32 ダイヤモンドダスト

オレンジ色の薄明かりに照らされた通路を真っ直ぐに進む橘川夢多。黒いシャツとジーンズを着用し、頭にはやはり野球帽をかぶっている。通路の左右には四人がけのテーブルが並んでおり、それらを陣取る客たちの姿を一組ずつ一組ずつ見定めていく。そんな中、『それ』らしき男女二人連れの客を発見する。二席ずつ横並びの客席は通路と並行に配置されており、その男女は二人とも通路側に座っている。橘川に背を向けているため、認識は困難である。

声をかけるしかないか。

まさか彼らの正面側に回り込んで顔を確認するわけにもいかない。橘川は一度大きく深呼吸をしてから二人の背後に忍び寄った。

「橘川さん。こつちです」

通路を隔てて反対側の客席から女性に名前を呼ばれる。橘川はピタッと動きを止め、後ろを振り返った。そこにこちらを見つめながらニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる大庭みなみと藤岡茂の姿があった。ハツと前に向き直る。橘川が声をかけようとした男女は顔を後ろに向け、怪訝そうに眉をひそめていた。もちろん、二人ともまったく知らない顔である。

「ど、どうも」

ハハと愛想を笑いをし、橘川は逃げるようにみなみたちの陣取るテーブルへ歩み寄った。

「橘川さん、完璧あつちに声かけようとしてましたね」

時折イヒヒという笑い声を混じらせながら藤岡が言った。夏前だというのにニット帽をかぶり、長袖のカラフルなトレーナーを着込んでいる。指先には短くなつた煙草をつまんでいる。「あいつらもあいつらですよ。向かい合って座れよって感じで」

「見てたんならさっさと声かけてくれよ」

溜息を吐きながら通路側の藤岡の隣の席に腰かける橘川。「後ろ

姿が二人にそっくりでさ。危うく赤っ恥をかいてしまうところだった」

「えー、橘川さん、そっち座っちゃうんですかー？」

奥の席に座るみなみが不満そうな顔で言った。緩いウェーブのかった茶髪の頭に花をかたどったブローチをつけ、ドレスのように派手な白いワンピースを着ている。胸もとは広く開いているが、小ぶりの乳房のせいか谷間らしきものは確認できない。「私という華を一人にして、男が並んで座っちゃうなんて信じられない」

「お前の近くにいると香水臭くてかなわねえんだよ」

煙草を灰皿にもみ消す藤岡。「ねえ、橘川さん。そう思いますよね」

「いや」

否定しようとするも、すでにこの距離でも香水の香りがプンプンと漂ってくる。「そ、そうかも……」

「ひーどーいー！」

足をバタバタさせるみなみ。「そんなだから、二人ともモテないんですよー！」

「橘川さん、彼女いるだろうがよ」

藤岡は、おそらく水であろう透明な液体の入ったグラスを口に付けた。

時刻は午後八時。秀英大学最寄りの駅からほど近い場所にある居酒屋『大迫』。橘川は藤岡に電話で誘われ、彼らの飲み会に途中参加したのであった。

「早苗先輩は来ないんですか？」

みなみが橘川に尋ねた。から揚げをもぐもぐと噛みしめながら頷く橘川。

「俺は休みだけど、早苗はバイトだしね。後で恨まれそうだから今日のことは内緒だよ」

「おー」

藤岡が感心したように目を丸めた。「いつの間にか早苗って呼び捨てするようになったちゃったんですね。なんか意外だな」

「別にいいじゃん」

橘川は思わず頬を赤らめた。「向こうから言い出したんだよ。」

早苗って呼び捨てにされたほうが嬉しい』って」

「え？　じゃあじゃあ」

好奇心いっぱい顔でみなみが上半身を乗り出した。「早苗先輩もひよつとして橘川さんのこと『夢多』って？」

「あ、いや……」

二人の視線から逃げるように橘川はうつむいた。そのまま「まあ」と二度ほど頷いてみせる。

「キヤー！」

なぜか拍手をするみなみ。「あんなに男っ気のなかった早苗先輩と、あんなに女っ気のなかった橘川さんが呼び捨てだなんて、キヤー！」

「橘川さん、こいつ絶対馬鹿にしていますよ」

藤岡がみなみを指差した。みなみは「違っし！」と唇を尖らせる。彼らのやり取りをはたで聞きながら、橘川は頭をフル回転させ新たな話題を模索していた。早苗とのことを冷やかされるのは未だに慣れていないのだ。

「ほ、他に誰か呼ばない？」

結局はそんなところに落ちつく。「皆岡くんとか貴美ちゃんとか、久しぶりに会いたいんだけど」

「いいですね！」

みなみがあっさりと話に乗る。「藤岡先輩、レッツテレフォン！　しかしながら、藤岡はテーブルの上の一点をぼつつと見つめ黙り込んだままである。橘川は不思議に思い「どうしたの？」と彼に尋ねた。

「貴美で思い出したんですけど……」

そう言ったところで藤岡は橘川に顔を向けた。「橘川さんって松尾和葉と知り合いなんですか？」

「え？」

途端に彼らのいるテーブル周りだけ、まるで時間が止まったようにシーンと静かになった。

「いや、ちょっと前、貴美にメールで聞かれましたけどね」

百円ライターで煙草に火をつける藤岡。「そのまんま『橘川さんって松尾和葉と知り合いなの？』って。俺は『知らねえよ』って答えてそれつきりなんですけど、なんとなく気にはなってたんですよ。どうなんですか？ やっぱ橘川さんって松尾和葉と知り合いなんですか？」

二人の注目をよそに、橘川は一人思考を巡らせていた。

たしかに、知り合いというほどではないかもしれないが、自分は松尾和葉と顔見知りだ。そのことを長岡貴美が知っているということとは、貴美も和葉と知り合いなのか、それともあの日駅構内のファーストフード店で和葉と一緒にいるところを目撃されたのか。まあ、どちらにしてもそこまでは十分に納得できる。ただ、一つだけ腑に落ちないことがある。

なぜ、早苗ではなく藤岡に確認しようとしたのか。

貴美は自分の連絡先を知らないの直接確認することはできないかもしれないが、それなら恋人である早苗に確認したほうがよりの確ではないのか。早苗からそんな話を聞いたことはない。

いや、と橘川は思い直す。

恋人であるからこそかもしれない。一応は女性関係の話なのだ。

貴美は、早苗、もしくは自分に気をつかってくれたんじゃないだろうか。

「橘川さんってば、どうなんですか？」

みなみの声で我に帰る橘川。みなみは真剣な眼差しで真っ直ぐに



橘川を見つめていた。

「ま、まあ」

別に隠すようなことじゃないよな、と橘川は自分に確認をした。

「知り合いつてほどじゃないけど、ちよっと話をする機会があつて

さ」

その瞬間、みなみと藤岡は同時に驚嘆の顔を見せた。

「マジっすか!」

「ウキヤー!」

新たな話のネタを得た彼らの瞳は、まるでダイヤモンドダストのように光り輝いていた。

### 33 眠らぬ夜

《和葉ちゃん？》

電話口から菊田つばきの声が聞こえる。《なにになに？ どうしたの？ こんな遅くに電話してくるなんて珍しいね》

時刻はもう午前一時を過ぎていた。しかし、迷惑がっているというよりも、どちらかという心配そうなたつばきの声のトーンである。「眠れなかつたんです」

羽山美穂は言った。ベッドに仰向けとなり胸までタオルケットをかぶっている。「確か今日はつばきさん、収録のある日だったなっと思ってたんで、つい電話しちゃいました」

《うん。今収録終わりでスタッフたちと飲みに来てるんだ。和葉ちゃんを知ってる人もいるけど、和葉ちゃんから電話だつて教える方向？》

「教えない方向で……」

美穂が申し訳なさそうにそう言うと、つばきは数秒の間を置き《分かった》と返事をした。やがて彼女が席を立つ雰囲気。バックグラウンドに薄らと聞こえていた喧騒がパツタリと止む。おそらくトイレにでも入つたのだらうと美穂は予想する。

《はい、どうぞ》

「すごく悩みました」

常夜灯の明かりをぼんやりと見つめながら美穂は口を開いた。「つばきさんにこんなことを相談していいのかって。なぜなら私はアイドルだし、つばきさんに対しても何度か私のポリシーをお話したことがあったからです。アイドルはあくまでファンの人たちあつてのもので、アイドルはファンの人たちのものじゃなきゃいけないって……」

《和葉ちゃんのそうゆうお堅いところも嫌いじゃないよ》

水の流れる音が聞こえる。やはり洗面所にいるらしい。《でも、

しかたないよね。和葉ちゃんにも忘れられない人がいるんでしょ？  
「はい」

美穂はキツパリと認めた。

《なるほど》

美穂の話聞き終えたつばきは独り言のようにそう呟いた。《秀英大学の学生で、名前は橘川夢多。本屋さんと和葉ちゃんが転びそうになったところを助けてもらい、そのお礼にとファーストフード店でデートをしてあげた。美穂ちゃんは彼に惹かれてしていると自覚していたにも関わらず、彼の連絡先その他を聞き忘れてしまった》

「なんか、すみません」

あの日の自分の不甲斐なさを思い出し、なぜか謝ってしまう美穂。《でも、ここまで分かってるなら簡単に見つかりそうだけどな。橘川さんは秀英大生で、美穂ちゃんが通う高校近くの駅前にいたわけでしょ？ 秀英大学ってそこから何駅ぐらい離れてるの？》

「えーっと……」

美穂は目を閉じて考えた。「一番近い路線で五、六駅ぐらいかな」  
《和葉ちゃんが橘川さんとはち合わせたのは学校終わりの夕方だよ。和葉ちゃんとファーストフード店で話をした後、橘川さんはバイトにでも行きそうな雰囲気だった？》

「あ……」

つばきの言わんとしていることが分かり、美穂は思わず上半身を起こした。「い、いえ……。見たい番組があるからって、家に帰ってたんだと思います」

《じゃあ、ほぼ決まりでしょ》

そこまで言って、もったいぶるようにつばきは黙り込んだ。美穂に考える時間を与えてくれているのかもしれない。もちろん、成績は中の下だが美穂は一応馬鹿ではない。そこから導き出せる答えを彼女も明確に頭の中に思い描いていた。《橘川さんの自宅は和葉ち

やんの通う高校の近所にある。そう考えるのが一番自然じゃない？  
「全然気づかなかった。凄いです、つばきさん」

立ち上がり、窓際に向かう美穂。《こう見えても教員免許とか持つてるんだからね》とつばき。美穂は「えー、すごい」と感嘆の声を上げながら、窓にかかるカーテンをそつと引いた。

橘川さん……。

マンションの五階から見下ろす東京都千代田区の夜景。さほど離れていない場所に美穂の通う高校も見える。

この街のどこかにあなたはいるの？

学校帰りに駅前へ足を運ぶことの多い美穂であるが、彼女は電車通学というわけではない。つまり、つばきの仮説が正しければ、橘川夢多は彼女の近所に住んでいるということになるのだ。

《でも、その人もけっこう失礼だよねえ》

若干つばきの声のトーンが変わる。美穂は「え？」と呟きながらカーテンを閉め、ベッドに戻った。《天下の松尾和葉ちゃんに誘われたつてのに、観たい番組があるから帰っちゃうなんて、なかなかできないよ》

「ああ」

くすつと美穂は笑った。「橘川さん、綾川チロリちゃんが本命なんです。で、彼女が出てる番組は絶対見逃せないんですつて」

《へー、そうなんだ。それにしてもねえ……》

そこでつばきの口が止まる。やや不自然に感じたため、美穂は怪訝に思った。《チロリちゃんか……》

「あつ」

美穂はハツと気がついた。「前にチロリちゃんの話になったことがありますね。あの時チロリちゃんに悪いイメージを抱いていたのは、実はそうゆう理由からなんです」

「でも、今はもう仲良しですよ」と付け加え、つばきの返答を待

つ。しかし、つばきが引つかかっていたのは別の事柄についてらしい。

《いやね、チロリちゃんに聞いてみたらいいんじゃないかって思ってた。彼女、去年秀英大学の学園祭に出演したでしょ?》

「そ、そういえばそうでしたね」

なるほどと美穂は納得した。「でも、だからってチロリちゃんが橘川さんを知ってる可能性は薄いんじゃない?」

《そりゃそうだけどね》

苦笑するつばき。《でも、一応聞いてみれば? 橘川さんはチロリちゃんの大ファンなんですよ? 和葉ちゃんとのデートを中断してまで出演番組を観に帰るほどの。だったら橘川さんのほうからチロリちゃんに近づいたって可能性もあるでしょ? ひよっとしたら橘川さんこそが文化祭の実行委員で、チロリちゃんをブッキングしたのも彼かもしれない》

「うーん」

橘川にそんな行動力があるようには見えなかったため、どうもつばきの意見に賛同しかねる美穂。「仲良し」とは言ったものの、綾川チロリとはまだ二度しか顔を合わせたことがない。できれば、彼女に恋愛の相談などを持ちかけたことはないのである。「まあ、機会があれば聞いてみます」

とりあえず無難な返事をする。つばきも《そう》と素っ気なく返し、それからやや声の調子を落として《和葉ちゃん》と呼びかけた。《私や和葉ちゃんなんかはアイドルとしての別の顔を持っていて、ファンの人たちはそんなアイドルとしての顔を見てファンになってくれる。でも、橘川さんの前ではプライベートの、素のままの和葉ちゃんदैいていいんだからね》

「はい」

今度ははつきりと返事をする美穂。「今日はありがとうございまして。つばきさんに相談して本当に良かったです」

《うん、また何かあったら電話しな》

午前二時前にようやくつばきとの通話を終える。一時間近くもつばきをトイレに拘束してしまったことに罪悪感を覚えながら、美穂は静かにまぶたを閉じた。気持ちが昂り、ますます眠れないだろうなと心の中で呟く。

ただ、別にかまわないと彼女は思った。今夜は夜通し橘川のことを考えていたい。

### 34 パフォドル

「こいつ、本当にひどいんだよ」

カジュアルなティーシャツとジーンズに身を包んだカビリオンズ野田誠がひな壇の端に座る池田綾香を指差した。「博多出身をアピールするために豚のぬいぐるみなんか着込んでさ、あの時すでにお前の偽られたアイドル人生はスタートしてたんだな」

綾川チロリデビューイベントの時の話である。

「違うもん！」

壇上の席から立ち上がる綾香。黒いワンピースの上から白いジャケットを重ね着しており、頭にはトレードマークのソフトハットをかぶっている。「私の中では九州全体のことを博多って呼ぶんかと思つとつたと！」

「そりゃ苦しい言い訳だな」

ビシツとスーツを着た大御所俳優、丸の内晋也のその発言でスタジオはどつと湧いた。「これからはフェイクアイドルとして売り込まなきゃな」

「フ、フェイクって、人聞きが悪すぎます」

斜め下に座る丸の内に抗議する綾香。「パフォーマンスです。パフォーマンス！」

「おお、それいいね。パフォーマンスアイドル」

また綾香を指差し、野田は言った。「それじゃカメラに向かって挨拶しろよ」

「パフォーマンスアイドルのチロリンをよろしくね」

野田に言われるがままそう挨拶をしながら、綾香はちゃっかりチロリンポーズを決めた。同時に現場は本日一番の盛り上がりを見せるのであった。

都内某所にある撮影スタジオにて、綾香はトークバラエティ番組『カビリオン・ザ・パーティ』の収録に臨んでいた。お笑い芸人、俳優、スポーツ選手など様々なジャンルから多数のゲストが迎えられており、本来なら埋もれてしまってもおかしくない彼女であったが、司会が事務所のかつての先輩カビリオンの二人だということもあり、それなりに話をふってもらえた。話題の中心はやはり先日の出身地詐称騒動であったが。

「はい、じゃあ次のお題は『私だけが知ってる芸能界の秘密』です」  
カビリオンス松岡キヤッツがカンペに従って番組を進行する。ブレイク前はパンククロツカーのような出で立ちが特徴的であったが、最近では常に七三分けと白のスーツという正反対のキャラクターになっている。

「はい」

綾香の三つほど隣の席に座る少女が拳手をした。ノースリーブの派手な柄のシャツを着ており、長めのタイトスカートを履いている。日に焼けた肌と、金に近い茶に染めたセミロングの髪を両端で結んだ髪型が特徴か。同じアイドル枠から参加している、グラビアアイドルの沢渡まどかである。綾香が上京する前から第一線で活躍していたが、昨年末に某歌手との熱愛が報道されて以来、やや人気は下り坂のようだ。

「はい、まどかちゃん」

野田がまどかを指す。この番組では常に誰かの拳手によってトークがスタートする。

「歌手のストレイ渚さんは、テレビではカッコつけてるけどエッチの時はDMらしいですよー」  
まどかの交際相手である。

「コラコラ！」

すかさず野田がツッコミを入れる。「本当にお前だけが知ってること発表してどうすんだよ」

先ほどの、綾香の挨拶の時以上に湧きかえるスタジオ。キャハハ



と無邪気に笑うまどかの顔をじつと盗み見ながら、綾香はチツと舌打ちをした。

さすがは経験豊富な沢渡まどかやね。このタイミングで私を上回る自虐ネタをぶつけてくるとは。

本日が初共演のまどかに対して、メラメラとライバル心を抱く彼女であった。

放送は一時間であるが、収録は倍の二時間に渡って行われる。前半の一時間を終えた後、現場は十五分の休憩時間となった。トイレや化粧直しなどで席を立つ者もいたが、大半は収録のまま自分の席に座り続けており、綾香もそのうちの一人であった。

まどかにはちよつと負けてるけど、これ以上しゃしゃり出ると怒られそうやけん、残りの一時間は静かにしとこうかな。

モニターを見てハットの位置を整えながらそんなことを考えていた時、不意に横から「チロリちゃん」と声をかけられた。「え？」と振り向く綾香。そこに可愛らしい八重歯を覗かせ、ニコニコと笑うまどかの姿があった。

「今日はやけに力入ってるみたいだね。後半も期待してるよ」

「あ、いえ」

綾香も愛想笑いを浮かべる。まどかとは本番前にも一言二言言葉を交わしていた。「今が一番大事な時期なんで、必死に目立とうとしてるだけです」

「チロリちゃんはもうバラドル一筋でやっていくの？」

若手俳優が席を立ち、空席となった綾香の隣に座るまどか。綾香は「え？」と目を丸めた。

「で、できれば歌手もやっていきたいんですけど……」

「そう」

まどかはあごを上げ、懐から出した目薬をくりくりとした左右の瞳に差した。パチパチと瞬きを繰り返した後、ハンカチで優しく目

もとを拭いた。「チロリちゃんの場合は歌手としてケチがついちや  
ったわけだし、マイナスのイメージがついたジャンルは捨てたほう  
がいいと思うけどな。先輩のアドバイス」

「なるほど……」

出身地詐称が取り沙汰された背景には『やっぱり博多が好きやけ  
ん』のヒットがある。確かに自分が何食わぬ顔で新曲を歌えば世間  
からのイメージが余計に悪くなってしまいう可能性もあるなと綾香は  
思った。が、しかし。「でも、やっぱり歌手は続けたいです。子供  
の頃から憧れの職業やったし、これ以上ヒット曲が出んかったら事  
務所にやめさせられるでしょうけど、せめて事務所が許してくれる  
うちは」

「やっぱり、そうだよな」

まどかは遠い目をした。「それじゃあ新曲にも期待してるよ。た  
だ、くれぐれもスキヤンダルには気をつけて。もし熱愛でもスクー  
プされたら、事務所側の態度がコロッと変わるよ」

経験者の重みのある言葉に、綾香はただ「はい」と頷くばかりで  
あった。

「最後のお題は『今年中に達成したい野望』です」

松岡がその台詞を言い終わるか終わらないかほどのタイミングで、  
綾香は「はい！」と威勢良く声を上げ、拳手をした。「ほい、チロ  
リ」

「はい」

綾香は立ち上がった。「今年中に達成したい野望、それはやっぱり、  
日本武道館でのコンサートです！」

その声の調子とは裏腹にシーンと静まり返るスタジオ。ところど  
ころから失笑が漏れている。

「お前、まだ懲りずに曲出すのか」

苦笑いを浮かべながら野田が言った。「SDPも勇気のある事務

所だな」

「出します!」

高らかに宣言する綾香。「ファンの皆が私の歌声を待ってるんよ」  
「誰も待ってねえよ!」

理不尽なツツコミを入れる野田。綾香は「待ってるもん」と野田にあっかんべーをし、前半と同じようにカメラに向かってチロリンポーズを作った。

「ファンの皆、新曲もよろしく頼むばい」

「出た。パフォーマンスアイドル。略してパフォドル」

観覧席から爆笑の声。野田のせいで、チロリンポーズはオチに変わってしまったのであった。

### 35 まったりぶるうす

ラーメン屋『ぶるうす』洗い場奥の勝手口の外は人通りの少ない裏路地となっている。客足がひと段落した時、従業員たちはよくここで煙草をふかしながら他愛のない話をするなどして小休憩をとっていた。

「お前、腕良くなったよな」

若頭こと萩原和人が言った。頭に巻いていたタオルを首にかけ、立派なりーゼントを風に揺らしている。指先にはたつた今火をつけたばかりの煙草をつまんでいた。

「そんな……」

ブロックに腰かける井本真一。彼もタオルを首にかけている。「もうちょいで一年経ちますから、そりゃ誰だつて上達するでしょ」

本日は小雨がぱらついている。二人は狭い軒下で器用に身を隠していた。

「まあ、そうだな」

そう言ってから萩原は煙草を吸い、ふうと紫煙を吐いた。「そろそろ秘伝のスー普の作り方も教えてやんなきゃな」

「ええ!？」

真一は目を見開き、萩原の顔を見た。「ひ、秘伝のスー普って……。あれは店長と若頭以外は手を出しちゃダメなんですよ？ 俺みたいなのが扱ったらまずいんじゃない……」

「別にかまわねえよ」

素っ気なく答える萩原。「あと何年かすれば店長は店を俺に託そうって考えているそうだ。その時に新しく『若頭』を選ぶとしたら今のところお前以外には考えられねえからな。それとも、お前の中でいつかこの店を辞めちまおうっていう考えでもあるのか？」

「と、とんでもないです!」

真一は立ち上がり、ピシッと姿勢を正した。「この店に入ってか

ら俺の天職はラーメン屋だって気づかされたぐらいです。これからもとことん修行させてください」

「店長も喜ぶぜ」

八八と笑い、萩原はまた煙草をくわえた。

六月の下旬。時刻は午後四時。一日の業務の中でも特に客足が鈍る時間帯であった。

勝手口のドアがそつと開く。外開きのドアの前にたたずんでいた

萩原は「おつと」と一歩足を進ませた。

「井本くん」

ドアの向こうから顔を覗かせたのは、眼鏡をかけた初老の男性。

『ぶるうす』の店長である。「友達が来たぞ。ほら、よく来るアベツクの二人だ」

「ああ」

アベツクという言葉に苦笑するより先に、真一はうんざりとした気分になる。「分かりました。すぐに行きます」

二本目の煙草に火をつけた萩原と店長を残し、真一は店内へ戻った。ブルースの濃厚な音色を聞きながら洗い場からカウンター内へと出る道すがら、首にかけていたタオルを頭に巻き直す。そして、いつもの端の席に座る矢上詩織と田之上裕作の姿を確認し、「よう」と声をかけた。彼ら以外に客の姿はない。

「お疲れさまでーす」

紫色のポロシャツを着た詩織がニコリと笑みを浮かべながら言った。「また真一さんのラーメン食べにやってまいりました」

「そりゃ別にかまわねえけどよ」

手を腰にあて、チツと舌打ちをする真一。「たまには自腹で食えや。俺だってそんなに懐が潤ってるってわけじゃねえんだ」

彼らが店に来るたび真一は彼らのラーメン代をおごらされているのだ。

「説得力ありませんよ」

今度は田之上が言う。白い टीーシャツの上から茶色のベストを羽織っている。「綾香ちゃん、あんだだけテレビに出てるんですからガツポガツポでしょ」

右手でマネーサインを作る。真一は「バカヤロウ」と田之上に向かって吐き捨てた。

「綾香の儲けには頼らねえよ。ヒモみたいなマネできるかってんだ」  
一年ほど前の自分を棚に上げるのであった。

二人分のラーメンを作り終え、順番にカウンターへと置いていく。誰もおごるとは言っていないにも関わらず、ラーメンを受け取る時、二人はそれぞれ「ごちそうさまです」と会釈をした。

「あ、そういえば」

箸立てから箸を抜き取りながら、不意に詩織が言った。「ん？」と彼女に顔を向ける真一。「綾香。こないだのスクヤンダル大変でしたね。『実は佐世保出身だった』ってヤツ」

「ああ」

真一は壁に寄りかかり腕を組んだ。「博多出身にするってのは事務側のアイデアらしくてよ。綾香は『私のせいじゃないもん』の一点張りなんだ。ま、バラエティ番組なんかでいじってもらえるから良かったんじゃないかな」

「確かに」

そう言っただけで田之上が頷いた。「こないだの『岩田幸三の嘘っぱちドキュメント』なんかじゃ、綾香ちゃん自分からガンガンネタにしてみましたよ。あれ、すっげえ面白かったな」

土曜昼間の生放送番組である。

「たいしたスクヤンダルじゃなかったってことね」  
詩織はそう呟き、ラーメンをずるずると啜った。

「でも、お前と同棲してるってことがバレたら本当にヤバイだろう」

な

突然背後から声がし、真一は振り向いた。萩原がいつの間にか休憩から戻ってきていたのだ。頭にはもちろんタオルが巻かれている。気がつくのと、店長も客席に座ってスポーツ新聞を読んでいる。「どこで芸能記者が目をつけてるか分からねえぜ」

へへつと意地悪そうに笑う萩原。

「記者もそうですけど、事務所の人間にも気をつけなさいと」

真一も苦笑して見せた。「出身地のことがスクープされて以来、事務所もちよつとナーバスになってるそうで、綾香が言うには俺と同棲してるってことがバレたら強制的に別れさせられるって……」

「ひどい！」

眉をひそめる詩織。「もしそうになったら綾香を説得してアイドルをやめさせます！」

もしそうなら……。

真一は思う。もしそうなら自分は、いや自分たちはどちらの選択肢を選べばいいのだろう。綾香と別れるか、それとも綾香がアイドルから足を洗うか。

店内に新たに三人客が入り、調理は萩原が担当することとなった。

「綾香ちゃん、今日も仕事なんですか？」

詩織よりもひと足先にラーメンを食べ終えた田之上が、スープを飲み、ふうと息をついた後で何気なくそう言った。真一はクククと思出し笑いをした。

「本当は休みだったらいいんだが、何やらプロデューサーとのスケジュールが今日しか合わないらしくて、夕方から急に新曲の打ち合わせが入っちまったんだと。あの野郎、朝っぱらからブーブー文句ばかり言ってたわ」

「知ってる」

まだ少しラーメンを残している様子の詩織が話に割って入る。「

トーマス岸辺さんですよ。『やっぱり博多が好きやけん』で注目を浴びて以来大忙しみたいです。超人気ダンスグループのオズマンの新曲や、今度デビューする期待のR&B歌手のプロデュースも担当するらしいですよ」

「らしいな」

クククと相変わらず真一は気持ちの悪い笑い声を発している。「綾香は『トーマスは私が育てた』とか豪語してるけどよ。向こうはもう綾香のことなんかこれっぽっちも気にかけてねえんじやねえか？ まったく笑える話だぜ」



青山の表参道沿いにある落ち着いた雰囲気の喫茶店。その窓際の四人がけテーブルを陣取るのは黒い野球帽をかぶりサングラスをかけた池田綾香である。白いティーシャツとグレイのハーフパンツという、非常にラフな出で立ちをしている。

遅い。遅すぎる。自分から呼び出したくせに。

綾香はテーブルに置かれたコーヒーに手を伸ばした。時刻は午後五時半。もう三十分以上もある人物を待ち続けており、コーヒーを三杯もおかわりしてしまった。ヤケになったように三杯目のコーヒーを一気飲みする綾香。プハアと息を吐き、また窓の外に目を向ける。やや渋滞気味の道路、若者を中心に人が流れていく歩道。それらをぼうつと眺めつつ、更に五分ほど経過した時、ようやく彼女のそばへと歩み寄る人影が。

「待たせたね」

そう言いながら綾香の向かい側に座る男を訝しげに見つめる綾香。

「あ、あの」

眉間にしわを寄せ、気になっていたことを尋ねる。「トーマスさ

ん……？」

「そうだよ」

トーマス岸边はにんまりと笑顔を見せた。綾香が戸惑うのも無理はない。寂しい頭を覆い隠した黒いソフトハットに、淡いブルーのサングラス。派手なピンク色のスーツにネクタイと、身体中のいたるところに光り輝くアクセサリー。トーマスは前に会った時とは別人のような姿に変わっていたのだ。

「レコーディングが長びいちゃってね」

指先であごヒゲを撫でながら、トーマスは言った。口調までもが別人である。「まあ、チロリちゃん、今日は休みだって言ってたし、ちよつとぐらい遅れても大丈夫かなと」

「よくないよ」

ブスツとした表情になる綾香。「休みを返上してわざわざ青山まで来てやったつちゃけんね。呼び出したほうが遅れるなんて非常識やろうもん」

待ち合わせが青山なのは、近所のスタジオでレコーディング中のトーマスの都合である。

「そう?」

シュボつとジツポライターで煙草に火をつけるトーマス。「休みを返上したようには見えないけどね」

綾香の足元を見つめる。「うつ」と言葉を見失くしてしまう綾香。そこに様々な店のロゴの入った大量の紙袋が置かれていた。ここに来るまで綾香は青山でショッピングを楽しんでいたのである。

「もう分かったけん」

パイと顔を背け、綾香は頬づえをついた。「さっさと新曲聞かせてよ」

「オーケー」

トーマスは気取ったふうにそう答えると、懐から一枚のMDを取り出しテーブルの上に置いた。綾香はそのMDをしばらく見つめた後、視線をトーマスに移した。

「今すぐ聞きたいっっちゃけど、MDプレイヤーない?」

「おやおや」

頭痛をもよおしたように額を押さえ、首を振るトーマス。「君がMDに吹き込んでくれて言ったんじゃないか。今日ここで打ち合わせしようっていうのになんでプレイヤーを持ってこないんだ?」

「わ、忘れたと!」

少し赤くなる綾香。

「しかたがない」

今度は隣に置いたビジネスバッグよりポータブルデジタルオーデ

イオプレイヤーを取り出すトーマス。本体にイヤホンを取り付け、イヤホンのスピーカー側を綾香に手渡す。

「ちゃんと用意しようやん」

憎まれ口を叩きながら、綾香はスピーカーを両耳に差し込んだ。

こ、これは……。

綾香は瞳を輝かせた。ピアノによる繊細かつ情熱的なフレーズ。三拍子のゆったりとしたリズムを奏でるドラム。ウッドベースによる激しくも心地よいベースライン。それらの三つの楽器のみで構成されたイントロを聞く限り、この曲はまさにジャズ。ジャズそのものではないか。

トーマスさん。

トーマスに目配せをする綾香。口の端を曲げ、頷くトーマス。

今回の曲ではジャズに挑戦しろというのか。当然ながら前作のようなパワーポップと同じニュアンスで歌えば、曲はたちまち安っぽくなってしまっただろう。場数を踏んだ一流のシンガーでも敬遠してしまいがちなジャズ。それを自分のようなアイドル歌手が歌いこなせるものであるうか。

ふん、面白いやん。

綾香は心の中で呟いた。つまり、トーマスはそれだけ自分の歌唱力を評価しているということだ。ならば歌ってみせよう。歌いきってみせよう。ジャズという新たなジャンルに立ち向かってみせよう。やがてイントロが終わり、女性によるハスキーなボーカルが聞こえ始める。なんと味わい深い歌声で、綾香は思わず目を閉じて聴き入ってしまった。が、しかし……。

ん？ ボーカル？

「ああ、ごめん」

プレイヤーを操作し、演奏を停止させると同時にトーマスが言った。「間違っ、ジャズシンガー、フローレンス真琴の曲をかけち

やった。最近気に入っててよく聴いてるんだ」

「ガオー！」

イヤホンを外し、トーマスに飛びかかろうとする綾香の顔をトーマスが手で押さえつけた。「ふが」

「落ち着いて落ち着いて」

苦笑するトーマス。「今度こそ間違いないから早くイヤホンつけなよ」

綾香はふて腐れながらも、言われたとおり再度イヤホンを耳につけた。

イヤホンから流れてきたのはやはりノリの良いポップス調の楽曲で、綾香は落胆しガツクリとうな垂れてしまった。それでも、おとなしく楽曲に意識を傾ける。

『やつぱり博多が好きやけん』に比べるとややテンポが遅いか。それにデジタル音よりも生の楽器にこだわったようなアレンジである。ただ、派手なプラスサウンドは今作でも健在だ。

歌メロが始まる。今回はトーマスのボーカルではなく、キーボードか何かの楽器で歌のパートを追っている。

おっ？

綾香の目の色が変わった。前作は最初から最後までひたすらに明るいメロディであったが、今作ではとどころにしんみりとしたフレーズが紛れ込んでいる。それらが曲に上手くメリハリをつけている。

曲がサビに変わる。その頃には綾香も無意識のうちに肩でリズムを刻み始めていた。サビではまた雰囲気が一変する。ダウンビートの激しいドラミングに牽引される管楽器や弦楽器たちのフレーズを良く言うなら壮大とでも表現するか。それらから堂々と主役を奪い去ったボーカルのメロディラインはトーマス特有の非常に耳に残るものであった。

「ん？」と綾香は眉をひそめた。サビの後に何拍子か不自然な空白があるのだ。これはなんだろうと疑問に思いつつも、試聴を続ける。

「最後の間奏からサビに行くところ、ちょっと合わせるの難しそうやね」

独り言のように綾香は呟く。トーマスが何か返したようだが、彼の声は聞こえない。

「なるほど」

曲が終わり、綾香はイヤホンを外し、ふうつと大きく息を吐いた。「この空白の部分って、ここにチロリンポーズを入れるってこと？」

「そのとおり」

トーマスが頷く。「チロリちゃんのためにこの曲を作ったっていう証明でもあるよね。ところで、曲の感想は？」

しばらく黙り込む綾香。数秒後、彼女はようやく口を開いた。

「き、聴きやすい曲やね」

前回とほぼ同じ綾香の感想を聞き、トーマスは満足そうな笑みを見せた。

### 37 意外な電話

太陽が西の空へ沈みかけた午後七時。吉祥寺駅を降りてから綾香は真っ直ぐ自宅には帰らず、自宅近所の小さな公園のブランコに腰かけ、一人ぶつぶつと呟いていた。

「ラブ、恋の魔法唱えまーしょう、ふふふーふーんふふーん」

公園には綾香以外に人影はない。先ほどまで降っていた雨のせいで、ところどころに水溜りが発生している。「違うなー。さあ、恋の魔法唱えまーしょうのほうがいいかな」

彼女が何をしているかというのと、実は生まれて初めての作詞に挑戦しているところである。先ほどトーマス岸辺に聞かされた新曲は、トーマスによる『佐世保マイラブ』というタイトルと、真の故郷佐世保に対する愛が綴られた歌詞が存在したのだが、もちろん綾香の『待った』が入り、それならばとトーマスの提案で、今作は綾香が作詞を担当してみてもどうかという話になった。歌詞カードの作詞という欄に自分の名前が表示されるのも悪くはないと考えた綾香は、迷うことなくその案を受け入れたのだった。

「さあ、恋の魔法唱えまーしょう。タララーラパー……」

とりあえずは耳に残っているサビのフレーズだけでも今日中に詞をつけてしまおうという魂胆だが、どうも上手くはいかない。家に帰らず、こんな場所で思考を巡らせているのも、外の風景に何か作詞のヒントとなるものはないかという考えからである。今のところ風景は綾香に何一つ与えてはくれていない。

「さあ、夏のトーびら、開きまーしょう。オープンザサマードアー」  
違う違う、と綾香は首を振った。理想はキュートでピュアなラブソングなのである。

綾香は立ち上がった。公園の中心にある滑り台まで歩き、砂場に面した滑る側から頂上へと登る。帽子を脱ぎ額の汗を拭ってから、赤と青、そしてその中間の紫が織り成す神秘的な空を眺め、深呼吸

をする。しばらくぼつと上空を見つめてみる。

「さあ、西のそーらにマイラブザフォーエバー……」

また首を振る綾香。横文字はよしておこうと今更ながら思った。

ここにいっても埒があかないと判断し、ブランコのそばに置いた荷物を取りに行く。家に帰ってからもう一度曲を聴き、今度はメロから考えてみよう。

両手に大量の紙袋を提げ、いざ歩き出そうとした時、ハンドバッグの中にある携帯が突然着うたを奏で始めた。チツと舌打ちし、ドスンと荷物を下ろす。肩にかけたハンドバッグから携帯を取り出して、モニターに表示された名前を確認しようとするが。

あれ？

七時といえば恋人である井本真一のバイトが明ける時間。どうせ彼からであろうと高をくくっていたのだが、そこには見知らぬ番号のみが表示されている。綾香は怪訝に思いつつも、ピツと通話ボタンを押し、自らが歌う『やっぱり博多が好きやけん』の演奏を止めた。

「はい？」

《あ、もしもし、チロリさんですか？》

女性の声だ。この声は誰だったかと綾香が思い悩むまでもなく、電話の相手は自らの名を告げた。《私、和葉です。松尾和葉。チロリさん、今大丈夫ですか？》

「か、和葉ちゃん!？」

あまりに意外だったため、綾香は思わず声を上げてしまった。そういうえば、松尾和葉とは昨年エックステレビにて彼女のビジネス用の携帯と番号を交換していた。「だ、大丈夫ですけど、突然どうしたんですか？ 写真のこと、彼以外誰にも言っけませんよ」

途端に緊張する綾香。先日真一のために和葉の裸エプロン写真を入手するのと引き換えに、和葉に自身が真一とキスをしているスキ

ヤンダル画像を受け取らせている。これは綾香が裸エプロン写真を他に漏らさないということに対しての誓いという意味合いであったが、今でははつきり言って後悔していた。裸エプロン写真とキス写真ではどう考えても釣り合わないではないか。落ち着いて考えてみれば、明らかに自分のほうがリスクが大きいということが分かる。ま、まさか、何かの間違いであのキス写真を流出させてしまったとかやなかるうね。

綾香はそう不安視していた。しかし。

《ええ、私のほうも大丈夫です。誰にも言ってません》

すぐさま和葉に否定され、ポカンとした表情になる綾香。《今日お電話したのは……、まあ、くだらないことなんですけど、ちよつとチロリさんに聞いてみたいことがあったからです》

「はあ」

綾香はようやく胸を撫で下ろすことができ、ゆっくりとした動作でブランコに腰を下ろした。「なんででしょう」

《チロリさん、去年秀英大学の学園祭にゲスト出演したんですよ》

「あー、はい」

眉をひそめる綾香。和葉がどんな話をしようとしているのか、まったく見等がつかない。

《えーっと、その……》

急に口ごもる和葉。《じ、実は、昔お世話になった家庭教師の先生が秀英大学に通ってまして、その人のことをチロリさんがご存知じゃないかなあって思って》

「なるほど」

そうゆうことかと綾香は納得した。「人探しだったんですね。でも、秀大生で知り合いになったのって実行委員を中心にほんの二、三人ぐらいなんで、お役に立てるかどうか分かりませんが……」

《そ、そうですよね》



やや声を沈ませる和葉。

「ま、まあ、ひょっとしたらってこともあるし」

綾香は彼女のことを不憫に思い、できるだけ明るい調子で言った。  
「一応、名前だけでも教えてください」

《えーっと……》

一、二秒ためらったかのように間を空ける。《橘川さん。橘川夢多さんです》

「きっかわ……」

その名前が綾香の頭の隅にカチツと引つかかった。間違いないどころかで聞いた名前だと思った。秀英祭であつただろうか。そう、確かに秀英祭だ。「ち、ちよっと待ってくださいね」

懸命に記憶を呼び起こそうとする。やがて聞こえてきたのは『橘川さん』という誰かの声。誰の声だろう。そうだ。これは内藤ちえ美の声だ。

《やっぱり知りませんよね》

和葉のその言葉を「いえ」と否定する綾香。

「多分、サバイバルゲームの時にちえ美ちゃんとパートナーになった人が橘川って名前だったと思うんですけど……」

《え！？》

自分から尋ねてきたくせに、かなり驚いた様子の和葉。《内藤ちえ美ちゃんのパートナー？　そ、その話詳しく聞かせてくれませんか？》

「百パーセント確定ってわけじゃないんですけど……」

そこで綾香の脳裏に一つのアイデアが思い浮かぶ。「そうだ。私のパートナーだった藤岡ってヤツのアドレス知ってるんで、そいつ伝いで橘川さんに和葉ちゃんの番号を教えるってのはどうでしょう」  
《え、ええ！？》

電話の向こうで、和葉が大きな声を上げる。《い、いや、それは……、心の準備ができてないっていうか……。いや、あの、ほら！　そのチロリさんのパートナーだったって人に番号を知られるのは

ちよつとアレなんで》

確かに藤岡に番号を知られるのはまずいだろつし、ちえ美のパートナーだった橘川が和葉の言う橘川と同一人物だとは限らない。和葉が難色を示すのも理解できる。ただ、彼女のうるたえかたが半端ないので、綾香は不思議に思っていた。

やがて、ははーんと目を細める。口もとをにやつかせながら綾香は思った。

いやー、恋する乙女は可愛いねえ。

### 38 モデル使用料

タンクトップのシャツとパンティという格好で綾香が浴室からリビングへと出た時、いつの間にか真一が帰宅してきており、ソファに寝そべってくつろいでいた。まもなく午後八時といった時間帯である。

「暑いねー」

テーブルの上に置いた愛用の団扇を手取る綾香。「今年こそはクーラー買っばい」

「そうだな」

リモコンを使い、テレビのチャンネルを次々と切り替えていく真一。「さっき帰ってきた時、お前の汗の臭いがムーッと部屋中に漂ってるから、『綾香、もう帰ってるんだ』ってすぐに分かったぜ」

綾香は団扇の端で真一の顔を殴った。「ぐは！」と手で顔を押しさえ込む真一。

「ご飯食べてきたと？」

真一の身体を無理やり起こし、綾香もソファに座る。それからパタパタと、まだ乾ききっていない髪の毛を中心に団扇で自らを扇いだ。「いや」と答える真一。「それなら、久しぶりに二人で外食しようよー」

「もう外なんか出たくねえよ」

真一は立ち上がり、キッチンへと向かった。食品棚の一番上の引き出しを開ける。「こないだの長浜ラーメンが大量に残ってんじやねえか。これで充分だろ」

「えー」

つまらなそうに唇を尖らせる綾香。「私、朝も昼も長浜ラーメンやったとばい。なんでトップアイドルが三食ラーメンに甘んじないかんとよ」

「じゃあ出前だ出前」

今度は二番目の引き出しを開ける真一。「ピザと寿司どっちがいい？」

「ピザ！」

即答する綾香。真一は引き出しから、近所の宅配ピザ屋のカタログを取り出した。

「作詞？」

三十分後。たった今配達されてきたばかりのピザ一切れを片手に、真一が眉をひそめた。彼も入浴を済ませ、インナーシャツとグレイのスウェットという姿に変わっている。「お前作詞なんかできるか？」

綾香の新曲の話題である。今作では綾香が作詞を担当するということを真一に告げてみたところだ。

「うーん」

ピザの置かれたテーブルを挟み、真一と向かい合う綾香が首をひねった。彼女はずっとシャツとパンティというはしたない姿でいるらしい。「始めはわりと樂觀視しとったっちゃけどね。いざやってみるとこれがけっこう難しいんよ」

「ふーん」

むしゃむしゃとあつという間にピザ一切れを食べ終え、さっそく次のピースに手を伸ばす真一。「作詞なんて簡単そうに見えるけどな。まあ、お前みたいな知性のカケラもない女がやるとなると話は別かもしれないな」

「さあ、恋のまーほう唱えまーしょう、ヒュルリールリラー」

突然歌い出す綾香。真一はポカンとした顔でパチパチと二度まばたきをした。

「どうした？」

心配そうに綾香の顔を覗き込む。「あまりの暑さに頭やられちまったか」

「だから、今のが新曲」

綾香は思わず頬を赤らめた。「ピュアなラブソングを目指しとるけんさ。『恋の魔法』っていうフレーズを入れようと思ったと」  
「ハハ」

真一は鼻で笑った。もう三切れ目のピザを手にしている。「最後の『風の又三郎』（『北風小僧の寒太郎』と言いたいらしい）みたいなヤツは恋の呪文ってわけか」

「だって、そのフレーズが思いつかんっちゃもん」

はむっとピザを口にする綾香。「なんか良いフレーズあったら採用しちゃうばい」

「ピュアなラブソングねー」

四切れ目のピザをくわえながら真一は眉間にしわを寄せた。「出身地詐称してたようなアイドルにピュアなラブソング歌われても説得力ねえよな。なんなら偽りのラブソングなんてどうだ？ これならお前にピッタリじゃねえか。『イミテーションラブ』なんつって」  
「ふん」

ムツとする綾香。やはり真一に聞くのは間違いだっただかと呆れかけた次の瞬間だ。「……イミテーションラブ……」

ピタリと動きを止める。そして今度は彼女が眉をひそめた。

偽りの愛か。いや、私の場合は博多出身のアイドルって顔が偽りだったわけで。いや、偽りって言葉は人聞きが悪すぎるから……。

「パフォーマンス……」

そう呟きながら綾香は無意識のうちに立ち上がった。

「な、なんだ？」

突然の綾香の行動にビクツと身を震わせる真一。残り二切れになったテーブル上のピザを指差す。「ほら、ちゃんとお前の分も残してるって」

「いけるかしんない」

綾香は言った。「パフォーマンスに決めた！」

残ったピザも真一に譲り、綾香はパソコンに向かってキーボードをカタカタと鳴らしていた。ポータブルMDプレイヤーにイヤホンを取り付け、スピーカーを耳に差し込んでいる。スピーカーが奏するのは、もちろん先ほどトーマス岸边にもらった新曲のデモである。詞の根底に居つくテーマは、やはりピュアなラブソングである。

出身地を詐称したり年齢を詐称したりキャラクターを作り上げたりと、綾香曰く『パフォーマンズ』を連発するアイドルが、好きな相手の前ではつい素の自分に戻ってしまう。そんなラブソングにしてみてもどうかと綾香は考えた。

「パフォーマンズ、パフォーマンスイーイ……。なんか合ってないな。イツツパフォーマンズ、イツツパフォーマンズ、これだ！」作詞は驚くほど順調に進んだ。歌われるアイドルのモデルを、自分ではなく松尾和葉に設定したのがその一因となっているのかもしれない。和葉もかなりパフォーマンズを行っているような気がするし、何よりピュアなラブソングの主人公は自分よりも彼女のほうが適任だと判断したためだ。

そうだ。

ふと思い出し、綾香はキョロキョロと辺りを見回して携帯を探した。すぐに、まだハンドバッグの中だということに気がつく。耳からイヤホンを抜き、彼女は立ち上がった。食事を済ませ、ソファで眠りこける真一を横目に、そばに転がったハンドバッグの中から携帯を取り出した。

あ、届いとる。

メールを一件受信しており、その送り主は予想どおり藤岡茂であった。綾香が事前に送ったメールに対してのレスポンスである。綾香はメールを開いた。

『別にいいけどよ、お前もちゃんと俺にお礼しろよな』という文章の後に橘川夢多という名前と彼の電話番号と思われる数字の羅列が表記されていた。

和葉ちゃん、たしか夢多って言っとったよね。じゃあ、やっぱりこの人で決まりやん。

実は公園での和葉との通話の後、藤岡に次のようなメールを送ったのであった。『ちえ美ちゃんがパートナーの人にちゃんとお礼を言っただけじゃなかったら、もし知っただらあの人の電話番号私に教えとってよ』。もちろん、今回の件について内藤ちえ美は一切関知していないが、彼女の名前を出すのが最も自然だと綾香は思った。

私も本当にお人好しやね。まあ、歌詞のモデルに和葉ちゃんを使わせてもらっただけやけん、これでおあいこってことにするか。

そう、全ては和葉のために橘川夢多の電話番号を聞き出すためのパフォーマンスであった。

駅から少し歩いた場所に小さなアイスクリーム店がある。若者に人気の店で、日中は常に行列を作っているが、夜もすつかりと更けてしまった現在では比較的すんなりと二人分のソフトクリームを購入することができる。

両手に一つずつソフトクリームを持つ橘川夢多。黒のティーンシャツにカーキ色のチノパンツを着用している。頭にはグリーンの野球帽をかぶり、肩からはシヨルダーバッグを提げている。

店の目の前にある赤信号につかまり、橘川は数人の通行人と共に横断歩道の前で立ち止まった。昼間雨が降ったせいでいつも以上に空気がじめじめとおり、それに伴って身体中をやたらと汗が伝うため、早くもソフトクリームが溶けてしまわないか心配になるが、今のところはまだ原型を留めてくれている。

信号が青に変わり、横断歩道を渡る橘川。すぐに建物の壁に寄りかかり携帯の画面を見つめる大田早苗の姿を発見し、彼女のもとへと近づいた。「はい」と橘川が片方のソフトクリームを差し出す。早苗は橘川の顔を確認すると、携帯を閉じ「ありがとう」と微笑みながらソフトクリームを受け取った。白いワンピースの上から黒のジャケットを重ね着し、彼女はハンドバッグを肩に提げていた。

「早苗の言ったとおりだった」  
そう言いながら橘川は腕時計を見た。「あの店、十一時に閉店なんだって。ギリギリセーフだったね」

時刻は午後十一時。本日は二人の仲を知るオーナーの厚意もあり、珍しく二人とも夜勤のバイトを休ませてもらった。その休みを利用して、二人で新宿区内のホールへ早苗の好きなロックバンドのコンサートを観に行った帰りである。これから秀英大学の近所にある早苗の自宅まで橘川が彼女を送り、その後橘川一人でまた電車に乗り帰宅する予定である。



「それじゃ、食べながらでもいいから歩こうか」

秀英大学の方向へやや慌てた様子で歩き始める橘川。ここから早苗の家までは歩いて二十分ほどかかる。もたもたしていると終電を逃してしまふ可能性だってあるのだ。タクシーで帰ってもいいが、もちろん余計な出費はできるだけ控えたい。

「うん」

そう頷きながら早苗も橘川に続く。しかし、橘川の焦りとは裏腹にかなりゆったりとしたペースである。

「早苗ちゃん？」

ソフトクリームにかぶりつきながら、橘川は立ち止まった。

「大好きな『ライドオン』歌ってくれなくて残念だったなー」

橘川に追いついたところで、早苗が出し抜けに言った。本日のコンサートの話であろう。「年内にもう一回ぐらい二人で観に行こうね」

ペロリとソフトクリームを舐める。

「ま、まあ、休みが取れればね……」

橘川はやや首を傾げながらも、しかたなく早苗のペースに合わせて再び歩き出した。「でも、すごい迫力だったね。コンサートって初めてだから、ちよつと圧されちゃったよ」

「圧されちゃった？ だらしないな、アハハ」

屈託のない笑顔でコロコロと笑う早苗。そんな彼女を横目で見ながら橘川は思った。

ま、いいか。早苗との時間に代えれば、タクシー代なんて安いもんだ。

秀英大学正門前の道路沿いに設置されたゴミ箱の中に、二人はそれぞれ食べ終わったソフトクリームのコーンの包み紙を捨てた。時刻はすでに十一時半を回っている。

「チロリちゃんのコンサートにも二人で行きたいよねー」

早苗が右手をチヨキにして額に当て、チロリンポーズを真似ながら言った。今度は橘川の好きな綾川チロリの話題である。先日、橘川はついに自分は綾川チロリのファンだということを早苗に告白したのだった。もともとバレ始めてはいたが。

「コンサートねえ」

苦笑する橘川。「チロリちゃんの持ち歌自体、カップリング合わせて二、三曲でしょ。まだまだ大規模なコンサートはできないだろうな」

「そういえば新曲とかがつて出すのかな」

早苗がそう尋ねたところで、大通りから小道へと折れる二人。そちらに早苗の住むアパートがあるのだ。宵闇の深さが増し、心なしか二人の距離が縮まる。「今度は『やっぱり佐世保が好きやけん』とかだつたりして」

「チロリちゃんなら有り得るかも」

橘川はうんうんと頷いた。「ファンサイトで夏中に一曲リリースされるって噂になってるけど、どうだろうね」

そんな話をしているうちに早苗のアパートに到着する。洋風の洒落た造りで、カードキーを採用するなど近代的な面も併せ持っている。

「今日は本当に楽しかったね」

並んでエントランスホールに入ってすぐに橘川は言った。今までも彼は何度か早苗をここまで送り届けているが、エントランスホールより先へ進んだことは一度もない。「うん」と頷く早苗。「明日は二人ともバイトだったっけ？　じゃあ、また明日か」

「うん……」

早苗は寂しそうにまた頷いた。そして橘川が軽く手を振りながら彼女に背を向けようとした瞬間、彼女が「夢多」と彼を呼び止めた。

「え？」

橘川は振り向いた。まだ『夢多』と名前を呼び捨てにされるのを慣れていないため、少しだけ呼吸を乱している。「どうしたの？」

「終電には間に合いそう？」

早苗は上目づかいで言った。その言葉を橘川は意外に感じる。彼女も一応終電の存在には気づいていたのか。

「ぼちぼち四十五分か」

腕時計で時刻を確かめる橘川。彼は「ハハ」と乾いた笑い声を発した。「随分とのんびり歩いてきちゃったな。まあ、走ればなんとか間に合うと思うけど」

「まだ帰らないでって言ったら怒る？」

早苗のその言葉に橘川は「へ？」と目を丸め、パチパチとまばたきを繰り返した。数秒後、コホンと咳払いをし、それから横に幾度か首を振った。「大丈夫だよ。なんだったらタクシーで帰ってもいいわけだし。実は俺も、もう少し早苗と話をしたいって思ってたんだ」

「タクシーじゃなくて、明日電車で帰ってもいいと思うけど」

「明日？」

そう返事をして再び目を丸める橘川であったが、やがて早苗の言葉の真意を理解し、ハツと固まってしまう。

エントランスホールを流れる生暖かい空気が一瞬だけ凍結した。

「夢多……」

橘川を真つ直ぐに見つめたまま、一歩ずつ彼のそばへと近寄る早苗。「好きだよ。大好き」

「さ、早苗、ちょっと……」

あっという間の出来ごとであった。早苗はそのまま橘川の肩に両手を回すと、たじろぐ橘川の唇に自らの唇をそつと重ねた。成す術もなく、早苗に唇を委ねる橘川。しかし、次第に彼の中でも早苗への愛情が膨らんでいく。彼も早苗の背中に手を回す。

二人はキスを解き、見つめ合った。

「私たちは深夜勤務なんだから」

エへへと早苗は笑った。「二人とも休みをもらったのに、離れ離れで夜を過ごすなんて変でしょ？」

「うん」

橘川は深く頷いた。そして今度は彼のほうから早苗にキスをするのであった。

## 40 恋する乙女

手帳に松尾和葉のサインを書き、「はい」と女子生徒に手渡す羽山美穂。女子生徒は「ありがとうございます」と美穂に頭を下げ、昇降口に向かって走っていった。

放課後の校門前。河内那美と待ち合わせをしている途中、下級生にサインをねだられてしまったのだ。皆遠慮しているのか、こういっただことは日頃滅多にないが、一度火がつくと次々と他の生徒にまで飛び火してしまうということを、今までの経験から美穂は知っていた。

まだかな……。

門柱の陰からこっそりと昇降口を覗き込む美穂。そんな彼女の横顔にまた別の女性生徒が「すみませーん」ともじもじした様子で話しかけてきた。美穂と同じく眼鏡をかけ、松尾和葉と同じくポニーテールの髪型だ。彼女の持つ手帳とペンを認め、美穂は苦笑した。「サインですね」

手帳とペンを受け取りながら美穂がそう尋ねると、少女は無言でコクリと頷いた。ふうと息を吐き、手帳にサインをする美穂。その時、不意に少女がこんな質問をぶつけてきた。

「松尾さんって彼氏とかいるんですか？」

「え？」

美穂は動揺し、ハツと少女の顔を見つめた。一方、少女のほうも、美穂の動揺に気がついたのか視線を左右に迷わせる。

まずいと美穂は思った。噂というものはどこが発信源となるのか分かったものじゃない。目の前に立つおとなしそうな少女がそうなってしまうという危険だっただけに充分にあるのだ。

「うっん」

できるだけ平静を装い、美穂は答えた。「募集中って感じかな」

橘川夢多はあくまで片想いの相手であり、彼氏などではない。し

かし、美穂はすでに彼と交際をスタートさせているというような錯覚に囚われてしまっていたのだ。

昨夜、教えたばかりのメールアドレスに綾川チロリからメールが届いた。そのことに気がついたのは、テレビ番組の収録が終わり、帰り支度をしていたテレビ局の楽屋でのことだった。『橘川さんの携帯番号ゲットしたばい』という文章と、橘川の携帯番号と思わしき数字を見た瞬間、美穂は喜ぶよりも先に激しく狼狽した。もちろん、秀英祭の時にチロリのパートナーだったという男性から聞き出したのであろうが。

どう言って聞き出したのか。自分の名前を出したのか。橘川はこのことを知っているのか。そもそも、この番号は本物なのか。

様々な疑問が美穂の頭の中を駆け巡った。当然のことながら早速橘川に電話をかけてみようなどと思えるはずはない。

美穂が落ち着きを取り戻したのは、就寝前、いつものように親友の那美に電話をかけた時であった。橘川の携帯番号を入手したということを那美に告げると、彼女は『やったね』『良かったね』と祝福の言葉をまくしたててくれた。

那美と話しているうちに先ほどのような疑問、いや、疑問というより不安か。それらは夕立の後の空のごとく、見る見るうちに晴れていった。

そつだ。何も心配することはない。ついに自分はやったのだ。夢にまでみた橘川との再会がすぐ目の前に迫っている。手を伸ばせば届く、電話さえかければ届いてしまう距離にまで迫っているのだ。

那美との通話を終えてからの美穂は無敵だった。ベッドの上で何度も何度も橘川に電話をかけるシミュレーションをした。まずはお茶にでも誘ってみよう。それとも始めは挨拶だけに留めておいたほうがいいか。逆にいきなり告白したらどうなるのであるうか。しかし、どれだけ悩んでも、どうせすべての選択肢は美穂にとって都合

のいいものに繋がっているのだ。

美穂の心情としてはそれでいい。ただ、夜が明けても、実際に橘川へ電話をかける決心がまるでつかないのは問題であった。

「で？　いつ電話するの？」

遅ればせながら登場した那美が美穂の顔を覗き込んだ。以前のおっぱ頭に代わり、最近は美穂と同じようなセミロングヘヤーになっている。「うーん」と唸り声を上げ、指先で髪の毛をいじる美穂。二人は学校からすぐ近くのもの、あまり人気のない路地に入り立ち話をしていた。

「早いほうがいいんだよね」

恐る恐る美穂は尋ねる。口を真一文字に結び、那美は頷いた。

「七月になったら期末テストだつてあるでしょ。テスト期間中は恋なんかにかまけてる場合じゃなくなるよ」

「そつだよねえ……」

はあと溜息を吐く美穂。「でもさ。電話するにしても何て言えばいいと思う？　私が橘川さんの番号知ってるのつて変じゃない？

それに、なんで電話をかけてきたのかつて言われれば、また返答に困っちゃうよ」

昨夜のシミュレーションでは正直に『橘川さんとまた会いたかったから』と答えた美穂。橘川も『俺ももう一度君に会いたかった』など美穂の思うままの台詞を口走ってくれたため、ことは順調に進んだが、現実はその上手くもいかないということをも美穂は一応理解していた。

「えーつと」

那美は腕を組み、宙に視線を泳がせた。しばらくして、何かを思いついたらしくパツと表情を明るめた。「貴美さんの時と同じように、秀英大学志望つてことにすればいいんだよ。美穂はどうしても秀大に入学したい。だから秀大の先輩に入試対策なんかを相談した

いけど、秀大生の知り合いは橘川さんしかない。だから綾川チロリに頼んで、橘川さんの携帯番号を入手したってのはどう？」

「おお。辻褄が合ってる」

美穂は感心し何度も頷いた。「でしょ？」と那美が同意を求める。

「じゃ、早速橘川さんに電話してみよう！」

「ええ！」

一転、顔を引きつらせる美穂。「い、今からかけるの？ それはちよつと急すぎない？」

「向こうに言わせれば、いつかけても急だと思っけど」

正論を唱える那美。「そりゃそうだけど……」と美穂は口ごもった。しばしの沈黙の後、那美のねっとりとした視線に耐え切れず、スカートポケットから橘川の番号がメモリーされた携帯電話を取り出す。今日一日、親の形見のように肌身離さず持っていたのだ。

「こつちまでドキドキしちゃう」

そう言っ胸を押さえる那美をチラツと一瞥し、美穂は携帯を開いた。メモリーから橘川夢多の番号を呼び出し、はあと深呼吸をする。

「ちよつと待つてね」

更に深呼吸をする美穂。「早く早く」と那美に急かされる。

更にもう一度深呼吸をして、数秒間携帯を見つめた後、美穂は「ダメだー！」と那美に泣きついた。

「ムリムリムリ！」

泣きついたといつても顔は笑っている。那美の腕をつかみ、ゆさゆさと揺さぶる。「『今忙しい』とか言われちゃったら、私凹んじやうよー！」

「あんたはただの秀大志望なんでしょ！」

那美も美穂に調子を合わせ、笑顔でそう諭した。「普通に後でかけなおせばいいでしょうが！」

「だってだって！」

美穂はブルブルと首を横に振った。そんな彼女たちの楽しげな様



子を、通りかかりの老婦人が冷たい視線で見つめていた。

結局、橘川に電話をかけるのは期末テストの終了後まで延期することにしたのである。

## 41 イッツ・パフォーマンス

「ヘーイ。暑さにも負けずにはりきっていこうか！ 新感覚トークバラエティ『テレビでラジオ』の時間だぜベイベ！ お相手はこの俺、ジエームス岩田だ！」

アフロヘアに丸いサングラス、アロハシャツというお馴染みの衣装に身を包んだ岩田幸三がテーブルに取り付けられた固定カメラに向かって挨拶をした。「さあ、今日のゲストはなんと二回目の登場だ。キュートでチャーミング、それでいてちよっぴりライアーな綾川……」

五秒ほど溜めてから。「チーロリちゃんだー！」  
「久しぶりだぜベイベー！」

サングラスをかけた池田綾香がカメラに向かって左右の親指を立てる。カウボーイハットにカウボーイシャツ、バンダナといったカウボーイ（カウガール）スタイルでキめている。「ヘーイ、ジエームス。ライアーはちよつとひどいんじゃないかいスパークキング」

「馬鹿言ってんじゃねえぜベイベ！」  
隣に座る綾香を指差す岩田。「お前はフローム佐世保のくせにフローム博多って嘔吐いてたじゃねえか」

チツチツと綾香は指を振った。

「嘘なんかじゃねえぜベイベ。パフォーマンスと呼んでくれや。おいらは生粋のパフォーマンズアイドルどすからなあ！」

相変わらずキャラクターが安定していない綾香。苦笑する岩田に脇腹辺りをエルボーされ、「ぐえ」と声を漏らす。

「と、とにかくそんなパフォーマンスアイドルのチロリちゃんが毎週火曜夜十時に放送されている連続ドラマ『ミスターポストマン』に一話だけ特別出演するって噂になってるが、こいつは本当かベイベ！」

「本当だぜーい！」

テーブルの下から『ミスターポストマン』のポスターを取り出す綾香。「キャストを代表して宣伝しにきたから、早くクイズを出しやがれボケイ！」

「オーケイ！」

綾香ではなくカメラに向かってグーサインをする岩田。「そいつが喋るとお好み焼きはおのみ焼きに、たこ焼きはた焼きになっちゃうんだ。さあ、そいつはどの国出身だベイベ！」

六月も残りわずかとなったある日。エックステレビ局内の最も小さなスタジオにて綾香は、岩田が言つとおり二度目となる『テレビでラジオ』の収録に臨んでいた。

「えー、横浜市在住のペンネームはララバイ関東」

暗いトーンでハガキを読み上げる岩田。オープニングとは打って変わり、本編ではなぜかローテンションになってしまつのがこの番組の大きな特徴である。「『今月の中旬にいいよチロリちゃんの新曲がリリースされると発表がありました、曲について詳しく教えてください』」

本日収録分のオンエアは七月である。

「えー、どうしようかなー」

いやらしい笑みを浮かべながら、綾香はもったいぶってみせた。

「そこまで聞きたいなら……」

「じゃあ、続いてのおハガキ」

「待つてよ！」

やれやれといったふうに着田がハガキをポンとテーブルの上に置いたのを確認し、綾香は一度コホンと咳払いをしてから話し始めた。「実はいいよ明日がレコーディングなんですばい」

「ほう」

岩田は腕を組み、相槌を打った。「なんか聞いた話によると、今回はお前が作詞を担当するそうじゃねえか。もう詞はできあがった

のか」

「それなんです」

ビシツと岩田を指差す綾香。「もうほとんどできてるんですけど、サビの終わりにフアンの皆と一緒にチロリンポーズをするってアイデアがあつて、そのかけ声みたいなものがいまいち決まらないんですよね」

「なんか候補とかあんの？」

「えーっと」

人差し指をあごに当て、綾香は宙に視線を漂わせた。「『皆ー、準備はよかね？』とか『チロリンポーズスタンバイオーケー？』とか」

「そんなもん」

ハハツと馬鹿にしたように岩田は笑った。「アドリブでいいじゃねえか。ライブなんかじゃ勢いでいくらでもごまかせるだろ」

「アドリブじゃ、フアンの皆がいつポーズを決めたらいいか分かんなくなるかもしれないじゃないですか」

唇を尖らせる綾香。「じゃあ、こうゆうのはどうだ？」と岩田はグーにした右手を顔の位置まで上げた。

「いち、にい、さん」

それから右手を高く伸ばす。「ダー！」

「やだ！」

プイと顔を背けながらも、綾香は心の中で衝撃を受けていた。

そ、その手があつたか。

収録後、スタジオ外の休憩スペースのソファにて。綾香は自らの書いた新曲の歌詞を岩田に見てもらっていた。真面目な顔でじっくりと歌詞を読み進める岩田の様子を、綾香は緊張の面持ちで見守っていた。

「いいんじゃないか？」

歌詞がプリントされたB5用紙を綾香に返す岩田。アフロのカツラとサングラスはすでに外している。綾香はひと安心し表情を緩めた。「出身地詐称を逆手に取ったわけだな。皮肉が効いててお前らしいわ」

「ひ、皮肉ってわけじゃないんですよ」

綾香はもう一度歌詞を岩田に見せつけながら言った。「出身地もそうですけど、キャラを作ったりとかそういったことが、別に嘘を吐いてるわけじゃなくて、自分を売り込むためのパフォーマンスなんだぞって、そうゆう歌なんです。全国のアイドルたちの気持ちを代弁してるっていうか」

「なるほどね」

苦笑しながら煙草を口をくわえる岩田。ふうと紫煙を吐き出し続けて続ける。「ところで、歌詞に『あなた』って出てくるけど、これは実在する人物か？」

岩田はからかうように目を細めて綾香を見つめた。

「ま、まあ、実在するっていえば実在するんですけど」

言葉を選びながら慎重に返答する綾香。「私には関係ないっていうか……」

「関係ない？」

岩田は眉をひそめた。歌詞のモデルは松尾和葉なので、『あなた』が指すのは和葉の片思いの相手（と綾香が予想している）である橘川夢多というわけだ。

「あ、それはそうと」

綾香は慌てて話題を変えた。「さっきのヤツ、本当に使わせてもらいますね。いち、にい、さん、ダー！ じゃなくて、ワン、ツー、スリー、イエーイ！ にしますけど」

新曲サビ終わりのチロリンポーズのかけ声である。かけ声をカウントにすれば、客も自然と綾香についてくることができるし、おまけにより盛り上がるはずだと綾香は考えたため、岩田が収録中に出したアイデアを拝借させてもらうことにした。

「おう」

岩田は頷いた。「俺にもロイヤリティーはちゃんと支払えよな。売り上げの四十パーセントで我慢するわ」

「え、えー……」とドン引きする綾香を見て、岩田は「冗談だ」と素っ気なく言った。

ホツと胸を撫で下ろし、綾香はもう一度歌詞を眺めた。それから休憩スペースのテーブルに置いてあったボールペンを手にとり、空白部分に『ワン、ツー、スリー、イエーイ』と新たな歌詞を書き込んだ。

これで、本当に完成やね。

続いて曲のタイトルを一番上に書き込む。タイトルは歌詞が全て完成してからじっくり考えようと思っていたが、綾香の中ではとっくの昔に決まっていたのだ。

『イツツ・パフォーマンス』。これしかないではないか。

#### 41 イッツ・パフォーマンス(後書き)

作者ブログにて『イッツ・パフォーマンス』のデモ音源と歌詞を公開中！

<http://blog.livedoor.jp/natsunoradio/archives/51457713.html>

## 42 テレビの中では

レコーディングからほどない期間を経て七月の半ばにリリースされた綾川チロリのサードシングル『イツツ・パフォーマンス』は、事前にろくなプロモーションを行っていないながらも、例の出身地詐称騒動などで話題性もあったのか、発売初日のデイリーチャートで三位を記録するなど好スタートを切った。そして、週末の歌番組においてチロリが同曲の歌唱をテレビで初披露した翌日のデイリーチャートでは見事一位に輝いた。

結局ウィークリーチャートでは前作を上回る五位という結果であった。

翌週はプロモーションも本格化した。ゴールデンタイムのバラエティ番組のエンディングに加え、多数のテレビ番組にスポンサー提供している飲料会社のCMソング。後者の影響は特に大きかった。もともと耳に残るメロディでありながら、お茶の間に何度も何度も繰り返し流されるのだ。綾川チロリの名を、また名は知っているが綾川チロリが歌っているとは知らずとも『イツツ・パフォーマンス』のメロディは知っているという者も少なからず増えていった。

彼らがCMで聞いた馴染み深いメロディと再会しようと試みるのだ。そんな彼らの行動を全国のCDショップの『イツツ・パフォーマンス』特設コーナーが後押しをする。歌詞の中で何度も『イツツ・パフォーマンス』という単語が出てくるため、彼らは綾川チロリの歌う同曲の存在を知ると同時に『これだ』と心の中で叫ぶ。

前作と同じように、売り上げは発売二週目になっても全く衰えず、今回はむしろ増していったのである。

チロリが『生で音楽SHOW』、通称『生音』に出演していた。前作、前々作のリリース時に続き三度目だ。前作までのように、素



人が何かの間違いでプロの中に紛れ込んだというたまたまではない。いやむしろ、他のアーティストに大物がいなかったことも影響しているであろうが、今夜の『生音』はまるでチロリのために放送されているといったふうに感じられた。

実際、前作までの時は新聞の欄にチロリの名前など書かれていなかったのに、今日は一番始めに書かれており、『話題の新曲を熱唱』という煽り文句まで書かれていた。少なくとも本日の放送では、チロリが話題の新曲を熱唱するということが、最も視聴者に関心を与えられると判断されたのであろう。

《では続いては綾川チロリちゃんです》

スーツを着た司会者、岩田幸三がチロリを紹介すると、観客が本日一番の拍手と歓声でチロリを迎えた。前列中心の席に座り《どうもー、どうもー》と頭を下げるチロリ。トレードマークの白いハットにノースリーブの白いシャツ、デニムのホットパンツといった動きやすそうな出で立ちをしている。それは衣装といった感じではなく、チロリの私服にしか見えなかった。実際、普段から彼女はこのような格好でいることが多い。『パフォーマンス』と謳いながらも、今作はありのままの自分で勝負するということが。

《新曲の『イツツ・パフォーマンス』ですが》

岩田が言った。《二週目にして遂に、チロリちゃんにとっては初の週間チャート一位に輝きました》

彼が拍手すると同時に、観客、共演者たちからも拍手を受ける。

チロリは恐縮した様子で手をひざの上に置き、はにかんだような笑みを浮かべた。

《いやー、これも皆さんのおかげですばい》

マイク片手にお決まりの文句を話す。《プロデューサーのトーマス岸部さんに、レコード会社の人たち。事務所の人たちもそうだし、もちろん応援してくれたファンの皆さん》

《おいおい、俺は？》

自分を指差す岩田。

《そうそう、そうでした》

チロリはうんうんと頷いた。置いてけぼりにされた観客たちに、曲中の『ワン、ツー、スリー』のフレーズは岩田からヒントをもらって生まれたものだと説明する。ほう、と納得した様子の観客たち。それから、作詞のエピソードやレコーディングのエピソードなど、次々と岩田が質問をぶつけていき、チロリはそれらを無難に答えていった。トークだけでもかなりの長い尺である。前回出演時の三倍から五倍ほどあるだろう。

やがて、満を持して『イツツ・パフォーマンス』の演奏が始まる。コーラスやブラスを含む大勢のバックバンドを従えたチロリが、派手な照明に彩られたステージを縦横無尽に駆け回る。前作のような振り付けは存在せず、曲のテンションに合わせてチロリが自由に観客を煽るといったスタンスだ。ただ、曲がある部分に差しかかった時だけチロリは毎回同じ動きを見せる。そう、サビの終わりの部分だ。

《ワン、ツー、スリー》

観客に向かって指で声でカウントを取る。そして、マイクを持った左手を腰に当て、右手をチョキにして額へ当てる。

《イエーイ！》

チロリはマイクを口に当てていないので、その声は観客によって発せられる。よく見ると観客たちもチロリンポーズを決めており、一瞬画面が他の出演者たちの席に切り替わった時、一人の若い女性アーティストが悪戯な笑みを浮かべ、同ポーズを真似していた。

今この番組を見ている人はデビュー当時からチロリがしつこくこのポーズを人前で披露し続けていることを知っているのだろうか、と思う。この曲のために生み出されたものだと勘違いしている者も中にはいるだろう。それほど『イツツ・パフォーマンス』は世間に大きなインパクトを与えた。

初めて綾香がチロリンポーズを披露してみせた時のことを思い出す。あれは確か、彼女がアイドルとしてデビューするということを

初めて聞いた日だった。あの時は本当にくだらないと思った。人気が出るのは一部のアイドルオタク層たちのみで、あつという間に事務所を解雇されてしまうのがオチだろうと高をくくっていた。

ところがどうだ。あれから一年と経たぬ間に、チロリは完全にトップアイドルの座へ登りつめてしまったではないか。

なんだか悔しかった。自分以外に愛される綾香を見ていたくはなかった。だから、テレビに映る池田綾香は綾香ではないと自分に言い聞かせることにした。綾香ではなく綾川チロリなのだ。

いつ頃だったか、綾香がこんなことを言い出した。

『真一。どこにも行かんどいてよ』

どういった状況であったかよく覚えていない。ひよっとしたら夢の中でのことだったかもしれない。しかし。

どこにも行くな？ そりゃ、お前のことだろう。

井本真一はそう心の中で呟き、いつの間にかチロリのライブを終えCMに突入していたテレビの電源を消した。今夜、チロリではなく綾香がちゃんと家に帰ってくるということを信じて。

### 43 目覚めはチャイム

キイと控え目な音を立てて玄関のドアが開いた。閉める時も騒音に細心の注意を払っている様子だ。鍵をかける時もしビングまで歩いてくる時も同様である。

「わっ！」

リビングの明かりを点け、仏頂面でソファに座る真一を発見し、ようやく消音機を取り外した音を立てる綾香。「ま、まだ起きとっただと？」

電気を消していたことについての言及はない。二人の同棲を知らなかったため、あらかじめ真一が電気を消しておくことは今までもたまにあつた。

「遅かつたな」

ガツシリと腕を組み真一は言った。ソファの上だがスウェットに包まれた足も組まれている。「今日の仕事は『生音』だけだったはずだよな」

生放送の『生で音楽SHOW』が終了するのは午後九時。まあ、それからのんびりと帰ってきてても十時、いや少なくとも十一時には家に着くことができるだろう。

「え、えーと」

苦笑いを浮かべながら、綾香は野球帽を外し、ボサボサの髪の毛を更に手でかき乱した。『生音』の時とは違う格好だが、ノースリーブとホットパンツは共通している。「新曲のオリコン一位を祝う祝勝会が本日行われまして……」

言われてみると彼女の頬はほんのり紅く、一メートルほど離れているにも関わらず酒臭い息が漂ってくる。相当飲んだらしい。

「明日俺が休みだからって」

目の前にちよこんと正座した綾香を真一は真っ直ぐに見下ろした。「なるべく早く帰ってきてくるとか言ってたヤツは誰だっけ？」

「誰でしたっけ」

そう言ってアハハと笑い声を漏らす綾香にデコピンを食らわす真一。「あう！」と額を押さえ、うずくまる綾香。

時刻は午前四時を回ったところであった。

「真一い、真一ってばあ」

さっさと寝室に敷かれた自分の布団に横たわり、不貞寝を決め込む真一の肩を綾香が揺さぶった。「帰りに事務所に寄ったら、事務所の人たちが歓迎会してくれるって言うつちやもん」

「なんで事務所なんか寄るんだよ」

目を閉じたまま真一は愚痴のようにそう尋ねた。

「始めっから企画されとったとってえ」

非常にうつつとしい猫なで声。「マネージャーがいきなり事務所に寄れって言うけんさあ、行ってみたら『チロリちゃんおめでとー』。パーンって……」

パーンとはクラッカーであろうか。事実なのか脚色なのか判断しかねる。「マネージャーはそんなこと企画するようなヤツやないけんさあ、誰が企画したんかなと思ったらなんと社長やったんよお。ねえ？ そんなん断るわけにはいかんかろお？」

「俺は眠たい目をこすってお前を待ってたんだ」

ピトつと身体に引つついてきた綾香を突き放す。酒臭さと汗臭さもあつた。「連絡の一つぐらいよこしやいいだろ」

「チャンスがなかったとよお」

めげずに貼りつく綾香。「事務所の人たちと一緒にやったつちやけん、あんたのことがバレるかもしれんやろお？」

確かにそれもそうかと納得しかける真一だが、もう少しはつきりさせておきたい。

「トイレにでも立って、個室でメールすりゃいいだろうが」

「アハハ」

綾香はポリポリと頬をかいた。「乾杯した後、立て続けに二杯飲んで気持ちよくなっちゃって、そこまで気が回らんかったとよお」  
情状酌量の余地はなし。

真一は本当に眠たかったので本当に眠ることにした。

な、なんだ!?

真一が飛び起きた時、玄関のチャイムが連続して鳴っていた。ドンドンドンドンと小刻みなノックをはさみ、再びチャイム。

数秒後、またかよと真一は溜息を吐いた。以前にもこういつたことがあったのだ。その日も真一は休みで、同じようにチャイムの音で起こされた。綾香が寝過ごしして、マネージャーとの待ち合わせ時間に遅刻してしまったのである。普段は吉祥寺駅で待ち合わせしているそうだが、綾香が来ない時はまず電話をかけ、電話が通じない時はマネージャーがこうして家に直接訪ねてくるのだということをした。の時初めて知った。

枕もとの目覚まし時計で、今が午前十一時だということを確認する。それからすぐに隣の布団で毛布もかけずに眠りこける綾香の肩を揺さぶった。なかなか起きないので今度は頬を指で弾いてみる。ようやく薄らと目を開ける綾香。次の瞬間にはバツと上半身を起こした。

「う、嘘やん」

真一が知らせるより先に、彼女もチャイムの音に気がついたらしい。マネージャーの立つ場所からは距離があるし、玄関ドアと洋室ドアにさえぎられているため、話し声が届いてしまう危険性はなさそうだが、囁き声で話す。前回と同じだ。「今日の仕事、夕方からやもん。私、遅刻してないかい?」

時計を見ていないが、今がまだ夕方ではないということを感じて読み取ったらしい。

「なんか用事でもあるんだろ」

綾香の背中を叩いて急かす。「さっさと出てこい。終いにや、ドアぶち破って入ってくるぞ」

前回は慌てて真一の靴を隠したが、今は用心のため、真一の靴は全て常に靴箱の中に入れられている。少なくとも玄関には綾香が真一と同棲しているという痕跡はないはずだ。

フラフラと立ち上がり玄関へ向かう綾香。昨日と同じ服装であるが、ひよっとしたら、そのままマネージャーに連れられ、どこかへ出かけてしまうのかもしれないと真一は考えた。しかし、綾香は一分ほど玄関先で話をした後、またフラフラと寝室へ戻ってきた。

「あんたやんか」

沈みきった表情で意味不明なことを言う綾香。「は？」と真一が目を丸める。「だから、あんたやっつてば。こんなリーゼントのオッサン」

アイスラッガー……、否！ リーゼントのジェスチャーをする綾香。

わ、若頭だつて!?

真一は困惑した。真一の勤務するラーメン屋『ぶるうす』の同僚である若頭こと萩本和人が訪ねてきたというのか。そんなことは今までに一度もなかったし、そもそも真一が休んでいる本日は、若頭も十時から出勤しなくてはならないはずだ。いったい何があったというのか。

「あんたのせいで寝起き顔サービスしてしまつたやんか……」

ぶつぶつと呟きながらへたり込む綾香を無視し、真一は彼女と入れ替わりに玄関へ急いだ。なんだか妙な胸騒ぎがする。

ちよつと用事ができたから勤務を代わってくれ。今日は忙しくなりそうだから加勢してくれ。そんな些細なことであればいいのだがと真一は思った。

#### 44 不安定なビジョン

「お前いつまで寝てんだよ」

真一が玄関のドアを開けた瞬間、萩本は眉間にしわを寄せながら抗議した。階段を駆け上ってきたのか、少し息が上がっている。休日なわけで文句を言われる筋合いはなかったが、「すみません」ととりあえず謝罪する真一。

「ど、どうしたんすか？」

『ぶるうす』はもう開店している。店長一人に店を任せてまで若頭が訪ねてきた理由について、真一は全く心当たりがなかった。

「お前のお袋さんから電話があつたんだ」

萩本は言った。それを聞いて真一は驚くと同時に、先ほどの胸騒ぎの正体はこれであろうと直感した。「親父さんが倒れたそうだとぞ」  
親父が……。

真一は口をあぐりと開け、萩本の顔を見つめた。

真一の実家は群馬にあつた。彼に兄弟はおらず、現在は両親二人で雑貨屋を営みながら静かに暮らしている。地元の高校を中退した後、半ば家出のような形で上京した真一だったが、今から二年ほど前、財産が尽きかけた時に、つい両親を頼り実家に電話してしまつたのだ。

その時電話に出た母は、久しぶりに聞いた息子の声に喉を詰まらせ、彼が金に困っているということを知ると、父に内緒で仕送りをしてくれた。それから真一と母の関係は修復し、こちらの連絡先も常に知らせるようになった。

一方、父は今でも家出した真一のことを勘当したも同然のように振舞っているそうだが、先日真一のために密かに貯金してくれているという話を母から聞かされた。

父が倒れたということ伝えるため、母は真一の携帯電話に何度も連絡しようとしたが、いくらコールしても繋がらなかったため、



仕事かなのだと思い、あらかじめ教えておいた『ぶるうす』のほうへ電話をかけたのだそう。萩本はわざわざそのことを伝えるに、家まで訪ねてきてくれた。

「とりあえず電話してやんな」

身をひるがえしながら萩本は言う。「俺はもう店に戻るから」彼の背中に「ありがとうございました」と礼を述べる真一。その時、萩本は振り返り、一瞬何かを言いかけたが、向き直ってそのまま階段のほうへ歩いていった。

彼の様子を見て真一は思った。おそらく彼は自分と同じような想像をってしまったのだろうと。

リビングのテーブルに置いたままの携帯電話を手に取る。五つの着信記録があり、実家から三度、『ぶるうす』から二度電話がかかってきていた。常にマナーモードに設定しているため、着信に気がつかないのも無理はない。

綾香はすでに寝室で二度寝を開始している。さすがに呆れてしまったが、今はそのほうが都合が良いということをしずくに思い出す。

真一は実家の母に電話をかけた。

《真一？》

声を上ずらせながら母は言った。そして彼女の口から改めて父が倒れたという報告を聞く。

「とりあえず、仕事の都合がついたら一度帰るから」

仕事の都合は明日にでもつくだろう。以前、萩本が『困った時はお互い様だ』とこういった事態になった時のことを示唆するような発言をしていた。そして、半年ほど前に、怪我をした萩本の穴を埋めるため、真一が十回以上休みなしで勤務したことがあった。義理深い萩本なら『すぐに帰ってやれ』と言ってくれるに違いない。

真一の言葉に母は《ありがとう》と涙ながらに礼を言った。父が倒れたということなど自分には関係ないとも言われると思ったの

かもしれない。

もちろん、そんなことはない。父も心配だし、母も心配だ。一年前ならまだしも、バイトであるが職に就き、綾香と共同生活するようになった真一はこれでも一応成長していた。親が心配にならないなど、子供じゃあるまいし。

母との通話を終え、すぐに『ぶるうす』へ電話をかける。萩本に相談し、できれば今日にでも帰郷しようと思う。

こいつにもな。

コール音を聞きながら無邪気に眠る綾香を一瞥し、真一は心の中で呟いた。

電話に出たのは萩本ではなく店長であったが、萩本に取り次ぐまでもなく真一は一週間の長い休暇を得た。向こうは向こうすでに相談済みだったということだ。

ひと安心し、真一は寝室まで歩いた。綾香の枕もとにドスンと座り、あぐらをかく。それから彼女の寝顔を眺めながら考えごとをした。

父が倒れたという事実を受け、そこから派生する煙のようにモヤモヤとした、それでいて電卓のようにはっきりとした問題の存在について、始めからしつかりと気がついている。できれば考えたくはないが、いつかは考えなければならぬ。

もし父が回復しなければ、もう東京に戻って来れないのではないかという問題だ。母一人で実家の雑貨屋を切り盛りするというのは無理がある。

そうなると『ぶるうす』はどうなる？ いつかは店長になった萩本の下で、若頭として働くことになるはずの『ぶるうす』は。

はあと溜息を吐く真一。なんて不安定なビジョンだったのだろうと今更ながらに彼は思う。父や母がいつまでも元気でピンピンしているとも思い込んでいたのか。

そして綾香のことだ。自分が実家へ帰り、それでもアイドルとしての活動を続ける彼女と付き合っていけるのか。どのように想像

しても現実味を持たない。

綾香……。

真一は綾香の頬をピンと指で弾いた。

「そ、そうなん……」

真一の話聞き終えた綾香は眠たげに目をこすりながら呟いた。起きた時のまま、ぺたんとあひる座りをしている。「あなたにも実家があつたつちゃね」

「当たり前だろ」

綾香に両親の話をしたことはないし、母にもアイドルの綾川チロリと付き合っているということをお話してはいない。双方に対して特に話す必要はないだろうと真一は思っていた。綾香が真一の実家について何も尋ねないのは、彼が天涯孤独だと思ひ込み、そのことに触れてはいけなないと考えたからなのかもしれない。

「じゃあ」

頬をポリポリとかきながら、うつむき加減で綾香は言った。「真

一、実家に帰らんといかんね」

一旦実家へ帰るという意味で言っているのか、それとも永久的に実家へ帰るという意味で言っているのか、真一には判断がつかなかったがとりあえず「ああ」と返事をした。前者の場合の返答のつもりだ。

途端に綾香は言葉を失くす。寝室の畳を見つめたまま髪の毛を指先でいじり続けている。ひよっとしたら後者だったのかもしれないなど真一は思う。たった今、間接的に別れを告げられたと勘違いしているのか。

そんな綾香のことがとても愛しく見えた。少なくとも彼女は離れたくないという気持ちを真一は実感する。

とりあえず彼女を元気づけなくてはならない。

「心配すんな」

彼はフツと鼻で笑った。「あの親父なら、一週間もすればコロツと回復するだろ」

綾香は一瞬キョトンとした顔を見せた後、「そうよね!」と笑みを浮かべた。

## 45 逃げ腰な恋

エレベーターの心地よい震動に身を委ねている間、二人きりの羽山美穂と河内那美はなぜかピタリと会話をやめてしまった。エレベーターに乗るといつもこうだ。那美がどんなつもりなのか分からないが、美穂の場合は静か過ぎるのが原因だ。親友の那美とのプライベートな会話に、エコーがかかってしまうのは勘弁してほしい。

エレベーターが五階に到着する。エレベーターを出ると同時に、那美が背伸びをしながら「なんか懐かしいな」としみじみ言った。そういえばそうだと美穂は気づく。那美が最後に美穂のマンションを訪れたのは、まだ二年の時だった。

美穂は「ただいま」と中に声をかけながら、自宅の玄関ドアを開けた。母からの返事はないが、外には出ていないはずだ。

部屋に上がりながら促すと、那美も「おじゃまします」と挨拶をしながら靴を脱いだ。

リビングや洗面所などを覗き込み、母を探す美穂。あれ、鍵もかけずにどこへ行ったのかなと不思議に思いかけた途端、美穂の部屋から出てくる母とバツタリ目が合った。

「ちよつと」

美穂は母を睨みつけた。「私がない時に勝手に部屋に入らないでって言ってるでしょ」

「ごめんごめん」

ドアを閉めながら苦笑する母。アイドルの娘を持っているとは思えない素朴な女性で、家にいる間は常にエプロンを身体に巻きつけている。「美穂ちゃんがちゃんと掃除してるか心配になっちゃってでも、大丈夫みたいね」

「大丈夫だよ」

ツンと母から顔を背ける美穂。そこでようやく那美が母にお辞儀をする。

「お久しぶりです。お邪魔してます」

「那美ちゃん？」

母は目尻にしわを寄せた。「久しぶり。髪型変えた？」

「はい、少し……。おっと」

美穂に手を引かれ、那美はバランスを崩した。

母が道を開け、那美の手を引きながらそこを突っ切って歩く美穂。そして、部屋に入ろうとする彼女の背中に悪魔のような母の言葉が。

「通知表は？」

ドアノブを握りしめたまま、ピタッと固まる美穂。

「今日は那美が来てるんだから」

彼女は振り返った。「そんなの後でいいでしょ！」

「じゃあ、楽しみにしてるからね」

母は白々しく笑った。美穂は那美を部屋に押し入れてから自分も中に入り、母を一瞥した後ボタンとドアを閉めた。

午後十二時半。先ほど、学校で一学期の終業式を終えたところであつた。

ペタンとベッドの端に座り込む那美。美穂の部屋を訪れた時、彼女はいつも同じ場所に座る。一方の美穂は勉強机の椅子に座るのが決まりだ。一人でいる時はほとんど近寄らない場所である（それは忌々しき事態だ）。

「今日は仕事？」

那美が尋ねた。片方の足を曲げてベッドの上にかけており、制服のスカートの合間から白いパンティを覗かせているが、そこは親友同士、まるで気にしない。

「仕事だよお」

机に頬づえをつき、美穂はかつたるそうに答えた。「せっかく学校から開放されたのに、今度は仕事のオンパレード。『アイドルに夏休みなんかないからね』。うちのマネージャー、容赦ないからな

あ

「大変だなあ」

那美は苦笑した。「まあ、私もバイトの日数増やしたけど、もうぼちぼち辞めなきゃいけないから、最後の思い出作りって感じかな」

「そっか」

納得したように頷く美穂。「那美は大学に進むんだっけね。じゃあ、夏休み過ぎたらあんまり一緒に遊んだりとかできないな」

「どうかな」

そして二人は黙り込んだ。どうにも気まずい沈黙である。受験が終わると次は卒業。卒業したらいよいよ二人は離れ離れになってしまう。その事実をどちらも認めながらどちらも口には出せないという、そういった点からくる気まずさだ。ただ、美穂はそんな感傷的な気持ちに浸りながらも、心の奥底ではもう一つ見逃せない感情を抱き続けていた。ひよっとしたら、放課のチャイムを聞いた瞬間からずっとかもしれない。

それは緊張だ。

美穂はペンギン型の壁かけ時計を見た。時刻はまもなく十二時四十五分。ものすごく中途半端な時間だなと思う。十二時四十五分。十二時四十五分といえは、橘川夢多はどのようにして過ごしている時間だろう。昼食の最中だろうか。それとも昼食を終えたところだろうか。それとも。

続いてチラッと那美を一瞥する。すると二人は目が合い、どちらからともなく苦笑した。

「で？ 早く電話しようよ」

唐突な那美の言葉に、美穂は「え？」とたじろいでしまう。やはり那美も忘れてはいなかったか。

「そ、そっだね」

スカートのポケットから携帯を取り出す美穂。携帯を開き、ふうと深呼吸をした。

期末考査も終わり、もう言い訳はできない。那美の立ち会いのも

と、橘川に電話をする時がついにやってきた。

「大学ってもう夏休みなのかな」

携帯を見つめたまま、美穂是那美に尋ねた。「知らない」という返事が返ってくる。「もし夏休みだとしたら、バイト中だったりするのかな」

やはり「知らない」。

「美穂」

ややトゲのある口調で那美は親友の名を呼んだ。「またなんだかんだ理由をつけて、先延ばしにするつもりでしょ」

「そ、そうゆうわけじゃないけどさ」

慌てて否定する美穂。「もしお昼ご飯の途中だったりしたら迷惑がられるんじゃない？ 『なんだよ。邪魔すんなよ』って」

「迷惑がられない」

キツパリと断言する那美。「お昼休みは一日の中でも、一、二を争うほど迷惑じゃない時間帯だと思う」

「そうかなあ」

そう言って前髪をいじり始めた美穂を見て、那美は「もう！」としびれを切らしたように立ち上がった。目を丸める美穂のもとへずかずかと歩く。

「貸して」

そして美穂から携帯を奪い取ってしまった。「あっ！」と声を上げ、携帯を取り戻そうとする美穂だったが、那美は携帯を持つ手を高く伸ばし、それを阻止する。彼女のほうが若干背が高いのである。「那美ってば、お願いだから返してよ」

美穂の左右の手を器用にかわしながら、那美は携帯を操作した。やがて、追うのをあきらめ立ち尽くす美穂に「ほい」と携帯を差し出す。

「うそお……」



携帯の画面を確認し、へなへなとその場にうずくまる美穂。那美により、すでに橘川の番号へコールしている状態となってしまうていたのだ。キツと那美を睨みつけるが、彼女はニコニコと笑みを浮かべ、悪びれる様子はない。

「ほらほら出ちゃうよ。耳に当てときなさい」

言われたとおり、携帯を耳に当てる美穂。もう、そうするしかないではないか。

しかし、どれだけコール音が鳴っても一向に電話が繋がる気配はなく、しばらくすると留守番電話サービスに転送するといった旨のアナウンスが聞こえてきたため、彼女はコールを中止させた。

「ほら」

改めて那美に非難のまなざしを向ける。「やっぱり忙しかったんだ。なんとなくそんな気がしたもん」

「おかしいなあ」

眉をひそめる那美。「こんな時間に忙しいなんて、橘川さん、どんな状態なんだろう」

時計は十二時五十五分を示している。

「とにかく」

美穂は携帯をパタンと閉じた。「今日はもう無理だから明日だね」「ダメ。後でかけ直してみよう」

那美がそう言うと、美穂は「ええー……」と溜息混じりの情けない声を発した。

## 46 話の流れ

さあ、踊りまーしょう。イツツパフォーマンス、イツツパフォーマンス、イエーイ！

意識の片隅で聞き覚えのある曲に耳を傾ける橘川夢多。そうだが、これは綾川チロリの新曲だとすぐさま理解する。最近ではテレビを観ていても、ラジオを聴いていても、コンビニの有線でもよく流れている。話によると、かなりヒットしているそうじゃないか。CD売り上げ枚数は二十万枚を超え、着うたダウンロードも二百万件を突破したただとか。無論、橘川もCDは実用、保存用と二枚購入したし、着うたは短いものから長いものまで三件もダウンロードした。

まさか、あの小さなライブハウスにて豚の着ぐるみ姿で見事にスベッていたアイドルが、自分が生まれて初めて好きになったアイドルが、これほどの大物になるとはさすがに思っっていなかった。

少々、歯がゆいような、悔しいような複雑な気持ちもあるが、しかし。

チロリちゃん。どんだけ雲の上の存在になっても、俺は君を応援し続けるぜ。

そう心に誓ったところで、橘川はようやく目を覚ました。

ベッドから上半身を起こしたまま、ぼうつと部屋の中を見回す。いつもの自分の部屋だ。ハツとして枕もとのラジカセに目を向ける。もちろん、作動していない。この部屋にはテレビはないし、もちろん有線などというものもないわけで。

ああ、携帯か。

先ほど夢の中で聴いた『イツツ・パフォーマンス』は彼の携帯の着信音だったわけだ。橘川はラジカセの横に置いた携帯電話に手を伸ばし、着信履歴を調べた。すると午後一時前に知らない番号から

電話がかかってくるまで待っていた。只今の時刻は一時四十分。約一時間前だ。着信音を聞いてからすぐに起きたかと思いきや、また眠ってしまったらしい。

それにしても……。

この電話番号は誰からのものであるかと考える。有力なのはバイト先の同僚のうちの誰かで、急に用事ができたから勤務を代わってほしいという用件。

どうしようかな。かけてみようかな。

「ふああ」とあくびをしながら橘川は悩んだ。もつとも、バイト先の同僚からだとは確定したわけではない。ただし、もしそうだったら勤務を代わる気はない。その言い訳を考えるのが億劫なのだ。

と、その時だ。再び携帯が震動をし、『イツツ・パフォーマンス』を奏で始めたではないか。慌てて送信先を確認する。やはり、例の謎の番号だ。

同僚でないことを祈りつつ、橘川はおそろおそろ通話ボタンを押した。携帯電話を耳に当てる。

「もしもし？」

《……》

電話は繋がっているはずだが、相手の返事はない。そのまま三秒、四秒と時間が経過した後、なんとブツツと通話が途切れてしまった。橘川は一瞬何が起きたのか分からなかったが、なんとか、相手が一方向的に通話を切ったのだということに悟る。

なんなんだ？ 自分からかけてきておいて……。

と、再び着信音が鳴り出した。相手は同じ。橘川は躊躇なく通話ボタンを押し、今度は「もしもし！？」と強い口調で言った。

《……》

まただんまりか、と思いかけた矢先のことだ。《あ、あの……》

女の声だ。橘川は黙って相手の言葉の続きを待った。《あの……、私、美穂です。羽山美穂》

「羽山美穂……」

聞き覚えがある。が、同僚ではない。いったい、誰であったか。眉間にしわを寄せ橋川はしばし考え込んでいたが、ほどなくして深い記憶の底なし沼から、一人の少女が引き上げられる。「羽山美穂ちゃって、あ、あの……。松尾和葉ちゃん？ だよな」

《そ、そうです。そうです》

なんとなく嬉しそうな響きの声色だ。《あの時は芸名のほうを言い忘れてしまって、すみませんでした》

彼女の声を聞きながら、そういえばこんな声だったよなとテレビに映る松尾和葉を思い浮かべる橋川。それから 彼女と二人でファーストフード店に入った時の記憶も一つずつ、一つずつ蘇ってくる。「あ、いや。こちらこそ、松尾和葉ちゃんって名前がどうしても出てこなくて」

先ほどの『もしもし!』とは百八十度違った、和やかなトーンで話す。いたずら電話でないのであれば、話は別だ。「芸名ってことは、羽山美穂ちゃんっていうのは本名なの?」

《はい、本名です》

「そうか」

橋川はとりあえず調子を合わせた。もちろん、なぜ本名のほうを名乗ったのか、なぜ電話番号を知っているのか、そして、今日はいったいどのような要件で電話してきたのか。聞きたいことは山ほどあったが、とりあえずは久々の和葉との会話を楽しんでみようと思っただ。

《橋川さん、今でも綾川チロリちゃんのこと好きなんですか?》

他愛のない話の流れから、和葉がそう尋ねた。「うん」と素直に認める橋川。

「今でも好きだよ。あの時よりもすごく有名になっちゃったけどね」ベッドから立ち上がり、窓際へ移動する。カーテンを開き、インターティーシャツとトランクスのみ身につけた体が陽光に照らされ

る。「来月末の初ライブのチケットも予約してあるんだ」

八月三十一日に綾川チロリが渋谷の中規模なホールにて初のコンサートを行うと知り、狂喜乱舞した橘川。チケットの電話予約が始すると同時に財布の中身も確かめず、二枚分のチケットを予約した。もう一枚は大田早苗のものだ。

《そうなんですかー》

フフフと和葉は笑った。彼女の様子について、なんだか前に話した時より言葉尻が柔らかくなったように橘川は感じた。そのことを尋ねてみようかとも考えたが、なんとなく自重する。《私、実はチロリちゃんと友達になっちゃったんですよ》

「へー。トップアイドルが友達同士なんてすごいなー」

ベッドに座り直す橘川。

《それでチロリちゃんに橘川さんのことを話したら、秀英祭の時に実行委員だった人かもしれないって言い出して。それで、チロリちゃんが自分のパートナーだったって人に橘川さんの連絡先を聞いてくれたんですよ》

「なるほど。藤岡くんからかー」

チロリが自分のことを覚えていてくれたという喜びと同時に、橘川は勝ち誇ったような気分になった。ほれ見る。わざわざ詮索しなくても自然な流れで疑問は解決していくものだ。もう『なぜ電話番号を知っているのか』という疑問は消えた。よし、この調子で他の疑問も。「それはそうと、今日は俺にどういった用事なの？」

《はい、実は……》

少々間を置く和葉。《私、秀大を受験しようと思ってるんですけど、入試のコツとか、その他……し、しよしよ？ を相談できる秀大の先輩がほしかったんです。でも、橘川さんしか思いつかなくて上手く聞き取れない部分があったが、話全体は読み取れたので気にしない。

「そういうことか」

ほれ見るとまた心の中で呟く。「俺でよければもちろん力になる

けど……。あれ？ でも、和葉ちゃんって貴美ちゃんとも知り合いなんじゃなかったっけ？ 長岡貴美ちゃんって知らない？」

あくまで話の流れとしての何気ない質問だった。長岡貴美が自分と和葉の関係を知っていたというだけの話で、和葉と貴美が知り合いだというのは可能性の一つに過ぎない。和葉が貴美のことを知らなくとも別に不思議ではないのだ。

ただ、異変は起きた。

「ん？ 和葉ちゃん？」

和葉が突然押し黙ってしまったのである。

## 47 夢心地

「な、那美」

電話のマイクの部分を手の平で覆い隠し、美穂はそばに立つ那美に小声で助けを求めた。「橘川さん、私と貴美さんが知り合いだつてこと知ってるみたいなんですけど、なんて言えばいい？」

「ちょっと待ってね」

狼狽の色を隠そうとしない美穂に対し、至極冷静な様子的那美。腕を組み、真面目な表情で考え込む。あつという間に解決策を思いついたらしく、美穂に耳打ちをする。「じゃあ、こうしよう。美穂と貴美さんが知り合いだつてことは認めたと上で、貴美さんにも勉強を教えてもらつたけど、ちょっと独特過ぎて分かりにくかった。だから、橘川さんのことを思いついた」

美穂はコクリと頷き、慌てて電話を口に当てた。

「あ、すみませんでした。ちょっとガスコンロ付けっ放しにしてて」  
《気をつけなきゃ》と笑う橘川。良かった。どうやらこちらの動揺を悟られてはいないらしい。「え、えーとですね。貴美さんとは確かに知り合いなんですけど……」

那美に言われたとおりに話す。橘川は《あー》と納得したように唸り声を上げた。

《そうかもしれない。貴美ちゃん、良い子なんですけど、ちょっと変わってる場所があるもんね》

「はい、良い人なんですよねえ」

そう返事をしながら美穂は思った。やはり、貴美は橘川のことを知っていたのだ。しかも、橘川のほうも貴美のことを知っているではないか。貴美が自分に橘川を紹介しようとしなかった理由をもう一度考えてみる。有力なのは、どう考えても同じ色恋沙汰の問題だ。貴美が橘川に片想い。貴美の友達が片想い。貴美と橘川が実は付き合っている……。

《確かに、貴美ちゃんは理系でかなり頭も良いみたいだし、俺のほうが高校生のレベルに合ってるだろうな》

「そついう意味じゃないんですよ。ただ、橘川さんしか思いつかないよ。」

貴美と橘川が実は付き合っている？

思わず身震いをしてしまう。馬鹿な。そんなはずはない。自分の彼女のことを『良い子なんだけど』などと形容するものなのか。いや、するかもしれない。

ダメだ、と美穂はその想像を取っ払った。そんなことを考えているのはキリがない。考えているように見せかけて、それは逃げているのだ。橘川は目の前にいる。電話の向こうにいる。貴美のことは一旦忘れて、彼との電話に集中しよう。しかし。

《貴美ちゃんとはどこで知り合ったの？》

向こうにその気はないらしい。美穂の頭にピツタリと自らの頭をくつつけて、電話を盗み聞きしていた那美が「正直に」と耳打ちをする。

「私の同級生のお姉さんなんです」

《そうなんだ》

驚きの混じった声で橘川は言った。《世間は狭いもんだね。貴美ちゃんに弟がいたってのも知らなかった》

その瞬間、「よし」と呟いて那美が美穂のもとから離れる。そして、勉強机の上に置いたスケッチブックを再び手に取った。

い、いよいよか……。

那美に顔を向け、美穂は神妙な面持ちで頷いた。

「私、貴美さんと近所なんですよ。橘川さんはどちらに住んでるんですか？」

那美の持つスケッチブックにチラチラと目を向けながら、美穂はたどたどしい口調で言った。



《俺？ ホラ、一年前駅前で会ったでしょ？ その近くなんだけどつばきの予想どおりだ。思わず左手でガッツポーズを決める。》

「本当ですか！」

大げさに驚いてみせる。「私もその近くなんですよ。じゃあ、橘川さんもご近所さんだったんですね。へー」

《そうなの！？》

こちらは本当の驚きであろう。《じゃあ、貴美ちゃんも近くに住んでるってことか。うわー、全然知らなかった》

那美のスケッチブックを見て、ゴクリと息を呑む。さあ、ここからが大仕事だ。

「じ、じゃあ……」

そこまで言つて一度深呼吸をする。高鳴る胸の鼓動が電話越しに響いてしまっていないか不安だ。「お近づきのしるしに一緒にお茶でもどうですか？ 秀大の雰囲気とか色々聞いてみたいんです」

《え？》

その声にかすかな動揺が感じられた。まずい、端折りすぎたかと無意識のうちに唇を噛みしめる美穂であったが。《うん、いいよ。そちらが良ければ》

始めのうちは静かに、やがて、だんだんと胸の奥底から全身へと伝わる、朝陽のように煌びやかな感情を覚えた。それが脳天を突き抜けた時、美穂の表情はパツと明るく輝いた。

「やつ………！」

やったあ！

ついにやったのだ。とても長い道のりで、色々と遠回りしてしまつたかもしれないけど、ついに自分はやってのけた。

これで、橘川さんとまた会える！

再会の具体的な日時などを決めた後、美穂是那美の指示で早々に電話を切り上げた。同時に部屋の中でピョンピョンと弾け回る二人

の女子高生。

「やったー！ やったぞー！」

「やったやった！」

自分のことのように喜んでいようの様子的那美。「カンペ作っという本当に良かったね」

「うんうん」

一回目の繋がらなかった電話の後、那美が中心となり、話すべきことをスケッチブックに書き込んでおいたのだ。あれがなかったら、美穂は頭がパニックになり、何一つ言葉にできなかつたかもしれない。最初の電話が不通で本当に良かったと思う。

「ホント、ヒヤヒヤしたんだからね！」

呆れたような口調で那美は言った。「間違つて電話切っちゃうし、漢字読み間違えちゃうし」

「しかたないじゃん！」

両手を胸もとに当て、ぶるぶると首を振る美穂。「本当に橘川さんが出たからビックリしちゃったんだよ！ 漢字だつて、ちゃんと読み仮名ふつといてくれなきゃ！ 『その他諸々（もろもろ）』なんて読めないってば！」

「それぐらい読めなくて、秀大なんか入れるわけないでしょ！」

「別に入らないもん！」

そして二人はアハハと笑い合った。

嬉しくてしかたがなかった。もう過去のどんな辛いことも忘れられそうな気がする。どんなにひどいことをされても許せそうな気がする。美穂はまるで人間を超越したような気分になっていた。

トントンとドアがノックされ、ドアの向こうから「下に響くから騒がないで」と母からお叱りを受けた。美穂は「はい」と気の抜けた返事をし、また笑った。

「ねえ、美穂。私、お腹空いちやっただよー」

ベッドに座り込み、那美がお腹を押さえながら言った。

「うん、私もー」

彼女の隣に座り、美穂は頷く。「急にお腹空いちゃったな。今から二人でなんか食べに行こう!」  
「うん!」

今年の夏は暑くなりそうだ。

美穂はどこかで聞いたような台詞を心の中で口走ってみた。

#### 47 夢心地（後書き）

これ、コメディだったよなと今更ながらに思う。

## 48 ハイアンドロウ

「とりあえず、来月末のコンサートまでにアルバムも数曲レコーディングしておくから、お前も暇があったら詞を書きためとけ」

運転席の南吾郎が前を向いたまま言った。冷房はまだ効き始めたばかりである。額やこめかめに汗を滲ませながらも、相変わらず黒スーツを脱ごうとはしない。「今回は曲よりもお前の歌詞が先にできあがることになる。メロディをつけやすい歌詞を書けよ」

『イツツ・パフォーマンス』の綾香による詞は高く評価された。秋にリリース予定のファーストアルバム収録曲を全曲綾香に作詞させようというのは所属レコード会社の意向であった。

「はい」

窓の外を眺めながら池田綾香は答えた。渋滞に引つかかっているため、先ほどからあまり景色は動いていない。天まで続くような高層ビルや、歩道を歩く慌しい人々の向こうに、彼女は真一を見つめていた。

故郷の父が倒れたというニュースを受けて、井本真一が帰郷してから一週間が経過しようとしている。彼が言うには、父の容態はそれほど悪いわけでもなく、もうあと二、三日でこちらへ戻ってこれるという話だが、綾香の胸の中では、もっと先の未来への不安が目先のその安堵を打ち負かしていた。

もし父が回復しなかったらどうなるのだろうか。いや、今回は回復するであろうが、いずれは必ずその時がくる。綾香の佐世保の両親だって同じだ。もし、彼らのどちらかが倒れたら自分は芸能活動など続けてはいけなくなるのではないか。

お母さん。

ふと大好きな母のことを考える。彼女は元気でやっているだろうか。もし病気が何かになっても、自分を心配させないために連絡を寄こそうとはしないのではないか。

母が倒れたら、物理的にも精神的にも芸能活動なんてやってられないなと綾香は思った。それはもちろん、真一だって同じであろうとも。

「聞いてんのか？」

「へ？」

窓から南の顔へと視線を移動させる。すると、二人の乗る車がいつの間にか渋滞を抜け出し、すいすいと道路を進んでいるということに気がついた。外を眺めていたくせに今まで気がつかなかったのだ。

「ここ最近、お前ずつとそんなだな」

窓を閉めきつていながら煙草を吸う南。その息苦しきにもようやく気がついた。「一日中ぼうつとしやがって」

「仕事中はちゃんと切り替えとるやん」

はあと綾香は溜息を吐いた。「せめてカメラの回ってないところではスイッチをオフにさせてよ」

「知るか。辛気臭えんだよ」

南が一蹴する。「ソナーでも せい剤でもなんでも使って、さつさとハイになりやがれ」

「どんなマネージャーよ！」

綾香は南に肩パンを食らわした。

もう学生たちは夏休みに突入しているのであるう七月の下旬。綾香のスケジュールは本日も朝から晩までみっちり組まれていた。午前中は撮影所にてグラビア撮影とインタビュー。午後からはホールにて歌番組の収録。更に夕方からはラジオの収録と、次々に仕事をこなさなければならぬ。

ただ、綾香にとってそれはありがたかった。

綾香はアイドルの仕事が好きだ。アイドルでいる時間はファンに元気な顔を、パフォーマンスを見せなければならぬ。その使命感

のようなものが悩みを打ち消してくれる。

早く現場に到着してほしい。そんな彼女の願いもむなしく、車は再び渋滞に引っかかってしまった。

「詩織に会いたいな」

独り言のように綾香は言った。今自分を最も元気づけられる存在は親友の矢上詩織ではないかと思った。彼女ならきつと、綾香自身でさえも想像がつかない自分を再生させる方法を知っているに違いない。彼女とは最近忙しくてあまり会う機会がない。仕事は忙しいほうがいいのに、詩織に会いたいというのはある意味矛盾かもしれないなと苦笑する。

「ねえ」

綾香はふと南に話しかけた。「ん？」と綾香に顔を向ける南。「詩織がうちの事務所に入りたいって言ったら雇ってくれる？ アイドルとしてじゃないかい。普通に社員として」

「人事は他に担当者がいる」

南は素っ気なく答えた。「うちは新卒を採らないから、アルバイトからコツコツと社員を目指してもらうだろうな。それでいいならいつでも人事のヤツに紹介してやる。人手不足で敵わん」

「ホント？」

綾香の心の中のモヤモヤが少しだけ薄らいだ。「詩織、アイドルになるつもりはないっちゃんね。もし入社しても、アイドルでデビューしろなんて言わん？」

「少なくとも今は人手不足だから言わん」

南は深く頷いた。綾香は「やったー！」と明るい声を上げた。

「ただ」

綾香の歡喜を沈めるような南のその言い方に、綾香は目を丸くした。「ただ？」と先を促す。「お前が親友のことを考えるのであれば、うちなんて薦めないほうがいい。給料も安いし、休みもない。親友同士で同じ職場だといっても、タレントと社員はまったく別の職業だ。かえってお前らの仲もぎくしゃくするんじゃないか」

「そ、そう?」

綾香の心の中にまたモヤモヤが充満していく。「確かに。詩織、第一志望はデザイン関係とか言いよったし……」

「タレントとしてうちにくるなら話は別だがな」

南のその言葉を無視し、綾香はシュンと肩を落とした。

撮影所の四畳ほどしかない小さな控え室に二人きり。グラビア撮影に臨む直前の綾香は、予定どおり、この場所でインタビューを受けていた。

若い女性のインタビュアーであった。化粧つ毛が少なく、地味な服装で、なんとなく詩織と雰囲気に近いように感じる。

「初めてのコンサートの前に夏休みを丸々使って全国を巡るそうですが」

カンペも何も持たずに次々と質問をぶつけてくる彼女。まるで自分のことを何もかも知っている旧知の仲のようだと綾香は錯覚する。その点も詩織に近い。

「はい」

ニコリと綾香は頷いた。すでにグラビア用の照明映える衣装を着ており、ハットもかぶっている。「握手会ツアーです。ツアーって行っても日は飛んでるし、四ヶ所だけなんですけどね。あ、ついでに、ローカル番組とかにもガンガン出演してきます」

「それは楽しみですね」

インタビュ어도笑う。「ファンの人も楽しみでしょうけど、チロリさんも楽しみなんじゃないですか?」

「楽しみです」

綾香はそう言いながら、今度は少々表情に影を落とした。「ただ、ファンの皆の前でいつもどおり元気な私を見せられるか不安ではありますけど」

キョトンとするインタビュアー。彼女に「何かあったのですか?」



と聞かれ、綾香は正直に話してしまった。真一の名前は出さず、ただ、未来に言いようのない不安を覚えているということ。本当に彼女のことを詩織だと勘違いしてしまったのかもしれない。

「私もチロリさんのファンです」

彼女は言った。目を丸める綾香。「ファンは皆、チロリさんの幸せを願っています。だから、チロリさんも自分の幸せを信じて、ファンの前では笑顔を見せていてほしいです」

「今の話は記事に載せません」と付け加える。

「あ、ありがとうございます」

綾香は頭を下げ、それからインタビュアーと互いに笑顔を交わした。まるで、詩織に慰められたようだと思っただけだった。

## 49 寄り道

ゲスト出演した歌番組、それから自身がパーソナリティを務めるラジオ番組『綾川チロリのハートフルナイト』の収録を終えた頃には、もう時刻は午後八時を回っていた。

夕食を済ませていないため、空腹で眩暈を起こしてしまいそうだった。吉祥寺駅前の牛井チェーン店の暖簾をくぐっていた。

真一が帰郷して以来、夕食はもっぱら外食である。彼と同棲し始めてもう長いため、誰もいない部屋で寂しく食事をするのは些かの抵抗がある。

もちろん、本日も変装は完璧だ。最近ではテレビに出演する際必ずハットをかぶっているため、プライベートでは逆にかぶらない。夜のサングラスは目立ちすぎるのでフレームの厚いだて眼鏡をかけている。

店内はそれなりに空いていた。壁のアナログ時計は九時前を差している。もうピークを過ぎているのだろう。店員たちもなんとなくひと仕事を終えた後のような雰囲気だ。

厨房を取り囲むカウンター席の一角に座り、カレーの大盛りと味噌汁を注文する。綾香はこの店のカレーが気に入っており、上京したての頃から真一や詩織とよく食べに来ていた。

調理を待つ間、水の入ったコップに口をつけながらぼんやりと店内を見回した。カウンター席には五人、隅のテーブル席には二人の客が座っている。いずれも男性だ。綾香はようやく自分が浮いた存在であることに気がついた。

急にそわそわとし始める。

お腹が空きすぎて気づかんかった。

この店を一人で訪れるのは今日が初めてだった。今までは誰かと一緒だったため意識しなかったが、一人だと他の客の目が気になっ

てしかたがない。女性が牛丼屋に入るのは勇気がいるといった話をよく聞くが、自分には無縁のことだと思っていた。

やがて店員からカウンター越しにカレーと味噌汁を受け取り、目にもとまらぬスピードでそれを平らげる。味を楽しむ余裕などなかった。それは一刻も早く店を出たいがためであつたが、綾香の男らしい食べっぷりはより男性客の興味を引き立ててしまい、実際に店を後にする頃には多数の視線が綾香を突き刺していた。

「もう、早よ帰ってきてよね」

「ありがとうございますー」という店員の声を背中に受けながら、綾香は小さな声で愚痴をこぼした。

綾香が傷心のうちに帰宅した時、玄関の鍵は閉まっていた。スキヤンダル対策のため、わざと鍵を閉め、灯りを消していることがあるため、まだ薄らと期待に胸を寄せていた。

「真一？」

真っ暗なりビングをキョロキョロと見回しながら呼びかける。やはり返事はない。綾香は溜息を吐き、ようやく真一がまだ帰っていないということを認めた。

リビングの灯りを点ける。だて眼鏡をはずし、テーブルの上に置く。洗面所へ向かい、その勢いで汗ばんだTシャツとジーンズ、下着までもを洗濯機に脱ぎ捨てる。

シャワーを浴び終え、ランニングシャツとパンティのみというフアンには見せられない姿で浴室を出た時、時刻はまだ十時前であった。明日の仕事は昼過ぎから。まだ眠るには早すぎる。

無音状態を寂しく感じ、テレビの電源を入れる。すると、自身も出演したことがある『カビリオン・ザ・パーティ』が放送されていた。ゲストのうちの一人が松尾和葉であることに気がつき、綾香は「おっ？」と呟いた。いつものように、胸もとが広く開いたシャツを着ている。日に焼けやすいのか、前に見た時より肌が色黒く感じ

る。冬よりも色つばく見え、彼女は夏が本領なのかなと思った。

そういえば和葉ちゃん。ちゃんと電話できたとかいな。

和葉に橘川夢多の携帯番号を教えた時、彼女から『ありがとうございました。このご恩は一生忘れません』という返信があった。それに対し綾香は『来月新曲が出るけん、買ってね。なんちゃって』と冗談めかした宣伝を行ったが、彼女は買ってくれただろうか。

屈託のない表情で笑うテレビの中の和葉。カビリオンズ野田誠に男の影を指摘され、必死にごまかしている。『イツツ・パフォーマンス』の歌詞の一節、『テレビの中では私はアイドルなもの』という言葉が思い浮かんだ。

がんばりーね。和葉ちゃん。

綾香は心の中で和葉にエールを送った。

十時になり『カビリオン・ザ・パーティ』の放送が終了したのを機に、綾香は早くもテレビの電源を消した。身体のうちらこちらに疲労がたまっており、そういえば先ほどからあくびも連発している。今日のところはもう眠ってしまおうと思った。

リビングの灯りも消し、寝室の布団の上へ仰向けになった。隣には無人の真一の布団。そちらに向かって「おやすみ」と呟きながら綾香はそっと目を閉じた。

その時だ。足の下でガラツと不自然な音が聞こえた。ハツと目を開き、むくりと上半身を起こす。綾香は我が目を疑った。先ほどは確かに閉じていたはずの押入れが開いており、中から何者かがはいずり出ようとしているではないか。

終わったと綾香は思った。自分が留守にしている間に何者かが部屋に侵入していたのだ。これから自らに降りかかる災難を想像したが、意外にも心は冷静であった。おそらく恐怖よりも諦めが打ち勝ってしまったのだ。

「よお、遅かったな」

やがて、立ち上がった侵入者が綾香に気安く声をかける。その聞き覚えのある声と見覚えのある金髪が、ある男と一致した瞬間、綾香は再びパタツと寝転んだ。

男の手によつて寢室の灯りが点される。

「今、何時だ？」

ボリボリと頭をかきながら真一は言った。眠っていたのか、その顔は随分と寝ぼけて見える。電灯の眩しさに目を細めながら「十時」と素っ気なく答える綾香。「うわー、三時間も経つてやがる。お前が遅すぎるせいで寝ちまつたじゃねえか」

「帰ってくるんなら連絡すりゃいいやんか」

綾香はうんざりとしたようにまた身体を起こした。「それなら寄り道せんで帰ってきたとに」

それでも九時にはなつていただろうが。

「だから、驚かせようとしたんだつてば」

自分の布団の上に腰を下ろす真一。「まったく、ノリが悪い女だぜ」理不尽な叱咤を受け、キツと真一を睨みつける。それからふうと溜息を吐き、「お父さん、大丈夫やったと？」と尋ねた。

「大丈夫も何も、俺が帰つたその翌日にはもう退院しやがつてさ」真一は苦笑した。「もうお前の手を借りる必要はないから帰れ」だどよ。でも、なんとなくいてほしそつだつたから、しばらく滞在してやつたんだ」

「もう、心配したつちやけんね」

唇を尖らせ綾香はまたもや横になった。今度は真一に背中を向けている。

「なんだよー」

綾香の耳元で真一は甘えたような声を発した。「親父の容態はたいたことないつて電話で言つただろー？ せつかく帰つてきたんだから、もうちょっとかまえよー」

「知らんもん」

そつ言いながらも綾香はすつきりとした気分になっていた。真一

が戻ってきて、ようやくここ数日彼女を苦しめていた不安から解放されたような気がした。

心配したっちゃけんね。

心の中でもう一度呟いた。

## 50 あなたの前では

羽山美穂はずらりと並ぶ参考書の背表紙を眺めていた。しかし、数秒後にその時見た本のタイトルを挙げると言われれば、きっと一冊すらも挙げることはできないだろう。なぜなら、彼女の意識は参考書などではなく、先ほどからずっと周囲の客に注がれているからである。

例の駅前の書店に彼女はいた。先日電話にて、待ち合わせの時間も場所もこちらが決めていいと橘川夢多が言ってくれたため、美穂は夏休みに入って最初の休日である本日の午後二時という時間と橘川と初めて出会ったこの書店の参考書コーナーという場所を指定した。

参考書を眺めるのには二つの理由がある。一つは自分が秀英大学入学を目指す受験生であるという設定を裏付けるため。もう一つは橘川を心待ちにしている自分を隠すため。いずれも橘川がやってきた時のことを想定している。

美穂は精一杯のおめかしをしていた。プライベートでは滅多にしない化粧をし、服装もテレビで松尾和葉が着るような露出の多いキヤミソールだ。本当なら髪をアップにして後ろで束ね、眼鏡もはずしてしまいたい、それはさすがにまずい。どこからどう見ても松尾和葉になってしまう。

有線が綾川チロリの『イツツ・パフォーマンス』を流し始め、思わず意識をそちらへ傾けた。恩返しというわけではないが、一応美穂もCDは購入していた。

美穂はこの曲を気に入っていた。歌詞を聴いているとなんだか自分のことを歌われているような錯覚を覚える。テレビの中ではアイドルの自分を演じるが、好きな人の前では素の自分に戻ってしまう。まさしく自分のことではないかと思った。

いや、とあえて否定する。この曲のように好きな人の前で素のまま

まの自分でいられるか、松尾和葉ではなく羽山美穂のままでいられるかはまだ分からない。これからその答えがはっきりとするのだ。

『橘川さんの前ではプライベートの、素のままの和葉ちゃんできていいんだからね』

いつかの菊田つばきの言葉が脳裏を過ぎった。つばきやチロリが背中を押してくれている。昨夜、電話で河内那美も励ましてくれた。私、頑張るから。橘川さんに気持ちを伝えるんだ。

心の中で彼女たちに力強く宣言し、美穂はひたすら橘川を待った。約束の二時まであと五分に迫っていた。

目の端でこちらへ走り寄ってくる男の姿をとらえた時、平静を装おうとしながらも激しい動悸を抑えつけることはできなかった。男がこちらへ近づく足音とその動悸の高まりが比例する。身体中を駆け抜ける熱と闘いながら、永遠のような時間を美穂は必死に耐えた。背後で足音が止まる。やや躊躇したのか、しばしの間を置いた後で「美穂ちゃん？」と彼に呼びかけられた。

美穂は振り向いた。そして目の前に立つ橘川夢多の姿を確認した瞬間、胸の奥で大きな衝撃音が響いた。それはあつという間に足の先まで伝わり、思わずひざを震わせてしまいそうになった。

橘川さん、本当に橘川さんだ。

一年近い月日の中で、彼の顔を忘れかけていたことを初めて自覚した。そして今、はっきりと思い出した。そうだ。こんな顔をしていた。

あの時と同じグリーンの野球帽をかぶり、その下は貧相ながらそれでいて優しそうな笑顔。今回は無精ひげを生やしていたが、今回は綺麗に剃っている。

「お、お久しぶりです」

心配したが、なんとか声は出てくれた。「今日はわざわざすみません」



「いや、全然」

橘川は首を振った。「ごめんね。待たせちゃったかな」

「いえ、今来たところですよ」

美穂は意識的に笑顔を作った。しかし、その笑顔がぎこちなくなつてしまったことをすぐに自覚する。その時『イツツ・パフォーマンス』のワンフレーズが思い浮かんだ。

『あなたの前では私に戻っちゃおう』。

美穂の顔を見つめながら「なんか、今日ヤバくない？」と眉をひそめて橘川は尋ねた。「え？」と目をパチパチさせる美穂。

「いや、なんか前に比べてテレビのままっていうか」

言い訳するような口調で橘川は説明する。「大丈夫かな。俺と二人で会っちゃって」

なんだそんなことかと美穂は安心した。実は『ヤバくない？』と聞かれた瞬間、化粧が濃すぎてヤバいという意味だと取り違えた。

橘川はなんとなく薄化粧の女性を好みそうなので、いきなり嫌われってしまったのではないかと不安になったのだ。考えてみれば分かります。橘川は女性に面と向かつてそんなことを言う男ではないだろうし、そもそも別に化粧は濃くない。

「大丈夫ですよ」

そう言いながら辺りにチラチラと目を配ると、橘川も同様の仕草を見せた。「堂々としてればスキャンダルになんてなりません。私と橘川さんは別にやましい関係ではありませんから」

「そうだね」

自分に言い聞かせるように橘川は頷いた。美穂はまた不安になる。なんだか彼自身もスキャンダルになったら困るといった様子に見えるのだ。

私と噂になったら困るの？ 私のことが嫌い？

グツと目をつむり、ダメだダメだとその考えを撤去した。相手の

ことが嫌いでなくとも、アイドルのスクランダル相手にされるのは誰だって困るだろう。

ひよっとしたら今日はまともな会話を一つもできないんじゃないだろうかと想像し、美穂は苦笑した。

書店でしばらく立ち話をし、美穂はなんとか落ち着きを取り戻していった。それは羽山美穂からだんだんと松尾和葉へ変わっていくことを意味するが、とりあえず今はそれでいいだろう。後々、また美穂に戻らなければならぬ。羽山美穂の気持ちをすべて彼に伝えなければならぬのだ。

橘川の薦める参考書を一冊購入し、二人は並んで店を出た。容赦ない陽光が頭上から降り注ぎ、美穂は額に手をかざした。

「かぶる？」

橘川が唐突に言った。「え？」と彼を振り向くと、彼は頭に人差し指を突き立てていた。つまり、自分がかぶっている野球帽を貸そうかという意味らしい。「これなら、顔も隠れて一石二鳥じゃない？」

そんなことしたら橘川さんが眩しくなっちゃうじゃん。

美穂は橘川の優しさをしみじみと感じた。そして「かぶります」とその優しさに甘えることにした。

野球帽を受け取りながら、そろそろと橘川の顔を見つめる。帽子をかぶっていない彼を見るのは初めてだ。髪型はいたって普通の短髪で、とても誠実そうに見えた。いや、もはや彼を嫌う材料などどこにもないのだ。たとえあったとしても、美穂自身がそれをどこかに隠してしまうに違いなかった。痴漢の前科があっても許してしまうかもしれない。

「似合いますか？」

帽子をかぶり、美穂は尋ねた。両腕を背中にしまい足を交差させる。橘川は「ハハ」と苦笑した。

「和葉ちゃんはなんでも似合いそうだけど、そのキャミソールと野球帽はちよつと合わな……」

「美穂です」

橘川の言葉をさえぎり、美穂ははっきりと言った。「え？」と顔をキョトンとさせる橘川。「和葉じゃなくて、美穂って呼んでください」

「あ、ああ」

橘川はしまったという表情を見せた。それからそわそわと周囲を見回す。「ごめんごめん。芸名のほうで呼んだらまずいよね」

「はい」と美穂は笑顔で頷いた。

芸名で呼んだらまずい。もちろん、彼女にとってそんなことはどうでもよかった。

着ているキャミソールに合わないという感想は一応受けとめられたが、結局野球帽は橘川の頭に帰ってきた。はつきりいつてホツとした。どうも帽子をかぶっていないと落ち着かない性分なのだ。今まで美穂の前で帽子を脱いだことはなかったため、ひよっとしたら彼女はそのことを察してくれたのかもしれない。

美穂に連れられるがまま近くの喫茶店に入り、二人がけのテーブルに向かい合ってから、やはり橘川は帽子を脱がなかった。

店内に客は少なかった。大通りを折れた先の小さな路地に面した入り口はどう考えても目立っているとは言い難かったし、窓もなければ扉も不透明な木製のものという客を選びそうな閉鎖的な雰囲気もその一因ではないだろうか。美穂は敢えて客の少なそうな店を選んだのだろう。

美穂が紅茶とショートケーキを注文する。橘川はコーヒーを注文した。

「暑かったですね」

ズボンのポケットからレモン色のハンカチを取り出し、額の汗を拭う美穂。「なんか、今年は去年以上に暑くなりそう」

「そうだね」

橘川も汗をかいていたが、放置することにした。クーラーがじきに乾かしてくれるだろう。「よく見たら、美穂ちゃんもけっこう日焼けしてるね」

大胆に露出した美穂の首まわりを眺める。よく見たらと言ったものの、書店で彼女を見つけて以来、彼女の小麦色の肌がずっと眩しかった。

「そんなに見つめないでください」

冗談めかした笑みを浮かべながら、胸の前で腕を交差させる美穂。おっと、と橘川は視線を逸らした。「夏前に日焼けサロンへ行った

んです。夏は黒くて冬は白いつてというのが私の持ち味なんですよ。アイドルとしてのという意味だろう。

「そ、そうなんだ」

八八と笑いながら橘川は頭の中で三人の少女を照らし合わせていた。

昨年初めて出会った時のクールな少女。世間がよく知るドジでおつちよこちよいな少女。今日はその中間といった感じか。昨年よりは明るい、テレビよりは落ち着いている。思えば、こないだ電話をかけてきた時の彼女もそうだった。

いったい、どれが本当の羽山美穂なんだろうなと彼は思った。

「その大講堂つてのがすごいんだよ」

前のめりになって秀大の魅力について力説する橘川。「日本最大規模の学内ホールでさ。なんと三千人近くも収容できちゃうの」

「すごい、本当ですかー？」

美穂は瞳を輝かせた、ように見えた。「うわー。入学できたらいいなー」

独り言のようにそう呟いてから、ハムツとケーキを口に入れる。次に紅茶を啜って喉を潤し、「ところで橘川さんはもう就職決まっただんですか？」と尋ねる。自分が四年生だということは先ほど告げただけだ。

「ううん、内定はまだなんだ」

かぶりを振りながら、妙だなと橘川は思う。彼女は電話で秀大のことを聞きたいと言っていたはずだ。しかし、彼女のお望みどおりに橘川が秀大の話をし始めても、今みたいにくすぐ別の話題へ移行させられてしまう。そしてその話題は主に橘川のことについてだ。なんだか、秀大よりも自分に興味があるといったふうに見える。

橘川は自嘲気味に笑った。

そんなわけないか。相手は天下の松尾和葉だぞ。

秀大の話ばかりさせては失礼だと彼女が気を遣ってくれているのかもしれない。それならこちららも美穂について色々と尋ねてみようか。

「美穂ちゃんはなんでアイドルになろうって思ったの？」

突然自分のことを尋ねられ驚いたのか、美穂は「え？」と口を小さく開けた。

「なんでかな」

視線を中に漂わせ、「うーん」と唸りながら考え込む。「スカウトされた時はただ楽しそうだなって思いました」

「へー」と橘川は相槌を打つ。美穂は続ける。「実際やってみると、楽しいってだけでは済まない仕事だっていうことが分かったんですけど、でも、すごくやりがいのある仕事だなと思いました」

そうだろうなと橘川は頷く。彼は歌番組でステージを駆け回りながら『イツツ・パフォーマンス』を熱唱する綾川チロリを連想した。「美穂ちゃんをスカウトした人ってすごく見る目があると思う」

橘川のその言葉に、美穂はまた「え？」と目を丸めた。橘川は少々抵抗を感じながらも続けた。「いや、だって、めっちゃめっちゃ輝いて見えるもん。ルックスがどうかじゃなくてさ。本当に美穂ちゃんはアイドルが天職なんだなって気がする」

何気なく口をついて出た言葉ではあったものの嘘ではなかった。前回はそれほど意識しなかったが、今日久しぶりに顔を合わせてみて彼女が本当に魅力的な娘なんだと痛感させられた。眼鏡の向こうの黒目がちの瞳や、薄く紅潮した頬、小さな鼻と口。目線を下にならずにしても、日に焼けた瑞々しい肌、おどけない顔立ちと似つかわしくない大きな胸の膨らみ。彼女を形成するすべてのパーツが一級品に思えた。レストランなら五つ星。サッカー選手ならバロンドールか。前回とは違い、彼女がテレビの中の松尾和葉に近い格好をしているからかもしれない。

「私がアイドルだって先入観があるんじゃないですか」

美穂が頬を緩めながら言った。「そうかも」と橘川は返したが、

それだけではないという確信もある。「でも、嬉しいです。ありがとうございます」

美穂は満面の笑みを見せた。なんとなく、彼女こそが本物の羽山美穂なんだろうなと思った。

「コーヒーを飲み終え、橘川は頬づえをつきながら考えていた。

それにしても、何の因果で自分はこの娘と知り合ったのだろう。

自分には大田早苗という恋人もいるし、綾川チロリという大好きなアイドルもいる。自分が彼女と知り合いになっても意味がないではないか。世の中には彼女のことを好きな男がごまんといえるのに。そう、藤岡茂などもそうだ。なんだか、とても不公平な気がする。

「美穂ちゃん、彼は彼氏か？」

思わず口にして橘川はハツとした。アイドルになんてことを訊いているのだろう。しかし、その質問の受け答えには慣れているのか、美穂は平然と「いません」と首を振った。

「ファン向けの回答じゃありませんよ」

美穂はフフと上品に笑った。「男の子とは縁がなくて、本当にいないんです」

「そうなんだ」

本当か嘘かは判断しかねたが、特に興味がなかったので追求しない。

「橘川さんは」

美穂はそこまで言って少しだけ間を開けた。「彼女はいらっしやるんですか？」

「ああ」

当然そうくるよなと橘川は思う。これぞ自然な流れだ。照れはあったものの正直に答えることとする。「うん。こう見えても一応いるんだ」

「そ……」

一瞬、美穂が言葉を詰まらせたように感じられたが。「そんな  
ですか。いいなー、羨ましいなー」  
すぐにニコツと笑みを浮かべ、しみじみと言った。しかし、橘川  
の心は大きく揺らいだ。

なぜだろう。彼女のその笑顔はテレビの中の松尾和葉の笑顔にし  
か見えなかった。



## 52 夏の真ん中で

まるでスイッチが切り替わったようだった。橘川に彼女がいるという事実を知った瞬間、美穂は一瞬のうちに松尾和葉に変身した。もし、そうしなかつたら感情が暴れだしてしまいそうだった。人目もはばからず、大声で泣き喚いてしまいそうだった。ただ、それが悪いことなのかどうかは判断がつかなかった。

それから先の会話は覚えていない。気がつけば一人、公園のベンチにぼうつと座っていた。そこがどこだかすぐには思い出せなかつたが、しばらく風景を眺めていると、自宅のマンションのすぐ裏にある小さな公園だということに気がついた。公園内には他に、犬を連れた中年女性の姿しかなかった。ベンチは木陰になっており、涼しくもあり、冷たくもあつた。

馬鹿だよなあ、私。

橘川との華々しい未来を想像してはしゃいでいた昨日までの自分を思い起こし、美穂は自虐的に微笑んだ。

橘川には恋人などいないと思いつ込んでいた。いや、必死に思い込ませていた。そうしないと、いつまで経つても恋に踏み出す勇氣など湧いてこないと思つた。しかし、今ではそれも間違いだつたような気がしてきた。

恋に破れることがこんなに辛いことだとは思わなかつた。始めから恋なんてしなれば良かった。それなら、こんなに傷つかなくて済んだのに。

美穂の頬を涙が伝つた。そのことを自覚し、すぐさまハンカチで目もとを拭う。それからすべての念を振り払うかのように両手で頬を軽くパンパンと叩く。

後悔なんてしちゃダメだ。橘川さんに恋をしている間、あんなに楽しかつたじゃないか。私はきつと良い恋をした。だから後悔なんてしない。

美穂は必死にパフォーマンスを続けた。自分さえもをごまかす必要があつたからだ。

不意に長岡貴美のことが頭を過ぎつた。橘川の名前を聞いた時の彼女の様子を思い出す。

彼女には悪いことをしたなと美穂は思う。彼女は橘川に恋人がいることを知っていたのだ。美穂の恋は叶わぬ恋だと知っていたが、だからといってあきらめるとも言えない。結果的にすべてを有耶無耶にしてしまふしかなかった。

すごく悩んだらうな。貴美さん。

美穂は思い立ってポケットから携帯電話を取り出した。貴美に今日のことを報告しておこうと思つたのだ。

『フられちゃいました』

この一言で貴美はどこまで読み取るだろう。別のルートで橘川に辿り着いたこと。橘川に彼女がいるということを知つたこと。貴美の嘘に気がついたこと。それでも、貴美を恨んではないということ。

そこまで考えて美穂は携帯を閉じた。やはり、貴美に報告するのはよしておこう。当然向こうは自分に恨まれていると思うだろうから、ひよっとしたら皮肉に聞こえてしまふかもしれない。

その代わりといつてはなんだが河内那美に報告することにした。そもそも、一番に報告しなければならぬのは彼女ではないか。

《もしもし》

コールしてから一、二秒ほどで那美と繋がつた。おそらく、彼女も待っていたのだろう。

「行つてきたよ」

美穂はまずそう告げた。「すごく楽しかった。秀英大学のことがお互いのこととか、色んな話をした」

《そう、良かったね》

素っ気ない言い方である。美穂の報告に肝心な部分が抜けていたからであろう。《それで？ どんな感じ？ その様子じゃ、まだ気持ち伝えてはいないみたいだね》

「うん」

少しだけ間を置く。「もういいんだ。橘川さん、彼女いるんだって」

《え！？》

那美は絶句した。しばらくした後で、彼女は《そう……》とだけ答えた。

「でも、まあスッキリしたよ」

美穂は笑った。「途中であきらめたりしないですら本当に良かった。おかげでキチンとした答えも出たしさ。また新しい恋に踏み出せると思うよ。色々お手伝ってくれてありがとう。感謝してるよ」

《ねえ、美穂》

その声にはたしなめるような響きがあった。《私には強がらなくてもいいんだよ》

「え？」

美穂はギクリとした。「べ、別に強がってないってば。そりゃあ、少しは落ち込んでるけど……。でも、面と向かって嫌いって言われたいわけじゃないし。ただ、橘川さんに彼女がいたってだけのことだし」

《不完全燃焼じゃない？》

言葉を失くしてしまう美穂。那美の言うとおりだと思った。自分はまだ何も吐き出していない。好きだという気持ちも結局伝えていない。戦う前から勝負に負けてしまった。《いや……》

慌てた様子的那美。《美穂を落ち込ませようとしてるわけじゃないんだよ。元気ならそれが一番良いし。でも、なんとなく無理するように見えたから》

「ううん」

努めて笑顔を作る。「無理なんかしてないよ。私は大丈夫。明日

から仕事が詰まってるし、これぐらい吹っ切らなきゃ」

那美との通話を終え、そのまま自宅へ帰った。シャワーを浴び、汗を洗い流してから部屋着を着て自分の部屋に入る。今日はもうどこへも行く気になれなかった。

ベッドに仰向けになり、橘川夢多という男について考えてみる。これを最後にするつもりでだ。

別段なんでもない男である。特に何かが優れているわけでもない。特に何かが劣っているわけでもない。おまけに自分との関わりはいたって浅い。それなのに一度話をしただけで恋に落ちてしまった自分の心が最も奇妙に思えた。

そうだ。私はきつと恋をしたかったんだな。

そこへ辿り着くと同時に美穂は携帯電話を開いた。

橘川でなくとも良かったのだ。自分でも気がつかないうちに恋に憧れていて、目の前に適当な男が現れたのだ。つまり、恋に恋をしていたということか。それなら、自分が今、さほど辛い気持ちになつていないことも理解できる。

辛い気持ちになつていない……？

なんだか本当のこのような気がした。言い聞かせすぎて感覚がマヒしているのか、シャワーを浴びて頭がスッキリしているからか、とにかくこの調子なら橘川のことも綺麗サッパリ忘れられるかもしれない。

さあ、綺麗サッパリ忘れよう。忘れてしまえば怖いものはなしだ。彼に恋は素敵なものだと教わったのだから、すぐにまた新しい恋が見つかるはずだ。

携帯のメモリーから橘川の名前を呼び出す。そしてそれを削除しようとした。だがいつまで経ってもメモリーを削除した時のピロリンというふぬけたサウンドは響かなかった。

あ、あれ？

携帯の画面になぜかモザイクがかかってしまったのだ。その正体が目に溢れる涙だと知った瞬間、美穂はついに切れた。

「うぐ……、き、橘川さん……。橘川さん」

携帯を握りしめながら美穂は泣いた。震える手を口もとに当て、嗚咽の声を必死にかき消しながら。涙が枯れる気配は全くなかった。その日、いつまでもいつまでも羽山美穂は泣き続けた。

一週間前、八月一日に行われた仙台での握手会は好評のうちに幕を閉じた。始めは本当に人が集まってくれるのか不安だったが、いざ蓋を開けてみると数百人のチロリンファンが会場となったビルに詰めかけてくれた。彼らからたくさんプレゼントや励ましの言葉をもらい、おまけに『イツツ・パフォーマンス』のCDもかなり買ってもらった。

というわけで、本日八月八日の『元』地元福岡での握手会も大盛況が予想され、綾香は開始前からわくわくと胸を躍らせていた。

会場は大手外資系CDショップ『センチユリーレコード』福岡天神店。とあるデパートの五階フロアを丸々占めている。

「楽しみやねえ」

雑然としたスタッフルームのパイプ椅子に腰かけ、近くで購入した手作りおにぎりをむしゃむしゃと食べる池田綾香。握手会開始の午後三時まであとわずかだが、まだ衣装には着替えておらず、キャミソールとジーンズという格好。といっても、衣装もたいして変わりはない。隣には煙草をふかす南吾郎の姿があった。「高校時代の同級生も何人が来てくれるっちゃんねー。わー、夏美元気かなー」

「夏美？ どうかで聞いた名前だな」

南は眉間にしわを寄せた。「ああ、お前に男を寝取られた女か」

「寝取つてない！」

納得したようにうんうんと頷く南に綾香は逆水平チョップを食らわせた。ポキッという鈍い音が響く。「うぐっ」

「ところで、この後お前は佐世保に帰るんだっただな」

手首を押さえてうづくまる綾香の後頭部に南は尋ねた。その状態のまま必死に頷く綾香。「明日も夕方からは東京で仕事なんだから、遅刻すんなよ」

「わ、分かっとなるよ」

息絶え絶えにそう答え、彼女はなんとか顔を上げた。

只今の会話どおり、握手会が終わったらそのまま佐世保へ向かい、実家に一泊する予定だった。そのことを意識すると、少しだけ緊張してしまう。なぜなら、その時両親に井本真一という恋人の存在を打ち明けようと考えていたからだ。次にいつ帰れるかも分からないし、アイドルとしてそれなりの名声を手にした今こそがチャンスだと思った。

真一には了解を取ってあった。父が怒り狂って家まで訪ねてくるかもしれないという話をする、若干眉をひそめていたが、それもしかたがないと彼は言ってくれた。そして、いつか直々に挨拶に行くとも。

「だいぶ集まってるな」

スタツフルーム入り口の扉を少し開け、南が店内を覗いた。それから腕時計に視線を移す。「開始まで二十分か。感心するぜ。どっちにしる整理券の番号順だったのによ」

整理券は参加券を兼ねていた。本日の開店時から早い者勝ちで配布されており、綾香が店に到着した頃には計五百枚をすべて配り終えていた。仙台では若干余りがあったため、今回は仙台以上の盛況を見込むことができる。見込む、というのは整理券を持った五百人が全員来てくれるとは限らないからだ（おかしな話だが）。

「それだけ皆、はやる気持ちを抑えられんってことよ」

おにぎりの最後の一口をパクつと頬張り、「さあ、着替えますか！」と綾香は立ち上がった。それからキョロキョロと辺りを見回す。「あれ？ どこで着替えればいいと？」

「す、すみません」

近くにいた店員の若い男性が申し訳なさそうに言った。「こちらでお願いします」

彼が指差した先はどう見てもトイレだった。

うっ、パフォーマンス。パフォーマンス。

握手を繰り返しながら、綾香は心の中で何度もそう呟いていた。握手会がスタートし、チロリンファンたちが列を作ってから一時間ほどが経過した。百人目を超えたあたりからだろうか。どうも握手する右手がズキズキと痛み始めている。仙台でも同様のことが起こったが、それはもつと終盤になってからだった。間違はなく、先ほどの南へのチョップがたたっている。

「アルバム絶対買います！ 福岡でもライブやってくださいね！」頭にバンダナを巻いた太った青年。彼の着る टीーシャツには『チロリン LOVE』と恥ずかしげもなく書かれていた。そんなグッズはなかったはずなので、おそらく特注である。こういった見るからにアイドルオタクな男性をどちらかというで見下してしまう綾香だが、自分のファンとなると話は別、差し出された手を両手で快く握り締めた。

「ありがとうございますう」

綾香が笑顔でお辞儀をすると、彼は綾香の手をギュツと握り返してきた。思わず叫び出してしまいそうになったがグツとこらえる。

パフォーマンス、パフォーマンス。

また呟きながら、目の前を伸びる行列を眺める。あと何人ぐらいだろうかと気になったが、列の終わりはまったく見えない。溜息を吐きそうになったが、やはりこらえる。

皆、私の笑顔に会いに来たっちゃけんね。くよくよしてられんばいい。

ただ次の瞬間、溜息を吐く代わりに綾香は「ブツ」と吹き出してしまった。行列の中に平然と並ぶ父の姿を見つけたからだだった。

五分ほど経過し、父の番となった。白いポロシャツとジーンズという出で立ちだった。

「なんちゅう格好しとぅとね」

握手をしながら父は言う。「人前でそんなはしたない格好して。

この馬鹿娘が」



本日の衣装はノースリーブのシャツとホットパンツであった。もちろん、ハットもかぶっている。

「いっつもこんな格好しとうやんか」

綾香は唇を尖らせた。なんとなく周りのファンに父の来訪を知られたくなかったため、小声で話す。まあ、その様子の变化から察する者もいるであろうが。「なんで普通に握手会に参加しとうとよ。お母さんもおると?」

「お前が帰ってくるって言うけん、迎えに来てやったついでたい」

父は頬を赤らめた。迎えのほうがついでなのだろう。そもそも、整理券を入手できないではないか。「母さんも来とるけど、ここにはおらん。天神で買い出しするんやと」

「なーんだ」

大好きな母との再会はまだおあずけのようだ。

「それにしてもこないだのテレビでのあれはなんか!」

突然、父の目に怒りが宿った。「あんなことペラペラペラペラくっちやべりよつて!」

長い説教が始まってしまいかけたところで、係員が「時間でーすと父を目の前から押し出した。キョトンとする父。「ナイスアシスト」と綾香はこっそり囁いた。

握手会終了後、会場を一人でスルツと抜け出した綾香は、別のデパートの休憩スペースで両親と落ち合った。父はサングラスを見てまた硬いことを言い、母は右手の包帯を見て心配の言葉をかけた。れた。

「お母さーん」

甘えた声で母にすがりつく綾香。「今日のご飯カレーにしようよ。カレー」

「始めからその予定やって。あんた、カレー好きやけんね」

ニコリと笑う母。父と同じような服装だが、頭には福岡ポークス

の黒い野球帽をかぶっていた。彼女はあたりにチラチラと目を配った。「あんた、サングラスかけとっただけでまったく気づかれんっちゃね」

「私のオーラの無さはギネス級ばい」

綾香はえっへんと胸を張った。そんな娘を置いてけぼりにして両親は歩き出す。「待ってよー」と彼らの後を追う綾香。

彼らの背中を見つめながら考えていた。さて、真一のことはいつ切り出そうかなと。

## 54 今回ばかりは

「着いたばーい」

母にトントンと肩を叩かれ綾香は目を覚ました。父の車の後部座席だ。高速道路からの退屈な景色に見飽きて、いつの間にか眠ってしまったようだ。車から這い出て「うーん」と背伸びをし、それから大きなあくびをした。

両親に続いてガレージを出ると、空は紫色に変わっていた。七時を少し過ぎたあたりだろうか。少々肌寒く感じたため、肩をすくめる。その様子を見て父が「そんな格好しとうけんたい」と吐き捨てた。

母が夕食の支度のため、さっそく台所へ向かう。すでにカレーは作り終えているらしく、あとは暖めるだけらしい。綾香は父と共に茶の間に入った。

八畳の和室空間だ。がらんとしており、テレビとテーブル以外には小さな茶だんすしかない。隣の客間とひと続きになっているが、間をふすまでさえぎられている。

しばらく無言でテレビを見て過ごす。なんとも気まずい時間だ。数分経つと台所からカレーの香りが漂い始めた。くんくんとその香りを楽しんでいた時、不意に父が語りかけてきた。

「いつまで続けるとね」

目を丸めて父の顔を見る。「なにが？」と尋ねると、声を荒げさせ「お前のアイドルとかいう仕事たい！」と返してきた。

「いつまでって言うても」

綾香は眉をひそめた。「そんなん分からんよ。おばあちゃんになつてもまだやつとつかもしれんし」

「どこにおばあちゃんのアイドルがおんね」

父の正論に綾香は「まあ、確かに」と頷くばかりだった。「あんなん、もてはやされつとは若いうちだけばい。あと数年すりゃあ今

日みたいな握手会なんか、誰も来てくれなくなるったい」

握手会の会場で一人ポツンとたたずむ自分を想像し、思わず身震いしてしまった。

「だ、大丈夫やもん」

綾香は精一杯強がってみせた。「私には歌もあるっちゃけん。アイドル歌手から本格派シンガーへ華麗に転向すればいいっちゃん」  
父はふんと鼻を鳴らしたきり何も言い返してはこなかった。そんな時、エプロンをつけた母が「出きたばーい」と廊下から顔を覗かせた。

「あの下品な歌詞はなんね」

ダイニングに移ってから間もなく、父の小言は再開した。スプーンでカレーをすくいながら、ゴニョゴニョと独り言のように呟く。

「職場の仲間からさんざんからかわれて、こちとら恥ばっかかいと  
うとばい」

「おいしーい」

カレーを口に入れ、綾香は目を細めた。「お母さんのカレーって本当においしいねえ。もう私が作ったのなんか食べれんばい」

「あんた、一口目からさっそく口の周り汚しとやん」

苦笑して綾香の口もとを濡れ布巾で拭く母。「ちよっと、そんなもんで拭かんでよ」と綾香は抗議した。二人は父と向かい合い、並んで座っていた。綾香が幼い頃からの定位置だ。

「こないだのあれ、あの不良みたいなお笑い芸人が出とる番組たい」話を途切れ途切れさせながら父は続ける。間にボリボリと福神漬けを噛む音も聞こえる。「お前、クイズに答えられんで泥まみれになつとつたけど、あんな姿を全国に晒して恥ずかしくなかつたか？クイズといえればあれもそうや……」

「今日ねー。夏美と希美と絵理香が来てくれたとよー」

席を立ち、冷蔵庫から牛乳を取り出しながら綾香は言った。「夏

美なんて結婚して子供がおるっちゃけん。いきなり赤ちゃん抱いとつてさー。ビックリしたー」

自分と母の前にコップを並べ、牛乳を注ぎ入れる。

「それなら、前のイベントん時みたいに友達と一緒に遊びたかったっちゃないと？」

「やや心配そつな響きを持った声色で母は言う。綾香は「ううん」とかぶりを振った。

「今日はお母さんと一緒に過ごしたかったっちゃもん」  
座って椅子をひく。「遊んどつたら時間なくなるけんね」

「綾香、俺も」という父の割り込みに、綾香は「はいはい、お父さんとも一緒に過ごしたかったよ」とたしなめるように言った。

「違う！」

ドンとテーブルを叩く父。「俺も牛乳くれって言いよると」

「言いよらんやん……」

ぶつぶつ言いながらも、再び席を立ち父に牛乳を渡してから座り直す。そんな娘の横顔に母が何気ない調子で尋ねた。

「彼氏は元気？」

「うん。元氣ばい」

綾香はニカツと笑顔で答えた。

……。

あれ？

「やつぱりおつたっちゃね」

しかたがないなあといったふうに、母ははあと息を吐いた。彼女に何かを言うとする綾香だったが、口をパカパカと開閉させるのみでなかなか声が出てくれない。

「な、な、なんで知つとうとよ！」

ようやくそんな言葉を口にした。

「インターネットのサイトで噂されとつたったい」

母の代わりに父が答える。ハツと彼に視線を移動させる綾香。「綾川チロリは男と同棲中らしいって」

「イ、インターネット……」

綾香のこまかみをあたりを汗が伝った。そんな噂など聞いたことがなかった。そういえば最近、あまりパソコンに手をつけなくなっ  
てしまっていた。

ネットで噂になっていとなると、両親うんぬんの問題ではない。世間に真一が存在がバレてしまっているということか。いったい、このピンチをどう脱すればいいのか、まるで判断がつかない。

「まあ」

難しい顔をして黙り込んでしまった娘に母が言った。「そんなに気にせんでもいいばい。なんかそうゆう芸能人の噂ばかりを掲載してるサイトやけんさ。あんた以外のアイドルの子もあることないこと色々噂されとっつちゃけん」

それを聞いて安心する綾香。そうか。写真週刊誌などとは訳が違うのだ。そんなネット裏ゴシップサイトの噂など、ほとんどの人間は本気にしないであろう。

「でも、お前の場合は実際におけるっちゃろうもん」

本気にした一部の人間が言う。「親の金で上京しくさって。学校辞めて如何わしい仕事を始めたと思ったら今度は男と同棲か」

綾香は何も言えなかった。今はこれ以上父の機嫌を損ねてしまうわけにはいかない。

どんな罵倒を受けても耐えられるように心の準備をしてから、うつむいて父の次の言葉をじっと待っていた。しかし、その言葉は綾香にとつても意外なものだった。

「さっさとそいつをうちに挨拶に来させんか」

「え？」

綾香は顔を上げた。「つ、連れてきてもいいと？」

「その噂を最初に聞いた時は、お父さんもおかんむりやったとばい」  
今度は父の代わりに母が苦笑して答えた。「でも、私が必死に説

得してあげたと。綾香ももう二十歳になったし、ちゃんと仕事もし  
とうっちゃんけん、恋人ぐらいおつてもよかやないねって」

両親の顔を交互に見る綾香。そして「うん、今度連れてくるけん  
と高らかに宣言した。

なんたる幸運。父の説得という最も難航が予想される作業が省け  
てしまったのだ。本来なら忌み嫌うべきゴシップサイトに今回ばかりは感謝してしまう綾香であった。

「いいな」

大田早苗が口もとをほころばせながら言った。「私も握手会行き  
たいな」。またチロリちゃんに会いたいな」

手触りの良さそうなシルクのブラウスと、肩にかけたシヨルダー  
バッグがミスマッチで、どうしようもなく滑稽に見える。それが彼  
女の良さでもあった。

「合宿があるんだろ」

橘川夢多が苦笑した。目を細めているのは笑っているということ  
もそうだが、朝の陽光が眩しくもあった。「早苗の分まで俺が楽し  
んでやるから、安心して行ってきなよ」

二人は夜勤明けだった。ただいま、並んで早苗宅へ向かっている  
ところだ。午後から学校にちよつとした用事のある橘川は、学校近  
くの早苗の家にそれまでお邪魔させてもらうことにしたのだ。

それと、もう一つ。長岡貴美が昨夜から早苗の家に泊まりこんで  
いるのだという。久々に彼女と会って話をしてみたかつたし、向こ  
うも橘川に会いたがっているそうだ。

「貴美ちゃんは彼氏とかいないのかな」

橘川が独り言のように何気なく言った。早苗は「どうだろ」と首  
を傾げた。

「あの娘はよく分かんないからな」。聞いてみたいけど、貴美を前  
にするとあら不思議、そんな気もなくなっちゃうの。聞けないんじ  
やなくて、どうしてもよくなっちゃうの」

「へえ」

羽山美穂が『貴美は独特過ぎる』というようにことを言っていた  
のを思い出した。そして、それが貴美の良さであるということも橘  
川は理解していた。

羽山美穂という名前に動揺を覚える。いや、動揺というほどのも



のでもないかもしれない。ちょっとした心のせせらぎか。早苗によると、貴美が橘川に会いたいと言いつ出したのは、先日橘川が美穂と二人で会ったという話をしてからだという。もちろん、単に共通の友人の話をしたいと思ったただけなのかもしれないが、貴美はそんな『タマ』であつただろうか。ひよつとしたら和葉と会うのはいけないことだったのかと橘川は心配していたのだ。しつこいようだが、せせらぎ程度のものである。

早苗の部屋は二階にあつた。二つのみの向かい合つた扉のうち片方のドアノブを握る早苗。橘川はもう何度かここを訪れていた。

「ただいま」

早苗はそう挨拶しながら玄関のドアを開けた。貴美はすでに起きているらしく、鍵はかかつていなかったが、中から返事は聞こえてこない。二人が玄関を上がり、六畳の洋室に入ってから、ようやく隣り合うキッチンに立つ貴美が「おかえり」と返事をした。とぼしい声のポリリュームを自覚していたのだろう。

「はい、橘川さん」

まるで初顔を引き合わせるように自分の恋人を紹介する早苗。貴美は「お久しぶりです」と丁寧に頭を下げた。それに合わせ、橘川もお辞儀しながら「お久しぶりです」となぜか敬語で返してしまつた。

貴美は半袖のパジャマを着ていた。確かそれは早苗のものだつたはずだが、まるで長年使い古したもののように似合つていた。髪型や、かもし出す雰囲気など、貴美の印象は以前会つた時と全く変わつていない。おそらく、彼女は子供の頃から変わつていないんだろうなと橘川は勝手に想像した。

「ご飯にする？ それともお風呂？」

貴美が早苗に真顔で言つた。それを真顔で言つという選択肢が彼女にはある。早苗は「じゃあ、お風呂！」と元気良く答え、一人で

さっさと浴室へ入ってしまった。その選択もすごいと思う。

1Kの小さな部屋だ。洋室にはベッドにテーブル、コンポ、テレビ、ソファなどが所狭しと置かれているが、綺麗に整頓されているため、そこまでゴチャゴチャとしては見えない。キッチンも物は多いがよく片付いている。

「なに作ってるの？」

貴美がおたまを使ってかき混ぜている鍋の中を覗いてみた。どうやら味噌汁のようだ。「おお、美味そうだね」

「橘川さんも召し上がってください」

顔を向けずに貴美は言った。「早苗が上がってからでもいいですか」と付け加える。「うん」と頷く橘川。

それから貴美は出し抜けに洋室まで歩き、ソファに腰かけた。橘川は少々戸惑った。テーブルの上に文庫本が置いてあり、それに手を伸ばすのかなと予想したが、そういうわけでもなく、ただじっと前を向いていたからだ。

何か話を始めなければならぬ雰囲気だ。貴美は黙っているのだから。今彼女との間で交わされる話題は一つしかない。また心に小さなせせらぎが立つ。

「弟さん、松尾和葉ちゃんと同級生なんだってね」

橘川は決心し、貴美のもとまで歩いてから言った。「松尾和葉ちゃん」と呼んだのはひよつとしたら貴美が和葉の本名を知らないかもしれないという思いからだ。

彼女の隣も空いていたが、彼女と向かい合う形でベッドに腰かけることとする。

「ビックリしたよ。家もすぐ近くだって言っし、本当に世間は狭いもんだなって。俺も近くに住んでるんだよ」

「ややあつて貴美は口を開いた。

「色々なことを話したんですね」

橘川を見ず、テーブルの上に目を向けている。うつむいていると、  
いうのが正しい。「一つだけ聞きたいんですけど」

そこで彼女は顔を上げた。なんとなく重いトーンだったので、橘  
川は思わず身構えた。

「うん。なに？」

「橘川さんが早苗と付き合ってるってこと、美穂ちゃんは知ってる  
んですか？」

ああ、やっぱり知ってたかと橘川は思った。無論、和葉の本名の  
ことである。そんなことを考えてしまったため、肝心の質問の内容  
に何の違和感も抱かず、答えてしまった。

「もちろん、早苗のことなんて知らないだろうけど、一応、俺に彼  
女がいるって話はしたよ」

そう言ってからようやく橘川は不思議に感じた。自分と早苗が付  
き合っているということを美穂が知っているかどうか。なぜそんな  
ことを聞くんだ。しかも重いトーンで。

「そうですか」

そう返した貴美の表情もやはり曇っていた。橘川はいつたいていどう  
ゆうことなのかと尋ねようとしたが、すぐにその必要はなくなっ  
てしまった。

直感してしまったのだ。貴美の顔色を窺っているうちに。自  
らの顔もみるみるうちに青ざめていくのを自覚する。

先日の美穂や目の前にいる貴美の様子からだけでは、その答えに  
辿り着くことはできなかったはずだ。おそらく前例があったからで  
あろう。そう、大田早苗という前例が。

しかし、それは簡単に信じられる話ではない。相手はあの松尾和  
葉なのだ。こうゆう言い方もなんだが早苗とは別次元の存在だ。世  
間の男の誰もが憧れ、誰もがその途方もない距離に涙する、松尾和  
葉なんだぞ。

「美穂ちゃん」

貴美はうつむいたまま搾り出すように言った。「橘川さんのこと

が好きなんです」

橘川は何も答えなかった。その脳裏には橘川に彼女がいると知った時の、美穂の作り笑いのような奇妙な笑顔が浮かんでいた。

## 56 取り残された人

どこからか聞こえてくるセミの鳴き声と焼けるような陽射しの中、羽山美穂は自宅マンションの前でキョロキョロと左右を見回しながらたたずんでいた。日除けのため珍しくハットをかぶり、いつものように変装用の眼鏡をかけている。ブカブカの白いティーシャツの脇の下の部分に早くも汗が滲んでいる感触がある。

左右へ伸びる道はそれほど大きな通りではなく車の行き来も少ない。約束の時間、午前十時はとうに過ぎていたが、マネージャーの仲田の見慣れた白い軽自動車走ってくる気配はない。

美穂はチエツと舌を鳴らした。昨夜夜更かししてしまい今日は少し寝坊気味だったため、シャワーだけ浴び、朝食も食べずに慌てて下りてきたのだ。こんなことなら食べてくればよかつたなと後悔する。

ハンドバッグから携帯電話を取り出す。昨日から入れっ放しにしていたため、メールをチエツしていなかった。ひよっとしたら何か連絡が入っているかもしれない。

え？

美穂の心がざわついた。意外な人物からメールが届いていたのだ。貴美さん……。

そう、長岡貴美からだった。彼女からの連絡が途絶えて二ヶ月ほどが経過している。彼女が今更なぜ。

少なくともその起点には心当たりがあった。この二ヶ月で変わったことといえば、美穂が橘川夢多とついに再会を果たしたことだ。そのことを誰かから、橘川本人からかもしれないが、聞いたに違いない。ただ、メールそのものの内容については想像がつかなかった。

同時に美穂は自らの勘違いにも気づく。仲田がメールを寄越してくるのは常にビジネス用の携帯だ。今見ているのはプライベート用。しかし、今は仲田のことより貴美のほうに気がなってきたがたがない。

受信時間は午前九時四十五分とある。その頃は確かシャワーを浴びていたはずだ。美穂は一度深呼吸をし、眼鏡のブリッジを持ち上げてから、貴美よりのメールを開いた。

『ごめんね』とメールにはその一言だけが綴られていた。

ゴクンとつばを飲み込む。額を伝う汗が冷え冷えとする。美穂は目をつむり、心を落ち着かせようとしたり。その時だった。

目の前に仲田の軽自動車が停まった。

「十五分遅れるってメールしたじゃん」

運転をしながら仲田は眼鏡の奥の目を細めた。それは直接ではなくフロントミラー越しの笑顔だ。後部座席に座る美穂は「はあ」と気の抜けた返事をした。「悪かったってば。『入り』までちょっと時間あるから、なんか食べる？」

また「はあ」と答える。美穂は貴美のメールのことで頭がいっぱいだった。

『ごめんね』というのは、もちろん美穂に橋川を紹介しなかったことに対してだろう。となると、美穂が恋破れたことも知っているわけだ。やはり、彼女は自分が恨まれていると思っっている。

美穂は胸を痛めた。貴美のことを恨んでなどいないのだ。むしろ、あんなに残酷な相談をしてしまったって罪悪感さえ覚えている。

そのことを伝えることにした。仲田の話に相槌を打ちながら文字を打ち込み、メールを送信する。『謝らなくてもいいんですよ。こちらこそ、貴美さんの気持ちをちっとも考えないで、あんな相談をしてしまったってごめんなさい。私はもう立ち直りましたから大丈夫です。これからも大切な友達でいてくださいね』

私はもう立ち直りました、か……。

それは嘘だともいえなかった。あの日、長い長い迷路のような恋が破れた日、一晩泣きとおしたことでだいぶ楽になった。仕事もきちんとなしてこれた。最近では橋川のことを思い出す回数も減っ

てきた。そう、だんだんと恋は思い出に変わりつつあったのだ。

『はあ』という美穂の返事はイエスととられたらしい。仲田は大きめのファーストフード店のドライブスルーで、美穂の分だけ食料を購入した。

「まどかちゃん、破局だってね」

残念そうに仲田は言った。「やっぱ騒ぎになっちゃったから、付き合いくくなくなったのかな」

「そうかもしれませぬ」

もぐもぐとハンバーガーを頬張りながら、しみじみとした調子で美穂は返した。そのニュースは、昨夜インターネットのニューストピックスで知った。美穂ともそれなりに親しいアイドルの沢渡まどかが、歌手のストレイ渚と破局したというのだ。二人の交際は昨年未だ写真週刊誌により報じられていた。

「美穂ちゃんもスキャンダルには気をつけないとね」

仲田のその言葉に美穂は「相手がいませんから」と平然と答えた。彼女はカマをかけているのだ。大事な商品に悪い虫がついていないか。ここで動揺を見せるわけにはいかなかった。

携帯の着信音が鳴った。フロントミラー越しの仲田の視線を気にしながら、再び携帯を開く。予想どおり、貴美からのメールの返信である。

メールを開き、本文をひとつおり読み終えた瞬間、目の奥が熱くなるのを感じた。

『あの時、先に別の友達から橘川さんのことが好きだって相談を受けて、どうしても彼女を裏切るわけにはいかなかったんだ。結果的にその子の恋だけが叶ってしまって、ずっと美穂ちゃんに謝らなきゃって思ってた。本当にゴメンなさい』

な、なにそれ……。

呼吸が乱れ、頬を汗が伝う。美穂は今までずっと、橘川は前々か

ら彼女がいたのだと思い込んでいた。しかし、実際は貴美に相談するより後のことだったのだ。その事実が胸を八方から締めつけていく。

「どうしたの？」

仲田のカマかけに「はあ」と答える。きつと不審に思われるであろうが、気にしてはいられない。

なんでなんでなんで？ 私のこと大事な友達って言ってくれたじゃない。それなのに、私よりその友達を優先させたわけ？ もしあの時、すぐに橘川さんを紹介してくれたら、私は……。

違う、と美穂はその考えを胸の奥へと押しやった。貴美を責めるわけにはいかない。付き合いの短い友達より、付き合いの長い友達を優先させただけのこと。悪いのはおそらく自分自身なのだ。

そうだ。あの時がすべてだったんだ。

美穂は両手で顔を覆った。橘川と初めて出会ったあの日。彼の連絡先を聞き忘れた自分こそがすべての元凶なのだと言い聞かせる。

「どうしたの？ 和葉ちゃん？」

でも、なぜ連絡先を聞かなかつたのだろうかと考える。確か、橘川が何か用事があるから帰ると言い出したのだ。その用事は……。

綾川、チロリ。

綾川チロリの出演するテレビ番組があるから。そんなくだらない用事だった。そんなことで自分の初恋は絶たれてしまったのだ。

ダメだダメだダメだ！ 橘川さんもチロリさんも恨んじやダメだ！

しかし、彼女がいると言った時の橘川、そして彼氏に誕生日プレゼントを贈ると言った時のチロリの幸せそうな顔を思い出すと、どうしようもない憎しみが胸の内からこみ上げてくる。彼らだけが幸せになって、なぜ自分はこんなに辛い目に会わなくちゃならないんだ。

ぶち壊したい……。

彼らの幸せをぶち壊してやりたいと美穂は思った。そしてハツとする。その一つを実現することができる材料を持っているのだとい



うことに気がついた。  
気がついてしまったのだ。

さて、どうしたもんかな。

井本真一はパソコンのディスプレイと向かい合っていた。そこに映るのは、彼と彼の恋人である池田綾香がキスをしている画像だ。真一はキスをしながら綾香を真っ直ぐに見つめており、綾香は目線をカメラ、すなわちこちらへ向けている。元は携帯カメラの画像であり、それを拡大しているため、画質は少々粗い。それでも知っている者なら、安易に二人の顔を判別してしまうだろう。

真一はいつこの写真を撮影したか覚えていなかった。おそらく付き合い始めて間もない頃だろう。綾香のパーマをかけた明るい茶色の長髪は、その当時のものだ。

真一はソファに腰かける現在の黒い髪の綾香の様子を垣間見た。口を真一文字に結び、ホットパンツから伸びた白い足を雑に組んでいる。彼女は先ほどからずっと誰かに電話をかけようと試みているようだが、なかなか繋がってくれないらしい。マネージャーかなと思っただが、尋ねてみると違うらしい。そして誰なのかも教えてくれない。

「もう！」

癩癩を起こしたように携帯電話を床に叩きつける綾香。その騒音が階下に響いてしまったに違いない。

真一は再びディスプレイに顔を向け、ふうと溜息を吐いた。いつ頃からか、そして発信源は定かではないが、このキス画像がネット上に流出してしまった。真一も綾香も全く気がつかないうちに、匿名掲示板などのコミュニティサイトで爆発的に広まってしまい、今日になって真一が管理運営する綾川チロリ非公式ファンサイト『チロリンルーム』にまで画像が貼られることとなった。

先ほど、真一がこのことを綾香に伝えた時の彼女のうるたえぶりは尋常ではなかった。何やら叫びながら部屋中を歩き回ったり、頭

を抱えてソファに倒れ込んだり。真一の所持するDVDを壁に投げつけた時は、さすがに彼女を非難した。

もちろん、彼女の気持ちも分からないでもない。明日にはツアーを締めくくる秋葉原での握手会、来週八月三十一日には渋谷の『渋谷スパイシーローズ』にて初のコンサートを開催している。そんな順風満帆な彼女を襲った予期せぬスキャンダル。彼女が取り乱してしまうのも無理はないと思う。

「元はといえば、お前がこんな写真を人に送るのが悪いんだろ」

真一はディスプレイに顔を向けたまま言った。「自分でまいた種だと思つてあきらめろ。もうどうにもならねえんだからよ」

落ち着いた声色だが、それは綾香を落ち着かせるためのもの。彼にも動揺がないわけでは決してない。

綾香は何も答えなかった。頭を抱えて、うな垂れているばかりだ。真一は何気なく自分の手元を見た。そこに先ほど綾香が壁に投げつけた松尾和葉のDVDがあった。パッケージに映る水着姿の和葉を眺めながら、「さて、どうしたもんかな」ともう一度呟いた。

八月も下旬に差しかかったある日。時刻は午前十時前だ。奇しくもこの日は二人とも休日で、午後からどこかへ遊びに行こうと話をしてた。

「どつすりゃいいつちやる……」

綾香は遠い目をして、独り言のように呟いた。「ファンの皆は私に裏切られたつて思うとかいな。握手会やコンサートにも来てくれんつちやないかいな」

「こんぐらいのスキャンダルはよくある話だろ」

真一は立ち上がり、綾香のもとまで歩いた。「お前は清純派アイドルつてわけでもないし、ファンのヤツらだつてちつとは覚悟してたはずだぜ」

そして彼女の隣に腰かける。「だいたい、握手会はともかくコン

サートは高い金出してチケット買ってんだから、観に行くしかねえだろ」

励ましてやったつもりだが、綾香は逆に泣き出してしまいそうな表情になった。

「そっやん」

また頭を抱える。「お金出して買ってくれとっっちゃん。じゃあ、当日はもの凄いブーイングを浴びるっちゃろっね。私、耐えられるかいな」

真一はなんと答えようがなかった。

綾香の言うとおり、ブーイングを浴びる可能性は確かにあるだろうが、そもそもスキャンダルはまだネット内でのもので、写真週刊誌やワイドショーで取り上げられたわけでもない。ひよっとしたらコンサートの観客の多くはスキャンダルのことなどまるで知らないのではないかという思いもある。ただ、もしその当てが外れたら残酷なので、口には出せない。コンサートまでの一週間のうちに知られてしまう可能性だってある。

「マネージャーは知ってるのか？」

ふと思いつき尋ねてみた。黙って首を横に振る綾香。マネージャーがスキャンダルのことを知らないのか、そのことを綾香が知らないのかは判断しかねるが、間違いなく後者であろう。綾香だった先ほど知ったばかりなのだし、マネージャーが知っているのなら、すでに連絡を寄越してきていてもよさそうだ。真一の言葉は質問の形態を借りた、マネージャーに知らせたほうがいいんじゃないのかという提案なのだ。

しかし、綾香は動かない。彼女のマネージャーについてそれほどよく知っているわけではないが、綾香の話ではなかなかに厳しい男なのだそう。スキャンダルのことで彼に叱られるのが怖いのである。

その時、床に放ってあった綾香の携帯電話の着信音が鳴った。彼女の成功の代名詞ともいえる『イツツ・パフォーマンス』の着うた

だ。綾香はすぐさま携帯を拾い上げ、発信元を確認し、少し驚いた表情を見せた。

「向こうからかけてきた……」

マネージャーかららしい。

「ちょっと行つてくるばい」

短い電話を終え、綾香は立ち上がりながら言った。「話し合いせにやいかんけん。そんなに時間はかからんと思うけど」

帽子をかぶり、ハンドバッグを手に取る。外出する時の基本的なスタイルだ。

「おう」

またパソコンのディスクに向かいながら、ぶつきらぼうに真一は答えた。「せいぜい怒られて帰つてこい。ヌード写真集でも出すんなら、買ってやってもいいぜ」

玄関へ向かいかけていた足を止め、綾香はブスツとした顔で振り返った。そして一言、とんでもない一言を呟いてから洋室を後にした。

な、なんだと……？

真一は部屋の中心あたりに突っ立ったまま固まってしまった。綾香の後ろ姿をじっと見つめながら身体中から滲み出る汗の気配を感じる。すべては綾香の一言が原因だった。ひよつとしたら彼女は真一に聞こえないように呟いたのかもしれないが、しっかりと聞こえてしまった。

『全部、あんたのせいっちゃけんね』

ボタンと玄関のドアが閉まる音が響く。綾香の姿が見えなくなつてからもそちらを見つめ続ける。おそらく彼女が出て行ったことに気がつかなかつた。それほど彼は狼狽していた。

俺のせい……？

やっぱり、と真一は思った。やっぱりそうだったのかと。

綾香はアイドルの仕事が何よりも気に入っていた。まるで、それが生きがいだというように真一に語ったこともあった。その生きがいの足枷となる唯一の存在にやはり、彼女も気がついていたので。

井本真一……。そう、この俺だ。

それならば自分はどうするべきか。答えは一つしかないではないか。

なぜなら。

誰よりも綾香のことを愛しているのだから。

真一はパソコンのデスクに着いた。そして、カタカタとキーボードを操作した。

喫茶店『ピリブ』店内には重苦しい空気が立ち込めていた。もつとも、この空気を重たく感じているのは綾香だけかもしれない。カウンターで男性客の相手をするマスター、そしてその男性客もいたって和やかな雰囲気だし、目の前に座る南吾郎は椅子にもたれかかり、美味そうに煙草をふかすばかりだ。

綾香は待つていた。自分からは何も言うことはない、南が口を開くのをじっと待つていたのだ。しかし、彼はいつになつても話を始めようとはしない。今吸っている煙草が終われば話し始めるかもしれない。その時までの辛抱だと自分に言い聞かせていた。

マスターがアイスコーヒーを盆に乗せて運んできた。綾香は礼を言つてそれを自分のもとに手繰り寄せた。これはなかなか良い味方を得たものだ。とりあえず、アイスコーヒーを飲んで、この沈黙を乗り切ろう。

「で、まだ続いているのか？」

ストローから口の中へコーヒーが一滴だけこぼれた瞬間、ついに南が発言した。手にはまだ吸いかけの煙草を持っている。なんという自分勝手なタイミングだ、と綾香は思った。

「何が？」

攻撃的な口調で尋ね返す。それに対し南は「金髪野郎のことだよ」とめんどくさそうに答えた。

チユーとまたコーヒーを喉に流し込みながら綾香は考えた。本当のことを言うべきか、それとも嘘で乗り切るか。

無理だと思った。ここでは上手く騙せたとしても、いずれはバレてしまうだろう。綾香は正直に答えた。

「今も一緒に住んどる……」

「ふん、やっぱりな」

南のその返事に驚き、綾香は彼に目を向けた。灰皿に煙草をもみ

消しながら、彼は続ける。「前からネットでも噂になってやがったし、お前は俺が家まで送り迎えするのを嫌うだろ。間違いない男と住んでいるとは思っていた」

「そ、それなのに」

言葉を詰まらせつつ、綾香は言った。「なんで口出しせんかったと？ アイドルは男子との交際厳禁やろうもん」

ホットコーヒーを一口飲み、ふうと息を吐く南。スキンヘッドの頭をポリポリとかいてから、綾香の質問に答えた。

「俺の考え方としては、別にバレなきゃいいと思ってるからな。お前の歌でも言っているとおり、アイドルなんて所詮飾りだ。プライベートのお前がどうであれ、そっちの飾りのほうをしっかりと磨いきゃあ問題はない」

綾香は意外に思った。そして拍子抜けした。もし、真一のことか南にバレたら、絶対に別れさせられると信じ込んでいたからだ。ただし、そんなことでホツとしている場合ではない。彼は『バレなきゃいい』と言っているのだ。

「でも……」

上目遣いでそろそろと綾香は言った。「バレてしまったやん」

またコーヒーカップに口をつけ、南は頷いた。

「で、どうしたい？」

そのアバウトな問いかけに、綾香は顔をキョトンとさせた。

「どうしたいって……？」

南は眉をひそめ、それから大きな溜息を吐いてから言い直した。

「金髪野郎と別れたいのか、別れたくないのか、どうしたいんだ」

「そ、そりゃあ」

戸惑いながらも綾香は答える。「できることなら別れたくないよ。でも、そんなことできると？」

「別れたくない場合は……」



また煙草に火をつけ、ふうと紫煙を吐き出す南。「二つ選択肢がある」

「二つ？」

「ああ」と頷いてから南は続ける。

「一つは芸能界から綺麗サツパリ足を洗う。もう一つは男と同棲してゐるってことをファンの前で潔く認める」

「認める？」

もちろん、引退など考えられなかったため、後者の選択肢に興味を持った。「認めるって……。そんなことしたら、もうアイドルとしてはやっていけないよね」

「お前次第だ」

間髪入れずに南は言った。「当然、一部のファンが離れていくだろうが、そいつらを再び引き戻せるかどうかはお前に懸かっている。その自信がないのなら、うちはもう面倒を見きれん。さつさと引退するか、金髪野郎と別れちまえ」

引退はしたくない。真一と別れたくもない。それならもう、その選択肢しか残っていないではないか。しかし、真一との同棲を打ち明けながら、それで去っていくファンを取り戻す。そんなことが自分にできるのだろうか。

「ねえ」

ふと思いつき綾香は言った。「ん？」とあごをしゃくり上げる南。「彼とはとくに別れたってことにして、こっそりと付き合い続けるってことはできんか？」

「それでも別にかまわん」

南はまた間を置かずキツパリと断言した。「ただ、そうするとこの先お前を応援してくれるファンを裏切り続けることになる。お前にそれができるのかどうかが問題だ」

綾香は答えなかったが、心は決まっていた。

できるわけがない。今のところ三ヶ所を終えた握手会ツアーの参加客たちを思い出す。彼らがくれた励ましの言葉を思い出す。彼ら

を裏切り続けるなどできるわけはないか。

「認める」

綾香は南を真っ直ぐに見つめ、はっきりと言った。「ファンの皆にキチンと認めて、これからも真一と付き合っていく」

正午を前に吉祥寺駅へ着いた。そういえば午後からは真一と遊びに行く約束をしていたのだ。早く帰らねば。

南に自分の意志を伝えたことで、綾香の心は先ほどとは比べ物にならないほど軽くなっていた。そう、何も心配することなどないではないか。ファンの皆ならきつと分かってくれるはず。彼女にはもう不安などなかった。

真一にもしつかりと事情を説明しなくてはならないと思う。綾川チロリの彼氏として、彼も公の場に晒されるかもしれない。ただ、彼なら理解してくれるだろうという自信もあった。

自宅前の細い路地に入る。心と比例して足取りもだいぶ軽い。それどころか逆に、思わずスキップしてしまいそうだった。ひよつとしたら、今回の一件は真一との愛を、そしてファンとの絆を確かめ合う重要なイベントだったとさえ思えてくる。

そこで松尾和葉のことを思い出す。写真の流出を知った時は彼女に激しい憎悪を覚えたものだが、それも今ではほとんど消えてしまっている。むしろ彼女が気に病んでいないかと心配になりさえもする。

落ち着いて考えてみれば、綾香は彼女に恩を売った覚えはあるが、恨みを買った覚えなどはない。始めは、何らかの理由で彼女が自分を追い込もうとしたのだと予想したが、本当はただ手違いが起こっただけなのではないか。そう考えたほうが現実的だ。何度かけても電話に出ないのは、きつと仕事だったからだ。

あとでもう一度電話してみるか。

そう心の中で呟きながら、綾香は自宅の玄関ドアを開けた。

異様だった。

玄関の鍵は開いている。明かりも点いている。パソコンのディスプレイも光を放ったままだ。ただ、あるべきものの姿がない。

「真一？」

部屋に上がり、キョロキョロと辺りを見回しながら、綾香は呼びかけた。しかし、どこからも応答はなかった。

「真一？」ともう一度呼びかけてみた。やはり返事はない。綾香は数秒間、部屋を中心にぼうつとたたずんでいたが、やがてははんと真一の魂胆に思い当たった。

「まあ、驚かせようと思っとうっちゃね。」

こんな時にまでなんだ、と怒りたかったが、自分を元気づけようとしてくれているのかもしれない。今回は許そう。

寝室まで歩き、押入れの前で立ち止まる。じつと襖を見つめた後、綾香は勢い良く襖を開けた。しかし、そこに真一の姿はなかった。続いてベランダを捜す。浴室を捜す。トイレを探す。どこにもいない。

外出してるのか、となんだか拍子抜けしたような気持ちになりながら、洋室のソファに倒れ込むようにして腰かけた。そこでまたぼうつと彫刻像のように動かなくなってしまう綾香。その時、ぐうつと漫画のようにお腹が鳴り、なるほどと合点がいった。

そういえば二人とも朝から何も食べていない。きつとどこかで食料を調達してくるつもりなのだろう。ひよつとしたら一人だけで外食しているのかもしれないが、その場合は説教しなくては。抜け駆けについてもそうだし、この部屋の有り様はなんだ。何もかも点けっぱなしで、鍵もかけていない。

それならばと綾香は立ち上がった。とりあえずパソコンの電源は落とそう。先ほどから、ウサギのキャラクターがチラチラと動き回るスクリーンセーバーのアニメーションが気になってもいた。

スクリーンセーバーを解いてしまうと、再びあのキス画像が現れるのではないかと考え、少しだけ躊躇したが、意を決し、ガタガタと適当にキーボードを叩いてスクリーンセーバーを解除した。

「ん？」

綾香の目はディスプレイに釘づけとなった。キス画像はなかった

ものの、何か、何か文字が書いてある。テキストファイルが立ち上げられ、そこに小さめのフォントで短い文章が。

目もとを指でこする。自分の目がおかしくなってしまったのではないかと疑った。鼓動が速くなる。それに前後して息づかいが荒くなり、汗が滴り落ちる。

「はあ!？」

そう叫ぶと、ディスプレイにいくらかつばが飛んだ。「なんで! ? なんで!？」

もちろん、その答えは返ってこない。綾香は深呼吸して、心を一杯落ち着かせてから、もう一度その文章を心の中で読み上げた。

『お互いのために、俺たちは別れたほうがいいと思う。突然で悪いな。コンサート頑張れよ。じゃあな』

次の瞬間、綾香は飛ぶようにデスクを離れ、床に放ったハンドバッグを手に取った。そして、携帯電話を中から取り出した。

綾香は大きな溜息を吐き、またソファに腰を下ろした。テーブルの上に置いた携帯電話を一瞥し、力なくうなだれる。電話をかけても繋がらず、メールを送っても、やはり返事はなかった。

「なんで……?」

もう一度溜息を吐く。

ただ単にフられたわけではないと思う。日頃から真一の自分に対する気持ちはひしひしと伝わっていた。となると、可能性が高いのは今回のスキャンダル。真一がスキャンダルの元となってしまうことに責任を感じてしまったのではないか。

もちろん綾香は納得がいかない。そんな別れかたなどあるものか。綾香だって真一のことを好きだ。確かにアイドルの活動において真一の存在は些かの障害になったかもしれないが、だからといって彼が去っていくのでは意味がない。

アイドル活動と真一。

綾香はその二つを初めて天秤にかけてみた。自分にとってどちらがより大切か。答えは明確である。真一だ。彼が戻ってきてくれるなら、芸能界を引退してもかまわない。

テーブルの上の携帯電話をもう一度手に取る。最後のチャンスとばかりに、綾香はメールを打ち込んでいった。「お願いだから戻ってきて。私、引退するけん」。

メールを送信した直後のことだ。突然、携帯の着信音が鳴った。ハッと発信元を確認する。矢上詩織だった。

《ちよ、ちよつと……！》

詩織は慌てた様子でまくし立てた。《あんた、インターネットでキス写真が流出してるよ。どうすんの？ これ、ヤバイんじゃないの？ ねえ》

はあと綾香はまた溜息を吐いた。はつきりいつて今はそれどころではなかったが、心配してくれる親友にしっかりと説明しなくては、ファンの皆に正直に打ち明けて再出発を目指すことにした、と。

《そうか……》

話を聞き終えた後、残念がるようなホツとしたような微妙な響きで詩織は言った。《まあ、でも良かったよ。真一さんと別れさせられなかったことだけでも》

その言葉に思わず涙腺が緩んだ。

「詩織い……」

涙声で親友の名を呼んだ。「ダメっちゃん。帰ってきたら、真一おらんくなっとなさ。パソコンのメモ帳に、メモ帳に……」

そこでついに我慢ができなくなってしまふ。詩織を心配させたくはないという気持ちとは裏腹に、歯止めが利かない。抑えようとするれば抑えようとするほど、口から次々と嗚咽が溢れ出してしまふ。

綾香が泣きながら事情を話す間、詩織は一言も喋らなかつた。親友をどう慰めたらいいか、模索しているのかもしれない。

嗚咽が少し落ち着いてから詩織はついに口を開いた。

《行くこう》

「え？」

涙声のまま、綾香は聞き返した。

《私が一緒に付き添ってあげるよ》

勇気に満ちた、自信に満ちた口ぶりだった。《真一さんだって生活があるんだから。『ぶるうす』を辞めたってわけじゃないんですよ。一緒に行って説得しよう》

直接会って説得する。それは綾香も考えたことだ。

「でも、追いつ返されたらどうしよう」

心配げに綾香は尋ねた。

《追いつ返されたらまた行けばいいでしょ》

怒ったような口調で詩織は答えた。《私はいつでも、何度でも付き合ってあげる》

「ありがとう」

綾香はグスツと鼻を噉った。「詩織がいてくれて本当に良かった」

綾香はシャワーを浴びて、汗を洗い流した。パンティとシャツのみの姿で洋室へ戻り、ふうと一息吐きながらソファへ座る。だいぶ気持ちは楽になった。

今日は真一も休みだ。明日は握手会を含め、朝から晩まで仕事が決まっている。真一に会いに『ぶるうす』へ行くのは明後日の仕事前に決まった。詩織もたまたま予定がなかったそうだが、もし詩織と一緒にできなくとも会いに行くつもりだった。

ただ、どんな言葉で真一を説得すればいいのだろう。何を言っても真一は取り合ってくれないような気がする。実際、『引退するけん』と書いたメールを送っても、何も返事を寄越してこないではないか。

詩織との会話を思い出す。

『別に明日でもいいばい』

綾香は自嘲的に笑った。『どうせ引退するつもりやけん、仕事なんてもうすっぱかしてもいいばい。握手会なんかする気にもなれんし』

《それはダメ》

はつきりと詩織は言った。《ファンの人を裏切る綾香なんて見たくない》

『詩織……』

《それに》

ひとつ間を置いてから詩織は続ける。《私も田之上くんも、きつと真一さんも、アイドルのあんた、綾川チロリが大好きなんだ。あんたはアイドルを続けなくちゃダメ。今度引退するなんて言ったら絶交だからね》



『イツ・パフォーマンス』が発売したばかりの頃、新宿にて、綾川チロリのささやかなイベントが行われた。もちろん、橘川夢多も大田早苗と一緒に意気込んで参加したが、人ごみにさえぎられ、生身のチロリを目にしたのはほんの一、二分程度の時間にとどまった。

というわけで、今回の秋葉原のCDショップでの握手会は、橘川にとって前回のリベンジの場といえるイベントだったわけだ。もつとも、握手会なのだから、間近でチロリを見ることもできるし、おまけに握手までできる。おまけにおまけに、数秒間会話することもできる。いわば勝利の確定したりベンジだといえる。

しかし、だ。長蛇の列に並ぶ橘川の顔に喜びの色はなかった。いや、正確には消えてしまった。男性スタッフの紹介と共にチロリが姿を現し、会場の客と共に『ワン、ツー、スリー、イエーイ』とチロリンポーズを決めた時までには心底から楽しんでいたはずだったが、ある時、胸に小さなしこりのような物の存在に気がつき、今ではそれがだいぶ成長してしまったようだ。

橘川だけではない。間違いなく周りの連中だって気がついている。淡々と握手をこなしていくチロリの顔にまるで覇気が見られないのだ。

その理由について心当たりはあった。少し前からネットで流出したチロリの男性とのキス写真だ。初めてその写真の存在を知らされた時、橘川も少なからず衝撃を覚えたものだったが、すぐに開き直っていた。チロリにだってもちろんプライベートはある。自分の前ではいつもの元気なチロリの姿を見せてくれていればいい。そう考えたのだった。

おそらく多くのファンもそうだろうと思う。インターネットの掲示板などで『裏切られた』『金を返せ』『もうファンをやめる』、

そんな辛らつな言葉を吐き捨てるファンもいたようだが、橘川にとつて、そんな連中はファンなどではない。プライベート画像が流出して、胸を病めているであろうチロリを更に暴言で追い込むなど、そんなヤツらをファンと呼べるか。

こんな時こそチロリを支えてやるのが本当のファンなんじゃないのか。

打ちひしがれた様子のチロリを見た橘川に、喜びはなかった。そのかわり、チロリのファンとしての心地よくも情熱的な使命感に似たようなものが、胸の中を支配していた。そしてそれは、今日ここにいる周りのファンたちとも共鳴している。そんな予感があつた。

数メートル先にチロリの姿がある。あと十人ほどでいよいよ橘川の番になる。チロリはいつものようにハットをかぶっていた。キャミソールにホットパンツというはつらつとした衣装もいつもどおりだ。ただ、その生気の抜けたような笑顔だけはチロリのもものではなかった。

「おかしいよな」「やつぱり、あれ本当なのかな」。周りからこんな声が聞けるといふことは、やはり皆、今日のチロリのおかしさに気がついていいる。一部の野次馬のような見物客や、威勢の良い声で列を整えるスタッフたちを除き、皆が違和感を覚えている。誰が見てもつまらない映画なのに、全員がスタンディングオベーションを行っているような光景だ。誰かが先導しないと決して何も起こらない。

「あの、元気出してください！」

チロリと握手をするファンのエールが聞こえるまでの距離になった。若い女性だ。高校生やもしくは中学生にも見える。そんな若年のファンにまで心を見透かされてしまっている。チロリは今、どんな気持ちなのだろう。愛想笑いを浮かべるチロリの返事は小さくて聞こえなかった。その笑顔はなんだかあきらめのように見えた。

ふつつつと心の奥底から何かが煮えたぎり、湧き上がってくる。その正体は何かと自ら探ってみる。焦りのような、はたまた怒りのような、とにかく情熱的な感情。

引退の二文字がふと脳裏に浮かび上がってきた。チロリが引退する？ なぜ？ キス写真によってファンを裏切ってしまったから？ 心ないファン（しつこいようだがファンではない）の罵倒に耐えられなくなったから？

そうだ、と橋川は直感した。チロリのあの様子は引退を決意した姿にしか見えないのだ。まるで、目の前に列を作るファンたちが、自分にとって何の関係もないかのような立ち振る舞い。昨日までの『イツツ・パフォーマンス』を歌いながら、観客を煽るチロリとは別人に見える。

そんな状態で一週間後のコンサートの日を迎える気なのか。『クレセントムーン』を、『やっぱり博多が好きやけん』を、『イツツ・パフォーマンス』を歌う気なのか。自分と関係のない大観衆の前にうつろな笑顔を振りまきながら。

綾川チロリじゃないと思った。そんなチロリは、今まで橋川が愛してきた綾川チロリじゃない。

今日は残念ながら早苗は用事で来れなかった。そのことが一因となったのかもしれない。絶対的な存在である恋人の早苗は、もしくは恋敵といえなくもない綾川チロリへの橋川の愛情をすんでのころで抑止してしまうに違いなかった。

「チロリちゃん！」

橋川の番まで、あと五人ほどであったのにも関わらずだ。

チロリが目を丸めて橋川を見る。チロリと握手をする橋川と同年ぐらいの男性も、チロリの横に立つスタッフも、橋川の前に並ぶ中年の男性も、おそらく後ろの親子連れも、皆が皆、橋川を注目していた。

橘川の次の言葉を待つ沈黙。ファンがチロリの名を呼んだぐらいで、これほど場の空気が変わるのは異常であろう。実際、イベントが開始して以来、会場のあちらこちから声援が飛んでいたのだ。それほど橘川の声には鬼気迫るものがあった。

「お客さん」

まるで橘川をなだめるような笑みを浮かべながら男性スタッフが彼に近寄ってくる。「自分の番になってからお願ひしますねー」

橘川は真っ直ぐにチロリを見つめ続けた。そして、チロリも橘川から目が離せない。彼らを含め、スタッフの声など誰も耳に入っていないようだった。

「チロリちゃん！」

橘川はもう一度そう呼んだ。「何をメソメソしているんだ。俺たちはチロリちゃんの写真を見に来たんだぞ。そんなチロリちゃんを見に来たんじゃないんだ！」

「お客さん、ちょっと」

二人のスタッフに両脇をつかまれる。彼らはそのまま橘川をどこか、おそらくスタッフルームあたりに連行する気のようにだ。

「キス写真がなんだっていうんだ！」

列から抜けさせられながらも、橘川は続けた。「そんなの、俺たちは全く気にしてなんかいない。チロリちゃんがプライベートでどんな顔を見せていても、俺たちには関係ないことだ！俺たちが好きなのは、ファンの前でいつだって笑顔でいてくれるチロリちゃんなんだ」

「いい加減に……」

橘川を抱える一人のスタッフの力が強まろうとした時だった。

「そうだ！」

列のはるか後ろのほうで男性の声が聞こえる。皆の視線がそちらへ移動する。「それに、お前の悩みは俺たちの悩みでもあるんだ。一人で抱え込むな！」

橘川より少し年長の土木作業員ふうのなりをした男性だった。そ

れに続いて、次々と別の、しかしながら同じ信念を持ったファンたちの声がいきたるところで上がる。

「何があっても、俺たちはあんたを応援するぞ！」

大人も。

「チロリちゃん、お願いだから元気出して！」

子供も。

「いつものチロリンらしく、笑い飛ばしてください！」

お姉さんも。五人、十人、二十人と、たちまち会場は騒然となった。騒然となったが、彼らの気持ちは一つだった。

呆気にとられた様子でたたずむスタッフたちの間で、橘川は満足げに頷いた。その視線の先には今もチロリがおり、チロリもこちらを見ながら、戸惑いつつも頷いてくれた。

## 61 引退宣言

その顔には見覚えがあつた。どこで見た？ 随分と前だつたはず

そう、秀英祭だ。では、誰だつたか。長い間行動を共にしていた気がする。いや、行動を共にしていたのは自分ではなく 内藤ちえ美だ。

橘川夢多……？

もう一度、男の顔をまじまじと見つめる綾川チロリこと池田綾香。どうにも垢抜けない白い टीーシャツ と ブラウンの ジャケット の 重ね着に、グリーン の 野球帽。帽子の下の顔はやはり、昨年の秀英祭での サバイバルゲーム の 時、内藤ちえ美の パートナー だつた。そして、松尾和葉が 想いを 寄せる 男、橘川夢多に 他ならなかつた。

なぜ、橘川さんがこんなところに？

それはさほどの疑問ではないかもしれない。単純に、自分の大学の学園祭にゲストとして招かれたアイドルに愛着が湧き、ふと握手会に参加してみようと思つたのかもしれない。いやいや、愛着が湧いたなどというレベルではないはずだ。

なぜなら、彼こそがこの騒ぎの発端だからだ。今や握手会の参加者たちは、まるでデモ運動のように声を張り上げて、自分にはもつたないほどのエールを送ってくれている。

綾香の胸の中で何かが弾けつつあつた。見覚えのある顔 橘川 の 存在により、思わずそこから目を逸らしてしまつていたが、やがて、ピントがこの光景の全容をとらえた。

自分はそんなにまずい顔をしていたのか。そうかもしれない。彼らの真剣な眼差しがそう物語っている。自覚もあつた。今日のこの握手会に対して、まったく熱意が湧かなかつた。もちろん、それは井本真一 の こと で 頭 が いっぱい だつた から だ。彼が 戻つて き さ え すれば、もう何もいらな ないと思つて いた。前日 矢上詩織に 電話で 話したと おり、本 当なら、こ んな 握 手 会 など す っ ぽか して、す ぐ に で も

『ぶるぶす』に真一を説得しに行きたかった。

でも、違った。間違っていた。それを気づかせてくれたのは橘川と、彼の一声をキツカケに立ち上がり、自分を戒めてくれたフアン  
の皆。

「がんばれ、チロリン！」

やけに悲観めいたその声援によるものかもしれない。綾香は自分が泣いていることに、ようやく気がついた。

「ごめんね、みんな」

精いっぱい声を出したつもりだったが、涙が邪魔をして、ファンのエールにかき消されてしまう。でも、くじけちゃダメだ。手元にマイクなんてない。遠くにいるフアンにまでへ声を届けるんだ。綾香はもう一度深く息を吸った。「みんな！ ごめんね！」

声は届いた。一瞬のうちに静まり返る観客たち。綾香は次の言葉を探したが、胸がいつぱいで何ひとつ出てきやしない。その時、誰かにマイクを差し出された。涙でかすむ視界の向こうにスキンヘッドと黒スーツ。南吾郎だった。

《みんな、本当にゴメンね》

マイクを通して綾香は話し始めた。涙声で聞き取りにくいかもしれないが、一所懸命に気持ちを含める。《あの写真のことで、私もすごく悩んでて》

それは嘘だと自分でも分かっていた。始めは確かに悩んだが、真一が出ていってしまったことで、どうでもよくなってしまったことも、また事実だ。ただ、敢えてそのことを打ち明ける意味はない。

その時、列の後方に並ぶ詩織と田之上の姿に気がついた。彼らも参加してくれていたのか。二人とも、満足したような安堵したような、そんな表情を浮かべている。

《みんなにどうやって話せばいいか、全く分からなくて》

丁寧丁寧に言葉を選ぶ。《でも、なんていうか、みんなから勇

気をもらって、私、今ならちゃんと話せそうな気がして」

ふと橘川に目を向けてみる。どうやら連行は免れたらしい。列から離れた場所で、真面目な顔をして綾香の話に聞き入っている。

《すごく心配かけたけど、もう大丈夫だから》

涙を拭き取り、綾香は顔を上げた。そして、一時の間を置いた後、意を決したように言った。《あの写真の人とはもう別れました！

でも、もう吹っ切ったけん、元気なチロリンを見せられると思うけん、来週のコンサート楽しみにしててね！》

左手を腰に、右手をチヨキにして額へ当て、チロリンポーズを決める。途端に、静まり返った会場が歓声に包まれた。再びエールを叫ぶファン。綾香と同じようにチロリンポーズを決めるファン。橘川も笑顔で拍手をしている。彼らに取り残される形で、詩織と田之上だけは眉をひそめ、信じられないといったふうに綾香を見つめていた。

握手会は中断となってしまうた。そのことにまた胸を痛める綾香だったが、中断に対して不満を口にする者が誰一人いなかったため、だいぶ救われた。

ただ、別のことに不満を抱く者は存在した。

「なんてこと言うのよ！」

スタッフルームに怒鳴り声が響く。「明日『ぶるうす』に行くんでしょ？ もし真一さんが戻ってきてくれたら、ファンを騙すことになるんじゃないの？ なんてなんでなんで！？」

パイプ椅子に座り、スタッフが用意してくれたコーヒーを啜る綾香に、詩織がまくし立てる。田之上も「まあまあ」と詩織を鎮めようとしてくれたはいたが、彼の胸のうちも平静ではないのかもしれない。彼が真一と顔見知りだということは前に聞いている。

二人は綾香の計らいで、スタッフルームの入室を許可されていた。「そんなに怒らんでいいやん」



両手で耳をふさぎ、綾香は唇を尖らせた。「さっきのことで、私  
すごく元気づけられたんよ。でも、同時にすごく後悔した。ファン  
はあんなに私のことを想ってくれとうとに、私は真一のことばっか  
考えてさ。やっぱり、アイドルはファンを第一に考えないかんよ」  
「それはそうだろうけど」

ショートカットの髪が少し乱れている。それは詩織の狼狽を直に  
表していた。「今日のこと、芸能ニュースとかで紹介されちゃうか  
もしれないよ。真一さんがそれを見たらどう思うか……」

「いや、もういいんよ」

綾香が苦笑しながらそう言うと、詩織と田之上はキョトンとして  
顔を見合わせた。「詩織には悪いけど、明日『ぶるうず』には行か  
ない」

「はあ!？」

詩織が綾香に食いかかる。「何、意味不明なこと言ってるのよ!

なんで仕事のために真一さんと別れなくちゃいけないの!」

「そ、そうだよ」

田之上も綾香に詰め寄った。詩織とは違い、なだめるような口調  
だ。「綾香ちゃんが別れることはないよ。真一さんだってきつと分  
かってくれる思うし、ファンの人だって」

綾香は落ち着いた様子でコーヒを飲み、それからゆっくりと首  
を振った。

「誰も別れるとは言ってないやん」

「え?」と二人の訝しげな顔を前に、続ける。「来週のコンサ―  
トまで、ファンを第一に考えたいけん、皆にチロリンスマイルを見  
せたいけん、それまで真一とは距離を置くってだけの話」

「ただ……」と綾香は付け加えた。田之上がゴクンとつばを飲む。  
「その先もずっとファンに元気なチロリンを見せられるかは自信が  
ないんよ。またいつか、こんなふうに着込んで、ファンのことを  
一番に考えられなくなったら嫌やけん 詩織、本当にゴメンけど」  
その言葉に、詩織は腕を組みながら力なく首を横に振った。綾香

が言わんとすることを察したのかもしれない。「来週のコンサートを最後に、私、引退する。真一を説得しに行くのはそれからいいけん」

## 62 参加表明

『ぶるうす』での仕事を終えた真一は、もちろん吉祥寺の綾香と暮らしていた家ではなく、杉並区高円寺に位置する、悪友の的場晴夫のアパートへ帰った。新たな住居が確保できるまで、世話になっているのだ。

午後七時四十分。真一が部屋に上がった時、的場はトランクスー丁で寝転がり、テレビを観ていた。六畳一間の小さな部屋だ。衣服やらコンビニ弁当の食べかすやらが、あちらこちらに散らばっている。『いつまでもいてくれていいぜ』と的場は言うが、はつきり言うていつまでもいたくはない場所だった。

「おう」  
的場は顔だけをこちらへ向けた。短く刈り込んだ髪を茶色に染めている。「綾川チロリは来たのか？」

「いや……」

ゴミを拾い集め、空いたスペースに座る。的場は「ふうん」と返事をし、またテレビに視線を戻した。

綾香のもとを去ってから三日が経過した。ぼちぼち綾香が『ぶるうす』を訪ねてくるのではないかと踏んでおり、それを的場にも話していたが、一向に綾香は姿を見せなかった。少し意外ではあったが、納得してもいる。綾香もきつと、真一が存在が先々の芸能活動の妨げになるということが遅れて気がついたのだ。それならそれで話は早い。もし、『ぶるうす』を訪ねてきても追い返す気でいたのだから。

「もったいねえよな」

汚い尻をボリボリとかきながら、的場は言った。「あの綾川チロリをフツちまうなんてよ。アイドルの彼女なんて、もう二度とできねえぞ」

「アイドルと付き合ってたんじゃないかって、付き合ってたヤツがアイ

ドルになっちまったんだよ」

シヨルダーバックからコンビニで購入した缶ビールを二本取り出す。がさがさという袋の音に反応して、的場が飛び起きた。

「おお、気が利くじゃねえか」

早くもプルタブを指に引っかける。真一もそれにならない、缶を開けた。

「まあ、急に押しかけちゃったしよ」

それから、二人で乾杯をし、つまみもなく宴会がスタートした。

「うちの班長の話ではよ」

プハアと息を吐いてから、的場が言った。彼の仕事は大工だ。「なんかニユースかなんかで、綾川チロリが破局したって報道されてたんだってよ」

「え？」

真一は驚いた。たった三日前のことなのに、もうそんな報道がなされているというのか。いや、それより、マスコミにバレているということは、綾香自身がマスコミに『別れた』と明言してしまったということか。詳細を知ろうにも、この家はインターネットがないため、情報収集に乏しい。

綾香は自ら真一を忘れようとしている。それが本当なら、と真一は考える。それが本当なら、少しシヨックかもしれない。おそらく、まだ心のどこかで綾香のもとへ戻りたいという自分勝手な気持ちがあったのだ。それが叶うことは、もうなくなってしまった。少なくとも、向こうから復縁を持ちかけてくることはないだろう。いや、当然こちらからも、そんなことはしない。

そして、少し安心してもいた。家を出た日に送ってきた綾香のメール。『引退するけん』という言葉はさすがに真一の心を動かしかけたが、引退もきつと思いき直してくれたに違いない。

俺が選んだ道、そして綾香が選んだ道だ。俺たちにとって、これが何より正しい道なんだ。

心にそう言い聞かせ、真一はグツとビールを一気飲みした。「お

ほ、良い飲みっぷり」と的場の冷やかす声が聞こえた。

午後九時を過ぎた。晩酌が終わり、バッテリーと寝込んでしまった的場を尻目に、真一は一人テレビを観賞していた。

歌番組に綾川チロリが出演していた。生放送ではないので、まだ真一と付き合っている頃のチロリだろう。お馴染みのハットをかぶり、ノースリーブのシャツとミニスカートを着用している。テーブルとソファが並べられた洋間のようなセットで、司会者とマンツーマントークを繰り返している。

《今月の末によいよ初のワンマンコンサートがあるんですよ》  
微塵の陰りもない笑顔でチロリは言った。《もう、今から楽しみで楽しみでしかたがなくなつて。あ、もうオンエアされる頃には終わっちゃってるのかな》

コンサートは八月三十一日。今日が二十六日なので、五日後ということになる。

《家族とか友達とかは観に来てくれるの?》

司会者はベテランの男性俳優だ。親が子に向けるような温かい眼差しで彼は尋ねた。

《えーっと、家族はちょっと来れないんですけど》  
頬をポリポリとかくチロリ。《友達は何人か来てくれると思います。チケットを渡しときますんで》

ということとは、収録日は八月の上旬辺りかななどと予想しながら、真一は自らの手もとを見やった。『綾川チロリ、プレミアムコンサート』と書かれたチケットを指先でつまんでいる。二週間ほど前に綾香にもらったものだ。

深夜、パソコンに向かい、『チロリンズルーム』の管理作業を行う真一の視界をさえぎるように、綾香がヒラヒラと見せつけてきた。『特別にプレゼントしてあげるっちゃけんね。ちゃんと休み取ったよ』

『誰がそんなもん観に行くか。バーカ!』

そう言つてクスかごにポイと捨ててみせた時、綾香は『ギャー!』とやかましく叫んで拾い直していた。その情景を思い出し、真一はふと口もとを緩める。

観に行こうと思う。

只今の真一ランキングは一位松尾和葉、二位プリンセス雅、三位滝田亜佐美。ここ数ヶ月、このベスト3は不動のものとなっているが、彼女らの座を脅かす有望新人アイドルも次々と出てきている。しかし、ただ一人だけ、どんなことがあつてもランクを落とすことのないアイドルが存在する。

そう、綾川チロリだ。

ずっと前から気づいていたことだが、綾香に対する愛情とは別に、真一はチロリに対しても、同等かそれ以上の想いを抱いていた。ファンの数かなり増えてきた今であっても、自信を持って宣言することができた。自分はどこの誰よりも、綾川チロリのファンなんだと。

チロリは一位の和葉のはるか上にいた。分かりやすく言うなら、チャンピオンといったところか。そして、それは今までも、これからも変わることはなかった。

チケットを眺めながら考える。吉祥寺の家を出た時に、いくつかの荷物と合わせて、このチケットがなくなっているということに、綾香は気がついただろうか。気がついたのなら、自分がコンサートを観に来ると想像するだろうか。おそらく、それはないだろうし、それが理想でもあつた。

井本真一は綾川チロリにとって邪魔以外の何物でもない。

自分の存在によって、コンサートが不穏な、陰鬱な影が落ちたようなものになってしまったら、それは何よりも悲しいことだ。だから、当日、コンサートに参加しているということをチロリに悟られないようにしなければ。

そのためにはやっぱりアレを使うのが一番か。

真一は、一年前のチロリのデビューイベントの時のことを思い出していた。

### 63 夏バテモード

窓の外は緑溢れる中庭だった。庭の中心にある噴水が灼熱の太陽を浴び、時折虹を見せてくれる。そんな風景をぼんやりと眺めながら、羽山美穂は大きく溜息を吐いた。テーブルに並んだスパゲティやコーンポタージュといった料理たちは、なかなか減らない。向かいに座るマネージャーの仲田や、隣の菊田つばきはすでにもう完食して、世間話に花を咲かせているというのに。

「へえー、そうなんですかあ」

つばきが大きな目を丸めた。爽やかなショートカットの髪に、高級レストランには似つかわしくないカジュアルな टीーシャツ。口ケが終わったため、すでに小悪魔モードを脱しているのだ。「うちの事務所なんてすごく小さいから、会計やらなんやらって仕事、全部社長の奥さんがやってるんですよ」

「それは大変だね」

しみじみとした様子で頷く仲田。美穂の位置からだど、眼鏡に陽光が反射して、まるで白いサングラスをかけているように見える。

「こないだ亜佐美ちゃん、滝田亜佐美ちゃんのマネージャーも言ってたな。あそこはここ一年で急成長したから、ものすごく忙しいんだって」

「ああ、サニーダイヤモンドプロダクション　チロリちゃんのことですね」

そのつばきの言葉に、一応は動いていた美穂の手がピタッと止まった。その様子に気づいたのか気づいていないのか、つばきは美穂に話を振ってきた。「そういえばチロリちゃんからコンサートのチケットもらった？　私、こないだもらったよ」

「いえ」

つばきを見ずに美穂は答えた。美穂の言葉に続きがあると思ったのか、つばきが不自然な間を空けて再び言った。



「実はちょっと心配してるんだよね」

頬づえをつき、宙に視線を泳がせる。「ひよっとしたらチロリちゃん、引退しようとしてるんじゃないかって」

「え？」

驚いてつばきの顔を見る。ついフォークを落とし、ガチャツと食器の上で音を立ててしまった。「ひよっとして、あの写真が原因ですか？」

「そりゃあ、詳しくは分かんないけど」

つばきは唇を尖らせた。「コンサートで重大発表があるって話なんだけど、こないだ共演した時、マネージャーさんと来月のスケジュールをキャンセルするだのなんだのって話しててさ」

心臓がドクンと高鳴った。ポタージュスープを一口啜るが、何も味がしなかった。

やめる？ なぜ？ 恋人とは別れたはずなのに？ アイドルを続けるために別れたんじゃないの？

「和葉ちゃん？」

つばきが美穂の顔を覗き込んだ。「どうしたの？ 今日はロケの時も元気がないような気がしたけど、夏バテモード？」

「最近、ずっとこうなのよ」

苦笑しながら仲田は言う。「今年は暑いからねー。さすがの和葉ちゃんもギブアップって感じ？」

「そ……」

美穂は必死に笑顔を作った。「そうなんですよ。どうも、頭がぼうつとしちゃって」

午後三時。ある特番のロケ先近くのホテル内レストランにて、彼女たちは少し遅めの昼食をとっていた。

チロリとその恋人のキス写真を、怒りに任せてネットに流出させてしまったことを悔いたのは、何も彼らが破局したことを知ったか

らではなかった。もちろん、その事実を美穂をより深く狼狽、落胆させたが、後悔はそれ以前 ネット利用者の中で写真が話題になり始めた頃にはすでに始まっていた。勝手な話である。写真がチロリを追い込み、恋人との仲を破滅させる 寸分狂わずに美穂が思い、望んだ展開になっているというのに。

怖いというのもある。いつかバレてしまっくんじゃないか。写真を公開したゴシップサイトに、自身の携帯電話が発信の元だという記録が残っていて、いつか割り出されてしまっくんじゃないか。しかし、それよりも、美穂の心を締めつけているのは、チロリに対する申し訳なさ、後ろめたさに違いなかった。

チロリさんがアイドルをやめる？

たった今、つばきに聞かされたその言葉は、美穂の心に新たな波をもたらしした。それは疑問と焦燥だった。チロリがどんなことを考え、どんな結論を出したのかは分からないが、もしそれが本当だったら、話はまるで見当違いな方向に加速してしまっている。

いや……。

美穂は頭を抱えた。『見当違い』なんてとんだ笑い種だ。そんなことだって充分に予測がついたではないか。自分の子供じみた行動がすべてを破滅させてしまったのだ。綾川チロリの全てを。

「ねえ、どう？」

「え？」

美穂はようやくつばきに何かを尋ねられていることに気がついた。

「あ、ちよつと考えごとしちゃってました。なんででしょう」

「チケットもらったけど、その日は私、地方に行かなくちゃいけないんだ」

初めて話すように、端折ることなく繰り返してくれた。「美穂ちゃん、まだもらってないんだったら私のあげるけど……」

その日は 休みだった。でも、それがいいなんだというのだ。

「いいです」

美穂は力なくかぶりを振った。そして、誰にも聞こえないように「チロリさんのコンサートを観る資格なんて、私にはないんです」と小さく呟いた。

帰りはロケバスだった。希望して窓際の席に座ったが、めくるめく景色は、美穂に何も与えてはくれなかった。自宅付近まで送ってもらい、一人でバスを降りた時、西の空が薄らと赤く染まっていた。引退か。

もし、チロリのためにしてやれることがあるとすれば、自分も引退して、少しでもチロリの生きやすい芸能界を構築することだろうか。ただ、それはチロリの引退がつかの早とちりだった場合にだけ意味をなすことだろう。なぜなら、そんなことぐらいでチロリが引退を考え直してくれるとは思えない。

私にできることは何も無い。

あきらめたように溜息を吐き、自身の長い影を見下ろしながら歩き始めた時、携帯電話の着信音が鳴った。何か仕事の用事だろうかと予想したが、鳴ったのはプライベート用の携帯だった。

誰だろう。

少し訝しがりながらも、美穂は何気ない気持ちで携帯のモニターを見た。そして次の瞬間には目を大きく見開いていた。

『ゴメン、和葉ちゃんに私の初コンサートのチケット渡すの忘れとったね。当日、係りの人に名乗れば無料で入れるようにするけん。三十一日、暇やったら来てねー』

綾川チロリからだった。メールを読んだ瞬間、美穂は地球の果てまで吹き飛ばされてしまいそうなほどの衝撃を受けた。顔が青ざめる。日に焼けた腕から汗が消え去り、代わりに鳥肌が浮かび上がってきた。

な、な、なんで!?

思わず叫びだしてしまいそうだった。写真を流出させたのが美穂

だということ、間違いない分かつているはず。なぜ、自分の人生を滅茶苦茶にした相手を記念すべき初コンサートに招待しようとする？

この時美穂が覚えた感情の中で最も大きな割合を占めていたのは恐怖だった。

美穂は取り乱した。もうわけが分からない。誰かに相談しようと思った。そして、無意識のうちに電話をかけ、やがて繋がり、相手の声を聞いてから、ようやく我に帰った。

《もしもし？ 美穂ちゃん？》

おろおろと目を泳がせながら携帯を握り締める美穂の脇を、音もなく自転車が過ぎて行った。

ど、どうしよう。なんで私、橘川さんに電話かけちゃったんだろ。

橘川夢多は太田早苗宅にいた。夜勤明けで泊まり込み、ついさつき目覚めたところだ。本日も仕事があるため、それまでの時間をどう使うか、デートにでも行くどうか、このままのんびりとテレビでも観て過ごすか。シングルベッドに並んで横たわりながら、そんなどうでもいいことを話し合っていた夕刻、その電話は突如かかってきた。

「美帆ちゃん？ どうしたの？」

羽山美穂の様子はおかしかった。自分から電話をかけてきたくせに、こちらがどんな言葉をかけても、返事をしてくれない。電話機の向こうから彼女の息づかいは確かに聞こえてくるというのに。

いや、そもそも彼女が橘川に電話をかけてくるという時点で、その様子が平常ではないことを伝えていた。あの日 彼女と約一年ぶりに再会して、自分でも気がつかないうちに彼女を傷つけてしまったあの日以来、こちらからも、もちろん彼女からも連絡を寄せたことなどなかったのだから。

「どうしたのかな」

橘川の顔を覗き込みながら早苗が言った。髪の毛はボサボサで、いまだに寝ぼけまなこだ。彼女は裸だったが、特に情事を行ったわけではなく、彼女が床につく際のいつものスタイルだった。一方、ティーシャツとトランクスという姿の橘川は、彼女と目を合わせ「さあ」と口だけを動かした。二人はすでにベッドの上で身体を起こしていた。

《き、橘川さん……？ 彼女さんと一緒ですか》

美穂のようやくの第一声はそんな言葉だった。その、変に取り繕ったような声色を聞いて、橘川はなぜか直感した。美穂は、橘川が彼女の気持ちを知っているということを知らない。《め、迷惑でしたら切りますけど》

「迷惑なんかじゃないよ」

すかさず橘川は言った。「なんならその、彼女がいないところへ移動するけど」

早苗の顔を一瞥する。今の言葉は聞こえていただろうが、彼女は何も反応を見せずに、橘川の様子をじつと見守っていた。

《いえ、大丈夫です》

そこですうつと息を吸う音がかすかに聞こえる。その一瞬の間で、彼女は何かの決心を固めたのだろう。《少し長い話になるかもしれませんが。聞いてくれますか？》

穏やかなようで、どことなく寂しげな口調で彼女は言った。

美穂の話は、さすがに橘川の理解の範疇を超えていた。とある事情で綾川チロリからキス写真を入手し、始めはその気など全くなかったにも関わらず、インターネットに写真を流出させてしまった。つまり、例のチロリのスキャンダルの根源は彼女にあるというのである。

美穂は本当にそれだけしか話さなかったので、橘川は戸惑った。何か大事なところが抜けているような気がする。そう、動機が分からない。動機は話せないということなのだろうか。

あ、と橘川は気がついた。そうだ。美穂は橘川がチロリの大ファンだということを知っている。となると、動機は恋破れた腹いせだということになるのか。

《チロリさん、引退するかもしれない》

悩んだり、落ち込んだりしている暇はなかった。美穂から新たな問題を提起をされた時、橘川はそれらの感情をすべて忘れていた。

「い、引退？」

思わず早苗と顔を見合わせた。彼女も大きく目を見開いている。

チロリの話なのか、美穂　松尾和葉の話なのかは判断がつかないだろうが、それでも引退という言葉の響きにただならぬ事情を

察したようだった。

《来月の仕事をキャンセルするみたいな話をマネージャーとしていたらしくて》

美穂の声はどことなく怯えているように聞こえた。《コンサートで重大発表があるそうなんですけど、それって引退するって発表なんじゃないかって》

橘川は溜息を吐いた。もう、何から考えていけばいいのか分からない。頭の中がグチャグチャでどんな答えを出してくれるのかも予測がつかない。チロリが引退だって？ 先日の握手会で、確かにチロリがそんな雰囲気をかもし出していることを感じ取ったが、その後の自らがけしかけたファンたちによる決起で、すべてはチャラになったのではなかったのか。いったい、どんな答えを出せば。

《それで、チロリさん》

しかし、美穂はまた新たな悩みの種をまこうとしていた。《私もコンサートを観に来てほしいってメールしてきたんです。私が写真を流出させたっていうのは間違いなく知ってるんですよ？ 私、すごく怖くて……チロリさん、私に何か復讐をしようって考えてるんじゃないかって》

「違う」

その答えだけは、瞬時に口をついて出た。《え？》と心外そうな声を上げる美穂。「チロリちゃんはそんなことをする子じゃないんだ。きつと、美穂ちゃんが写真を流出させたのを知った上で、『別に怒ってないよ』ということをアピールしようとしたんだ」

そして、それはなんだかとても悲しいことのような気がした。「じゃないと、俺はチロリちゃんのファンになることなんてなかった」

美穂はしばし黙っていたが、やがて力なく《すみません》と呟いた。

《そうですよね》

その言葉の後半から、声に涙が入り混じった。《私だってそう思う。ていうか、橘川さんがそう言うなら、そうとしか思えない。チロリさん、すごく良い人だし……》

沈黙を利用して、橘川は答えを固めていた。チロリの引退の理由は十中八九、先のスキヤンダルと、あの写真の男との別れにある。もちろん、本心では引退など望んではないはずだ。

橘川は思った。責任は自分にもある、と。美穂の想いにも気づかず、彼女の前でヘラヘラとばかりしていた自分にも。

では、どうするべきか。チロリに引退を考え直してもらうため、自分にできることは何かないか。

やがて、一筋の霹靂のように答えが空から降ってきた。

「俺、あいつに頼んでみる」

《え？》と美穂は蚊の泣くような声でポツツと言った。「あの写真の男だよ。俺、やっぱりチロリちゃんに引退するのはおかしいと思うから、あいつに頼んで引退を止めてもらう。あいつじゃないと止められないような気がするんだ」

《あ、あの人と、知り合いなんですか》

「いや」

橘川は静かにまぶたを閉じた。「知り合いつてほどじゃないけど、一応手がかりはある」

実は初めて写真を見た時から、確信していた。一年前のチロリのデビューイベントの日を思い起こす。その時に出会い、メイド喫茶で話をしたサングラスとつけヒゲで変装していた若い男。名前こそ忘れてしまったが、彼こそが写真の中のチロリの恋人に間違いなかった。手がかりは記憶の中に残る、彼がステージのチロリを見つめる放心した様子にあった。

「コンサートだ」

橘川の声は自信に満ち溢れていた。「あいつは必ずコンサートを観に来る。難しいだろうけど、絶対に彼を探し出してみせる」



## 64 答え（後書き）

薄らと感じいておられるでしょうが、クライマックスに突入して  
います。

集大成となる次回からのコンサート編をお楽しみに。

## 65 いざステージへ

楽屋前の廊下には多くの祝花が並んだ。多くは芸能関係者からの寄贈品で、綾香の憧れの人で、デビュー曲をプロデュースしてもらったR&B歌手のリリアン、数々のバラエティ番組で共演し、妹のように可愛がってもらった岩田幸一、出世の立役者トーマス岸辺、かつてのライバル、プリンセス雅からのものもあった。いずれも、予定と重なり、観覧にこられなかった面々だ。

「さつきチラツと聞いたんだけど」

何を勘違いしたのか、露出狂のような青いドレスを着飾った滝田亜佐美が腰に手を当て、言った。「あんた、どうゆうつもり？ 今日で引退するつもりなの？」

紙パツクのオレンジジュースをストローでチューと飲みながら、池田綾香は頷いた。

「私がおらんくなったら、あんたがSDPの看板になるっちゃね」「テーブルにコトンとパツクを置く。」「あーあ、先が思いやられるなあ」

「やっぱり スキャンダルが原因？」

内藤ちえ美が心配そうに綾香の顔を覗き込む。彼女もフリルのついたワンピースで主役級のオシャレをしているが、二人がコンサートに飛び入り出演するという話は今のところない。

「うっん」

綾香はかぶりを振った。一曲目の『やっぱり博多が好きやけん』に備え、山笠ふうの衣装を身にまとっている。「前々から私、アイドルは向いとらんって思いよったけんね。スキャンダルは口実みたいなもんよ」

亜佐美とちえ美は顔を見合わせた。まぶたをパチパチと動かしている。

「アイドル、向いてないんだってさ」

「チロリちゃんが向いてなかったら、いったい誰が向いてるんだらうね」

「重大発表ってコンサートの一番最後だよな」

綾香に向きを直し、亜佐美は腕を組んだ。「あんた、それまでもう一度考え直してみなさい。ワンマンライブでこれだけのお客さんを集められる子なんてそうそういないんだから。絶対に絶対に、後悔するよ」

綾香は頷いたが、やはり心はもう決まっていた。

コンサート開演まで残りわずか三十分となり、亜佐美とちえ美は最後まで何か言いたげな顔をしつつも客席へと向かった。楽屋には綾香と、彼女のマネージャー南吾郎だけになった。

「来月からの仕事、ちゃんとキャンセルしてくれたとよね」

綾香はやたらと豪勢な楽屋のソファに座っていた。先ほどから落ち着きなく衣装の乱れを直している。壁に寄りかかって立つ南が「ああ」と返事をした。

「テレビやラジオはまだいいが、レコード会社のほうはカンカンだぞ。アルバムはすでにレコーディングを済ませた曲だけでなんとか発売できるが、その後も契約は残ってるんだ。アルバムを全曲まるごとリミックスしてセカンドアルバムとして出すか？」

それでも、引退というビッグニュースに押され、アルバムはそれなりにヒットするだろうなという目算もあつた。レコード会社側にしてみると、売り上げを見込めるまま契約が満了するようなら、さほど悪い話ではないだろう。

「詩織、来てくれんかったな」

綾香は遠い目をして独り言のように呟いた。矢上詩織に、名乗ってくれば開演前に楽屋へ入れると告げてあつたのだが、来てくれたのは先ほどの亜佐美、ちえ美という同事務所の戦友たちと、同じ社長のみだった。社長との会話は普通すぎてあまり覚えていない。

「ぼちぼち開演だ。今更来ても、もう入れんぞ」

素っ気なく南が言う。しきりに足を揺すっているのは、煙草の禁断症状かもしれない。ホールは全館禁煙で、喫煙したければ裏口から外へ出てコツソリと吸うしかない。おそらく開演までに最低一度は外へ出るだろう（もしくは開演中かもしれないが）。

「私が引退したら、南さんの仕事もなくなると？」

何気なく綾香がそう訊くと、南はふんと嘲笑するように頬を緩めた。

「何度も言うが、SDPは事務所の成長に人手が追いついてない。仕事なんていくらでもあんだよ」

スタスタと革靴の底を響かせて、綾香のもとへ歩み寄る。「まあ、ここ一年俺も休みなしで働いてきたからな。できれば一ヶ月ぐらいのんびり休んで、それから新しいアイドルの卵でもスカウトして育てるかな」

「詩織はダメかい？」

意地悪な笑みを浮かべ、綾香は念を押した。「詩織にだって彼氏はおるけんね」

「ああ」

南は頷いた。「コブつきはもうコリゴリだ」

綾香の記念すべき最初で最後のコンサートの舞台となった『渋谷ヴェルパレス』は収容人数二千五百人の中規模なホールである。開業から十年と経たない新鋭のコンサート会場で、リハーサルでステージに立った時、まだ何色にも染められていない風を肌で感じた。その風はステージだけでなく、客席にも、楽屋にも、廊下にも、ロビーにも、いたるところを流れていた。まるで、彗星のように芸能界へ現れ、かぐや姫のようにあっという間に月へ帰ってしまう綾香のように透明な風が。

ホールから大勢の人の気配がする。綾香の登場をいまかいまかと

心待ちにしているファンたちの高揚がこちらにまで伝わってくるようだった。亜佐美やちえ美、それに詩織や田之上裕作はどの辺りにいるのだろうか。松尾和葉は来てくれただろうか。菊田つばきは。カビリオンズは。握手会にも来てくれた橘川夢多は。そして、井本真一は。

何度か首を横に振り、頭の中に現れようとした真一の顔を、遠い彼方へ押しやった。

綾香はステージ裏でスタンバイしていた。あと数分すれば、ホールが暗転し、SEが始まる。SEが終われば、いよいよファンの前に姿を現さなければならぬ。

初のコンサートに対する緊張感よりも、後の重大発表の時のファンのリアクションに対する緊張感のほうがすでに上回っている。

しかし、それはいけないことだと思った。

ファンたちが愛してくれている綾川チロリを、彼らの目に焼きつけるのだ。引退のことなど今は置き去りにして、すべての一瞬一瞬で精いっぱい綾川チロリを見せる。

パフォーマンス。パフォーマンス。

呼吸を整えるように、胸の中で何度も繰り返す。それから、ステージでの立ち回りのイメージングや、間違えやすい歌詞の反芻、あらかじめ考えておいたMCでの話題の確認などを行う。そのうちにだんだんとステージそのものに対してに緊張の比重が傾いてゆく。

だからといって、真一の顔は消えない。

ただ、それはそれでかまうまいと綾香は思い直した。もし、観に来ているのであれば、彼にも最高のステージを提供してみせよう。最初で最後の晴れ舞台を見せてやろう。

よし！

綾香はもう一度深く深呼吸をした。

確かに、これが最後だと思つと寂しい気持ちもある。でも、きつとファンの声援がそれを打ち消してくれるという確信があった。彼らの変わらぬ愛情に包まれたまま芸能界を去っていくのだ。寂し

くなんてないに決まっている。

それを証明するために、いざ綾香はステージへ上がる。

## 66 波乱な幕開け

開演時間の六時丁度に、照明が音も立てずにスツと消えた。絶え間なく続いてきた観客のざわめきもピタリと止まり、皆の目がステージに釘づけとなる。ステージの背景に巨大なビジョンがあり、そこに横文字で『綾川チロリ プレミアムコンサート』と表示されると同時に、ホール内は大きな歓声に包まれた。

ステージにスモークが焚かれ、この世の終わりのような幻想的かつ厳粛なBGMが流れ始める。それが綾香のキャラクターにフィットしているかは別として、これから幕を開けるコンサートに対する期待が否応なく湧き上がってくる。

冷たげなブルーにライトアップされたスモークの中に人影が現れる。それに誰かが気がつき、瞬く間に客席の一番端にまで伝わっていく。歓声が波のように押し寄せていき、引くことのないまま、スモークを八方に蹴散らした。

《みなさーん！》

満を持して姿を現した綾香が、マイクを片手に叫んだ。《チロリンコンサート開幕！》

ドーンと近くで衝撃音が鳴り、思わず耳をふさいだ。ステージが瞬時のうちに明るくなり、バックバンドを従えた綾香が《イエーイ》と飛び跳ねて観客たちを鼓舞する。

矢上詩織のもとにも細長い紙吹雪がヒラヒラと落ちてきた。先ほどの衝撃音がキャンン砲によるものと合点がいく。同時に、キャンン砲に驚いて気がつかなかったが、すでに一曲目が始まっているらしい。プラス音とデジタル音がミックスされたハイテンポなイントロ。『やっぱり博多が好きやけん』だ。

田之上裕作と顔を見合わせる。何の必要があるのか、それは『始まったね』という確認だった。

《やっぱり博多が》

綾香がそう促すと。

「好つきやけーん！」と観客たちが声を張り上げる。詩織と田之上も、控え目ながら一応参加しておいた。

二人は客席のほぼ中心辺りに陣取っていた。肉眼で綾香の表情を窺うのは難しいが、巨大ビジョンが常に彼女のアップをとらえてくれている。彼女の顔を見て、詩織はギョツとしてしまった。

め、めちやくちや緊張してるじゃんか。

それでもまだ一曲目。硬い表情も、いずれは緩んでいくだろうと勝手に予想した。

開演前に楽屋に遊びに来てよ、と綾香に言われながら行かなかったのは、彼女にどんな言葉をかければいいのか分からなかったからだ。なぜなら、詩織はまだ納得がいかなかった。彼女に引退を考え直してもらいたかった。でも、開演前にチヨロツとそんなことを言ったところで、意志が変わるのであれば苦労はしない。

だからといって、あきらめたわけでもなかった。重大発表はコンサートが一番最後、アンコールにて行われると聞いている。それまでに、それまでに綾香の気がなんとか変わってくれやしないかと密かに期待しているのだ。

「おっと」

後ろの客に押され、バランスを崩す。アリーナはオールスタンディングで、席はいわば早い者勝ちなのだ。熱狂した客はどんどん前へ前へと詰め寄せてしまう。田之上の手をギュツと握り、自身はなんとか人波に流されずに済んだ。

「俺も押されちゃったよ」

耳もとで田之上は言った。そうしないと言葉など、演奏にかき消されてしまうからだ。「うわー、背中が濡れてる。傘差してこなかったのかな」

詩織は苦笑した。開場の一時間ほど前から雨が降り出し、詩織も



田之上も傘を差しての来場となった。かなりの土砂降りだったので、詩織が着ている赤いブラウスも少し湿っている。

《ギャー！》

ステージから（正しくはスピーカーから）何やら尋常ではない叫び声が聞こえた。同時に不安げなざわめきがホールを支配する。何かとそちらに目を向けてみると、尻餅をついた綾香がスタッフに抱え起こされているところだった。どうやら転んでしまったらしい。綾香は苦笑しつつも、何ごともなかったかのように歌い始めようとしたが、途中で歌を止めてしまったため、歌詞が飛んでしまったらしい。しきりに《あれ？》《あれ？》と呟き、しまいにはメロディに合わせて《あーれー》と歌っていた。

「綾香ちゃん、絶不調だね」

笑いながら話す田之上を睨みつける。彼はえ？ というふうに首を傾げた。

詩織は本日のコンサートの成功こそが、鍵を握っていると思っていた。コンサートが成功すれば、綾香もいい気になって、彼女の中に『やっぱりアイドル続けたいな』などという発想が芽生えてくれると考えたのだ。しかし、このままでは非常にまずい。

両手を握り合わせ、必死に念じる。綾香、頑張れ。

二曲目となった『やっぱり博多が好きやけん』のカップリング曲が終わり、三曲目のイントロが流れ始める。聞き覚えのない曲で、おそらく新曲だろうと予想した。

ノリノリなナンバーが三曲続いた後、綾香は一旦ステージ脇に消えた。いつまでも『やっぱり』の山笠衣装を着ておくわけにもいかないだろうから、いわゆるお色直しであろう。

再登場した綾香は、白銀のドレス姿だった。

『クレセントムーン』を思わせるR&Bふうのバラードで、またもや新曲だ。Aメロからサビまで、一貫してしっとりとした雰囲気

が漂っており、綾香も先ほどまでとは全く違う顔つきをしていた。

綾香はやっぱリノリの良いポップスが似合うなと思いつながら、詩織は無意識のうちに曲を口ずさんでしまっていた。『あなたの未来と一緒に生きよう』。綾香が書いたと思われるその歌詞も心にしんと響いた。

「ん？」と詩織は目を見張った。巨大ビジョンに映る綾香の瞳がやたらと潤んでいる。やがて、目の中に収めきれなかった涙が一筋つつつと頬を伝った。歌も上手く歌えなくなり、またファンがざわつき始める。

元気な姿を見せるんじゃないかったの？

思わず詩織も涙腺が緩んでしまった。きっと綾香は、これがアイドル活動だと締めくりだと意識してしまったのだ。やはり彼女も本当は引退なんてしたくはない。

いや、まてよと思いつく。『あなたの未来と一緒に生きよう』。

これは井本真一のことを歌っているのではないのか。彼が去っていったことを嘆いて。いや、しかし、引退した後には彼を説得しに行くと言っていたわけだから、悲しむのはまだ早い。ということ、引退は考え直して。

うーんと詩織は腕を組み、首を捻った。納得のいく答えはまだ出なかった。

「うーん、なんか今日はまともに歌えてないなあ」

田之上の毒舌に、またも顔をムツとさせる詩織。田之上は慌てた様子でかぶりを振った。「いや、でも、このままじゃ綾香ちゃん、引退を考え直してくれるかもって思わない？」

「え？」

詩織は眉をひそめた。「なんで？ こんなライブじゃ、アイドル活動に嫌気がさしちゃうんじゃないの？」

「いや、逆にさ」

田之上はしたり顔で言った。「こんなぐだぐだなコンサートで終われないじゃん。いつかまたリベンジしてやるって気になると思う

よ

あつ、と詩織は口を開いた。言われてみればそうだ。大成功でも  
よし、大失敗でもまたよし。綾香はお調子者でもあり、負けず嫌い  
でもあった。どちらかに転ぶというのなら、もはや後者しか望みは  
ないのではないか。

両手を握り合わせ、必死に念じる。綾香、また転べ。

## 67 垢抜けた青年

敢えて開演時間より三十分ほど遅れて『渋谷ヴェルパレス』の正門をくぐった。その先は駐車場となっており、そこから、傘を傾けて、建物の全容を眺めてみた。真正面からだと言物物は正方形に見える。あの中に二千五百人を収容するホールが入っていることを考えると、ひよつとしたら立方体にデザインされているのかもしれない。真一は意識を足元に移して歩き始めた。綾川チロリの記念すべき日は、あいにくの雨に降られてしまった。ちよつと前よりかは落ちて着いたものの、それでも地面は絶えず雨水をまき散らしている。すでにスニーカーとジーンズの裾が少し濡れてしまっていて、こんなみすばらしい姿の男を、あの立派で真新しい建物が迎え入れてくれるのか不安になる。

今、何曲目ぐらいだろうな。

心の中でそう呟きながら、遅れてきたことを少し悔いてもいた。来場を遅らせたのは、チロリが入り口の前に立ってファンの一人一人に挨拶するという情景を思い描いたからである。人気アイドルがそんなことをする必要もなさそうだが、チロリのことだから分からない。念には念をといてわけだ。もし、面と向かって目撃されたら、さすがにバレてしまうだろう。

アゴを手で触り、ヒゲの感触を確認する。デビューイベントの日と同じように、真一は野球帽とサングラスとつけヒゲで別人になりすましていた。

『ソールドアウト』と書かれた券売所を横目に傘を畳み、開け放たれた入り口を抜けた。一階の正面は一面が透明なガラス張りとなっており、外からでも確認できたことだが、広々としたロビーには意外にも数十人の人の姿があった。ロビーが喫煙所となっており、ライブよりニコチンを欲したファンたちがホールを抜け出してきたのかと思いきや、そうでもないらしい。煙草をふかしている者など

おらず、こちらにも禁煙区域のような雰囲気だ。

と、まあ彼らのことなど特に興味はないのでホールの入り口を探す。すぐに二人の警備員にさえぎられた通路を見つける。そこでようやく真一は、チケットを提示することなくここまで来れたことに気がついた。なるほど、ロビーに溜まっていてる者たちはチケットを持たず、それでもコンサートをあきらめきれないチロリンファンなのだ。よく観察してみると、皆、羨ましげな表情を浮かべている。

フン、お前らには悪いが、そろそろ中に入らせてもらうぜ。

うしろめいような、それでも誇らしげな気持ちになりながら、真一は警備員の立つ場所へ向かった。ジーンズのポケットから財布を取り出し、その中からチケットを取り出しながら。その時だった。

「遅かったですね」

背後から誰かに話しかけられたのだ。

話しかけてきたのは若い男だった。「あん？」と眉間にしわを寄せながら、まるでガンをつけるように相手のつま先から頭まで視線を這わせる。ジーンズは真一と同じように裾を湿らせている。小奇麗なジャケットを羽織り、首もとにネックレスを光らせている。そして、その上の帽子と痩せた顔立ちの組み合わせを見た時、心の中に引っかかるものを感じた。

こ、こいつ誰だっけ。

真一は男のことを知っていた。しかし、誰であったかがなかなか思い出せない。必死に記憶の糸を手繰り寄せようとしていた時、男が「秋葉原ではどうもです」と笑みを浮かべた。

秋葉原……？

「あ、ああ」

ついに混沌の中から一つの記憶を抜き出すことができた。そうだ。チロリのデビューイベントの時に出会った青年だ。名前はなんとい

つたか忘れてしまったが、一緒にメイド喫茶にも入り、チロリに  
いて様々な話をした。あの時、彼はチロリに随分と感化されたよう  
だったが、やはり今日のコンサートにも来ていたか。「あんたか。  
久しぶりだな」

真一はサングラスをはずした。青年はヒゲも偽者だということを知  
っているはずだ。「こんなところで何やってんだ？ もうライブ  
始まってんだろ」

そう尋ねながら、青年の背後に女性がうつむいて立っているとい  
うことに気がついた。前に会った時は女の影などまるで感じなかつ  
た気がするが、あれからもう一年も経っている。女の一人や二人ぐ  
らいできるだろう。

「ええ、コンサート楽しみにしてたんですけど」

青年は苦笑してみせた。「あなたがあまりにも遅かったので、ま  
ともに観れそうもありません」

「え？」

真一は目を丸めた。「俺が遅かったから？ な、なんで？」

理由というより 言葉の意味を問いただそうとするも、彼が返  
事をする前に合点がいった。

間違いない。あのキス写真だ。真一の素顔を知っている彼は、あ  
のキス写真を見た時に、『あいつだ』とピンときたに違いない。す  
ると、今日自分を待ち伏せていた目的はなんだ？ チロリのファン  
として、一言言いに来たのだろうか。『よくもチロリンに傷をつけ  
てくれたな』。

「バレちまったか」

フツと真一は不敵な笑みを浮かべた。「そうだ。俺はずっとあい  
つと付き合ってたんだよ。デビューイベントのあの日もすでにな。  
いったい何の用だ？ 俺を殴りにでもきたのか？」

冗談めかした口調であったが、殴られてもかまわないという思い  
もあった。彼がいまだに、チロリのファンを続けてくれたことに対  
する感謝が、罪悪感に変わっていた。しかし、彼は「俺は今でもあ

あなたに感謝しています」と述べた。

目を丸める真一に、彼は更に続けた。

「時間がないので率直に言いますが」

真剣な眼差しで、真一を見つめる。「チロリちゃんを止めてください。チロリちゃんは引退を考えています」

警備員の立つ通路の先にあるはずのホールからは、チロリの歌声はおろか、歓声さえも聞こえてこなかった。コンサート会場の一部とは思えないほどロビーは物静かで、言葉を失くした真一たち三人の周囲は、それがより顕著だった。

「な」

ようやく真一が口を開き、青年はわずかに反応を見せた。「何言ってるんだよ。俺と別れたのはアイドルを続けるためなんだぞ。なんで、あいつが引退しなきゃなんねえんだよ」

真一は笑っていた。しかし、青年は笑わないし、彼の恋人もじつとうつむいままだ。

「詳しい理由は分かりません」

青年は力なく首を振った。「ただ、俺の想像では、やはりあなたが忘れられなかったんじゃないでしょうか。ファンに別れたと言っておきながら、裏ではヨリを戻す。そんなファンを裏切るようなことはできないと」

「いやいやいや」

真一はぶるぶると首を振った。顔はまだ笑っている。「確かにその可能性はあるかもしれないけどよ。あいつがどんなことを考えるかなんて分かりっこねえじゃんか。コンサートで重大発表があるっただけで決めつけんなよ。俺の予想ではまず、あいつは引退なんて考えてねえと思うぜ」

「私が聞いたんです」

そこで初めて青年の恋人が口を開いた。「え？」と訝しげな表情

で、真一は彼女に意識を初めて向けてみた。次の瞬間、彼の目は信じられない物の姿をとらえた。

そ、そんな馬鹿な……！

地味な色のワンピースを着ていた。眼鏡をかけていた。髪の毛を下ろしていた。それだけのことで全く気がつかなかった。しかし、真一を真っ直ぐに見すえた少女の顔は紛れもなく、真一が恋焦がれ続けた憧れの存在、憧れのアイドル　松尾和葉のものだった。



真一は思わず辺りを見回した。受付から少し離れたところに物販コーナーがあり、チケットを持たぬほとんどの者は、そこに群がっている。中にはじろじろとこちらに注意を向けている者もいるが、まさかこんなところにチロリのスキャンダルの相手の男がいるとは思っていないだろうし、男の正面に立っているのが、人気アイドルの松尾和葉だとも思っていないはずだ。

「え？ か、和葉ちゃん？」

目を剥いて指を差す真一のその問いかけには答えず、和葉はメリハリのある動作で「お願いします」と頭を下げた。

「チロリさんを止められるのはあなただけだと思います」

顔を上げる間も、真剣な眼差しを真一に投げかけ続けている。「私はその、見てのとおり……」

わずかに声を抑え、「松尾和葉なんですけど」と言った。「もしあなたが協力してくれるのなら、私、なんだってやります。あなた、私のファンなんですよね」

真一は相変わらずキョトンとしたままだった。あまりに予想外の事態だったため、思考回路がパンクしてしまったのだ。只今の和葉の台詞もまともにも聞こえてはいなかった。自分を知っているということ。自分が和葉のファンだと知っているということ。例の青年と一緒にいるということ。そして、真一の知る天然ドジキャラの和葉と、目の前にいる真面目そうな和葉とのギャップ。様々な疑問が頭の中を駆け巡っていた。

「とにかく、説明しますね」

二人の顔を見比べる青年。その口調には場の雰囲気落ち着かせようという狙いが見えた。「まず、俺と和葉ちゃんはちよつとした知り合いで」

その時、和葉がチラッと意味ありげな視線を青年に注いだが、真

「一は特に気にとめなかった。」「で、和葉ちゃんとチロリちゃんも友人同士なんですね」

ハツと真一は口を小さく開けた。そうか、そういえばそうだった。綾香は和葉と仲が良い（裸エプロン写真を入手できるほどの）のだから、和葉が自分のことを知っていても何ら不思議ではない。青年の目論見どおり、ほんの少し落ち着きを取り戻す。

「そ、それで、和葉ちゃんに綾香が引退したいって相談したのか」その言葉に二人は不思議そうに顔を見合わせた。「ん？」と真一は眉をひそめるが、すぐに和葉が「いいえ」と首を振った。

「チロリさんが私にそんな相談を持ちかけることはありえませんが、なんとなく悲しげな響きに聞こえた。」「なぜなら、あのキス写真を流出させたのは私なのですから」数秒後、再び真一はパンクした。

和葉は順を追って説明してくれた。キス写真を担保に、裸エプロン写真を綾香に贈ったこと。そして、綾香と真一の仲をぶち壊してしまおうとキス写真をネット上に流出させたこと。

なぜ、和葉がそんなことをしたのかという説明はなかったが、真一は詮索することはしなかった。それどころではなかったからだ。「重大発表っていつ頃やるんだ？」

青年に詰め寄る。彼はうろたえたように目を泳がせながら答えた。「う、噂ではコンサートの一番最後だそうですね……はつきり言うって分かりません」

真一はチツと舌打ちをすると、二人を背にして警備員のもとへ歩き、チケットを提示した。「どうぞ」と手の平で先をうながす警備員の横をすり抜け、細い通路を走った。それはわずか二十メートルほどの距離であつたろうが、やたらと長く感じられた。

『全部、あんたのせいっちゃんね』

彼が出て行った日、最後に聞いた綾香の言葉を思い出す。つまり

あれは『あんたが裸エプロン写真なんて欲しがったせいっちゃけんね』という意味だったのだ。なぜ綾香が和葉にキス写真を送ったことを内緒にしていたのかは分からないが、そのおかげでとんでもない思い違いをしてしまった。

クソつたれ……！

つけヒゲをもビリビリとはずし、ポケットに入れてから観音開きのホールの重い扉を開いた。すぐそばにあった二階席へ続く階段を無視し、勇み足で人の溢れるアリーナへ飛び込む。しかし、しばらくして真一は「ん？」と立ち止まった。

ホール内は真っ暗だった。歓声は聞こえるが、チロリの歌声は聞こえてこない。真一はピョンピョンと軽く飛び跳ねてステージの様子を窺った。ドラムセットや機材などが見えるも、人の姿はない。本編は終了してしまいアンコール待ちだろうか。いや、それなら客の呼びかけがあるはずだがそいつだったものもない。

「なあ、今どうゆう状況なんだ？」

夏休みのはずだがセーラー服姿の女子高生二人組に、話しかけてみた。彼女たちは一瞬だけ不審そうな目の動きを見せたが、手前にいた背の高い少女が代表してなんとか答えてくれた。

「中断してます」

上方を指差す。「さっきアナウンスで言ってたじゃないですか。機材のトラブルだって」

「そ、そうか」

真一は愛想笑いを浮かべた。「今来たところでさ。サンキュ」

彼女たちのもとを離れ、人の間を抜けてステージの近くへ向かう。その際にも様々なチロリンファンの声を聞くことができた。

「今日のコンサートは散々だな。ファンを待たせるわ、まともな歌えないわ」

「チロリン、かわいいそー」

「イベントスタッフが悪いんじゃない？ チロリちゃん、三回も滑って転んじやったし。ワックスかけすぎなのよ」

「早くしろー！」

どうもコンサートは上手くいっていないらしい。

とりあえずはステージまで目と鼻の先といった位置にまで来た。

それとほぼ同時に照明がつき、歓声が大きくなった。一人一人とバンドメンバーたちがステージに姿を現してゆく。

《みんなー、お待たせー》

最後にチロリがマイク片手に手を振りながら出てきた。白いハットにノースリーブのシャツにホットパンツ。ひよっとして次の曲はアレかなと真一は予想する。《いやー、参っちゃったねー今日はもう》

アハハと苦笑する。《でもこの曲ぐらいはキチンとやるけん、皆盛り上がったね。『イツツ・パフォーマンス』！》

彼女が曲名を告げると、再びの大歓声と共に、周りの客が両手を挙げて何やら叫びながらジャンプし始めた。真一もやや目を白黒させながら一緒に跳ねる。

そして演奏が始まった。リズムに合わせてカラフルな照明たちがステージを派手に、刺激的に彩っていく。そしてチロリも。

真一は眉をひそめた。テレビなどで『イツツ・パフォーマンス』を披露する際は、ところ狭しと派手なパフォーマンスを繰り広げてきたはずだが、今日は中心に立って身体を揺らしているだけだ。三回も転んだそうなので、それを恐れているのだろうか。しかし。

お前、こんなコンサートを最後に引退するつもりなのか？

巨大ビジョンに映るかつての恋人に問いかける。問いかけながら考えを巡らせる。重大発表は本編の終わりか、もしくはアンコールあたりで行うのだろうか。

なんとしてでも、と真一は思った。

なんとしてでも、止めなくては。

「チロリさんの本名、綾香さんって言うんですね」

チロリの元恋人の姿が見えなくなっただけから数分後、美穂がポツリと呟いた。「うん」と橘川は頷く。「あの人、綾香さんの引退を止めてくれるでしょうか」

『あの人』という表現を聞き、そういえば男の名前を聞き忘れてしまったということに気がついた。しかし、もはやどうでもいいことなのかもしれない。

橘川は、二人の警備員によって封鎖されている、ホールへ続く細い通路を無言で見つめた。彼の頭の中では、先日美穂が突然電話してきた日のことが蘇っていた。

私も一緒に連れて行ってくださいという美穂の懇願には驚かされた、というより戸惑わされた。彼自身、彼女にどんな顔をして会えばいいのか分からなかったし、会場へは早苗と同行する予定だった。彼女と早苗を引き合わせるのも、会ったところで何が起きるというわけでもないだろうが、正直気が引けた。

そんな彼の逡巡を見透かしたように（実際、見透かしたのだろう）早苗は言った。

『美穂ちゃんも、ケジメをつけたいんだよ。チロリちゃんに対しても、あなたに対しても』

しかたがないなあ、といった口調だった。『私はいいから、二人で行ってきなよ』

『え？』と早苗の顔を凝視する。彼女は頷いてから、もう一言だけ付け加えた。

ただ、心のどこかでは橘川もそうしななければいけないような気が、ぼんやりとだがしていた。ケジメ　その言葉は彼自身にも重くのしかかっていたのだ。

「私はこのまま帰ります」

美穂が唐突にそう言つて、橘川は現実引き戻された。美穂は彼と同じように、男の消えていった通路に目を向けている。あるいはその先にチロリの姿を見ているのかもしれない。「チロリさんのことは心配だけど、コンサートを観る気にはなれないし、橘川さんとあまり長く時間を共有するのは、彼女さんに悪いと思う」

「そう」

それだけ答えながら橘川は考えていた。今の言葉には橘川に対する好意が薄らと示されている。彼女には、早苗は風邪を引いて来れなくなつたと説明してあつたのだ。「俺ももう帰ろっかな」

美穂は目を丸めた。

「な、なんで？」

そう尋ねつつも、いくつか考えはあるらしい。「もう、コンサートが終わりに近づいてるからですか？ 早苗さんに悪いからですか？」

橘川は静かにかぶりを振った。

「美穂ちゃんに悪いから」

その瞬間、美穂は「え？」と言葉を失くした。「美穂ちゃんを先に帰らせて、俺一人だけコンサートを楽しむなんてできないよ」

そして彼女はうつむいてしまう。何かを考え込む様子その横顔に、橘川は更に一言、先日早苗と同じ台詞を付け加えた。「また、次のコンサートを観に行けばいいから」

「やっぱり」

顔を上げながら、美穂は生気の抜けたように呟いた。「知ってたんですね」

それ以上彼女は語らず、一瞬だけ困惑した橘川だったが、すぐに気がつく。知ってたとはつまり、美穂の橘川に対しての気持ちのことなのだ。彼女がどういった経緯でその結論に至ったのかは不明だが、いずれは明かすことになるだろうとも思っていた。

「うん。貴美ちゃんに聞いた」

その言葉に対しての反応はなく、彼らの間に数秒の沈黙が訪れた。しばらくしてから、美穂は「出ましよう」と出口に向かって歩き始めた。「ああ」と橘川も後に続く。ロビーにいたチロリアン数人が、二人をチラツと一瞥するのが見えた。

外は相変わらず雨が降っていた。だんだんと小雨になってきているが、空の暗さは変わらない。二人はそれぞれ傘を広げ、正門へ直進した。

「私、いったい何やってるんでしょうね」

その声は呟き程度のもので、おまけにバックグラウンドではずっと雨音が響いていたが、橘川の耳は不思議とはつきり聞き取ることができた。橘川に顔を向ける美穂。「勝手に橘川さんに片想いして勝手にチロリさんを恨んで、勝手にチロリさんを引退まで追い込んで、最後は引退を止めようとしている。まるで自分のことしか考えてない人間みたいで嫌になっちゃいます」

美穂は笑っていた。その大きな瞳の奥にどんよりとした闇を浮かび上がらせながら。

「何もかも、全部忘れよう」

橘川は敢えて言った。「今日の雨みたいに全部洗い流せばいいんだ」

美穂がどのような返事をするのか若干恐れたが、彼女は笑顔のまま「はい」と頷いた。

「もちろん、チロリさんにはいつか謝りますけど、橘川さんのことは綺麗サツパリ忘れます」

彼女は前を向き直して言った。「橘川さん、私、本当に橘川さんのことが好きでした」

数秒の間を置き、続ける。「最後に手を繋いでいただけませんか？」

前を歩く彼女の背中を眺めながら、「分かった」と、橘川は彼女の歩調に合わせながら、優しく手を取った。それに答えるかのよう

に、正門を出る頃には、美穂が自然と橘川の肩に頭に寄りかからせていた。やがて傘は一つになり、二人の姿を、雨が綺麗に洗い流した。

渋谷駅から地下鉄に乗った時、橘川の隣にはもう美穂の姿はなかった。しばらく渋谷でブラブラしてから帰るのだと彼女は言った。

闇が光をさえぎり、ドアのすぐ脇に立つ橘川の顔を、窓が鮮明に映し出していた。その背後にはたくさん自分の知らない顔が並んでいる。

左手に残る美穂の温かい手の平の感触。

美穂ちゃん。

まだ高校生の少女の温もりを、いずれ彼女が出会うべき誰かに託そう。きつとその人物は自分よりもはるかに上手く、彼女を導いてくれるはずだ。

綾川チロリはどうなっただろうか、とふと頭をかすめた。あの男は彼女をちゃんと導くことができたのか。芸能界を引退するという誤った道から彼女を。

橘川はフツと自嘲的な笑みを浮かべた。美穂は自分のことを、自分のことしか考えてない人間と言っていたが、自分だって同じだなと思う。ひよっとしたら、チロリにとっては引退するべきなのかもしれないし、もしくは橘川にとってもそうなのかもしれない。結局は、橘川自身が誰よりも、必死にチロリの引退を嫌っているというだけにすぎない。

そう考えれば不思議と気分が楽になってくる。もし、チロリが本当に引退してしまっても、楽しい思い出のまま胸の中に残せそうな気がする。

ただ。

明日もチロリがアイドルを続けているのなら、快く彼女を迎えてやりたい、とそう思った。



車内アナウンスが最寄の駅名を告げた。電車を降りて地上に出たら、路線を変えて秀英大学のほうまで行ってみよう。なんだか、わけもなく早苗に会いたかった。

今夜もバイトで顔を合わせる。しかし、今すぐ会いたかった。

楽屋には四人の男女がいた。椅子に座るのは矢上詩織と池田綾香。詩織の恋人、田之上裕作と綾香のマネージャー、南吾郎は壁に寄りかかり立っていた。彼らは皆、頭を抱えていた。必死に考えを巡らせる中、詩織はその意識の片隅に何やら騒がしい音を聞いた。

「待てー！」

バタバタとした足音に続いて男の叫び声。ホールへ続く廊下から、数人がこちらへ駆けてきているらしい。他の者も気がついたようだ。四人の視線が申し合わせたようにドアへ集中する。

やがてドアが開いた。そこに現れた男の姿を見て、最初に声を上げたのは詩織だった。

「真一さん！」

「あ、綾香……」

ぜえぜえと息を切らしながら井本真一は部屋の中を見回す。そして、詩織と同じように目を丸めたままの綾香にピントを合わせ、一直線に歩いた。と、その時、彼を追いかけてきた警備員に羽交い絞めにされてしまう。格闘技経験者なのか、別の警備員がファイティングポーズを取りながら前へと回り込む。「わー！ ちよつと」

「あー、やめてください、やめてください」

綾香が慌てて立ち上がった。衣装とは違ったラフなティーシャツとハーフパンツを着用している。華麗な身のこなしで真一のもとへ駆け寄り、二人の警備員に説明する。「知り合いなんです。許してやってください」

「そ、そうなんですか」

羽交い絞めになっていた警備員が口もとに笑みを浮かべながら真一を解放した。バランスを崩し倒れ込む真一。「いやー、やたらと興奮してたんで、てっきり暴走したファンの方かと」

警備員が去り、全員の視線が、ひざまづく綾香と真一に釘づけと

なつた。

「せつかくそれらしい通路を探し出したのに、なかなか通してもらえなかったから強行手段を使っちゃったぜ」

綾香に笑いかけながら真一は言った。「なんとか間に合ったみたいだな」

「真一………いったい何を」

眉をひそめて真一を見る綾香。笑みをフツと消し去り、真一は真剣なまなざしを綾香に向けた。

「綾香、俺が悪かった。俺が悪かったから引退なんてすんな」

「へ？」

キョトンとした表情になる綾香。「なんで知つとつと？」

「まあ、とある事情で」

「ふーん」

そんな答えで納得したらいい。綾香はうんうんと頷いた。「ま、その話はもう忘れていいけん。私、やっぱり引退するのやめにした」

「は？」

真一は狐につままれたような顔になった。

詩織が田之上を連れて、関係者以外立ち入り禁止の通路を抜け、真一と同じ目的でこの楽屋まで来たのは、今からつい五分前ほどのことだった。もっとも彼女たちの場合は場所を確認してあったし、事前に話を通っていたため、もっと穏便に通路を抜けることができたが。

楽屋の前に立っていた南に挨拶をしてからノックもなしに楽屋へ入ると、綾香は着替え中だったらしく、上下下着姿だった。

「ギャー！ エッチー」

詩織はサツと田之上の視界を手の平で隠するとほぼ同時に言った。

「あんた、まさか本当に引退なんかするつもりじゃないでしょうねえ」

あんなコンサートじゃ、お客さんは納得してくれないよ、と付け加えようとした矢先、綾香は全く悪びれるそぶりもなくこう答えた。  
『引退？ 何のこと？』

まさに今の真一と同じような顔をした詩織と田之上を横目に、テイシャツをかぶりながら彼女は続けた。『雨は降るわ、靴は滑るわ、歌詞は忘れるわ、機材は調子悪いわ、こんなコンサートで終わるなんて、絶対嫌やけん』

『え？ そ、そうよね』

詩織は心の中でガツポーズをした。まさに思いどおりの展開になってしまったではないか。神様ありがとう。神様愛してる。天にいくらお礼をしても足りないくらい嬉しかった。

詩織の話を聞いていた真一は拍子抜けしたような表情で、その場にいる面々の顔を順に眺めていった。いまだにひざをついているのは、おそらく情性なのだろう。やがて綾香の顔の前で、彼の目の動きは停止した。

「そ、そうだったのか……」

素直に喜ぶことができないのか、複雑そうな声の響きだ。「確かにひどいライブだったみてえだな」

「私のせいじゃないもん」

プイと綾香は顔を背けた。「スタッフのせいやん。何もかも不備ばっか。今だって、本当ならすぐアンコールの予定やったとに、またまた機材トラブルでお客さん待たせとっっちゃけんね」

「馬鹿いうな」

フンと鼻で笑ったのは、壁際に立つ南だった。「スタッフの不備がなくとも、歌詞を忘れたり、泣いて歌えなくなったり、曲順を間違えたりしたのはお前のせいだろうが。どっちにしてもコンサートはグダグダに終わってたな」

綾香は唇を尖らせ、やがてポツリと「真一のせいやもん」と呟い

た。

「あん？」

聞き逃さなかったらしい。真一が綾香を睨みつけ、綾香も睨み返した。

「あんなのこと考えんようにしよう考えんようにしよう、って思ってたたら、余計に顔が浮かんできてさ。全然コンサートに集中できなかった」

悔しそくに顔を歪める。「もう　せっかくお客さん、高いチケット買って観に来てくれとうとに……」

「綾香……」

二人はまだひざまづいたままだった。二人の姿を見つめながら、そのままキスでもしてしまいそうな雰囲気だなとぼんやり考えていたら、いつの間にか近くに来ていた田之上がそつと耳打ちをした。

「なんか、キスでもしちやいそうな雰囲気だね」

「もう」

詩織は苦笑した。

「なんで写真のこと言わなかったんだよ」

真一の問いかけに「写真？」と首を傾げる綾香。「あのキス写真のことだ。あれ、松尾和葉ちゃんにあげたらいいじゃねえか」

「なっ……!!」

綾香はようやく立ち上がった。驚いた顔で真一を見下ろしながら言った。「なんで知つとうと？　そんなん誰にも言つてないはずやとに」

台詞の途中で真一もひざを伸ばしたので、最終的には見上げる形となった。

詩織と田之上も驚いて顔を見合わせていた。それはつまり、あの人気アイドルの松尾和葉が写真を流出させたということなのか。いたいなせ。トップアイドルの地位を守るためか。

ただ、綾香がそのことを真一に内緒にしていた理由はなんとなく分かるような気がした。真一が和葉の大ファンだという話は何度か

聞いたことがある。おそらく、恋人のスキヤンダルを促した張本人が、自分の好きなアイドルだということを知られたくないという、綾香の優しさだったのではないか。

「だって」

綾香が口を開いた。「あんな写真を勝手に他人にあげたら、怒られるかと思っただっちゃもん」

テヘツと笑う彼女を見て、詩織と田之上はずっこけた。

唐突に真一が一步前へ踏み出した。詩織は思わず南に顔を向けたが、彼は相変わらず壁に寄りかかって腕を組み、その光景がまるで目に入らないといった様子でじっと動じずにいた。

綾香の肩に手をかけ、彼女が目をつむったのを合図に真一はそつと唇を重ねた。三秒に満たない短いキスだった。それでも、二人の失われた時間を取り戻すのに十分な働きだったようだ。キスが終わって手を離すと、綾香は頬を紅潮させてうつむいた。楽屋内に、果てしなくも一瞬の沈黙が訪れた。

「で？」

その沈黙をやぶったのは南だ。「重大発表はどうするんだ？」

詩織も思い出した。

そうだ。引退に代わる重大発表について、皆で頭を悩ませていたのだった。

70 舞台裏（後書き）

次回、最終回。

## エピソード

「さっさと考えろよ」

南はホールの方向をあとで示した。「あんまり遅くなると、ファンのコールが罵倒に変わるぞ」

詩織は耳を澄ました。かすかに「アンコール」を連呼する声が壁越しに聞こえてくる。

「でも」

綾香が納得のいかないといった表情を南に向ける。「どうせ機材が故障しとっっちゃけん、代わりの重大発表を思いついても、すぐにはコンサートを再開することはできんからうもん」

「そんなもん、気にすんな」

足もとを揺すりながら南は言う。「機材はいつだって直る。そもそも故障なんてしてないからな」

綾香も、真一も、田之上も、もちろん詩織だって、その言葉の意味が一瞬分からなかった。誰が初めに気がついたのかは分からない。ただし、誰よりも先に反応を示したのは綾香だった。

「あんだ、まさか……」

わなわなと肩を震わせる。「コンサートを失敗させるために、そんな嘔吐いたっちゃないやろうね」

「何もかも無駄だったな」

平然と南は言っただけだ。「わざわざ機材が故障したことにして、滑りやすい靴ばかり用意して、マイクにも細工して、コードにも細工したのに、別にそんなことしなくても充分にぐだぐだなコンサートだった」

「やりすぎ!」

「南さんも綾香に引退なんてして欲しくなかったんだよ」

へそを曲げる綾香を、詩織はなだめにかかった。しかし、綾香は不機嫌そうに首を振って吐き出すように言った。



「そんなことしてファンの皆に悪いとは思わんとかいな。せつかくコンサート楽しみにしてくれてたのに」

「そう思うんなら、簡単に引退なんて口にしないことだな」

鋭くなった南の口調に、綾香はやや顔を強張らせた。「お前は今までファンに育てられてきた身分だ。お前が納得し、ファンが納得してから初めて、引退という選択肢が生まれてくる」

皆が綾香に視線を注いだ。彼女は気を落としたようにうつむきながら「すみません」と呟いた。

「分かったならいい」

南は頷いた。「そんじゃ、さつさと顔を出し、ファンを安心させてこい。もう重大発表なんてなんでもいい。それから、明日も朝から仕事だから打ち上げはほどほどにだ」

「はあ!？」

そこに突如怪物でも現れたかのように、綾香はものすごい勢いで彼に顔を向けた。「あ、あ、あ、明日からの仕事、キャ、キャ、キヤンセルしたって言ったやん」

南は何も答えず、ただ口もとにニヤリと不気味な笑みを浮かべた。それを見て綾香はへなへなと座り込んでしまった。

「一つ聞きたいんですけど」

綾香がスタンバイのため、トボトボと部屋を出て行った後、真一が南に声をかけた。南はそちらを見やることもなく、軽く頷いて言葉を促した。「俺と綾香がこの先、付き合いを続けていたら、やつぱり綾香の人気も落ちちゃいますかね」

「真一さん」

また身を引こうなどと考えているのではないかと心配し、詩織は真一をたしなめようとした。しかし、真一は彼女を手で制した。

「男がいながらトップアイドルに君臨し続けるヤツってというのは、くわすかだ」

南のその言葉はなんとなく達観したように聞こえた。それとは見合わず、喫煙できないことによるストレスなのか、足の動きは激しくなっている。

「ただ……」と彼は続けた。

「アイツはそのごくわずかなアイドルだと思っている。だからこそ、俺はアイツの引退を止めた。お前はと思う」

「はい」

真一は自信に満ちた表情で頷いた。「俺もそう思います」

「じゃあ、お前らもさっさとホールへ行け」

南はホールへ続く通路を指差した。「アイドル、綾川チロリの再発表を見届けてこい」

《なんとお……》

スポットライトに浮かび上がった綾香がマイクを片手にもったいぶった。まるで観客の息を呑む音が聞こえてきそうだった。充分すぎるほどのタメを作ってから、ついに重大発表がなされた。《彼氏とヨリを戻しちゃいましたー》

やはり《テヘツ》と笑う。今度は観客がドテツとずっこける音が響いてきそうだった。

「バカヤロー！ 心配しちまったじゃねえかー！」

「チロリちゃん、幸せになってねー！」

「そんなもん、いちいち発表すんじゃねえ！」

それらの野次を聞いていると、先ほどの南の言葉の意味が痛いほどによく分かった。

綾香、やっぱりあなたはアイドルだよ。

詩織はステージに立つ親友を誇らしげに眺めた。

《えーっと》

ポリポリと頬をかく綾香。《今日はみっともないステージを見せちゃってゴメン。でも、トラブルは全部スタッフによる陰謀やった

けん》

「人のせいにするなー！」

物騒なファンが手をイヤホンにして叫んだ。《コホン》と咳払いをする綾香。

《で、でも、もう大丈夫。悪いスタッフがチロリンがやつつけたけん。最後はノリノリでアワアワに締めるけん、皆、付いてきーよ！》

「おー！」と観客に混じり、詩織と田之上も右腕を上げた。顔を見合わせてフツと微笑む。《最後はまたまたこの曲。準備はいいかい？ イイツウ・パフォーマンスウ！》

ドンドドンとドラムのフレーズから、本日二度目のキャノン砲と共に、本日二度目の『イツツ・パフォーマンス』が始まった。綾香のみを捉えていたスポットライトがビクバンのように広がり、ホール全体を包み込んだ。ひたすらにキャッチーな、イントロのリズムに合わせて、先ほどとは打って変わり、ステージを駆けまわる勢いで駆ける綾香。どうやら滑らない靴を用意してもらったらしい。《さあ、踊りまーしょ》

サビではモニターに足を乗せる。最前列の観客の手が触れてしまいそうだった。《イツツパフォーマンス、イツツパフォーマンス》  
「イエーイ！」とファン全体がジャンプする。

《テレビのなーかーでは 私はアーアイドルだものおー》  
腰をフリフリかわいこぶりっ子。くるりとバレリーナのように一回転し、こちらに向き返る。《ワーン、ツー、スリー》

「イエーイ！」

曲が終わりに近づくにつれ、ファンの熱狂は加速していくようだった。ひよっとしたら最後になったかもしれないライブを肌いっぱい堪能しつつ、詩織はしみじみと思った。

うーん……アイドルも捨てたもんじゃないな。

《ラストおお！》

綾香の呼びかけに詩織と田之上が、そして会場のファン全員が右手をかまえた。《ワーン、ツウー、スリー》

『イイイ』

## エピソード（後書き）

「寝読め」が「い」になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5276d/>

---

それなら私がいどる

2010年10月8日13時01分発行